THE KAIZO

改造

六月號

1924

T. OGAWA


眉目清秀
クラブタルカン
クラブゼリー
乾きタオル
クラブ洗粉
安全剃刀
カテイ石鹸
クラブ石鹸
最新の科學
優秀の技術
歯の爲に一番よい
チューブ入
クラブ煉歯磨
朝と食后に
品質優良のクラブ歯磨をお用ゐになれば歯に強く美しく歯石を未然に防ぐことが出來ます
クラブ歯



改造 六月號 目次

無産政黨は必ず出現す……巻頭言……一
岐路に立てる歐羅巴……レーデラー……二
日本の自己保成が必要とする原則的方法……杉森孝次郎……一七
新井白石の社會改造論……本庄榮治郎……三一
社會主義に於ける所有問題と經營問題との交渉……蠟山政道……四〇
排日法案の眞意義……エス・スリパック……六〇
美……石原純……七二

東洋人聯盟批判

東洋人聯盟の必要なし……安部磯雄……八一
理想破綻後の必然的現象……小川未明……八二
東洋人聯盟の目標……ビーアール・ボース……八三



不可能な幻想……平林初之輔……八五
聯盟に就いての二つの母體……秋田雨雀……八六
血は水よりも濃し……千葉龜雄……八六
かなりな冒險?……生田長江……八八
佛蘭西監獄及法廷の大杉榮……林倭衞……八九
クレオパトラ……堀口大學……一三六
獄裡の松陰……高須芳次郎……一四三

創作

戯曲 熊谷蓮生坊……山本有三……二
心の河……中條百合子……四一
戯曲 ある心の影……正宗白鳥……七七
馬鹿な夫婦……津田青楓……一〇七
戯曲 丸橋忠彌……菊池寛……一五六

◇小林一郎氏新著◇

新刊發賣

芭蕉句集評釋

──（趣味と修養!!つれ〴〵の好侶伴）──

古今の詩人文士の中で芭蕉翁ほど多くの崇拜者をもつて居る人はあるまい。翁は俳人として優れて居たのみならず其の人物が實に偉大であつた。翁の作品に親しむことは何人にも必ず大なる力を與へる翁の句集は何人も共に讀むべきものである。著者は全く素人であるから此の評釋は其道の人から見て種々の文句もあらう併し素人にして初めて捉へ得る所も多くあらうと思ふ既に翁を知つた人にも未だ知らぬ人にも一讀を薦む。

四六判最上美本
全壹冊四百餘頁
正價金
貳圓八拾錢
送料十八錢

◇大關增次郎氏新著◇

新刊發賣

カント研究

──（識者間に絶大の好評を博す）──

本書一册でカント哲學の全般は餘す所なく叙述せり
カント二百年唯一の記念出版!! 製本出來發賣す

いはゆる自然界の中に動搖する人が感性的自然と歴史的文化とを統一する眞の人間となることこれ哲人の行でなければならぬ哲人カントの行への復歸は近代に於ける自然主義的な諸機構轉回であり同時に新理想主義の出發であつた。諸方面に於ける新カント學派によつて企てられたそして企てられつゝあるカントよりの超出はそれ等がいかに多くの新契機を含むにせよなほカントの行顧みることなくしては不可能である。プラトンのイデヤの世界が永遠の意味を有つ限りカントの業績は永恒の相に於ける眞理への希求であらうこの書が哲人の道を行ずる我が眞の友にとつて幾何かの光を投げるならば著者の望みは足る（著者）

菊判最上製
美本千百餘頁
正價金
七圓八拾錢
送料卅六錢

思想界の名著

野村隈畔著

●ベルクソンと現代思潮

四六判上製
金貳圓五拾錢
送料十八錢

吉田絃二郎著

●タゴールの哲學と文藝

四六判上製
金貳圓五拾錢
送料十八錢

東京市神田區表神保町七番地
大同館發行
振替貯金口座東京八七貳番

阿部次郎著

北郊雜記

◆定價壹圓九拾錢 菊半截◆
◆送料十五錢 天金美本◆

十五版

著者が折にふれ、感興に應じて執筆した水晶の如き透徹した氣品ある評論と隨筆だ。氏が論壇に於て第一人者なるが如くそのスッキリした文章を通して氏の人格主義乃至藝術觀、人生觀を知ることの出來る高雅な隨筆だ。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

經濟學博士 本庄榮治郎著

日本社會史

定價貳圓五拾錢

送料十九錢

四六判上製

第拾五版

今までの日本の歴史は、それが總て戰爭の歴史であり、政治の歴史であり、そして忠臣傳であつた。そして日本の庶民社會の發達について説いた歴史は一つもない。これ單に現在までの歴史家が戰爭とか、偉人とか、政治、外交以外の頭腦のなかつた結果だ。カーライルは「歴史は英雄の傳記だ」といつたが、我國の歴史家も彼一流の間違つた考の持主であつた。

茲に於て社會問題の歴史を必要とする。我京大教授本庄博士は我國の上古の氏族制度の社會、半自由民、非自由の爭鬪、大化改新、奈良朝時代の奴隷制度的勞働組織、班田制度、平安朝の貴族制度、土地兼併の問題鎌倉時代の五階級の間に起れる土地問題、德政問題室町時代の土一揆、德川時代の封建制、九階級、軋轢、米價調節等を詳細に説述し、上古より現代までの社會組織、社會階級、社會問題を闡明し、分析し、批判した。

本書は我國の社會史として始めての著書だけに多大の期待をかけられている。我々は本書に依りて我國の歴史の缺陷が補正さるると共に、我々「庶民階級の歴史」の誕生されたことを喜ばずにはおられぬ。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

野口源三郎著

オリンピアの旅

定價貳圓五拾錢 送料十九錢 四六判上製

新刊發賣

あらゆる事が競爭そのものとも云ふべき現代社會に於て、苟くも優勝者たらむとするものが其の心膽を練るに、近代的競技ほど好適のものはない、國際競技が年と共に盛になり、文明國民の凡てが各優秀な選手を之に送る事に熱中するも無理はない。實に現代の競技は單なる體育ではない、新しい紳士道——現代的武士道は之に依つて修業され、オリンピアは此の紳士道を發揮する場所である。

著者野口氏はオリンピック大會の出場選手であつて、日本出發より英米を經て歸還する迄の彼の旅行記が本書である。流麗達意の文、能く、接觸する風景、人物を活寫してある。新時代の青年紳士に此の一書をお薦めする。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

法學博士 末弘嚴太郎著

嘘の効用

定價貳圓六拾錢

送料十九錢

四六判上製

卅五版

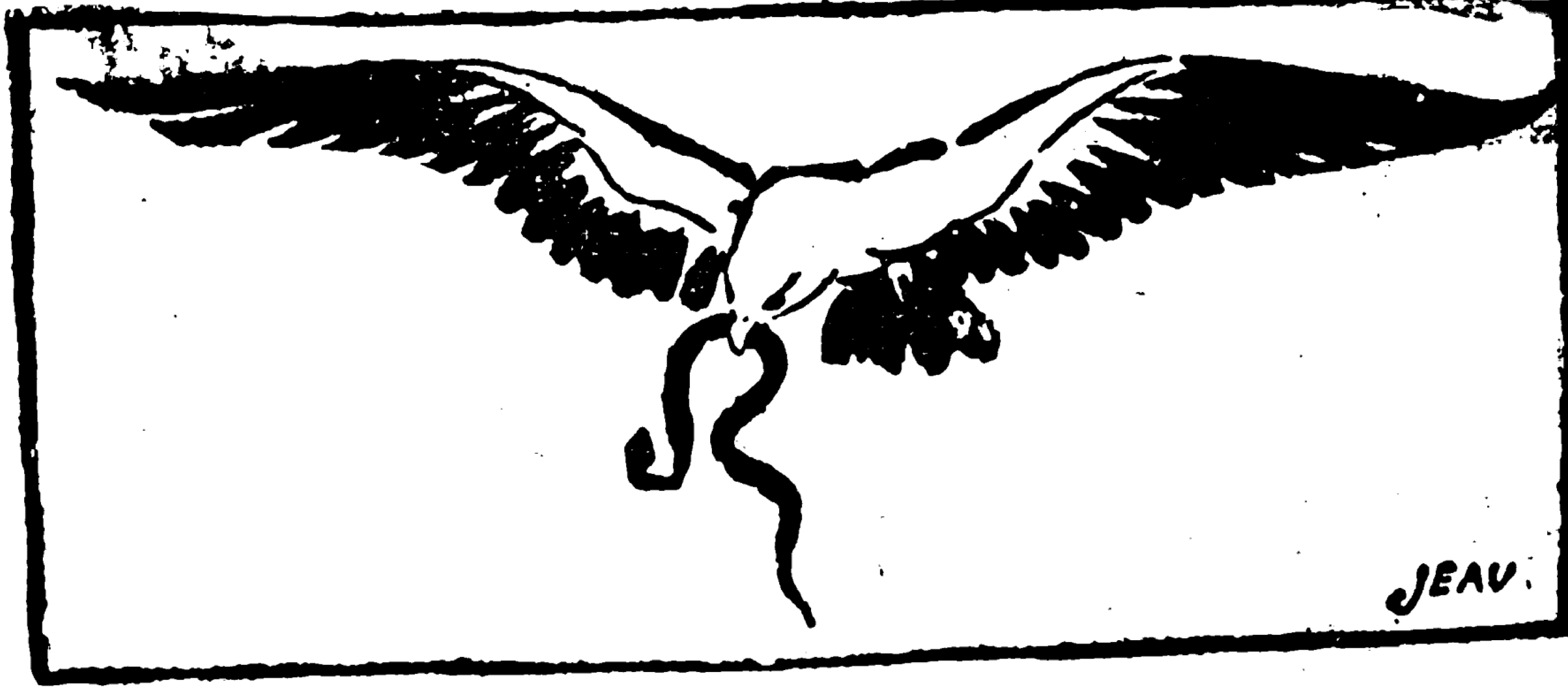
私どもは本書は總ての階級、總ての國民によつて必讀さるべき「國民讀本」だと思ひます。國内の保守的分子が優勢な爲めに、法令が移りゆく社會人心の傾向を充分に追隨出來ず其處に「法令」と「社會」との間に溝渠が出來た場合、「法令」と「社會」とを調和せしむるものは唯一「嘘」あるのみです。そうした深い寓意と使命とを以つて生れた本書は、道德の許した嘘、法律で保護した嘘、社會で許した嘘、親子の情をつなぐ嘘、大岡裁判に於る嘘の地位鬼子の裁判に於る嘘が社會生活に有効であるのを說いて現代人の反省を促し尚ほ「役人の頭」では法治國と官僚主義との關係を明かにし、その他過激法案、工場法、住宅問題、世界恒久平和の理想、陪審制度、婚姻と法律等を新しい法の立場から書かれた近來稀に見る有益な著書です、新しき法治國民の何人も再讀、三讀すべきものだと確く信じてゐます。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二


決勝！の一刹那
榮譽に輝く
陰の力…！
森永ミルクキャラメル
森永製菓株式會社



（六月號）

無産政黨は必ず出現す

舊時代の殘骸を彩る——とも見るべき——今回の憲政、政友の對峙戰は近代的政治意識に何等の關渉もなく終了した。隨つて其當選せる人物に對して何等の期待もなく、そしてまるで別世界の何かの興行を見るやうに思つておる智識階級の人々は別に失望も怨恨も抱懷せない譯だが、しかし我國の現在が可なり重大な時機に遭遇しているのを思つて見たならば、こうも不眞面目の選擧も出來まいことと思ふ。こうも小人物のみを選擧して恬然として居ることが出來まいと思ふ。多年の政治の情實に囚はれ、地方の鐵道とか、港灣とかそんな一小局部の面倒を見る目高のやうな人物のみで、どうして國際の重大問題が解決が出來やう。四百六十の頭顱のうち、世界の思潮を洞觀する哲人の俤を有するものは一人とてなく、又眞に近代的社會意識に依存して社會に貢獻せんと欲する達識の徒もない。——政友會、憲政會——もうそのれんでは我々の胸は躍らない、心からの共鳴を喚起せしめる何ものの持ち合はせがない、まして古手役人の姨捨山たる政友本黨に於ては尚更のこと。

我々はもう次の選擧の豫測と準備に取りかからねばなるまい。そうだ、次の選擧は大正十七年だ、その大正十七年には必ず無産階級の代表たる勞働政黨も出現しやう、我國の左翼を團結せりと思ふ政黨も出來やう、それには智識階級や、勞働階級の肺、血、呼吸、心臟、熱汗の全部の躍動を必要とする。それは大正十七年まで待つ必要もなかろうが。その時は豆ランプ式の田吾作や達磨劇の興行なぞは同向院の角力が現代に遺棄されたやうに時代にさびしく取殘されやう。江戸の眞中からは眞に國民の血を沸かし、眞に國民の心臟を鼓動せしめる選擧戰が展開されることを後れて來たる人々に預言して置く。沒落して行く人々——今回當選の四百六十幾名——へ對しても而く宣戰を布告して置くことも必要なことである。



岐路に立てるヨーロッパ

エミール・レーデラー

私は前の論文に於て、戰後のヨーロッパの殆んど絶望的な有様を描き、それは要約して次のやうに云へると云つた。即ち、中歐と西歐とは、今や、從前にもまして強くなつた戰勝國の國權的要求に基いて分割併合せられ、可なり大きい小數者（ドイツとハンガリー）がその下に制壓されてしまつた、また、歐洲の主なる工業地は、凡てフランスの支配下にもち來された、少くともその統制の下に置かれた、そしてこのフランスの統率力は強大なる黑軍と急激に增大せる空軍とによつて支持せられてゐる。ヨーロッパに現存する抗爭は漸次その舞臺をアジアに移す可能性がある、またかのイギリスと云ふ世界的大帝國は今や往昔の力を失ひ、漸次受身の立場となり、新に締結せる條約の結果として、その本來の同盟國と分れ、爲めに歐洲全土には幾多爭亂の禍因は包藏されつゝ殘存し、且つ歐洲の全市場は見事に破壞されてしまつた。形勢がこのやうである際であるからロシアと云ふ世界的國家の進退の不明は歐洲にとつて大なる脅威である。即

ちそは或はアジアに於てその國民的運動を援助して自らその盟主となるべきか、抑も亦、イギリスと同盟してフランスの歐洲横斷の計を崩壞せしむべきか、必ずしも明かでないからである。最後に、而して後方に、吾等はアメリカ合衆國を見る、この國はあの戰時の目ざましい活動の後の謎の如き靜謐の中に、氣味の惡い消極的態度を持してゐる。そしてヨーロッパに物を云ひかけるときには、如何にもやさしい口吻をするのを見るのである。

かくの如くにして、ヨーロッパの列強の全崩壞を未然に禦がうと努力してゐる唯一の本當の力は、組織された勞働の他にはない。平和主義の力はどこでも弱い。その言ふ所は、もとよりいゝには相違ないが（そして勞働運動も、その論點の多くを採り入れたが）、その實力は弱くて、孰れの國に於ても、澎湃たる軍國主義の大勢を阻止するには足りない。國家は『支配階級の委員會なり』と云つたあのマルクスの言葉が、今日のヨーロッパでほど本當であつたことは未だ曾てない。そして今日、都市の資本家も田舍の地主もその大部分が、被支配階級に屬すると云ふことが、政府の斯の如き攻撃的傾向を益強める所以となるのである。

以上曾て私の描いた事態は、最近數ケ月の内に色々の方向をとつて變化したのであるが、その變化の基調も亦いよいよ錯雜を極めるものがある。だから、今私がこゝにその現在の主なる傾向を描き出して見ることは、必ずしも無用の事でないと信ずる。即ち、私はこの概觀に於て、ヨーロッパの諸國民の上に動いてゐる大なる力の機構を示さうとするのである。

年改まると共に、イギリスに於て政權が勞働黨に移つたと云ふことは、何と云つても重大事である。この際忘るべから

ざることは、たとへ植民地が變じてドメインとなつたやうな事情があつても、今も何ほイギリスは、世界的な强國であると云ふことである。政權が勞働黨に移つたと云ふことは、決して單に多くの政治家の考へるやうに昔のヂョン・ブルが、今急に時代粧をつけたと云ふだけのことではない。さう云ふ考へ方は、政治を地理的にのみ見、國家は對外膨脹の一形態だとのみ考へる舊式政治家の考であつて、決して正しい考へ方ではない。今日新に作られたイギリスの情勢は、それとは全く異つた意味のものである。それは政治を如何に導くべきかと云ふ課題に對して未解決の問題と通じてその實力を示さねばならぬ事情が起つて來たとき、デモクラシーは果して如何なる能力を發揮し得るかを示さうとする興味ある一大問題を提供しつゝあるものと見るべきものなのである。この時局の大變化を通じてイギリス國民の多數が何故に勞働黨の政府を歡迎したかと云ふにそれは主としてその積極的にして而も平和的なる外交政策のために相違ない。そしてもし、勞働黨政府の政策が相當の成績を收めることゝもなるならば、それはたゞに歐洲の平和の爲めに祝すべきことたるのみならず、やがてまた勞働黨の他のプログラムがいよ／＼實行の域に入れらるものと見るべき理由となるのである。

云ふまでもなく、そこまで到達するまでの途は長いであらう。かこゝで問題となるのは、何がイギリスの今の政治の目的であるか、その目的を達するために、果してどんな手段が與へられてゐるか、そして、それに相對立する力として果して如何なるものがあるかと云ふことである。

イギリス政治の目的は、之を最も簡單な定式に要約すれば次のやうになる。即ち、『ヨーロッパの國民經濟を國際聯盟の助を藉りて、國際的協調によつて復興すると云ふこと』である。歐洲戰爭の教訓を通じてイギリスが習んだことは、一

三の基礎工業をしてその營業年度の好成績を誇らしめることは、政治闘爭を以て爲し得る所であるが、政爭によつて敵對國を倒して仕舞ふと云ふことは結局一つの幻影たるに過ぎぬと云ふことであつた。即ち、イギリスのやうに充分に分化した色々の日用品工業を有ち、商業を有ち、銀行を有ち、船舶を有つてゐる國民經濟が必要とするものは、平和なそして商品と資本との自由交易を完全に保障するヨーロッパだと云ふことである。然り、巨額の資本を各國に出さねばならぬイギリスに於ては、この最後のものがこと更に主要である。イギリスは、その國民經濟上の過剩物を、どこか捌かねばならぬのであるが、アメリカは自分で自分の要する金をもつ國だから問題とはならぬ。では、アジアであらうかと云ふに、その一部は外國の資本を要しないし、他の一部はそれを要してもあまりに安神の出來ぬ國である。だからいよいよヨーロッパに殘さうと云ふにはそのヨーロッパの種々の關係が整理され、爲替が安定されることがその先行條件でなければならぬ。イギリスの資本が、何故に平和なるヨーロッパの再建を必要とするかの理由は、まさにこゝにある。斯の如くにしての侵略的な、帝國主義的な主張はいつの間にか忘れられて、イギリスではもう今日、『興廢の戰、一度收まりてドイツが降伏したならば、イギリス人は皆一齊に金持になるのだ』と云ふやうなことを信ずる者がなくなつたのである。要するに、この點に關しては經驗が平和主義の經濟的主張が正しいことを示したと云へるのであつて、イギリスは、經驗の教訓を了解しそれを尊重することを知る歐洲列强中の殆んど唯一の國なのである。

そこにはまだ他の理由がある。イギリスは交通、ことに軍事的技術の發達の結果として、その島國たる有利の地位の利益を幾分失ふに至つたと云ふこと之である。今日に於ては、イギリスはもう大陸の一突出部たるに過ぎない。だからあらゆるヨーロッパの出來事は直ぐにイギリスに影響し、あらゆる大陸の政治的軋轢はすべてそれを國內の政爭に關聯させることが出來る。だからまた、たとへさう云ふ軋轢は之を傍觀するとしても、それに關聯する不安の念は、イギリ

スの商業、航海業、ことには貨幣制度に影響を及ぼさずには置かない。即ちヨーロッパの政爭は必ずイギリスの磅の動搖を意味し、それは直ちにイギリスの投下されたる資本の歐洲諸國に於ける增減を意味し、やがてまたイギリス國民の財産の減少を意味するのである。そしてイギリスの本位貨が不安定であつては、ロンドンをして世界の若しくは少くともヨーロッパの國際的決濟の中心市場たる地位を恢復せしめやうとの希望は無駄なワケである。これが何故イギリスが、あのやうに斷乎として平和主義を採るかの一因であつて、またイギリスの勞働黨の最高の倫理的なる政策が、全國民の或は直接の、或は間接的な沈默の、同意を得た所以である。そして資本家の大部分も亦この政策が相當の結果を生ずることを希望する所以なのである。そして、國際聯盟の勢力を殖やさうとする計劃は、凡て皆、全英國の輿論の支持を受けることゝなる所以でもあるのである。

然らば、このイギリスの政策は、何によつてその目的を實現しやうとするのであらうか。その第一の問題は云ふまでもなく賠償金問題にして、之を解決することによつて獨佛兩國の反目を和げ得るワケであるが、それにはヨーロッパ全體の軍備をもつと縮小し平和狀態を維持するに必要なる國際的の警察制度をもつと完備することが當然に必要である。イギリスの政治の强味は精神的の手段を有つところにある。無暗に飛行機を作つたことは、フランス及其の同盟國として、ヨーロッパに優勝の地位を獲得せしめたが、之に對して、今日イギリスが味方として有するものは、それとは異つたヨーロッパの『輿論』である。この輿論と云ふものは、本來單一的なものでもなく、また組織された一個の政治的勢力でもないが、さすがのフランスと雖もそれを無視することを得ないほどのものであつて、ポアンカレーすら、或程度にそれを計算に入れてゐることは、最近數ケ月間に吾等の實見した例である。蓋し、世界戰爭は、政治的勢力として

の輿論の眞價を充分に敎へたのであつて、今日となつてはフランスと雖も、公然それを無視することは出來ないから、寧ろそれを利用して、世人をしてフランスの政策はヨーロッパの平和を目標とするものだと思はせ以て世界の同情を失はないやうにと心懸けるやうにもなつたのであらう。そしてそれが或程度に成功してゐることは英米の評論界に一瞥を與へる者の何人も拒まぬ所であらう。けれども、更にもつと一般的に考へて見るならば、斯の如きフランスの努力に係らず、今日世界を支配してゐる輿論の基調は、依然としてイギリス的であつて決してフランス的ではないのである。

イギリスはその政策實現の階梯となると云ふ見地より オーストリアの回復を以て、その經濟的政治的意義の最も重要は中心問題だと考へてゐる。が、外には國際聯盟の積極行動により、内には國內勢力の均衡により、差當りに於てはこの國はやゝ平靜を保つやうになつたと思はれる。之に似た政策は、ハンガリーの爲めにも採られやうとしてゐるが、その目的はもとより同樣であつてそは『バルカンの延長』たる同國の錯綜せる禍根を斷つには幾分の效があるに相違ない。そしてロシアを承認すると云ふことは、たゞに東方諸國との通商を復舊せしむると云ふだけに止まらず、從來の政治的關係を變更して、フランス以外にもヨーロッパ中政治的に有力なる國家があると云ふことを示すと云ふ點に於て意味深長である。而してスペイン及イタリーと消息相通ぜんことを希望してゐるのも畢竟之と同じ意味に相違ない。今凡て之等の政策と通じて觀察して見ると、イギリスの努力は決して昔流の連衡政策を實現しやうと云ふのではなく、もつと徹底した意味でヨーロッパ全體の平和政策を建てやうとする意であることが明瞭であつて、その第一歩として國際聯盟を作りそこでイギリスが多數黨の盟主とならうとしてゐるのである。かくしてイギリスは、曾て戰時中アメリカと協同して遂行せんと欲したあの政策に復舊したのである。――そしてそはまさに充分おくればせであり、恐くは、あまりにおくればせである。かくして、吾々は、今日もなほヨーロッパの平和を脅威しつゝある力!。その力に出逢はさるを

得ないのである。

ともかくもかう云ふ途を辿らうとするイギリスにとつて、一番自然的な道伴は、ドイツであるべき筈だ。そこで數年來のドイツはどうなつたかと云ふ問題になるワケだが、今より僅かに二年前には、吾々はこの國こそヨーロッパの平和的民主的思想の負擔者となり得やうかと思つてゐたのに！（一九二二年の春のゼノア會議を回顧して見るがいゝ）、幾多纒綿せる事情は遂にこの國民の大部分をして排外的國權的夢想病者とならしめるやうなことゝなつたのである。

今日ドイツの通貨が差當り安定したのを以て、ドイツが自己の力によつて起死回生しつゝある證だと解する者がある。疑もなくナショナリストの政黨は貨幣の混亂狀態を永續させることをつとめた、と云ふのは、通貨幣の膨脹によつて直接に利益を得るものは彼等即ち工業家と地主とであつて、彼等は共和國を犧牲とし『マルクス主義』を攻略することによつて彼等の異常の利潤を享樂し得ることを百も承知してゐたからである。そこでマルクがいよいよ安定するやうになつたことはドイツの問題が、何等かの解決に近づきつゝある證だと解して差支なきワケであるが、その意味をあまりに高く評價することは正當でない。何となれば、ドイツの問題、即ち賠償問題と今日のドイツ憲法を維持し得るや否やの問題は、通貨問題の解決のみによつて解決したワケでないからである。そして通貨問題それすらが、今なほ上述の政治的危險の圏外に立つやうになつたと云ひ得られないからである。

以上の事情を明らかにするためこゝにレンテンマルクについて數言を費さう。問題はマルクの安定は如何にして得られたかと云ふことである。一言に之を要約すると、ドイツに於ける通貨を中心にしたカタストロフイーは一九二二年の夏に於けるオーストリアのそれと極めて類似した現象であつたと云へる。即ち貨幣が下落して、一方に於ては紙幣の流

通速度が驚くべき速さに達し、（凡ての人はお金を受けとると直ぐそれを次の人に渡した）他方に於ては、その價格は金に對して異常に下落したのである。ドイツの當時の紙幣の價格金額を爲替相場により金に換算すれば僅に二億金マルクに過ぎなかつた、之を戰前の五十億金マルクに比べて見ると何人もその價格の差の大きいのに驚ろくに相違ない。その故に信用が新たに設定せられて、新たに新しい貨幣が作られたときに、取引界は、即座に數十億マルク（金價に計算して）の支拂要具を吸收してしまつたのはもとより當然と云ふべく、そのときはもう物價が金本位になつてゐたから、――換言すれば、世人は貨幣を受けとつても、すぐそれを人に渡さず少くとも數日間それをポケットに入れて置いてもいゝ狀態になつてゐたからこそ、取引界がこれだけ多くの貨幣を必要としたワケなのである。

右の事情の下に貨幣制度を安定させるために必要であつた前提は、第一には紙幣の印刷を中止すること、第二には新支拂要具の發行を上述の意味に於いての必要を超過させないと云ふことであつた。そしてこの前提は、第一に國庫の歲計の不足をなくし、第二に無暗に通貨を膨脹させて私人に信用を投與せないやうにさせることによつて得られるワケであつて、この方法をとればたとへ貨幣が紙幣マルクであつてもその目的は達せられたワケである。だから數月來、ドイツに於ては、歲計不足の弊をためることが出來たが、それは國家の事業を無暗に縮少し、官吏の俸給を著しく削減し、官吏の二割五分を解雇し又一般に貨銀を引下げることによつて始めて實行することが出來たのであつた。そしてこのやうな大變革が何故に何等の社會革命を伴はずして行はれたかと云ふに、それは、國民が久しきに涉る通貨膨脹、貨幣價値不定のために極度に神經をいため、この上は如何なる代償を拂ふとも通貨安定さへ行さへすればそれが唯一の解決法であり改善であるとなしたによるものである、――從つてその價格の定まりやうが貨幣價値のどの點であるかと云ふやうなことを考へ得なかつたが爲めである。そこで事實について見れば、官公吏と勞働者とが、この通貨安定の全費用を

負擔したやうなことになつてしまつたのである、況んや企業家がこの一般的の悲境時代を巧に利用して、八時間勞働制、自由組合權、團體契約等の制度を攻略しやうと企て而も相當の結果を得たに至つては、吾々は特にこの感を深くせざるを得ないのである。そして之を機會としてドイツの進歩的な民主的な社會力は、漸次その最後の防禦線にまでおしつめられたのであつて、同時に政權の分布上にも大なる變動を生じ、獨り國權的政黨のみが一般にその地盤を擴張するやうなことゝなつたのである。そしてこの國權的勢力は同時に社會的には急進的となつた。（この點に於てファンシスムを眞似たのである。）云ふまでもなくこの急進主義と云ふのは外面的急進主義であつて、その内心には、先づ勞働組合を倒し、團體契約制を破り、然る後に私に大工業と大地主との統治を持ち來さうとの底意をかくすものなのである。何となれば、ドイツのファシスムとその武裝せる不正規兵とに資本を供しつゝあるものは、實に彼等であるからである。

ドイツの國權的急進的民衆運動は、ドイツ國權黨と共に、（この黨派は、即ちもとのプロシヤの保守黨である）正に終了した總選擧に於て、徹底的の大勝を得やうと目論んでゐた。そして少くともこの黨派が議席の半ば以上を得て帝國の政權を獲得することが可能だと考へてゐた。而し幸にも獨逸國民には多少の自覺があり、彼等は時局の重大を或程度に了解してゐたので極右國權黨は議席の四分の一を得たに留まり、彼等のみでは將來のドイツの政治を左右するの力がない。が、孰れにするも、全體が右傾したことは疑ふべからざる事實であつて、社會民主黨の勢力失墜、共產黨の勢力増加（議席十五より增して六十となつた）は、國權的政黨の地位を益々强大ならしむるものと云はざるを得ない。

國權的政黨は、ドイツの外交上に厄介な結果を生ずる虞が多い。たとへ彼等が政權を握つても、聯合諸國との外交關係を斷絶するやうなことは、よもあるまいと思はれるが、それかと云つて平衆内部に對して色々の約束をしてゐる彼等

が、いま忽然として對外的溫和政策を採るやうになるであらうとは決して考へられない。故に云はゞ、聯合國年來のカーキー的タクチックは、今その自らの種をこゝで刈らねばならぬことになるわけである。彼等は今まで、ドイツの共和國と云ひ、ドイツのデモクラシーと云ふのは皆假面だと云つて來たではないか。彼等はこれまで、凡ての獨逸人は、ベルサイユ條約の破棄の必要をさとらしめる目的で多數の聯合國民をだますために赤い飛行帽子を被つてゐるが、その實は誰も皆覆面の王黨だと云つて來たではないか——そして遂にあの無遠慮な暴力政策を以てドイツにのぞみ、ルールを占領するやうなことまでして、ドイツの國權的感情をいやが上にあぶつて來たのではないか。今やイギリスが、上述のやうに眞面目にヨーロッパ政策を實行しやうとするの秋に當つて、吾々は、一九一八年一度ドイツに於て高潮した『歐洲永遠の平和』なる思想が、皮肉にも上述の理由を以て、今日いたく民心を失つてゐるの事實を發見せざるを得ぬのである。そして吾々はドイツに於ける國權思想の由來をドイツに對立した聯合國の政策に見たのである。而もこのドイツの國權思想が更に再びフランス國民を襲ふて、それが勢力正に地に墮ちんとずるポアンカレーを再び擡頭せしめやうとしてゐるのである。斯くの如くにして、若しフランスは依然として從來の政策を固執にすることゝなり、ドイツは國際政局の大勢を誤認して、今日を以て、ベルサイユ條約を破棄してその重い負擔から免れるべき時機だとでも考へたとするならば、そもそも、イギリスは何によつてかその政策を實施するであらうか。

・

イギリスは近き將來に關する右のやうな政局發展の可能性を無視することは出來ぬ。そしてこれをさけるためにあらゆることをするであらう。なぜなら、フランスがそのルール政策を固執すると云ふことは、すでに前の論文で說明した通り、フランスがヨーロッパの獨裁を要求することを意味するからである、フランスが基礎工業の材料産地の全部を

占領すると云ふことは、それはイギリスにとつて到底對抗の出來ぬほどの壓迫だからである。イギリスが長きに渉つてこの狀態を忍び得ないのは當然である、そこでイギリスは軍艦を作ることをやめても、空軍を强めることを忘れてはならぬのである。

勞働黨の政府だからと云つて、空中軍備を等閑視することは出來ぬ。この政府も亦從來の政府の政策を踏襲し實行するであらう。そしてそれは全國民の贊成を得るに相違ない。たゞイギリスに於て空軍を組織することはフランスの場合よりも國民の負擔が重い。なぜならば、イギリスに於いては航空事業に必要なる一切の力、即ち極めて高級な技倆を必要とする職工及び五十餘種の職業的技術者に對しては、その報酬の全額を支拂はねばならぬからである。之に對してフランスでは、一般徵兵制度の御蔭で、之等の力は皆殆んど無報酬で之を使用することが出來る。だから英佛二國同程度の空軍を造るとなれば、イギリスの財政的負擔が比較的に大きいことは已むを得ぬ所である。一九二三年度のイギリス空軍豫算は二千三百萬磅と計上せられ、既定のプログラムが漸次實行さるゝに至らばその年額やがて一億磅に上る見込である。イギリスの事業界沈衰のとき、即ちその商業は戰前に比して七割に達せず、國内の失業者百萬を超え、アメリカに對しては債務の利子として年々四千萬磅を支拂はねばならぬと云ふ狀況の下に在つて、イギリスはこの巨額の國費をどう調達するであらうか。イギリスの租稅負擔者は今日既に重い負擔に苦しんでゐるが、更にまた增稅を忍び得るであらうか。これ今日のイギリス政治の中核を爲す問題であつて、吾々はイギリスが、どうしてもヨーロッパに平和を齎らさなければならぬ理由をこゝに見るのである。イギリスにして全世界に於けるあらゆる地位を抛つならば兎に角、それでない限りは、それが何程であらうとも、拂へるだけの代價を拂つてヨーロッパの平和を購ふことは絕對に必要である。なぜならば、イギリスはヨーロッパの羈絆をのがれてよく人の云ふやうに「たゞ殖民地だけに立て籠る」ことが出

來ぬからである。即ちそれには、イギリスの資本と大陸との關係が、またそのヨーロッパに對する約束が、而してその大陸との商業的融合が、あまりに强すぎるからである。

今フランスがそれに對して鋭意準備を怠らないところの來るべき戰爭は、(そのために近時新たに、恐くは全然好戰的だとのみは云はれない同盟國、例へばチエック、スロバキヤのやうなものを作り上げてゐる)爾餘の世界にとつて、果して何を意味するであらうか。世界の資本家にとつては最近の大戰の教訓は忘れらるゝべくあまりに新らたである。即ち戰爭がヨーロッパに起るとなれば、それは直ちに通貨の膨脹であり同時に資本の外國への逃亡を意味する。若し過般の戰爭中に或は最後になれば好いことがあるかと考へ、或はそれを考へなくてたゞマゴついてゐた結果國內に殘つてゐた資本が多少あつたとするならば、そのことはこの次戰爭があれば、資本が出來るだけ早く弗に替へられると云ふことを語るものたるに過ぎない。そして之に對しては、如何に切迫した要求があらうが、また如何なる脅迫又は刑罰をもつてしやうが、之を留めることは出來ないであらう。

この點に關してはアメリカの資本家もこれと違つた考へ方をすることはあるまい。即ち彼等も今次の戰爭の場合のやうに外國の資本(株その他)を得やうとしたり、戰爭の材料を供給してそれをヨーロッパに輸出したりすることばかりを考へないであらう。さうなるとこのときにのぞんで現はるべきアメリカの弗のヨーロッパのあらゆる貨幣に對する夢幻的なる高値は、必ずやヨーロッパ大陸を完全に封鎖するの結果を生むに相違ない。そしてアメリカは、顧みて過般の歐洲大戰によつて生じた債權の利子は、果して償還して貰へるのだらうかと考へるに相違ない。その故に、ヨーロッパの大規模の戰爭は、アメリカをヨーロッパから分離させるものである。そしてヨーロッパに對するアメリカの利害關係

を消滅せしむるものである。それはまことに從來のヨーロッパの社會的機構を解消させるものである。

吾等は以上の考察に於て、二つの世界的政治勢力を姑く考慮の外に置いた。その二つとは北米合衆國とロシアである。

北米合衆國は、自ら世界戰爭に參與してそれを終熄せしめやうと試みたが、それが一度終ると不滿の情をいだきながらヨーロッパから退却してしまつた。そしてヨーロッパは何等事態の發展を見ず、徒らにバルカン化してしまつた。その後のアメリカは、ヨーロッパのどこかに社會的秩序の非常に紊れたところが出來ると、そこへ食料と醫者とを送ることを以て自ら滿足してゐるに過ぎない。そして今は、少し位の經濟的利益の誘惑位ではヨーロッパのことには手は出さぬものときめてゐる。その故は經濟的利益の要求よりも輿論の要求の方が力強く、その輿論は、アメリカが歐洲のことに參與することを欲しないからである、そしてそれはもし新たに歐洲戰爭が起るならば、アジア方面に於てアメリカにとつて重大なる時局が開展するやも知れぬと考へるからである。

その故に最近フランスの通貨がその危機に迫つたとき、アメリカの銀行家がその救濟に參與するやうになつたのも、政治的行動と見るべきものでなく、寧ろ一個の營業行爲（ビヂネス）と見るべきものである。そして、フランス銀行が、その金準備をあげてその擔保としたのであるから、たとへフランス政府の保證をこゝに除外して考へても、この行爲はアメリカの銀行にとつて極めて安全な營業（ビヂネス）であつたのである。そして而もそれが極めて割のいゝ營業（ビヂネス）であつたのである。何となれば、彼等は安いフランを先物として買付けてそれによつて巨利を博することを得たからである、そして貸附金の少なか

らざる部分をもそれにより調達することを得たからである。この意味に於てこの營業は明らかに參加銀行にとつて大仕掛な金融的活動であつたには相違ないが、それを契機としてアメリカの政治が轉換するには至らなかつたのである。

ロシアの政局も亦恐くは之と大差なしと判斷せられる。若し新たにヨーロッパ戰爭が起るならば、それはヨーロッパのアジアに對する勢力の減退を意味するものであつて、さうなれば、ロシアの重要さが自然の内に増すばかりである。故にソギエツト、ロシアの意識的にとる政策はヨーロッパの諸國をして相互に爭はしめると云ふことであつて、之によつてロシアは自國のアジアに於ける地位を自然に作りあげることが出來るのである。そしてその後に――ヨーロッパの崩壞作業が完了した後に――ロシアは悠然として舞臺に出て來るのであらう。

こう考へて來ると、ヨーロッパの新たなる戰爭は、たゞに大陸の崩壞、その政治的經濟的文化的地位の沒落を意味するのみならず、言葉の最も嚴格なる意味に於ての新形勢の成形を暗示するものであつて、今日既に吾々はその輪廓を想見するのである。

この意味に於て、ヨーロッパの國民は、今明らかに岐路に立つてゐる。而してイギリスの勞働黨政府は、この最後の危機に臨んで正に狂瀾を既倒にさゝへんとするものである。もしフランスに於て、並にドイツに於て、道理の言葉がきき容れられるならば、或はこの公然の戰爭がさけられ得るかも知れない。けれども政局の將來は如何にも不安にして不明である。たゞ目捷にせまれるフランスの總選擧の結果と、重大なる負擔をドイツに課すべきドウズ報告に對する各國の態度とが定まつた後に於てやゝ明瞭なる姿をとるかも知れない。ドイツの總選擧自體はまだ積極的に何物をも定めたワケ

ではない、そしてそこには、幸福にもまだ妥協への道が絶對に塞されてはゐない。新に成立せる帝國議會に於ても、今の共和國を維持して行かうとの主張は非常に多數であり、又ドウズ報告を採用して、賠償金問題を解決しやうとの主張も、少いながら多數説たるを失はない。之を二年前に比すれば比較にならぬほど形勢は悪化したけれども今日のヨーロッパにも、まだどこかに互讓協調の餘地は殘つてゐる。この間に立つて何等かの互讓協調を成立せしめようとするイギリスの政策は、最も巧妙なる方策と充分なる實力とを必要とすること、さらに多言を要せざる所である。

若し不幸にしてこの協調が成らないとするならば、そしてこの國權的思想が潮の如く全歐洲を席捲することゝもなるならば、吾々は正に次のことを承認せねばならぬである。曰く、『この資本家的世界に於ては戰爭をすれば、それは必ず自らを喰ひつぶして仕舞ふまで行くものである。そしてその戰爭の跡始末は決してつかぬものである、』と、斯の如くにして吾等は前途いづくに往かんとするか——今日それに答ふることには、恐くは無謀の謗があるであらう。(一九二四・五・一〇)

日本の自己保成が必要とする原則的方法

杉森孝次郎

一

日本の自己保成を必要とするなに人もが、その立ち場を道徳的に、したがつてまた科學的に維持し、採用する限り、かれは、二たつの代表的特徴を示す一全則の一具體的信者であるほかない。その一全則は、すべての正しい社會觀の根本要件たる性質をそれの一屬性とすると同時に、すべての正しい自己觀の中樞生命そのものであるのだが、いな、それであるといふ斷言によつて暗示される通り、本質的友人主義と本質的生産主義とをそれの二たつの代表的特徴として示す或るものだ。この場合に、その「或るもの」は、「すべてのもの」とも、「唯一のもの」とも換稱される。その「或る」は「すべての」または「唯一の」としての限定を意味する「或る」だ。

二

本質的友人主義とわたくしここで呼んだところのものはなにか。それは一人が、他の一人の本質的目的に對する深い、强い、全い愛または然定的興味を内容とする原則的意志だ。「一人」の代はりに「各人」といへば、この場合の「一人」

の意味は外延的、機械的に一層明確、鮮露に記述される。

いはゆる動物はすべて或る實在だが、人としての動物は、單なる生物學的自己保存や、單なる生物學的自族保存によつて代表される種類の興味によつてはかれの興味を代表されえない高級興味を自己の組織内、性質内に具備する。人は、歴史的にも、現實的にも、結論としては文化至上主義の動物であり、實在であるのだ。科學、哲學、技術、藝術、これらのものが最も選擇的、代表的に人の興味であることは、過去及び現在の事實がこれを明證する。

一人が他の一人の本質的目的に對する深い、強い、全い愛または然定的興味は、かくして、その他の一人に於ける文化至上主義に對するその一人の本質的愛または興味を意味する。しかるに、試みに文化の一内容たる自然科學について考察するに、それの進歩には各人の科學的興味を滿足させる必然質がある。科學の進歩は、それ自身は單一の事實でありながら、多元的に生存する各人の科學的興味を總統的に滿足させる。各人に各人自身の目的があり、各人自身の目的に各人が忠實であることは、一とつの規範則であるよりも先きに一とつの自然法だが、その自然法は、それの純全形に於いて考察されれば、普遍妥當的、客觀的一全體としての文化、それの進化的保存を目的として意味する事實だ。本質的友人主義は、それゆえに、人類に通在する、一全體的文化に對する、至深愛が、各人の直接的對人關係に於ける基礎意識として自己を主張するかたちにほかならない。

常識語としての良友、益友、眞友、善友、忠友の如きは、多少不完全ながらに上述の論理を自身の基礎意識として假定しまたは豫想する概念辭だ。現代は、常識語としての「友人關係」の内容に科學的及び哲學的反省、批判、純化、保育、組織を與へることの價値を、現代に特有の材料と事情を條件としたかたちに於いて、最も疲倦せずに、時と共に、新經驗の發生と共に、いよ〳〵、ます〳〵切實に、深烈にわれらをして想はしめる。

その新經驗の或るものは最近の日本の對外政治的關係だ。例へば日本移民に對する米國の差別待遇的排斥は、それが意味するすべての善、惡、正、邪、利、害、榮、辱、愛、憎をかれがどんなに精確に、正當に意識しえようとも、日本の自己保存を必要とする人の立ち場からしては、結論的方法としては、或るかたちに於ける日支兩社會民間の友人主義的新關係をかれが一とつの最も必要な實行目錄として再認するほかないことを眞理と智慧の資格に於いてかれに告説する。

いまから四分の三世紀ほど前に、ペリーの來汽があつた。外的にはこれが代表的機會となつて、原始的封建制の日本は近代的民族組織へ躍進した。現代のアメリカの排日は、ペリー再來の効果を、或るかたちに假定された現代の日本の氣力と聰明だけを條件として持ちうる。

原始的封建制の日本にあつては、友人關係の常則的、具體的最大區域はわづかに一藩大であつた。そこでは藩別が民族的人同以上に評價されたのであつた。當時の日本をして、この小生活愛着から進化脱せしめるためにはしかしながらかれは、かれの民族的人同を藩別以上に評價するでなくては、かれの藩別そのものゝ影をすら保存しえなくなるといふ論理が、知覺的現實のかたちに於いてかれを説得する必要があつた。

現代の日本は、精神的に支那からの隔棲、孤働、乃至反支那的生活を依然として續け、あるひはいよ〳〵病疾化さへしつゝある一點に於いて、離脱を自己の進化的保存のために必要とする民族組織的現代的封建制から企てすに、それの慣性的捕囚、奴隷と原則的になつてゐることを最酷烈に例示する。アメリカの排日は排支、排印の續きだといふ一側面史を有するがゆゑに、代表的あるひは全アジア族の協力自救の必要意識は、これを機會として、それの深化、發達、及び新生を不可測的多少の程度に於いて可能にされるとまでは、なに人も確實に判斷しうる。その程度を不可測的多少以

上の限確形に於いて豫測することは今日なに人にも至難であるにちがひないが、出來るだけ高くその不可測程度に實現を與へることの價値、必要は、すくなくとも現代日本の自己保成を必要とする立ち場からしては、演繹的、概略的に先づ明視される。

人性または人的自然すなはち人としての自然は、文化がそれの原因、實質本體にしたがうて意識されたかたちにほかならず、文化は、人性または人的自然すなはち人としての自然が、それの結果、現象、作用にしたがうて意識されたかたちにほかならない。文化の本質的內容、傾向、性質には、東西古今を通じて一貫した基礎的一致關係あるがゆゑに、人性にも、時代別や種族別によつて代表される內容よりも深い、全い、貴い內容があつて、この內容に於いては、東西別や、古今別は、人性にとつて眞に表層深、偶然價だけの位置をしか有しない或るものだ。人類の種族別が、本質的文化別のゆゑにでなく、いひかへるならば本質的人性別のゆゑにでなく或る派生的、末梢的性質別のゆゑに、本質的文化同、本質的人性同の事實と目的とを、人類の種族意識のかたちに於いて壓迫し、虐待することは、人の本質的不快を、あるひは本質的文化人、本質的人性人の不快を無限に深く、烈しく刺戟する事がらだが、不幸にして現代の人類にはこの事がらが記憶としてのみは所有されず、現實として、しかも權勢威力に於いてほとんど絕大にさへも近い現實として、所有されてゐる。

種族意識が、現代人によつて所有されてゐる普通形に於いては、いかに不聰明な、したがつてまた不道德なものであるかといふことについては、わたくし自身も從來しばしば思索し、發表する機會を持つた。この一文に於いては、わたしは、現代人がいまなほ種族意識にさまだげられて、さもなければ持ちうべき本質的友人意識を持ちえない場合と程度が、ほとんど絕望的に甚だしいといふことに、わたくし自身の多少新らしい注意を向けてゐる。本質的友人意識を、

現代の各國の國內的及び國際的諸關係の上に旺盛に發達させることが、現代の政治意識にとつて、一とつの代表的、焦點的興味でなくてはならんことは、かならずしも高遠なる理想主義の立場からに限らず、現代人の比較的に低級な自個保存、自族保存の現實的必要意識からしても結論される。

この現代的一通則のわたくし自身に最も親近な一とつの具體的な場合として、日本について考へるに、本質的友人意識は、對外的にそれの發達の餘地を對支及びその他、自族以外の諸民族、諸人種に對する一般的意識の上に絕大的に有するのみならず、先づ國內生活の上に、その餘地を顯烈に、著甚に示す。工、農業勞働人、水平社人、鮮、灣人、婦人が、それ〲に形成しつゝある社會不安的、國家不安的各中心は、或るいちじるしい程度までは、取りもなほさずこれを例證する性質のものであることは、特に注意するまでもない明白事だ。

全人類に限なく伸達する本質的友人意識の確實な、そして深烈な所有者と自身先づ成ることによつて、日本の心眼に映ずる米、英、露、支及びその他諸國人と諸族人とは、全然的異觀を、かれら自身の各觀質の變化のかたちに於いて呈し來る必然的可能さへも考想される。國民と民族と人種とは土でなく人だ。人は身體であるよりも深く、自由に精神だ。心意だ。精神と心意とは、すなはち人性そのものは、しかるに、固定質のものではない。當方の心狀に或る根本的進化的變改が實現されゝば、先方の心狀、したがつて對當方的行爲動作の上に或る變改が發生する可能は、科學的、哲學的責任知識のかたちに於いて確證される。いまだ一とだびもこの精神的實驗を敢てせずして、早くすでに國際生活行路難の嘆を發する如きは、その事自身が反獨創、反發明、反自由の習性と心態とを例證する。

三

本質的生產生活の對當人價すなはち私價、及びそれの對隣人價すなはち公價または社會價については、わたくしは、本誌上に於いても曾つて純理論のかたちに於いて發表する機會を持つた。

日本の自己保成が必要とする原則的方法の、前記本質的友人生活と內的に連續し、關聯して一全體を形成するなほ一

とつの特徴は、本質的生産生活だ。ここで本質的生産生活と呼ばれたものは、同時にしかしながら勿論時間的關係に於いてではなく、論理的關係に於いて、公價及び私價ある精神的及び物質的生産生活のすべてだ。それのおの〱だ。

本質的友人意識を制度、慣習、及び私的關係の各方面に徹底的に實現し行かば、國境問題もおのづから解決される耀望がある。しかし、他面に於いて、現代の日本は、本質的生産生活に國を擧げて直ちに躍進する必要を、自己保成の目的を達するためには最も不可避的に持つ。

アメリカ方面の移民をば、日本の近き將來の方針としては、成るべく早く當方から自發的に、そして奇麗に廢止すべきだが、その代はりに支那方面へ體勞移民を企てる見込みは勿論立たない。國民の全人口を幸福に國内に收容する新方法が、かくして、發明されねばならん。けれども、その新方法としては、技術及び科學を國際的社會價ある程度に發達させることが最先位に立つ。工業立國の主張は、日本の場合に於いては、國際的善質品を製産するかたちのそれでなくては、實際に意味をなさない。低質高價品の製産を増すごとによつて輸出を増す望みは勿論絶對にない。今日舶來品が占むる一般的位置を、日本品が國際市場に於いて占めるやうにならないでは、日本の經濟的破滅は遠からず來る。

しかしながら、技術に於ける精達と、科學に於ける發明とは、單なる資本や時間によつて機會づけられる、いはんや原因づけられる性質のものでは決してないと考斷される。それらよりも深く、制度的、慣習的、及び常識的心意狀態が、技術的精達や科學的發明を決定する位置にあると結論される。現代の日本の心態狀態は、しかるに、制度、慣習、常識の各方面から考察して、決して技術に於ける精達や、科學に於ける發明を原因づけ、機會づける性質のものではない。それは實に最も本質的な諸點に於いて不自由そのものだ。政治、教育、道德の原則が最も酷烈にこれを例證する。

原則意識に深徹し、全達する人性固有の本質的傾向を、幼にしてすでに壓殺される國民が、いかなる成長をなしうるかは、問題なしに明白をきはめてゐる。その壓殺の手が、要するに國民自身の手にほかならない事を否定しえないがゆゑに、われらは、國民の總體的聰明が、一刻も早く、一指頭だけでも廣く、現に存する多少の先覺者の最善努力を第一に希望することによつて、急速に増進することを無限の引力ある幻想として現に懷抱する。

新井白石の社會改造論

本庄榮治郎

一

三歳にして字を寫し、六歳にして詩を誦したと稱せらるる新井白石は、明暦の大火の後、約二旬にして江戸柳原の土屋民部少輔利直の假邸に生れた。土屋侯はこの幼兒を「火の兒」と呼んで愛せられたといふことである。後、古河侯堀田正俊に仕へ、木下順庵の門に遊び、徳川家宣の儒官となり、家宣六代將軍となるに及び間部詮房と共に幕政に與つて改革する所頗る多く、七代家繼の夭折するや、白石も亦辭して門を閉ぢ客を謝し、遂に享保十年五月十九日、年を享くること六十有九を以て卒去した。これを西暦に照し合せて考へれば、一七二五年六月二十九日である。即ち言ふ迄もなく本年の六月二十九日はその二百年忌に當る。此機に際して徳川時代の有數の政治家たり學者たりし白石を記念することは決して無用の業ではあるまい。

白石のことに就ては世人は既に多くの事を熟知して居るであらう。のみならず本年一月一日以後に大阪朝日新聞紙上に於て上田萬年博士が「火の兒白石」と題して白石の全豹を簡明に論じてをられるから、私はそれ以上に蛇足を付け加へる必要はないと思ふ。たゞ玆には白石の自叙傳たる「折たく柴の記」によつて其當時の社會經濟狀態の一斑を考へて

見たいと思ふ。勿論此の方面の事柄も既に世に知られてゐる處ではあらうが、彼れの沒後二百年を記念するためと、本誌に對する文責を果すためにも、一應それを述ぶることを許していたゞきたい。

二

白石の時代は徳川幕府始つて既に百年、元祿の時代を經過して世は治平の象をあらはしたときである。弓は袋に納められ、長押の槍は徒に塵の堆まゝに任せ、戰爭は昔物語となつて武力は當世に用なき時代であつた。「折焚く柴の記」に曰く『人々たゞ天下泰平をのみ賀し申され、其言わづかも兵革の事にふるゝを以て禁忌とす。癸未の年の變に武庫壞れて戎器盡く破れ損せしかども、これらの物修繕の事も聞えざりしかば』云々と。蓋當時の一般世態を窺ふに足る。又朝鮮聘禮使の件について白石の述ぶる所を見るに、太閤征韓の後、徳川時代に入りて朝鮮との修交のことが行はれたが、其當時は『我國創業の際なれば聘禮を講ぜらるゝなどいふ事にも及ばず、天和の時に行はれし所は、寛永の例によられしと見えたり。我國のいにしへ、外國の使來りし時の例をも、又我國使の彼國にゆきし時の例をも、通じ考られし所也とも聞えず。たゞ其時に當りて、進止を取りし所なれば、國體に於いて、しかるべからぬ事も多かりぬ。百年にして禮樂起ると云いふ事もある也。今の時に及びてこれ等のことをも議定あるべきとて、其事を下し問はれし事などありしに』云々と云へるは余が既に太平の域に入りしことを證するものであると同時に、また從來の武斷粗野なる國家社會の狀態が一變されて郁々文理ある國家が現出せざるべからざる時勢なることを説きしものであつて、かくの如きは人文の開明するにつれて、一度は必ず起るべきものであらう。

白石は卓越した政治的才幹を持つてをつた。また同時に歴史の方面に於ても、言語文學や制度典故の方面に於ても深

い造詣を有せし學者である。從つて彼れの經綸は從來の如き武斷的色彩を帶びしものではなく、寧ろ文治的のものであり、實際的なるよりは寧ろ理想的のものであつたことはいふ迄もない。

家宣の世、寶永七年の武家諸法度の第一條『文武の道を修め』の句解に『士君子の道、文武の事にあらざるはなし、能其道を得たれば文以て治を致し、武以て亂を定むべし。凡學を講し藝を習ふの類、是を修むるの事也』とあつて、白石の文治主義はよくあらはれて居る。幕府の威儀を正し、京都的の文化を移入して『禮儀三千威儀八百』の堂々たる國家を造り、政治上の實力のみならず、天下の禮文をも支配せんとすること是れ實に白石の理想であつた。かの朝鮮の使節に對する待遇方法を改めたことや、天皇卽位の大禮に際して白石自ら京都に赴き、之を拜觀し典例故實を調査し、公卿の門に出入し神官吉田家について教を受けたことなどは、何れもこの社會改造の意を示せるものに外ならぬ。かの王號事件の如きも勿論この改造思想から出たものであつて、之に因て皇室に對する彼れの忠誠を疑ふのは絶對に誤りである。この禮文を重んじて所謂江戸を京都化せんとするやり方は、次代の『土器大發』の吉宗の儉素政治によつて大部分毀されたのであるが、兎に角かくの如き考慮計畫の、一時的にもせよ、試みられたことは多少時運の然らしむる處もあつたことであらう。換言すれば當時の世態は最早殺伐武辨の世ではなくして、太平文治の世となつてをつたことは見逃すわけには行かぬ。

三

徳川幕府の初期に於ては、その財政はやゝ潤澤であつたが、四代將軍以來やゝ欠乏を感じ、元祿奢侈の時代に於て、財政は非常に紊亂した。將軍綱吉は華麗を好み、施與を事とし、猿樂の費用に巨費を要し、中堂を上野に建てゝ五十萬

兩を費し、其他護持院以下の佛寺の建立に費す所また巨萬に上り、三の丸に桂昌院、五の丸、北の丸等に侍妾の住居を營む等濫りに土木を起して累世の貯財を消費し、地震洪水等の天災によつて修築の費用を要せしことも少くなかつたが、他方に幕府の歳入も減少し、府庫遂に空しく、財政は甚しき窮迫狀態に陷るに至つた。茲に於て幕府は一條の血路を貨幣の改鑄に求め、良貨に代ふに惡貨を以てし、其品位の差によつて數百萬兩の增鑄を行ひ、この改鑄益金によつて財政の急を救ふたものであつた。「折たく柴の記」に曰く『前代の御時、歳ごとに其出るところ入るところに倍增して國財すでにつまづきしを以て、元祿八年の九月より金銀の製を改造らる。これよりこのかた歳々に收められし所の公利、總計金凡五百萬兩、これを以て常にその足らざる所を補ひしに、おなじき十六年の冬、大地震によりて傾き壞れし所々を修繕せらるゝにいたりて、彼歳々に收められし所の公利も忽につきぬ』と。貨幣の改鑄によりて一時を彌縫せし財政は、大震災によつて全く覆された。天災は奢侈に流れし國民に對し、或は政治財政上の誤れる政策に對する一種の天譴なりとの考が、今も昔も世に稱へらるゝことは、無理からぬ事柄であらう。

『そののち、また國財たらざる事、もとのごとくなりぬれば寶永三年七月かさねて、又銀貨を改造られしかど、なほ歳用にたらざれば、去年の春、對馬守重富がはからひにて、當十大錢を鑄出さるゝ事をも申行ひ給ひき』かくて財政が行き詰まれば、貨幣を改鑄して之を彌縫する風習を生じた。即ち元祿八年慶長金銀を改めて元祿金銀とし、銀貨改鑄は其後正德元年に至る十七年間に實に四回の多きに及び、何れも粗惡なるものであつて、殊に四寶字銀の如きは銀二〇雜分八〇といふ法外な惡貨であつた。勿論鎖國の當時に於ては國辱に近き高利を拂ふて漸く外債を募り財政を彌縫するといふ迷案を考出すわけにも行くまいが、貨幣の改鑄は實に惡い計畫であつた。これによつて良貨は姿を隱し、而も古金銀の引替は豫期の如くに行はれず、從つて改鑄原料に乏しく、世上の金融は澁塞し、經濟界は非常なる混亂に陷つた。

尤貨幣の改鑄が當時の財政救濟に對する唯一の方法であつたといふわけではない。即ちその外に元祿十年には始めて酒運上を課し賣得銀高の五割を徴し、十二年にはまた長崎運上を課し、爾後年々歲入として酒運上六千兩長崎運上四萬兩を得たのである。「折たく柴の記」に『寶永の頃には近江守重秀が計らひ申すに付て、何事にも運上とて抽分の金銀めさぬはなかりき』とあるが、運上位のことでは中々財政を潤澤にすべくもない。やはり貨幣の改鑄が最も重要なる方策であつたのである。

白石は『前代に國家の財用加賀守忠朝つかさどりし由なれども、眞實は近江守重秀一人に任せられしかば、重秀、美濃守吉保、對馬守重富と相はからいし所なり。されば加賀守も其詳なる事をばしらず、ましてその餘の者ども相あづかれる所にはあらず』と述べて改鑄のこと專ら荻原重秀一人の責任の如くに說いて居るが、この點については寬文以來即ち三十年間も以前から金銀座の者どもが『相謀り兼て巧みし事』であつたのである。といふのは金銀座は貨幣の吹賃によつて其業務を經營せるものであるが、諸國金銀の產出夥しく貨幣鑄造の多額なりしときは經營に困難を感ぜざりしも、其後金銀の產出漸退するに及び金銀座も又大に困窮するに至り、こゝに貨幣の改鑄によつて自己の窮狀を脫せんとする盡策を廻らすに至つたものであらう。

家宣が將軍となつたとき、即ち寶永六年二月に慣例によつて其座所を改造し、且つ將軍夫人の居所を造らんとの議の起つたときに、勘定奉行の任にあつた荻原重秀は財政の窮乏を告げ、又々貨幣を改鑄して、一時の急を凌がんことを上申した。重秀の說によると、當時の幕府の御料は大約四百萬石で、年々收納する金は凡七十六七萬兩である。其中諸士の給料として支拂ふもの三十萬兩を引き去れば、殘りは四十六七萬兩に過ぎない。然るに昨年の歲出は凡金百四十萬兩に及んだ。日皇宮造營費に七八十萬兩を要する。即ち約百七八十萬兩の歲入不足である。然るに前將軍の葬費、將軍宣

下の儀式、諸工事其他差當りなさざる可らざる事業あるに拘らず、現に國庫に剩す所のものは僅かに三十七萬兩に過ぎない。これでは到底やり繰りが出來ぬ。則ち前代の例によつて、貨幣を改鑄して此の行詰まれる狀態を切り拔けるの外はないと考へたのである。

然しこれに對しては白石の反對があり、重秀の示した計算の基礎も實に怪しいものであつた。即ち白石の說に曰く『彼申す所の去年用ひられし所の國財は、即是去々年の課稅なり。されば今年の國用となさるべき所は、たとひ彼申す所のごとくたりとも、去年納められし所の七十六七萬兩と、今ある所の金三十六七萬兩とをあはせて總計一百十餘萬兩もあるべし。また當時の急に用ひらるべき物も、各色まづ其價を給らざれば其事辨ぜずといふにもあらず、其事の緩急にしたがひ一百十餘萬兩の金をわかちて、或は其全價をも給り、或は其半價をも給りて來年に及びて其價をことごとく償はれんに、その事辨得ずといふことなかるべし。また前代の御時に國財つがざるために、いまだ其價を償ひ給ざる物共をば、これより後、或は六七年或は十數年の間を以て、その全價を償ひ給らむになに事か候べき。(中略)去年の御物成を以て今年の御用に充る事、近江守しらざるべきやは。しかるに此事をば申さで、今年の用ふべきもの、わづかに三十七萬兩にすぎずと申せしは、御聽をおどろかして、其おもふところを遂ぐべきため也』云々と。

幕府の財政が困難であつたと共に、諸侯武士も亦窮乏に陷つて居つた。曰く『前代より此かた、諸大名に課せらるゝ所の役重く、これにくはふるに奉獻の物又多し。天下の士民窮り苦しむ事も悉くこれによれり』とて幕府の諸侯に課する所の公役を減ずべきことを論じて居る。幕府の初世、諸侯統御のために參覲交代の制度を立て、屢轉封を行ひ、且築城治水其他臨時の工事に御手傳を命じ、諸侯も自己の格式を示すために、徒らに召供すべき人馬の數を減ぜず其他の虛費に疲れ、他方に各藩内における產業は未だ興らず、遂にこの結果を生じたものであらう。

四

財政困難の原因としては通常上述の諸點が數へられて居るが、白石の見る所では、この外に尙他の一原因がある。「折たく柴の記」に曰く『凡興造の事あれば、その事をうけ給はる輩たかきもいやしきも、おの〳〵身家の事をのみいとなみして、工商の類と心をあはせて國財をわかちとりしによれる也。』『前代に土木の功しば〳〵起りしより、材木の價騰り貴くなれる事、古今の間いまだ聞ざる所なり。むかしより奇楠沈木等の類は重さをはかりて、その價銀幾倍などいふ事は有しに、此ころは檜の木方一寸の重さをもて、金の重さにくらぶるに、その價は金に倍々せしなど申き。されば材木をあきなふ商人どもの、たちまちに家を起して某は幾十萬を累ね、某は幾百萬を累ぬといふものいくらといふ數をしらず。かれらのみ、かゝる幸あるにあらず、國財を傾け出して、かれらと共にわかちとりて、其家を富しぬる輩も、また其數ありと申沙汰しき』と。これによつて見れば財政の局に當れるものが私曲を營みしは明かである。

又曰く『前代の御時に至りて諸國御料の貢、年々に減じてわづかに二つ八分九厘と云事に至りぬ。御料の百姓進する所、昔にかはれりとも聞えねど、御代官の手代などいふものゝ私せし所有が故なるべし。又河堤等修築の費用も、年々に增くはへたり。是もかの手代などいふもの共の、各其私をいとなみし故と相聞ゆ』と是れ白石の意見に從つて勘定吟味役なるものが復活され、會計檢査の事に當らしめ、地方代官が天領の貢米を私するの弊を防ぎ、驛遞土木金銀山の監督に當らしめし所以であつて、『吟味の役をおかれし明年、御料の貢米凡四十三萬三千四百俵をまして、百姓ども相悅ぶこと大かたならず、河堤等修築の料も、又金三萬八千兩を減じて水旱の憂もなく、漕運の事も、今迄は年每に海に沈みし米數萬俵、此後よりは覆沒の患あることを聞かず』といふことであるが、兎に角要路の役人が往々にして私曲を營みし

ことは疑ふべくもない所であつて、これがために中央の財政に影響を及ぼす所少からざりし如くである。

而してその巨魁は何といつても荻原重秀であらう。諸種の工事に私曲を營み、貨幣の改鑄によつても二十六萬兩を銀座のものより收受したといふことであるが、この贈收賄の悪弊は、元祿以後に於て盛んとなつた所である。白石の記す所によるも『近世以來凡の事商人の入札をとりて、落札の者にうけおはしむるといふ事あり。（中略）近き頃ほひより商人等たてものと名付て、その事の大小に從ひて或は百金、或は千金をまづ其奉行にいれて、此事某に仰せ付られんには、公より其價を下し賜らん時に、またいくばく金を進らすべしといふ。これをば禮物といふなり。そのたて物、禮物等すくなきものには入札入るゝ事をゆるされず、ましてやそれらのものなきものは、いふにも及ばず、されば入札の事あるごとに、その奉行する人、千金を致さずといふものなし。よのつねの人のなさんに、百金を用ふるにも及まじき事の、公の御事には、萬金を費さるるに至らざれば、その事ならず、前代に國財の竭給ひし事は、もととしてこれによれり。』又曰く『近き世よりして賄賂公に行はれ、それらの事をもて貨賄得る事共多かるが故なれば、すべて商人共、その事かの事仰蒙らむ由請ふ事共、一切に禁じ止めらるるにあらずば、此後も又かゝる事やむべきにもあらず』と。當時政治上の地位や利權にありつかんとするものが、大奥の女中に取り入つて運動をやり、收賄沙汰は隨分盛んであつたやうである。綱紀の紊亂贈收賄の悪弊は何時の世にも存するが如くであるが、殊に太平の餘弊に染める際には更に甚しきものがあるかの如くに考へられる。

五

百姓一揆は農民の爲政者に對する反抗の爆發して徒黨を組み强訴暴動を敢てしたものであるが、それが頻發して其時

代の一特色をなすに至つたのは明和天明の時代である。然し此種の運動としては既に早く承應二年には佐倉騷動があり、白石の時代殊に正德年間にもその例がある。「折たく柴の記」には正德元年に越後國村上領、八十五ヶ村の百姓四千百十六人が濫訴を企てし記事がある。そのときの注進狀には『風聞の事共をしるして、今度張本五十八人を召れしにつきて、其餘黨等以の外に肯張し、數通の起誓文をかきておの〳〵其約を堅くし 召れしものどもに相隨ひて出つるもの百餘人、もし五十八人のものども罪せられれば、百餘人のものども出訴ふべし、百餘人のものどもまた罪せられれば、四千餘人のものども罷上りて訴ふべしと議定し、すべて御代官所を見ること仇敵のごとく、去年の貢米ほしひまゝにうり米となして、船に積出し、庄屋これを制すといへども、敢て用る所あらず等の事をしるせり。』また正德四年には武州小金井に農民の騷動が起つた。曰く『去年七月六日、是政の者共、ほとりの村々相催し、弓鎗等の兵具を執りて下小金井におしよせ、貝を鳴らし、時をあげて打入ほどに、そこの者共皆逃ちるを百姓の家一つ、資財雜具共に打破りてすて、林木を伐り、田毛を踏む。其由御代官所に聞えて召問はむとするに來らず、其明の日又おし入て、林木を伐り、田毛をふむ事、前の日のごとし。兩日に伐り取所の林木、凡五萬七千七百餘、竹林を伐り取しは此數にあらず、たとひ一人して二三本づゝの木をとり行共、其數二萬人には過べしなどしるせり』と。事の起りは是政、小金井兩村の者共が馬の草刈場を爭ひしより起りしことであつて、爲政者に對する反感が直接の原因をなせるものではないやうであるが、兎に角、徒黨を組み暴動せしことは明かであり、德川代々の法令に徒黨を結ぶことを嚴禁せるにかゝはらず、かくの如き事件が勃發するに至つたことは、一般に百姓一揆の勃發せし場合と同しく、下層民衆の實力が擡頭して、武士が社會の中堅として、すべてを統制する當時の社會組織の維持すべからさるに至つた爲めではあるまいか。

六

更に轉じて對外關係については如何、いふ迄もなく徳川時代は鎖國の時代であつた。鎖國はもと徳川幕府の素志に非ずと雖、宗教關係よりして先づ國を鎖し、宗教と貿易とを分離して一を排して他を奬むることの困難なるを知るに及んで、貿易關係を制限するの止むを得ざることとなり、後には金銀濫出の關係即ち貿易自體の關係から之を制限するに至つたのであつて、當時に於ては支那和蘭の二國が長崎に於て僅かに貿易に從ひしものであるが、その貿易たるや殆んど輸入貿易であつて、我よりして輸出すべき重要なるものなく、金銀の流出せしことは寧ろ當然のことであつた。白石曰く『當家代をしろしめされて海船互市の事始しより、このかた凡百餘年の間、我國の寶貨外國に流れ入し所、すでに大半を失ひぬ。金は四分が一、銀は四分が三を失なへり。されどこれも公にあらはれ聞えて推量るべき所をもていふ也。その餘推し知れざる所の事ども猶多し。これより後、百年を出ず、我國の財用ことぐく竭なん事は智者を待ずして其事明かなり。』『たゞ去年も此年も、銅料數たらず、地下の人、其產を失ひて飢餓日々にせまれり。これにくはふるに、私販の爲に（世にぬけ市、ぬけ買などいひし事也）銀貨多く溢出ぬなど、告訴ふるより外の事もなく、これらの事ども聞召れて、かくては當時のためも、後代のためもしかるべからず。』また曰く『諸國の銅山より產する所、年々に減じて其價騰り貴く、其價を增し加へらるべしなど、申事にて事ゆかず。（中略）去年辛卯、諸國銅山より產する所の銅六百四十萬斤に過ず、たとひ我國の用百六十萬斤を除くの外、長崎に運送すべき所、百四十萬斤には過べからず、是その價の騰り貴ければ、銅を商ふ者共たやすくは賣渡すべからざるが故なりと申す。かゝりしほどに長崎の地下人、交易の行はれざるがために、飢餓のもの多く、弱き者はかしこにとゞまる唐人と通じて館中において私販の事あり。强き者はかし

こを去りて、唐船を待ちて、海上にして私販の事あり。外國の人も近年に及びては、定れる海路をも往來せず近海に出沒し、我國の姦商を待ちて私販し、剰、此ほどは陸に上りて、水を取り木を伐り、漁船の網せし魚蝦女童の拾ひし海藻等を奪取り、居民是を制すれば戎器を執りてふせぎ、番船是に近づけば、火炮を發して助す』と。かくの如く金銀銅貨は益濫出し密貿易も行はれるといふ有様であつた。

白石はこの貿易については、寧ろ不必要論を懐きしものであつて『これを人にたとふるに五穀の類は毛髪の生じ出る事、やむ時なきが如し。五金の類は骨髓のふたゝび生ずる事なきに似たり。かの五穀の如き、猶地に肥瘠あり、年に豐凶あり、ましてや五金の如きはこれを産する地も多からず、これを採るに常にしもあらず。我有用の財を用ひて、彼無用の物に易むこと、我國萬世の長策にあらず。古より此かた我國いまだ外國の資を借らず、されば藥材の外は他に求むべき物もなし。海船の來らざらん事、古のごとくなりとも、我求むべき所を得べき事、其道なきにしもあらず。』貿易の唯一の利益とも見るべき藥材についても必ずしも外國に仰ぐの必要はないのであつて『かの藥材の如きも古を考ふるに我國に産せし物少なからず、木綿煙草などいふものの古に聞えざるも、今は地として産せずといふ所もなし。たとひ古より我國になからむ物も、其種子をも求め、其地宜をもはかりてうつしうゑつべし。』然しながら今一朝にして貿易を廢する能はずとせば、貿易に制限を付して國内に通用せる貨幣の量を計りて貿易の歳額を定め、來航の船舶を制限し、其船數及搭載量を定む可きである。慶長より此かた我國にて造られし、金銀の大數にくらべ見るに金は四分が一をうしなひ、銀は四分が三をうしなふべし。さらば今よりして後、金は百年を經て其半を失ひ、銀は百年を出ずして我國にて用ふべきものは有べからず、銅はすでに今海舶互市の料足らざるのみにあらず、我國の歳用もまた足らず、我國に産する萬代の寶貨となるべきもの傾けて、遠方より來れる一時の奇玩になすべきものに易られ、此等貨利の事の爲に、我國威

を損ずるに至らむこと、然るべき事共覺えず。もし藥物書籍等を求め得んために、やむ事を得べからざらんには、當時我國に通じ用ふる數と、毎歳諸國に産する數とをはかりて、長崎並に對州薩州等の地より外國に入べき所の歳額をば定むべき事也。すべてこれらの事にも及ばず、長崎にして、毎歳互市の金銀銅の額數をのみ定められしこそ心得られね。されどたとひ今よりして後足らの數を定られしとも、只今迄の如く、毎歳に來る所の船數をも毎船に載する所の物の數をも定められざらむに、私販の事やむ事を得ざらむは、只今迄の如くにぞ有べき。さらば先凡毎歳我國に産する金銀銅の外國に入らむ所の大數をはかりくらべて、長崎にして、海舶互市のために用ふべき所の歳額を定められ、次に外國の船共に載來る所の多少をはかりて、其船數をも、其載來らむ物どもの數をも定めて載來らむ程の物共、悉く皆買とらむには、今迄のごとくに私販の事のために、我國の寶をうしなふ事もなく、外國のものどもの我國の法を侮るといふ事もなくして、我國の威は、萬里の外迄に行はれ、我國の財は萬世の後迄に足りぬべし』と、正徳五年における詳密無比なる海舶互市の新例はかくの如くにして生れたのである。

七

前にも述べた如く白石は明暦大火の後、間もなく生れたものであり『火の兒』と稱せられたのであるが、白石の時代を通して火災地震等の天災は決して少くはなかつた。勿論明和天明頃程ではないにしても、相當にその災禍を受けたものであつた。

火事は江戸の花と謳はれた程江戸には火事の絶え間がなかつた。江戸の繁昌に伴つて、人家が稠密すればする程、火事は多くなり、火事といふことが各自の念頭から去らぬために元祿時代に於てすら家屋は極めて粗末なものであつた。

この家屋の粗末なことが防火の邪魔となり、殊に冬季は武藏野風に吹き曝らされて警鐘を聞かぬ晩はない位に火事沙汰が絶えなかつた。「折たく柴の記」にも右の明曆の大火の外に、元祿十一年九月二日、同十六年十一月、正德元年十二月廿二日、同五年十二月晦日等數回の大火が錄せられて居るが、白石も正德元年末大火の後、之について十五ケ條の建議をなして居る。即ち曰く『はじめ丁酉（明曆）の大火の後、此災しば〱起て、此災にかゝる事十數度に至れる町々ありて、人々其所をやすくせず、これらにくはふるに、そのたび〱には萬物の價騰り貴くして、その禍の及ぶ所もひろければ、いかにもして此災除かれん事を議し申すべしと仰下さる。人々にも此事問はせ給ふべき御事勿論なり。まづ某が議をも奉るべしとて、當時此災の起る事、天の道にかゝれるもの四つ、地の勢によれるもの二つ、人の事にあづかれるもの四つ、火を防ぐの法、其道を得ざるもの五つ、すべて十五條を議してまゐらす。町奉行並に火消の人々にも議せしめられしに、おの〱申す所其理を盡せし事とも見えず、たゞ白銀町の堤を增し築かるべしといふ事は人々の議合へり。某が議せし事にもこれに似たる事はあれど、人々の議には同じからず。されど人々の議によられて、彼堤を增し築くべき事を仰下されて、某が議せし事ども、いまだ果川ひらろにもおよばで御他界ありけり』と。この十五ケ條の建議の內容は未だ明かならず、また正德二年に所謂方角火消なるものが設けられ、府內を五區に分ち萬石以上に令して消防を分擔せしめられたのであるが、この事が白石の建議と何等かの關係を有するや否やも明かでない。更に他日の研究に待つの外はない。

元祿十六年十一月二十二日の江戶の大地震のことが「折たく柴の記」に出て居ることは世人の既に知れる所であらうと思ふが、この災害復舊のために、貨幣改鑄によつて得たる益金が忽ちにして空亡となり、財政窮迫に陷りしことは既に述べし如くである。この外、寶永四年の地震、富士の噴火等についても勿論その記事が見えてをり、寶永山の灰砂を

除くため諸國に課するに高百石につき金三兩を徴し、約四十萬兩を得、その内十六萬兩にて復舊費を支辨し殘餘二十四萬兩は、城北の御所を造るべき費用として殘し置かれたといふことである。

更に又この時代にも地震火災其他の天災が相當に起つたものであつて、此等も亦當時の財政窮乏を甚からしめた一原因をもなして居るものと見て差支あるまい。

八

當時は上下の區別の儼然として存せし時代であり、庶民は如何に暴戾なる壓迫でも御無理御尤として官權に屈從し、政治上の事柄に容喙するなどは思ひもよらぬことであつた。かくの如く人民は不平があつても、眞正面から之を訴ふることが出來なかつたから、側面的にこの不平を漏らす手段をとるに至つた。即ち誰れが始めたといふこととなく、知らず知らずの間に落首とか投文とかいふやうなものが行はれて、盛に天下の風評を坊間に宣傳したものであつて、世を憤るの士、若くば云はねば腹の脹るる者共は、滑稽諷刺に言外の意を含ませて僅かに其不平を漏らしたものである。

この落首又は落書は政治上の出來事や又は行爲上の失態等を批評した狂句を人目に觸れ易き場所、事件の發生せし處、若くは其目的とする人の門前に落捨せしものであつて、これ恐らくは落首書といふ名の出た所以であらう。德川時代に於ては五代將軍綱吉の時、時の執政柳澤が跋扈して政治の腐敗を極めた際には、その弊政を嘲罵諷刺せし落首の如きは積て山をなし「寶永落書」といふ一書を成すに至つた程である「折たく柴の記」にも荻原重秀が退けられ元祿金銀を慶長の昔に復して改鑄せんとしたとき『金銀御改造所』といふ事をかきし札を白石の家の門に貼り付けた者があつたといふことが記してあり、『又此事につけて思ひ出る事こそあれ、御代の初に落書の事も多かり、延寶の時にも此事あ

りしかど、此たびの事のごとくにはあらず、されば老中の人々此事日々にさかりならん事しかるべからず、急度禁じ止むべしと申されしを、世の人かゝる事によりて憚る所もなく思ふ所はいふなり、我警戒とすべき事も取用べき事もあらめと思へば、たとへいかなる事しるせしものなりとも、うつしまゐらせよと、近く侍つかふわか侍どもにはいひき。人々もまたもとめ得て、見つべき事なり此等の事禁じ止めて、世の言葉を塞がん事尤しかるべからずとぞ仰られけるに」とあつて、落書が盛んに行はれしのみならず、幕府がこれを禁せず默認したことが明らかにされて居る。言論の自由と公表の機關なかりし當時としてはかゝる落書や諷刺詩の存在は、世態を知る上に必要なる材料を供するものともなるであらう。これ等の落書や諷刺詩は一面には樂天的な人を馬鹿にしたやうな滑稽があるかと思へば、他面には針を以て肌を刺すが如き辛辣な諷刺を以て世を嘲り不平の氣を吐き、官權も何物も眼中になきが如き振舞を見せたことは、上下の區別儼存せし表面上の世態と比較して頗る面白い對照といはなければならぬ。今當時の一二三の落首を引いてその一斑を示さむ。

美濃紙は次第に狹く薄くなる、越前かみの幅のひろさよ。
（美濃紙は松平美濃守吉保、越前かみは、間部越前守詮房を指す）

犬はなき民は悅ふうしのとし、なかき返報に糞を喰はせん。
（寶永六己丑の年正月、前代に行はれし生類憐愍の法を廢す）

吟味せよ近江表の糸きれて、むしが喰ふたか、わらがひし〳〵。
（近江表は荻原近江守重秀を指す）

ことわけを功者に間部世の書札、越前奉書墨附きも許し。

（當時民政に關する新令の雨下せしを評す）
鶴は飛び、龜の甲府が世に出て寶永／＼とたみのよろこび。
（鶴は綱吉の女鶴姫君の事、寶永元年逝去、甲府は家宣のこと、寶永元年十二月綱吉の世嗣となる）

九

當時の經濟社會狀態として論ずべき事項は以上の外にも二三重要なる點があるが、「折たく柴の記」にあらはれた所では、重要なる事項は大凡以上の如くである。德川時代も既に百年、慶長元和の殺伐な空氣が全くなくなり、殊に元祿の時代を享けた當時に於て、世が太平の餘弊に染潤して奢侈に流れ、衣食住の各方面に新流行を追ふ風となり、財政は窮乏し私曲請託は行はれ、武士は生活に苦み、之に反して民衆の勢力は次第に加はり、百姓一揆は勃發した。「折たく柴の記」そのものは、文學としての價値は別として、そが白石自らの告白文であり辯明書たる關係上、その記述に就て後世これを讀む人の多少の考慮を要する點もあるであらう。例へば荻原重秀の貨幣改鑄や私曲を論ぜる條の如き、その一例であらうが、兎に角大體に於て以上の如き世態であつたことは誤りはなからうと思ふ。これを現在の政治社會經濟狀態と比較して見て讀者諸君は果して如何なる感慨を有せらるゝであらうか。

かゝる時勢に當つて、白石の採りし政策、殊にその三大事件と稱せらるゝ韓使待遇事件、貨幣改鑄問題、貿易の新例の如き、必ずしも時勢に適切ならずして失敗に了つたものもないとは限らぬ。たゞ豐富な學識と高遠なる理想とを有し、且つ剛直にして人に屈せざりし白石が、一方に水魚の交にも比すべき將軍を戴き居りしにもかゝわらず、魚の水に離るゝ時期の極めて早く到着せしため、その理想を實現するに十分なる時日を有せざりしことは認めなければならぬ。

かくて所謂文治主義の政治が、綱吉、家宣、家繼の時代で一先づ中止となり、八代吉宗の立つに及んで武斷的な保守的な政治が復活さるゝことゝなり、白石の理想的なるに反して實際的實利的なる政治が施かれたものであつて、德川時代としては、或は吉宗の政策の方が實際に適切であつたかもしれぬとも考へられるが、然し吉宗の時代と雖、果して多くの史家が普通に謳歌せる如き世態なりしや否やは大に疑問である。一時その勢を緩和することはありとするも、時代の大潮流はしかく容易に堰き止め得べきものではない。吉宗の後に田沼時代があり、更に一轉して大御所時代を現出したことは、這間の消息を語るものではなからうか。然し私は茲にそれを論じやうとするものではない。たゞ白石二百年忌に當つて、その識見を追憶し、名著「折たく柴の記」を通して、當時の世態一斑を明かにすることが、本稿の目的であることを斷つておく。

社會主義に於ける所有問題と經營問題との交渉

——マルクスよりウエッブへの進化の辯——

蠟山政道

一

凡そ總ての社會主義理論に於て、二つの異れる方面が存するが、それが一箇の根本指針によつて貫かれてゐることが認められる。その二つの方面とは、一は他の非社會主義的理論及び制度を檢討批判する消極的行動の方面と、他は自の社會主義的理論及び制度を應用し建設する積極的行動の方面とである。强ひて、嚴格に言ふならば、理論的方面と實踐的方面とに分かち得るものであらう。而して、我々の注意を喚起するは、この二方面の存在してゐることではなくして、寧ろそれが一箇の根本指針によつて貫かれてゐることである。この異れる二箇の方面が、一箇の指針によつて貫かれてゐるといふことは、果して論理上可能なりや否やは確かに問題として究明を要する所であるが、總ての社會主義者に於て見られる心理的事實としては、我々はこのことの實存を疑ふことを得ない。多くの社會主義者の生涯を見るときに、その何れかの時に於て、一定の思想的立場を自覺し、それを自己の言動の指針となしつゝあるを見る。英國社會運動史の研究家として重きをなすハモンドが、十九世紀初頭の英國に於ける政論家として又社會運動家として特殊の地位を有するウイリアム・コベット（一七六二――一八三五年）に就てかう言つたことがある。「凡て人が人世の或る一面相に就て新しき自覺を得るや否や、それはその人に對して他のあらゆる

世相に就てその眞理を啓示するものである。或る一箇の制度が墮落し腐敗してゐるといふことの發見は、やがて他の諸制度に對して一層凝視せしむるに至るであらう。』(W. Cobbet, A History of the Last Hundred Days of English Freedom, preface by J. L. Hammond, p.3.) と。小農の家に生れたコベットの自覺は、エンクロジューア運動の結果として、多數の農民がその土地に對する權利を失ひ、それが少數の地主の手中に集り行くこととの慘しき觀察と苦き經驗とよりその機縁を與へられ、先づ土地制度の改革に思ひ至り、やがて議會制度その他一般の社會制度の批判に移り行けるものである。這箇の自覺は彼の活動に於ける生きた信條であり、彼の生涯に亘つて動かさる指針となれるものである。然し乍ら、彼はその自覺を一箇の理論にまで高め、一定の學問として表現することは出來なかつた。從つて彼の社會思想は、別に一黨一派の信奉者すら作ることは出來ず、彼れ一箇の生命と共に終始したのである。又謂ゆるリカード派社會主義者の一人として擧げられるフランシス・ブレイは、アントン・メンガーやホックスウエルの研究が示すやうに、名もなき印刷職工であつたが、彼の著書「勞働の弊態と勞働の救治策」(一八三九年)に於て述べられたる意見は、政治改革の前提としての財産制度の改革を主張したものであつて、凡ての社會制度を經濟制度の反映として見ると云ふことが彼の政治改革の基調となつてゐた。しかし、ブレイを以てマルクスの唯物史觀の先驅者となすことは、唯物史觀若くはそれと類似の思想が全然マルクス及びエンゲルスの頭腦にのみ宿れるものではなかつたと言ふことを示すには必要であり且つ妥當であると思ふが、唯物史觀の成立に就てマルクス及びエンゲルスがブレイの影響を受けてゐると解するは甚しい誇張であると思ふ(E. Lowenthal, The Ricardian Socialist, pp. 85—86. 104.)。併し此にコベットやブレイの例を引いたのは、總ての社會主義者の思想や行動に於て、假令その意識の明暗の程度は異るとしても、一箇の根本指針とも見らるべき思想的自覺の成立が認められると云ふことを證明せんが爲めである。而してこのことは、マルクス及びエンゲルスに於ては、一層適確に言へるのであつて、彼等の特徴は他の社會主義者の言はなかつたことを言つたと云ふ意味の獨創性に存するのでなくて、寧ろ社會主義理論及び運動が有しなくてはならぬ所の根本指針を把握し、しかもそれを一箇の學問的理論の形式に於て展開した點に存するのである。換言すれば、凡そ一箇の社會主義理論たり又運動たる以上、當然具へねばならぬ所の、從つて何人に對しても共通な、又何處に於ても妥當する思想を建設した點に存する。さればア

ントン・メンガーの言ふやうに、剩餘價値論その他に於て、假りにマルクスが英國に於ける先驅者に負ふ所が甚だ多いとが事實だとしても、それは決してマルクスの獨創性を傷つけるものではあり得ない。なぜなら、マルクスがその生涯の指針となれる思想的立場の自覺に到達したのは、彼が一八四五年の夏、エンゲルスに隨つて始めて英國に渡り、豫ねてエンゲルスの蒐集し置きし諸種の經濟書及び其拔萃、並びにマンチエスター其他の圖書館に藏せる經濟書をば、盛に耽讀して、英國經濟學の研究に從事した時を距つる、既に數年前の事であつて、マルクスの經濟論も、矢張り彼特有の思想的立場からの所産と見るべきであらうから。（河上博士譯『マルクス原著、賃勞働と資本』序文參照）。此に謂ふ所のマルクス、エンゲルスの思想的立場とは、唯物史觀のことに外ならぬ。

二

マルクスがその唯物史觀の見解に到達した經路に就ては、既にその道の專門家によつて幾度か紹介されてゐる所であるが、此にその一例として河上博士の紹介を見るに、左の如き記述がある。──

マルクスの『經濟學批判』は、彼が資本主義の經濟組織を批評する爲に企てた大著述の第一卷として、一八五九年（安政六年）に公にしたものであるが、──その後彼は之を以て不滿足となし、書き改めて更に『資本』第一卷を公にすることになつた、──其れには同年一月の日附のある序文があつて、その中には先づ彼が經濟學を研究するに至つた經過を述べ、更に其の研究の結果到達した一般的結論で、一旦之を得た後は、其の後に於ける彼が研究の指南車と爲つたと自稱する所のもの──之が即ち玆に問題とする所の彼の唯物史觀である──が記載してある。

先づ彼が經濟學を研究するに至つた經過につき、彼自身語る所を見るに、次の如くである。

『私は私の嘗て書き下した一般的序言をば（これはマルクスの死後その遺稿中に發見されたもので一九〇三年度の Neue Zeit に公にされ今日では Kautsky の編纂した『經濟學批判』の卷頭に採錄されてある）……玆に略する。併し私自身の政治經濟學的研究の道程に關する若干の説明を玆に採錄することは、必ずしも無用であるまい。

『私の專門的研究は法學であつた、併し私は其れをば哲學及び史學に關聯して、たゞ第二次的の學問として修めた。然るに一八四二年より同四三年の間、私は「ライン新聞」の記者

として、所謂物質的利益（經濟問題と云ふほどの意）に關し言論を交へざるを得ざるに至つた際、私は始めて困惑を感じた。森林盜伐及び土地所有權の零碎化に關するライン議會の討議、當時ライン州の大總統たりしシャペル氏がモーゼル農民の狀態に關し「ライン新聞」を相手として起した公式の論爭、最後には又、自由貿易及び關稅に關する議論、此等のものは經濟問題に關する私の研究に最初の動機を與へたものである。

他方に於ては、當時……佛蘭西の社會主義及び共產主義の弱い哲學色を帶びた反響が「ライン新聞」にも聞えて來た。私はこの不手際なる細工物に反對を唱えた。併し「アルゲマイネ、アウグスブルゲル、ツァイツング」と論爭を構ふるに及び、私の從來の研究は、佛蘭西に於ける這個思潮の內容に付き何等かの批判を下すには、猶ほ足らざるものなる事が、直ちに明白となつた。されば「ライン新聞」の發行者が、筆鋒を和ぐることにより、之に向つて下された死刑の宣告から免れ得やうとの妄想を抱いた際、私は寧ろ悅んで機會を捉へ、公の舞台から書齋に退くことにした。

『私を困らした問題の解決のために企てた最初の勞作は、ヘーゲル哲學の批判的檢討であつて、其の勞作の序言は、一八四四年巴里で公にされた『獨佛年誌』に現はれた。私は私の研究により、法律關係並びに國家形態は、其れ自身によつて理解さるゝもので無く、また所謂人間の精神の一般的發展によつて說明さるゝものでも無く、寧ろ其れは物質的の生活關係――之が總和は、ヘーゲルが第十八世紀に於ける英佛の例に倣うて『市民的社會』なる名稱の下に包括したもの――に之が根據を有するものだと云ふこと、而かも此の市民的社會の解剖的研究は之を經濟學に求むべきものだといふこと、の結論に達した。後者（經濟學を指す）の研究は、私は之を巴里で始めたが、ギゾー氏の追放命令の結果として私はブリュッセルに移つたので、更に其の地で之を繼續した。かくて私の得た所の、さうして一旦之を得た後は、私の研究の指南車となつた所の、その一般的結論は、簡單に之を次の形式に表はし得る。』（河上博士『唯物史觀研究』一―四）

右の如く長々とマルクスの唯物史觀に關する、その成立經過の敍述を引用して、讀者の倦怠を招くとを敢て厭はなかつた所以のものは、決して無意味に試みた譯ではない。それはマルクス學說に於ける唯物史觀の地位を正當に理解する爲めに、それと他の學說とが如何にその成立過程を異にしてゐるか、即ちその發生的經過に於ける差異を知る必要ありと思惟したからである。我々は、之を以て、曾てゾンバルトの論じたやうに、十九

世紀初頭に於ける合理主義的社會觀より歷史的若くは進化主義的社會觀への轉向の表現として重要なる意義ありとする說明だけで滿足することは出來ない。ゾンバルトは言ふ、「彼（マルクス）は、社會運動をば歷史的發展の流れの中に据え、それを歷史の一定なる諸要素と理論的に調和せしめ、又それを經濟と人間眞性との諸條件の上に築き、且つその經濟的及び心理的條質性を證明することによつて、歷史的（合理的と反對なる）若くは現實的（ユトピア的と反對なる）社會主義の建設者となつた。」（W. Sombart, Sozialismus und Soziale Bewegung, 9 Aufl., S. 11）と。かくの如き說明を以てしは、唯物史觀は單純な且つ漠然とした社會進化論たることを指示するに止まり、その內容の具體的意義を明かにすることは出來ない。前揭の引用文にもある通り、マルクスは「市民的社會の解剖的研究」の「指南車」を求めたのであつて、或は無意識的要求であつたかも知れぬが、今日の言葉で言ふならば、正しく社會學的研究に志したものと言へる。更らにその奧底に突き入つて見れば社會運動の論理學を求めたと言つても過言でないと思はれる。ゾンバルトの漠然とした、しかも抽象的な大ざつぱな見解は、マルクスの實際的業蹟をその成果から見て、それに歷史的意義を附したものとしては、或は正當かも知れぬが、マルクスの眞實の意圖が奈邊に存したかに少しも觸れて居らぬ。之に反して唯物史觀の意義を明確に定め、それに具體的內容を與へてゐる學者が多い。我々は之等の學者の努力によつて、難解な術語に充ちてゐる唯物史觀の公式をも理解し得るやうになつた。この一群の學者は唯物史觀を以て一箇の史觀となし、しかもそれを經濟學上の概念に近似的に說明しようとするものである。「經濟學批判」の序文中にある唯物史觀の公式の第一節に現れてゐる「生產」「生產力」「生產方法」及び「生產關係」等の語は之を專ら經濟學上の概念と同樣に規定することによつて、さしも難解なりし公式も明瞭に理解さるゝに至つたのである。我が河上博士の數年間に亘れる刻苦努力とその巧妙なる解釋方法の生み出せる唯物史觀研究への貢獻の如きはその好箇の適例であらう。然し乍らこの種の解釋に對して、非マルクス學者又は反社會主義者の側からして、幾多の反對論が生じたとも事實である。この反對論は多くは無理解なる誤謬として斥けられたけれども、又實際それに値したものが多かつたのであるが、その反對論の由來する所を察する時、この概念構成の基礎が餘りに經濟學的術語に偏し、從つて稍狹隘に失してゐることが暗示される。マルクスの目的は、ヘーゲルの所謂「市民社會」の解剖にあつて、それは、「經濟學」に求むべきであると言ひ、そしてその「市民社會」の決定を明

かにするものにして、公式の冒頭の一句を宛てゝゐるものと考へられるけれども、マルクスの意味した『經濟學』なる語が、今日の『經濟學』なる語と同一であるや否や、又あるべきや否やは確かに問題であると思ふ。勿論河上博士及び同樣な立場にある學者が、マルクスのこの語句あるが故に、大體今日の『經濟學』の概念に從つて解釋を試みられたものと推測すべき何等の論據も無いのであるが、寧ろ博士はマルクスの最後の著作たる『資本論』に據つて、又獨自の見解に基いて、一定の學問的推斷を加へられたものではある。（櫛田民藏氏『唯物史觀に於ける「生産」及「生産方法」』（大原社會問題研究所雜誌第一卷第一號七〇頁參照）。しかし、之れに對して最近—必ずしも最近ではないが—に至つて、唯物史觀を以つて一箇の史觀とするを以つて滿足せず、社會の變動及び社會構造に關する一般的法則の設定を目的とする社會學にまで高めやうとする傾きがある。ブハリンは言ふ『我々同志の中でも、唯物史觀を以てマルキシズムの社會學と見做すことはできない、それは系統的に一貫してゐない、と信じてゐる向もある。これらの人達は、それは單に歴史的認識の生きた方法であり、それの眞理は我々が具體的な歴史的出來事によつて確められる限りに於て證明され得るものだと信じてゐる。加之ならず、社會學Soziologieと云ふ概念自身が非常に不確定であつて、その同じ語の下に或は原始文化及び人間共同生活の原始形態の起原に關する科學と理解し、或は異質的なる社會現象一般に關する漠然たる觀察を意味し、或は又社會と有機體との無批判的類比（有機體的生物學的社會學派）を主張する等の有樣である、と論難するのである。しかし乍ら、これらの議論は誤りである。先づ第一に人々はブルヂョアの陣營を支配してゐる混亂から、新なる混亂を造作してはならない。唯物史觀は如何なる地位を占めてゐるものか？それは經濟學ではない。それは史學ではない。それは社會及びその進化の法則に關する一般科學即ち社會學である。第二に、唯物史觀が歴史に關する一箇の方法であると云ふ事情によつて、之れが社會學的理論であると云ふ意義を失ふものでないことである。なぜならば、より抽象的なる科學はより抽象ならざる科學に對して一箇の見點即ち方法を提供するものであるから。』（N. Bucharin, Theorie der Historischen Materialismus, 1922 s. 8）と。かやうな廣い立場に立つ人々は『生産』『生産力』及び『生産關係』等の術語の内容を廣義に解釋し、經濟學的の範疇を脫して、新なる社會學的意義を附してゐる。例へばクノーは言ふ『通常生産と云へば、商品の生産、屢々只だ個人的使用の物體、生活及び享受の手段、衣服、靴、家財用品其他を、稀れには、例へば勞働

の道具、機械、工場の建物、交通手段等の如き生産過程に入り込む消費的生産の手段を意味する。生産方法と云へば、技術的見地から、かゝる物體の生産が、如何にして行はれるかと云ふ方法だけが屡々意味せられる。併し、マルクスに取りて、社會的生産の概念は、はるかに廣い。それは、一の社會を既に到達した發展の階段に於て維持するがために必要とせらるゝ全體の生産的欲望滿足を、從つて、社會生活を一定の文化の階段に維持するが爲めに、必要とせらるゝ凡ての物體の生産を包括する。詳しく云へば、それは、社會の現在の生活要因の單純な生産に關するばかりでなく、社會的生活の絶えざる繼續及び擴張的發展從つて、繼續的再生産に關する問題である。かゝる再生産は、其の絶えざる復活のための先行條件が亦新たに生産せらるゝことを必要とする。例へば、今日に於ては、學校や其他凡ての種類の教育施設を設立し維持することも亦、かかる先行條件である。從つて、マルクスの意味に於ける生産には、教育施設、化學研究所、博物館其他もかねて、これ等のために必要なる教員及び勞働者、教材その他も屬する。更に進んで、生産せられた物體が、それ〲の經濟的發達の狀態に應じて分配せられ、且つ使用消費に供せられるので無ければ、繼續的再生産は不可能である。啻にそれが個人的消費に供せらるゝばかりでなく、生産過程が與へられた經濟的基礎の上に絶えず繰り返へさるゝためには、原料や補助材料や、技術的勞働手段やそして勞働力やの如き、凡ての必要な手段が生産過程に供せられなければならない。從つて、社會的生産は、分配を正當に維持すること、從つて亦た鐵道や船舶や道路や橋梁や倉庫や事務所や其他の生産及び維持を含むものである。

『かるが故に社會的生産の概念は、通常經濟學の術語に於けるものよりも、遥かに廣い領域に跨がるものである。それは社會の全體の物的生活の必要を繼續的に繰返へすことに於て滿足することを意味する。丁度それ故にマルクスは『社會的生活の生産』『物質生活の生産方法』『生活の生産過程』云々等の表現を用ひたのである。』H. Cunow, Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts- und Staats-theorie, II. S. 148—49. — 櫛田民藏氏前掲論文、一三四—三五頁の譯文による）。

この兩者の立場に於ける『生産』『生産力』『生産關係』等の術語が如何なる内容上の差異を有するかを一々此に紹介しようとするのではない。又余は、その何れが妥當なりやに就て云爲すべき資格を有する者でもない。殊に本文の目的とする所から云へば、何れの社會主義理論に於ても唯物史觀の如き地位を有する指導的理論の存することを指摘することを得ば足りるので

ある。而して、いま、マルキシズムの中心理論として唯物史觀を推し來つて、その理論が總ての社會主義にとつて最も重要なる問題たる所有問題と經營問題との交涉を如何に解決し、又教示してゐるかを研究しようとするのであるから、それに必要なる範圍に於てのみ、この兩者の解釋の異れる點に觸れるに止まるであらう。

三

唯物史觀の解說に大體廣狹の二派があつて、その概念内容を異にしてゐることに就ては、前節に述べた所であるが、何れの派に於ても、その重要なる中心問題は『生產力』と『生產關係』との交涉如何の問題である事には何等の區別がない。唯物史觀の公式に於てこの交涉の關係に就て言へる所は左の如くである。

人類は彼等の生活の社會的生產に於て、一定の、必然的の、彼等の意思より獨立する關係に、即ち彼等の物質的生產力の一定の發展階段に順應する所の生產關係に入り込むものである。これ等の生產關係の總體は、社會の經濟的構造を、即ち法律的及び政治的の上建築が據つて立つ所の、そして一定の社會的意識の形態が、それに順應する所の、現實の土臺を形成する。

この謂ゆる公式第一節に於て言つてゐる所は、生產關係なるものが主であつて、それを中心として、一方に謂ゆる上部構造との關係を示し、他方に於て自己が相順應する物質的生產力なるものを示してゐるのである。次に公式第二節に於ては次の如く言つてゐる。

社會の物質的生產力は、その發展の一定の階段に於て、そのものが從來活動してゐた所の當時の生產關係又は單に法的表現である所の所有關係と衝突することになる。此等の關係は、生產力の發展形式から、變じて之が桎梏となる。是に於てか社會的革命の時代が到來する。經濟的基礎の變動に伴ふて、巨大なる上層建築の全部が、或は徐々に、或は急激に、變革し了る。

この公式第二節に於て言つてゐる所は、物質的生產力なるものが主であつて、それを中心として生產關係との一致又は衝突等の交涉關係を示してゐるのである。然らば、この二節の文章を通じて、物質的生產力と生產關係との交涉關係を決定するならば、何人も物質的生產力の方が主であつて、生產關係なるものは之に順應するものであり(第一節)、且つそれが發展し來りたる場合に生產關係と衝突すると云ふ見解に到達するであらう(第二節)。從つて唯物史觀の解釋に於ては、この『物質的

生産力』の如何なるものであるかを檢討することが論理的順序であると考へられる。

河上博士に從へば『生産力 Produktivkraft とは物質的生産力のことであつて、彼(マルクス)が特に物質的生産と云ふのは、彼が時折使用する所の精神的生産といふ言葉に對立するもので、吾々の生活に必要な物質を作り出すことである。さうして此の如き生活を爲し得る可能性 Möglichkeit のことを名づけて、彼は之を生産力又は物質的生産力 Materielle Produktivkraft と謂つてゐるのである。だからそれは純粹な技術的の概念であつて、經濟的、社會的の範疇に屬せざるものである』(河上博士『唯物史觀研究』六一―六二頁)。茲で問題となるものは、技術的と云ふ言葉と可能性と云ふ言葉である。博士の『技術的』と云ふ意味は明瞭でないが、此に引用した所から解すれば、少くとも、『現實的』若くは『産業的』又は『社會的』と云ふやうな言葉と相對するもののやうである。『兎も角も彼れの謂ふ所の生産力たるものは、生産の可能性を指してゐるのだから、そこで技術的には可能なことでも、社會的にはそれが實現されてゐない場合を考へることができる。そして、さういふ場合が『所謂生産力と生産關係とが矛盾衝突し、生産關係が生産力の桎梏となる場合である』とも言はれる(同上、六二―六三頁)。

然らば、次に問題となるのは、生産力は如何にして發展するかと云ふ疑問である。博士は答へて曰く『マルクスはこの問題に對しても、矢張り唯物史觀的に答案を與へてゐる、――即ち人間の生活力が發展する爲めには、その物質的條件として勞働手段(即ち道具及び機械)の發展が必要だと云ふのである。斯様にして『人間の物質的生産力の發展階段』を劃するもの、又は『人間の勞働力の尺度』たるものは『勞働手段』であると云ふ主張が出て來るのである。私はこの主張を、資本論に發見せらるゝ所の、唯物史觀に對する重要なる追加であると認める』(同上、一四六―一四七頁)。と。何故にこの主張が重要であるのであろか。博士の言は簡にしてその意を捕捉すること必ずしも容易ではないが、その重要性は恐らくその答案の結果に存するのではなくして、唯物史觀の公式に於てその論理的の出發點であつた所の物質的生産力なる概念が、更に分析を加へられてその奥に新なる概念を見出したことに存するのであらう。なぜなら、博士の言はるゝやうに唯物史觀流に答へて、その答案の結果として、勞働手段若くは生産具なる概念を見出すならば、問題を以て問題に答ふるの類にも似て、たゞ物質的生産力の發展の爲めの最も基本的なる條件たることを示すだけである。かくの如く物質的生産力を技術的概念と解釋することに若し難點を伴

ふとしたならば、それは毫も解決されてゐないからである。乃ち唯物史觀に於ける物質的生產力なる概念は、之れを技術的概念となし、工藝學上の術語となすべきであるか。櫛田民藏氏の克明にしてしかも卓越せる研究が、我々に敎ゆる所によれば、「生產」には凡そ三箇の意味があるが、その一として特定な又は總體的な生產業の生產なるがある。「換言すれば『生產力』の問題である」この意味の生產は、要するに物の又は使用價値の生產として、それ自身社會形態に關係なしに考察することが出來る」。この場合の『生產』と「生產力」とが河上博士の說と同說と見られる『けれども』、櫛田氏は更に言葉を續けて曰く『事實上の問題としては、物の生產は、一定の「生產關係」の下に於てのみ行はれ、それの全體は所謂『經濟的構造』を形成するのである。生產は常に一定の生產力』の下に於ける又一定の「經濟的構造」を有する生產、即ち「社會形態」としての生產でなければならない。此の如き一個の組織的全體としての生產に於ては、其の組織を構成する要素が相互に作用することは云ふまでもなく、即ち生產關係は『生產力』を左右するが、その生產力の變化は、生產關係を變化せしめ、そして結局『經濟的構造の變化を促し、其の變化せる經濟的構造は、更らに新に『生產力』を左右し、かくて、一定の循環行程を經て自己自身の變化を促すと云ふが如く、因果循環して窮るところ無きものである。そして、この因果循環の關係に於て、究局の決定的動因は、『生產力』であつて生產關係ではないと云ふのがマルクスの一貫した主張である』（前揭論文、九八頁）と。生產力をば一定の現實的生產力と見て、それが常に一定の生產關係の下に於けるものとなし、この生產關係との間に因果的相互作用の存することを主張する點に於て、河上博士の「生產」及び『生產力』の概念と一致してゐない。併し、依然として、その因果循環作用の決定的動因を以て『生產力』なりとしてゐる點に於ては相通ずる所がある。更らに櫛田氏は『生產』なる概念の中に『生產手段の分配をも含まれてゐることを說明する條りに於て『こゝに生產に含まるる『生產手段の分配』なるもの即ち財產關係は、生產の結果であるか、原因であるかと言ふ問題があるが、マルクスに從へば、この關係は、生產の一定の時代に於ける基礎的の『生產關係』であり、そして元來人類の生產的活動なるものは、人と人との關係」即ち一定の社會的關係の下に於てのみ行はれるものである、孤立個人の生產と云ふことは無いのであるから、生產がある以上、必ずや一定の生產關係が無ければならないのであり、それが結果であるか、原因であるかに拘らず—マルクスに從へば、凡ての組織的なものに於ては、結果が原

因として、又原因が結果として働き、絶えざる因果循環の關係にあるものであるが、今問題の場合に於ては結局生産關係は、生産そのものに依つて定めらるゝと云ふのである——常に生産そのものに含まるゝものである。』(同上一二一頁)と言つてゐる。

『生産力』と『生産關係』との因果關係に於て、何れが原因なりや、又結果なりやは暫く別問題として、唯物史觀中の重要問題として、我々の考察すべきは、現實の、社會的の、生産力であつて、單に可能的の、生産力ではない、と云ふことだけは肯定できやうと思ふ。否『技術的』と云ふ言葉の意味も、之を社會的に適用された技術の意味に解釋すべきではあるまいか。ブハリンは技術と云ふ場合には、常に社會的技術 gesellschaftliche Technik 即ち『一定の生産用具の系統』を意味してゐるが、それは單個の生産用具や又は各種の生産用具の集合を意味せずに生産用具の系統的一體社會に於けるその全體を意味する。(N. Bucharin, S.S. 118―119.)

かくの如く『生産力』なるものを解し來る時、唯物史觀に於て生産關係に作用するものは、『物質的生産力』ではなくして、それの社會的結合作用として現はるゝ『生産方法』と解する方が、寧ろ妥當であると考へられる。物質的生産力の要素として、クノー等の擧げる所は、一定の勞働力、一定の自然力、及び一定の技術の三種であるが、それが一定の社會的關係の下に結合することによつて一定の生産方法となつて發現するのである。余は、この生産方法の中心部分を『經營』Betrieb と云ふ語で現したいと思ふ。恰も生産關係の中心部分を所謂『所有』Eigentum とするやうに。元來經營と云ふ語は、資本制經濟組織の下に於ける經營を意味する如く使用せられるか、若くは純粹に技術的工藝學上の概念として使用せられるかに限つてゐるやうであるが、余はこの兩者何れも餘りに狹隘に失すると考へるのであつて、一方に歷史的社會的要素を有すると共に他方に自然的技術的要素を有するものであつて、兩者の結合より成るものと考へてゐる。

四

物質的生産力又はそれの社會的結合體としての生産方法が如何にして發展するか。それは、マルクス及びその學者によつては、その奥に更らに勞働手段と云ふ基本條件の發展によるとされてゐるが、その勞働手段の發展は如何にしてなされるかと云へば、恰も自動的若くは自己原因的に發展するかの如く論ぜられてゐる。最近所謂ゆる修正派に屬する學者によつて、生産力は生産關係殊にその所有關係と密接に循環的因果關係を有する事

が論ぜられるやうになつたけれど、依然として生産力を以てこの循環關係を斷ち切る決定的動因と見做すことに就ては、何等の論證なくして主張せられてゐる。恐らくは、この點を認むることなくんば、唯物史觀なる堂塔伽藍はその基礎より崩壞するに至るであらう。假令論理上循環に陷るとも、そは止むを得ざる循環論理と言はねばならぬのであらう。換言すれば、唯物史觀の理論的方面の解釋としては、この點を支持せねばならぬのであらう。しかしこの唯物史觀の理論的方面は、一種の進化論として、若しくは必然論として、種々論議の對象となれるものであつて、依然究明を要する問題である。第一にこの生産力の發展の原因若しくは條件に就て知らなければならぬ。河上博士は、之を人間性の生きんとする要求に求めた。曰く『マルクスの主張する所によれば、一定の社會組織は「總ての生産力がその組織内に於て餘地ある限り其の發展を爲し遂げたる後でなければ、決して顚覆し去るもので無い」が、之れと同時に、其の社會組織の生産力の發展を束縛することに爲れば、それは早かれ晩かれ、必然的に崩壞して、新になる、より高度なる社會組織が之れに代ることゝなるものである。之が唯物史觀の中心を爲せる社會組織進化論であるが、私の考ふる所に依れば、此等の議論の底には、如何にしても人間性に關する一の獨斷が横はつてゐると見ざるを得ぬのである。蓋し一定の社會組織は早晩必然的に崩壞すると云ふのが、マルクスの意見であるけれども、元來社會組織なるものは吾々個々の人間なるものが相集つて組織してゐるものだから、社會組織の變動は、海嘯のため家が流れたり、噴火のため新に山が出來るなどゝ云ふ自然界の現象と異り、其の建設も其の破壞も共に人間の力、人間の行爲によりて始めて行はるべきである。其の社會組織内に包含せられ居る所の少くとも若干の人々が主動者となつて、舊組織の破壞並に新組織の建設を企てざる以上、社會組織が只自然に變動すると云ふことは無い。然らば何故若干の人々が一定の方向に動き出すかと云へば結局は生きんとする意思を有するからである。元來人口は絶えず増加するものである。勿論人口の増加しなくなる民族もあるが、さう云ふ民族は、次第に世界から消えて行き、歴史の舞台から退いて仕舞ふのだから、人間の歴史の流れには絶えざる人口の増加があると見て可い。加ふるに、人間の進歩に伴うて——一定の物質的條件は有らゆる活動の前提であるから——その物質的欲望は次第に増加してくる。既に人々は絶えず増加し、その物質的欲望も亦絶えず増加する。だから、物質的生産力の絶えざる増加は、生きんとする意思を有する人間の根本的要求であり、從て生産力の發展に對する桎梏

は、それが自然的のものであらうと、社會的のものであらうと、必ず人間によつて打ち破られて行く、一定の社會組織が生産力の發展を束縛するに至る時、その社會組織は必然に打破せらるべきである、とマルクスが主張するのは、畢竟するに、彼が人間の生きんとする意思を動かすべからざる前提とするからである。」（河上博士、同上、九一――二頁）と。生きんとする慾望を有し、しかもその慾望の質量を增加して行く人口數の增加と云ふことが、生産力の發展の根本的前提であると云ふ。この主張は、近時高田保馬博士が主張する第三史觀即ち社會學的史觀と一縷相通ずる所があると思ふ。高田博士の唯物史觀を排斥する理由は、『經濟史觀にありては、生産力を以て自ら變化しゆく根本的變動因子と見る。而してこれによりて生産關係が決定される、云はば人口はその意思より獨立して變動しゆく關係の中に入り込む。而して觀念即ち社會の意識的形態と政治的法律的制度は共に此生産關係によりて決定せられて變化する。此直接なる因果の關係によりて、例へば生産力と觀念との間に照應の關係が成立する。私の場合（第三史觀）にありては勿論、種々なる社會的事象の間、例へば經濟と觀念との間に一方の變動が他方の變動と相應する關係なしとは云はぬ。然れども、此照應は生産力又は經濟が觀念を決定するが故に非ず、それは同一なる社會的關係が一方に於て經濟を決定し他方に觀念を決定するが故なりと思ふ。云はゞ同一なる下部建造に對して共に一部建造たる地位を占むるが故に、其間照應の關係を有するに過ぎぬ。』而してその『社會的關係は本來、社會の量質的組立によりて決定せられる。』從て『此の見方を否定して、經濟史觀のそれに立歸らんとするならば此量的組立を生産力を以て説明する事の必要なるは言を俟たず、而かも何よりも生産力そのものが一の自變數たる事、換言すればそれ自體固有の運動を有することを論證しなければならぬ。勿論、マルクス、エンゲルスにありては、此生産力の發達は一の與へられたる出發點として、少くも私の知る範圍にありては、一の自變數に想定せられてゐる。然れども何故にその然るやに關しては詳細なる論證を得る事は出來ぬ。而して私は前述の如く、これを以て社會的關係によりて變動するものなりと見る。若し或る時期のまゝにして社會的關係が固定してゐるものとすれば、生産力に變化を認むる由なく、前者に變動行はるゝ所、後者に於ても變動の生ずるを認め得る、而して後者の變動そのものゝ内容も或程度までは社會的關係によりて制約せられたる範圍を脱し得ない。』（高田博士『第三史觀』『思想』大正十二年四月號）と。この社會的關係を決定する量質的組立なるものに就て、博士は、説明を加へて言ふ『社會の全人

口と云ふものは或る場合には同質的であり、或る場合には異質的である。而して或る場合は稠密であり、或る場合は稀薄である。この質と量との關係が變化することによつて生產力の關係が働いて來るが、之と相ならびて社會的關係も變動すると見るのである。生產力の變動が自發的に社會的關係を決定すとは考へない。』（『經濟論叢』大正十三年四月號、二九頁）と。マルクス、エンゲルスが現實的の生產力の發展を自動的なものと見たか、どうかに就ては、前節にかける櫛田氏の說明にも屢々現れてゐるやうに、未だ遽に信じ難い。然しそれを以て唯物史觀に於ける論理的出發點と見たてとに就ては疑ひ得ない。けれども、このことは必ずしも河上博士及び高田博士のやうに、人間性又は社會的關係の前提を認むることを妨ぐるものではない。なぜなら、生產力の發展の自動性と云ふことには、唯物史觀の成立の爲めに必要なる一箇の理論的假定たるに過ぎぬのであるから。

第二に、この生產力の發展の自動性と云ふことと唯物史觀の實踐的方面たる社會革命及び階級鬪爭といふこととの關係に就て知らねばならぬ。これは屢々マルクス主義者又は非社會主義者より一箇の矛盾として非難された問題であるが、若し生產力の自動的發展の論理的假定が許され、同時に生產關係廣く云つて社會組織の繼續的固定性が認められる限り、必然的に導かれざるを得ない結論である。なぜならブハリンが屢々論ずるやうに生產力と生產關係との衝突といふことが、社會革命の出發點なのであつて、この出發點に立つ限り、人性の必然として階級鬪爭と社會革命は起らざるを得ぬのであるから。

かくの如き見解の下に、即ち生產力の自動的發展てふ理論の下にその社會運動の綱領が講ぜられるとき、その實際的綱領の內容は、凡て生產關係即ち社會組織の變革てふ政治運動に集中するは當然の結論と言はねばならぬ。即ち古くは『共產宣言』の第二章末尾に示されたる方策より近くはボルシェヴィキーの戰術に至るまで、專らこの政治運動に關する條項に充されてゐるのである。かくの如く、唯物史觀は、その理論的方面に於ては生產力を出發點になし、その實踐的方面に於ては、生產關係を出發點となしてゐるのであつて、この一見相容れざるが如き二つの立場を有するに拘らず、これは生產力の自動性なる假定と生產關係の固定性たる假定とが、その二箇の立場を貫通することによつて、一個の論理的構成を可能ならしめてゐるのである。從つてこの唯物史觀の理論的方面のみに着眼せる人はマルキシズムを以て社會進化論となし、その實踐的方面に於ける革命的政治行動と矛盾するとなすのであるが、これは本文の冒頭に於て言へる如く唯物史觀が理論及び實踐的の二箇の方面を一箇の根

本指針によつて貫かしめてゐることに特徴を持つ所の、社會主義理論の一に屬するものたることを忘れたものであつて、唯物史觀の攻擊とはならぬものである。若し唯物史觀にして、從つてそれを中心理論とするマルキシズムにして、根本的に檢討され、その價値を批判され得べしとするならば、それは、この唯物史觀をして論理的に可能ならしめてゐる二個の假定的命題の檢討よりして、その意義を批判されねばならぬと思ふ。

五、

若し、近時の英國社會主義の特徴を求めらるるならば、余は、前節に述べたる如き意味に於ける唯物史觀及びマルキシズムの批評として一顧の價値ありと考ふるものである。英國社會主義の奉ずる理論を以て、全くあらゆる點に於て、唯物史觀及びマルキシズムと正反對であるとなすが如き、又單純に一を以て穩健となし他を以て急激となすが如き議論は世に多く行はれてゐる所であるが、かくの如き主張に對して余は必ずしも贊成し得ないものである。なぜなら唯物史觀が、社會主義運動の指導原理として生れたるものたる以上、又英國の社會主義がその社會主義を奉ずるものとの表明に僞りがない以上、英國の社會主義がこれに對し全然的の反對と爲すが如きは全く考へ得ざる所である。我々は、英國社會主義運動の首領達が屢々聲明する、英國の社會主義は唯物史觀を奉ぜず、又マルキシズムに反對である、と云ふが如き政略的文句を、單純に無批判的に、其儘受け容れてはならぬ。ロシア革命その他に對する反動的空氣の旺なる今日に於て、世を擧げて英國社會主義の穩健性と漸進性とを漫然歡迎するが如きに對しては、余は、ロシア革命に對する盲目的隨喜渴仰論に對すると同樣に遽に贊成し得ざるものである。

曾てロシアに於てボルシェヰキー革命の成功の報傳りてより、我國に於てボルシェヰズム及びそれの奉ずるマルキシズムの研究旺に行はれ、幾多の文書の飜譯刊行を見たる如く、今又最近に至りて、英國に於て勞働黨の內閣組織の報傳りてより、英國勞働黨の歷史政策その他に就て數多くの書冊が飜譯刊行されつゝある。これ我が社會思想界の爲めに賀すべきことには違ひない。然し乍ら、我々は英國の社會主義の穩健性と漸進性の由來、又その眞實の意味、將又そのマルキシズムとの關係等に就て、何等反省批判する無くして、漫然之れを迎ふるならば、我が社會思想界をして夕べに吳客を迎へ、朝に越客に接する思想的娼婦の役割を演ぜしめるに過ぎざるに至るであらう。こは我が勞働運動界に於ける左傾思想と云ひ又右傾思想と云ひ、先きには第三インターナショナルに媚び後には第二インターナショナ

ルに接せんとする節操固からざる思想的態度と共にその方面の指導者に於て多少思ひを致さねばならぬことと考へられる。

この間に在りて、河上博士が、最近英國の社會主義に就て、論及された所論は、時流の如何に惑はさるゝことなく、當然平素自ら信ずる學問的立場よりものされたるものであつて、我々をして傾聴せしむるに足るものがある。河上博士は、その個人雜誌『社會問題研究』大正十三年三月號に於て『英國勞働黨内閣の成立について』と題する單文を載せられてゐるが、その冒頭に於て曰く『英國に勞働黨内閣が出來たと云ふこと、言ひ換ふれば社會主義が英國で政權を握るに至つたと云ふことは、まことに劃期的の出來事である』と。先づ博士は、英國勞働黨を以て社會主義團體であることを認められてゐる。そこで、進んで今や英國の支配階級が、『最後の防禦線まで頑迷なる抵抗をなす代りに合意的協力の基礎の上に必然の變化を平和的に移入せんとしつゝある』現象に對して、博士はその奉ずるマルクス流の立場より論評されるのである。即ち『マルクス説に於ける社會的革命と政治的革命』と題する舊論文中の一節に於けるマルクスの言葉を再び引用して曰く『勞働者は、勞働の新たなる組織を樹立するために、何時かは政權を掌握しなければならぬ。しかし吾々は、この目的を遂するための經路が到る所同一である、と主張する者ではない。吾々は種々なる地方の制度や、習慣や、慣例やを顧慮しなければならぬと云ふことを知つてゐる。さうして吾々は米國や英國の如き國々では、――もし私が此の國（和蘭を指す）における制度をもつと詳く知つてゐたならば、私は多分これに和蘭を附け加へるであらう、――勞働者が平和的の經路で彼等の目的を達し得ると云ふことを、否認するものではない。しかし一切の國々で皆さうだと云ふ譯ではない。』それに附け加へて博士の書れた所を再び引用されるには『マルクスは勿論暴力革命の否認者ではない。けれども同時に彼が平和的革命を以て啻に Possible のみならず若干の國々では其れが Probable でさへあるとしたことは、以上の一句が既に過ぎたる程明瞭にしてゐる。もし之がマルクス自身の口からでなしに、他のマルクス主義者の口から出たならば彼は其の同志――マルクスの階級鬪爭説を一種の型に嵌めてゐる其の同志――から、直ちに背教者として破門されるだらうと思はれるほどに、それは平和的經路で行はれる無産者の政治革命の可能性と蓋然性を認めてゐる。勿論如何にして政治革命を成就すべきかと云ふことは、一個の戰術に關する問題であり、それは戰術そのものゝ性質に本づく約束から、當然に opportunism に屬すべきであつて、順風ならば帆を張り、逆風ならば帆を卷く、

何時までも株を守つて兎を俟つべき筈のものでは無いのだから、實際の經驗にもとづき、マルクスが斯く明言してゐるからと言つて、固より毫も怪むには足らぬのである。』と。博士は如何にして政治革命を成就すべきかの問題を戰術の問題と解して、マルクスの社會進化の必然と調和するものとされてゐる。寔に一個の解釋と言はねばならぬ。だから、博士はその同じ論文に於て、大内兵衛氏の『英國議會に於ける勞資の對戰』なるパンフレットの論旨を紹介され、英國の社會主義が議會を通じて其の實現の第一歩を踏み出したことも承認されたがそのことに就て大内氏が最後につけ加へてオウエンよりマルクスへ、マルクスよりウエッブへの進化（？）の最近の途しるべであつたのである』と云はれた一句に就て異議を唱へられて、次の如く云つて居られる。曰く『この一句は、全篇五十六頁に亘る氏の論文のなかで、私の氣にせざるを得なかつた唯一の句である。私は先きにマルクスの言葉を引用して、英國の如き國柄では『勞働者が平和的の經路で彼等の目的を達し得ると云ふこと』を、マルクス自身が明白に豫言してゐることを述べた。だからたとひ英國の社會主義が議會を通じて其の實現の第一歩を踏み出したとて、私は之を以て社會主義が『マルクスよりウエッブへ進化』したものとは認めない、勿論フェビアン協會の創立者であり、勞働黨内の一番の學者であり、また現に勞働黨内閣の商務院總裁であるウエッブが、マルクス說に對して常に好意を有たぬは言ふまでもなく、勞働黨の總裁であり、現に勞働黨内閣の首相であるマクドナルドも亦た、嘗て其の著『社會主義と社會』においてマルクスを評し『マルクスもエンゲルスも表面の下に隱れてゐる平和的前進の可能性を發見するため十分に深く觀なかつたのである』云々と述べてゐるけれど、此の如きは皆マルクスに對する彼等不諒察の致すところに外ならぬ。嘗てロシアにボルシエギキーの革命が起つた時、――多くの人々が之を以てマルクス主義の唯一の歸結となしつゝあつた際――私は、マルクス主義の下にあつても『平和的革命』は優に可能性を有す、また蓋然性をさへ有つと云ふことを唱へた、議會を通じての社會主義の實現は、マルクスよりウエッブへの進化（？）をなすことなくして、なほ可能なのである』と。大内氏が、この一句に於て、如何なる意味を籠められてゐるのか、判然しないのであるが、これと同樣な文句を用ひてゐる者に『英國社會主義史』の著者マックス・ベーアがある。いま試みにベーアの意味する所を解釋する時、余は必ずしも博士の所論に贊成し得ないものである。先づ第一に此の場合に於ける『オウエン』なり『マルクス』なりの文字は、オウエン又はマルクスの生存時代及

びその時代の人々に理解され、それに影響を與へた所のオウエン及びマルクスである。換言すれば歷史的背景を有する所のオウエン及びマルクスであつて、後世に至りて學問的に研究されたその人の全豹を意味するものではないやうに思はれる。第二に英國の社會主義者例へば河上博士の擧げられたるウエッブ及びマクドナルド等のマルクス觀は、確かにマルクス說の不詮索てふ大なる缺陷の存することには疑ひない。又余は彼等が感情的に又政略的に反マルクス的態度を表明することを陋なりともする。しかし乍ら彼等の主張の生ずる原因は此不詮索や感情的政略やに基くといふよりも、寧ろ彼等自身が社會運動に對する特有の見解を有するが爲であると思ふ。而して、彼等自身の有する特有なる見解とは、單に勞働者階級が平和的に政權を奪取し得ると云ふ見解だけでなく、もつと廣く唯物史觀の理論的方面の假定したる生產力の自動性に關して、マルキシズムとは稍異りたる見解を有すると共に、唯物史觀の實踐的方面の假定たる生產關係の固定性に關しても亦、多少異りたる解釋を有するものである。例へばウエッブの主張する擴張地代說なるものを見る時に、我々の感ずる事は、ウエッブの思想の根柢に、一定の生產力なるものは常に一定の生產關係卽ち法律關係の下にあることが前提とされてあり、生產力を抽象的に且つ自動的のものとして前提しなかつたことが認められる。又彼の議會諸政策も、生產關係の固定性に就て、英國過去の歷史的經驗に照らして、寧ろ其可變性を信じた結果であつて、卽ち社會制度の民主主義化への信賴である。このことは、オウエン及びマルクスの時代より遙かに民主的傾向が進展した時代に生れたウエッブとしては蓋し當然であらう。かくの如き理論的態度と、それに密接なる因果關係ある實踐的態度とに於て、マルキシズムと異りたる政策綱領の生れ來るのは見易き事と言はねばならぬ。卽ち其第一は、生產力の自動的發展を信賴せず、積極的に生產の經營方法の諸政策を立する事である。英國勞働黨の社會政策論と生產統制論とはかくの如き理論的背景を有するものと見る時、單純なる改良論と見做す事は出來ない。この點に就てウエッブと同じく、フエビアン協會の領袖たるバアナアド・ショウが、その『ラスキンの政治論』なる小著に於て、ボルシエギキーの政策卽ち生產力の幼稚なるに拘らず、社會組織の變革によつて生產技術力の進展を企圖する政策――これは唯物史觀の大なる變革であると思ふ――は、自由放任主義に反對する英國社會主義の技術的行政主義とその根本基調を同うすると云つたのは、言奇矯に似て、しかも味ふべき言葉であると思ふ。その第二は、生產關係の固定性を强く信じない所よりして、それと生產力との衡

突を俟たずして、生産關係の民主化を企圖することである。英國勞働黨の議會主義はかくの如き理論的背景の下に生れたるものとして見る時、之を單純なる穏健論と見做すことを得ない。英國勞働黨の各個の實際政策に就て云爲することは之を他日に譲らねばならぬ。河上博士の所説は、マルクス説の全豹を窺つて始めて知るを得る、且つ何人をも首肯せしむるに足る一箇の正當なる解釋であるけれど、他方に於て歴史上に特徴づけられたるマルキシズム及びその實踐的方面たる政策綱領の差異より見る時、そこにマルクスよりウェッブへの進化（？）と云ふ議論の生じ來る餘地があると考へられる。換言すれば、一個の科學的立論として、英國の社會主義が議會を通じて、平和的革命を實現するといふ點は、マルクスよりウェッブへの進化を俟たずして、尚ほ可能であらう。しかし乍ら、同時に我我は、マックス・ベーアの次の如き論述に異議を挾むべき理由を見ないのである。『一八六五年より一八八五年の間に、英國は一の變轉期に入つた。思想はその古き碇泊所を動き去り始めた。勞働者階級の擡頭は最早否まれぬ。彼等の立法並びに勞働契約に對する影響は明らかに増大して來た。彼等はすでに選擧權と勞働組合の法制化とを獲得した。英國の憲法組織は民主主義へと轉向した。古き自由主義はその個人的利益を以て幸福への最良の指導者とするといふ原理と共に、國體主義的國家觀と公共團體による社會改良とに道を譲つてしまつた。しかし乍から、斯くの如き變革が、明瞭にその意義が定められ且つ何人にも分明になつたと想像されてはならぬ。それらは完了された事實と言はんよりは寧しろ傾向——屢々古き思想や行動によつて中和化されるところの傾向であつた。しかし乍らウェッブは、それらを充分明白に觀た。經驗なるものは、結局、外界からの受動的な精神的反映ではなくして、寧ろその能力と用意とに應ずる外的現象及び心意の諸作用の産物である。兎に角、ウェッブには過去の諸條件の上に築かれた社會思想がその儘挑戰もされず、訂正もされずに繼續すると云ふことは許容出來なかつた。自ら社會改良に義務として當らんとする民主的國家、經濟的勢力と實力とを有する勞働者階級、増され行く社會的良心を有する國民これ等は革命と階級闘爭の見地よりして取扱ふを得ない。社會主義的理論の根本概念は新らしき條件によりよく順應する新らしき基礎と方法とを必要とした。社會主義は民主主義に適應せねばならぬ。この照應はシドニー・ウェッブによつて爲遂げられた。それはマルキシズムよりフェビアニズムへ、社會革命的原理より社會改業への過渡を示すものである』M. Beer, History of British S cialism, vol. II, p. 27[illegible].）と。しかし、英國社會

主義と一口に言つても、それは勿論フエビアニズムが中心では無い——否今日に於て寧ろフエビアニズムはその中心たる地位を失つてゐる——その外に數多の潮流を併せたものである。勞働黨の政綱の如きもその複合的産物である。從つて、これらが果して唯物史觀の修正に對して如何なる實蹟を示してゐるかに就ては、尙詳細なる說明を要する。況んや、唯物史觀と云ふ動きなき立派なる理論否その適用に、尙批評すべき重要なる難點ありと云ふが如き大膽なる立言を爲した者としては、それを論證する道德的義務ありとも感じてゐる。併し、これに就ては他日の機會に讓り、今はこの蕪雜なる立言に於て、河上博士その他大家の學說をば誤解して敢て異見を挾みたるが如き點多かるべきを謝するに止めておきたい。——（二四、五、三）

排日法案の眞意義

エス・スレパック

日本人排斥法案が近き將來に於て米國の法律となる可きは、最早何等疑ひ無きところである。最近の報道は、本年七月一日から排日法は實施さる可しと傳へてゐる。勿論同案が法律となるまでには、モウ一度議會を通過し、大統領クリーッヂの裁可を經なければならぬ。この機會に、日本の政治家や日本及び外國の新聞記者等は、憶測を逞ふして輿論を迷はし、排日法案に關して眞に米國に起つてゐることを、公衆に知らしめぬやうに努めるに違ひない。然し多かれ尠かれ米國の政治事情に通じ、易々と揣摩憶測に左右されない人は誰でも、排日法案の撤回される望みはまるで無いと云ふことを、よく知つてゐる。たゞ起り得可きことは、排日法案の言葉扱ひを變へることか、それとも、同案を上院議員及び下院議員の手から日米兩國の外交官の手へ移すことかである。

第一の場合では詰り、日本政府へ差出す皿の覆ひものを多少綺麗なものと取り換へることであり、第二の場合では、米國の立法部が最初に調理したと同じ料理を、日本政府自身が調理せんことを求むることである。何れにしたところで、日本移民を此上米國へ入國させないと云ふ結果は、實際上同じことである。たゞ異ふところは、「日本國民を傷付ける棘毛がとり去られた」といふまでである。然し、排日法案を日本國民に對する侮辱だとした人々が、法案の言葉扱ひが多少變更され、若くは日本政府自身が強ひられて、所謂紳士協定の廢棄及び移民不許可に同意した場合、それで件の

侮辱が無くなつたと考へるかどうかは、非常に疑問である。とにかく日本人の對米移民問題は、解決されたものと見てよかろう。米國政府は、日本政府の欲すると欲せざるとに關らず、最早日本人をその領土に入れることを欲し無い。

二

排日法案が全日本に亘つて、猛烈な反抗の聲を喚起したことは、尤も至極である。勿論その反抗を示したものは、日本の現在の政治的經濟的階段に於て、政治的、社會的、經濟的生活に參加し得る資格ある分子である。日本國民の一般は、この問題に對して殆んど態度を表明しないと言つてよい。更に本年のメーデー示威行列に參加した東京の多少目醒めた勞働者の態度を、全日本の目醒めた勞働者の態度と云ふことが出來るとすれば、全日本の勞働者は、この問題を勞働階級に何等關はりの無い問題と思惟してゐると言つてもよいであらう。然しこの點に就いては後で論ずるとしやう。茲で私の言つておき度いことは、全日本が熾烈な反抗と滿心の不滿とを以つて排日法案を迎へたと云つても、それは日本今日の政治的、社會的、經濟的生活に參加し得る可能性を有する分子の間のことであるといふことである。

然しながら反抗し、衷心からの不滿を表明することと必らずしも、反抗さるゝものゝ眞の意味を把握し、又はその根本的解決を見出す所以では無い。事實、問題の基礎的原因を理解せずして解決を求むることは、出來ない相談である。

日本の諸新聞紙は排日問題のために日々多大の紙面を費してゐるが、何れもこの重大なる問題を、人種的偏見の衝突と見做してゐる。そこで日本國民は如何なる點に於ても歐米の白人國民に劣るもので無いと云ふことを、憐む可き米國及び全世界に知らせるために、多くのインキとペンが使用されてゐる。日本の文明は米國の文明に比して、よし優つてゐないにしても決して劣つてゐるものでないこと、日本人は米國人に比して斷じて劣等なものでないこと等を世界に示すために、多大な努力が傾注されてゐる。「東京日々新聞」主催の下に特に此問題を討議する會合が、四月二十六日工業俱樂部に於て開かれ、私もそれに出席した。

其處で日本の國民に代つて排日法案反對の堂々たる演說を試みた人々は、誰れも彼れも、不幸にして、日本の諸新聞

の論議と同じ論法を用ひてゐた。「ヘラルト・オブ・アジア」の主筆頭本氏は、「文化の闘爭」なる題下で演説したが、氏の排日法案に對する反對は人種的偏見論より一歩も出づるものでなく、人種的偏見といふ代りに、「文化の闘爭」といふ言葉を用ひて多少紛飾したに過ぎない。磯部博士はその演説の結語として、「排日法案は單に日本を目ざしたものでなく、全アジア國民を排斥せんとするものである。されば吾人は全アジア國民の團結を圖らなければならぬ。」と説いた。博士の議論の意のあるところはそこに明白に示されてゐる。筒井氏は長時間の堂々たる演説を試み、日本は西歐文明を消化しなければならぬが、日本には日本の哲學があり、固有の文明がある、それは世界の如何なる文明に比しても劣るものでない、と力説した。

かくして、最近排日問題を取扱つた凡ての人々は、その行き方こそ種々異つてゐるが、いづれもこの問題を純粋の人種問題と思惟してゐると斷ずることが出來る。

三

私は米國の日本に對する侮辱を惹起した興奮の世界を暫時去つて、事實そのものを考究しやう。

二十九年乃至三十年前日本の移民が、米國領土への入國を禁止されなかつたばかりで無く、太平洋岸の諸州から厚い歡迎さへ受けたことは、多少とも日米關係に通じてゐる人々の周知の事實である。それは當時加州及び西部の米國人が、日本人の所謂劣等性を理解しなかつたためではなく、それらの諸州の産業資本家が日本人勞働をもつて安價なる勞働の源と見做したが爲めに過ぎない。彼等資本家はその當時、廣大なる土地を開發し、鐵道、橋梁、建築、工場、等の建設のために、安價なる勞働を必要としたのである。日本人及び支那人勞働者は米國の西部に於て、米國の農業及び工業の發展のために働いた。それは歐羅巴の移民が東部及び中部に於て、米國の農業及び工業の發展のために働いたと同様である。たゞ歐羅巴の移民の仕事が加州及びその周圍の日本移民の仕事に比して、規模が大きいと云ふだけの差異である。或期間米國で暮した人は誰でも、苦役に從ふ勞働者は、大部分伊太利及び南部歐羅巴からの移民並にロシア、波

蘭、稀れには愛蘭、又極く稀れには英蘭からの移民であることを、よく知つてゐる。而して數年間に既に「純粋の」米國市民となつた者にして、苦役に從事してゐる者、米國文明の所謂下等勞働に從事してゐる者は、何處を搜したつて見當らない。全く博物館向の珍品と云つたほどである。この所謂下等勞働は、西部に於ては日本人及び支那人によつて、東部及び中部に於ては今日なほ右の歐羅巴移民によつて行はれてゐる！

ところで日本勞働者は漸次に小資本を蓄積して、勞働者でなくなつて仕舞ひ、現在西部アメリカに在る十萬の日本移民中の大部分のものは、地主、果樹園主、旅館及び料理店主、小商人等になつてゐる。かくて「純粋の」米國の小ブルジョアと相並び、それに競走する日本人の小ブルジョアといふ新らしい階級が發生した。これが一つの事情である。

他方に於てアメリカの資源が未だ十分に開發されて居らず、アメリカの產業も同じく十分に發展してゐなかつた時には、勞働者の仕事がどつさりあつて、且つ勞働者がすぐ集中されてゐなかつたので、資本家が安價なる勞働を雇入れるのに反抗する力も無く、またその競爭者に余りに注意も拂はなかつた。然し米國の急激なる工業化に連れて、米國の勞働者が多少强固なる團體に組織されて來、移民を以て競爭者と見做すやうになつてからは事情が漸次變つて來た。かくて米國西部の小ブルジョアジーと大部分東部及び中部の米國勞働者とは、競爭者たる移民を排斥しやうとする點に於て、一致を見るに到つた。西部の小ブルジョアジーにとつては、日本人及び支那人移民の流入は由々しき問題であり、東部及び中部の米國勞働者にとつては、歐羅巴移民の流入が重大なる問題である。民族性及び敎養の異れる競爭者を有つてゐることに於て、西部の小ブルジョアと東部及び中部の米國勞働者とは、移民といふ一般的な名稱の下に、本質上同じ競爭者を有つことゝなつた。かくの如くにして移民の流入を出來るならば全然禁止し若くは少くとも制限して、移民の競爭を取除かんとする西部の小ブルジョアと東部中部の米國勞働者の要求とが吻合した。この要求の合致は、米國の勞働者が――尠くともその大部分――今なほ小ブルジョア心理を持つてゐるといふ事實によつて、大いに促進された。私がいま米國の勞働者と呼ぶのは、主として、かの有名なサムエル・ゴンパースに率ひられてゐる米國勞働聯合會を指して云つてゐるのである。ゴンパースと米國無產階級の眞の代表者たる地位との距離は、地球と太陽との距離ほど

ある。その米國資本主義の忠僕が今日なほ米國勞働聯合會の首腦たる事實は、小ブルジョア觀念が今日なほ米國無産階級の大部分の頭腦を晦ましてゐることを意味する。米國勞働者のこの小ブルジョア心理が、西部の小ブルジョアの移民排斥を大いに助けたのである。

甞ては歡迎されたアジアからの移民は、最早歡迎されなくなつた。政治的舞台の上には、米國からアジア人を掃除するといふ綱領が加へられた。凡ての資本主義國家に於ける重大問題の場合にさうである如く、その運動者等は人間性の弱點につけ入り、大衆の感情に訴へて運動を始めた。米國がアジア人の侵攻を蒙つた場合には、哀れなる米國民衆に如何なる危禍が來るかも知れないといふことが、それ等の運動者によつて、いろんな方法で說き立てられたのはそのためである。その時は米國の道德は底下するであらう。その「純粹の」文明は脅かされるであらう。米國民は頽廢に導かるるであらう。――「支那人及び日本人」の「劣等性」を印象せしめんがために、この種のありとあらゆるカモフラージユが米國有權者の上に注ぎかけられた。かうして經濟問題が人種的偏見によつて包まれた。而して勿論その人種偏見は、西部の小中ブルジョアジーの經濟的利益に對する將來の危險を說き立てるよりも、無知な普通の米國有權者の胸に應へた。而かも人種問題は米國の大衆にとつて新奇なものでないといふ單なる事實は、その事を一層容易ならしめた。彼等は既に黑人問題のために苦しんで居り、その問題も同じ米國のブルジョアと小ブルジョア勢力とが、人種問題に轉換したものである。

かくして若干の準備作業の後、移民排斥の車輪は回轉し始めた。米國政治家の多くの仕事の中へ一つの新らたな仕事――支那排斥法案――が加へられた。支那人移民は米國への入國を一切禁止された。

次に來る仕事は「危險なる日本人」問題を解決することであつた。然しこの仕事は非常に困難な仕事であつた。今日まで國際帝國主義的機關の一部分となつて居らず、寧ろ正反對に、今日なほその犧牲たり活躍舞台たる支那に關しては、事は容易であつたが、日本となると事情は全く異つてゐる。日本は維新革命後非常な發達を遂げて、今や世界强國の一たる地位を占めてゐる。それぱかりでは無い。日本はその帝國主義的利益を、他の若干の强國の帝國主義利益

と聯結させ、或期間極東に於ける或る歐羅巴强國の利益の番兵たるの役さへも演じた。之を一言で言へば、日本は今や重要なる國際的勢力の一つとなつて居り、容易に無視することを許さない。謂はんや國際的に侮辱することおやである。

そこで米國ブルジョアジーに必要な仕事は、狼と羊とを共に滿足させるに足る暫定條約を發足することであつた。日本移民の流入を制限するために種々の手段が講ぜられ、その中には成功したものもあつたが、最後に出來上つたのが所謂紳士協定である。これによつて日本政府は自身でその勞働者の米國に移住することを制限することゝなつた。然し飽まで日本移民に門戸を閉し、移民禁止を國法となさんとする米國のブルジョアジーがそれで滿足するわけは無い。かくて我々は今や米國に於ける日本人移民禁止法の最後の階段に到達した。こゝで排日法の眞意義を更によく了解するために、同案提出以前の日米關係の發展について、數言を費さなければならぬ。

四

日米の關係が單なる移民問題よりもモツト複雜な問題であるといふことは、日本の政治經濟上の指導者等にとつて決して隱されたことで無いのみならず、日本の一般大衆にも明白なことである。日本の殆んど凡ての人々は、日米資本間の經濟的鬪爭は、屢々政治的形態を執つて現はれて來たもので、それは近年に生起したものでないことを知つてゐる。それは實に極めて長い間續いたものである。然し私はいまこの複雜な問題を取扱ふつもりはない。この問題を取扱ふには別に新らたな論文を書かなければならぬ底のものである。たゞこゝではその鬪爭の最近の主要形相について述べるに止め度い。それはワシントン會議に關してである。この會議は實に日米關係に於ける一新局面を展開したものであつた。一九一四年——一九一八年の帝國主義戰爭の結果、米國はたゞに產業的自然的富に於てのみならず、自由資本の蓄積に於て、世界の最富强國の一となることが出來た。この新らたなる地位は、米國帝國主義の發展の上に、一つの新らたな傾向を產み出した。米國資本は最早、戰前に國際資本によつて米國に與へられてゐた比較的貧弱な役割に滿足しなくの

つた。米國資本は今や廣汎な計畫を樹て、米大陸の搾取のみでなく全世界市場の搾取を企圖するやうになつた。されば、世界を「再建す」て人類に貢獻し、狂へる歐羅巴を正氣に還さんとする米國の一切の計畫、一切の理想的企圖は、その本質に於て、新らたな形勢を利用して、米國資本の利益を促進せんとするにあつた。

極東は勿論米國資本のその「人道的」計畫の中に含まれてゐた。特に長い間米國資本が目ざしてゐた有望な支那市場がさうである。かくて數ケ月に亘る國際的宣傳が効を奏して、ワシントン會議が開催されることゝなつた。ワシントン會議は、曩にヴェルサイユ會議に於て部分的に承認された極東に於ける日本帝國主義の活動を減殺することを主たる目的として、米國政府によつて召集されたものだと云つても誇張ではない。而して米國の帝國主義は大部分この目的を達した。ワシントン會議は、極東に於ける日本の帝國主義活動進展の最初の重大な阻止であり、極東の米國帝國主義活動の開始であつた。この二個の帝國主義が折衝したワシントン會議に於て、日本の帝國主義は米國の帝國主義から、最初の手痛い打擊を蒙つた。この時以來、米國の帝國主義が進軍しつゝあり、一方日本の帝國主義が退却しつゝあることが明白となつた。日英同盟の廢棄、日本の山東還附等、支那及びシベリアに於ける日本の活動に關聯した諸問題が、この國際會議の公の討議の主題となつたといふ單なる事實に、米國の帝國主義が勝利を占めたばかりでなく、その勝利で滿足せず、更に一段と進出の端緒を開いたことを、明らかに示してゐる。ワシントン會議以來支那に於ける米國資本の活動を眺めた者は、その活動が爾來大いに活潑となつたことを斷言することが出來る。北滿州に於ける米國資本の活躍、それによつて在支米國資本家が本國議會をして支那に於けるその活動を援助させることに成功し、競爭者に對して非常に有利なる地位を占めたダイヤ法案の通過、支那に於ける米國商業會議所の勢力の增大等を指摘しただけで充分である。これらの一切は、支那に於て强國なる地位を占めんとする米國資本の欲望の增大を示して餘りあるものである。このことは曩の私の述べた點に關聯する。卽ち米國資本が支那の經濟戰場に於て多くの有利なる地位を獲得してゐるとするならば、それは日本の資本がその同じ地位を失ひつゝあることを意味すること、是である。もつとも日本は今日まで十分に產業化されて居らず、日本の新興ブルジョアジーは封建勢力並に封建的產業家のために妨げられて、未だ十分な

る政治的表現を有つてゐないために、支那に於て掌握した有利な地位も余り多くはない。この政治的事情はまた、日本の地理的位置の有利なるにも關らず、日本の資本が米國の資本に打破られる原因でもある。

昨年九月一日の震災までの日米の經濟關係の進展はさう云ふ風であつた。そこで震災が起るや、米國資本はその「友誼」を日本の國民に示すために、罹災民のためにあらゆることを爲したあとで、日本の地震を利用してどれ位儲け得るかと計算し始めた。計算して見た上で米國資本は、直接地震から利益をあげることは出來ないが、地震による日本の資本力の減殺は、米國資本の間接の利得であるといふ結論に達した。そこで公債引受の商議が開かれ、その結果が三億萬圓の公債成立となつたが、それは日本國民に對する米國資本の「友誼」を十分に示すに足る如き利子を附してゞあつた。日本の國民が、有利なる條件で公債を成立せしめ得なかつた日本政府の無能を責め、米國のそんな「友誼」に對して反抗したのは、何も不思議とするに足らない。

日本の國民を見舞つたかの如き大災禍に當つて、よし一時なりとも米國のブルジョアジーは移民問題を差控へるのが本統である。然るに事實は正反對であつた。米國のブルジョアジーは日本の國民的不幸を利用し、日本人移民問題を、どん詰りまで押し遣つたのである。

要するに移民問題が日米資本間の一般的繼續的闘爭の出來事の一つでないならば、年々百人内外の日本移民の入國を許可する許可せぬの問題は、米國ブルジョアジーにとつて左程重大なる問題ではない。然し闘爭關係に於ては、それ自身としてはいかに小さな出來事でも、その出來事の連續する中に、重大なる意義を有つて來る。

かくて我々は最初の論點の結論に到達した。即ち、一般に日本人移民問題、特に今回の排日法案は、長い間日米資本間に行はれてゐる一般的經濟爭闘の一部分であるといふこと是である。この意味に於て東京のメーデー演說者が、排日法の通過は日米帝國主義間の戰ひであつて、何等勞働階級の關するところで無いと言つたのは、同法案の眞の意義を掴んだものである。人種問題を始めとしてあらゆる名目の下に、この經濟問題を紛飾せんとする企ては、それらの人々の日米帝國主義者に斷えず描いてゐる經濟問題に對する無知を示すものか、さなくば、それらの人々は一般公衆を欺か

んと企てゝゐるものなることを示してゐる。

經濟問題が惹起する時は何時でも、特にその經濟爭議が流血の鬪爭を齎らす時は何時でも、凡ての政治家と資本家の一切の走狗とは、その流血の鬪爭が經濟的爭鬪の結果であるといふことを決して認めやうとしないのは、一般に知られてゐるところである。而して彼等は常に、無知なる大衆に容易に訴へ得る如き名目を見出して來る。つまり經濟問題を明白に示せば、資本家の經濟的利得のために生命を投出すことを欲しない勞働大衆は、資本家のために戰ふことを拒むに相違なく、それは勿論、資本家社會の足輕共に不利益至極だからである。そこでそれらの足輕共は、「文明のために」「人道のために」「正義のために」「世界平和のために」戰ふものだとの名目を擔ぎ出して來る。勿論その好戰群は、その「文明」、その「正義」、その「人道」は世界に於ける最善のものであり、汝等はそれを傷付くる者と戰はなければならぬと云つた風に宣傳する。

日本國民は、一九一四年—一九一八年の世界戰爭中に、主として英獨間の經濟的鬪爭が、如何に上に述べたやうな堂堂たる言辭を以つて飾られたかをよもや忘れはしまいと思ふ。獨逸國民は聯合軍とその代辯者とによつて、世界に於ける最惡の國民なりとの烙印を押され、「匈奴、」「文明の破壞者」道德、人道、民主々義の破壞者と呼ばれた。而して哀れなる勞働大衆は、「文明を救ひ、」「デモクラシーを擁護し、」「戰爭を絶滅し、」「世界的平和を齎らし、」その他聯合國資本家の宣傳係のペンが撚出し得る限りの一切の美辭のために、その肉體を大砲の餌食にせんことを求められた。ところで「戰爭絶滅のため」「デモクラシー擁護のため」の戰爭の結果はどうであるか？　この結果の何たるやに就いては既に多く論ぜられてゐるから、讀者は十分承知のことゝ思ふ。自身ブルジョアジーであつて、「匈奴」に對する宣傳家の隨一たる英國のロイド・ジョージや伊太利のフランチエスコ・ニッチでさへも、非常に失望してゐるほどである。大部分勞働者より成る一千萬以上の人命を失ひ又は傷付けた「世界平和のため」の戰爭の後に於て、今日の歐羅巴には戰前に比して一層險惡なる戰爭の脅威が漲つてゐる。「文明のため」「デモクラシーのため」の戰爭の後に於て、最惡性の軍國主義と專政主義とは、ポアンカレーを立役者として、歐羅巴の喉笛を扼してゐる。

一九一四年の帝國主義戰爭の恐怖と、それから得た勞働大衆の教訓の後で、資本家宣傳家は最早、勞働大衆をして新らたな戰爭の必要を信じさせ、再びその生命を資本家の利益に投出させるために、どんな形に於てでも例の堂々たる名目を構へやうとしないであらうと讀者諸君は考へるか？ 若しさう考へるならば、遺憾ながら諸君は失望するに違ひない。その同じ古い遊戲が現に再び演ぜられてゐるのである。

私は日米資本間の經濟的鬪爭は、何等か不測の出來事がそれを阻止しない以上は、必らずや太平洋上に於ける流血の戰爭を誘起すると信ずるが、さうなつた場合兩國の資本家は、この戰爭を兩國資本間の鬪爭であると自白するであらうか？勿論否である。資本家宣傳家は口を揃へて、この戰爭は「文明のため」「人道のため」の戰爭だと揚言するに違ひない。米國の資本家とその意識的無意識的の足輕共とは、米國々民に向つて、日本人の道德習慣の「破壞」力から米國の文明を救ふために、劍を把つて立てと叫ぶに違ひない。日本の資本家と封建勢力とその意識的無意識的の足輕共とは、日本國民に向つて、憎む可き米國と戰へ、アジア人種を救へ、「正義」「人道」のために戰へと言ふに違ひない。而してその結果は、一九一四年のそれを繰返すに過ぎないであらう。

三

然らばこの問題の解決は何處にあるか？この問題を人種的觀點から取扱つてゐる日本の多くの人々は、白人種に對抗してその權利を擁護するため、アジア民族は同盟して當る可しと主張してゐる。そしてそこに解決の道を見出してゐる。然し私は、その如き同盟は神話に過ぎず、右の如き主張を爲す者はその主張することの意味を全く解してゐないか、又は明らかに民衆に欺かんと企ててゐるものだと論斷せざるを得ない。世界歷史の發展を學んだ人々は、民族の歷史は人種に添つて進行するものでなく、實に經濟に添つて進行することをよく知つてゐる。而して日本人移民問題に關しても私は、それはやはり經濟問題であると云ふことを說明した。

アジア民族の同盟を主張する宣傳家等は、非常な健忘性に違ひない。日淸戰爭が起つた時、彼等はいつたい何處にゐ

たか？今日突然に哀れたアジア民族に深い同情を寄せるそれらの宣傳家等は、×××××××××××××××時、何處に居たか？二十一ケ條の對支要求は如何？支那人移民及び一般に朝鮮人に對する日本人の差別待遇は如何？私がこれらの事實を指摘するのは、日本の軍閥とその走狗とを攻撃するためでも無ければ、日本の軍閥とその走狗にこの罪があつて、米國及びその他の資本家にその罪がないと言ふのでもないことを諒解して欲しい。私はたゞ讀者諸君から、日本も資本主義國家に成るに從つて、他の資本主義國家がその犧牲者に向つてすると同樣なことを、×××××××××××××××××××××××。資本主義社會の發展法則は、結局世界何處に於ても同一である。支那人若くは朝鮮人が日本人と同じ人種の血を有つてゐやうとゐまいと、日本人と同じ文明の流れを汲んでゐやうとゐまいと、日本の軍閥と資本家にとつては、それは何等重大な問題では無い。軍閥は一寸でも多くの領土が欲しいのであり、資本家はその後に喰附いて、一錢でも多くの利益を儲けたいのである。その外には何も問題は無い。この資本家が突然に、日本の文明と他のアジア諸國の文明とは同系であり、アジア民族は要するに同じ血を分けた同胞であるから、「共通の敵」に向つては團結して當らなければならぬと覺るのは、彼等資本家の金嚢が、何等かの障害のために脅威された時だけである。日本と他のアジア諸民族とが「共通の敵」を向ふに廻して同盟するなどとは想像だにも及ばないが、いまかりにそのことが實現されたとしても、戰爭がすめば直ぐと同盟中の强者は弱者に向つて襲ひかゝることは明らかで、それは白人資本主義國の場合と同樣である。もし左樣なアジア同盟の主張者等が、その同盟中の弱力な國々は羊の如く從順で、日本の命令に默々として服從すると思惟するならば、そのアジア同盟の主張は、日本を盟主とせるアジア帝國主義の別名に過ぎない。もしそれが解決であるならば、それは勿論日本の侵略主義者を滿足させるには相違ないが、爾餘のアジア民族を滿足させるものではない。

かくの如く我々は、日本の宣傳者流の主張するが如きアジア民族の同盟の不可能なるは、白人種全部の同盟の不可能、世界の全民族の同盟の不可能なると同樣なりと思惟する。これについては他の實證を擧げなくとも、かの國際聯盟が既に立派な證據である。

民族の友愛的同盟の樹立は、資本主義社會が存在しなくなつた時始めて可能である。資本主義社會の存續する限り、經濟的利害のために諸民族は鬪爭し、その經濟的衝突は民族の皮膚の色が黑色であらうが黃色、白色であらうが、そんなことには關係なく、流血の戰爭を導き來るであらう。こゝに於て始めて私は、一般的に日本人移民問題、特殊的にその一部を爲す排日法案の眞の解決に到達した。私はこれまでに於て、移民問題は經濟問題であり、排日紛議は兩國間に横はる經濟鬪爭の一部に過ぎないといふことを說明した。されば資本主義社會から××××社會への、社會の構成の變化は、經濟鬪爭を絕滅するであらうし、それと共に、その鬪爭が齎らす一切の罪惡、人と人の間の不平等、國民と國民との間の不平等、恥ず可き人種間の不平等を取除くであらう。

かゝる×××ロシアに於ては、一切の不平等と非理と搾取とに抗爭した人々、その秘めたる理想のためにツアーによつて牢獄につながれ、シベリヤの荒野に苦役を課せられた人々が、今や、ツアー支配と資本家社會の一切の罪惡を除いた新ロシアの建設に努めて居り、×××××××××××新社會を建設し、資本家社會の罪惡を取除かんとする××××××してゐる。現在ロシアに百以上の異つた民族が、平和に相携へて生活して居り、鬪爭、嫌惡、非理の如き古き問題は、全く過去のものとなつてゐる。勿論今日のロシアは、資本主義的罪惡に包圍されて居り、勇敢なる戰士等の久しき理想を十分に實現し難き、多くの困難が横つてゐる。然しながらロシアは、緩漫ながら確實に、その道を進んでゐる。而してこの道によつて始めて、一般に日米問題、特別に×××××××××××されるであらう。(五月十二日)

美

石原　純

一

ゆたかに私たちを取り圍んでゐる一切の自然。私たち人間を育くみ慰めてくれる自然。私たちは詩人でなくとも、誰がそこに美を感じないものがあるでせう。色彩と形態とがあらゆる復雜な變化を示して私たちの眼に限りないよろこびを與へます。花の芳香と、鳥の聲音と、果實の美味と、そして空氣の溫暖と、何といふ豐饒な美くしさではありますまいか。私たちはまた人間のかなしい不幸に出遇ひ、爭ひと憎みとを嘆くとき、この無心な平和な自然に接觸して、何といふ暖かい愛を感ずることでせう。かくて、美と愛とを私たち人間に與へるところの自然に對して、私たちは禮讃の心をいだかずにはゐられません。

だが、私たちは人間の世界を離れて自然にのみ深く浸るとき、そこになぜか知らぬ寂しさを經驗することがないとは云はれません。有心な私たち人間に取りて、無心な自然は餘りに冷やかでもあるのです。激しい風が天空に暴れすさぶとき、怒濤をたかめて海水が押し迫るとき、その他もろ〳〵の天災地變が私たちを襲ふとき、何といふ慘ましい有様がそこに現ずることでありましやうか。私たちは自然の寂しさから免れて、人間お互の抱擁を希はずにはゐられなくなります。自然はそれでも愛のこゝろを私たちに頒たうとするのでせうか。

鳥や獸や蟲や魚や、またすべての草木は、自然に生息してその美をなすものではありますけれども、しかもそれらの

生物はお互に自らの生長繁茂をはかつて絶えざる爭ひをつゞけてゐるではありませんか。動物がその生存を營むために生きながら他の生物を食餌となすのを見ては、私たちはそこにもはや自然の美と愛とを感じないで、却つて或る慘ましさを覺えずにはゐられません。

併しながら私たちが自然の中に一つの無限なる神を想像し、自然を神の心のあらはれと解するとき、之等の現象をどう解釋したならよいのでせうか。神は私たちのあらゆる理想の窮極です。彼に於てはそれ故にまた美の窮極、愛の窮極が歸せられなければなりません。自然が若し神に屬するものであるならば、自然に於けるどんな現象も美であり愛であることが可能でありませうか。

私たちは之等の考察に際して、そこに一つの大きな矛盾に遭逢せねばならないのを感じます。固よりこの矛盾を完全に解くことは、抑も私たち有限のものに取つて餘りに大きな問題であるかも知れません。けれども絶大無限なる神を想像し、之を知つて私たちの理想の標的をそこに求めやうとする私たちは、またその神の意志であらうと思はれる處のこの自然の有樣を解釋するために、どんなにでも努めなければならなかつたでせう。私たちは之によつて幾らかでも神の世界に立ち入ることがゆるされるのです。

二

私たちが自然に於けるいろ／＼の法則を審かに研究して、深く自然の內奧に覗ひ入れば入るほど、それらの法則の全體がいかにも微妙な調和ある關係を示し、齊整なる姿をもつてゐることに、いつも驚嘆せずにはゐられません。自然は「豫定せられた調和」であるといふ言葉は、少くともかやうな法則の上では絕對のものであるのを體感することが出來ます。この意味に於ては「あるが儘の自然」はすべて調和であり美であると謂はなくてはなりません。私たちはかやうにして自然のなかに神を見ずにはゐられないのです。言ひ換へれば、神は先づかやうな法則的自然をつくつてそのなかにあらはれる過程をながめやうとしました。否この過程そのもの、即ち私たちが體驗する時間的持續そのものも、亦恐

らく一つの「豫定せられた調和」であるのでありませう。

私は先づこの神の立場に於て自然を眺めて見ませう。神は恐らく自然の過程に一々干渉するの煩ひを避けて、一たび最初の狀態と環境とを具現すると同時に、之が引續いて取るべき過程を、單に形式的な一般的な約定として與へました。この約定としての自然法則は、それ故恐らくは亦その法則の或るものによつておのづから人間の腦裏に具現する論理に合致するものであつて、私たちはそのお蔭で多くの自然法則を數學的に微分方程式として云ひ表はすことが出來るのであると思はれます。かくして現象の具體的過程は最初の狀態並びに環境に依存すべき微分方程式の一つの積分によつて與へられるのです。そして神が自然の最初の狀態と環境とを確定する限り、自然はその法則の必然的歸結として永劫にその豫定せられた途を歩んだことでせう。この無限の過程の間には、法則によつて可能であるところのあらゆる變化とあらゆる狀態とが、恐らくいつか一度はあらはれたかも知れません。たゞそれは必然なるものゝ結果として、必然なる順序に於てのみ實現せられるのです。

ところが神はかやうな必然のみを私たちの前に示すことに於て自然の過程を終始せしめはしませんでした。神は恐らくその無限に深い心から、その法則によつて出現した生物の或るものに適當なる發達過程の後におのづから意志現象をあらはし得る能力を具備せしめることをも、豫め法則のなかに豫定しておきました。自然のなかに生存をゆるされた人間に、彼れ自らの自由意志をもつて自然にはたらきかけることの可能であると云ふ意識が存在するのは、即ちこの結果に外ならなかつたのでせう。かやうにして少くとも人間に取つて自然は單なる必然ではないのです。即ち神が最初に與へた自然の具體的過程を、私たち人間は或る程度まで變更することがゆるされるのです。固よりそれは神に即する必然な自然法則（微分方程式）そのものではありませんが、之が具體的にあらはれやうとする場合の環境（積分條件）を變へるのに過ぎません。之が人間に委ねられた創造作用の限界であつて、人間はこのなかに於てのみ自然にはたらきかけることが出來るのです。そして自然はこの人間の創造作用によつて適宜にその必然なる過程を變更せられます。

もと人間は自然の環境がその生存に適する狀態に到達して始めて生れたものでもありませう。この狀態に於て自然は

即ち人間の生存と相調和してゐるのです。しかも人間は彼にゆるされた意志によつて自分の存在する自然の環境を倘ほ一層彼の生存に適切なるやうに展開させてゆかうと努めます。人間の感情に於て見出される美の根原は、かやうにして到達せる一つの自然的調和に存しなければならないと私は思ひます。

三

私は今日の美學や哲學に於て、抑も何が美であるかと云ふ根本問題に對して何の具體的解答をも滿足に與へられないことを甚だ遺感に思ひます。

美學者等が美の感情を快の感情と差別するのは固よりその當然なる處をなしてゐるに過ぎません。美は對象の本來の性質ではないとして、美的對象を論ずる代りに、抑も藝術のアプリオリを考察し、依つて之を純粹意識のアプリオリに歸し、純なる感情を純なる意識として、すべて之等を藝術的であり、美であるとするのは、美の本質を求める一つの徹底的な道であるかも知れません（西田幾太郎博士著「藝術と道德」參照）。

之によつて私たちは一切のものを美となし、一切の感情をも藝術的對象と見ることが出來ます。「線の配合美など云ふことも線が一々生きた作用として立ち、直接に相結合することによつて美感を生ずるのである。」「喜も悲もそれぞれの美を具へざるはない。」私たちは實際斯樣にして始めて藝術がその對象として現實世界のすべてを包容することを解することが出來るのでもあつたでせう。ですが私たちにはそこにまで或る根本的な疑問を殘されてゐるやうに感ぜられます。彼等は美を餘りに廣く餘りに普ねくし過ぎてはゐないであらうか。私たちは美をいつも不美と分たうとしてゐるのです。藝術的なるものを非藝術的なるものと差別しやうとしてゐるのです。どこに純なる感情に對する不純なるものを求むべきでありませうか。感情がそれ自身に於て不純であるとは、果して何を意味するのでありませうか。此の問題が十分に解かれない限り、上に掲げた美の本質は遂に空疎なものとなり終るでせう。

私は玆に上に引用した西田博士の著者のなかから、この解答を拔きませう。

「恰も我々の空間的表象が空間のアプリオリによつて成立する如く、作用と作用との結合たる藝術的意識のアプリオリによつて我々の感情が成立するのであると云つてよい。快不快とは前にも云つた如く感情を反省して相反せる二種の性質に分類するに過ぎない。併しそれでは非藝術的なる感情といふものはないか。不純なる感情とはいかなるものであるか。快不快といふのは單なる名目ではなく、かゝる感情のあることを否定することはできぬとも云ひ得るでもあらう。併し私は自己の利害を中心とする快不快の感情といふ如きものは、純なる感情の立場のなかに他の立場の混入することによつて生ずる混合物であらうと思ふ。……我々の純なる感情が意志の立場より混亂せられた時、感情はそれ自身の純なる內容を失つて無內容なる不快の感情となる。即ち感情が他律的となるのである。」

「例へば貪欲といふことは非藝術的な感情である。併し守錢奴は藝術の對象となすことができる。此場合に於ては貪欲といふものが純なる作用として見られるのである。純なる一つの人間性として見られるのである。その知的內容が一々作用として直に結合し居るのである。之を構成する知的內容が作用の中に含まれてゐるのである。之に反し此情緒が非藝術的なる欲望となる時、此感情はもはや純なる作用として見られるのではなく、知識の對象界に移されて他の立場から見らるゝのである。即ち意志の內容となるのである。」

「斯く感情の動的內容が欲求に移されたる時、感情は無內容なる快不快と考へられるのである。不純なる非藝術的感情と考へられるものは、盡く眞の感情の形が歪められて欲求の形を成すものである。內慾的感情が非藝術的と考へられるのは、それが最も欲求の形に轉じ易きが故である。」

私は之等の深い考察が感情の純不純を決定し、藝術的なるものと然うでないものとを分つてゐるのを見ますけれども、そこにはまた私は多くの新たな疑問を挾まずにゐられないものがあります。純なる感情の對象として、あらゆる自然は美的對象であることが出來るのでせうか。一人の純粹に藝術的なる人間によつて眺められるとき、その純なる感情の對象としてあらゆる他の人間の感情動作はまた美的對象となることが出來るでせうか。私たちはたとへば俗惡なる色の配合を感じ、醜怪なる形態のあらはれをも感ずることは事實です。そのときでも私たちは「色が色自身を區別す

る純なる作用として絶對意志の立場、人格的立場に於て直接に相結合する時、即ち我々が純粹視覺の立場に立つ時、色は忽ち生命を得、それ自身に於て生きたる色となる、即ち藝術的對象となるのである」と云ふ理想的な立場をとらなくてはならないのでせうか。俗惡、醜怪を感ぜしめる所以はどこに在るのでせうか。又自然若くは人間に於ける殺害、憎惡は果して貪欲、隘吝の如き心と共に非藝術的と見てはならないのでせうか。少くとも私たちはこれらに美を感ずることは困難です。でも貪欲を純なる一つの人間性と見る如く、憎惡をも然う見ることが出來るでせうか。尙ほまた人間の生存欲求は欲求の一つの形として常に非藝術的感情を生むでありませうか。肉慾的感情が肉の滿足を得んとする欲求に轉じ易いと同樣に、病者が切々として自らの不幸を嘆く心はそれ自身に病苦の解除を得んとする欲求を含み、若くは他の健康者を羨むといふ羨望に轉じ易いわけです。欲求に轉じ易いことをもつて云ふならば、自らを犧牲にして殉職するのも他を救はんがためであり、藝術家が制作に腐心するのも、よき藝術創造の欲求あるがためであり、神に禮拜奉仕するのも亦靈に生くることを求めるからでありませう。人間として何等かの欲求なしに生きない限り、欲求を混入しない純なる感情といふものを、果して實際にもつことが出來るでせうか。この意味に於ける純なる感情とは遂に一つの抽象せられた非實在的のものでなくして何でせう。

私はかやうな一切の疑問をこの立場のもとにどう解釋すべきかを知りません。それは恐らくは私の考察の尙ほ到らない故でもありませうか。私は「作用と作用との直接の結合たる純粹感情、純粹意識」の實在を形而上學的に假定することに對しても或る躊躇を感じます。實在的には常に何等かの意志と結合してあらはれるであらうと思はれる之等の純粹感情は何等かの理想の窮極としてのみ見出さるべきものではないでせうか。私はこゝに於て美を一つの理想として求むるに當つて全く異つた一つの立場を取らなくてはならないのを感じます。

四

美を純粹に對象の性質のなかに求めやうとすることが誤まつてゐるのは云ふまでもありますまい。併しそれ故に私

たちが對象を離れて、美の感情をひとり表象の內容にのみ見出さうとすることは果して正當でありませうか。若くは西田博士の如く、美的內容をもつ直觀を作用と作用との直接の內面的結合としてのみ解し得るでありませうか。私はそこに尙ほ作用と、そして作用せられるものとしての對象との間に何等かの關係が滿足せられなくてはならないことを信ずるものです。知的作用に於ては私たちは之をすべての對象にはたらきかけることが出來ます。併しながら美的感情を結果すべき作用、若くは作用の結合はその對象との間に何等かの關係を滿足しなくてはなりません。之が滿足せられると否とによつて、そこに始めて美と不美とを分つことが在り得るのです。私はこの關係を自我の作用を惹起し得べき自我の內在的本質と對象との或る調和に求めなければならないのを思ふのです。

私は先づ自然の美について考へませう。最も容易な問として私は即ち斯う尋ねませう。私たちが美の感情を起し得るやうな自然はどんなものであらうかと。私は之を次のやうに解するより外に恐らく途がないと思ひます。私たち人間が最も安らかに自然的に生存し得るやうな自然の環境は即ち私たちに取つて最高の美を感ぜしめ得るやうなものなのです。心を自然的に生き生きとはたらかせ得る處に感情の眞があり純なるものが生れなければなりません。この平安な純眞な感情こそ美的なるものであり、そして之を刺戟し得る自然は美でなければなりません。私たちが平生見てゐる處の平和な安らかな自然はこの故に美であるのです。言葉を換へて云へばこの樣な自然は私たち人間の生存に對して調和をもつてゐるのです。この調和こそ美の感情の根原となるのであると私は思ひます。

若し人間が無限の生存力をもつてゐるものであつたなら、あらゆる自然は即ち無條件に美であり、神によつて「豫定せられた調和」は即ち私たち人間に取つても亦その儘調和であり得たことでせう。併しながら人間の生存は自然のなかの極めて狹小な狀態範圍に於てのみ保證せられてゐるのです。それですから自然が人間の生存を脅かすやうな狀態になるときは、之に對する恐怖の感情が美の感情を蔽ひ隱してしまふのでありませう。悽慘なる死の境地に面しては人間にはもはや美を感ずる餘裕は失はれて、生存本能のみがはたらくやうになるのです。こゝに人間に取つての調和の限界と美の限界とが依存しなければなりません。

人間の生存と自然との調和が何故美の感情を由來するかと云ふ問題に對しては、私は自我のなかに存在してその一切の作用を起すところの內在的本質が自己の生命存續に對してどんな關係をもつてゐるか、又そこに起される生存欲求が一切の外界の對象に接してどんな心理的影響をもつであらうかについて審らかな考察を要するでもありませう。こゝに從來の哲學及心理學が踏み入らなかつた、生理學的研究の最も深い知識を必要とする一つの領域が存在することを私は思つてゐます。

自然に於ける多くの生物の間に强食弱肉の事實が存在するのを見て、私たちが之に美を感ずることが出來ずに、却つて慘酷な感情や、厭惡の感情を起すのは、生命殺害の事實から連想によつて自己の生命への脅威を之に對比して考へるからです。又一方に、音の調和や色の適當なる配合や線及び形の對稱などが美を感ぜしめるのは、之等によつて起される聽覺、及び視覺器官が生理學的に神經中樞に傳達する刺戟と自我の內在的本質との或る密接な關係に依らなければならないと思ます。之に反し噪音や、雜多な色彩模樣や、雜然とした塵埃などに對し、又有害物などに對しておのづから不美を感ずることも同樣の理由に歸せられるでせう。

以上說くところの美の感情は快の感情に伴ふところのものであつて、私たちは最も原始的には之等相一致するものであることを肯定しなければならないと思ひます。

自然に於ける變化の可能性は物理學的に多くは或ポテンシアルなる量であらはされることを私たちは知つてゐます。ポテンシアルが或る値の範圍に限られるときに、變化の現象は同時に制限せられます。恐ろしい暴風が起つて悽慘なる光景を現じ、大落雷によつて地上の物を裂くといふやうなことは、流體力學的又は電氣的ポテンシアルが餘りに大きな値をもつからです。ポテンシアルが或る制限を超えると云ふことが人間生存に適する自然環境の調和をうち破るに至るのです。恐らくは自然と各の內在的本質との調和の關係は、たとへ極めて複雜ではあり、又他方に於て或る程度まで主觀的要素を含んではゐますが、併し何等かの函數的關係によつて相互の調和狀態を示すべきポテンシアルの如き量が存在するかも知れません。そしてその量の或る範圍を制限する調和の限界が與へられるでもありませう。

併しこの調和の限界のなかに於ては、私たちは自然の美に對する判斷を單に原始的に私たち人間の生存の事實と關聯せしめやうとはしないで、即ち自然と自我の內在的本質との調和のみに求めないで、より高級な自然そのものゝ調和、即ち神によつて「豫定せられた調和」へ近づけやうと努めます。こゝに美の理想を生じ、自然の眞の姿をその極致と見做す所以が存するのであると私は思ひます。自然に對する美の感情が單なる快の感情と分れるところも亦こゝに在るのではありますまいか。

自然と自我の內在的本質との交渉は最も直接には感覺を通じてなされなければなりません。快の感情は單にこの感覺によつて促がされるものであり、從つて原始的本能的であつて、永遠につながる理想と云ふやうなものをそこに見出すことは出來ません。之に反して美は感覺によつて自我がその內在的本質に持ち來せる自然の寫像を反省して、更に認識對象界に移しそのなかに存するあらゆる調和を江めることによつて引き出された感情です。それ故に美は無限に複雜なる自然のなかに永遠に求めて盡きないものとなるのです。從つて亦單に受働的ではなくて、却つて能働的であり、調和を求め見出すことに於て意志の作用を含み、一つの創造ともなるのであると私は思ひます。

(附記。私は私の最も尊敬する西田博士に於て妄りにその著書の語句をこゝに引用して論議を試みやうとしたことに對して寛厚なる宥恕を願はねばなりません。私は哲學史に通ずる哲學々徒でない點に於て、單に自分の獨斷的思索の一部をこゝに記した迄です。併し私は更に之に次いで、自然を對象とする藝術について、並びに最も主要な問題として感情、行爲等を對象とする美的判斷及び藝術創造について論ずるつもりです。その上で之等の論に對し私に教へられる處あらんことを望んで止みません。なぜならかやうな問題は單に私一人の疑問に終らないことを信ずるからです。)

廚川白村著

◇◇出版界の新覇王

苦悶の象徴

四六版天金
表紙羽二重
震災後唯一の美本

定價壹圓八拾錢
送料拾七錢

白村の眞の魂を求めんと欲する者、苦悶の藝術に人生の生命力を見出さんと欲するものは共に本書に就け。藝術の聖地に一日を陶醉せんと欲する者は本書に就け。不世出の名文、稀世の情熱、我之を本書に見る。人本書を讀んで人間にかゝる清境あるかを始めて發見せん。藝術は人生の聖地、人我に聖地あるを知らざれば恥之より大なるはなし。恥を覺ゆる文化人は必ず本書に就く

近代の戀愛觀

113版

定價貳圓五拾錢
送料拾七錢

人間の燃ゆるが如き情熱、感激、憧憬、欲望の白熱化した結晶とも見るべき戀愛には悠久永遠の生命力が到くと斷じ更に戀愛は人間の最高善であり、人生の最高理想だと高く評價して因襲的結婚、非戀愛的生活に一大痛棒を喰はす。本書を味到し得る者のみが新戀愛の勝利者たり得る。

發行所 東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

東洋人聯盟批判

東洋人聯盟の必要なし

安部磯雄

國家が國土の所有權を嚴守し個人が土地の私有權を主張して居る今日に於て私共は何としても排日問題のために米國の所置を憤慨する譯にはゆかない。土地は當然人類の共有財産であるべき筈なのに、これが私有を許すことゝなれば、土地を所有しないものが土地所有者のために屢々排斥されるのは已むを得ないことである。東京市の土地所有者は僅に二萬三千人と稱せられて居る。然らば二百萬以上の東京市民は尺寸の土地をも所有して居ない一種の浮浪人である。若し地主から立退きを命ぜらるれば、彼等はこれを拒むことの出來ぬ運命に在る。彼等が僅に其不幸を免れて居るのは高き地代を拂ふて居るがためではないか。現に上野や日比谷にバラック生活をして居る者は地主から排斥された不幸者の標本である。四疊半の部屋に七八人も群居して居る貧民窟の人々は今少し廣い住居を要求して居るに相違ない。然し數千乃至數萬坪の邸宅地を有する貴族富豪は決して彼等のために其一部をも公開することを好まないのである。斯の如くして米國に於ける排日問題以上の排同胞問題が毎日我東京に起つて居るのである。

土地公有論者の見地から米國の處置を非難することは當然であるけれども土地私有制度の是認者が米國を罵詈讒謗することは全く論理に合はない。若し支那の勞働者が群をなして我國に渡來すると假定したならば、我國民は果して如何なる態度を取るであらうか。結局米人が爲したと同じく支那勞働者排斥案が

議會に提出されるであらうと信ずる。現に數日前我政府は東京市から約百七十人の支那行商に退去を命じたではないか。

排日問題は不快なる問題である。然し私共が躍起となつて米國を攻擊すれば、私共も亦同一論理で攻擊されるといふ矛盾に陷ることになる。土地を貸すも貸さぬも地主の自由であるのみならず、これを甲に貸して乙に貸さぬといふことも彼の勝手である。借地人が異議を申立てゝることが出來ないと同じく、私共は米國に對して抗議するだけの論據を有しない。

排日問題の實質が前記の通りであるから、東洋人聯盟を唱へるが如きは思はざるの甚しきものである。寧ろ現在の問題としては各國何れも其繩張りを犯さぬといふことを原則として、將來の問題としては各國先づ國內に於ける土地私有制度を××進んでは如何にして全地球を全人類の××××××べきかといふことを研究して見たいと思ふ。

理想破綻後の必然的現象

小川未明

人間は、感情的になり易い場合も、平常は理性の力によつて撓めて來てゐる。こゝにのみ、平和があり、理解が存在する。

ワシントン會議は、そのために開かれたのだ。各國が、自國の事情を差措いても、その會議に列し、暴力を否定し、理性によつて、今後の國際關係を持續せんど試みたのも彼の歐洲大戰の慘禍を何人も痛切に感じた際であつたからである。

若し、一度び、人間が、本來の人間性を失ひ、この約束が破られ、自他交換の信念が破壞せられることがあつたら、二たび世界は、各自感情を露骨にし、利我的主張に向つて突進するを憚らない。

より親しい者同志、搾取せられたる者同志、劣等視せられたる者同志、虐げられたる者同志は一境遇に於ける反抗と同情が結合して、彼等の敵に當ることは、至當であり、また怪しむに足らないことだ。

たゞ、これがために、幾多の犧牲を生じ、血を以て血を洗ふ結果になればこそ、またそれを豫じめ知ればこそ、人種的偏見

を排し人類平等の正義觀に立脚して、理性的に國際關係を解決したと欲してゐるのである、

東洋人は、慈悲の觀念に於て、その正直さに於て、白色人種に優りこそすれ、決して劣るものでない。しかるに、彼等が、野蠻扱ひするのは、人類に對する汚辱だ、

人種的對峙が、將來第二の世界大戰爭の誘因たらんことは分りきつてゐる。そして、理性の裁斷のみが、世界平和の基礎であることも分りきつてゐる。しかし、現在の價値がどれ程のものであるか、それによつて、畢竟、趣くやうにしかならないことも分つてゐる。

米國だけにも、幾千萬人のクリスト教信者がゐやう。また、眞理を愛する輩がゐやう。これを全世界にしたら、夥しい類でなければならぬ。その輩の力を以てしても、米國の不正義を、惡用されたる資本主義を、暴力を未然に防ぐことができないとしたら、何者か、また、虐げられたる者は、虐げられたる者同志で、自分達の正當な防衛のために、結合することをいけないと言ふことができやう。この點は、階級鬪爭も國際關係も同じだ。まだ、この稿を書くまでに、排日案のはつきりとした成行が分らなかつた。理想が勝つか暴力が勝つか、私は、これによつて、現在の價値といふものがきまるやうに思つた。また、この價値によつて、いかやうに世界が動くとも、思ふに、宿命的で、どうすることもできない。

東洋人聯盟の目標

アールビー・ボース

日米問題が惡化して來たので、東洋人聯盟が提唱され始めたと云ふが、是は日米問題の如何に拘らず既に存在するものである。併し活眼の士のみ之を識り得たのであつて日、支、印の識者中には屢々之を指摘した者がある。東洋の各國民が其の利害關係、文化、傳統、風俗、習慣等に於て、各々共通する處あるは、蓋し本聯盟の基礎である。然らば何故本聯盟は最近日米問題が惡化するに及びて俄に聲を大にして叫ばれるのであるか。其は斯の正義、人道、平等に於て有名な合衆國が、排日案を通

過せしめたと云ふ事は明かに「日本、汝も亦有色人種卽劣等人種なり。」と喝破したと同樣であるからである。

日本は眞の意味に於てカイロ以來唯一の有色人種の獨立國である。然るに日本は過去に於て專ら其の敎育に、政治に、或は社會生活に、歐米化せん事を努めた、其の結果は、有色友邦を失望せしめたのみならず、屢々其の信頼に違背する行動があつた。併し日本の立場より之を見る時は、斯く黃色い顏色を白く糊塗するに非ざれば、日本は或る種の政治家が金科玉條とする「五大國の一」に列する事が出來なかつたのである。卽ち日本は配合の悪い洋裝を爲す事を以て白人と同一に待遇され樣としたのである。然らば果して白人は日本に白人並の待遇を與へたか否や。其れに就いては吾人が、喋々する迄もなく、今度の排日問題が明答して居る。

今や日本國民は翻然として白人崇拜の惡夢より目覺め自己の中に白人より、より尊い或るものゝ存在する事を自覺した。今日の東洋人聯盟の聲は自覺者の叫びである。東洋人聯盟は將に具體化せんとしつゝある。

此の東洋人聯盟は次に述ぶる政治的、敎化的の二方面に於て必要缺くべからざるものである。元來歐米人が優等なりと自負するの心理は、最近一世紀間の歴史と物質科學文明の優越に其の基礎を有する。併し最近世史を以て其れ以前の歴史を無視し物質文明の優劣のみを以て直ちに人種の優劣を定むるは果して正當であるや否や。諸君よ、徒らに白人に向つて正義を叫ぶ勿れ、平等を求むる勿れ。蓋し歐米人は未だ嘗つて眞の精神文明の光りに浴したる事なく、否少くとも精神文明を創造するの能力なく、一度自己の利益に反するものは正義を正義とせず、眞理を眞理とせず、吾人が、右の頰を打たしめるならば左の頰は勿論生命をも奪はんとする國民である。是は歴史が明かに吾人に示す所の事實である。然らば今日、正に地球の表面より掃蕩されんとする正義人道を如何にするか。是實に吾々東洋人の「力」に俟たねばならぬ。卽ち、東洋人の政治的、經濟的、軍事的勢力が、白人の勢力に對抗し得るに到る時、否白人の勢力に優る時、正義と眞理は自ら其の影を全世界に投ずるであらう。玆に於て初めて國際平和は持ち來たされるのである。而して此の勢力は全く東洋人聯盟に其の基礎を置くものである。

併し吾人が東洋人聯盟を提唱力說する所以のものは單に白人に對抗する爲めのみに非ずして更に進んでは白人を敎化し以て白人を新たなる正義人に鑄直さんが爲めである。蓋し東洋人が其の精神に於て、又道德に於て優秀である事は歴史の示す事實にして、己れを完全にし以て他を敎化するは人類の使命にして

且つ東洋人の使命である。東洋人聯盟は實に此の使命遂行の手段である。我が世界的偉人西郷南洲は其の詩の一節に於てよく此の東洋人の使命を喝破して居る。「月は東洋より西洋を照す。」と。

不可能な幻想

平林初之輔

米國の排日法案が正義の觀念に合致してゐないことは言ふまでもない。けれども、東洋の弱小國に對してかつて×××よつて行動しなかつた日本が、アメリカだけに××を求めるのは理屈にあはない。西洋諸國のお先棒になつたり、或は單獨にこつそりと××××××ぬいてきたのは日本である。滿州からロシアの帝國主義を驅逐してその×××××××んだのは日本である。山東から獨逸の勢力を掃蕩してその××××××たのは日本である。二十一箇條の要求を支那に强制したのは日本である。シベリア出兵の先陣と殿軍を仰せつかつたのは日本である。

そうして、今度は少しばかり日本に勝手の惡い米國から力づくで拳つくをくつたといふて、東洋人聯盟を提唱するが如きは、私は一箇の日本人として、あまりに虫のよい卑怯な話だと思ふ。

今日の外交關係を支配してゐるものは、依然として暴力である。米國が日本に無理を强制するのは、日本が××××××對したと同じく、米國の實力が日本に優つてゐるからである。米國は經濟的に日本の死命を制してゐる。米國が日本に負ふものは、生糸や茶のやうな、なくもがなの贅澤品である。日本が米國に負ふものは、鐵、綿花、石油、機械の如き日本の產業の根幹を形成してゐる物資である。そこに米國の强味がある。この經濟關係が一變しない限り、霞ケ關の對米外交は腰が强くなることは出來ぬ。戰爭さへすれば儲かる高級將校と支那浪人と、何にも知らぬ豪傑連との頭にのみ「東洋人聯盟」といふやうな不可能な幻想がつくられるのである。

眞の平和を希望する吾々國民は、かくの如く煽動的言説に迷ふてはならぬ。さうして太平洋を挾んで對峙する二つの帝國主義國家の將來の爲めに、極力來らんとする慘劇を防止しなければならぬ。

聯盟に就ての二つの母體

秋田雨雀

東洋（或は亞細亞）聯盟の思想は二つの母體から生れてゐることを注意しなければならない。一つは哲學的な自由正義の觀念で、一つは西洋國家主義に對する東洋國家主義の衝突である。もし東洋聯盟の思想が前者から來てゐるものであるならば、人類解放運動の一つとして慶賀すべきであるが、もし後者であるならば、この運動は東洋人自身を益々不幸なものにするばかりでなく人類全體を新しい爭鬪の世界に導くものである。もし日本人が自己の國家主義を捨てずに武力的盟主たらんとする如き野心をもつて、この思想を主張するならば、これやがて日本民族の自滅を早めるものであらう。

血は水よりも濃い

千葉龜雄

一九二四年のアメリカ兩院の排日案可決が、後世の歷史から見て、一九二四年以後の、世界二大民族大鬪爭史のために、サライヴオの一撃の役目をつとめたもので無かつたと誰が斷言され得やう。

排日問題が、日本とアメリカと、どちらに一番重大に考へられて居るかとならば、それは明らかに、アメリカにおいてより重大に考へられて居る。アメリカにとつては、それが何萬から何百に縮少する、日本の移民を歡迎するか、拒絕するかの當面の問題ではない。また簡單な、人種憎惡感にのみ萌すものでは無い。根據がもつと重大な、また根深いところにある、卽ち有

色種族の白人地帯侵入は、その勤勉と執着力と無限數によつて白人の土地と富とを壓倒し、白人が劣等種族と思惟する人種の混血によつて、白人種の優越と考へるものを、善種的に頽廢させる。――こゝにおいて有色人一切の白色地帯移住は、直ちに世界人類の三分の一を占める五億五千萬の白人の文明を脅威し、危險に陥しゐれるものだと彼等に考へられて居た。この危懼は、單に米人ばかりではない。廣く歐洲人が古くから根本的に持つ潜在意識であつた。まさに白色文明の重大危機である。アメリカ今回の排日案は、たゞこの思想の一片を閃めかした挑戰に過ぎぬ。理非にかゝわらず、根據が恐ろしく根深い。

處がこの危懼が、更に二重の事實によつて彼等に影を深めて來た。一つは世界大戰による、白人結合の楔子がゆるんで來たことである。そしてこの一部の衰微である。他の一つは、有色種族の白人反抗の主潮が、大戰以來恐ろしい勢をもつて勃興し、或は事實において、民族自決の權力さへ握り得たことである。白人の優越と有色人の落伍が、前世界の白人の專制を來した。さらばこの新らしい白人の衰頽と、有色人の勃興が、この形勢をどう逆轉するものか。白人たるものが、有らゆる手段をもつて、有色人ののしかゝる勢力を、最少限にでも防ぎとめやうとすることは、世界の富と土地が、誰のものでもないといふ公理のわからない、彼等從來の心理としては無理もなからう。

けれども彼等の生存競爭に採り上げた敵意が、陽わになる程度と比例して、今までもうろうであつた有色種類の自覺と結合を、極めて明確にさして行くといふ、恐ろしく皮肉な作用を見遁していかない。血は水よりも濃い。諺にも親類は泣きよりである。また親類は幸福を生む。空地に落され、生存を奪はれた人間ほど、團結力の固いものは無いのである。十一億五千萬の有色人は、劣等種類として長く白人に虐使された過去を忘れるものでは無い。その後新しい文明に培かわれた彼等が、更にこの陽わな敵意に當面した。殊に五億強の東洋民族が、この場合大同的に結合して、互に自國の文明の創造に努力すると共に、自國の無限な富源と不毛の地を開拓し、自國自給の途を採る結果、もう一片の土地にも、白人の搾取と侵入を許さないといふ時代が、遲く早く來ないとはもう斷言されない。事實が可能性を餘儀なくせしめる。それは東洋人にとつて思ひかけぬ幸福でもあり、極めて自然でもある。たゞ、二大民族が永久の敵意が好もしくないのだが、しかし、白人がいつまでもその心理を採る限り、其の敵意を挑戰したものが、白人の自我慾にあるのだからどうともし得ない。

そこでこの場合、これまで無用に振りまわした、國民的優越感や、不平等觀念の非理を、ことに同色民族の前に悔悟せねばならぬものは、アメリカでなくて、日本でなければならない。

かなり冒險？

生田長江

西洋文明が商業主義、資本主義社會組織と共に、いよいよのどんづまりへ近づいてゐるといふこと、從つて世界を今一度東洋化するのが全人類の生命を新にする唯一の道であるといふこと、斯うした月覺にまでどれだけか東洋人を導いてくれる限りに於て、所謂東洋人聯盟の如きものにも多少の意義はありさうです。

可能であるか不可能であるかは、むしろどの程度まで可能であるかの問題として考へるべきでせうが、かりに餘程のところまで物になつたとしても、東洋人聯盟が直に國際平和特に對米問題解決に貢獻するものとは考へられません。寧ろかなりは冒險に過ぎないと見るべきでせう。

序ながら、日米兩國が今日の如き模範的資本主義國家である間は、所謂日米問題の根本的解決はまづ〳〵見込みのないのを覺悟をすべきです。或は、日米問題の極端なる惡化（今日に十倍し百倍する）は、少くとも日本の××××に非常なる變革を來す根本動機となるかも知れないことを思ふべきです。

佛蘭西監獄及法廷の大杉榮

林倭衛

一

二月十三日、この日大杉はフランス船のアンドレ・ルボンに乘つて馬耳塞港に着いた、と、彼はその手記『入獄から追放まで』に書いてゐる。

僕は前年の十二月中旬、巴里を立つて、その時マルセーユに近いエスタツクと云ふ、海邊の小さな町に居た。エスタツクは、昔、老セザンヌが徴兵忌避か何にかで、そこに永く隱れ、多くの創作をした處として、ヱカキ仲間では可成り知名な土地だ。

いつも十月末か十一月初めには、暗鬱で、厳しい冬が巴里の空を覆つて了ふ。その頃になると、誰れしも明るい南方の空が戀しくなる。そしてぽつぽつ畫家が南の方へ旅立つのだ。僕もその冬は南フランスに行く積りだつた。永い間、と云つても一年餘りだが、ヨーロッパに着いて以來、仕事の繪を描く事はそつち除けにして、獨逸とフランスの間を、當てもなく往復してゐた。それがまた持前の酒を飲むことによつて、何時果てるともなく永引いてゆくのだつた。懶惰、亂行、退屈で身を持て餘してゐた。而も中々抜けられない狀態に陷つてゐた。

軈て時機が來た。僕は友人のMを誘つて、僕にとつてもう堪へ難い懊惱の巷であつた巴里を恰得として去つた。

最初マルセーユに宿をとつて、その邊を物色して歩るいた後ち エスタツクを見つけた。エスタツクを見つけた僕たちは、尤

分滿足して、そこへ荷物を運んで行つた。偶然泊ることになつた宿も氣に入つた。宿は古い城跡で、海から一條の往來をへだて、丘の中腹までが擴く劃られてそこの庭になつてゐた。森々とした松林の中を幾條かの小徑が紆行り、笹籔の簇があり、滾々と湧き出てゐる泉水の傍らには紫の菖蒲が咲き、ピンクの小さな花をつけた薔薇が咲いたり、枝を張つたプラターヌの並木に覆はれた平地があつたりした。宿は海を一望に眺められる高い處に建てられてゐた。陽あたりのいゝ室の窓からは、一面に、地中海の濃い碧色の海がひろがり、灰紫色に映いた美しいエスタック半島が、長々と、窓枠に沿ふて遙か海の中へ突出してゐた。宿の者たちにも心ろ置きなく、晴ればれしい日が送れそうだつた。永い間だ鬱積してゐた蟠りが悉つかり拂い落せたかのやうに、一時に描きたい欲望が頭を擡げて來た。

Mは僕より先にフランスに來てゐたが、巴里を離れたことがなく、これが初旅だつた。そして中々繪の纒らない質で、と云ふより纒めようと、描ろうとしない故か、未だ是れと云ふ繪は出來てゐなかつた。その點で二人は共通だつた。で今度こそ描いてみやうと意氣込んでゐた。

二人は眞氣になつて勉強を始めた。さすがに、南方とは云ひ乍ら、冬の陽は短く、描く時間は如何に切詰ても日に六時間以上は得られなかつた。太陽のあるうちに、春のやうに暖く、樂樂と仕事が出來た。またよく霽れた日が續いた。たゞひとつ惱まされたのは、冬の南フランス特有の北風(ミストラル)だつた。北風(ミストル)が吹き始めると、二日も永い時は三日にも亙つて吹きつのる。その猛烈なこと、海は波の煽吹で濛々と白く煙つてしまい、木の幹も梢も吹きつけられて唸つてゐる。こんな日にも僕達は凝つと室に引込んで居られないで出掛けて行つた、が、畫架も畫布も吹き飛ばされてかへつて來た。それ程無暗と描きたい氣に驅られてゐた。まるで二人は競爭の形ちで、飯を喰ふ時間も惜いと云ふやうに、繪具箱や畫布を擁へて室を飛び出すやうにしてゐた。何んで斯う焦慮つたものか。

こんな狀態がせめて三月も續いて吳れたら、どうやら繪も描けて、畫債の重荷を下ろす事が出來たろうに。一と月餘りの後ち、僕は畫間の過勞と、永い夜の退屈しのぎに、暖爐に薪を焚き乍ら飲む安葡萄酒やビールの故か、身體が妙に疲れたり、神經が弱つたやうな狀態に陷つた。そのうへ二人とも日本からの金が着かなくて、宿の方へも借りが出來たりして、やうやくエスタックに厭氣が差しかけて來た。

そこへこれも畫家の前田嘉三郎が、この近くを旅してゐたと云つて、飄然としてやつて來た。それを機會に僕は繪を描く事

など止めて了い、前田やMを相手に朝から宿の酒を飲んでぶらぶらとしてゐた。前田も酒が好きだつた。彼はよく家で飲むのは不味いから、下のカフヱへ行かうと云ひ張つた。その頃はもうそんな餘裕がなかつたので、まあ家で我慢しろと云つては相變らず薪を焚き乍ら、香いの鼻についた葡萄酒を飲んで雜談に日を過してゐた。四五日すると彼は突然アンチーヴに歸へると云ひ出した。(アンチーヴは伊太利寄りのニースに近い海岸の避寒地だ)そこは彼の今度の旅行に出て來た出發地になつてゐた。彼はそこで既に二た月も繪を描いて暮らし、荷物などもその儘に置いてあつた。そこへ是非今日にも歸つて行きたいと云ふので、皆なの持合せを寄せて見たが、僅か急行で六時間位で行けるところではあつたが三等の切符を買ふにすら少し足らなかつた。恰度その日の夕方巴里の井澤弘から明朝十時マルセーユに着くと電報が來た。これは豫じめ分つてゐたのだが、彼の來かたの遲いのを僕はもどかしがつてゐたのだつた。井澤の電報を見ると元氣づいて、その夜は前田とMと三人で海岸に列んでゐるカフヱに行つて醉ふまで酒を呑んだ。それが二月十二日だ。

翌朝早く僕は宿へ斷りもなく出て、前田とマルセーユ行の電車に乘つた。電車はマルセイユ市街に這入るまで、ずつと海に沿ふて、斷崖の下を走つていつた。今から思ふと、その時は何にも知らないからだが、確かにアンドレ・ルボンだらう、巨船がほゞ電車と並行してそれよりは速く、マルセーユ港に入つたのを憶へてゐる。

馬耳塞驛のプラツト、ホームで、車窓から首を出してゐた井澤を見つけた時、これで助つたと云ふ氣がした。井澤は大阪毎日記者の鴨居と同行だつた。彼等はこれから伊太利の旅に出掛ける途中だつたが、僕のところへ寄つて二三日休養して行きたいと、マルセイユに下車したのだ。

驛前のカフヱに入つて僕は早速コニヤツクを注文し、他の者はそこで朝飯かはりのカフヱなどを飲んだ。僕は久振りに井澤に逢ひ、この場合稍々氣も大きくなつたので、いゝ氣持でコニヤツクの杯を重ねた。

『これから君のホテルに行つて二三日泊るがいゝだらうな』と更めて井澤が云ひ出した。無論僕も始めはその積りでゐたんだが、

『いや、鳥渡待つてくれ、實は宿の方が面白くないんだ、君には旺んにヱスタツクを褒めてやつたが、今ぢやアつくづく厭氣がさしちやつて、金さへあれば逃げ出さうと思つてゐたところ

だ。それに一寸借金にもなつてゐるんだ。』

『借金の方さへ拂つてやつたらいゝだらう』

『無論、それやいゝんだ。が何にしろもうあそこへ歸へるのが厭やなんだから、君達を引つぱつてゆく氣がしない。どうだ何處か同じマルセーユの海岸の異つた處へ行つて二三日暮らすことにしよう』斯う云ふ勝手な僕の言ひわけを聽き乍ら、彼は暫く默つて、案外だと云ふ顏をしてゐたが、結局、では別の場所へ行かうと話がついた。晝近くもなつたし、兎にあれ日本飯屋へ行かうとカフヱを出た。前田の方は僕が井澤からいくらか借りて、直ぐアンチーヴへ發つ筈だつたが、まあ久しぶりに、日本の酒を飲み、米の飯でも喰つて、午後三時の急行で歸ればいいとなつて一緒にタクシーに乘つた。

暫く都合惡るくて、つい目と鼻の先きにあるマルセイユの日本酒も飲めなかつたが、コニヤックでいゝ加減とろんとしてゐたうへに、またゝく間に五六本空らにした。この日大杉が馬耳塞に上陸してゐようなどゝは、夢にも思ふ筈もなく、妙らしくいゝ氣持になつて、ひとり饒舌り散らした。その内に前田の發つ汽車の時刻が來た。彼も久しぶりの日本酒に、僕の氣嫌の惡口をにこ〳〵して聞き流してゐたが。『それぢあ近いうちに屹つとやつて來い』と云ひ殘して、日本飯屋を出て行つた。これが彼との最後の訣れになつた。一週間のち彼はアンチーヴで突然死んだ。

二

その日僕等はエスタツクと反對の、ヴイユ、シヤツペルと云ふマルセイユから二十丁も離れた海岸に、手頃な、と云ふより寧ろ立派な、氣持のいゝホテルを見つけて泊ることにした。三人とも全つかり氣に入つて了つた。室も廣く奇麗で、パトロンもマダムも中々に歡迎ぶりを見せてくれる、料理も甘味く、うんと御馳走をしてくれる。鴨居などは、伊太利行を止めて、茲に一と月ばかり滯在してもいゝなどゝ言ひ出してゐた。はじめ彼等二人は腹を損して居るからとか、何んとか殊勝なことを云つて、一向に酒を飲もうともしなかつたが、いつの間にか、彼等も腹具合の事など忘れて、僕とゝもに旺んに飲みはじめた。女中が吃驚する程の瓶が運ばれ、片つぱしから空らにしてしまつた。お定りの、宿で呑んで居る事に滿足できなくて、とうとう馬耳塞行が持ち出され、それからは毎日每晩マルセイユに出ては飲み廻つてゐた。僕もエスタツクのことなど忘れていゝ氣になつてゐた。

或るあさ早く、僕は、戸を叩く音で、うとうとゝ眠つてゐ

たところを起された。そこにMと、マルセーユに居る筈で見知越の二人の男が佇つてゐた。

『前田が死んだ。アンチーヴへ直ぐ來て呉れないか』Mは妙にぎごちない持前の口調で、蒼ざめた神經質な顏面を、ひときはピリピリとさせて、それだけ云つた。

『——そうか、では直ぐ行かう』驚き乍らも慌てずに、この唐突な前田の死の知らせに、疑ひを挾む隙もなく、こいつは眞個だなと、Mの言葉がそのまゝ、ぢつと肚の底へと沁みてゆくのを感じた。

『僕がこのホテルに居ることがよく判つたね』『いや分らなかつたよ、こゝを探すまでには苦勞をしたんだ。昨日の午後アンチーヴのKから前田が死んだ直ぐ來いと云ふ電報を受取つて、半信半疑で、いきなり停車場へ驅けつけた。アンチーヴには夜の八時に着いた處、Kが君を是非搜して來てくれと云ふので、夜中の汽車にのつて直ぐさまマルセイユに引きかへした。そして本日飯屋を叩き起して君の泊つてゐる場所を尋ねたが、たゞ街はずれの海岸と云ふとしか知らないのだ。でこの二人の人に手傳つて貰つて、海岸の宿屋を片つぱしから訊いてあるいた。何處にも居ない、それで一遍マルセーユへ歸つたが、念の爲めと再び來て、最後にこのホテルをきいた。もし玆にも居なければ諦めて歸らうと思つた』『探し出して呉れてよかつた、では出掛けよう』僕は井澤から若干の金を借りると、待たせてあつた自働車に乘つてMと共にマルセーユ驛へ走らせた。

折好く、ニース行の特急列車が出るところだつた。Mと二人きりで一つのコンパートメントを占めることが能きた、Mから僕のエスタック出奔後の事をきいたり、前田の事を語り乍ら午後二時頃アンチーヴに着いた。

前田はまさしく死んで、白い寢台のうへに、花輪にうづめられて横たはつてゐた。僕が屍體となつた前田の傍に佇つたのは、馬耳塞で彼と訣れてから恰度八日目だつた。

その夜、僕はひとり、納棺前の彼の側で通夜をした。翌日巴里から、伊之助が驅けつけた。カニウ邊に來合せて居た、二三の畫家も集つて、その日の夕方納棺を濟せ、次の日、巴里から來たS、M、N等の着いた後葬送を行つた。葬式は友人たち七八人と、宿の娘、息子、近所の人達らの分乘した幾台かの馬車にまもられ、アンチーヴの人達の哀弔の目禮に送られ乍がら、市街を横切つて墓地に向つた。墓地はアンチーヴから二三十丁離れた、葡萄畑や、オリーヴ畑に圍まれた、なだらかな丘にあつた。日本流に一時墓標を立てることにして、僕はその墓

碑銘を書いたりした。

墓參とか、墓碑を建てること、その他のことで、一週間ほどは知らぬ間に過ぎた。ひと通り形がついて一同アンチーヴを引上げることになつた。僕はヱスタツクに居た時からKにアンチーヴへ來る事を勸められてゐた。巴里へは未だ歸りたくはなかつた、それで當分アンチーヴに居て繪を描いて見る氣になつた。それでヱスタツクから荷物を持つてくる事にした。大いした荷物でもないが、ひとりでは面倒なので、宿の息子のピエールに一緒に行つて貰ふことにした。恰度Sが巴里へ歸るのと一緒にアンチーヴを發つた。Sも共にマルセーユに下りて、ホテル・ノワイユに宿を取つた。その夜は例の日本酒を飮んだりしてゆつくり遊んだ。翌日宿の隣りのソシエテ・ジエネラルで、日本から來た爲替を受取ると、Sにもヱスタツク見物乍ら行つて貰ふ積りで、街へ出て二台のタクシーを探してゐた。そこへ、もうとうに伊太利の旅に立つたものと思ひ込んでゐた、井澤と鴨居が飄々として現はれた。

『何んだまだ居たんか、伊太利へ行つた事とばかり思つてゐた。もう伊太利行は中止か、いくら呑氣揃いでも呆きれたよ』

『伊太利へは明日發つんだ、ついづる〳〵と引つかゝつちやつた』と云ふ返辭だ。鴨居は伊太利行の切符を買いにゆくと云ふので、井澤を加へて一行四人、ふたりづゝタクシーに乘つてヱスタツクに向つた。

ヱスタツクまでは十三キロメートルある。自働車は砂煙を浴き乍ら凸凹だらけの道を、つねに、ヱスタツク半島に遮ぎられた、低い海を見おろし、なだらかな丘を登り下りして、勢ひよく走つてゆく。こゝも僕か見ない間に、いつか春になつてゐた。青々と芽をふいた畑に、桃や梨の花が咲き亂れ、赫土の崖のうへや、畑を廻ぐる石の圍いのに沿ふて、新芽をつけたオリイヴの樹、黑々と、すつくと立つた樅だのが點綴と植へられてゐた。

いつもマルセーユからヱスタツクへは、海岸づたいにゆくので、この道を通るのは二度目だつた。

無斷で出奔して以來十五六日も經つてゐるので、宿の者の氣持の事も懸念してゐたが、久しぶりで歸つた僕を迎へて、却つてよろこんでくれた。僕は早速に引きあげる事を話して、皆に荷物を纏めて貰ふ手傳を賴み、留守中に着いてゐた手紙類を讀みはじめた。

ひとつの輕い封書を開けて、そこに書かれた文字を一目見て、僕はハツとした。その手紙は――。

僕もやつて來た。

けふ――街へ行つてＹに會つた。君が四五日中にこちらへ來ると云ふようならはさだそうだ。若し本當なら大至急やつて來ないか、若し又君が來られなければ、僕の方から行く。尤も今直ぐと云ふわけには行かないが。

最近に、伊藤から君にあてゝ手紙を出した筈だ。若し着いてゐたら、それを持つて來てくれ。君にあてゝはあるが、實は僕にあてたものなのだ。

僕の來たことは絕對秘密。　　　　榮

この後とへ彼の支那人としての名と、アドレスが書いてあつた。突差の間だに、僕は直ぐ巴里へ行かうとこゝろの裡で決めた。この思ひかけない事の爲めに、暫くは稍々亢奮したまゝ、何んとも云へない喜びが肚の底からつきあげてくるのを感じて佇つてゐた。斯うなつては一刻も早く彼に逢ひたい、また直ぐにも逢へるのだ。彼は又とない僕の親友だ。その彼がいつの間にか、同じフランスに來てゐやうとは、何んとしても意外のことだ、それだけに歡びも大きい。

――初めて、大杉を知つた時から、僕が日本を去るまでの永い間だの事は、今こゝに書かないが、たゞ一と言、云つて置きたい。――

彼と初めて知りあつたのは、恰度十年前になる。その頃、彼は荒畑君と共に最初の近代思想を出し、大久保の住居で極く内輪同志のセンデカリズム研究會をやつてゐた。當時既に彼は實際運動者の裡では無論のこと、雜誌近代思想に據つて世間的にも、有力な文明批評家として、識者の間には知られてゐたものだ。又牢屋などにも五六回入れられてゐた。――僕は年齡から云つても彼より十歳の年少でもあり、また何等爲す事なき非才の身であつた。その頃、僕に映じた彼の姿は、たゞ敬慕する先輩としてゞあつた。その後二年ほども經つて、僕が繪を描くようになつて、自然それまでの同志とのつき合も疎遠になつて來た頃から、以前のように同じ主義、同志と云ふ意味を導ろ除いて、却つて彼との交りは深くなつて行つた。――

エスタツク往復の途中、僕は井澤を撰んで同乘した。大分話が溜つて居たからだつた。そして歸への車中で、僕はそつと彼に大杉の來た事を漏らした。無論『絕對秘密』なんだが彼には包んで置けなかつた。二人で色々と話して見たが、大杉がどう云ふ風にして日本を脫けて來たものか分らなかつた。いつも乍らだが、彼の斯うしたやり口、特に今度の手際には、ふたりで感歎したものだ。

僕は一途に巴里行を考へて居て、アンチーヴから一緒に來て貰つた、ピエールの事を忘れてゐた。が、ピエールのことを考へれば、この儘巴里へ發つ譯にもゆかない。大分迷つた揚句、後との事はどうなるか分らんが、兎も角荷物だけはアンチーヴまで運んで、それから巴里へ行かうと、巴里の方を一二日延ばす事にして、直ぐ大杉へは電報を打つた。夕方から鴨居も誘つて五人で日本料理屋へ行つた。例によつて日本酒を、いゝ心持を通り越すまで飲み合つた。だがへゞれけに醉つぱらつたのは、辯の惡るい僕ひとりだつたらう。

蹌踉としてアンチーヴ行の汽車に乘つたのは一時過ぎてゐた。僕の爲めに氣を利かせて、ピエールが構内のビユツフエから葡萄酒を二三本買い込んで來てゐた。それをふたりで飮り乍ら、いつの間にかぐつすり眠つて、アンチーヴ驛に着いたのを知らなかつた。ピエールに揺り起されて、慌てゝ飛び下りた。もう夜が白らみかけてゐた。

その日午後六時の列車で、裕が巴里へ歸へると云ふ、で僕は巴里まで彼と同行することにした。軈て出發の時間が迫つたが、僕はアンチーヴへ來てからも、まだチビリ〳〵やつてゐた爲めに、持つて來た荷物の整理がついてゐなかつた。巴里へ直行は辛いからマルセイユで一泊して行きたいと、裕が言つてゐたので、それでは僕は十二時の夜行で、明日マルセーユへ着くやうにするから、君は一と足先きに出て向ふで待つてゐてくれと約束して、また腰を据へた。が、その夜は間違なく十二時何分かの夜行に乘つてマルセイユへ向つた。

翌日マルセイユで裕と出會ひ、午後七時の特急で巴里へ立つた。車中で飲まうと、日本飯屋から正宗の四合瓶一本と猪口を一とつ貰つて乘込んだ。連日馳け歩るいてゐた疲勞が出たか、いつねむるともなく眠つて、夜の明方急に寒さを覺へて眼を醒すと、汽車はもうデイヂョンを通過してゐた。七時に巴里に着いた、珍づらしく昨夜の四合瓶に半分も殘つてゐた。大體の荷物はアンチーヴに殘して來たし、一とつ持つてゐたスートケースを裕に預け、殘りの四合瓶と猪口を外套のポケットに入れると、サンミツシエルの方へ行く裕と別れ、大杉の宿の方へとタクシーに乘つた。

三

三月上旬とは云ふものゝ、巴里はまだ冬の姿そのまゝだつた。低く垂れた鉛色の空、霧ではない、もつと重くるしい。黒黒としたマロニエの樹幹、家々の四層五層までも露はな梢を伸した、その街路樹の並木。煤んだ灰色の高い建物、家も、街路

も悉く石畳。往來の人は皆黒装束。北部ヨーロッパの冬は不見目な暗鬱に鎖ざされて了ふ。

寒い朝景色の中を、自働車は北の方さして、僕の知らない街を拔けて走つた。いゝ加減な襤褸自働車だつたが、その動搖の激しいこと、ガタ〳〵だ。道路の悪るいことは巴里でも、區(カルチエ)が悪るいのだと相場は定つてゐる。巴里第廿區、何處の邊か見當がつかない。聞いたことも、行つたこともない處だ。大分走つた頃、運轉手は車を緩めては、角々の町名を見たり、通行人に訊ねたり、車を戻したり、漸く、狹いものゝ一丁ともない短い街に入つて、うす汚いホテルの前で車を停めた。

よくあることだが、どう見たつて木賃宿としか受けとれない家で、その名のうへに、わざ〳〵、グランホテル何々と書いて置く。巴里だけか或はフランス一般に斯うなのか知らないが、僕は巴里でこれをよく見かける。ちよつと可笑しい。ところが大杉はそのアドレスのところへ、特に、このグランホテル何々と書いて來てゐた。迂つかりして、贅澤屋の彼の事だから、そのグランホテルを、まづ相應なものと、僕は勝手に思ひ込んで了つてゐたのだが、來て見て驚いた、相應どころか、それはまがいもない木賃宿の方のグランだつた。ひどい處に居るなと思つたが、彼の書いて寄した處に相違ない、帳場で室の番號をきいて、梯子段をぐる〳〵と廻つて馳け登つた。

戸を叩くと、内側から『——ハヤシ?』まがいもなく大杉の聲だつた。寢床の裡から手を差し伸べると、戸の鍵に手のとゞくような狹い部屋だ。彼はまだ床の中にゐた。

『——よくやつて來れたなア、君が來るとは——何にしろ思ひがけない事だつた、』

『吃驚りしたらう。いや僕も突然だつたよ、こゝの無政府黨から、この春伯林で開かれる大會に出席しないかと勸誘されたんで、急に思ひ立つて出て來たんだ、』『その事ならずつと前に、話しだけは鳥渡きいてゐたよ。何んでも昨年の夏頃だつたか、君と岩佐作太郎君に勸誘狀を出したと、その頃リベルテールへ出入りしてゐる男からきいては居たが、どうせ來られやしまいと思つたので、氣にも留めずに忘れてゐた。第一旅劵が下りつこないと思ふからね』

『なあに、いざ出るとなれば、旅劵なんか要らないさ、そこはお手のものだからね』斯う云つて笑い乍ら、啣へてゐた金口に火をつけると、彼は寢床から起きあがつた。

『伊藤からの手紙ついたかい』

『二月初めに着いたよ、ちよつと可怪しいとは思つたが、まさか君宛のものとは知らないから、やつて見たがどうも意味が

よくとれなかつた。そして仕舞にくしや〳〵にして了つた、兎に角こゝへ持つて來てゐるが分るかな』

彼は寢衣のまゝで、洗面器に水を湛へ、手紙を片方から段々に水に浸し乍ら讀んでゐた。僕は外套のポケツトから猪口を出し、携へてゐた四合瓶の殘りを飮りはじめた。『相變らずやつてゐるな、こつちへ來ても大分やつてゐると云ふ噂さは方々からきいたぜ』その僕の噂さと云ふのを彼からきいたが、全るで身に覺のない、根も葉もないことが、ひどく誇張されて傳つてゐるのだつた、僕がそれは出鱈目だと大いに憤慨すると『何に噂なんかつて、みんなそんなものさ、本統にする奴ア莫迦だよ。またそんなことを云はれたつて怒る奴があるもんか、勝手に云はせて置くさ』彼は瓦斯に火をつけて湯を沸してゐた。

『こんな汚い宿によく辛棒してゐたものだね、これあまるで木賃宿だ、恰度僕も宿なしだから一緒に他かへ移らないか、早速見つけてくるよ、』

『僕も初め同志のひとりに、この家へ連れてこられた時は驚いたよ、何にしろこの有樣だからなア、まあこれも面白かろうと我慢してゐたんだ。安淫賣のような女がごろ〳〵して、のべつに唄つてゐるかと思ふと、喧嘩がはじまる。いやまつたく恁う云ふ處に居たんぢやア、巴里に居るんだと思へない、何處か野蠻國へでも行つたようだ。こんな處もあるとはきいてゐたが、實際を見ると想像してゐたより、よつぽど酷どいものだ、これぢやあ巴里も絲瓜もないね、まるで地獄さ』

『どうだい直ぐ引越すかい』

『うん引越そう、それにこの家でも僕に出て貰いたがつてゐるんだ。警察の奴が煩くやつて來てつゝくらしいんだ』

『なるべく日本人の居ない處がいゝが、何處がいゝか、いつそのことモンマルトルはどうだらう。あそこは遊場だから日本人だつて出入りはするが、住んで居るものはないよ、巴里で住むなら、モンマルトルだと前から思つてゐたんだ、いゝ機會だから是非あの邊へ陣取らう、そして夜の巴里を觀ようぢあないか、こつちへ着いた頃に、よくぶらついたから氣分だけは知つてゐるんだ。或る意味で僕の想像して來た巴里が、あそこだけに殘つてゐるような氣がする。――それに短い旅ならなほ更らだね、あそこなら、他かに居るもの一年分を一と月で暮らして了ふ』

『何んでもいゝや、君と云ふ惡友が現れたんだから、一切君に任せるさ、』こんなことを話してゐるうちに、僕は瓶を空らにして仕舞い、彼は沸かした湯で顏を洗い、髯を剃り、洋服を着た。

宿を出て、プラス、レパブリックの方へぶら〳〵と歩いて行つた。はからず斯うして巴里の街を彼と肩をならべて歩いてゐるのが、いまさら不思議な事のように想はれてきた。夢のように懐しんでゐたものが、卒然として目の前に現はれた。疲れた旅から、家郷にかへりついたように、僕は甘やかしいこゝろで、安々と彼の懐ろに抱かれるように思ひ浸つた。何にから話そうか、つい順序もなく斷片に話し乍ら、ひとり嬉れしい氣分になつた。——永い旅の間だ、外面では人一倍無茶な眞似もし、飲んでは誰れ彼れの閾いもなく、喧嘩口論、われ乍ら目に餘る恥づべき惡行に夜を日を過し、勝手に飛びあるいてはゐたものゝ——肚の底では、身を慄ふような慚愧に責められ、拂いぬけられない倦怠と、云ひようのない退屈に悩んでゐた。

今、彼とのこの不思議な邂逅によつて、譬へ一時的なものにしろ、欝積してゐた悩ましい蟠りが苦もなく解けてゆくのであつた。

そろ〳〵晝近くもなつたろうか、美味い飯を喰べようと、彼の云ふに任せて、この最初の晝餐をとる料理店を物色し乍ら、レパブリツクの廣場まで出て了つた。ふたり共不案内だつたので、これはと思ふ店も見つからず、廣場の角のちよいとした、併し大きな構へのレストランに入つた。

僕は宿を探すのを畫家のYに頼まうと思つた。大杉も一緒に行くといふので、その邊でタクシーを見つけ、遠い道程を、Yの住居へ行つた。Yは日本に居た頃、僕の紹介で二三度大杉に會つてゐた。巴里の僕のアドレスがYの處になつてゐた關係から、最初大杉はYを訪ねて僕の行先きを知つたのだ。

Yは宿を探して呉れる事を承諾してくれた。モンマルトル附近と云ふこつちの注文を入れて、では早速出掛けるから、先に宿へ歸つて荷物を纏めて置いて呉れと云ふ。ふたりは又舊との木賃宿に引きかへして荷物を纏めた。彼の荷物は至極簡單なものだつた。中位のスートケース一個と、小さな手提鞄に、後とはこつちに來てから集めたといふ、古い新聞の綴込みとか、いくらかの書籍に過ぎなかつた。自炊道具なども多少あつた、それは里昂から一緒に來た支那の同志Jと居た時に使つたものだと云つてゐた。わざ〳〵持つて行く程の物でもなかつたが、その中に一寸めぼしい一揃のカフエの道具があつた、それだけは持つて行くことにした。そのカフエの道具は、これも偶然だが、彼が三週間幽れられてゐたラ・サンテの監獄の直ぐそばの畫室で、今僕が使つてゐる。

間もなくYがホテルを見つけたと云つて、タクシーを傭つて來た。それはソウ・ピガールと云つてモンマルトルの中でも、

最も繁華な街の一とつで、徹夜の踊場が軒を並べて、所謂觀樂巷とも云ふところだつた。Yが定めて來たにも拘はらず、どうした事か、室は一とつしか空いてゐないと云ふことで、他を探さなければならなかつた。荷物はそこの帳場に預けて、戸外へ出た。この邊にはホテルはいくらもあるが、堂々としたものは兎に角として、大概時間極めか、ほんの一夜泊りの淫賣ホテルと云つて連込み專門のものだつた。リウ・ピガールをプランス・ピガールの方へのぼつてゆくと、ビルトル・マッセと云ふこれもリウ・ピガールに劣らない同じような街が、ブルヴアル・クリシーの方からリウ・ピガールを横切つてゐる。その十字街を右に入つた直ぐに有名なバル・タバランと云ふ大きな踊場がある。その二三軒先きの同じ並らびに、ホテルビクトル、マッセを見つけた。これもどうやら怪しげな宿だが、案外氣輕に應對してくれたので、部屋を見せて貰つた。二階に恰度向き合つた部屋があつたので、それを借りることにした。帳場に下りて、如何にも斯う云ふ場所柄に應さはしい、氣輕な、ひとをそらさぬ愛嬌もの丶主婦の前で、ふたり宿帳に當たる紙片に各々國籍、職業、年齢その他の事項を書込んだ。ひとりが支那人で、ひとりは日本人だ。主婦は夫れを別に怪しみもせず、又旅券や、身元(カルト)證明書(ディダンティテ)を見せろとも云はずに、テェン・チン・タアンと云ふ大杉の名を可愛がつて繰かへしてゐた。一週間分の部屋代の前金を拂い、僕等も一緒に笑ひに紛ぎらせて戸外に出た。

四

モンマルトルの斯うした盛場は、夜の深けるにつれて、いよいよその不夜城たるところを發揮してくる。こ丶では十二時は宵のうちだ、徹夜の踊場は漸く十二時頃になつて燈を一層明るくするのだ。それまではたゞ通りいつぺんのモンマルトル見物者の群で賑やかふのだが、それが散つて仕舞つた後から明け方へかけた雰圍氣こそ、こ丶の本領なんだろう。

晝間、彼は大抵室に引込んでゐた。何にをしてゐたかよく知らないが、窓から戸外の通りを眺めてゐると飽きないと云ふようなことを話してゐた。それは多分その邊にウロついてゐた女の容子でも見てゐたものだろう。尤も夜が遲いので起きるのは十二時頃だつたろう。場所柄だけにどうしても早寝は出來なかつた。昨夜はとうとうこの本を讀んで了つたよ、などゝ眼を眞赤にしてゐるようなこともあつた。

僕は久し振りに巴里に出たので、當座は早く起きて、用達や友達に會ひに出掛けて、實は殆ど宿に居なかつた。夜は彼と一緒に飯を喰ふ筈にしてその時刻には都合して宿へかへるように

してゐた。僕の歸りが遲れるやうなことがあれば、彼はひとりで飯に行き、その後をカフエの梯子をやり乍ら散歩したやうだ。それにしても十二時頃には必らず宿へ一度かへつて、僕のかへるを待つか、或は僕が寢て了つてゐるのを起して、もう一度出ようなどゝ引張り出すのが常だつた。

まるで地廻りのやうな恰好でふたり連れ立つて、モンマルトルからグラン・ブルヷアルへかけてカフエを渡り歩いた。大分方々のキヤフエやそこらへ出入りしてゐる女たちと顏馴染になつた。彼は元來酒が飲めなかつた。酒の飲めない彼と、酒なしで居られない僕と一緒に歩いてゐるのだから妙だが、彼は酒呑みを相手にしてゐても一向平氣のやうだつた。却つてそんな場合には愉快さうに見えた。僕がはめをはずして、だら／＼といつまで飲んで居ても、いつぞ可厭な顏を見せることがなかつた。そして何時までもおつき合をしてゐた。斯うしてカフエを渡り歩いてゐる間だ、彼はカフエを飲んで居たんだが、あんなものをよくもあゝ飲めると呆きれる程、いく杯でもお替りをしてゐた。一軒の店で二杯三杯のむのは珍らしくなかつた。それを二軒も三軒もやるのだから驚いた。尤も僕の呑む酒のことを思へば別に不思議もないんだが、ものがコーヒーだけに目に立つた。そのカフエの中へコニヤックを入れるとうまいと云つて、ほんの小量づゝ入れてゐた。時々それが過ぎると胸の動悸が激しくなつたと云つて、大きな眼玉をギヨロ／＼さして、フウ／＼云つて辨い顏をしてゐるやうな事もあつた。そんな時には往來の淫賣共にも何に彼と揶揄つてゐたやうだ。

ある時カフエに坐り込んでゐるところへ、僕を知つてゐる女が這入つて來た。女はぺたりと坐り込んで中々動きさうもない、こつちも退屈してゐた時なんで、その話相手になつてゐると、女が大杉の腕時計に目をつけて、ちよいと借して呉れと云つて自分の腕に卷きつけた。その時計は彼がこの前上海土産に野枝さんへ買つて行つたものを、今度くる時借りて來たんだと話してゐる小さな金時計だ。その內に女が時計を呉れと云ひ出した。僕は冗談に云つてゐるものと思つてゐたら、大杉は、そんなに欲しければ與るよと云ふのだ。よせ／＼莫迦ばかしいぢやあないか、夫れに君のぢやないと云つて居るではないかと僕がとめると、何あに、歸つてから訊かれたら紛失したと云へばいゝさとその儘女に與つて仕舞つた。女は寧ろ意外に思つたろう、それを貰ふとさつさと出て行つて了つた。彼はそれから歸へるまで時計がなかつた。

隣りのバル、タバランへはよく二人で這入り込んだ。そしてそこの專屬の踊子のうちでも目星しいのふたりとすつかり懇意

になつた。夫れには彼も大分滿足していたやうに見へた。『どうだい二人であれを引連れて日本へ歸らうか、そしてあの踊りをやらせれば、その位の費用は出るぜ』などゝ串戯にでも云つてゐた。

その頃、巴里郊外の工場で勞働し乍ら、その餘暇で謄寫版刷の『工餘』と云ふ無政府主義の雜誌を出してゐた。若い支那人のLがちよい〳〵大杉の處へ尋ねて來てゐた。Lは大分酷どい生活を續けてゐたやうだが、いつもにこ〳〵して工場がひけてから來た。これも吃りの方だつた、大杉の吃りと兎に角餘り流暢でないフランス語で、ふたりは話してゐた。その他には出入りするものがなかつた。僕も自分の居るところを誰れにも云はなかつた。時々ふたりで街を歩いてゐて僕の友人などに出會ふことがあつた。そんな時はまあそこらのキヤフエへ一寸寄るんだが、そして安部と云ふ名で彼を紹介したりしたが、誰れも大杉だとは氣のつく者は居なかつた。尤も日本人の大勢巣を拵つてゐる方面へは行かない事にしてゐた。その中には日本で彼を知つてゐた者が居たからだ。

晝も夜も二人でたゞ遊び暮した。そして尠し飽きて來た頃だつた、日本の方から大使館宛で、僕の行衛、素行を至急取調べろと云ふ電報が、既に三週間も前に來てゐるが、大使館では別に取合つてゐないと云ふことを或る處から聽きこんだ。要するに僕を調べれば大杉がフランスに來てゐるか、居ないかは判明する、と云ふ日本當局の見込なんだ。この場合大使館が日本からの訓電に據つて取調べやうとしなかつたことは有難かつた、が、この頃は例の大會が四月一日から伯林で開かれる筈になつてゐた時で、彼はそれ迄に獨逸に行かなければならなかつた。まだまだ巴里で見つかるには少しばかり早かつた。

彼は獨逸へ行く爲めにも必要な、身元證明書を貰ふやうに里昂の警察へ願出てゐたが、未だ受取つてゐなかつた。この身元證明書は願出た日から二十九日經たないと下ろさぬ規則だつた、が、そろ〳〵夫れを貰へる時が迫つても來てゐた。彼が獨逸へ行くと云ふので、つい僕も里心が出て一緒に行きたくなつた。伯林は前後四回に亘つて七八ケ月暮らした處ではあるし、どうせいい加減だが言葉だつて、他かの事にしろフランスに居るより慣れてゐた。そして又伯林で大杉を案内してやりたい氣も起きて來た。『僕も一緒に行かうか』と云ふと『うん行かふ』と云ふ返辭だ。

伯林で大會に出席すれば、必らず其處で捕まる。彼はそう思つてゐた。『僕が捕まれば君も卷添を喰つて捕つたうへ追放にな

ゐるが、そいつは鳥渡まづいな、尤も捕まるとしても最終日だらうから、その日君は僕と居ない事にしたら大丈夫だらう』などと云つてゐたが、僕も迂つかり捕つて追放など喰ふのは有難くないと思つた。彼もひとりで獨逸入りをするより僕と云ふ連れがあつて行く方がいゝと思つたにはちがいない。併し最後の捕つたり、追放になつたりする事を考へると、矢張りひとりで行く方がいゝと思つたやうだ。

或る夜、遲くなつてホテルへ歸つて行くと直ぐに彼は僕の室に入つて來た。『今日リベルテールへ行つたところ、例のマダムからの手紙があつた。どうして見つからなかつたか、一と月も前に來てゐたんだ』と大分長い二通の手紙を手にして、またその處々を僕に讀んで聽かせ乍ら『もう一遍マダムに會ひたいから、早速巴里を引きあげようと思ふが、君も一緒に行かないか』と云つた。――このマダムと云ふのは彼の『入獄から追放まで』の最初の方に書かれてある、彼と日本から同船して來たマダムNと云ふロシア婦人だ――それに伯林の大會が延期になつた事、里昂の方からカルト・デイダンテイテが貰へるから直ぐに歸つて來いと云ふ手紙が來たと云ふ。

僕もその儘巴里に滯る積りはなかつた。それに未だ彼と分れ別れになるのは惜しまれた。兎にあれ一緒にひと先づ巴里を去らう、そのうへで成行に任せやうと、彼と共に行くことに決めた。では明日にも直ぐに立つことにしようと話を極めて、翌日は旅費を借りに歩いた。二人とも文無しになつてゐた。そしてその夜、十時何分かの汽車に乘つて巴里を立つた。これは僕が巴里へ出て來て、彼と一緒になつてから恰度二週間目の三月十七日だ。

五

翌朝、未だ夜の明け切らぬうちに汽車は里昂に着いた。里昂は僕には初めての土地だつた。

よく霽れた明け方の靜かな街を過ぎ、間もなくソーン河を渡ると、車は高い丘の急坂にさしかゝつた。もの寂びた屋敷町を大きく迂廻し乍らひた登りに登つた。丘の上を猶ほも郊外に出外ずれかゝつたところの、一棟のうす汚い長屋風の家の前で、彼は車を停めさせた。兩手に餘る程の荷物を二人で抱へて、その長屋の二階の長い廊下を渡り、奥まつた突き當りの戸を叩いた。

これが支那の同志Jの住居だつた。

『やあゝ歸へりましたね、さあさあ』と彼は日本語でかう云ふと、僕達をその室へ案内した。Jの容貌は日本人そつくりだつ

た、日本語を話してゐた故もあらうが、高い鼻の下に端然と刈込んだ髭の具合が、どうしても支那人らしくなかつた。彼は色褪せた詰襟の服を着て、松葉杖を持つてゐた。そして美しい眼を大きくぱつと瞠り、それを和らかな微笑で崩し、晴れやかに高く笑つては、稍々曖昧な語尾を補つて話した。彼の日本語は完全とは云へなかつた、が中々巧いものだ、普通の用事はそれで充分に事足りた。日本に六年留學してゐたが、日本を去つて既に六年、その後日本語を使ふ機會がなかつたので、あらかた忘れて了いましたと云つてゐたが、それにしては立派なものだつた。

彼は里昂の中法學院にゐる無政府主義者中の領袖株だつた。その學院には支那の學生が二百人ばかり在學してゐた、そして全部そこの寄宿舍にゐたが、彼と細君だけが別に室を借りて住んで居た。彼の細君は支那の無政府主義者として有名だつた、師復の妹だ。小柄な品のいゝ、見かけはほんの子供こどもしてゐた。

Jと細君の學校へ行く時間が迫つたので、僕たちは戸外に出ると、大杉の泊つてゐた宿へ行くことにした。Jの家からマロニイの並樹道を通つて四五丁行つたほんとうの町外れだつた。恰度そこが淸々とした廣場になつて、向ふ側には教會の尖塔が聳へ、ホテルはその廣場の角にあつた。

ホテルの下がカフヱになつてゐた。場末には珍らしく小綺麗で且つ廣い。開業してから日が淺いと見へてまだ大工がはいつてゐた。僕等が這入つて行つた時、家族は店の隅で朝飯の卓に向つてゐた。大杉が歸つて來たのにも、特に愛憎を云ふでもなく一寸挨拶が濟んで、僕等は入口に近い方の卓子に向つて腰をおろした。向ふの隅で朝飯をとつてゐる家族と云ふのは、意地惡な鷄そつくりな顏の太つた內儀さんと、それにも劣らないデブデブと肥へた、一見自働車の運轉手上りかとも見へる亭主、內儀さんの姪だと云ふ、妙にこまちやくれた、厭味な流目をする、色氣たつぷりの娘、これは又一寸法師かと怪むほど身長の低い、歩くとヨチ〱する、それで鼻の下にはちやんと立派な髭などをつくつた給仕男との四人だつた。

『時に君の朝飯はビールかね』彼は僕にかう訊くと例の一寸法師を呼んで、ビールとカフヱ、それにパンを持つてくるやうに云ひつけた。

『どうだい娘と云ふのは彼れなんだよ、妙な目付をしちや、にや〱するだらう。あんな目付をされたつて、あれぢや嬉しくないね、それともどこかに取得があるかね』

『若いだけが取得さ、だがあいつも矢張り鷄になる組だぜ、よ

く似てゐるぢやないか』僕はビールを二三本を飲み、彼はカフエを二三杯飲んで、そこらを散歩しようと麗らかに陽のかゞやいた外へ出た。

昔の堡壘跡の土文の草のうへに、寝轉んで閑長な田舎らしい景色を眺めて、手の仲間の話など彼から聽いた。

『支那の無政府主義者と云ふのはどつちかと云へば、人道主義者と云つた方がいゝ位なんだ。もともと彼方のは人道主義から出發してゐるんだよ、いまにいたつても夫れがちつとも抜けてゐないんだよ。兎に角、日本のなどとは大分趣が異つてゐる。例へば彼方の間だけは贅澤などは一切禁物なんだ。贅澤も事によりけりだが、酒を呑むことなどは無論のことだよ、うまいものを喰ふとか、煙草を呑むことすら怪しからんことになつてゐるんだ。尤もそれを他人に強いる點は少しもないが、少くも彼等はそれを守つてゐるんだ。ひつきりなしに二人は莨を喫つて無駄話に時を過してゐたが、晝近くなつたので、土手を下りて學院前の支那料理屋へ行つた。

Jの仲間が四五人先きに來て待つて居た。大杉の姿を見つけると、皆席を立つて握手を求めに近づいた。その内に彼れ是れ十人ばかり人數が集つて、一同食卓を圍んだ。茲で飯を喰ふ事は僕の注文だつた。兎に角、御馳走を撰んでくれるやうにJに賴んで、早速ながら僕はコニヤツクの杯を口につけてゐた。Jの他かには日本語を話すものはゐない。Uと云ふ既う十年もフランにゐると云ふ男が、これは又、素晴しく流暢なフランス語を使つて、頻りに大杉と話してゐた。他の連中はお互同志支那語でチーチーパーパー喋つてゐた。僕はを相手にぽつり〳〵話し乍ら、ひとり飯を喰はずにコニヤツクの瓶を半分位まで飲んで了つた。大杉の話したやうに、これだけ集つてゐても、酒はもとより煙草を喫ふ者も居なかつた。皆は呆れたやうに僕の顔をまぢ〳〵と見乍らも、にこにことしてゐた。

食後、Jの妻君を除いた餘の者と、丘を下つて里昂の街に出ることになつた。丘を下つたソーン河岸の警察に立寄つて大杉はカルト、デイダンテイテを貰つた。大杉はJと古本を探しに行くと云ふ、僕は他の連中と美術館見物に行く事にした。ひとり審美學を専攻してゐる男がゐて、それが萬事案内すると云ふ筈だつた。『ぢやあ早い方が大廣場の角のカフエに行つて待つてゐるとしよう』とそこで別れた。

流石にその方の専門だけあつて案内役のRは、一つ一つの繪に就いて詳しいものだつた。一寸飽きあきする程、彼は長たらしい説明をして與れた。勿論聽手の僕がからきしフランス語が解らないので、怠屈するのも無理ならん事だつた。こゝにはシ

ヤバンヌの有名な壁畫があつた。夫れだけが頭に殘つただけでミユウゼを出ると、僕たちは約束の大通りのキヤフエの方へ歩いた。

その夜も飯は支那料理がいゝといふ僕の注文で、七時頃一同そこに集つた。新顔も二三人加つて大分賑やかな、會合じやあない、晩餐會だ。

大杉と僕はその夜十二時の汽車で馬耳塞へ立つ筈だつた。どうせ今晩も汽車の中と、例によつて僕は大分醉つて仕舞つた。十時頃下の街から、頼んで置いた自働車が着いた。皆なが停車場まで見送るといふのをことわつて、そのまゝ街の中心、賑やかなキヤフエのある場所へ行くやうに、途中から車をそらせた、發車までの間、里昂の夜を大杉が案内すると云ふのだ。

六

早く馬耳塞に着いた。ホテル、ノワイユに行つたらマダムの行先が分るだらう乾度あそこへは行先を知らせて置くだらうからといふので、ついでに僕達もそこへ宿をとつた。帳場で色々と調べて呉れるがマダムの行先が判らない、そこへひよつこり荷物運びの男が現はれて、マダムNの處なら私が知つてゐると教へて呉れた。それはマルセーユの町外れのずつと郊外であつた。それも莫然として何々別荘内と云ふので探し當てるまでには自働車の運轉手が大分骨を折つた。そこは素晴しく廣い立派な庭園の中の貸別荘の一つであつた。

大杉はマダムNの話をする時、何にか妙に面映い顏で「別嬪ぢやないよ、もうお婆さんさ」と云つてゐた。

「まあア、井上さんよく來て下さいましたね」マダムは乾驚した表情の裡にも悦びの溢れた顏を生きいきとさせて大杉を迎へた。マダムは大杉とマルセイユで別れると、直ぐ二通の手紙を巴里のリベルテール氣付で書いたのだが、それつ切り何んの返事もない。それもその筈だ、大杉は漸く巴里を立つ前日にその手紙を見たのだつた。この唐突な訪門はひどくマダムを驚かせた。

大杉の云つたやうにマダムNは綺麗とは云へなかつた。お婆さんと云ふほどでもないが三十六七とも見えた。勿論僕にはお婆さんだ。が、露西亞人らしい卒直な表情のうちに、極めて人懷つこひ、親しみの顏をしてゐた。小柄で何に彼と快活な振舞が快よく感じられた。マダムは日本に一年近く滯つてゐたと云ふが、日本語は殆んど話せなかつた。たゞ名を呼びかける時、イノウエサン、ハヤシサン、このさんに妙に懷しみの籠つたアクサンをつけて呼んだ。「ねえ井上さん」乾度斯樣風に呼びか

けては話した。僕はマダムの云ふ、このさんがすつかり氣に入つて了つた。

僕達がマルセーユに宿を取つた事を聞くと、マダムは、何うして宿なんか取つたんです、荷物を持つて眞直ぐに家へ來ればいゝものを、貴方たちの泊る室はいくらも都合つくんですのに斯う云つて空いてゐる部屋をいくつか見せてくれたりした。斯云ふマダムの言葉に、お世辭らしい處はなかつた。如何にもそうする事が當然のやうな口吻だつた。恐らく斯麼氣持はロシヤ人を除いた、他のヨーロッパ人には藥にしたくもないものだらう。ロシア人の間だでは、斯うした事が何んでもない當前の事だらうと頷かれもするが、ヨーロッパに居ては決して耳にしない言葉だ。

マダムが晝餐をしてゐる間だ僕たちは廣い庭に出て散歩をしながら話した。大杉は何にも彼もマダムには話してあるのだと云つた。マダムは井上さんとは云つてゐるもの丶、井上さんが大杉であることも知つてゐれば、彼の思想から、日本のパスポールなしで來てゐる事まで知つてゐるのだつた。『僕にね、革命家なんか止めろと云ふんだよ、そんな危險な事をせずに、學者として安全な道を踏めつて勸めてゐるんだ。そんな事ア出來なつて、いくら云つてもそこは解らないのさ、僕がそんな氣になるかと思つて、まだ今日なんかも云つてゐるんだぜ、弱るね』彼はそう云つて、今日は一とつお婆さんに明瞭りと分らせてやると笑つてゐた。

深い草原の中を、行つたり來たりしてゐると、食事が出來たからいらつしやいと、マダムが迎ひに來た。

食事は純ロシア料理の頗る質素なものだつた。食卓は病人を診に來たロシア人の醫者と、僕たち二人、それにマダムと四人だ。マダムのフランス語はすつかり手にいつたものだつた。食事が濟むと、マダムは庭へ出ようと僕たちを誘つて家を出た。

廣い庭をあちこちと歩いたり、ベンチに腰かけたりしてマダムの話は中々につきなかつた。僕は默々として連れだつてゐたに過ぎないが、マダムは幾度となく僕に同意を求めるように、『ねヱハヤシさん、貴方はどう思ひます、私の方が眞實でしやう』と云ふのだつた。その話の内容も明瞭り解つてゐないのだから、僕はいゝ加減に返辭をして置くより仕方がなかつた。最後に家に這入らうとした時、マダムは僕を顧りみてまたも僕に同意を求めるのだつた。實はなんにも分つてゐなかつたんだがそしてこれでお終いだと思つて役遁れに何んの氣もなく、Vous avez raison と云つて了つた。『どうです、ハヤシさんも私の云ふのに贊成してゐるぢやありませんか』とにこにこして大

杉のの方を振向いた。それを大杉は速座に『何アに、ハヤシは、ヴザヴエユヌレイゾン、と云つたのですよ』とやり返へした。

陽が暮れてから近所にゐるロシア人のひと家族が六七人でやつて來た。それを機會に僕らはマルセイユへ歸ることにした。引きとめられたが明日を約してマダムの家を辭した。

翌日、僕は午後三時の汽車でアンチーヴへ行くことにした。大杉もその夜のうちにマルセーユを立つて里昻に立ちかへることにした。と云ふのはお互の汽車賃を除くと、その夜泊る金も殘らなかつたからだ。もう一度マダムNを訪ねると云ふ大杉と晝飯を共にして訣れると、僕はひとりアンチーヴへとマルセイユを立つた。

二三日すると里昻に歸つた大杉から最初の便りが來た。それから續いて二週間の間だに、彼が僕に書いた手紙をこゝへその儘載せることにする。

×

やつぱり今日は行くんぢやなかつた。きのふのまゝで分れて了へば、大ぶ甘いロマンスとして其の記憶が殘るんだつたらうがけふはもうそれをすつかり打ち毀はして了つた。誰れにも話してない、又今からも話さない、と云ふ筈だから、其のつもりでゐてくれ。もう疲れ切つた。停車場の前のカフエで今四杯目のカフエを云ひつけた。これから又下に降りてもう二三軒カフエの梯子をやつて、十一時何分かの汽車で立つ。

マルセイユはいやな處だ。アンチーヴはいゝ處であつてくれ

マダムのアドレスは──きのふのアイユで聞いたのとはまるで違つてゐた。お陰でけふは隨分あちこちと駈け廻つて、漸くの事で分つた。マダムは君の事を大變 Sympathique だと云つてほめてゐた。例の C'est vrai が餘程お氣にめしたものらしいそして僕が更にそれを說明して Vous avez une raison と云つた事を、僕が一人ぎめで附け加へたものと考へてゐるようだ。又其の間違で、そしてこんとはうんと立ち入つて三時間程庭でおしやべりした。僕はこれで、外國人とは二度目のプラトニックだ。がプラトニックはもういやだ。ベル、タバランのダンスーズの方がよつぽどいゝ。二十日午後八時。

×

二十一日朝、

今リオンに着いた。又あの色つぽい女の處にでも當分ゐようこつちへ來て以來風引きでずつと寢てゐる。又なしの時には

却つて其の方がいゝかも知れない。

今パスポールをパリへ送つて、ドイツ領事のヸザを貰ふ手續きをしてゐる。遲くとも一週間後には返事があるだらう。

君の方の形勢はいかゞ。君のこつたから、一日や二日は愚か半年たつても一年たつても多分話しはつくまいと思ふがね。と云はれて憤慨するなら、早く當つて碎けて、こつちへ來いよ。

それから君に云ふのをすつかり忘れてゐたが、僕の家へ手紙を出すなら、其の中には僕の事は一切書かないように。開封される恐れどころぢやない、必ずされるにきまつてゐるのだから

アドレスは本鄕駒込片町でいゝ。

×

顔を見合はしてにや〳〵はいゝな。

僕は本月一ぱいこゝでうんと仕事をするつもりで來たんだが翌日から風で寢てまだ寢たまゝでゐる。大した事もないんだがキニンを飮んだので腹をすつかりこはして了つた。今絶食療養中だ。

あちこちへ手紙を出したのが、けふ漸く君の返事だけが來たドリイ——僕のダンスウズだ——にも、たいくつまぎれに(と云ひ譯しないとやはり氣が濟まない)ふざけた手紙を出して置いた。

僕は本月一ぱいこゝにゐる。そして若しヸザが貰へなければテクで行く。それまでにはこつちへ來られまいな。

この三日ばかりいゝ天氣になつてほんとに春らしくなつた。が、病氣だつたり、殊に文なしだつたりした日にや、春も女もへちまもない。二十六日、

僕はまだ見ない、
君はまだものにしない、
そして恐らくは二人とも永久にまだ〳〵であるだらう、
何んとかマドムアゼルによろしく。

×

當つて碎ける氣もなしか。ぢや、仕方がない、早く尻をまくつて逃げるんだ。

ヸザの方は、けふのパリからの手紙によると、警察の證明がありさへすれば貰へさうな形勢だ。けふ其の手續をする。すると、うまく行つて出發は來月の十日頃だらう。

それまでには君もやつて來れるね。

風も腹も殆んどよくなつて、けふは起き上つた。が、まだフラ〳〵する。

今度は早く財布の病氣をよくしなくつちや。二十八日、

×

今あのチンバさんの處で晝飯を食つてゐると、學校から君の二通の手紙をとゞけてくれた。

はゝあ、ちよつと形勢が面白くなつて來たね。出ないと云ふ約束をさせられたのは大出來だよ。毛唐、殊にフランスの女などゝ云ふものは、さう云つたちよつとロオマンチツクな事が好きなんだね。こつちも其のつもりでうんとロオマンチツクに出るさ。が、話が出來ないんぢや困るな。まあ先生たる戀人に、一々かう云ふ事はどう云ふんです、とでも聞いてから話すんだね。それもロオマンチツクの一方法だらうよ。

僕なんかちつとも惚れてゐなかつたもんだから、始めつからバカにレアリスチツクに出て了つて、すつかり向うを失望させて了つたんだ。あんなお婆さんのくせにロオマンチツクもへちまもあるもんか。

パリからの返事を待つてゐるうちに、それもまだ來ないんだがね、思ひがけなくウチから金を送つて來た。尤もちよつと厄介な事になつてゐるんで、それを受取るのは明後土曜か或は次の月曜になりさうだが。

それで、それが受取れたら、僕は直ぐ又パリへ行くかも知れない。そして都合ではベルギイからオランダへ出て更にドイツへはいる事になるかも知れない。さうなれば、それからオオストリ、スヰス、イタリイと大旅行をして來る豫定だ。

牛の糞だか、甘露の塊りだか何んだか知らないが、踏めさうなら踏んで見るさ。僕の方も君の方も手紙のたんびに豫定がくるつて來るやうだが、あすかあさつてかのどつちかの手紙ではこんどはどうなるか。二十九日、

×

Kの方に金が來んでは、お互に思ひがけないところで助かるね。僕の方もけふ漸く金が受取れた。今晩は一つ、久しぶりでウンとうまい御馳走でも食はうと思ふ。

僕はパリへ送つたパスを送り返すやうに云つてやつたんだが、それがまだ着かないので、そして明日は日曜、明後日は祭日と來てゐるので、早くとも三日にならないとそれが受取れさうもない。それが來るとこんどはそれを持つて、こつちの警察へギザを貰ひに行くんだ。そして若しドイツ行がうるさければベルギイ行にする。それからあとは又あとの事だ。するとまだ、こゝを立つのは四五日後になりさうだ。

約束なんか破つてそれまでには來いよ。三十一日、

×

土曜日に手紙を書いたんだが、その日のうちに出たかどうか。日曜の朝、君の手紙を見た。

マルセイユ行までもとめられたのか。それを又唯々諾々ときくやうぢや、成程君もあまいもんだね。先生そうやつて何處まで君が彼女の云ふ事をきくか試驗してゐるんだね。そして自分の一種の征服欲を滿足させてゐるんだね。それをうんうんきいてやつてゐるのもいゝが、たまにはこつぴどくはねつけてやるさ。さうしなけれや彼女の本當の熱は燃えて來ないよ。そして其時に若し燃えなけれや、それや本當の遊びに過ぎないんだね。

僕は日曜のいゝ天氣に田舍へ行つてうんと遊んだので、暫く寢てゐて變になつたからだがすつかり回復した。きのふは大に仕事をした。けふも又うんとやれさうだ。

バルビユスの肖像がうまく行くといゝがね。僕もバルビユス（共產黨）とアナトル・フランス（共產黨から除名された）とロメン・ロオラン（先づ無政府主義）との三人に會つて、三人の比較評論を書いて見たいと思つてゐるんだが、それには三人の本を大ぶ讀まなければならんのでまだいつの事になるか分らない。

パリからまだパスが來ない。

リオンではまだ女を知らない。君のやうな惡友がゐないもんだからね。火曜二日、

七

マルセーユで大杉と訣れてアンチーヴに行つた僕は、大杉の手紙にもちよい〳〵見へるやうな事で、里昂の方へ行つて住むことにも引かれ、それかと云つて潔ぎよくアンチーヴを見捨てて出發するのも躊躇され、繪も描かず、相變らず落着のない日を過してゐた。

或日Kから、アンリ・バルビユスを訪問するが同行しないかと誘はれた。名士アンリ・バルビユスに會つたところで、肝心な言葉が出來ないんだから、面白くなからうと、初めは一向氣乘がして來なかつた。厭やだよ、まあ止めて置かう、とKには答へて置たが、Kが今日行くんだと云ふその日になつて、ひとりアンチーヴに殘つて退屈がつてゐるよりも行つて見ようかと云ふ氣になつた。その日は風もなく、よく晴れた暖かい日だつた。

氣晴しの散歩にはもつて來いの日和だと思つて、早い晝飯を喰ふと直ぐに出掛けた。

ツウロン行の汽車に乘つて、カンヌを過ぎそれから四つ五つ小さな驛を經て、ちよつと日本風な呼名のトラヤと云ふ、三方山に圍繞まれた、見る影もない小つぽけな驛で下車した。停車場から海の方へ急な坂を降りると街道へ出た。街道は眞下に海のせまる、高い斷崖のうえを、鮮かな緑の松林の小山に沿ふて曲りくねつて行つた。高く水平線を劃した紺碧の海原を眺め、春光まばゆい陽を浴び、汗ばんで道を急いだ。

アンチーヴ邊りではバルビユスは善く云はれてゐないんだ、とKが話した。昨年の夏、バルビユスはアンチーヴの貸別莊に若い女と一緒に滯在してゐた。(それは細君だつたのだ)相當贅澤な生活をして、毎日その色女を連れては、別莊前の海に、船を浮べて遊び暮らしてゐた。共産主義者とか、クラルテ運動とか云つてゐたところで、あの態は何んだ、嘘吐きの人でなしだと、斯う云つて罵倒してゐるのだそうだ。アンチーヴ邊りに住んでゐる頑迷固陋なブルヂユワアの云ひそうな誹謗だ。またこの邊ときたら、所謂フランス一流の保守黨の巣窟だから、バルビユスも彼等の反感を買ふのも無理ならんことだと思はれた。が一寸僕にも不安があつた。その話から連想して、もしそんな妾でも居て、鹿爪らしく應接間などへ通され、慇懃な挨拶からでも始めるんぢや、やり切れないと、汗ばんだ手なども氣になつた。道程の遠いのに辟易して、途中四五人集つてゐた處で、Kがバルビユスの家はと訊いた。彼等は快ろよく僕等を連れて、その場所の見へる處まで出て指示して、もう一とつ灣曲した海を超へて出た鼻先きに、遙かに見へる朱色の壁の小さな家を、あれだと教へて呉れた。暫く行き過ぎて振り返つて見ると、彼等はこちらを凝視て何にか話してゐた。名士バルビユス巡禮の二人のシノア(支那人)の噂さでもしてゐるんだらうと、僕等も笑つた。

針金で柵を廻らし、庭も家も外から見透された。かたばかりの門に佇つて呼鈴を押すと、突然り、大きなロシア犬が猛烈に吠へ乍ら飛び出してきた。その後とから鄙びた婆さんが出て來た、僕等の來意をきくと木戸を開けてくれた。いまにも飛びかゝりそうな見幕で吠へたてゝ犬が尾いてくる。餘りいゝ心持ではない。ムツシユウ、バルビユスは貴方がたの見へるのをお待して居ましたが、今下の海邊で船の手入をしてゐますから、そちらの方へ行つて頂きましよう、と、其處に花壇の草花に水をやつてゐた男、多分この婆さんの亭主だらう、お爺さんに、僕たちをそつちへ案内するように云つた。爺さんの後について、

ろくに徑もついてゐない足元の危い崖をそこらの小松などに捉り乍ら降つて行くと、爺さんが、ムツシユウ、バルビユスはあそこに居ますよと云ふと、崖の下へ聲をかけた。其處は直ぐ眼の下だつた、陸へ上げた小船の側に立つて、粗末な仕事着で片手にペンキの鑵を持ち、刷毛を持つた、フランス人には滅多に見かけぬ身長の高い男がこつちを仰向いて立つてゐた。彼は、それが僕等だと氣付くと、崖へ一と足二た足のぼりかけて、そつちの木に捉つて、足を辷らすな、などゝ聲をかけ乍ら近寄つて來た。そして僕等の足がまだ崖から離れないうちに、その大きな手が僕等の手を强く握つてゐた。それがアンリ、バルビユスだつた。

君の來るのをさつきから待つてゐたよ。いま船を塗つてゐた處だ。彼はかうKに云ふと、さつさと日陰の方へ寄つて、小石の上に坐り込んだ。僕等も彼を圍んで蹲踞んだ。早速彼とKとは話にとりかゝつた。僕はどうせ聽いてゐても解らないのだが、まあ〱聽いてゐるような恰好をして、莨に火をつけると、ひつきりなしにぷかり〱やつてゐた。

バルビユスはその長い足を片手で抱へ、片手で傍らの小石を拾ふと、ひよいとそれを向ふへ投げる、たへずそれを繰更へし乍ら、俯向き勝ちで、靜かに語りだした。夫れは緩やかな流れのように、たゞ一と色で稍々鈍い調子だ、暫くその狀態が續いた。追追話が熱してくるにつれて、一と色は五色の綾となり、澱みは急に滔々と流れ出した。その美しい響は、話と云ふより寧ろ詩の朗讀を聽くようだつた。

三方崖に圍まれたさゝやかな入江、渚を洗ふ漣も和はらいで、寂んとして、陽が高く燃へてゐた。岩に背を向けて、小石を玩ぐり投げ、美しい聲で革命を語るバルビユスは、確かりとした體に、青味かゝつたスコッチのだぶ〱の服を着て、カラもネクタイもつけてゐない。一見、中老の漁夫のようにも觀へた。然しそれは小船にニスを塗つてゐた時の彼の姿であらうか。今、彼はアナトル、フランスを論じ、勞農ソビエットを讃へ、クラルテ運動の趨勢に及び、その運動がいまや彼の雙肩にかゝつてゐることを語つて、自から憤起せねばならぬ秋と大見得を切つてゐるバルビユスなのである。廣い額を蔽ふた、房々とした髮、美しく輝いた青い瞳、高い鼻、髭を剃つた口の邊りから頤にかけて泛ぶ微笑の影、彼の風貌はどう觀ても革命家と云ふより、詩人に應はしいものだつた。

話の詳細に至つては遺憾乍ら分らなかつたが、その大體は共產主義の讃美、無政府主義を非難するものであらうと朧ろげ乍

らそれを察しられた。たゞ、彼の口をついて出る革命、共産主義、直接行動、無政府主義等の言葉のうちに、トレシック、トレヂヤンテイ、トレデリカなど〻云ふ形容詞が頻繁に挿まれたことは、一寸異様な感があつた。

斯うして話は何時終るともなく流麗な聲で雄辯に語られていつた。

美しき西洋音樂も斯う長く聽いてゐると飽きてくる。その筈だ二時間近くも小石の上に座つてゐたのだ。

庭を散歩いて見よう、彼は立ちあがつて坂をのぼりかけた。僕等もその後とに從いて木立の中の叢の小徑を歩いた。彼は僕を顧みて、何に彼と話しかけてくれるのだが、辛うじて返辭する位で後とが續かない。軈て彼の書齋に通された。天井の高い大きな窓のある明るい室、中二階が書庫になつてぎつしりと書籍が棚につまつてゐた。壁には隙間もないほど繪が懸けてあつた。シニヤツクが贈つてくれたと云ふ、つまらないアンチーヴの風景、五十號大の夫人の肖像、彼の全身像、彼の肖像畫だけでも三四點あつたらう然し一向平凡なものばかりだ、買つたものではなさそうだ。彼も氣に入つてゐないと云つてゐた。彼は僕等に柔かい長椅子を勸めて、自身は堅い木の椅子に倚け、多分僕の爲にだらう、話題を繪の方へ持つていつた。僕はふと彼の肖像を描きたい氣になつた。そのことを彼に云ふと、四五日ならモデルになつてもい〻と云ふ返辭だ。毎朝五時に起きて、大低、晝近くまで仕事をしてゐるから午後から坐らうと云ふ、ではこの土曜日から來て描くと約束した。

そこへさつきの爺さんが、支度が出來たから食堂へと云つて來た。食卓には果物だの菓子だのが列んでゐた。バルビユスが飲物は冷たいもの熱いものどちらがい〻かと訊く、冷たいものがい〻と云ふと、彼は一瓶の赤葡萄酒を持つて來て注いでくれた。僕は一人でいち早くその瓶を空らにしてしまつた。Kがハヤシは大分飲んだと云ふと、相憎今日はこの一瓶しかなくて氣の毒した、つい自分が飲まないから用意がないなど〻云つてゐた。彼は莨も吸はなかつた。僕は空腹に一氣に飲つたのでい〻心持に醉つて了つた。

では土曜にと云つて歸へらうとすると、そこまで送つて行くから一寸待つて呉れと云つて、彼は裏へ廻つて一台の自轉車を片手で押して來た。まだ陽幕れには間があつたが、海の上の空が花つと黄に染つてゐた。凡そ道程の半分も來た頃、彼はこの道を行けば近いと停車場への道を教へた後ち、では土曜日に又會はうと云つて手を握つた。彼に握られた手が痛かつた。

僕はバルビュスと約束をしたのだが、急に里昂の方へ行く決心がついたので巴里へ借金を申込んだ。其が着いたら直ぐに出發する筈にして、バルビュスの方へは斷りの手紙を出した。そして巴里から金の來るのを待つてゐると、里昂の大杉から、何日シュトラスブルグ經由でドイツへ立つといふ電報が來た。漸くこつちもアンチーヴを去る氣になつたのに、彼に立たれて了つては張合がない、そこで、金の着次第立つて行くからそれ迄待てと電報を打ちかへした。

巴里から金が着き、宿の拂いも濟せ、いざ出發の時、Kがアンチーヴにひとり殘るのはつまらぬ、巴里へ出るから一緒に行きたいと云ふので、彼と同行することにした。その日の午後六時の汽車で、僕はついにアンチーヴを去つた。

八

僕は二十日ぶりで再び大杉と一緒になつたのだが、獨逸へ行く彼とは訣れて、當分ひとり里昂郊外に滯つて繪を描くことに決めた。そして不取敢彼の居たホテルの一室を借りた。彼は獨逸の旅を濟せたら再び里昂に來て二三ヶ月みつちり仕事に沒頭するのだと云つてゐた。僕もその頃まで里昂に滯つて彼の歸つて來るのを待つ心組だつた。彼の豫定は本年一杯フランスに居て後ち日本へ歸つてゆくと云ふ順序だつた。

せめて二三日は一緒に居るだらうと思つてゐたKは、着くと直ぐその日の夜行で巴里へ立ちたいと言ひ出した。僕はJとJの細君に支那料理に來て貰つて、五人で食事をした。夕方からKを見送がてら大杉と僕は里昂の街へ下りた。驛前のレストランで晩飯を濟せ、Kの乘る十二時過ぎの巴里行の汽車を待つ爲例によつてカフェからカフェを渡り歩いて、時を過した。

驛の構内でKと訣れ、戸外へ出ると、大杉は氣分が惡いと云ひ乍ら、急に物を吐いたりした。もう歩くのは可厭だからそこのホテルで泊らうと云ふのだつた。僕は着いた日ではあるし、そこらで泊るのは厭やだつた。ぢや馬車を傭ふから、それで寛つくりボアン・ド・デュウルの宿へ歸へろうと云つたが、彼は、馬車などに乘れば却つて惡くなりそうだと云つて僕の肩に捉つて、直ぐそばにあつたホテルへ行つた。其處のホテルでは屋根裏の部屋へ僕たちを連れて行つた。屋根裏と云つても、小さなホテルの普通の室よりよかつたが、屋根裏は厭やだよと僕が云ふと、彼は他かの室は空いて居ないのかと訊いて見たが、是れしかないと云ふので、ぢや他かへ行つて見ようと下へ降りた。そこへ隣りのホテルの主人だと云ふ男が入つて來て、自分の處にいゝ部屋があるから案内すると云つた。その男に蹤いて降り

へ行つたが、そこでも屋根裏の部屋へ連れていつた。巫山戯けてゐるな、まだ先刻の方が增しだ、と云つて戸外へ出て了つた。斯うしてゐる間に彼の氣分も快くなつてゐた。それぢやボアン・ド・チユールまで登らうかと、人影の絶へた街を拔け、暗い坂道をぼつ〳〵と話し乍ら宿へ辿り着いたら二時が過ぎて鷄が鳴いてゐた。

アンチーヴで受取つた大杉の電報だと、彼はとうにヴヰザを貰ひ、獨逸行の準備が整つてゐる筈なのに、ヴヰザは愚か、全然出發の用意が出來てゐなかつた。併し彼はまだ明日にもヴヰザが下りるもの丶ように思つてゐたらしい。これでヴヰザさへ貰へやい丶んだ、明後日頃は立てるかな、そうすれば君に室代と小遣ぐらい置いていけるだらう、など丶云つてゐたが、僕は斯うなつてはヴヰザは容易に下りまいと思つた。僕も是れ迄に幾度か外國行のヴヰザを貰ふ手續をしたが、いつも一日で事が足りた。此頃は旅券を二十四時間警視廳へ留置く規則になつてゐるが、それにしても彼のは願出てから旣に二十日にもなる。そのうへ警視廳を離れ、密偵局の方へ廻され、いく度足を運んで催促しても不得要領で、明日は明後日はと云ふようぢや、もう存分に疑がはれてゐるものと思はなければならない。里昂の外人課ではJ一味の者を內々睨んでゐたところへ、大杉をその仲間と知つたのだから、(支那人に化けてゐるとは知らなかつたろうが)迂濶に獨逸行などのヴヰザはやれないと、徒づらに延引させて置いたものと思ふ。そのことは彼も萬々承知してゐたのだろうが、是れまでの行懸上でか、ヴヰザを貰ふことを斷念はしてゐなかつた。僕は、寧ろ獨逸行を中止するからと云つて、パスポールとカルト・ディダンテイテを返して貰つてはどうかと、提言したが、その儘になつてゐた。僕の考へでは、吝の付いた里昂で貰ふことは止めて、巴里に出て白耳義行のヴヰザを貰ひ、白耳義でも困難なら更に和蘭に入つて、そこで手續をすれば、兎に角無事に獨逸に入國できようと云ふのだつた。尤も、是れも彼としては、常に穩健な方法でと云ふ支那の同志の言分をも聽かなければならぬ義理もあつて、勝手には行かなかつたらう。

僕はJやその仲間の者に、安い部屋を探して貰ふことを賴んだ。鷄の家は高くもあり、感じが惡るかつた。僕は全たく文無しだつた、安い部屋を求めたのは、もし大杉にヴヰザが下りた場合、彼の旅費のうちからそれ以上割くことが出來なかつた爲めだ。次の月になればどうにでもなるんだつたが、この場合は安い部屋を探すより仕方がなかつた。J夫婦や他の連中の骨折

で、高い部屋代の家より、安い部屋はいくつも見つかつた、が、とても汚くて這入れなかつたり、暗くて濕めじめしたものばかりだつた。Jの連中には氣の毒に思つたが我慢にも借りる氣になれなかつた。Jたちの探して來て呉れたゝびに、大杉も一緒にそれを見に行つたが、彼も、これや駄目だ、止せよと云ふのが常だつた。斯うして氣に入る部屋は中々見つからなかつた。併しJ達はいくら無駄足を踏んでも、僕の爲めに毎日あちこちと探し歩いてくれた。

はじめ食事の方は儉約のつもりで、大杉はJの家へ喰べに行き、僕はJの紹介で月末拂として、支那料理屋へ話しをして貰つて、そこへ通ふことにした。こつちの勝手なものを喰ふと非常に高くなるのと、一とつは、ろくに知らないのに月末拂で贅澤も云へないやうな氣がして、そこへ三度とも喰いに來てゐる支那人の學生並に、月極の飯を喰ふことにしたが、二三日でへこたれて仕舞つた。で、その方は斷つて、僕もJの家へ行くことにした。Jの細君はそのつど、僕の爲めに米を炊いてくれた。何にはなくとも、まるで知らない支那人の中で安飯をひとり喰ふより、Jの家で四人で喰ふ方がよかつた。Jも頗る貧しい生活をしてゐたので、彼としては精一杯の御馳走をして呉れて居たのだが、Jの家の食事にも時々飽きあきすることがあつた。

そして二人で里昂の街へ晩飯を喰べに下りたりするやうになつた。

案の如く、彼のヴヰザは容易に下りる傾勢さへなかつた。彼は相變らず、寧ろ意地になつて隔日位に衛偵局の方へ足を運んだ。僕も二三度一緒に行つて見たが、何故にヴヰザを下ろさぬのか、その理由が見出せなかつた。或る時は警視廳へ出掛けて總監に面會を申込んだが會へなかつた、その結果彼は總監へ宛てゝ手紙を書いて出した。この頃からヴヰザの方は大してあてにしないやうになつた、成行に任せようと云つてゐた。又、彼は改造に送つた『日本脱出記』に手を入れ、其が出來たので僕の手を經て巴里に廻し、そこから日本へ送つた。

春は闌はだつた。畑や、道ばたには林檎や梨子の花が咲き、プラターヌやマロニエが青々とした若葉をつけ、麗らかに霽れた日が續いた。

二人は地圖を便りに、遠く郊外へ散歩に出かけた。ひる前から陽の暮れまでもあるき廻つた。花瓣のチラ〳〵と散る道を村から村へ出て田舍料理を喰ふのも不味くなかつた。よくカフヱに憩んでは、コーヒーを熱く沸かして、などゝ彼は云つてゐた。そして『一杯やるね』と僕のために葡萄酒を云ひつける事を忘れなかつた。田舍屋のカフヱの庭の樹の下に列んだ、不恰

好なテーブルに向き合つて、僕は幾杯となく葡萄酒の杯を傾け、彼の語るのを聽き、醉心地になると僕もよく喋つた。彼は或時斯麼ことを云つた『ドイツから歸つたら、ローン河を船でアビニオン邊りまで下だらうぢやないか、アビニオンの近傍に、フアブルの居たところがあるんだ、そこへ行つて見たい』このローン下りは僕も兼て考へてゐたことだつたので、大いに乘氣になつて、その計畫などを話し合つた。

中部フランス、里昂からアビニオン、タラスコン、アールにかけての、ローン河の領域は僕のこゝろひかるゝ懷古の地だつた。そこは僕がフランスに着いて最初に旅した處だ。なだらかな丘陵、森のひらけた平原、ゆるやかな幾條かの河川、古びた習俗、建物、村、市街、だがそこは熾烈な南方の太陽の耀いところだ。澄み亙つた碧空らへ、黑々とくつきり、燃へ立つたシプレスの樹々、眞白い往還、橋梁、そこを輕快な二輪馬車を驅つて、颯々と走らす、黄や赤の粧いした、潤達な、若い娘たち、素朴な人情、僕はフランスに着いた翌春、陽炎の立つ草のうへにねころんで、のうのうと頁をふかし乍ら、それらの景物を眺めて、暫く暮らしたときを思ひ泛べた。そしてローン河を船で下だる時を娯しく考へた。

斯うしてゐる間には、彼の獨逸行の旅費を殆ど喰ひ込んで了つた。例令ヴヰザが下りても立てなくなつた。僕の部屋もいつ見つかるか分らない、うらうらとした春ではあるが、懷ころは眞冬にも等しかつた。そんなこんなで、二人とも里昂に厭氣がさしかけてきた。そこで僕だけ荷を纏めて、一時里昂を引上げ、巴里に出ることにした。Jには急に巴里へ歸へるからと斷つて、大杉の手に殘つてゐる金を持つて、彼れひとりに見送られ、さう決めた日の夜中の汽車に乘つて巴里へ向つた。

九

巴里に出た僕はサン・ミイシエル橋に近いセーヌ河岸に宿とつた。向ひ側は巴里法院、つゞいて警視廳、ノートル・ダム、下流の方にルウベル宮が見へる。僕はその日のうちに金を都合して里昂の大杉に郵送した。

彼からの手紙が二たつある。

×

きのふ高等課へ行くと、金曜日に警視廳へ廻はしてあるから、今から直ぐ向うへ行くといゝ、多分もう出來てゐるだらうから、と云ふ。喜んで行つて見ると、まだゞ、 *Il attendre q*

uelqes jours だと云ふ。いろ〳〵文句を云つて見たが、要するに、Il faut rttaudre puelques gonrs のほかに rien a faire だ。

あしたとかあさつてとか云はれてゐた間はまだ多少の望みを抂つて待つてゐられたが、ケルク・チユウルになると、あしたになつてもあさつてになつてもやはりまだケルク・チユウルだ。が、もう一二度さい促に行つて、本週中位には貰へるだらう位の望みで、きのふは其の歸へりにゴリキイの Rugagnaut m on Rain と云ふ自叙傳小説を買つて來て、けふまでそれを讀み耽つてゐる。

パリはどうだ。景氣のよしあしに係はらず、とにかく飲んで買ひに行つたらう。

僕の手紙は二重封にして、そとはJにあてゝ學校へ送つてくれ。

もう十七日だいやになつちまうよ。

×

きのふ電報を受取つた。金はまだ來ない、きのふの午後又辯視廳へ行つた。するとこんどはケルク・チユウルどころではなく、ア・ラ・スメエン・プロシエンになつた。來週になつて又行けば、こんどはオ・モツ・プロシエンになるのかも知れない。

うちのオヤヂをつかまへて、なぜかうぅるさいんだらうと話しかけたら、オヤヂももう三度いろ〳〵と調べられたと云つてこぼしてゐた。君の事も聞いて行つたそうだ。そして殊にきのふの朝は君の事に就いてだけ聞きに來たそうだ。

事によると、巴里でも君の事を調べてゐるかも知らない。こんなにして一々調べて行つて、それが一切濟んでからヴザをくれるとなると、オ・モツ・プロシエンがこんどは又ア・ランネ・プロシエンになるだらう。

くさ〳〵する事おびたゞしい。十九日、

井澤と鴨居も、僕と同じホテルに泊つてゐた。十九日付の大杉の手紙を受取 つた二十日の晩、井澤と僕はサン・ミイシエル橋のそばのカフエで晩くまで飲んでゐた。井澤は、二十二日の晩に巴里を發つ、宮様の靈柩車に從ひてマルセーユへ行く筈だつた。鴨居は先發として、その日の朝だかにマルセーユへ立つてゐる。

早晩、大杉がフランスに居ることは日本の方へ知れる事だ、いまでは又知れたつていゝんだらう、どうせ分ることなら、大

杉に一應訊いたうへで、君が社の方へ電報を打つてはどうかと、僕から話を持ちかけた『それでは一日前に發つて、里昂に寄つて大杉に會ふことにしよう、一緒に行つて吳れるか』『行かう』夜中の一時半頃だつたが二人はタクシーを見つけて、巴里中央取引所構内の夜間電報扱所まで行つて、大杉に電報を打つた。

翌晩、十時の汽車に乘るつもりで、飯を食つたが僅か五六分の差で乘遲れた。で二十二日朝八時の特急で立つて、里昂に四時頃着いた。僕は大杉の手紙に據つて、直接彼の宿へ行くのは危いと思つたからJの家へ行つた。Jは留守で、妻君に大杉の宿へ行つて貰つた。彼はJの妻君とつれ立つてやつて來た。井澤とは既に日本で大分以前だが會つてゐたので、わざ〳〵紹介の要もなかつた。だがお互に顏は忘れかけてゐたらう。

Jの家を出て三人で里昂の街へ下りた。カフヱで一杯やり乍ら話の打合せをして、鳥渡贅澤なレストランで晩食を喰ひ乍ら僕と井澤は又飮んだ。井澤はその夜四時里昂を通過する、宮樣の靈柩車と共にマルセーユに行かなければならなかつた。それまでの永い時間、僕等は飮み歩いて過した。仕舞にはどこでも閉め出しを喰つて、停車場構內のビュッフヱに入つた。そこでも三時頃になつて追い出された。それで汽車の到着までには未だ間があつたが井澤と別れて歸へることにした。振り返つて見ると、彼は黑い折鞄をかゝへ、ステッキを持つて、ヒョロヒョロとプラットホームに蹌踉としてゐた。（後にきいたが、彼はその折鞄とステッキをベンチの上に殘して、汽車に乘つたさうだ）大杉はその晚僕の宿で泊つた。

ボアン・ド・チュウルの大杉の宿へは、警察から再三僕の事を調べに行つてゐたので、直接彼の宿へは行けなかつた。それに今度は名を變へて泊つてゐたから、迂つかりすると却つて怪まれる惧があつた。毎日、僕は朝寢をしては、宿で晝飯を濟して、ゆつくりJの宿へ出掛けていつた。大杉はJの家へ晝飯に來た儘、そこで僕の行くのを待つてゐた。夕方までは何にも爲ることがなくて、裏庭に出て女の兒たちの遊び仲間になつた。彼はその子供たちとは全つかり仲よしになつてゐた。そして一緒に繩飛びをしたり、キャッ〳〵と巫山戲けてゐた。そこへ顏を出す長屋の內儀さん達とも話込んでゐた。彼れのこの手際には全く感服してゐた、寧ろ羨しかつた位だ。僕はどうも巧く子供たちを相手にして遊べなかつた。時々繩飛びの仲間に入つても彼れのように調子よく行かなかつた。（こゝで子供と云ふのは皆な女の兒）それよりは近所のカヤフヱから安葡萄酒を買つて來て、Jの家の窓からチビ〳〵飮つて、眺めてゐる方がよ

かつた。

夜は必らず二人で里昂へ下りた。一緒に飯を喰い大抵十二時頃まで、カフエを歩いて、僕がいゝ加減醉ふまで、ぶら／＼して過した。

二三日うちには鴨居と共に引きかへして來るから、一緒に巴里へ歸へららうと約束して行つた井澤は、四日經ち五日經ぎてもかえつてこない、その頃は又雨がよく降つた。斯うして今度は驛前のホテルに居るんだが、ボアン・ド・デュウルの宿へは行けないし、J達は午前のうちは學校へ行つて留守、井澤からは何んの音沙汰もなく、天氣が悪いので歩くのも臆劫だし、ホテルの室でボカンとしてゐるには、餘りに狭く、貧相で、殺風景だつた。ミュウゼへ日參する程の殊勝な心掛けにはなれず、午後になつてJの家へ出掛けて、大杉と一緒になるまでは、ほと／＼身を持て餘してゐた。

いかに無聊に悩むでも、ひとりでぶらぶらと里昂の市街を歩く氣にならない。教會の塔が到處に聳へてゐる市街。そして引潰したようなシャツポをかぶつた、黒装束のだぶ／＼坊主、その辯妙に色艶がよかつたりして。日本だと珠數でも爪繰りそうな老婆、そのお婆さんの多いこと、里昂の市街を歩いてゐると、教會と、坊主と婆さんに突きあたりそうだ。ある時大杉と二人、里昂での目抜きの大通、その角のカフエに所在なく坐つてゐた。折から俄雨が降りだして、滿員の電車が幾台も續いて通つてゐた。僕が云ひ出した『どうだい、この前を五分間に婆さんが幾人り通るか、算へて見ないか』『よし算へよう、但し五十以上と認めるものにしろよ、君はこつち側、僕は向ふ側を算へる』彼が答へて云つた。その結果、五十以上と認められた、婆さんが五分間に三十七人算へあげられた。呆きれたな、これぢや目につく筈だ。それに反比例して若い娘の尠くないこと、或は尠くないのかも知れないが、てんで目につかない。つまり目につくようなのがゐないのだらう。たま／＼端麗に整つた顏容を見かけるが、教會からマリアの繪像が抜け出して來たかと思ふほど、生氣がない、が、品はいゝ。

或る日、僕はJと彼の細君を誘つて、里昂の公園へ散歩に出かけた。この公園はフランスでも名高いものです、斯うJが云つた。このことを後とで大杉に話すと、アイツ僕と行つた時もそう云つたよ。妙にそれが可笑しくなつてふたりで笑つた）その日は日曜日で、烈しい人出だつた。日本に留學當時、順天堂で片足を切断して、松葉杖をついてゐるJと、彼の小さな細君と、僕との三人組は、公園に集つてきた里昂人の物妙らしい、的となつて、實はおちおち散歩してゐる氣分になれなかつた。

僕は、公園をようやくの思ひで一週すると、二人を促がしてソーンの岸に出た。河に沿ふて歩きながら、Jは日本に居た頃のことを話した。その一つに、日本に居ていちばい不快だつたのは、日に何十遍となく、チヤンコロ、チヤンコロと云ふのを耳にすることだ。あれだけは堪らなく可厭だつた、下宿の女中まで云ふのだから、と、恰もその頃を思ひだしたかのやうに、顔を顰めて、こゝろもち顔を赤らめて細君の方を見た。日本へ留學する支那人の減つたのは、こんなことが原因の重なるものだと云つて、『フランスではそんな可厭な目に遭ふことがないでしよう』Jはそう云つて、今度は僕の顔を覗いた。

市街の中心を迂行に、緩やかなソーンと、やゝ急なローンが貫流して、市街をはずれると二つの流れは合してゐた。二つの河と、二つの高い丘に抱かれた、古い里昂の市街は、永久に靜かなねむりから醒めるときのないように思はれた。

恰度一週間目で、井澤は鴨居と連れ立つてやつて來た。その晩は四人で夜更けまで飲んだ。ふたりの呑氣者は歸へることを忘れて、マルセイユで飲んで居たにちがいなかつた。翌日午後二時の汽車で僕等三人は巴里へ立つた。別れ際に、大杉は、僕も巴里の五月一日祭を觀たいから、乾度二三日中にこゝを拔け出して行くと云つてゐた。

十

二十九日の夜、里昂の大杉から、明朝巴里に着く、と、電報がきた。その朝ガール・ド・リオンに行つて暫く待つて見たが、遂に彼の姿は見へなかつた。宿へ歸つて見ると、外套と手提鞄が置いてあつた。彼は午後になつて、ぶらりと這入つて來た。汽車が早く着いたんで、直ぐにこゝへ來たが君が居ないので、リベルテールへメーデーの集會の場所をきゝに行つて來た。そう云つて今度は裁縫女工の罷工に就て、彼女等の生活狀態の詳細な統計などを見せ乍ら話してきかせた。僕が話の末に文士のS・Kが巴里に來てゐることを話すと、S・Kは僕も一寸知つてゐるし、芝居のことを話したいから直ぐ訪ねて見よう、と彼が云ひだした。それから、同じ河岸の大分遠方に居たS・Kの處までタクシーに乘つた。折よくS・Kは宿に居た、その夜はS・Kに誘はれて晩飯を喰いに三人で出掛けた。レストランの案内は僕にしろと云ふので、僕は二人をグラン・ブルヴアルの巴里でもまづ上等と云へる家へ連れて行つた。食後も三人でぶらぶら散歩しながら、例によつて僕だけは酒を呑んだ。十二時頃S・Kは歸つて行つた。僕は近所のホテルに大杉の泊る部屋を見つ

けて約束したが、まだ飲み足らぬから、もう少し交き合つて異れと、もう大分疲れて眠むそうだつた彼を誘つた。そしてその邊のカフヱで又飲みだした。

その時は醉が廻つて、何にを言つたのかよく憶へてゐないが、大分彼の癪に觸ることを僕が言つたのだらう『そんな無責任な勝手な事を云ふ奴があるもんか』と彼は腹を立てゝ云つた。そこで僕も勢ひ『何にも無責任とか、勝手とか云ふ事ぢやないぢやないか』と云ふと增々怒つたようなので、ではその事は取消すよと云ふと彼も氣嫌を直してゐた。そしてカフヱで追ひ立てられて戸外へ出たのは三時だつた。ぢや明日ひる頃君のとこへ行くよと云つて彼は宿の方へ歸つて行つた。

五月一日のメーデーには十一時頃、彼はまだ僕が寢てゐる内にやつて來た。これからサン・ドニーの集會に行くんだと云ふので、僕も起きて十二時頃一緒に戸外へ出た。よく霽れた奇麗な日だつた。祭日とて戸外は晴衣を着た人々で雜鬧してゐた。サン・ミイシヱルの橋の袂で、集會に行く彼と訣れた。別れぎはに彼は、六時頃までには歸つてくるから、一緒に晩飯を喰つて夜はもと居たモンマルトルへ遊びに行かうと言ひ殘して橋を渡つて行つた。僕は四時からずつと部屋にゐて、彼の歸つてくるのを待つた。六時が七時になつて、戸口に張紙をして夕飯に行つて歸つて見たが、彼の來た形跡はなかつた。その夜十時十一時頃まで待つたが、遂に彼は姿を見せなかつた。多分集會の歸途、ひとりで出掛けたんだらうと思つて僕は寢て了つた。

翌日はひる頃までねて起きたが、彼は未だ姿を見せなかつた。起きた時は格別氣にもならなかつたが、二時になつても來ない、そろそろ氣になりだした處へ、三四人友達が來て話し込んでゐたので、つい彼の事も忘れてゐた。五時頃だつたらうか、烈しく戸を叩く音と共に、たゞ者とも見へない、人相の惡い男が五六人、荒らあらしく、どやどやつと僕の室に這入り込んできた。後とから大杉がこゝろもち蒼ざめた顏で、稍々亢奮した沈默の體で續いて入つて來た。

『捕つたな』大杉の姿を視た瞬間に僕はそう感づいた。彼の頸にはカラもネクタイもついてゐなかつた。こつちの警察へ引つぱられて留置された場合、カラもネクタイも帶革さへ取上げられてしまう事を、僕は自分で一度經驗して知つてゐた。(斷つて置くが僕の場合は、みつともないことだが、醉つた揚句フランス人と喧嘩したからだ)

狹い僕の室は、この不意の闖入者で腰をかける餘地もなかつた。僕はベットの上に腰かけ、大杉に一つ椅子を與へ、警察側

の主だつた、凶悪な面構への、チクチクと肥つた、太い髭の男が一つの椅子に凭け、他は皆な立つてゐた。この太い髭の男が探偵の頭だつたらう、何にしろ獰猛な面らをしてゐた。そいつが、

『ハヤシと云ふのは君か、君はこの男を知つてゐるだらう』と僕を睨みつけて言つた。

『知つてゐる』

『これはエイ・オ、スギと云ふが、それに違いないか』

『そうだ、オ、スギだ』

そこで大杉が僕に向つて『すつかり判つちやつたんだ』と云ふと、

『喋つちやいけない、默つてゐろ』獰猛な男は、荒らあらしい身振で遮つて、

『この男の荷物を預つてゐるそうだが、それはどれか、みんなこゝへ出せ』云はれる儘に僕は大杉の置いて行つた手提鞄を、その邊りに居合せた友人のひとりに取つて貰つて、その男の前に置いた。いきなり鞄を披けると中を引掻き廻すと、

『これだけか、まだ何にか有るんだらう』

『いや、それ一つだけだ、他かには何んにもない』

『この男は無政府主義者なんだが、君もアナルシストだらう』

『僕は繪かきだ』

『それでは、この男が革命家だとは知らないと言ふのか』

『それは知つてゐる』

『いつからこの男を知つてゐるか、巴里でか』

『日本からの友人だ』

『では、この男は何處に泊つてゐた』

『知らない』

『知らない、そんなことがあるか、嘘を云ふな、友人で、荷物まで預りながら、泊つて居た宿を知らないなんてことはない』

『いや、知らない』

『よし、君も一緒に警察へ來い』この間に僕に旅券とカルト・デイダンテイテを出させて、それを他の者に書きとらせた。猶そこに居合せた友人たちにもカルト・デイダンテイテを出させて、其れを調べた揚句、その中に一人カルトを持つてゐない男がゐた。それは近々伊太利へ行くので警察の方へカルトを出してあつたのだ、その事を云つたが、彼等はその男にも警視廳へ同行しろと迫つた。

僕は、斯うなれば一晩はきつと留置されるものと思つたので、厚い服にきかえ、外套まで着て彼等について部屋を出た。階下に降りると、ホテルのビュウロウで、門番が二人の男に謝

べられてゐた。これは後とから聽いたことだが、鴨居はその時引越をするので、タクシーに荷物を積んで、正に宿を離れようとした刹那、折悪しく僕のところへやつて來た探偵の一團に、さては此奴——多分それを僕と思つたのだらう——感ずいて、風を喰らつて逃げ出すなと、思はせたものらしい、ところが當の僕は部屋に居ると判つたので、その方は二人の者に任せ僕の方へ來たのだ。それで鴨居にカルト・デイダンテイテを見せろと迫つたが、鴨居はそんなものを持つてゐなかつた、そんなことで調べが暇取つてゐたのだそうだ、幸に鴨居はカルト・デイダンテイテがなくとも引つぱられずに濟んだ。

黄昏れ近かつた。悠々せまらぬ巴里人も、夕暮の往來の足は速く、さつさと行き過ぎて行つた。大杉の傍らには二人の男が附添ひ、僕の側には髭のデブが附いてゐた。そして歩行を急がせた。ノートル・ダムの尖塔に淡い夕陽が漂つて、遥かセーヌの河かみは靄に包まれてゐた。流石にサン・ミイシエル橋のうへでは、多勢の探偵に引かれて行くエトランヂエとて、往き來の人々の足を留めた。警視廳までは僅か三四丁の距離だつた。セーヌ岸の入口から廳内へはいると、廣場を横切つて、裏側の階段のところで、僕は大杉に追ひついた。『どうして釋縱つたんだ』と聲をかけた『新聞に出て了つたそうだよ』『僕は何にも知らないで通すぜ』『うん、それでいゝ』廣い階段を三階まで上つたところで、狹い細長い廊下に引つぱりこまれた。ろくに燈も點いてゐない、濕つぽい臭いのする廊下を奥の方へ行つたところで、ぱつと燈のついた大きな室に入れられた。その室にはテーブルが五つ六つ列んで四五人の男が事務をとつてゐた。僕はそこで旅券とカルト・デイダンテイテを渡すと、室の奥まつた隅に佇たせられた。佇つてゐるところの直ぐ側に、次の室へ通ずる戸が開かれてゐた、そつちは椅子なども安樂椅子で、大きなテーブルの向ふに、白い顋髭を奇麗に刈込んだ、品のある、いかにもこの方面の係長かとも頷ける男が、葉卷を啣へて、ひとりの男を相手に話してゐた。大杉はそつちの方へ入れられた。彼は安樂椅子に腰を下ろすと煙草を取り出して、マッチを擦つた、そして僕等の方を見てにこにこしてゐたが、傍らに立つてゐた男に『疲れちやつた、水を持つて來てくれ』と吩咐けた。その男は、さも一存では行かぬと云ふ顏付きで他の男を顧りみた。そして出て行くと、水瓶とコップを持つて來た。大杉は『あゝ喉が渇いた』と云つて水を飲んでゐた。こゝへ來てから彼はすつかり元氣になつて、昂然としてゐた。暫くすると隔ての戸が閉められて了つた、僕の方は別に調べるともなく、その椅子に坐らせて置いたが、友人の方は既にカルト・デイダ

ンテイテを取つてゐることを他の課で調べたのだらう、小一時間も待たせたうへ、歸つてもよろしいと云ふ、僕はどうするのかと訊くと、今晩は歸つてもいゝが、明朝九時に茲へ再び來いと言渡されて、そこを出た。

十一

あくる朝、十時頃警視廳へ出掛けて行つた。例の獰猛な太い髭が僕の行くのを待つてゐた。そして彼がひとりで使つてゐるらしい、小さな見窄らしい室に連れこまれた。

卓子を挾んで向きあふと、まづカルト・デイダンテイテを出させ、それに貼付してある寫眞と、僕の顏を見較べ乍ら形の如く訊問を始めた。身元證明書に書きこんである事を、その通り僕の口から言はせた。それが濟むと、如何にも拔き直つた恰好で、鳶のような眼をして僕を睨み、嘘を云ふと什麼目に遭ふか分らんぞ、と頭から威嚇してかゝつた。

『おい、君もあの仲間だらう、もう種があがつてゐるんだから、眞直ぐに白狀して了へ、空恍けたつて駄目だ』

『いや、僕は仲間ぢやない、繪を勉强に來てゐるんで、他かの事は何にも爲てゐない』

『それならどうしてあんな男と知つてゐるんだ、あいつは惡い奴なんだぞ、君の仲間はさ。日本で八回も牢へ入れられたと云ふぢやないか、それを知らないのか』

『それは知つてゐる、彼は僕の友人なんだ、昨日や今日知つたんぢやない、ずつと前からの友達だ』

『エイ・オ、スギは何日に君のところ行つて、あの鞄を預けたか』

『二三日前だ』

『それ以前のことは知らないのか、知つてゐるだらう、僕の方では君も仲間だと見込んでゐるんだ。この國ではアナルシストは牢屋へ打込まれるんだ、その揚句追放だ、さう云ふ法律のあることを知らんのか』

『――知らない』

『あの男は牢へ入れられて仕舞つた、後は追放と決つてゐる君も牢屋へ入れられるんだぞ、そして追放だ、いゝか判つたか』

――仕方がない、どうでも勝手にするがいゝと云ふ顏をして默つてゐると、そこへこれも探偵などに有り勝ちな狡猾さうな、眼の凹んだ、瓢簞頭の薄禿げの、ヒョロッ高い男が入つて來た。チロチロとこせついた流し目で僕を見下してゐたが、そこへ腰を下して了つた。

『此奴だね、昨日の日本人の仲間は、ふん悪い奴だ。日本人なんて碌な人間ぢやない』斯麼餘計なことを云ふと、前の男と何か話してゐたが、それが濟んでも立ち去る風もなく、その儘腰を下ろして、チロリ／＼睃しい流し目を僕に浴びせてゐた。又太い髭だ、

『何時から今の宿へ泊つてゐる、その前は何處にゐた』

『二週間ほど前からだ、その前は南フランスで繪を描いてゐた』

『繪を描いて居たのぢやあるまひ、革命の宣傳でもしてゐたんだらう』

『フラス語も喋れないのに、そんな眞似は出來ない』この時は成程と云ひたげな顔をしたが、英語は話せるかと訊く、いや話せないと云ふと今度は、ドイツ語は話せるかと獨逸語をつかつて來た。一寸癪に觸つてゐたところだつたから獨逸語ならちつたア話せると、ドイツ語で云ひかへしてやつた。先生それが分からなかつたのだらう、キヨトンとして、何んとも云はない。恐らくドイツ語が話せるかと云ふ一句だけしか知らなかつたのだらう、若し僕がフランス語で答へたなら、他からドイツ語の喋れる奴を引張つて來るところだつたらう、そんな者を呼んで來られちや助からない。

『今日は歸してやるが、何處へも行つちやいけない、その内に命令が行くから待つて居ろ』と、もう判り切つた嚇かしを云ひ乍らも、險悪な相好を崩さうともしなかつた。

それからは鳥渡忙がしい日が續いた。S・KやA新聞の特派員で、大杉とは語學校の同窓だつたMや、僕の友人のHに色々と世話になつた。Mは早速或る辯護士を訪ねて、事件の成行、牢屋の樣子などを訊いて來て與れた。それに據ると處罰される程度は大いしたことはないが、追放は免れぬと云ふことだつた。猶差入物等は自由に出來るが、本人が金を持つて居れば、牢の中で勝手に買へるといふのだつた。僕は大杉がまだ五六百法持つて居たことを知つてゐたから、その方は急に差入れることもあるまいと思つた。

そこへ里昂のJから問合せの電報が來た、その返電を遅らせて居ると、里昂の連中の總代としてUが出て來た。續いて郊外から、これも支那人のLが來た。Uはリベルテールの方へ行つて樣子をきいたり、相談して來て　コロメが明日牢屋へ面會に行くが、多分その時、手渡しが出來るだらうからと、僕に手紙を書くことを勸めた、僕は大杉に手紙を書いてUにリベルテールまで持つて行つて貰つた。Cが里昂へ歸へる時、僕は、Uと相談して、大杉の泊つてゐたボアン・ド・ヂユールの宿へ大杉の

名で、當分歸らぬから荷物はCに渡して呉れと、電報を打つた、Uが里昂へ歸つて行くと、Lが又出て來た、そして雨の中を二人で辯護士を訪ねて頼んだ。そのうちに里昂から Jが家宅搜索をやられたといふ知らせが來た。

暫く經つてLが來て云ふには、辯護士はトレスと云ふのに變更したから、そこへ行かうと一緒に出掛けた その時面會の手續を頼んだ。僕が行つても日本語で話すことは禁じられては何んにもならなんと云ふ懸念から、その方はYに行つて貰つた。持つてゐるとばかり思つてゐた金は警視廳の方で取上げられてゐたので、金は直ぐHに借りて差入れた。面會に行つたYの話では、至極呑氣なもので、日本語で勝手に喋れたと云つてゐた。

或る日、僕のところへ、がつちりとした大男の訪問者があつた。彼は髭のない廣びろとした顔に愛嬌笑を湛へて、ムッシュウ・ハヤシは貴方ですか、僕は警視廳の者ですが、鳥渡お尋ねしたい事があつて來ました。いえ何んでもない事です、と、終りの方を大きな笑ひに紛らせて、僕の大きなトランクの上に腰を下ろした。實はその日、僕は郊外のセーヌ河の島の中へ引越する筈で、トランクを引張り出してゐたところだ。

また、カルト、デイダンテイテを出させ、其れを手帳に寫しながら、併し彼はいつもにこにこと、叮嚀な口調で、既に警視廳の方で言つて仕舞つてあることを、繰更へし質ねたうへ、『いや、君は革命家ではないんですね』と、こいつを何遍も挿んで云つてゐたが、僕の云ふことを疑ふ樣子もなく、話を至るて別な事に變へたりして、よく判りました、有難う、もう是れでいゝです、先刻ムッシユウ・カモイを訪ねたが、あの人は仲々いゝ人ですね、斯麼お世辭を云ひ、(チヨン)僕の手を握つて歸つて行つた。(これも後に聞いた話だが、恐らく同じ日だらう、ソロボンタ街十八番のホテルに行つて、恰度そこに居合せた、日本人のNを捉へて、僕のことを色々訊ねて、そこでも矢張り僕のことを、革命家ではないかと念を押して居たさうだ。そして歸りがけに、僕をいゝ人間だと褒て行つたと云ふのだ。僕はこのソロボンタ街のホテルに極く僅かの間だ居ただけで、それは警視廳でも、そこに居たことは言つてなかつた。これで見ても、それからそれへと餘程念入りに調べたものだと思はれる。)

この訪問者の來た夕方、僕はHの自働車に荷を積んで、郊外へ引移つた。尤も巴里へは毎日出て居た、遲くなつて巴里泊ることも度々だつた。トレスの家へも何遍か足を運んだ。

いよいよ二十三日に公判が開かれると、トレスから通知を

受けて、フランス語に堪能なMに、一緒に傍聽に行つて貰ふことにした。

公判は正午から開らかれるので、僕等は晝飯も喰はずに、ラ・シテーの巴里法院へ駈けつけた。廣い廊下を探し歩いて、漸くその法廷を見つけた。それは微罪を扱ふ法廷だと、Mの話だつた。もう傍聽人が大分詰めかけてゐた。大抵勞働者風の男と、その内儀さんらしいのだつた。なかには若い娘なども消然と佇ずんで居た。その群の裡に、勳章をつけた監視人だの、身長の馬鹿大かい巡査が、ぬつと立つてゐた。法廷の入口には監視人が居て、裁判の始まる直ぐ前まで、入場させぬやうに頑張つてゐた。そこへ辯護士のトレスが、これも見知越の助手と連れ立つて來た。

トレスに判決の模樣を尋ねると、牢からは直ぐに出られるが、多分即刻追放となるだらう。殆ど裕餘はないと云ふ話だつた。そこで僕は、日本から大杉宛で金の着いてゐる事を話し、彼の署名がないと受取れないが、僕を代理人として受取方を委任することを、大杉に書いて貰ふやう取計つてくれと頼んだが、もうそんな事をしてゐる隙はないから、他の方法で金を作つて自分の處まで屆けてくれ、さうすれば大杉に手渡しするからと云つて、行つて仕舞つた。

法廷へ傍聽人を入れ始めた。Mと僕が這入らうとすると、監視人が、傍聽許可證を持つてゐるかと咎めた。いやそんな物は持つてゐない。では入場させる事は出來ないと云つて、何んと言つても頑としてきゝ入れなかつた。仕方なしそこに佇つてゐると、トレスの助手が僕等を迎いに來て、別の入口から入れて呉れた。

公判は既に開始されてゐた。傍聽席は腰かける餘席もない程びつしり詰つてゐたが、Mと僕はそこへ割込んで腰かけた。横手の一段高い被告席には十人ばかりの被告が二た側に列んで腰かけてゐた。大杉は下の列の手前の方へ二人目のところに、ぼうぼうと鬚で顏中を眞黑にして、こゝろもち窶れてゐたが、僕を見つけるとにこにこして手を擧げて合圖した。

正面にはヨボヨボに老耄れた裁判長を眞ん中に、二人の陪席判事が控へてゐた。これも裁判長に劣らない老人で、くしや〱な感じだつた。一人づゝ呼び出されて判決を言渡された。どしどしと形がついて行つた。そのうち二三人裁判長から、禁錮幾日、罰金幾らいくらと言渡されるや『有難う（メルシー）』と云つて引さがつた者が居た、その度びに傍聽席からどつと笑聲が起つた。一人いゝ加減の年配の勞働者の内儀さんらしいのが、頗る雄辯に滔々と裁判長に喰つてかゝつた、却つて證人に引張り出された

巡査の方が、蒼ざめて固くなつてゐた。斯う流暢に喋れることは、この國の言葉にもよるだらうが、日本の一般法廷で觀る、被告が妙に恐る恐る固くなつて、ろくすつぽ口も利けないのとは、餘程趣きが異つてゐた。僕の觀たこつちの法廷では、被告が云ひたい事は憚れもなく勝手にぺらぺらと喋るが、この内儀さんも禁錮十五日を言渡された、まだ何にか云ひたさうだつたが、監視人に遮ぎられて法廷から出された。このところは何處も同じこつた。あらかた仕舞になつて漸く大杉の番が來た。彼のも至極簡單なものだつた。唯だ、他の連中の場合には辯護士が付かなかつたが、彼のためにトレスが中々の雄辯を揮つて辯護につとめた、判事連はトレヌの熱心な辯護も、うはの空らできゝ流してゐるように見へた。裁判長の言渡は禁錮三週間で、彼もそのまゝ引きさがつた。(トレヌは最近ゼルメン・ベルトンの辯護をして大分巴里で騷がれてゐる、ゼルメン・ベルトンは若い女の無政府主義者で、この一月王黨の一首領を暗殺したのだが、今度の判決で無罪放免となつた)

十二

公判のあつた翌朝、僕はHを訪ねた、彼を通じて大使館へその後の成行きを聽合せて貰ふ爲めだ。彼は直ぐ大使館へ電話をかけて問合せてくれた。それに據ると日本から、北方の國々へは入れるなと云ふ訓電が來てゐるから、結局、西班牙へ行くより他かあるまいと云ふことだつた。それに警視廳でも西班牙へやる事に決めて、今晩の八時の汽車で立たせる手筈になつてゐる事まで判つた。

でこの場合何んとかして、日本から來てゐる金を彼に渡し、又僕も逢つて置きたかつたので、その足で大使館までHに一緒に行つて貰つた。そこへ大使館の杉村氏が警視廳から歸つて來たところで、警視廳方面との行きさつを聽いた。(この事は大杉が同じく『入獄から追放まで』に書いてゐる)

出發の時刻までに大使館から、もう一遍使ひを警視廳へ出すと云ふので、金はその時渡して貰ふやうに頼んだ。停車場へ行つたところで果して逢へるものか、逢へぬものか判らない、で、その晩僕は停車場へ行かずに仕舞つた。どうせ行先きが西班牙なら、直ぐに便りもあるだらうし、ヨーロッパでもう一度は必らず逢へるものと思つた。

すると、翌日の夕刻マルセイユから電報が來た。それには、突然西班牙行を中止されてマルセーユに送られた、委細は手紙を出したとあつた。僕はその手紙の着くのを待つて巴里に泊つた。

□

きのふの朝放免と同時に警視廳へつれて行かれて、直ぐ國境まで出ろと云ふ命令を受けた。警視廳から大使館へパスポールを貰ひに使ひが行つて、それと一緒に杉村氏がやつて來て、いろ〳〵骨を折つてくれたが、要するにどうしても命令の撤回も緩和も出來ないと云ふ強硬さだ。

それでも最初はスペインの國境以外には行けないと云ふ事だつたが、最後にマルセイユまでときまつて、八時のラピットにガール・ド・リオンまで送られて來た。

牢やで大ぶ疲れてゐるし、一等寢台としやれて、こゝノアイユに落ちついた。

着くと直ぐ領事館へ行つて、巴里から着任早々の何んとか云ふ若い領事に會つた。先生はまだ何んにも知らずにゐた。が、とにかく、パスポオルなしで船に乘れる方法を講じて見ようと云ふ事になつた。領事も大使館と相談すると云つてゐたが、猶誰れかに行つて貰つて、杉村氏によく賴んでくれ。お禮も云つてくれ。

金は今三百法ばかりしかない。甚だ相濟まないが、友人諸君から金を集めて日本までの船賃をつくつてくれないか。日本へも今電報を打つたが、ちよつと當てにならない。

そしてその金を持つて、こゝまで來てくれないか。と云ふのは、リオンにある荷物も取つて來て欲しい。外にもいろ〳〵賴みたい事がある。そのつもりでJにも手紙を出して置く。が、若し君が來れないようなら、Jへもそう通知してくれ。リオンへ寄つたら Eise Perlns の L' Lomme et la terre と云ふの古本を買つて來てくれ。二百法ばかりだ。Jが知つてゐる。

それから、裁判所から受取つたケエスの中に、豫審判事が（この事實は辯護士も知つてゐる。）證據物件として持ち出した日本文の手紙や原稿なぞがはいつてゐない。これは辯護士と相談して、貰へるものなら貰つて來てくれ。

これはMが一番よからうと思ふが、僕の拘引以來の僕に關する新聞記事をあつめて貰つてくれ。二日のリユマニテにちよつとした記事があつた筈だし、猶エクレエルとか云ふ新聞に、大ぶ詳しい僕の事があつたそうだ。これは辯護士が見せようと云つてゐたが、とう〳〵持つて來なかつた。だから辯護士に聞けばよく分る。外には、リベルテエル以外に大したものはあるまい。

頼みたい用事はこれだけだ。

いろ〳〵心配してくれた友人諸君へも手紙を出したいが、ア

ドレスが分らないので失敬する。皆んなによろしく云つてくれ。

一體、こゝにかうしていつまでゐていゝのか分らないが、そしてそれはたぶん默認と云ふ形なのだらうと思ふが、來月早々出る船で出發したい。多分日本の船になるだらう。

二十五日正午

榮

倭衛兄

僕の拘引のために、いろ／＼迷惑をかけた人達によろしくおわびを頼ふ。殊に警視廳まで連れて行かれた人達に。

この手紙を受取ると直ぐマルセイユへ、三十日までに凡ての用件を濟せて行く、と電報を打つた。船は郵船の箱根丸で、マルセイユ出帆は六月三日と云ふ事も調べた。差當り船賃の調達だが、短時日の間に纏つた金を集める事は困難だつた。併しそれだけは是非間に合せやうと、まづHに相談したところ、其れは大使館が出して吳れるだらう、僕が仲に這入つて纏めやうと云つてくれた。そつちはHに一任してひと安心したものゝ、大使館が出してくれるのは船賃だけで、他の費用として應分の金をつくらなければならなかつた。三十日になつたが、未だ大使館で確答してくれないと云ふのでマルセイユへ立つことが出來ない。漸くその日の夜るになつて、大使館が一等の船賃を出す、猶それはマルセイユの領事が取計ふからと、Hから聞いて、自分の金の有りつたけとN・Jに貰つた金とMがくれた餞別とを持つて、三十一日午前八時半の特急に乘つてマルセイユへ向つた。

この間だに里昂のJから僕の行き方が遲いので、自分で荷物を持つてマルセイユへ行くと云ふ知らせを受けてゐた。Jは船の出帆日を知らないので、僕の行くのが待ち切れなかつたのだ。

僕の乘つた列車は午後十時にマルセイユに着いた。ホテル・ノワイユに行くと、大杉とJが、君の着く頃だらうと待つてゐたと云つて入口に行つてゐた。早速そのまゝ近くのカフェへ行つて久振りで話し合つた。その夜十二時の汽車で里昂へ歸へるJを二人で驛へ送つて行つた。それからカフェを一二軒歩いて一時過ぎに宿へ歸つてぐつすりとねむつた。

翌る一日の朝、二人は先づ領事館へ行つて領事に會ふ事にした。領事はHの友人で僕はHからの紹介狀を持つてゐた。領事との話の顚末は茲に書かないが、結局、神戸までの二等切符を買つて貰つた。

領事館を出ると、僕はまづ日本酒を一杯飲りたくなつた。屢

屢飲んだ馬耳塞の日本酒は忘れ難いものになつてゐた。僕は大杉を誘つて日本料理屋へ行つた。陶然としてそこを出ると、これからエスタツクへ遊びに行かうと再び彼を誘つてタクシーに乘つた。エスタツクでは思はざる時の僕の訪問を皆なで喜んで迎へてくれた。海を眞下に見下ろすテラスにテーブルを出して、宿の者も一緒になつて、小一時間もビールなどを飲み乍ら話した。そこで僕は大杉と宿の娘の寫眞を撮つた。何んの氣なしに撮つたその寫眞が、今は、思ひがけない彼の形見となつて了つた。

次の朝、里昂からAが大杉の荷物を持つてやつて來た。これはJが取殘して來たものだの、野枝さんから送つて來た小包の類だつた。そこへこれも危ふんで居た日本からの金が着いた。それで多少のお土産が買へる事になつた。

マルセイユ見物をするAと別れて、僕は大杉の買物の手傳を頼まれた。君に色合や恰好を是非見立てゝ貰ふんだ、彼は爲渡僕を煽てゝ、大きな百貨店に入つた。そこで子供と野枝さんへのお土産の洋服を買つた。まだ生れない赤子の分まで彼は買ひととのえた。色合とか恰好を一つ一つ僕に相談して、大分永くなつたので、僕は飽きあきして仕舞つた。それで多分面白くない顔をして居たのだらう、彼が『おい、斯う女房のものなど買つてゐると、可厭な氣がするだらう』と云つて笑つた。『餘り面白かないさ』斯う僕が云ふと『ぢやこれ位で止めるとしようか、本統はもつと買ひたいのだがね』それで二人で笑ひ合つて戸外へ出た。

その日の午後、船は入港した。一應船へ行つて見ておかうと、Aと三人で自働車で、途中水上警察署へ寄つた。そこで一時間近くも色々な事を訊かれた。側に居た僕にまで、何んとか云つてゐたが、それでは乘船前に荷物を持つて、もう一度來いと云はれて、そこを出て船へ行つた。

間もなく船から宿へ歸つた。夕方だつたが、彼は今のうちに荷物を船へ運んで置くからと云つて、彼はひとり荷物を持つて出掛けに、水上署へも一寸寄つて行くと云ふので、僕はそれを止めて、かまはないから默つて荷を運んで仕舞つた方がいゝ、あんな處へ寄つたら又何にかと煩い事を云ふに決つてゐるからと、云つたのだが、何に大した事もあるまい、寄つて行くよ、と彼は行つて仕舞つた。

僕とAは日本料理屋で彼を待つことにして、先きに行つて始めてゐた。いくら待つてもやつて來ない。そのうちに、多分船頃だつたらう、僕に電話で彼の傳言だと云つて、大杉の上陸禁止になつたこと、僕に直ぐ船へ來るようにと知らせてくれた。

Aにそこで待つて貰ふことにして、僕は船へ駈けつけた。

君の云つたやうに、あんな處へ寄らんければよかつた、荷物を調べるのはいゝが、三四人のスパイに梶かれて船へくると、上陸禁止と云ふのだ。今晩は最後のマルセイユの夜を大いに娯もうとしてゐたのに。と彼は殘念がつてゐたが、もうどうしようもなかつた。船の降り口に三四人のスパイが見張つてゐて、船から出る事が出來ない。宿に殘して來た書籍の類は、僕が明朝持つてくる事にして、待たせて置いた自働車に乘つてAの待つ處へ歸つた。僕もがつかりした、急に飲む酒も不味くなつた。Aひとりを案内して夜のマルセイユを歩いたが、Aはその夜十二時の汽車で巴里へ歸つて行つた。

箱根丸は六月三日午前十時にマルセイユ港を出帆した。

その朝僕は起きると直ぐ、重い書籍の類を自働車にのせて船へ行つた。彼の船室で領事と僕と三人で話してゐると、出帆を知らせるドラガ鳴り渡つた。僕は船から降りた。船はしづかに埠頭を離れて行つた。

僕はひとりマルセイユに滯つて、日本酒との別れを惜んでゐたが、間もなく體の調子が狂つて來たので、急いで巴里へ發つて來た。

その後ちはあれほど飲んだ酒もぱつたり呑めなくなつた、いまもそれが續いてゐる。巴里に歸つてセーヌの島の中でひとりぽかんとしてゐると、ポート・セッドからの手紙が着いた。

□

七日　地中海にて　榮

倭衛兄

いろ〳〵有りがとう。こんどの旅行では、君のためにすつかり助かつたわけだ。他の諸君にもよろしく。

地中海は實に平穩だ。天氣はよし、まだあまり暑くはなし、ほんとにいゝ航海だ。こんな具合で、ずつと日本まで行つてくれると有りがたいのだが。あしたの朝は早くポオトサイドに着く。が、上陸が出來ないんなら、どこに着かうと僕の大して係はり知つた事ぢやない。

いろんなボオイ共が物好半分にキヤビンへ遊びに來る。ゆふべも極く若い、早稻田の工手學校を半分でよしたと云ふ男がやつて來て、いろ〳〵社會主義の質問をして行つた。

又、御願ひがあるが至急日本に向けて、いつかもお願ひした事のあるフアブルの本を送つてくれないか。リオンで買つた筈なんだが荷物をしらべて見たらない。歸ると直ぐ飜譯しなけれ

ばならないものなんだ。

自叙傳の装ていを忘れるなよ。

次にコロンボで出した手紙が着いた。

□

出來まいと思つてゐた上陸がポオトサイドでは出來た。が、こんどはコロンボではとても駄目だらうとあきらめてゐる。

紅海は實に靜かだつたが、アデンの沖頃からそろ／＼荒れだした。それでも、多少船に馴れたものと見えて、ごく弱い僕が二等の食堂の日本人として威張つて來た。

マルセイユを出ると直ぐ買つた白葡萄酒の一瓶が、まだ半分と少ししか減らない。ポオトサイドで買ひこんだ煙草も此の四五日はちつとも減らない。

けふは大分靜かになつた。あしたはコロンボだ。これで先づ半分。

六月十九日、

七月幾日だつたかに、無事に着いたと云ふ電報が東京から來た。それ切り彼からは何んの便りも貰はない。

東京からの電報が來て間もなく、里昂のJからエキスプレスで手紙が來た。それには、唯だ單に大杉に關連したといふだけで、他に何んの理由もなく、佛國政府から追放命令を受けた。出國までに五日間の猶餘を與へられてゐるから、二三日中に巴里に出て行く。猶この際、君もそんな命令を受けていやしないかと、一寸心配してゐると書かれてあつた。

二三日の後Jは巴里に來た。Jがいよいよフランスを追はれる夜、僕はJの仲間の支那人六七人と送別の晩餐を共にして、その夜のうちに獨逸へ落延びるJと訣れた。Jは今もなほ追放のまゝ不自由な身をフライブルグにとゞめて居る。病身な彼の細君は里昂にひとり殘されてゐる。

僕は八月十日頃Jの追放された事を大杉に知らせたが、恐らくその手紙は今度の大震災に遭つて紛失したか、或は彼の手に這入らない前に、彼は殺されてゐたらうと思ふ。

一九二三、十二月三十日、

巴里にて

クレオパトラ

鼻

堀口大學

クレオパトラよ
私はお前を思ふ
さうしてお前の鼻に就いて考へる
若しもお前の鼻がより少し低かつたなら
若しもお前の鼻がより少し高かつたなら
世界の地圖は變つてゐたであらう
さうして地圖よりももつと非度く
お前の顏が

クレオパトラよ
クレオパトラよ

釣魚

戀には英雄も性がないのです
ナイルの泥水に釣をたれて
今日もアントニウスは日を暮しました
クレオパトラを思ひながら
棒鱈を釣りながら

逢曳

シンダス川の夕ぐれだ

アントニウスの陣營に
クレオパトラは逢曳に行くのだが
白鳥の舟をめぐつて
おびただしい睡蓮が流れます

アスピック

若草いろの炎(ほのほ)とや
へらへらと織(かゞ)かりけり
無花果(いちじく)の葉になど住まん
ナイルの泥の糸みみづ
クレオパトラの死の蛇

秋の空

私はお前を思ふ
空はもう秋空だ
ばらにさびしい匂がある

影多いこの丘に
私はお前を思ふ
犬が立ちとまつて風にきき入る

花少女

匂ひがおどる
光が微笑する
君は花の如き
少女(をとめ)にておはせば

若鳥の死

戀に傷ついた
一羽の白鳥が
池水の面にもだえ死ぬ

ロマンチックな若鳥であつたが
水に映つた雲の姿を
白鳥の少女とまちがひて
思ひ焦れてゐたのだが

雲は消え　雲は流れて
戀はそこにもなくて
白鳥はもだえ死ぬ

白い若鳥の屍が
池水の藻の面に
ああ　雲のかげのやうだ

凧

太郎さん　二郎さん
皆さん凧をあげませう
空のはてしは星の國
遠くへ夢をとばせませう

ロシアの入日

母は娘を賣り度いのだ

父は娘を食ひ度いのだ
ああ　赤き草原
ロシアの入日は血のいろだ

慰め

魂よ　そんなに失望するな
私が朝に歌つた歌を
一人が夕にきくかも知れぬ

魂よ　そんなに失望するな
私が死んでしまつた後に
一人が私の歌を愛するかも知れぬ

獄裡の松陰

高須芳次郎

（一）

空は灰色に濁つて暗く重かつた。

冷めたい梅雨が愁人の涙のやうに降りそゝいで、いつやむともわからなかつた。しめつぽい風が冥府の底から音づれて來たやうに吹いて、野も山も泣きくたびれた顔で雨にぬれ、川の水は溢るゝばかりに高い音を立てゝ流れてゐた。井伊大老の高壓振や長井雅樂の策略にひつかゝつて、長州の獄舍から江戸へ護送せらるゝことになつた吉田松陰は、半年ばかりの幽囚生活を漸くやめて、悲壯な旅の人とならねばならなかつた。

「今度俺が江戸へ出たら、もう故郷を見ることが出來ぬ。過去半年の獄裡生活が故郷の見おさめとなるわけだ。長井の奸策に陷られた上は、生きて歸ることは到底出來ない。事によると毒殺されるかも知れぬ。或は江戸へゆく迄に旅の途中で生命を取られるやうなことになるかもわからない。いづれ死は免れぬのだ。」

松陰はうす暗い獄裡で、黴くさい空氣を嗅ぎながら、ぢつと獄舍をぬらす雨の音を聞いて、いろいろのことを考へた。松陰は自分の至誠が長井にわからぬのを何よりも殘念に思つた。長井は井伊大老の前で長州が江戸政府に向つて從順であることを示すために、藩内の過激分子を手強く抑へ付けることにつとめた。長井は松陰の才能を知らぬのではなかつたけれども、松陰が國禁を破つて、メリケン（米國）へゆかうとしたり、或は老中間部下總守（詮勝）を暗殺しようと企てたりしたことをひどく嫌つた。

「最早、吉田を活かして置くわけにゆかぬ。それには、江戸政府の手を籍つて、吉田を處分するよりほかはない。」

長井はかう決心したらしかつた。松陰の眼には、長井の樣子

がよくわかつた。それで松陰は一書を長井に與へて、その心事を告げた。

「私はどんな場合に臨んでも、貴下らに禍を及ぼすやうな云爲はいたさぬ。また藩中に迷惑をかけるやうなことは斷じて仕らぬ。私は平生から他人を不忠とか不義とか大言に罵つてゐたのですから、今度は一身を以て、國難に殉じなければならぬと夙に覺悟いたしをるのである。」

かういふ意味を手紙のうちに書いた。そして松陰は萬一の場合を豫想して、入江兄弟——入江杉藏、野村和作——にそつと手紙を與へ、胸中の秘密を洩らした。それは「吉田め、長井のために犬死しをつたな。」と思はれたくなかつたからである。

「われ若し道中又は江邸にて毒殺せらるゝとも、長井の甘言に陷られたと他友は云ひもせよう。汝弟兄のみは、義卿毒を知つて飲みたるを知つてくれよ。人に告げずともよし。心に知つてくれよ。爰で涙が落ちた。」

毒殺！　松陰はこれまで、そんなことを一度も考へなかつた。洋行を企てゝ失敗した時、國禁を破つた點で、或は首を刎ねられるかも知れぬと覺悟した。が、幸ひ生命を拾つた。その後、間部下總守を要撃しようと計つた時、松陰は自分の生命を捨ててかゝつた。ところが、中途で計畫が破れて獄舍へ押こめられてしまつた。彼れは幾度も死に面したが、まだ毒殺の恐しさに思ひ及ばなかつた。けれども長井の遣り口を見てゐると、松陰はどうも長井が自分を藩中第一の邪魔物と見て、そつと毒殺しようとしてゐるのではなからうかと疑へる節があつた。「暗討に逢ふのも、余り宜い感じがしないけれども、それを毒殺にくらべると、まだ宜いかも知れぬ。」と松陰は思つた。松陰は五月十四日（安政六年）兄から藩命だといつて江戸へ護送せらるゝ身となつたことを告げ知らされて以來早くも茲に氣付いてゐた。

「長井め、うまく俺を計りをつたな。都合で一服盛るかも知れぬ。」

と松陰は獨語した。

（二）

當時、松陰は內心、いろいろの苦悶を重ねた。自分の方針について、唯一筋に思ひつめると、もうどうして宜いか、まるでわからぬ場合さへもあつた。松陰は迷つた、疑つた、苦んだ。光明の道を失はうとするやうな氣がした。失敗に失敗を重ねると、心持がどうしても、そんな風になり易かつた。到頭、松陰は思ひ余つて、四月二十五日（安政六年）一書をその師、佐久間象山に送つて教へを請ふた。それは江戸政府や諸侯は何を恃

んでこの時勢の急潮の前に起つてゆくか、日本の恢復、興起については何處から手を着けたら宜いか、大丈夫の死所は何處が一番適當であらうかといふ三事を問ふたのである。そして松陰は深い嘆息の語氣で「私は今生きてゐて世に益するところがなく、死ぬとしても適所がございません。全く進退に窮しました。先生、どうぞ私の進んでゆくべき道を指示して下さい。」といふ意味を附け加へた。が、象山からは、まだ何の返事も來ないうちに、松陰は國を出立しなければならなかつた。

　松陰の心事が、かく迄に行詰つたのは一つはその境遇や胸のうちを一向理解してくれるものが周圍に少かつたからである。松下村塾の子弟がいくらか松陰を知つてくれたにすぎなかつた。藩主も、執政も、藩中の有力者も多く松陰について理解してゐなかつた。大抵、危險人物だと見た。時によると、その父兄や妹たちさへ、松陰の云爲を穩當だと思はない樣子をした。松陰は一藩のうちで大方孤立してゐた。そして松陰と同じ位の人物、或はそれ以上の傑物と話さうとしても、彼れの不自由な境遇が、どうしても、それを許さなかつた。松陰はひとり考へ、ひとり思つた。その末が一歩も前に進むことも出來なければ、退くこともむづかしくなつた。生きてゐても、何となく物足りない感じがした。といつて、死ぬにも場所がなかつた。そして松陰は日毎に江戸や京都の風雲を田舍の獄裡から遙かに眺めつゝ、國の前途について鋭く考へぬいた。そしていらいらしながら、時を過ごした。時には、自分を自分で持てあました。「こんな時に直ぐ象山先生に逢へたら宜いがなあ。」と切に思つた。

　松陰と象山の關係は、世間並の師弟の間柄ではなかつた。互ゐに信頼し合ふことが深かつた。象山は同藩の山寺源太夫、三村靜山らへ贈つた手紙のうちに「吉川生と申すもの、廿五年の小年には候へ共、元來長州藩兵家の子にて漢書を達者に讀下し、膽力も有之、文才も候て能く艱苦に堪え候事は生來の得手にて、海防の事には頗る思ひを悩まし、右藩兵制の事にも深く心を入れ、存じ寄りの次第を書立て其筋へ申出候義も度々有之、小生門下にも多く無之、忠直義烈の士に御座候。」といつた。また松陰は江戸にゐる桂小五郎に與へた手紙のうちに象山の事を記して「象山先生は天下の士だ。當に天下の用を爲すべきである。今にして用ひずば、天下の人はそれこれを何と謂ふであらう。」といつた。これは松陰の洋行ことに座して蟄居を命ぜられてゐた象山を救解するため、桂の斡旋を促がした折の言葉である。象山は松陰の忠直を愛し、松陰は象山の大器に心服した

　松陰が洋行の事を固く決心したのも、平生から海防などに注意してゐた爲めであるが、象山の持説やその導きによるところ

が確かにあつた。象山の手紙に「去夏米利堅(メリケン)の事出で來り、本邦開闢以來未曾有の儀たらくにて、皆御手後れと相成候。何とも手の付くべきやう無之、去りながら、七年の病に三年の艾にて當今にても邊備の急務は彼れをよく知るより先なるはなく、彼れを知るの方略は、人才を擇び、彼の地方に遣り、形勢事情をまのあたりに探知せしめ、火兵の術、水軍の方、海岸の固め城壘の製等も書傳ばかりにては何分埒あき申さず。往々靴を隔てゝ痒を掻くの歎を免れず候へば、兎角に、此人を遣はされ、その道を開き候より無之と存じ、其策去る要路の御方へも申試み、川路司農御取次を以て福山侯に奉り候上書にも其義を認め候所、事行はれざる御様子にて殘念に存候。」とある。象山は江戸政府でそれを採用せぬ上は、何とか工夫して、歐米の樣子を精確に知りたいと考へた。彼れは、その門下にも、この事を話した。松陰は象山の鼓吹した言葉に深く動かされた。

「メリケンの船やメリケン人に就いて、無暗に騒いでも仕樣がない。何を措いても、メリケンの文物、制度を直接見て、五大洲の形勢をも明かにしなければ、手も足も出る筈がない。覺束ない海外智識で何と批判したとて追付かぬ。生命がけで洋行することが先決問題だ。」

松陰は泌々から考へたのである。松陰が象山にその決心を告げた時、象山は暗に洋行の方法をほのめかし、旅費四兩を松陰に貸與した。それに松陰が、アメリカの提督ペリイらに與へる手紙をも喜んで添削した。松陰はかうして象山と深く默會するところがあつた。が、洋行のことは全く失敗したが、松陰が象山を敬慕する心持は一段深くなつた。故郷へ歸つてからも、始終象山のことを思つた。象山の雄邁な姿、豪快な言動を思つた。そして一日、象山を見ることが出來ぬのを殘念がつた。

かうして多感な松陰はいろいろ迷ひ、悩みながらもまだまだ國のためにつくさうと朝夕考へてゐたのに程なく、誅殺されねばならなくなつたと思ふと、ひどく胸が迫つて覺えずほろりとなつた。それに父母がどの位、松陰のことを心配してゐようかと氣付くと、悲痛な感じが、もう一杯になつた。そしてさびしい梅雨の音が彼れの魂の底に泌み入るやうに聞きなされた。

(三)

松陰は江戸に向ふ前日、獄舎の役人(松陰門下)福川犀之助の心づくしで、暫時、生家へ歸つて、父母、親戚らに訣別の言葉を述べた。親思ひの松陰は人知れず暗涙を飲んだ。それから松陰は、門人浦無窮に決死の覺悟をそれとなく告げて、後の紀念に自分の肖像を描かせた。松陰はその肖像の上に書き加へた

自賛文のうちで「自分は國のために計つて、不忠の臣を除かうとしたが、才略に乏しいために失敗して故鄕の人々にその狂頑を笑はれた。自分は到底故鄕に容れられない人間だ。けれども自分はいつも至誠を以て押通して來たのだ。」と述懷した。

「故鄕の雨の音を聞くのも愈よ今夜かぎりだ。」

松陰はかう思ひながら、じめじめした獄舍に冷めたい夢を結んだ。折柄、夜の闇の中をほととぎすが血を吐くやうに鳴いて過ぎた。松陰は急に筆を執つて沈吟しつゝ「鳴かずあらば誰れかは知らんほととぎす、さみだれくらく降り續く夜は」と紙片に記した。

寂寥と憂愁のうちに夜が明けると、雨は尙ほ執念深く續いてゐた。その日（安政六年五月二十五日）松陰は愈よ長州萩を後にして江戸へ護送さるゝこととなつた。松陰は半年ばかり住み馴れた獄舍を出て、駕籠に乘つた。松陰の門人福川はいたましさうに松陰を見て何彼とよく氣を附けてくれた。駕籠が動き出すと、松陰はよそながら、故鄕の人々に訣別して、ぢつと瞑目した。門人のうちにはそつと雨の中に立ちつくして松陰を見送つたものもあつた。いろいろの思ひが一時に松陰の胸に湧いて出て、どうにも仕樣がなかつた。兩親のことは妹たちによく賴んで置いたので、その方にはもう心殘りがなかつた。が、日本の前途、長州の行末について深憂した。井伊大老が勅許を經ないで日米假條約に調印したことが導火線となつて、密勅の降下となり、安政の大獄となり、多くの勤王志士らが幽囚せられて、内外共に不安な有樣になつたについて、松陰はひどく心を惱ました。そして江戸政府の高壓政策には、非常な反感を抱いた。松陰は一本筋に尊攘主義を押通して行詰つた局面を打破つてしまはねばならぬと考へた。

松陰は過去の失敗を悔ゐなかつた。過去はその儘葬つて、現在に生きてゆかうとした、未來に生きてゆかうとした。刻々に彼れは自分の新しい生命を切りひらいてゆかうとした。が、それでも、氣分の具合で、過去の失敗のあとを胸の上に不圖思ひ浮べるやうなことがあつた。殊に松陰が時々忘れかねたのは、彼れと一緒にアメリカ行を企てゝ失敗してから、野山の獄舍でまだ若いうちに死んだ金子重輔（澁木松太郎）のことであつた。金子が病に斃れたのは安政二年正月である。金子の歿後、月日が流るゝやうに早く過ぎた。もし金子が生きてゐたら、やはり松陰と一緒に江戸へ引出されたかも知れぬ。が、今は松陰ひとり後に殘つてゐて、當年の苦心を語り合ふ心友がゐない。それが松陰に取つて、一番物足りなかつた。

松陰は金子と失敗の苦を嘗めた當時のことを野山の獄中で追

憶して、安政元年冬、雪降る日に爽さに慄えながら、氷り勝ちな硯の水に禿筆をぬらして「三月廿七日夜記」を書いた。二人が、メリケンの船に乗つて、歐米へゆき、五大洲を一週しようとしたことは、松陰が唯奇を好むためでなかつた意を文中に明かにした。當時、金子は旗艦ポオハタン號を去る時、武士の魂とした刀を艦中に忘れた。金子は後でそれと氣付いて非常に殘念がつた。「武士が刀を忘れるやうでは、もう駄目だ、私は自分の性根のしつかりしてゐないのを深く恥ぢ入ります。」と松陰にいつた。

「然しあの場合は、君ばかりでなく、誰れにしてもいくらか狼狽するにちがひない。敗軍の時は兎角心にまかせぬことが多いものだ。何も恥とするに當らぬ。」

と松陰は金子を慰めた。五年後の今日、松陰はあの當時の金子の様子を思ひ浮べた。ポオハタン號に乗り移る時の金子の懸命な努力、艦中に素早く躍り入つた折の潑溂とした眞剣さ、それらを胸のうちに描き出すと、松陰は亡友が戀しくなつた。梅雨時の鬱陶しい旅にも、金子がゐたら、どんなに元氣よく、どんなに愉快に日を送ることが出來たであらうとも思つた。が、その人はもうゐない、呼んでも歸つて來ない。

梅雨は松陰の物思ひを知らず顔にじめじめ降つた。そして松陰の網籠は泥濘の路に行悩んだ。

（四）

松陰は一ケ月餘の旅を重ねて、七月のはじめに江戸の毛利邸に着いた。そして七月九日、江戸町奉行所へ送られた。松陰はやつと誅殺の禍を免れたが、今度は重い刑罰が彼れの生を押しつぶさうと待ち構へてゐた。奉行は松陰が國禁を破つて、アメリカへゆかうとしたことについては、別段問はなかつた。最初松陰を見ると語氣鋭く「お前は梅田源次郎と何か密謀をした覺えはないか。」と問ふた。松陰は直ぐに「梅田は奸物でございます。與に志を語るべき奴でございませぬ。」とはね付けた。すると、奉行はまた「お前は京都の御所内へ落文をしたことがなかつたか。」と尋ねた。

松陰はその質問の餘りに無意義なことを心の中で卑んだ。そして「落文などは斷じていたさぬ。私は一個の大丈夫である。そんな後暗いことは嫌ひでございます。けれども私から進んで告白したいことがあります。それは一書を大原三位に呈して、長州へ招き、藩主を諫めさせようといたした事並に同志を募つて鯖江侯（間部）を途中に要して諫じ付けようといたした事でございます。」ときつぱり述べた。奉行はそれを聞くと顔色を颯と

變へた。

「大膽不敵な奴ぢや。覺悟しろ、吟味中、揚屋入りを申付ける。」

から叱り付けて、松陰を傳馬町の獄舎に押込めた。

松陰が自白した間部暗殺事件は安政五年冬、その蟄居中に企てたことであつた。その時分、松陰は時局は全く行詰つたのを見て、轟武兵衛に一書を與へ「目下の形勢に際して徒らに觀望、自重してゐては駄目だ。ところが大抵の人間はこの態度で事を議してゐるから埒が明かぬ。私はそれよりも輕快、拙速を旨として、一氣にこの行詰つた局面を打破した方が上策だと思ふ。局面を破つてしまつてから、徐ろに地歩を占め、行を布いた方が宜いではないか。」といふ意を告げた。それで松陰は、ぐらついてゐる長州の藩論を尊攘一方に導かうとして、大原重徳を京から招いて、藩主の意を尊攘に決せしめようとした。その秋、松陰は胸中の秘策を洩らして「萬々失策に出候て、私共同志の者討り募り候も、三十人、五十人は得可くに付、これを率ゐて天下を横行し、奸賊の頭二つ三つも獲候上にて、戰死仕候も、勤王の先鞭にて天下の首唱には相成り申すべく、私義本望之に過ぎず候。」と述懐した。

松陰はそれらのことで、勤王志士を抑へ付けてゐた間部をひどく憎んで、十一月六日、同志をあつめ、京に入つて間部を暗殺しようとした。勿論、一命はないものと考へてその父母に訣別書を斷つた。それには、松陰の志が明かに述べてあつた。一字一句の上にも、彼れの熱血が沸々と湧き出てゐるやうであつた。松陰は何を措いても、江戸政府が天皇の勅を奉じないで、勝手に日米假條約を結んだことを不當とした。また江戸政府の高壓政策が、勤王の志士を激昂させた爲めに、水戸、尾張、越前、薩摩らの藩士が井伊大老を暗殺しようとする風説を聞くと、ひどく感奮した。局面打開のためには、先づ自分がその先鞭をして、京にゐる間部を殺さうと決心した。そして同志をあつめて、血盟書まで作つたが、周布政之助に制せられて、機を失つた。その上、十二月五日、長州では松陰の過激思想を恐れて、また獄中に彼れを投げ込んだのである。

松陰は傳馬町の獄舎に入つてからも、日夜に國のことを念頭にかけた。高杉に與へた手紙のうちには、アメリカの總領事ハリスなどの様子を記した。それには「僕江戸に來り、墨夷（米人）の事體見聞、大に驚き、又竊に喜ぶ。又深く惜むことあり。墨夷本牧を以て未だ足らずとし、江戸に來居、市中自在に横行するは、應接條約等の裏にては當然の事に候へ共、現在に目撃すれば隨分驚き申候。英夷（イギリス人）阿片交易のこと

に付、瑪醫を廣東へ渡し、施療治させ、之に繼ぐに引痘を以てする等の苦心、其思慮深遠と云ふべし。墨夷は人心を懷柔するの手段、大に英夷に劣る。是を以て窃かに喜び申候。然れども機は得難く、失ひ易し。墨夷の所爲、市中の人心を失ふとも、亦數十年無事ならば人心も自ら帖服すべし。此機會を失ふこと、豈惜しからずや。」といつた。

夏の獄舍は非常に暑苦しかつた。安政元年以來、松陰は晴ればれした生活をしたことがなかつた。投獄から護送、また入獄、蟄居といふ順序で、漸く松下村塾を開いて、家學を子弟に授けるやうになつたとも長く續きはしなかつた。そして間部暗殺計畫のために三度目の入獄をした。最終は江戸の小傳馬町で幽囚生活を繰返した。さうした具合で、幼少から余り强くなかつた松陰は、大分健康を害ねた氣味があつた。それに飲食、入浴、散歩なども不自由を極め、周圍が陰氣であるので、どうしても、弱り勝ちであつた。けれども松陰の意氣、精神は始終緊張してゐた。どんな暑さにも負けなかつた、蚊や蚤に夜中、攻めぬかれても、元氣を失つたことがなかつた。いつも彼れは規則正しく書冊を讀み、執筆もした。獄中の同志とも語つた。感興が湧くと、そつと天文祥の正氣の歌などを口のうちで微吟した。かうして松陰は一日も屈托を感じなかつた。

松陰は獄舍を苦の世界としないで、不自由、不快を忘れて、一つの樂地と見ようと心がけた。松陰はその事について「私は決して艱難を辭せぬ。が、また安樂も好きな方だ。」といつた。そして獄中から友人に手紙を送つて、『孫子』一卷や唐箋などを取りよせようとした。また「金が少し入用だから送つてくれ。」とか「大分音沙汰がないから消息をしてほしいものだ。」といつてやつたりした。松陰はまだ前途を樂しく眺めてゐた。それで「もし奉行が私の言葉に耳を傾けて、今日の急務をそれと悟り、適當の措置を執るやうになつたら、私は死んでもその死には光がある。また奉行が手ひどいことをして、漫に親戚、朋友までも苦めようとするなら、私は誠に忍びないが、昇平の惰氣を鼓舞して、目さしめるから、それも亦わるくない。」ともいつた。また父の許へは「いづれ日月未だ地に墜ちず候へば、膝下に侍し、天下の奇談申上げ候日もこれあるべし。」といひ送つた。

（五）

松陰は傳馬町へ來てから、獄内の志士と知己になつた。日下部のほかに水戸の鮎澤伊太夫、堀江克之助、高松の長谷川宗右衛門、同速水、京の小林民部らと知つた。速水は松陰と共に獄

舎の西奥にゐた。松陰は速水からその父宗右衛門のことを聞いた。ある時、不圖獄舎で宗右衛門に逢つて、何か話さうとしたが、左右に獄吏が突立つてゐたので、どうするとも出來なかつた。が、宗右衛門はわざと獨語するやうに「寧ろ玉となつて潔く砕けよう、瓦となつて全うする勿れだ。」と松陰に胸中を告げた。場合が緊張してゐたので、松陰はこの老人の意氣にひどく感激した。

獄内の知己はあつたが、自由に話し合ふことが出來ないので、松陰は時々寂寥を感じた。さうした時、松陰はその師や、父兄や妹のことを思つた、諸友を思つた、松下村塾の門生などのことを思つた。また金子重輔の姿をも思つた。松陰はアメリカ行に失敗する少し前に金子らと向島の櫻花を見たことがあつた。それは松陰が江戸での最終の觀花であつた。爾後、松陰は久しく、江戸の櫻花に孤負してゐた。松陰はこの觀花のことを記して深い感慨を洩らしたことがあつた。

乙卯三月三日牢晴。是より先、亞美理駕船、金川に泊すること日久し。林以下の官員度々の應接畢り、此節に至ては、和友通市の儀も、已に決したるの間へ專らなれば、今や此地に留るも、力を致すべき所なし。疾く夷國へ渡り、其情實を探知せんに如かじと、澁木松太郎（金子重輔）と約せしが、未だ他の同志へは告げず。是日浴沂の昔を思出し、向島白鬚梅餅のわたりへ遊ばむやと、同友群をなして、寓居せし鳥山が宅へ訪來るにぞ、夫は一段の事と打出でぬ。白馬堤櫻、青粉紅粧、太平の光景目に余りたることにて、樂極つて哀を生す。一つ戸を海外に沒せば、再び華の江戸の此の光景を、又もや見んこと覺束なきを哀しみ、一つには夷船は近く金川に泊するに、少年幼婦は國家の大患たることをも知らで、樂しげに花に迷ふ蝶と共に飛び、柳に嬌ぶる鶯と共に歌ふこそ淺猿けれと哀しみけれども、少しも顏色、聲音には、是を出さで、夜に入りてぞ歸りける。

アメリカのことについて、松陰は金子と共に深憂した。向島で咲き揃ふた櫻の花を見たり、美酒を飲んで興じたりしても、金川に泊つてゐるアメリカの船のことを思つた。アメリカの心底がはつきり、わからないうちは、一日、一刻も油斷し、安心することが出來ぬと作感した。松陰は櫻の花がほろほろと艦を溶かしたやうな隅田川の上に散りゆくのをぼんやり眺めながら、重苦しく考へ込んだ。が、表面は矢張、松陰の記した通り、孔子の弟子曾皙が「春風吹く頃、青年五六人、少年六七人とつれだつて、沂水の温泉に浴し、雨乞壇を逍遥して互ゐに唱和し優遊しよう。」といつた「浴沂の昔」を偲んで悠々としてゐる風

を裝ふた。

　向島から歸宅すると、松陰は金子と花見のことを話し合つた。金子は「悠々たる太平を樂んでゐる人々がうらやましいですね」といつた。松陰は「何も知らないものが、眼前に横はる國家の重い憂ひを何とも思はぬのは仕方がない。然しメリケンの船、メリケンの樣子、さうしたことをいくらか知つて、呑氣に構へ込んでゐる奴は、箸にも棒にもかゝらぬ愚物だ。メリケンの野心については、深く警戒しなくてはいかん。メリケンの眞相をはつきり見極めないと、安心が出來ぬ。江戸の表面はいかにも太平だ。誰れも彼れも花に醉ひ、花に戯れて、胡蝶のやうに樂しさうだ。が、太平のうらには、外交上の大波が動いてゐる。內政とても早く何とかしなければならぬ。中々、平和を謳歌してはゐられない。」といつて、心から慨嘆した。松陰は今獄舍で、その事を思ひ出した。金子が松陰に共鳴した樣子を眼の前に浮べて見た。が、そのなつかしい春も最早歸つて來ない。

　松陰はそれらのことを思つた所爲か、時々洋行の夢を見ることがあつた。その夢の中で、松陰は金子と一緒にポオハタン號の甲板に起つた。通譯ウヰリアムスや書記スパルチングらと話すと彼等は心から松陰に共鳴した樣子を見せた。

「貴君らの志は實に感心です。が、洋行の事は矢張國禁とあるから、一應下田の大將黑川に話すよろしい。黑川許す、メリケン大將君らをつれてゆく、黑川許さぬ、メリケン大將つれてゆかぬ。」

とウヰリアムスはいつた。

「それは最もだが、私らは舟を何處へか流してしまつたので、もう歸ることが出來ない。歸つたら、國禁を破つたものとして殺されるばかりだ。だから、船の隅へ私らを置いて、メリケンへつれていつて下さい。」

と松陰はいつた。が、ウヰリアムスからは聞き入れない。そのうち、松陰は突然、金子と船の一隅に隱れてしまつた。ウヰリアムスらはそれに氣付かなかつた。朝になると、船は下川を離れた。勇しい汽笛が鳴つて、メリケンへ向ふことになつた。松陰は生れてはじめて、かうした大船に乘つて、靜かな航海の旅を續けるのが愉快で堪らなかつた。松陰はその喜びを金子に頒つて、二人は一緒に躍り出さんばかりに元氣付いた。

　その中、船はメリケンに着いた。まだ見たこともない立派な洋館が海岸に立ちならんでゐる。松陰らが船から上陸しようとする時、ウヰリアムスの妻をちらと見た。

「君らはどうして、メリケンまで來たのですか、下田へ歸る筈でゐたのが、よく茲までついて來ましたね。もう大丈

夫。私の方も、君らの上陸を妨げるつもりはない。さあ早く上陸するよろしい。そしてメリケンの文物御覽なさい。何でも立派、驚かぬやうになさい。」

ウヰリアムスは親切にいつたので、松陰は非常に嬉しかつた。上陸すると、誰れが注意したのか、二人を乗せる美しい馬車が待つてゐた。松陰らは、その馬車に乗つて、ホテルへいつた。町の人々は雲霞のやうに群つて、好奇の眼を睜りながら、松陰らをぢつと見た。ホテルに入ると、日本食の代りにパンと魚とで午餐が出た、見なれぬ野菜、まだ飲んだことのない酒が出た。

「實に幸運だつた。こんなに樂にメリケンへ來て、愉快に生活することが出來ようとは夢にも思はなかつた。」

松陰は興に乗じて、突然、文天祥の正氣の歌を吟じた。思ふ隨分、聲を張りあげた拍子に不圖、氣付くと、松陰は傳馬町の獄窓にもたれてゐた。

「嗚呼俺の本望を達したと思つたのは夢であつた。が、あの船の乗り心地のよかつたことが、はつきり頭に殘つてゐるやうな氣がする。」

松陰はかう思つて、ぼんやりとはかない夢のあとを辿つた。

その時分、松陰は江戸で政治向のことを實地に見て、次第に着實な考へ方をするやうになつて來た。そして高杉に時局救濟の事を教へたうちに「上策は彦根（井伊）間部の所は誠實に忠告するに如かず。中策は隱然自國を富强にして、いつにても幕府の倚頼となる如く心懸くべし。」といつた。

松陰は長州の野山の獄へ再び這入つて以來死の問題について、時々考へた。江戸へ來てからも、傳馬町の鐵窓の下でも、深くこの事に考へを集中した。高杉が松陰に手紙を寄せて「丈夫の死所如何」と問ふと、松陰は「私は昨年の冬以來、死の一字について大に發明するところがあつた。その要をいふと、死は好む所に非ず、亦惡む所に非ず。道を盡くして心安し、便ち是れ死所。世には身生きて心死するものがあり、身亡びて魂存する者がある。一種の大才略ある人が人辱を忍んで事を爲すも妙だ、又一種私欲のないものが生を偷むことも妨げない。死して不朽の見込があるなら、いつでも死んでよろしい。生きてゐて大業を爲す見込があるなら、いつまでも生きてゐてよろしい。私の所見では、いつも生死を度外に置いて、唯いふべきとをいふまでぢや。」と敎へた。

（六）

松陰は九月五日になつて、奉行所に呼び出された。それから

十月五日、再び呼び出された。その都度、松陰は時局を救ひたい一念に驅られて、その信ずるところを述べ、對策を告げた。ところが、奉行は松陰の言葉は耳を假さなかつた。

「卑賤の身分を以て、國家の大事を議するのは不屆至極だ、控へ居れ！」

と叱り付けた。松陰は内心、憤つたが、強ゐて奉行と爭はなかつた。

「私が申し上げた事のために罪に落さるゝことは素より覺悟の前でございます。」

といつて沈默してしまつた。が、志士が國のために憂惧し、是非の道を究めようとするのを強ゐて抑へ付ける政府の意を測りかねた。松陰は同じ獄舍に呻吟してゐる薩州の日下部伊三次が「こんな政治の遣り方では、三五年の無事を保つことが出來ないでせう。」と奉行の前で直言して、ひどく怒鳴り付けられたことを思ひ出して「日下部は痛快な男だ、俺はとてもあれに及ばない。」と感じ入つた。

松陰は間部暗殺のことについて、江戸政府が相當に探知してゐることだと思つて、いろいろ述べて見たところが、その實、政府は余り知らずにゐた。それで九月五日に呼び出された折には「要擊」といふことを「要諫」といひ變えた。それは同志に累を及ぼすであらうと心配したからである。松陰は同志の姓名も、まるで告げずにしまつた。が、奉行はこの事を口供書のうちへ誇張して書いた。十月十六日、その口供書を松陰に示した時、松陰はこの事について「書中に鯖江侯と刺違えて死し、警衛の者要撃する時は打拂ふ積りと記されてございますが、それは私が斷じていはぬことです。」と抗辯した。

「私は唯死を決して、鯖江侯を要諫するつもりであつたと申上げた丈です。それ以外は奉行處で勝手に書き入れたものです。私はそれを承服するわけにまゐりませぬ。」

松陰はかういつて、再三、奉行と爭つたけれども、奉行は聞き入れなかつた。それに松陰が心をこめて、アメリカに對する方法や航海のことや日本の雄略などを詳しく述べた事が一つも口供書に載せられてゐなかつた。唯「數箇所の港をアメリカなめどのために開いて、國力が充實してから、一氣に打壞はれるがよいとおもひます。」といつたやうに書いてあつた。それは松陰が「迂腐の論だ。」と笑つてゐた說である。松陰はそれについても非常な不滿を感じた。

松陰は口供書のことで、略ぼ奉行の心持ちを悟つたので「俺の生命はとても助からぬ。」と愈よ知つた。そして松陰は死に面して、それを恐れなかつた、それを悲まなかつた。心靜かに安心

して、死の運命を受けようとした。それについて、松陰は獄中でその感想を率直に記した。

今日死を決するの安心は、四時の循環に於て得る所あり。蓋し彼の禾稼を見るに、春種し、夏苗し、秋刈り冬藏す。秋冬に至れば、人皆其歲功の成るを悅び、酒を造り、醴を爲り、村野歡聲あり。未だ甞て西成に臨んで歲功の終るを哀しむものを聞かず。吾行年三十、一事成ることなくして、死して禾稼の未だ秀でず、實らざるに似たれば惜むべきに似たり。然れども義卿の身を以て言へば、是亦秀實の時なり。何ぞ必ずしも哀まん。何となれば人壽は定りなし。禾稼の必ず四時を經る如きに非ず。十歲にして死するものは十歲中自ら四時あり、二十は自ら二十の四時あり、三十は自ら三十の四時あり、五十、百は自ら五十、百の四時あり。十歲を以て短とするは蟪蛄をして靈椿たらしめんと欲するなり、百歲を以て長しとするは靈椿をして蟪蛄たらしめんと欲するなり。齊しく命に達せずとす。義卿三十、四時已に備はる、亦秀亦實、其秕たると其粟たると吾が知る所にあらず。同志の士、其微衷を憐み、繼紹の人あらば、乃ち後來の種子未だ絕へず。自ら禾稼の有年に恥ぢざるなり。同志其是を考思せよ。

松陰はかうして死を靜觀することが出來た。そのうち、奉行は松陰の罪狀を具して、流罪に相當する旨を井伊大老に上申したところが井伊は「流」の字を消して、「死」の一字を書き加へたことが松陰の耳に入つた。もう松陰がこの世にゐる日は長くなかつた。それで十月二十日、永別の手紙を父兄にあてて書いた。

平生の學問淺薄にして、至誠天地を感格する事出來申さず非常の變に立至り申候。嘸々御愁傷も遊ばさるべくと拜察仕候。

親思ふにまさる親心
けふの音づれ何ときくらん

去り乍ら十月六日差上置候書、得と御覽遊ばされ候はゞ、左まで御愁傷にも及び申さずと存じ奉り候。尙又當五月出立の節、心事一々申上置候に付、今更何も思ひ殘す事も御座なく候。此度漢文にて相認め候諸友語書も御轉覽遊ばさるべく候。幕府正議は丸に御取用ひ無之、夷狄は縱橫自在に御府內を跋扈致候得共、神國未だ地に墜ち申さず。上に聖天子あり、下に忠魂義魄充々致し候得ば、天下の事も餘り御力落し無之樣願ひ奉り候。隨分御大切に遊ばされ、御長壽を御保ち成さるべく候以上。

松陰はこの手紙を書き終ると、ほつと吐息した。それから十

月二十五日に「留魂錄」の稿を起して、翌日夕刻にすつかり完成した。その時、「呼び出しの聲まつほかに今の世に待つべきことのなかりけるかな」といふ歌を題した。他にまた四首の歌を加へた。

二十七日朝、松陰は評定所に呼び出された。彼れが豫期してゐた死刑の宣告が下つた。素から深く決心してゐたので、少しも驚かなかつた。松陰の顏色は平生と同じやうに見えた。そしてその日、午前十時頃、松陰は愈よ劊手のために首を刎れる間際まで元氣であつた。そして白刄の下に落着いて瞑目した。その辭世のほかによく松陰の志をのべた歌は「かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」といふ一首であつた。晩秋の風は、冷めたく黄ばんだ木の葉を吹いて、すがれた蟲の聲は、松陰を弔ふ輓歌のやうに、枯草のうちにきれぎれに聞ゑた。

かうして松陰は曾てその師象山の教へを請ふたについて、まだ何の返事をも受取らぬうちに、自然の死所を得て、悲壯な光景の下に世を去つた。

雜感

武者小路實篤

○

正宗白鳥の「隨筆」にかいてゐる文章をよむと僕も同じやうなことにあつてゐる。山梨縣の小學校をだしにして、小學校の印を押して字をたのんで來た人は、何處へでも同じ調子で字をたのんで歩いてゐるらしい。藤森氏もだまされたらしいし、まだだまされた人はいくらでも居さうに思ふ。僕も逢へばだまされる處だつたが、東京をたつたあとで東京の兄の家に來たので、だまされずにすんだ。志賀の處へも來たさうだ。恐らく文士と名のつく人の所へは大概首を出してゐる人と思ふ。あなたの字でなくつてはとおだて上げて、文士の自惚れ強い處にうまくとり入つて字をかゝせることを發明した人らしい。かいてもらつた字をどうするつもりか一寸見當がつかない。

自分はたのまれると「惡筆は一生の恥」と云ふやうな字を平氣でかく質だが、しかしたのまれて紙なんか送つてもらうと、字のかきたい時なんかは一年に一度位い切り來ないから、大概かゝずにすましてしまう。

山梨の人も東京で逢へなかつたと云ふのでこつちに紙と短冊を送つて來たが、あまり澤山送つて來たので、それもいつも表裝をするからと云ふ理由で、東京へ送つてくれとか、名古屋に送つてくれとか云つて、短冊一つ山梨の方へ送つ

てくれと云つて來ないのでへんに思つた。

それでこれは贋物だと思つた。その後同じ男があつちこつちに首を出し、話の材料を供給してゐるので、安心してとり放しにしてゐる。短冊はもうすつかりよごれて使ふことが出來ない代物になつてゐる。紙は何處かへ行つてしまつた。さがせば出ると思ふが、僕の室はものゝなくなることにかけては不思議な室であるから、さがし出すのは大へんだ。

同じく白鳥の隨筆にサンデー毎日のことが出てゐるが、僕もそつくり同じ目に逢つた。その後僕の方は原稿をたのまれないだけがちがいである。自分が書いて出したら出してもらへるものをと云ふ自惚を苦笑してすませた。ものがものだつたから反つてそれもいゝだらう位いに思つた。のちにとり戻さうとしたら、返事をよこさずに本紙の方にのせられて、矢張り甚だ少しの稿料をもらつた。誰でもそんな目にあつてゐるのだらうと思ふ。やりやうによつてはサンデー毎日のやり方は愉快とも見へるだらうが、僕のはものがものだからかまはないが、白鳥のはものがものだから怒る方が尤と思ふ。僕もサンデー毎日からたのまれたら斷る心算でゐるがたのまれないのだから斷りやうがないのは滑稽である。尤も僕も昔たのまれた時書く氣もあつてそのまゝにしてしまつたことがあるから、帳消しであらう。しかし「サンデー毎日」を每號もらつてゐることは感謝してゐる。殊に「點字新聞」を出してゐることは感心する。惡口も本當だが、お世辭も本當である。

○

近頃はがゆいのは日露の交渉である。尤もロシヤは何處にたいしても齒切れがわるい。之は國情のちがいでやむを得ないのか、最もよくない意味の猶太人氣質だが。見當がつかない。僕は猶太人には感心すべき多くの人が出てゐること

を知り、尊敬すべきものを持つてゐる民族と思ふが、ロシヤの外交や、內政にたいする態度には不快な點が多いやうに思ふ。方便が多すぎてうるさいこと限りなしである。

しかしその相手の日本の外交の藝のないのもはがゆいものである。小田原會議よりもまだ呑氣である。居眠りつこしてゐるのではあるまいし、もう少し要領を得てもいゝやうに思ふ。外交の秘訣は露骨に自國が得することと許り考へるのでは得られない。相手を得させることを先づ考へなければならない。相手を出來るだけ得さしたいのだが、こつちも損するわけにはゆかないと云ふ態度でなければならない。がつ〳〵してゐては相手がおちつく許りである。

ロシヤの政府の弱點をつかんで、對內政に不利なそしてロシヤ國民には得な條件をもち出して、それをロシヤの政府が拒むことが出來ないやうなものを考へ出して、それを秘密に持ち出し、そして交換條件で日本人のつかまつてゐる人を早く救ひ出すことを考へなければならない。日本のやり方はロシヤ政府の假裝敵として利用するのにもつてこいのやり方である。それでは益々ロシヤは得意になつて、いつまでも日本人をいぢめどくと考へるであらう。

外交の目的は人類の意志を尊敬し、お互が助けあい、得しあふことを本願にしなければならない。しかし今の國と國との關係は歪みになつてゐるから、之を正道にもつてくるのは中々大へんである。それには非常な力をもつた人物なり、團體なりが出て、正々堂々と與へるものは與へ、求めるものは求めて、そしてかけ値のない方法で、相手が折ない場合は時機がまだ來ないとして、さつさとひき上げることが必要である。政府がかはれば又別であるが、下手な商賣人のやうなかけひきに一年も二年もかゝるのは少し馬鹿々々しいことである。定見のないにも程がある。

外交の秘訣は相手の國民の要求を直に知り、そして自國の許せる限りその要求を滿してやることである。そして相手の國にとつて自國の存在が必要かくべからざるものにすることである。相手に利益を與へ得ないものは又相手から利益をとることは出來ない。

米國にたいする日本の態度はこの十年の間何處までも忍辱して、そして平和の内に實力をやしなふことである。そしてメキシコ、ブラジルなどと大いに仲よくすることである。

しかし戰爭は何年たつてもしてはいけない。今度戰爭したら日本は破産する以上であらう。日本は亡國にはならずにすめる國である。しかし大國を相手に戰爭の出來る國ではない。日本は之から何處までも堅忍し、そして實力をたくわへ、殊に人物を多くつくつて、平和の戰ひで世界の最もすぐれた國民になることを本願にすべきである。

堂々と反對して勝算があるのならいゝが、あとになつて處女の如しでは心細い。何しろ米國にとつて日本がなくてならない國になるまでは大きな顔は出來ない。メキシコ、ブラジルで日本人が大いに有益な仕事をして、事實で米國に後悔させるやうにしたいものである。やる處までやるのはいゝであらう。だが感情的に走りすぎるのはよくないと思ふ。おどしてきかすには今の日本は少し弱はすぎる。貧乏すぎる。日本は孤立しすぎてゐる。支那と仲よくするのが一番いゝと思ふ。それからロシヤ人と。今のロシヤの政府は自分は今に大いに變形しさうに思ふ。自分は豫言者ではないがものの勢ひと云ふものは大がいきまつた方向に進むものである。

自分は日本の實力がまゝ、堂々と進み得る時のくることを信じ又のぞむものである。今迄の日本は好戰國として來た。今後の日本は世界の平和のためと、人類の生活の安定のために働きたいものと思ふ。

しかし之は容易なことではない。

日本は今實に堅忍すべき時である。そして世界より一歩進んだ生活法を創造することによつて世界を思想的に征服することが、尤も望ましいことである。世界の平和は日本から生れ出すことを自分は夢見てゐるものである。

しかしたのもしい人は少なすぎる。若い人達が立ち上る上り方で日本の運命はきまると思ふ。實力、實價を高めることが最初の條件である。

○

日本は有望な國である。

せめて一萬人決心强いものが立ち上つたら、日本はその人のものになるであらう。その人が人類の意志をよく知つてゐたならば。そして又世界は日本の眞似をするであらう。

（一四、四、三〇）

菊池寛と里見弴

千葉龜雄

改造社が、どふいふ積りで、よりによつて、こんな難題を僕に與へたものか。わからない。なるほど藝術上の見解では、二氏が、たしか二度か三度か太刀打ちをして居る。近いところでは、震災直後であるが、これは文壇に興味を持つほどのものが、誰れも覺えて居る筈の接戰であつた。こんな大事變の直下にあつては、恐怖と飢餓におびえる人間を救ふものは、斷じて藝術ではない。もつと實質的な何ものかでなければならぬ。少くともこの當面にあつては、藝術はこの玉座を、他の實質的なものに讓らねばならぬ。こんな風なのが大體菊池君の立論であつたやうに思ふ。それに對して里見君が、「壁は決して砕けない」ことを强調して、藝術神聖論もつてそれに應戰した。時が時である。藝術の人生に涉る價値いかんが、最も實感的に、誰でもの胸を、多くか少くか搔き起さずに居ない時である。それはたしかに、誰もが凝視すべき好問題でなければなかつた。ましてや提出者が、文壇の主潮を代表する首將達である。どうしたつて、論爭の中心とならざるを得ない。果して二君を中心として、共鳴と非議の論爭が文壇に野火のやうに擴がつた。最後に廣津和郎氏が現れた。評判な頭のよさと、行屆いた理路の老功な解釋で、どうにか殘火までが消し止められた形になつた。事の起りを生んだ二氏が、どれほどそれを肯定したか、いなかは別問題としても。……しかし僕は、二君の委しい論理も今はわすれて了つたし、その上、そんな過ぎ去つたことを、改めて蒸し返すにも及ばぬだらうから、それはそれとする。しかしこの二様の見解が、どこまでか、二氏の藝術的持論と個性を、欺かずに偶然の機會で表現したものであることは誰も認めやう。

一

尤も「改造」のは、別に二氏を比較せよといふ註文ではなか

つた。第一對比しやうたつて、對比する方便がないのだ。對比するのは、相似したものか、でなければ、正反したものの場合にかぎる。どこからどこまで異種のものでは、まるで對比する手がかりも、握まへどころもないのだ。二氏の場合などが差あたりそれである。それほど二氏は、どこからどこまでタイプが違つて居るのだ。だからその人生藝術論でも、一つの論點を中心にしながら、或は喰ひ合せやうのない別々の途を歩いて居るやうにさへ見える。

いや、藝術の尊ぶべきは個個性の創造價値だ。個々の創造とは、個々の異種であることを前提とする。個々の特殊性がちがへば違ふほど、創造價値の內容が、ますます深さと廣さを加へるそこで批判する場合に必要な條件は、個々の創造本質の類似がどれほどあるかといふことではない。この差違の價値がどれほど深く廣ひかといふ一線にある。一體、實在の類似點を强いて探り出し、その對比から槪念を作り上げることなどは、精神科學にあつても初步な仕事と考へられる。そこでこゝでは、單的に、個性的な二氏の印象を獨立して眺める方が、むしろ自分の持つ二氏觀を、正直に表白する恰好な方便だと思ふ。

—(菊池寛と里見弴)—

二

菊池君に關する想ひ出は中々多い。

菊池君が、獨立した作家として名乘り出てから何年にたるか。もう十年內外だらうと思ふがあの啓吉物語の中の異彩であるだらうところの、「青木の話」?で論爭したのがまだ昨日々日のやうな氣がする。僕がスペイン感冒で日本橋病院に入院中にあの「青木の話」を雜誌で讀んだ。用のないので、隨分と亂暴な批評を直ぐベッドで書いて、その頃僕の代りに、面倒な夜の新聞編輯を引受けて吳れてゐた君に送つた。筆まめな氏から、直ぐそれに對して細かい駁論を寄せられた。氏があの忙しい中で、そんな長い駁論を書いたのだ。氏が、藝術觀に對しては一步も讓らない自信と信念が、今でものやうに、やはりそこに火のやうに閃めいて居た。惜いこと、引越したりする中にその手紙を無くして了つたが、……そして、氏は、今は押しも押されもしない文壇の主將となつたのだが、十年相變らずの下積町の僕には、今日でも、やはり同僚として机を並べた、あの頃の菊池君の親しみを實感する。さう言へば、いつかY社のS君が、寫眞のN君と菊池君の撮影を賴みに行つた時の笑ひ話しがある、其時のN君の菊池君に對する態度が、いかにも無造作なので、S君が菊池君の家人に對して、はらはらして居たと云ふのだ。それも無理がない、N君は、菊池君の「わが文藝陣」

に見える「利根川紀行」の同作者なのだ。N君は文藝にはあまり趣味がないので、菊池君が新聞社の籍を削つてから以來、今日、文壇のどんな地位に達して居るかなどはもとより眼中にないのだ。だから十年經つても昔の同僚の積りで、無邪氣に菊池君と應對したものである。S君は若い藝術家だ。菊池氏の現時の地位を知つて居るのだから、はらはらしたのもこれまた無理が無い、但し、恬快な菊池君だ、こんなことは別に大して氣にもしなかつたらうが、僕はそれを聞いて思はず、微苦笑した。

なるほど菊地君の文壇的地位はそれほど昔とは違つて居るのだ。氏の文壇の雌伏期は、Slow but steady であり、公けに文壇に濶歩してからは、fast but steady である。そして氏のこの頑丈な地歩をきづき上げた素材は、何といつても、何時にもその Steady な自信を見失なはないところにある。しかもその歩調の堅固さは、一に氏が自己を信じて迷はない聰明さから來て居た。

三

大ていの作物に、何等かの不滿を見出さずに止み得ない僕は、その頃の氏の作物にも、何か知ら不滿と思ふものを看つけ出してはよくわからない議論を吹つかけたものだ。あまりひどい時は、氏はたゞ苦笑して居たが、大抵の場合は、大體の企圖の說明をした。それは氏の作物が、あまり旨く纏まり過ぎて居るといふこと、また、あまりに巧みに捉へて來たやまを中心として、すべての事實が、そのやまを有効ならしめるやうにのみ奔馳する感じ、それがいかにも整ひ過ぎて、ゆとりのないのが苦になつた。然るに自然といふものは、もつと無駄があり、屈曲性があるものでは無いか、そしてその無駄と屈曲性が、結構、纏まつた事實を具象的に作り上げて來るのではないか。要領の無いやうな微茫の中に、かへつて眞のかつきりした實相があるのではないか。然るに氏の作物は、あまりにはつきりと要領を得すぎる。臨畫が明確過ぎる。陰影と浸潤性がどことなく乏しい。自然の矛盾が作り上げる筈の、複雜性の統一とでも云へるものの稀薄さも氣になつた。何を置いても要領を捉へるのが、新聞雜報のこつである。そのこつを、新聞では人間的興味と呼ぶ。たゞ要領のみを重しとする人間的興味は、やゝもすれば藝術的な陰影を邪魔にするところの、單なる記錄と記述に忙がす。そして描寫せしめない。こゝに新聞が藝術を蝕ばむ毒素がある。或は氏が、この上長く新聞記者に生活することか、氏の豐かな藝術の天分を、虐殺して了ふことかないか。こんな意味の議論を、この通りではないが、よく吹きかけた覺えもあ

る。少くとも、氏の書いた雑報は、この疑懼を裏付けるほどに、全たく要領で緊張した光つた記述であつた。

四

けれども聰明な氏は、そんな事は早くから氣付いて居たらしい。それは氏が新聞記者を止してから、何かの雜誌で、新聞修業は藝術と正反するものだといふやうな意味を語つて居たのでもわかる、それと共に、氏はその忙しい生活にあつても、人生記錄の神聖な藝術觀察を、むやみに曇らされるやうなことが決して無かつた。それは氏の新聞生活の經驗を取材とした多くの作物の業績がそれを語るであらう。

か、氏の制作の手法は、舌でゆつくりと玩味して、滋味や餘韻を享樂するやうな技巧派には屬しない。たゞ、ぐんぐんと卒直に正直にペンを叩きつけて行く。純ではあるが線があらい。太い。それが新技巧派勃興の當時にあつて、文壇における、氏の制作價値の發見をいくらか後れしめた。今日の氏の制作は、その頃よりは、ずつとゆとりが出來、光つても來た。手法もおそろしく自由にはなつて來た。けれども、また技巧の無造作や、構圖の走り書か、全體の印象を恐ろしく淡いものとし、その表現の効果を薄めるものが折々にあることは爭そへない。

もう一つ、氏のもつ傾向の當時の文壇流行よりも特殊なものであることが、氏の作物價値を定着せしめるにいくらか時間を要した。そして或る一派の如きは、氏の傾向を、或はアイデアリストだとし、或は單純なロマンチストだとし、甚だしいのはいたずらに卑近な人間的興味を求めるところの、一個の上手なイトリイテイラアに過ぎぬとして、當時の主潮であつた自然主義の目標から否定した。精々高く買つて、特異なサイコロヂストだけのものだと多寡をくゝつたのもある。何ぞはからん、氏が最も正しい意味での、リアリストである極めを立派につけられたのは、相應時間を經過してのことであつた。

五

現實の魂を把握するには、先づ頭腦と眼の冷酷なほど聰明であり、冷靜なことを要する。芥川氏の頭のよさは、聰明な現實の理解にあり、志賀氏の頭のよさは、現實の事象の、死のやうに精確な把握にある。そして菊池氏の頭のよさは、或る人間心理の鋭どい特殊な發見にあり、澄みきつた批判の特殊さにある。芥川氏がより多く理知的であり、志賀氏が、より多く感覺的であるのに比して、菊池氏はより多く直觀的である。已に直觀的である。閫を排して、に直ち將を斬るといつた、姿だなだる

つこい三段論法や漸層法などを必要としない。理論から事實を築き上げずに、事實から逆に理論を演繹しやうとする。氏の制作に根を張る把握力の振幅がそこから生れると同時に、時によると、事相の運びが割合に單純で、技巧へまでの延長を待ち得ない氣短かさもそこから生れる。

何といふ冷刻さだ、何といふ人間の醜くさだ！菊池氏に發かれた人間心理に當面する刹那に、われ等が質感するものが先づそれだ。しかもそれはわれ等にとつてどうともし得ない、動きのつかない現實なのだ、たゞわれ等の長い社會生活が、道徳とか、禮儀とか、人情とかいふ第二義の裝飾をもつて、それを直視し得ないやうに今まで朦朧されて居ただけだ。然るに氏が、介まそうした第二義的な一切を剝ぎとつて、全く赤裸かな、血みどろの人間の相を、まざまざとわれ等の鼻先につきつけたのだ。われ等は、今更に忘れて居たわれ等の魂の醜惡を見せつけられたゞ呻き、絶望する外はない。どうしても欺むききれない見とをしであるこの現實の壁をどうすることが出來ないのだ。といつて、氏を、殊更に、かうした態度を享樂する皮肉家だと呼ぶのは色盲であらう。たゞ氏を力強い諷刺家でありとし、或は人間に絶望した、憎人主義者だとし、又は人生悲觀者だとしてレッテルを貼る批評家のあることは、或は一應有り得ることであるかも知れない。

六

けれども、それはどつち途氏の心理摘出の一面觀に過ぎない。氏は決して、人間心理の面のみを、與のやうに好んで摘出する作家では無い。なぜなら、氏は哲學者ではない、どこまでも藝術家である。鋼鐵の意志、冬のやうに冷たい嚴肅な頭腦とともに、一方に極めて暖かい心臓をもつ一人の作家である。その冷靜で直觀的な省察が、醜くい人間心理のどん底をあばき出すと同時に、美くしい、愛の心理をあばき出す働らきも、立派に雙立し得るのである。たゞ、人生を機械的に眺める自然主義者が、やゝともすればそうしたものを、ロマンチックなものとして一概に押し片付ける錯感がまゝ在る――

氏の藝術の最もすぐれた一點は、この二つの心理相を、或は獨立して、或は交錯した火花として、いかに隙間のない世界の中に、ぴつしりと效果多く表現するかである。またその個々世界の組み合せを、いかに無駄が無く、力強いものに印象させるかである。劇曲家としての氏の豐富な天分が、こゝに顔をはつきりとさせて來る。言葉を換へて言へば、氏の描き出す藝術の世界は、どんな小片でも必ず締まりがどうにかついて居る。必

らず、何等かの人生の意義を、その制作が提出し、そして解決して居る。たゞ問題は、時によると、それが極めて平凡で常識的な解決であり、また提出であることである。それが元來が平凡な提出でまた解決なのか。それとももつと深い意義と暗示を與ふべきものが、何等かの都合によつて淺化されたものか。

七

恐らくその二つであらう。が、僕の亂暴な想像をゆるさば、氏の近來の忙がしい社會的生活の要素が、やゝともすると、氏の冷靜な視察と心境を蝕ばむものがあるのでは無いか。

氏が近ごろ、フアビアン協會の一員として活動することが傳へられる。氏のやうな、無限に廣がり行く可能性を持つところの、人間的興味を實感する作家にあつて、その心的外延を、どこまでも延長させることは非常に好ましい。たゞ、外延への開展の何ものかのために、たとへ片時でも、その求心的なものの精進がおこたられることがあるなら、ばそれは決して好もしくない。

この頃、社會人として、もしくは個人として文壇に占める氏の勢力と、氏の藝術的評價と一緒くたにして、或ひはくさし、或ひは極賞することがはやる。これも好もしくない傾向の一つだ。そういふものを取りのけにして、氏を一個の藝術人として見る場合にも、氏は、やはり何ものも奪ひ得ないまがひものでない、大きな天分を持つて居る。それは明らかに、氏の藝術的地位を保證するに足るものだ。

またたとへ氏の慘酷な人間暴露でも、それが氏が人生を憎惡するために生れたものでなくて、人生を熱愛するために生れたものであることが、われ等にとつて、何よりも救われる大きな慰さめである。

八

われ等はかくして、菊池氏の制作に、大きな愛執と、限りない親しみを痛感することが出來る。それに拘わらず、氏の作物をめぐる空氣は、どこか淋しい寂しさがある。少くとも壓迫するやうな陰欝におし伏せられる。そこに氏の人性觀が、武者小路氏に見るやうな理想的光明感とちがうものがあることを思ふ。菊池氏の、脚が、どこまでも地に着いて居る。解脫しきれない實人生の惱みを、氏が同じ心で惱んで居る、故に氏の心境は煉獄の火で試されて居る。憂欝がそこから來る。

それが里見弴氏の世界に來ると、空氣も感情もがらりと違ふ。非常に明るく小魚のやうにぴち〳〵して居る。もとより里見氏もまた、違つた意味での人生熱愛者である。或ひは、人生

に重大な役目を占めるとするところの、情熱と愛苦の世界を通して、人生を愛してやまない作家である。たゞ菊池氏は、眞正面から人生を正視して、解決と發見とをそこに探求する精苦の作家である。また地方人である點からも、神經が重くかつ太い。然るに里見氏は、人生を、どこまでも享樂と觀賞の立ち場から押して行く。どんな情熱地獄の苦煉の中に立つても、なほひらりと埒外に踊り出して、その苦惱を享樂する餘裕を持つて居る。

　里見氏はどうしても都會人である、主觀をぐんぐん押しつめて行くよりも客觀的な地點にうまく外して、高見から批評するのが都會人の趣味である。また享樂である。全く主觀の渦に自身を投げ入れて、うんうん苦しむやうな野暮さは、とても都會人の忍び得るところではない。また都會人の神經と感覺は、極度に洗煉されて居る。物と物との差別を、どんなにでも細かく分裂し、批判せねば承知しない。茶を煮た玉川の水と、井戸の水とを味はいわけて、得意で居るのが都會人の誇りである。物と物とを差別するところに、どうしても批判感覺が發達せざるを得ない。しかもその批判が、大きな主潮の見わたしよりも、寧ろ、より纖細なデテエルの延長と、その分割に興味を感ずる方が多い。そして、いかに自分が知識と經驗に豐富な苦勞人であるかに、限りの無い滿足を感ずる。そんな無邪氣な自慢がある。

九

　江戸藝術といふよりも、江戸つ兒とでもいふやうな典型を、里見氏よりも、より以上に具へて居るやうな作家を僕はあまり見ない。久保田万太郎氏を、江戸つ兒型などいふが、氏の下町情調に浸つた作物を除外すれば、その文藝觀などでも、氏は立派に近代藝術の共通性を持つて居る。里見氏だつて、もとより近代藝術の知識と觀賞は廣いのであるが、それを里見氏が自分のものとして消化する場合には、必ず氏一家の嗜味、見識として表現せずにはどんなものでの通過を許さない。そこに嚴肅な氏の箇性が、目立つほどくつきりと色調を輝やかして居る。

　里見氏が、どんな意味で苦勞人であるかにかゝわらず、或はもつと上の通人から見たら、隨分幼稚な苦勞人だと思はれるかも知れないにかゝわらず、氏自身の苦勞人意識は、氏の行動のどんな斷片にも、藝術のどんな片隅にも、影のやうに、臭いと思はれるほども必らず付いて廻る。氏は、作家の中でも、珍らしく批判の好きな人だ。いわゆる「米き机によつて」の批判は、氏だけにあつては、批判よりも、むしろ御講釋といふ方が

ふさわしい感じを帶びる。そこではA氏とB氏の審美感がどうだといふやうな野暮論はしない。一切を自分の趣味と、その趣味から分裂した自說で押し通して了ふ。細に入り、微に徹して、一切を里見的色調でおつかぶせて了ふ。その一言一句にも、名匠氣質を忘れない氏の注意が、磨きぬかれた特殊な語彙と思想で特殊づけられて居る。そのたゝみかける親切な註釋や解說が、ますます御講釋といふ味ひを濃色なものにする。もとよりその內容には、容易に同意されない獨斷も多いのだが。

一〇

氏の苦勞人意識は、それが戀の諸分けを分析する情慾地獄の探討と、描寫の藝術にいたつて殆んど天品そのものとなる。古今エロチックな題材と、戀愛戰を捉へた作家が數限りなくある。しかし、里見氏の眺めるエロチックな場面の魅惑は、現代のわが文壇に殆んどその比を見ないほど、藝術的に情痴の心理を纖細に描き出したものである。強い如實の實感が働らきながら、どこか犯し得ない藝術味の純粹がある。つまり氏が、どんな混亂した世界に飛び込んでも、冷たい批判の眼がじつと澄みきつて居る。だから物象の魂をくつきりと掴み出せるとともに、まちがつても、その對象の中へ自分までを投げ込まない。尤も多少の例外はあるが。

里見氏が好んで捉へる愛慾の世界は、愛慾を、忘我の底におちゐつた情感のそれだと見ずに、いつもその感性の底に流れる心理を掴まうとする。里見氏の作物が、より主觀的であり、人間を人間として味はう滋味に漲つて居るのはこのためでもある。この意味で、氏はやはり立派なリアリストである。

但し氏の作物は、構想や、全體の構圖やにおいては、時に、あまりに反時代的であるのに反感を起させることがあり、また、意識して、あまりに不自然な小刀細工をやつたり、または恐ろしい抛げやりによつて、價値の亂高下を見せることが決して稀でない。が、どんな抛げやりな作物であつても、描寫の技巧や台詞のうけ渡しが、天然の磨きのかゝつて居ることでは、文句なしに頭を下げざるを得ない。それはほとんど文壇常識にもなつて居るのであるが、同じ技巧の琱琢をもつて云ふならば、志賀氏の技巧は、あまりに澄みきつて、一寸すがりどころのなささうな賴り無さを感ずることがある。里見氏の技巧は、もつと人間的である。感情の奔流が、薔薇色の皮膚をとをしてほとばしるのが、さながらに心臟にひゞいて來る。志賀氏が、どんな場合にも沈靜であるに比べて、里見氏のには、もつと、生き生きした誘惑をそゝられるものがある。

二

或る新聞の小説を、里見氏にお願ひした事がある。その新聞にはこれまで見たこともない、待合や藝者の生活がそこにのべつに出る。里見氏にとつては勿論、藝術としても、一向不思議が無い話だ。が、馴れないその新聞の讀者から、盛んに新聞を攻撃する投書が來る。社でも馬鹿にやかましいので、頼み手の僕が、その頃右京町に居た氏を自邸に訪問して、あゝいふところを少し遠慮して頂けないものかと御願ひした事があつた。

自分の演ずる役目の馬鹿々々しさを、充分に承知した上での話ではあつたが、氏も恐らく、その馬鹿馬鹿しさには苦笑も出來なかつたであらう。その後その作物の中で、こんな馬鹿々々しい話があると、その註文のいきさつだけを、別の話のやうにして書き續けられた時は、氏の燻ぶつた公憤と罵倒が、目に見えるやうで面白くもあつたし、また自分の馬鹿な役目を自分ながら自嘲する氣にも撲たれた。

が、それももう五六年前の話である。

高橋龜吉氏著

經濟學の實際知識

四六判箱入 總布八百頁

□定價貳圓（送料金十六錢）

忽五版

復雜極まる經濟學の根本知識を、從來のやうな技術的、斷片的の說き方を避けて、一讀我々の實生活にピッタリと卽するやうに綜合的に說き、機能的、有機的に物を見たから明快直截、一目瞭然として經濟界の諸問題は直に顯微鏡下に見る事が出來る。實に本書は歐洲戰後革命された經濟學の最新知識で、實業家は本書に依つて自己の方針を定め、景氣不景氣の去來を明かに知り、思想問題、勞働問題を硏究する人は其の根本に橫はる經濟問題の諸知識を了解し得る近來の好著である。著者は社會經濟學の造詣に就ては本邦第一人者と云はるゝ人、日本經濟界の病源と長所とを整然と詳說し、未來を明確に暗示したものは本書をおいて他にはない。

ラムゼ・マクドナルド著 小林輝次譯 **議會と革命**（社會主義は議會を通じて來るや否やを詳する） 定價一圓五十錢 送料十二錢

マリー・マーシー著 横田千元譯 **穴居民族の話**（原始人の生活狀態を興味深く描いた名である） 定價一圓五十錢 送料十二錢

ヘルマン・ゴルテル著 堺利彥譯 **唯物史觀解說**（改訂增補） 定價二圓 送料十二錢

エリオット著 山川均譯 **近代科學と唯物論**（宇宙見、人間を見、科學と唯物とを說く） 定價金二圓 送料十六錢

東京神田美土代町二ノ一 振替東京二五四〇〇番

白揚社

戯画「総選挙当日」

岡本一平

盛岡の勝負

高橋ノ言論戰四ツ相撲ニ對シ田子ハ郷土出身ノ情實擱メノ足取リニ行ツタノデ高橋危カツタガソコハ名士ノ力量護憲名分ノ体量アリ田子ヒネラレ腰クダケル、高橋入足ト土俵トノ差實ニ四十九票也





蒙古と應援女史
小石川区役所
佐々木安五郎 タノム
佐々木安五郎 タノム
ほこり

盛岡の勝負

高橋ノ言論戦四ッ相撲ニ對シ田子ハ郷土出身情實搦メノ足取リニ行ッタノデ高橋危カッタガソコハ名士ノ力量護憲名分ノ体量アリ田子ヒネラレ腰クダケル、高橋ト土俵入足トノ差實ニ四十九票也




蒙古と應援女史
小石川区役所
佐々木安五郎
タノム
佐々木安五郎
タノム
ほこり


淺草選擧所前所見
「酒に醉ってるなふ」
「待合の女將らしい」
「氣狂ひでもなし」
「犠牲の、つまり、伊藤へ投票せぬ奴はふゞつちまへ」

犬ヲ結びつける



選挙ビラ二種

スクヘスクヘ
死線の
小森を

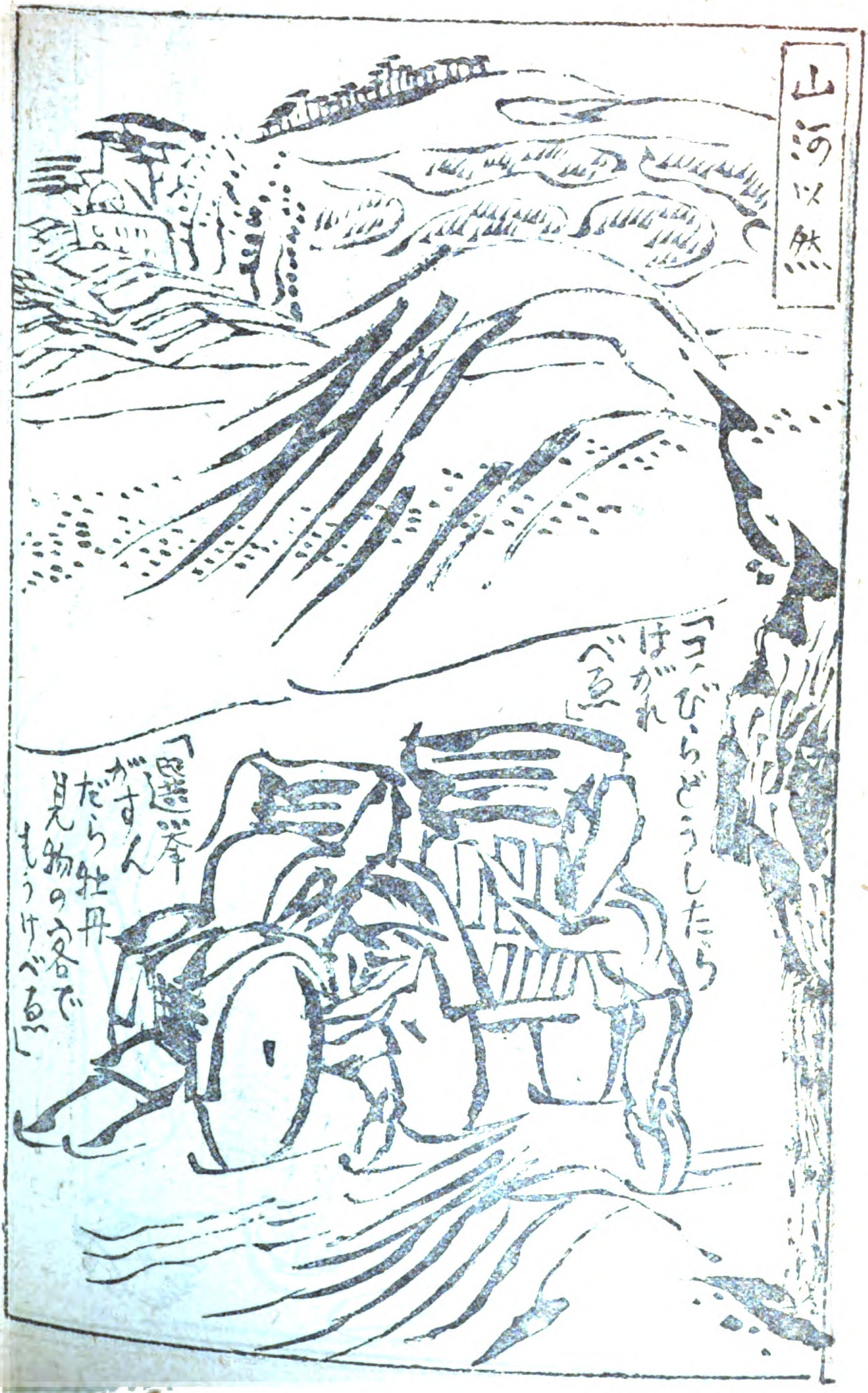
最新語を使用せし京橋候補小森のビラ



地口を使つた小石川候補佐々木のビラ

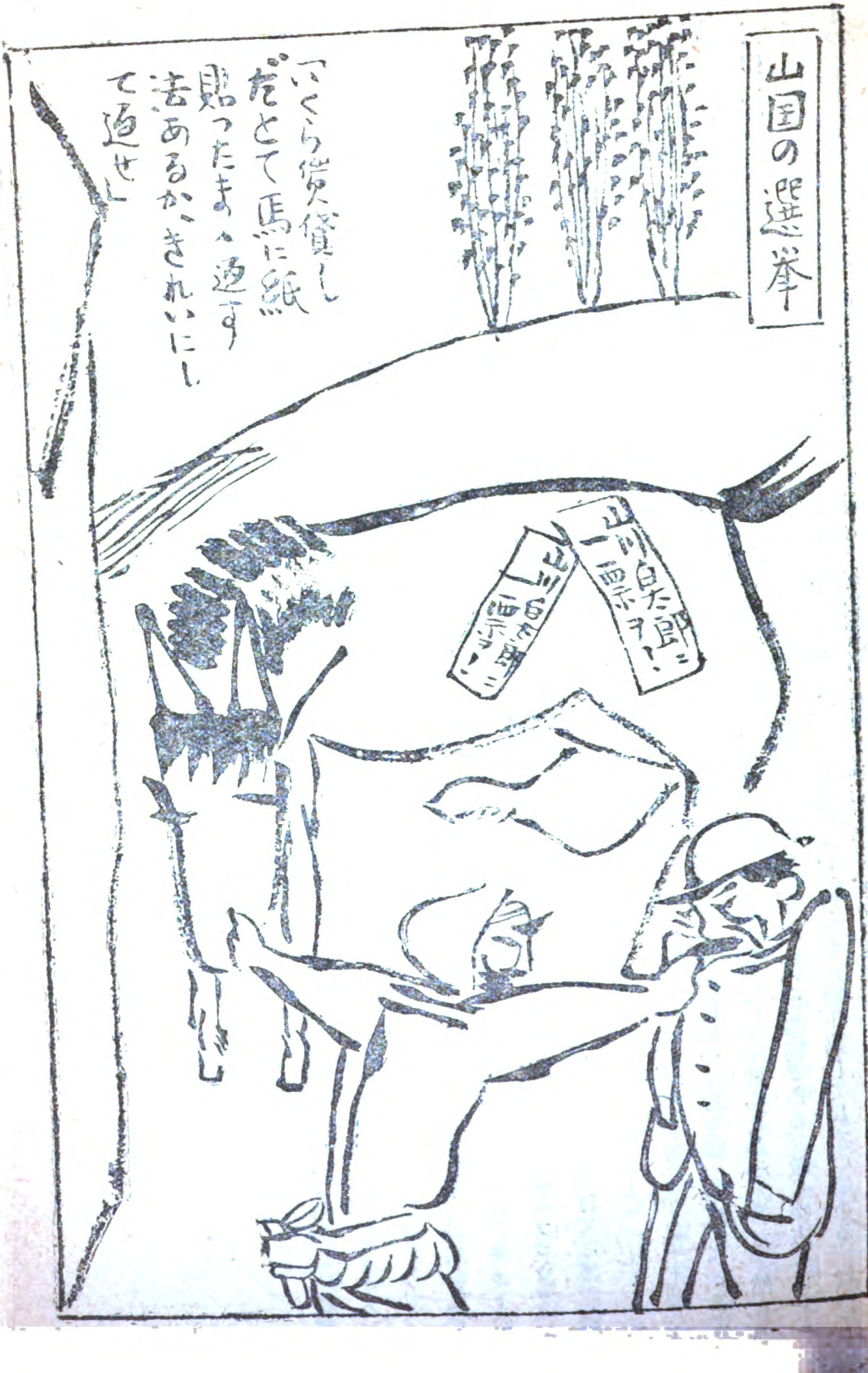
註 かうもりは競争候補森肋を指す 鳩は仝じく鳩山


選挙びら撒き
「こどもや年寄はひろつてはいけないーし」
「ナニクソ」
「オレガ」
「今度のは赤だ」
「便所の落し紙よ丁度よい」


山河以然
「コゝびらどうしたらはがれべゑ」
「選挙がすんだら牡丹見物の客でもうけべゑ」


運動員の本体
「奥さん選挙はきのふすみましたが今日から保険の勧誘でこれがわたくしの本業なので」
「選挙ならあなたの方へ投票いたすと申してあげたではありませんか」


後日の参謀
「もう女を連れて歩るいとる」
「候補者は落ちたのにアイツはうんと金を握り込んだそうだぜ」
「アイツが参謀だつたのです」


山国の選挙
「いくら貸借しだとて馬に紙貼つたまゝ通す法あるか、きれいにして通せ」
山川臭太郎ニ一票ヲ！
山川臭太郎ニ一票ヲ！

勞農露國の内爭問題

黑田禮二

一

昨年の九月と言へば僕等は忘れもせぬ震災の大騷動に轉手古舞をやつて居た時だ。獨逸の政界が煮えくり返へつて居やうが、露西亞の内情が危機を告げて居やうがそんなことに頓着しては居られなかつた。處が實際其の期間に於て露西亞の權力機關の中樞には一種の殺氣が縱横に漲つて居て露國共產黨の事情に通ずる人々の手に思はず汗を握らせて居たのである。其の殺氣は九月から今年の一月の中旬まで續いた。而して一月廿一日の晩に偉人レーニンは——此の不愉快な問題の解決を知るや知らずのすぐ三日あとに——溘然として此の世を去つた、

一體その不愉快な問題とは何であるか？殺氣の漲つて居たと言ふ事情は抑々何であるか？それは露西亞の堅實なる可き共產黨の内部に於て一種の分裂が起つて居たことである。共產黨の有力なる分子が黨の中央委員會を排斥せんとする激しい攻擊の聲が起つたことである。然し單なる犬の遠吠の樣な——メンシエヰキの毒舌の樣な——目に見えぬ不平の聲ではなくつて、あの衆望を聚めたトロツキイを中心とする反對黨の渦卷が九月、十月、十一月、十二月と四ケ月を通じて諸々方々のソヰエトの機關内に起つて居たことである。殊に黨の機關紙『プラウダ』は毎日その論戰に殆ど全紙面を費して居た。名付けて『黨討議』と言ふ。

懷ふに逝いたレーニンが、其の際まだ健在で然も第十回共產黨大會に望んだ時の樣な快刀亂麻の手腕を揮つたなら、こんな黨派分裂を豫想する樣な問題は今頃起らなかつた筈だ。然もそれがレーニンの病氣中に起つた事情である。敵も味方もレーニンズムを楯にとつて對手を攻擊中傷して居たのである。從つて『黨討議』なる單なる事實を通じて逝きしレーニンが如何に露

西亞の爲めに重要な地位を占めて居たか、レーニンの病氣不在の間の黨內部の基礎はどんな風にぐら付いて居たかと言ふ事情をよく洞察することが出來る。一面また『黨討議』に對し中央委員等の多數派の採つた處置の如何が、レーニン去りて後の露西亞共產黨の獨立して行き得るかどうかの試金石ともなるのである。

此の意味に於て僕等には表面如何にも緣遠い樣に見える露西亞の最近の『黨討議』の事情を今此處に記述することも敢て無駄な骨折ではあるまい。而してそれは又實際露西亞のボリシエヰキ自身の歷史にとつては類のない一大出來事なのであるから、露西亞の政治に興味を有する程の人は其の行きさつを多少なりとも洞察批評して見る必要があると信ずる。

二

現在の全露共產黨中央委員會(チェ・カ)の態度に慊焉たらずして小數反對黨が烽火を擧げた中心問題は『勞働者のデモクラシイ』に關する事項である。要するに共產黨の中央委員會が余りに官僚的で獨裁的で勞働者自身に何の自由も權利も與へられてないと言ふ不平に始まり、尠くとも勞農プロレタリヤーの共和國と言ふ以上、もつと勞働者にデモクラチックな行動を許容しなければ今日の露國は帝政時代の專制君主國と變つた處がない、と言ふ怨嗟の聲となつたのである。之れが特に昨年の九月から十月頃にかけて共產黨員自身の中から洩れて來出した。

斯樣な不平の聲が今頃何故に特別な重要さを以て擡頭して來たか?その原因に就て共產黨中央委員會(チエ・カ)は次の二つを擧げて居る。(1)勞働者が一般に政治的な智識を增したこと、(2)昨年一杯の經濟的恐慌で人心が動搖したこと。(一月十八日第十三回共產黨大會決議)成る程六年に亙る勞農執權の歷史と不斷の宣傳及敎育に依て、今日露西亞の勞働者は智的方面に大變な進境を示して居る。從つて『勞働者デモクラシイ』など丶言ふ樣な議論が興味を以て論ぜられる樣になつたのも不思議のことではない。又第二の原因たる昨年の經濟界の恐慌は余程勞働者の生活を劫かし、或種の怨聲を發せしめたことも事實だと僕は信ずる。農產物の價格は恐らく低下したのに反し工業生產物のそれは底拔けに騰貴した。從て農民は農作物を市場に、賣却することを拒み、加工製造品の購買を控えた。すると官立工場は忽ち顧客と市場とを失つて一種の過剩生產狀態を現出し、生產及金融界に恐慌が來襲した。勞働者は之に依つて賃銀の値上に拘泥することが出來ず、不平の聲が方々に起つた。之れは畢竟共產黨のチエ・カが余り官僚的で何の計畫もなく、物價に對す

勞農露國の內爭問題

黑田禮二

一

昨年の九月と言へば僕等は忘れもせぬ震災の大騷動に轉手古舞をやつて居た時だ。獨逸の政界が煮えくり返へつて居やうが、露西亞の內情が危機を告げて居やうがそんなことに頓着しては居られなかつた。處が實際其の期間に於て露西亞の權力機關の中樞には一種の殺氣が縱橫に漲つて居て露國共產黨の事情に通ずる人々の手に思はず汗を握らせて居たのである。其の殺氣は九月から今年の一月の中旬まで續いた。而して一月廿一日の晩に偉人レーニンは――此の不愉快な問題の解決を知るや知らずのすぐ三日あとに――溘然として此の世を去つた、

一體その不愉快な問題とは何であるか？殺氣の漲つて居たと言ふ事情は抑々何であるか？それは露西亞の堅實なる可き共產黨の內部に於て一種の分裂が起つて居たことである。共產黨の有力なる分子が黨の中央委員會を排斥せんとする激しい攻擊の聲が起つたことである。然し單なる犬の遠吠の樣な――メンシェヰキの毒舌の樣な――目に見えぬ不平の聲ではなくつて、あの衆望を聚めたトロツキイを中心とする反對黨の渦卷が九月、十月、十一月、十二月と四ケ月を通じて諸々方々のソヰエトの機關內に起つて居たことである。殊に黨の機關紙『プラウダ』は每日その論戰に殆ど全紙面を費して居た。名付けて『黨討議』と言ふ。

懷ふに逝いたレーニンが、其の際まだ健在で然も第十回共產黨大會に望んだ時の樣な快刀亂麻の手腕を揮つたなら、こんな黨派分裂を豫想する樣な問題は今頃起らなかつた筈だ。然もそれがレーニンの病氣中に起つた事情である。敵も味方もレーニズムを楯にとつて對手を攻擊中傷して居たのである。從つて『黨討議』なる單なる事實を通じて逝きしレーニンが如何に露

西亞の爲めに重要な地位を占めて居たか、レーニンの病氣不在の間の黨內部の基礎はどんな風にぐら付いて居たかと言ふ事情をよく洞察することが出來る。一面また『黨討議』に對し中央委員等の多數派の採つた處置の如何が、レーニン去りて後の露西亞共產黨の獨立して行き得るかどうかの試金石ともなるのである。

此の意味に於て僕等には表面如何にも緣遠い樣に見える露西亞の最近の『黨討議』の事情を今此處に記述することも敢て無駄な骨折ではあるまい。而してそれは又實際露西亞のボリシェキキ自身の歷史にとつては類のない一大出來事なのであるから、露西亞の政治に興味を有する程の人は其の行きさつを多少なりとも洞察批評して見る必要があると信ずる。

二

現在の全露共產黨中央委員會（チェ・カ）の態度に慊焉たらずして小數反對黨が烽火を擧げた中心問題は『勞働者のデモクラシイ』に關する事項である。要するに共產黨の中央委員會が余りに官僚的で獨裁的で勞働者自身に何の自由も權利も與へられてないと言ふ不平に始まり、尠くとも勞農プロレタリヤーの共和國と言ふ以上、もつと勞働者にデモクラチックな行動を許容しなければ今日の露國は帝政時代の專制君主國と變つた處がない、と言ふ怨嗟の聲となつたのである。之れが特に昨年の九月から十月頃にかけて共產黨員自身の中から洩れて來出した。

斯樣な不平の聲が今頃何故に特別な重要さを以て擡頭して來たか？その原因に就て共產黨中央委員會（チエ・カ）は次の二つを擧げて居る。(1)勞働者が一般に政治的な智識を增したこと、(2)昨年一杯の經濟的恐慌で人心が動搖したこと。（一月十八日第十三回共產黨大會決議）成る程六年に亙る勞農執權の歷史と不斷の宣傳及教育に依て、今日露西亞の勞働者は智的方面に大變な進境を示して居る。從つて『勞働者デモクラシイ』など丶言ふ樣な議論が興味を以て論ぜられる樣になつたのも不思議のことではない。又第二の原因たる昨年の經濟界の恐慌は余程勞働者の生活を劫かし、或種の怨聲を發せしめたことも事實だと僕は信ずる。農產物の價格は恐らく低下したのに反し工業生產物のそれは底拔けに騰貴した。從て農民は農作物を市場に、賣却することを拒み、加工製造品の購買を控えた。すると官立工場は忽ち顧客と市場とを失つて一種の過剩生產狀態を現出し、生產及金融界に恐慌が來襲した。勞働者は之に依つて賃銀の値上に均霑することが出來ず、不平の聲が方々に起つた。之れは畢竟共產黨のチエ・カが余り官僚的で何の計畫もなく、物價に對す

る政策等をも根本的に改めないで、單なる專權を擁して居るが爲めだとあつて、中には『共産黨は我等自身のものだ。チ・エカの專橫は我等は全然之を認めない』と極論するものすら出來たのである。（もつと事實を曝露すればウラル及ウクライナの或る勞働者はチエ・カに反對して獨立の反對黨派を作り、チエ・カに何等の通牒をも與へないで自分勝手にストライキすら敢行した。又最近のモスカウ地方會議に於ては共産黨内に自分等丈けで獨立した一種の分派を作つた事實がある！）是等は專ら昨年の恐慌が勞働者の生活を劫した一種の反動に過ぎないと思ふ。

然らばチエ・カ、の態度としては(1)今少し宣傳及教育を善導して行けばいゝ又(2)經濟界の恐慌に處するには特種の政策を立てれば宜い。卽ち小數不平黨は經濟問題の解決に依つて鎭壓することが出來る譯である。

處が此の不平の聲たるや、實は其の基礎がもつと深い處にあるのだ。然も其の擴て來る淵源がボリシエヰキの歷史を辿つて見ると中々遠い處に蟠つて居るのだ！而て其の基礎の上に胚胎してる隱れた原因か經濟上、政治上種々の出來事の動機に際し分裂的な挑戰的な態度を執つて擡頭して來るのである。だから今回の『黨討議』は單に三百代言的な屁理屈のならべ合ひや、又は一種の討論會に花の咲いた位な現象ではなく、非常に意味の深長な出來事だつたと思ふ。ボリシエヰキの歷史に類のない大きな出來事だつたと考へても宜い。

三

共産黨の本部たるチエ・カの態度に慊ずして不平の聲を擧げた黨員の例は敢て今回か始めてゞはない。個々の事件としては、例へばネフスキイの場合などさうだ。ネフスキイは人も知る『ネフスキイ勞働者大學』の創立者であつて、古くからのボリシエヰキであり、又彼自身純然たる勞働者から上つた學者である。然るに彼は其の後共産黨の政策に不平を抱き、次第〳〵に脇路へ外れ出し、すねる丈すねて排共産黨の思想に到達した。從つて此の有名な學者のネフスキイは今では共産黨から專ら葬り去られて居る。

それからもつと古いことを言へばボリシエヰキが政權を執つて、資本家戰爭の終熄を宣言し、獨逸とブレスト、リトウスクの講和をしやうと決議した時、所謂『極左共産黨』の一流は其の決議に激しく反對し、講和の提唱者レーニンを大膽にも逮捕しやうとさへ企てた。其の一流の頭目には今日のブハーリンと、死んだウリツキイとか立つて居たとは今から想へば夢の様な插話である。（此の插話はジノヴイエフが去年十二月十五日彼

得只雖士共產黨組織事務所總會の席上でブハリンから昔話として聞いた儘を演說した一齣である）其の頭目のブハリンは今では純然たるレーニン黨としてプラウダ新聞の編輯局からチエ・カ、反對黨の議論を激しく攻擊、批評して居る！

それが本統に組織立つた大きな反對として現はれたのは所謂『勞働者反對黨』を以て目せらるゝ第十回共產黨大會席上の出來事である。此の反對黨の中に在りてレーニン主義に復歸せず飽迄自說を主張した多數の同志は黨則に依つて黨籍を除かれた、今回の『黨討議』に反對黨の地位に立つて居る連中は此の時の殘黨の中から現はれたのである！換言すれば今回の『黨討議』は第十回大會當時の『勞働者反對』の殘黨が、一時レーニンの快刀斷麻的手腕に依つて解決した樣に見えたものが――尠くともレーニンの直接治世に於ては鳴りを靜めて居たものが、レーニンの重症と共に政務を見ることが出來なくなつた機會を利用して再び頭を擡げて來たと見る方が穩當である。從つてチエ・カ、側では『それは實に怪しからぬ。特にレーニンの不在につけ込んで黨の分裂を計るか如きは明かな謀叛である』と叫び、反對黨は『君達は何でもかでもレーニン〳〵とレーニンを獨占し其の不在の間は守成的消極的態度を把持するものだから黨は萎靡して振はず勞働者の不平は益々つのるのだ！』と攻擊する。

四

然し今回の反對黨の連中は必ずしも第十回大會當時の『勞働者反對黨』の殘物計りから成り立つて居るのではない。即ち系統的に言へば、

極左翼共產黨――『勞働者反對』黨――『黨討議』反對黨。

と進んで來た譯であるから『黨討議』反對側の立役者は從つて極左共產黨の殘物たるプレオプラジエンスキ、スツコフ、ピヤタコフの連中であるが、之に加へて又一方に米國的デモクラシイの臭味を加へた穩和の一派（寧ろ共產黨中の社會革命黨的色彩ある分子）が參加提携して居る事實を忘れてはならぬ。其の後者の代表者はラフアエルやサプロノフ等である。

でも之れ丈けではまだ大波瀾が起りさうにもない。如何にピヤタコフが經濟通であらうが、サプロノフが演說が旨からうが又はプレオプラシエンスキが社會主義の理論家として『共產主義のイロハ』の共著者として聞えて居やうともレーニ、ズムを正面から擁して團結して居る所謂チエ・カ、古參者、ジノヴイエフ、カメネフ、ルイコフ、スターリン等の正統流の前に立つては、彼等の屁理屈も論理學も殆と鎧袖一觸の感があつたで

もあらう。處が此の反對黨の中へ外國貿易にかけてソヰエトから離すことの出來ないクラッシンが這入つて來た！嘗て獨逸革命の指揮に味噌を附けて——然しなはコンミンテルンの驍將として名聲が内外に轟いて居る——カール・ラデックが參加した。愈々以て事だ。そこへもつていつて更に赤衛の御大トロツキイが正面から反對黨を擁護し始めたのである！その事情は後で次第に述べて行かう。

一體此の反對黨は何を反對するのであるか？彼等の主張要求は如何？それは斯うである。『新經濟政策を執つて以來の二年間に亘り、共産黨内部の政策と黨自身を内部的に組織する方法とが根本的に間違つて居たのだ。即ち黨は其の根本方針を變更修正しなければいけない。』『第十回大會に於て原則として採用された勞働者デモクラシイ（則ち黨内部のデモクラシイ）に關する決議は無制限に實行されなければならぬ。同大會は唯だ特別決議を以てデモクラシイは許すが黨内に黨派的團體を作ることは禁ずるとした。それは不當である。第十一回、第十二回の兩大會でも此の特別制限決議をチエ・カ、は採用して居る。今や第十三回大會が開かれる場合に當り我々は第十回當時の原則を無制限に採用することを希望し、苟も之れを制限する如き規定は寧ろ許して貰ひたい。黨内のデモクラシイは認めるがグループを作ることは許さぬなど〻言ふのは既に言葉自身が矛盾して居る』反對黨は更に進んで攻撃する『今日の黨は單なる官制の機關である。極めて融通の利かぬ固定した、官僚式な古物である。共産黨の本領に從へば黨は下から上に組織さるべきものなるに今日の黨は上にチエ・カ、が立つて居り、チエ・カ、の命令が上から下へ萬事を軍隊化して居る。我々はチエ・カ、自身の改革を望んで已まぬ』と。

先づ以上の意味の内容で以て激しい罵詈讒謗の警句を發し、共産黨本部たるチエ・カ、の攻撃にとりかゝつた其の發表機關は勿論黨の機關紙なるプラウダであり、攻撃の急先鋒に立つた筆者はプレオブラジエンスキを始めスミルノフ、セレブリヤコフの連中であつた。是等の批難攻撃に對しチエ・カの連中が又厄鬼となつて毒舌の應酬を試みたのは當然である。即ち昨年九月の一杯にかけてプラウダ紙上に二號活字入りの花を咲かせた『黨討議』の第一期はそれであつた。

五

軈て討議の第二期に入る。チエ・カも事重大なりと見て取つて内々愼重な密議を始めた。種々の會合は隨所に開かれる。即ち單なる議論の時代から黨の

實際のタクチクの時代に變つたのだ。勿論チエ・カの意見では今更レーニンの遺業たる新經濟政策及び之に基く運用方法を根本的に方向轉換することはその威信の上から言つても到底出來た譯でないので此の様な小數意見は尠くもレーニンの健康が恢復するまで握り潰す心算であつた——即ち第十二回共産黨大會の討議には上せたくない心算であつた。其の決心に對し反對黨四十六名の連署になれるチエ・カ攻撃公開狀が届いた。同時にトロツキイが此の反對黨の論旨を正面から擁護する手紙をチエ・カに對して送つたのである——

此の内部の分裂に慮しチエ・カは大に狼狽した。怎うかして目下經濟界の恐慌に際し人心の動搖してゐる最中、此の様な黨幹部の滅裂狀態を一般の黨員に知らせたくない、と種々斡施して見たが、其の秘密は反對派の喋舌に依つて見事裏切られ、トロツキイ始め四十六人の反對公開狀に關する事實が地方支部に知れた——各工場のヤチエイカに知れた——殊に莫斯科の勞働者學生等の喧傳に依つて全ソヰエトの隅々にまで知れ亘りさうになつた。

そこで十月に入り、共産黨の本部たるチエ・カ(中央委員會)及びチエ・カ・カ(中央監督委員會)の幹部は聯合會議を開きトロツキイ及び四十六人の反對黨と膝を交へて懇談し、更に共産黨のポリ・ビユロー(政治部)はチエ・カ、及チエ・カ・カと聯合會議を開いてトロツキイ等の要求は充分之れを認容する、唯だ問題をチエ・カの範圍内へ持つて來て共産黨の根底を覆す様な態度は執つて貰ひたくない、而してお互に充分異見を腹藏なく述べ合つたのであるから『黨討議』は一切之れで打切りにし、以後は双方協同事に當らうではないか、又トロツキイ及び四十六人の手紙は此の際特に一般の民衆へは公開しないことにしやう、と相談が一決した。トロツキイも「特にジノヴイエフの懇請に依り」(一月十八日前掲ジノヴイエフの演說に據る)一切之れを承諾したのである。從つて反對黨たる四十六人も二人を除く外は之れに同意を表した。

然るに此の決議に一見は服したものにも拘らず反對黨はすぐ其の以後に相變らず幹部攻撃の火の手を擧げた。ポリ・ビユローは仕方なく隱忍の態度で再び會議を開き果して實際共産黨の對内政策が間違つて居るか怎うか、又勞働者デモクラシイの思想に關しチエ・カの決議は修正すべきものかどうかの再審議を初めた。而して今度は一切事を秘密にせず、會議の次第を公表し世評に訴へて其の判定を待つことにした。

其の席上の重なる討議は言ふまでもなくチエ・カ・カ、及びポリ・ビユローの『黨内に小黨派の巢を樹つるを得ず』との原則的

決議を修正すべきや否や、と言ふ點であつたが、之に對しトロツキイは『特別な小黨派(ファクション)を黨內に作ることを禁ずる』點に於ては『異議はない』と述べた。然し『黨內に團體を作ることは自由でなければならぬ』と頑固に主張し始めた。賛否の投票の結果勿論多數側の勝利となり、第十回大會の分黨制限の決議及び第十一回、第十二回大會の追認的決議は修正すべきものに非ず、今後も勿論黨政策として續行すべきものなりと議決することゝなつた。

此の決議のあつた二日後に――換言すればポリ・ビユローの決議に表面上服從した筈なるに拘らず、則ち今一つ言葉を換へると、それ以上反對を表示すれば黨の規律を破るものとして罰せらるべき筈なるに拘らず――トロツキイは新たに『新方針』なる公開狀を發表した。(これは可成り有名なもので今では特別の小冊子(パンフレット)として一般に讀まれて居る)その內容は勿論チエ・カの方針に對する辛辣な批評であり、文章は以前よりも更に嘲罵に充ちて居る。しかもトロツキイは其の手紙を更に共產黨大會の始まる前日に小冊子として出版した！之れを世人はトロツキイの『分黨宣言』と呼んで居る。

トロツキイの『分黨宣言』を讀んで反對派は再び勢力を恢復した。プラウダ紙面は賑はひ始めた。殊に莫斯科に於てはトロツキイの勢力が軍隊內に蟠居して居る處から衛戍軍中に分黨派が大分出來た。又專門學校、大學、勞働大學の學生連で其の宣言に追從するもの多く、それが各學校のヤチエイカで反對氣焰となつて共產黨幹部を無視すべし、との意見が次第に殖えて來た。反對黨の連中は更に激を地方の各方面に飛ばしてプロパガンダに努めた。流石にチエ・カも、チエ・カ・カも、ポリ・ビユローも嚇怒した。而して戰爭は益々其の鋒尖を鋭くした。

六

此處で僕は一應反對黨の主なる人物を拉し來つて彼等が主張の大體を紹介して見やう。彼等の根本は前述の樣に一致して居る。然し各人は各々其の攻擊の鋒の向け方を異にして居るのであるから。

先づ極左翼共產黨を代表するプレオブラジエンスキイの意見は斯うである。『共產黨は黨內部の政策に關し過去二ケ年間全然誤れる方向に歩んで來た。此の方針を更に續行すればするほど本來の目的を遠ざかつて行く』『黨內部の組織及黨の對內政策が特に最近著しく間違つて來た』と。彼の言はふと欲する處は第十回の大會で一面デモクラシイを決議したのは大によかつたが、すぐあとから分黨を制限するやうな決議をしたのが黨の根本方針に叶はぬ。これを二ケ年間踏襲して來た今日は一切間違つて居る。換言すれば彼の疑問は新經濟政策自體に關する疑問である。從つて第十回の大會でレーニン自身に依り指導され、報告された新ソキエトの根本方針自身に反對である。彼は

レーニ、スムの修正を要求する譯だ！

レーニ、スムの修正は畢竟するに戰時共產政策への復歸を意味する。然し之れは素人考へから觀察しても今日の露國には無理な注文である。彼は『一九一七年乃至一八年の當時には黨內の分黨は自由であつた』と云ふ。彼の希望も其處にある。然し當時のボリシエヰキは止むを得ざる分黨自由の時代であつた。換言すればボリシエヰキの危機に在つた。此の危機を切り拔け黨を滅亡より救ふて今日の新經濟政策を確立したのがレーニンである。之に依つてプロレタリヤの執權は千鈞の重さを加へた。之に反對するプレオブラジエンスキの態度はプロレタリヤの執權に却つて制限を加ふるものであつて表面極端左翼の樣に見えて其の實多少『社會革命黨』と『メンシエヰキ』の臭ひがする！

次には反對黨中のデモクラットを代表するラフアエルの意見は斯うである。『今日の共產黨は全然軍隊式機關に變化した。從つて其の黨則は純然たる軍國主義的である。だから今日の共產黨の一切の施設が運用が出來ぬ程ビユロクラチツクになつて、黨員の『同志』と言ふ精神は失はれた』と。御尤もで之には議論はあるまい。

次に又同じデモクラットのサブロノフは毒舌屋の隨將である。彼は云ふ。『今日の共產黨ほどペダンチックな黨派はない。これは獨逸式な前世紀式な女教師に依つて小供を教育するやうに何でも共產黨の鑄型にはめて窮屈な動きのとれぬ子弟の教育をやつて居る。共產黨はオールドミスの女教師の集合である』と。

以上のラフアエルでもサブロノフでも其の毒舌は如何にも痛快である。平地に波瀾を起す丈けの功果は充分にある。然し彼等デモクラット共產黨の連中は少くとも極左翼共產黨の反對のやうな論理的批評力を持つてゐない。單なる罵詈嘲笑に過ぎない。之れは特にこの派の大缺點である。彼等は少しも實際的な政策がない。批評はない。然しそれに代ふる本統の具體的な術策は如何と訊ねられると彼等は忽ち答へに窮する。其處へ來るとレーニンの如き實際家の築いた政策方針に對しては本統に齒答へのある太刀打が出來ないのも當然で單なる犬の遠吠をするに過ぎない。だから議論は八釜敷しいけれどいざ會議となると其の決議に於てチエ・カに一蹴されるのだ。又極左翼共產主義者もプレオブラシエンスキ始めスミルノフでもセレブリヤコフでも大學の先生らしい口吻が多くて理論計り並べるが、扨て何を本統に要求して居るか具體的の意見が分らない。

其の段になると流石に御大トロツキイは短刀直入である。彼は『今の幹部が不可いから更迭しろ』と具體的に要求して居る。彼は言ふ。『我々は國家機關のビユロクラシズムを破壞しなければならぬ。共產黨が今日の國家の主權に立つてゐるとは云へ其の主腦は我々共產黨其の者を官僚主義で以て束縛して居る。其處に黨の生命は斷たれてゐる。』『では其の主腦は何故ピ

ユロクラチックか、曰く彼等は舊ボリシエヰキの型を脫せぬ老人連から成り、何時までもこの老骨が政權を壟斷して居るからだ。だから此等の老人連を先づ屠らなければならぬ』『見よ第二インターナショナルの指導者連を。ウイルヘルム・リープクネヒトと言ひベーベルと言ひ・又ジンガア・ウイクトル・アードラ・カウツキイ・ベルレシュタイン及びラファルグと言ひ、若い時には立派の元氣のあるマルクスの直弟子で、本統のマルキシストであつたではないか。それが議政壇上に送られ其の地位に噛りついて居る間に除をとつて、溜水のやうに固定して、遂に悉く立派なオポルツニストになつて了つたではないか。今日のチエ・カの連中も此の儘でゐるうち乾度變質し墮落するに極つて居る』『今少し若い者を採用しなければならぬ……青年は實に我が黨のバロメーターである』と。

　トロツキイは道に老練なプロパカンヂスト丈けあつて旨い。チエ・カ排斥の手段として青年を煽てゝ居る。從つて多數の赤衞や學生達をやんやと言はせた。(處が不幸にして青年共產黨員は悉くチエ・カ側に味方してトロツキイの煽動に乘らなかつた)

七

　兎角するうち歲は了つて本年の一月となつた。一月の十六日には第十三回の共產黨大會が莫斯科クレムリンで開かれた。其の頃は既に『黨討議』の第三期時代となつて居て反對派は旗色次第に惡しく黨の規律を紊るものとして四方から論難を浴せかけられて居た。トロツキイは病氣とあつて暫く身を退いて轉地した。プレオブラジセンスキはしどろもどろになつて消極的な反駁論で時々プラウダ紙上に報酬するに過ぎなくなつた。之に反してジノヴイエフ、カメネフ、スターリン等は攻擊に轉じて議論壇上を自由に驅け廻つて居た。プラウダの主筆自身も亦トロツキイの議論に反對し『分黨連中を倒ほせ!』なる激しい文章を論說欄に乘せた。其のうちに大會となつたのである。

　第十三回大會に於て反對黨の氣鋭は極めて舉らなかつた。會する各地方よりの代表者三百五十五人(内百二十七人は投票權者)、會の議長は勿論カメネフ。論題は經濟問題と黨內組織に關する問題と黨の外交(殊に獨逸問題)に關する件とである。第一の經濟問題即ち一九二三年度に於けるソヰエト聯邦共和國の經濟に對し共產黨の執り來りし態度に關し、ルイコフ——今度國民委員長となれる人——が報告の任にあたり、次に黨の組織に關する件に就てはスターリンが報告を擔當し、最後に黨の外交に付てはジノヴイエフが報告の任を引受けた。

　ルイコフの經濟事情の報告のあとで討議が開かれた時ピヤタコフとプレオブラジエンスキとがソエヰトの經濟政策を根本的に批評したがもう耳を傾けるものがなかつた。其の場合反對黨に對しクラシンが大に加擔したけれど多勢に無勢で致方なく難なく原案が通る。カメネフの一喝が利いたのだ!

次にスターリンの黨組織に關する報告（即ち黨討議問題）の後に討議に移つた時プレオブラジエンスキとサプロノフとが一生懸命に言譯的な反對をやりラデツクが之れを助けたがもう議論は盡きて居ることゝて採決の結果原案通り。從つて黨內の分黨は一切相ならんこと。之れを離れると黨を除籍すること！

同時に青年共產黨が全黨一致で以て反對黨を排斥し極力ヤチエ・カを擁護するとの黨の決議が朗讀される。

最後にジノヴイエフが黨の國際的地位に就て報告し、之に對しては討議なく終了。只此の際獨逸革命の指導に大味噌をつけて歸つて來たラデツクは可愛さうにも全會の一致で譴責された。ラデツクは元氣のない言ひ譯をする。

斯うして第十三回全露共產黨の大會は終了した。而して『黨討議』の問題も一と先づ終了した譯だ。

八

露西亞共產黨は今日試練の眞最中である。彼等が反對黨を破る唯一の楯はレーニン一人であつた『レーニンの病氣の間は喧嘩はすまい『レーニンの留守に際し內輪で揉めるのは敵に糧を與へる樣なものだ』とは彼等の唯一の論據的な楯であつた。其のレーニンが共產黨大會の終了した僅か二日のその後に溘然として他界に逝いたのだ。黨は驚愕した！

ジノヴイエフもトロツキイも共に涙に塗る弔文を久しく友たり師たりし偉人の墓前に朗讀した。從つて今迄の內爭は暫く其の影をひそめて居る。

軈て全露ソヰエト大會が開かれレーニンの後を嗣いで其の地位にルイコフが選ばれた。然しルイコフ一人がレーニンの地位を嗣いだのではない――其の樣な重任がルイコフ一人に負へるものでない！共產黨が悉く其の後を分擔して引き受けたのだ。

もう『レーニンの留守の間は…』とか『レーニンの病氣が癒ほれば…』などとは言つて居られなくなつた。彼等の殘つた唯一の希望と活路とはレーニン自身の身體に非ずして、大きな活けるレーニ、ズム！

共產黨は今後一切の反對論者に對し『レーニズ、ム』の楯を執つて對抗するであらう。之に對抗する黨員を悉く社會革命黨とメンシエヰキとの範疇の中へ投り込むであらう。マルクスは『何であるか』の唯一のものを說き、レーニンは『怎うすればいゝか』の唯一の道を示した。此の『怎うすれば宜いか』の修正は、『何であるか』の修正以上に墮落であると彼等は極力主張するのであらう！

要するに『黨討議』事件に於て、反對黨員は――假令人望ある大トロツキイであれ誰れであれ――悉く、小ブルジョアとメンシエヰキのカテゴリイの中へ一括されて了つたのだ！

――（二月七日）――

總選擧と護憲內閣の前途

護憲派の行くべき途

安部磯雄

護憲派が大勝利を得た結果今後の政局が如何に推移するかに就ては何人も容易に豫想することが出來ると思ふ。即ち次の內閣が護憲三派の聯立によつてか、若くは政友會と革新俱樂部の援助の下に憲政會によりて組織されるといふことである。三派の聯立內閣には充分の可能性はあるけれども、又同時に幾多の困難が伴ふて居ることをも考へなければならぬ。これに比すれば憲政會內閣の組織は遙に容易であり自然的であるやうに思はれる。獨逸の如く小黨分裂が極端に行はれて居る場合に於ては聯立內閣も已むを得ないことであらうが、英國の如く三大政黨が鼎立して居る時には矢張り一政黨に內閣を組織せしめ、友黨これを援助するといふ形式を取るのが得策である。斯くして內閣を組織する政黨は獨力其責任を負はねばならぬことになる。

兎に角次の內閣組織といふことは比較的容易に行はれるに相違ない。唯憂慮に堪へないのは其後に於ける政局が如何に推移するかといふことである。護憲派大勝後に於ける一幕だけの演技は誰にも粗想像が出來るが、次にどんな幕が出るのであるか其は全く見當がつかない。私共は藩閥內閣、官僚內閣、貴族內閣の出現する毎に何時も我政黨の意氣地なさを慨歎せざるを得なかつた。今日までの經驗によれば政黨內閣らしいものが一二回續いたかと思ふと、必ず怪しげな變態內閣が現出する。今後の政界に又同樣のことが繰返されるのではないかといふ强迫觀念に我國民の多數は惱まされて居るのである。若し護憲派の使

命が單に今度の總選擧に於て政府黨を破るといふことだけにあつたとしたならば、國民の失望はどんなに甚しいものであるかも知れない。護憲運動は單に一時的のものではなく、變態內閣出現をして絶對不可能ならしむるまでは必ず繼續しなければならぬ。

勿論現在の政黨が純理の上から政黨政治を希望して居ることは言ふまでもない。然し政黨の消長が國民の公平なる投票によりて決定されるといふよりも、往々政府の干渉に原因するといふが如き變則が行はれるため、政黨の中には款を藩閥や官僚に通ずるといふ醜態を演ずるものが出る樣になる。この弊害を除去するためには各政黨が如何なる場合に於ても政黨以外のものに斷じて政權を渡さぬといふ協約を締結するより外はない。護憲三派が三浦氏の仲介により提携することが出來た位であるから、今後政黨が自發的に一層嚴重なる申合せをなし、これを國民の前に誓ふことになれば、其目的は必ず達せられること丶信ずる。

然し各政黨が、政黨政治のため一致協力するには當然政友本黨をも共仲間に加へなければならぬ。護憲三派は清浦內閣の擁護者たる政友本黨を共同の敵として戰つたけれども、選擧も終り清浦內閣も辭職した後尙ほ彼を除外するといふことは決して政治家の襟度を示す所以ではない。過去の歷史を顧みれば何れの政黨も政治的節操に於て非難すべき點を有つて居るのではないかと思ふ。何ぞ獨り政友本黨のみを責めんやである。若し各政黨が變態內閣の出現を絶對不可能ならしむるために同一步調を取ることが出來るならば、過去の失態の如きは殆んど顧みるに足らないのである。

私は協約の內容につき重要なる點と思ふて居るところを述べて見たい。第一政黨以外の者には一切政權を渡さぬこと。第二內閣總辭職の場合には必ず後繼者として他の政黨を奏請すること。第三總選擧を行ふ政府は絶對に干渉を試みぬこと。此外に是非實行したいと思ふことは選擧法の中に選擧費の制限及び運動員の戸別訪問を禁ずる箇條を附加することである。或人は此等の法律が空文に終るべきことを唱へるかも知れぬが、法律の効果はよし現在の有權者に少いとしても、未來の有權者を敎育するには可なり有力であることを考へなければならぬ。

以上私が述べたところの希望を實現するためには主として憲政會の力を借る必要がある。若し第一黨として憲政會が內閣を組織することになれば、何事によらず模範的の政黨振りを發揮せねばならぬのは言ふまでもない。當面の政治も大切ではあるが、其よりも遙に重要なることは如何にして政黨政治の基礎を

確立すべきかといふことである。これがためには大政黨に附物である橫暴なる態度を愼まねばならぬ。自ら率先して政友本黨を說き、これを仲間の中に加へなければならぬ。政治は意見の發現である。必ずしも政友會や革新俱樂部に氣兼ねするには及ぶまい。若し自ら信ずる所を行ふて友黨と衝突することがあるならば飽くまでも戰ふべしである。然し一たび議會の信任を失ふことになれば、政黨中から其後繼者を奏請して堂々辭職するがよい。これだけでも政黨政治のためには大なる貢獻であると信ずる。

支配觀念の破滅

馬場恒吾

今度の總選擧で最も痛快に思はれることは、それが我等の支配階級が如何に愚であるかを曝露した事だ。これほど馬鹿ではあるまいと思つてゐたに、余りの馬鹿さに呆れると云ふ外はない。元來政治は支配であると思つてゐる彼等の根本概念からして間違つてゐる。立憲政治は、――たとへそれが日本の如く極めて不完全なものであつても、――上から支配する政治ではなくして、下から人民が持ち上げる政治である。たつた、これ丈けの簡單な理屈すら了解されてゐないから、我支配階級の連中は今度の如きヘマをしたのである。

元より今日の日本に於けるが如く、普通選擧が行はれてゐないで、極めて少數、即ち全國に於て僅かに三百萬余りの人民に依つて行はれる選擧が、完全に民意を代表するものでない事は明白だ。然しそれでも我完全に盲目なるところの支配階級に比較すれば、幾分か民意に近きものを云ふ。天に口なし、民をして云はしめると云ふのは今度の總選擧に當嵌る語である。

元老が推薦し、清浦子が首相となり、華族の互選議員が之を助けて、政府が干渉すれば、選擧は勝てると思つた所が、これが即ち彼等の支配觀念の錯誤である。立憲政治の本體が上から

の命令で動くものであつたならば、元老と貴族と政府の力を以てしたならば、動かし得たであらう。而して腦髓の何所かに今尙專制政治の思想をこびり付かせて居る彼等は、矢張人民を指導し、支配すると云ふ觀念を以て、此總選擧に臨んだのである。然るに何んぞ知らん、幾分でも立憲政治の雰圍氣の中に居る人民は、最早支配される人民でもなく、指導される人民でもなかつた。否寧ろ、無記名で自由に投票する權利を握つてゐる人民こそ、支配する地位に居り、指導する權利があるのだと自覺した。なあに、政權を握る實力は人民の方にあるのだと、選擧場各所に叫ばれた。元老や貴族や政府は此支配階級と人民との間の位置が顚倒して來た形勢に驚いたであらう。尤も今更驚くと云ふ事からして彼等の愚かさを證明するものであつて、憲法發布當時からして、人民に選擧權を與へる以上、政權の實力は人民に移つて行くと云ふ事は分り切つた話である。それを今日になつて目の醒めたやうに驚くのは、彼等の頭の働きが如何に鈍きかを示すものだ。

初め清浦子は內閣組織の大命を拜辭せんとした。併し其周圍には色々の動機から清浦子を總理大臣に祭り上げんとした。或は樞密院議長の後釜を狙つてゐるものもあらうし、或は大臣とならんと欲するもの、或は利權を得んと欲するもの、或は小遣錢を貰はんとするもの、此等の連中は清浦子に向つて閣下出でずんば此蒼生を如何せんと說いた。蒼生こそよい面の皮だ。蒼生は清浦子が何處の誰れだか、知つた者は少ない。名は聞いた者でも、話しをしたものは少ない。清浦子に依つて社會をよくして貰はうと思つてゐたものは尙少ない。何の緣もゆかりもなき清浦子に依つて救はれる事は、蒼生の身に採つては、有難迷惑であり、御免を蒙り度い事であつた。新聞でも演說でも、皆んな此心持ちをハッキリ云つて居つた。然るに官僚育ちのお芽出度さと、時代を知らざる盲目さと、及び支配階級に共通なる優越感と自惚れと利己心が手傳つて、清浦子自身も此蒼生を何うかする積りで、總理大臣になつた。人民が支配する所の立憲政治の本質を忘れて、如何なる老耄でも、總理大臣になれば、人民を支配しうると考へた所に、彼の錯覺があつた。此錯覺は或は彼一人の錯覺でなくして、支配階級共通の錯覺であつたかもしれぬ。兎も角も、支配すべからざる人民を、支配せんと試みた所が、此超然內閣の汎べての悲哀の根原をなしたものだ。

政府が國民を支配する。此間違つた前提から出發した總選擧であるからして、到る處に違算の生ずるのは初めから判り切つた事であつた。僕は三月號の改造に選擧の結果を聞かれて、護憲三派の合計が必ず多數で、政府は引退せねばならぬと書い

た。それはその通りになるより外はない事は、誰れにでも判り切つてゐた話である。然るに政府側では與黨の政友本黨百八十名内外、政府賛成の中立五十名内外を得れば、合計二百三十名内外で、どうかこうか、政府を維持して行けると思つた。清浦内閣は殊勝らしく、御慶事さへ無事に濟めばよいと云つた事もあるけれども、其内心に政權を握つて居り度い慾の突張つてゐた事は、淸盛の法衣の下に突張つてゐた鎧の如く、到る處で曝露されてゐる。總選擧の結果として憲政會百六十、政友會百、革新三十、護憲派の中立二十、即ち護憲派合計三百十名になつて殘り全部政府側になつても約半數、これでは政府の目算全くはづれて一日も其職に止まるべきでないのが、今尙御慶事御宴會が濟むまで形勢觀望だと云つて居る。矢張鎧の上に法衣を着る心事が苦々しい。

總選擧に大勝を博した憲政會の加藤高明子は、餘り勝ち過ぎて却つて困つてゐると冗談らしく云つた。然し之は必ずしも冗談とも見られない。政友本黨が餘りにみじめに負けて、敵が弱くなりすぎる事は、味方の結束に惡い影響はないかと心配されるのである。而して政府は其所を付け狙つてゐる。今に憲政會と政友會が喧嘩を初めるであらう。さうすれば政府は必ずしも辭職するには及ばなくなる。一寸延びれば尺とやら、先づ此所は形勢觀望と云つて一日でも辭職を延期してゐる方が得だ。それには御饗宴後迄と云つて居る方がよいと云ふ腹である。

憲政會と政友會は今喧嘩する時機でない。世間では加藤高明子が護憲三派連合内閣に反對であるかの如く云ふがそれは誤りだ。尤も加藤高橋兩名をお召しになつて、二人で内閣を組織せよと云はれゝば、加藤子は承知しない。そんな兩頭の蛇みたやうな内閣が出來るものかと云ふ彼の說である。併し元老が小細工をせずに、三派中の第一黨の代表として加藤子を推薦すれば、彼れは三派聯立内閣を作る事に躊躇しないと信ずべき理由がある。而して高橋、犬養兩氏は無任所大臣にする諒解さへ付けて置けば、必ずしも内閣組織の當初よりの入閣を要求をしないであらう。政友會も今度野黨として選擧に臨んで、普通選擧でなくてはいけないと云つて居るから、此問題でも協調が保てる。三派連合して普通選擧を一日も早く物にして吳れゝば、後は何うなつても、此内閣を成立せしめる價値はある。

其勢いで貴族院に大斧鉞を加へ、公卿大名の遺族である所の華族などに人民を支配するなどの間違つた觀念を起させぬやうにする。立憲政治の本趣意に依つて、人民は自分で自分を支配する方向に猛進する。これが今後の行く途でなければならぬ。この意味で、今日の支配階級の支配觀念に一大痛棒を喰はした

事が、此の選擧の重もなる効果であつた。

護憲派の勝利と政局の將來

關和知

今回の選擧に於て、從來の慣例を破り、必ず勝利を得べき筈の政府與黨が慘敗し、烏合の衆を以て目せられたる反對黨、即ち護憲三派が豫想外の大捷を博したるは寧ろ奇とすべきに似たれども、仔細に考ふれば決して不思議では無い。結果の上より判斷すれば、國民の立憲的自覺とか、大義名分とか、民衆政治とか種々の原因も有るべけれど、卒直に言へば、清浦內閣が餘りに無力であつたことに歸せざるを得ない。內閣自體が無力極まつたものなるが上に、其の與黨たる政友本黨が亦頗る貧弱なるが爲に、所謂特權內閣、貴族政治の陣容を張りて、政黨內閣、民衆政治に挑戰するに足るべき勇氣も無ければ實力も有たぬ。水野、鈴木の官僚に床次、小橋輩を以てして、大正も十三年を數ふる此節柄に天下分ケ目の一大政戰を決せんことは、寧ろ滑稽に類する話で、如何に犬猿雜居の護憲派に取りても、餘りの弱敵で、勝敗の數は初めより判つて居たのである。

若も清浦內閣にして鞏固なる決心を有し、乾坤一擲の勇氣を以て、所謂護憲派と雌雄を爭ふの概あらしめたならば、伊國に於ける反動政治の實現も或は難くは無かつたと思ふ。彼の選擧干渉とか、壓迫とかゞ極めて部分的で、且つ微溫的で是迄の內閣の下に見たる如き極端且露骨のもので無かつたことは、要するに內閣の無力之を然らしめたるものに外ならぬ。然もその無力なりし所以が護憲派に取りて幸福なりしのみならず、實際內閣の爲にも、國家の爲にも良いことで有つたに相違無い。選擧の結果が比較的に民意の在る所を示し得たのは、全く內閣無力の致す所で、或意味に於ては一の功名とも云ひ得る。故に單に此結果を以て護憲派が眞實に國民の信賴を得たるものとして俄に得意となり、高慢となるは最も愼むべきである、所謂護憲

派なるものは何れも其既往の經歷に於て、眞に民衆の前に仰顏正色して、護憲を叫び得る資格のものは少い、萬一にも大膽豪邁なる反動的政治家が現はれて、我が既成政黨の腐敗と罪惡とを糾彈し、鐵脚を揚げて之を蹂躙し去る如き有力なる特權內閣にてもあつたならば、今日の護憲派は決して清浦內閣を對手にしたる如き容易の勝利は得られなかつたであらう。如何にしても特權內閣が三度も續いて國民の厭き果てたる矢先き、斯かる無力內閣の出現したればこそ、一般民衆は他愛も無く護憲派に謳歌するに至つたのである。然して這般の護憲運動に一の動機を與へたるは政治的の自覺と云ふよりも寧ろ行詰まれる國民生活を如何にして展開せんかと云へる深酷なる欲求の之に加味せられたるものありし一事を見逃してはならぬ。

偖て此選擧の結果に伴ふ政局の將來如何と云ふに、清浦內閣の瓦解は既定の事實として、時局の拾收は當然護憲三派の聯立內閣を以てすべきである。比較的多數黨たる憲政會を中心として政友會、革新倶樂部共に協力して共責に當るべきである、或は聯立內閣は永續性を有せずとて危險視する者少からざるも、そは理義の上に於ても、實際の上に於ても敢て患ふべきで無い或は從來の歷史的感情とか、政策の相違とか、權力の競爭とか心配すれば限りは無い、然し、時勢と境遇とは如何なる歷史的感情よりも有力である、大隈、板垣の聯立內閣當時を以て、藤、高橋の聯立と同視することは出來ぬ、政策問題と雖も、今日の政友會がよも普選の即行に反對はあるまい、行政、財政の整理は實際焦眉の急、之が解決に何ものか異存のあるべき、貴族院の改革は勢の自然、意見の扞格あるべき筈無し、些末の政策には或は一致せざるものあらんも、護憲の聯立內閣は斯かる小節に拘はるべきで無い。權力位地の競走の如きは、這は今日の護憲派を侮辱するの甚しきものである、苟も清浦內閣に反對し、政友本黨と力戰した三派は、相互の間に於て區々たる權力爭ひ抔おくびにも出し得べき義理で無い、憲政會も政友會も護憲を叫びて協調し主義の爲に今日に至りたる者、局に當りて直に相排擠するが如くんば是れ憲政を無視し、國民を欺くの罪、到底清浦內閣、政友本黨の比に非ず、殘賊の徒天下の擧げて誅罰を免かれぬ所である、三派如何に愚なりと雖も斯く迄にはあらじ、或は聯立內閣は國家危難の秋に非ざれば出來ぬと云ふ者あり、然り今日の我國は實に國家危難の極に立てるものである、此際なればこそ愈聯立內閣の出現を要するのである、國家の公に奉ずるに於て護憲派の政治家たるものロイド、ジョージや、アスキスや、ボナローやに劣るべけんやである、護憲三派は幸にして無力なる清浦內閣に勝利を得た、此際已に克つの鼎

を以て相推讓して內外國政の重要問題を解決し、眞に政黨內閣民衆政治の實を擧ぐるに非ざれば何を以て地下の先輩に對し、何を以て時代の國民に見ゆるを得るか。加藤、高橋其他の巨頭は深く共同の責任を覺悟する所が無ければならぬ。護憲の必要は寧ろ今日以後に在りと知れ。序ながら政友本黨は此際に自重して三派の聯立內閣に對し、在野黨として大に力を養ひ、徒に權勢に阿諛すること無く、正々堂々、民衆の前に勝敗を爭ふの用意が必用である。本黨の健全なる發達は一面に於て三派の結合を鞏うし、憲政の進歩に貢獻すること大なると共に、一面に於て民衆の政治的批判力を向上せしめ、單なる護憲など云ふ抽象的題目を以て改革を事とする如き弊害を除去するに足るであらう。革新俱樂部、實業同志會は將來何れにか歸局を決して政黨の區劃整理を實現する時機があらうと思ふ。然して特權內閣は清浦內閣を以て終焉を告ぐるものと信ずる。

護憲內閣も變態だ

武藤山治

總選擧は終りました。其結果は憲政會が第一黨となりました。吾國では今後政局が如何に變化するや豫測出來ませぬが、先づ憲政會が內閣後繼者となるものと見ねばならぬ。然しながらそうなつた時、此度の總選擧に憲政會が政友、革新兩派と提携したことが吾政局の上に妙な現象を現はしわせぬかと思ひます。

若し憲政會が現內閣に反對して總選擧に臨む一の手段として此二派を道連れとしたのみで、選擧が終れば別れるものと言へばそれ迄であるが、日本流の義理人情論から言へば、政友と革新と聯立內閣を組織せねばならぬ。そうなると加藤子が總理大臣で高橋氏が大藏大臣で犬養氏が內閣の一員となると言ふ主義政策から言ふと妙なものが出來上ることゝなる。

茲に於て主義政策に依り離合集散せぬ吾國の政黨が、在野黨として立廻る間は良いが、政局に立つとなると、形の上からも、

政治を行ふ上からも犬や猿が同居すると同樣、見苦しき狀態を示し、吾國民は茲に一の實際上の政治教育の課題を解説することゝなる。

要するに憲政會が主義政策の上に爭ふて來た政友會と、一朝にして握手聯合したところに、立憲政治家として大なる不合理の點がある。

勞働黨の首領マクドナルド氏が、自由黨と政策の上に妥協聯合せよと勸告せられた時に、答へて「吾黨の政策にして、國民の贊成を得る迄は、吾等は在野黨にて可なり。何んぞ政權を得んが爲めに自由黨と聯合せんや。」と答へたる意氣態度は、吾國人の如き、在野と在朝とを上下とか在野杯と稱して朝にあるものを猥りに重とし、野にあるものを輕んじ、國民も政治家も、立憲政治の眞意義を理解せぬ間は、政治は野武士の喧嘩に過ぎぬ。

私は、國民の一日も早く、政治經濟の上に、眞の覺醒理解をする時の來るを望み國民の政治教育に務むるのが私の政界に立入つた目的です。(五月十三日)

選擧後の政局に就て

千葉龜雄

番狂わせだ。憲政會が第一黨にならうとは。事大精神と、政府黨の有難さが、骨の髓までしみ込んで居るわが國では、何と云われても、やはり政友本黨が第一黨になるもの と思つて居た。それが蓋をあけてみたら、この通りの與黨の慘敗だ。壓倒的敗北だ。國民の一政治的正義が、まだ滅びぬなどと、見えすいた茶らぽかは云ひたくないが、何にしても痛快だ。しかし、きまりきつた話だ。

この場合、國民の護憲精神が、どうだなどとはどうしてもあまり言ひたくない。護憲なんて、日が暮れれば夜になるのと變りはしない。それを一九二四年の眞晝間にかつぎ出して、それが勝つたとてあまり御自慢にはならないからだ。それよりも今こ

ろ護憲などを擔ぎ出さねばならぬやうな、世の中に置いたり、内閣を立たせたりした直接の責任者が誰れであつたか。それからをまづ自分に聞いて見るが宜しい。護憲の勝利ぐらひの胡麻化しで、既成政黨の無勢力が色揚げが出來ると思はゞ大の見當違ひだ。清浦内閣が出來る前の政黨と、選擧後の政黨が、人間の頭としてどれほど變つて來たと云ふのか。

あまり穩健でもない現代に、はやり映えもしない穩健とかの、實は時代盲と官僚臭をねり合せた看板をひつかづいて、自分から自滅の谷底へおちこんだ、政友本黨のお先まつ暗は改めめて默殺するまでもない天下の公理である普通選擧に對して、政友會と憲政會が、そのそもそもにどんな態度を採つたか。それを忘れるほどに、民衆の頭がまたもうろくしては居ないのだ。

たとへ護憲がどうのといつたところ、どうせ所得稅何圓以上の制限選擧だ。その上、選擧そのものの實際は、どこまでも、「鞄」プラス何々の財的壓倒だ、選ばれたものが、いろいろな點で、全民衆と距離の遠い、特權階級であるとは變りがなからう。この根本がどうにかなつて來ない限り、こういふ衆團の作つた内閣に、われ等は大した希望を持つ譯に行かない。

見よ、選擧後の各政黨が、何を必然の題目として騒いで居るかと。みな有頂天になつて、我が黨内閣がどうの、三派が喧嘩しないの、助け合へのとか血眼になつて居る。が、そんな事に興味を持つのは、たかだか新聞記者か、政黨喰ひ物常識屋に過ぎないので、民衆の望むものは全たく別である。たとへ三派がどんな關係であらうと、正しい時代生活を調節してさへもらへば民衆はそれでよいのだ。その意味だけで、根據の無い特權内閣を排し、いくらか民衆の意思に近さうな、政黨内閣を支持しただけだ。けれども、近かるべき筈の政黨内閣が、事實は近くなかつたらその責任が誰れにあるか。實をいへば、内閣を自分の家の器物のやうに思ひ、政權の爭奪だけに一生を棒にふりつつある、政黨人の缺點ばかりを、われ等はあまり多く見せつけられ過ぎた。この上護憲なんて幼稚な護符で、いつまでも三黨内閣が持續されるものと思つて居たら、恐らくこの上の恥さらしはあるまい。

もちろん内閣は三黨のものである。誰れもお互ひに助け合へといふ。きまつてイギリスの勞働黨と敵黨の關係などがかつぎ

出されたが、イギリス政黨の歷史的訓練と、黨人個々の社會正義心の質量を比べて來ると、イギリスがたとへうまく行つて居るからとて、日本が同樣にうまく行くとは限るまい。少くともわが國の黨人といふものの特權心理には、われ等の思議し得られぬほど不可思議なものがある。本筋であるべき民衆生活の理解には、恐ろしい低能ぶりを發揮しながら、內輪の離間中傷感覺には、すばらしい天才を持つ。策士何々といふやうな下品な男共が、一黨の生命を支配する現狀がそれだ。一黨の消長を眞に支配するものが、主義、政見に關する民衆の意志でない。こんな連中の寄り集まりが、どうして三派をうまく親和するか。いな、それよりも、どうして鋭敏に民衆と時代の機微を洞察し、その希求を申し分なく表現し、現實して吳れるか、それからが疑問だ。

第一、加藤子が內閣の首班といふのが、今のところ爭そわれぬものと見られて居る。が、心の髓まで貴族的な加藤子が、どれほど生れ變つたやうに、民衆の時代意志を實現して吳れるものか。それからが心細い。

けれども、いくらさうした既成政黨でも、けふ日民衆の意志に背いては、どう動きがつくものでない位ゐは解つて來た。その範圍では、この新內閣も、まあ民衆の多少の御機嫌をとるうな政策はやるだらう。せめて第一歩として、貴族院や、元老なんどといふ、御せつかいな機關の黑幕的權力を、思ひ切つて壓搾する位ゐが出來れば、まあそれでも、何ほどか民衆に、溜飮を下げさせる種にはなるだらう。

たゞ、媚びる爲の人氣取り政策と、始めから見識をもつて民衆へ入り込むのとは、政治心理が全く違ふ。まあ、その第二の將來への捨て石として、その第一のを我慢する程度が、われ等の現在の心持である。

政界策士多し

板倉卓造

內閣が議會を解散して、自分の信任の有無を國民に問うた總選擧の結果が、政府與黨の大敗に歸し、其國民的信任の殆ど皆無なることを實證せられたる以上、清浦內閣は最早や一日たりとも其職に留まることを得ないのは、事理の最も明白なる所であつて、假令日本にはまだ英國流の政治主義が行はれてゐないとしても、政戰の勝敗今度の如く明確なる場合に、如何なる理由を以てするも、內閣の總辭職は、避く可からざる所である。こんなことは今は問題たる價値はない。問題と爲るのは、今後の政局は如何と云ふことである。

併し此問題も政治の純理論に於ては、亦價値あるものではない。如何となれば總選擧の結果の實證したる所に從ひ、所謂護憲三派が、當然政權を常握す可きものであることは、原則上自明の理であるからである。唯だ實際上の問題として、三派の聯立內閣が可能であるか。若し可能性に乏しいとしたら、何れかの一派に依る單獨內閣を想像する外はないのであるが、此事亦果して可能であるかと云ふに歸着するのである。

雜多の諸政派のブロックに依る聯立內閣は、多年佛蘭西の政界に見る所である。英國にも大戰中及び大戰後一時聯立內閣が存在した。日本にも曾て大隈と板垣の聯立內閣が出來たこともある。故に今度の總選擧を共同に戰うた護憲三派の間に、尙ほ其協調を維持して、新政局に當ることを得んには、聯立內閣の組織も亦一案であるに相違ない。併しそれは實際に出來ない相談と云はねばならぬ。元來三派の標榜する主義には、必ずしも根本的に相反するものがあるのではなく、每度大同小異の抽象的政綱を掲げて來たに過ぎないのであるから、若し從來の政治的關係が淡[illegible]純なものであつたなら、此際提携して政權を共にすること決し[illegible]不可能ではないのであるけれども、憲政會對政友會、及び憲政會對革新俱樂部舊國民黨系の關係が、人も知

る通りの犬猿啻ならざる間柄であるのみならず、今度の選擧の實狀に於ても、多くの地方にて、三派同志間に激烈なる競爭を演じ、依然たる仇敵感情を緩和せざるは勿論、却て一層その感情を激成したる事實さへあるのであるから、三派の聯立內閣は、殆ど絕望であると見ねばならぬ。或は英國に於て戰時の聯立內閣に、ロイド・ジョージの首相の下に、保守黨の長老政治家バルフオーアやチエムバレーン等が、閣僚たることを甘んじた實例を引證して、三派の政治家が同樣の美風を示さんことを空想するものがないではないけれども、英國政治家の此實例も、當時國家の存亡に關する大戰爭を戰うてゐた際なればこそ、圓滿に行はれたのであつて、ロイド・ジョージ內閣が戰後の大問題が片付くと同時に、遂に保守黨內の陰謀に依つて瓦解したる事實に鑑みるも、聯立內閣は非常時の變態と云ふの外はない。況して聯立內閣の基礎は脆弱であつて、最も多く自滅性に富んだものであることは、佛蘭西の內閣が每度短命である實例に依つて明證されてゐる。或は前年の隈板內閣が僅に半年にして自滅したるが如き醜態を演じないにしても、到底永續の望なく、且つ政策上に斷行力を有する筈なければ、三派聯立內閣は寧ろ望ましからざる拙策である。

然らば單獨內閣に果して可能性があるかと問はゞ、當然の理に於て、第一黨たる憲政會こそ最有力なる候補者でなければならぬけれども、僅に百五六十名の所屬議員を有するに過ぎざる微力を以てしては、固より自立の望はない。矢張り政友會と革新俱樂部の支持を得ることが最重要の條件であると云はねばならぬのであるが、此事たる聯立內閣案以上の出來ない註文である。然れども憲政會をして新政局に起たしむるのが、憲政の常道であるとすれば、兎に角に憲政會內閣の出現を認め、其上の自立策は之を同黨の智慮に委すの外はない。若し再度の解散に依て、反對派を擊破し得べしと信ぜんには、此手段も亦已むを得ないと云はねばならぬ。

併し玆に一說がある。假に憲政會內閣が出來るとして、否な當然出來ねばならぬのであるが、若し反對諸派の絕對多數に依て、其存立を否認せられた場合に、憲政會內閣は議會を解散することが出來るか。議會は單に二大政黨が對立する場合には、一黨の內閣が他黨の反對に遭ひたるときは、辭職せざれば解散の外に手段はないけれども、尙ほ第三黨が存在し、且つ相當の勢力を有するものあるときは、此第三黨に政權を讓り、之をして政局に當らしむるのが、憲政の本義であると云ふの說である。先に英國で保守黨內閣が勞働黨及び自由黨の聯合攻擊に依て瓦解したる後を繼で、今の勞働黨內閣が成立したるとき、勞

働黨內閣亦保守自由兩派の挾擊に遭ひたる場合、國王は議會を解散することなく、尙ほ殘れる第三黨たる自由黨をして、之に代はらしめ、自由黨內閣亦在野二派の爲めに反對せられたるときに限り、解散を行ふ可きものであるとの說を、自由黨首領アスクイスは主張してゐる。多年の二大政黨對立の慣例が破れて、三派鼎立の狀を呈する新事態に於ては、最後の一黨まで順次に政權を展轉するのが、或は憲政の公理的運用であるかも知れない。若し此理論を日本の今の政局に適用すれば、憲政會內閣にして、在野諸派の反對に遭遇したるときは、其地位を第三黨たる政友會に讓らねばならぬこと〻爲る。併し斯樣な理論が實際に行はるゝや否やは、余の知らざる所である。

以上は事理の極めて平明なる觀測であるが、日本の政界には由來策士多く、然も陰險なる陰謀が、意外の邊に意外の突發を見ることなきを保證し難いのであるから、新政局の變化は固より尋常の理を以て之を律することを得ない。唯だ一事の斷言して誤まらざるを信ずるのは、憲政會の勢力增大に依て、分裂したる政友兩派の復歸が、著しく其機運を促進したことである。兩派は早晚必ず元に還るに相違ない。若しいよ〱憲政會內閣でも出來るやうな形勢明確とならば、兩派は適切現實に共存立に對する危險を感ずるに至る可く、從來の仇敵關係に於て、最早や立ても居てもたまらざる苦悶を生ずるであらう。事もし玆に至らば背に腹は代えられず、一切の犧牲に甘んじて忽ち合同し、再び二百何十名の大勢力を現出せざるまでも、或は此際政權に比較的有望の接近性を有する政友會の頭數を增し、之をして憲政會以上の實勢力を占めしめ、依て以て政友會內閣の再現を架想するが如き、窮策に出づることなきを保證しない。政界に策士多、輕々しく政局の變化を談ずることを得ない

政局の將來

內ヶ崎作三郎

る通りの犬猿啻ならざる間柄であるのみならず、今度の選擧の實狀に於ても、多くの地方にて、三派同志間に激烈なる競爭を演じ、依然たる仇敵感情を緩和せざるは勿論、却て一層その感情を激成したる事實さへあるのであるから、三派の聯立內閣は、殆ど絶望であると見ねばならぬ。或は英國に於て戰時の聯立內閣に、ロイド・ジョージの首相の下に、保守黨の長老政治家バルフォーアやチェムバレーン等が、閣僚たることを甘んじた實例を引證して、三派の政治家が同樣の美風を示さんことを空想するものがないではないけれども、英國政治家の此實例も、當時國家の存亡に關する大戰爭を戰うてゐた際なればこそ、圓滿に行はれたのであつて、ロイド・ジョージ內閣が戰後の大問題が片付くと同時に、遂に保守黨內の陰謀に依つて瓦解したる事實に鑑みるも、聯立內閣は非常時の變態と云ふの外はない。況して聯立內閣の基礎は脆弱であつて、最も多く自滅性に富んだものであることは、佛蘭西の內閣が毎度短命である實例に依つて明證されてゐる。或は前年の隈板內閣が僅に半年にして自滅したるが如き醜態を演じないにしても、到底永續の望なく、且つ政策上に斷行力を有する筈なければ、三派聯立內閣は寧ろ望ましからざる拙策である。

然らば單獨內閣に果して可能性があるかと問はゞ、當然の理に於て、第一黨たる憲政會こそ最有力なる候補者でなければならぬけれども、僅に百五六十名の所屬議員を有するに過ぎざる微力を以てしては、固より自立の望はない。矢張り政友會と革新俱樂部の支持を得ることが最重要の條件であると云はねばならぬのであるが、此事たる聯立內閣案以上の出來ない註文である。然れども憲政會をして新政局に起たしむるのが、憲政の常道であるとすれば、兎に角に憲政會內閣の出現を認め、其上の自立策は之を同黨の智慮に委すの外はない。若し再度の解散に依て、反對派を擊破し得べしと信ぜんには、此手段も亦已むを得ないと云はねばならぬ。

併し茲に一說がある。假に憲政會內閣が出來るとして、否な當然出來ねばならぬのであるが、若し反對諸派の絶對多數に依て、其存立を否認せられた場合に、憲政會內閣は議會を解散することが出來るか。議會は單に二大政黨が對立する場合には、一黨の內閣が他黨の反對に遭ひたるときは、辭職せざれば解散の外に手段はないけれども、尙ほ第三黨が存在し、且つ相當の勢力を有するものあるときは、此第三黨に政權を讓り、之をして政局に當らしむるのが、憲政の本義であると云ふの說である。先に英國で保守黨內閣が勞働黨及び自由黨の聯合攻擊に依て瓦解したる後を繼で、今の勞働黨內閣が成立したるとき、勞

働黨内閣亦保守自由兩派の挾撃に遭ひたる場合、國王は議會を解散することなく、尙ほ殘れる第三黨たる自由黨をして、之に代はらしめ、自由黨内閣亦在野二派の爲めに反對せられたるときに限り、解散を行ふ可きものであるとの説を、自由黨首領アスクイスは主張してゐる。多年の二大政黨對立の慣例が破れて、三派鼎立の狀を呈する新事態に於ては、最後の一黨まで順次に政權を展轉するのが、或は憲政の公理的運用であるかも知れない。若し此理論を日本の今の政局に適用すれば、憲政會内閣にして、在野諸派の反對に遭遇したるときは、其地位を第三黨たる政友會に讓らねばならぬことゝ爲る。併し斯樣な理論が實際に行はるゝや否やは、余の知らざる所である。

以上は事理の極めて平明なる觀測であるが、日本の政界には由來策士多く、然も陰險なる陰謀が、意外の邊に意外の突發を見ることなきを保證し難いのであるから、新政局の變化は固より尋常の理を以て之を律することを得ない。唯だ一事の斷言して誤まらざるを信ずるのは、憲政會の勢力增大に依て、分裂したる政友兩派の復歸が、著しく其機運を促進したことである。兩派は早晚必ず元に還るに相違ない。若しいよ／＼憲政會内閣でも出來るやうな形勢明確とならば、兩派は適切現實に其存立に對する危險を感ずるに至る可く、從來の仇敵關係に於て、最早や立ても居てもたまらざる苦悶を生ずるであらう。事もし玆に至らば背に腹は代えられず、一切の犧牲に甘んじて忽ち合同し、再び二百何十名の大勢力を現出せざるまでも、或は此際政權に比較的有望の接近性を有する政友會の頭數を增し、之をして憲政會以上の實勢力を占めしめ、依て以て政友會内閣の再現を架想するが如き、窮策に出づることなきを保證しない。政界に策士多、輕々しく政局の變化を談ずることを得ない

政局の將來

内ヶ崎作三郎

二月下旬、鄕黨の代表者數名がわざ〳〵上京して、私と膝談判をして立候補せよと居催促してから、もう三月近い時が流れた。あまりに督促が劇しいので、一寸模樣を見ようと出掛けてから、七十日ほどの日數を經た。三月五日鄕里の郡民大會が開かれて、候補者に擁立せられてから、五月十日夜まで、僅かに中九日を除いて、全部を宮城縣の第四區に費した。三月五日から十九日迄は準備に費し、同月三十日の旗上げの演說會を振り出しに、五月八日まで約七十回の演說會を重ねた。

開票の結果は五月十二日のゆふ方に知れた。二三日中は接客の混雜の中に過ぎた。かゝる多忙と取り込みの裡に於て政局の將來を見透すことは並大抵の事ではない。

とにかく、總選擧の結果は護憲三派の大勝利に歸した。政友本黨側では憲政會の勝利は最後の運動費が豐富であるからだと言ひ觸らしてゐるが、これは負け惜みに過ぎない。憲政會は公平に選擧を行へば、全國を通じて優に百七八十名は出し得る潛勢力を有してゐる。それが大正九年の總選擧に於て壓迫されたのである。國民の同情が此際憲政會に集つたのは當然である。

同時に新聞の勢力と言論の勢力が恐しく民衆を支配するやうになつた。此は大正九年に比して著しい相違である。年々歲々花相似、年々歲々人不同といふは眞理である。過去四年は民衆が著しく覺醒して來た。それに拘らず、各府縣の警察部長が民衆が依然として郡長や署長の干渉によつて左右せらるゝものと考へたのがそも〳〵の誤算である。現に盛岡市に於ける政戰の結果は確かに全國を通じて高橋是淸氏に寄せられたる言論機關の同情に負ふ所が少くあるまい。

苦節十年の我慢を續けた憲政會が第一黨の位置をえたのは當然である。若し政府黨なるが故に朝飯前に第一黨たることが出來るといふ有樣ならば、全く暗黑の世界と申さねばならぬ。然るに絕對多數黨がないから後繼內閣に關する問題が興味の中心となる。

常識から考へても政友本黨は護憲三派の聯合力に刃向ふことが出來ぬから、淸浦內閣は當然辭職すべきである。しかし折角握つた政權は放したくないから、色々の策略を廻らすに違ひない。最初政府及び政友本黨は政友會を當面の敵と見做したらしい。憲政會は却つて有利の位置に立つた。しかるに四月下旬か五月はじめに到りて、高橋是淸氏は盛岡市で落選するもの、また乾度落選させ得るものと政府及び本黨側は確信した。そして全力を之に傾倒したのである。もしこの空想が實現せられ

ば、政友會が分裂して、本黨に降參するもの、歸順するものが多いと觀測した。若しさうなれば占めたものだと糠喜びをしたのであらふ。之に反して、憲政會は案外に優勢に見えたから、之を倒せよとばかり、有ろ事無い事を取り混ぜて宣傳したり干渉を試みたりした。然るに民衆は目覺めてゐたから、その効果はなかつた。また或選擧區に於ては大勢が決定してゐたから、そのきゝめがなかつた。而して萬事は豫想を裏切つて、あの通りの慘敗となつたのである。政友本黨人なきにあらざるも、時勢の進歩を洞察する人に乏しき誤りは免れまい。

政友會と政友本黨とを復縁せしめて、多數黨にして見たいとやきもきしてゐる人もあるとのことだが、これは出來ぬ相談である。よしんば集合離散は世の常なればとて、あのやうに懸命に爭つた、後に政權欲のために再び合併することは出來まい。夫婦喧嘩なら別物だが、苟くも天下の大政黨として出所進退を明かにする限り、必ず國民の輿論の公廷に於て審判せらるゝ日の近きを覺悟せねばならぬ。

淸浦内閣はいよ／＼壇の浦まで漕ぎ付けるか、さなくば、成るたけ早く城を明け渡すがよからふ。そして晩節を全ふするに限る。

殘る問題は後繼内閣は護憲三派の聯合か憲政會の單獨内閣かといふこと丈である。

護憲運動には不徹底の點もあつたらう。しかし國民に對する約束もある。聲明もある。私は個人として聯合内閣の成立を希望する。總理大臣には第一黨の黨首を戴くはいふ迄もない。然るに聯合内閣は過去に於て失敗の記録を殘してゐる。黨派根性の強過ぎる我國の政黨を基礎として永續すべき聯合内閣の組織と維持とは容易ならざる骨折を要するのである。しかし此際であるから凡てを水に流して聯合するが得策である。しからざれば國民をあざむくことゝもなる。

玆に考察すべきは現下の政情が大に英國最近の政情に類似してゐることである。ボルトウイン氏を首領とする保守黨が保護貿易政策を提げて議會を解散し、當然再び第一黨たることが出來ると考へたのは、丁度、政友本黨が解散後の第一黨を夢想したと同樣である。しかるに案外にも勞働黨が擡頭した。これが憲政會が第一黨の位置に立つたと同樣である。自由黨の立場が、誂向きに政友會の立場其儘である。勞働黨は自由黨と聯合内閣を組織することの困難は護憲三派の聯合内閣以上であるはいふ迄もない。されば自由黨は政策本位に立ちて、勞働黨内閣を應

政治を行ふ上からも犬や猿が同居すると同樣、見苦しき狀態を示し、吾國民は玆に一の實際上の政治敎育の課題を解說することゝなる。

要するに憲政會が主義政策の上に爭ふて來た政友會と、一朝にして握手聯合したところに、立憲政治家として大なる不合理の點がある。

勞働黨の首領マクドナルド氏が、自由黨と政策の上に妥協聯合せよと勸告せられた時に、答へて、「吾黨の政策にして、國民の贊成を得る迄は、吾等は在野黨にて可なり。何んぞ政權を代が爲めに自由黨と聯合せんや。」と答へたる意氣態度は、吾國人の如き、在野と在朝とを上下とか在野杯と稱して朝にあるものを猥りに重とし、野にあるものを輕んじ、國民も政治家も、立憲政治の眞意義を理解せぬ間は、政治は野武士の喧嘩に過ぎぬ。

私は、國民の一日も早く、政治經濟の上に、眞の覺醒理解をする時の來るを望み國民の政治敎育に務むるのが私の政界に立入つた目的です。(五月十三日)

選擧後の政局に就て

千葉龜雄

番狂わせだ。憲政會が第一黨にならうとは。事大精神と、政府黨の有難さが、骨の髓までしみ込んで居るわが國では、何と云われても、やはり政友本黨が第一黨になるもの と思つて居た。それが蓋をあけてみたら、この通りの與黨の慘敗だ。壓倒的敗北だ。國民の―政治的正義が、まだ滅びぬなどと、見えすいた茶らぽかは云ひたくないが、何にしても痛快だ。しかし、きまりきつた話だ。

この場合、國民の護憲精神が、どうだなどとはどうしてもあまり言ひたくない。護憲なんて、日が暮れれば夜になるのと變りはしない。それを一九二四年の眞晝間にかつぎ出して、それが勝つたとてあまり御自慢にはならないからだ。それよりも今こ

ろ護憲などを擔ぎ出さねばならぬやうな、世の中に置いたり、内閣を立たせたりした直接の責任者が誰れであつたか。それからをまづ自分に聞いて見るが宜しい。護憲の勝利ぐらひの胡麻化しで、既成政黨の無勢力が色揚げが出來ると思はゞ大の見當違ひだ。清浦内閣が出來る前の政黨と、選擧後の政黨が、人間の頭としてどれほど變つて來たと云ふのか。

あまり穩健でもない現代に、はやり映えもしない穩健とかの、實は時代盲と官僚臭をねり合せた看板をひつかづいて、自分から自滅の谷底へおちこんだ、政友本黨のお先まつ暗は改めめて默殺するまでもない　天下の公理である普通選擧に對して、政友會と憲政會が、そのそもそもにどんな態度を採つたか。それを忘れるほどに、民衆の頭がまたもうろくしては居ないのだ。

たとへ護憲がどうのといつたところ、どうせ所得税何圓以上の制限選擧だ。その上、選擧そのものの實際は、どこまでも、「鞄」プラス何々の財的壓倒だ.選ばれたものが、いろいろな點で.全民衆と距離の遠い、特權階級であるとは變りがなからう。この根本がどうにかなつて來ない限り、こういふ衆團の作つた内閣に、われ等は大した希望を持つ譯に行かない。

見よ、選擧後の各政黨が、何を必然の題目として騷いで居るかと。みな有頂天になつて、我が黨内閣がどうの、三派が喧嘩しないの、助け合へのとか血眼になつて居る。が、そんな事に興味を持つのは、たかだか新聞記者か、政黨喰ひ物常識屋に過ぎないので、民衆の望むものは全たく別である。たとへ三派がどんな關係であらうと、正しい時代生活を調節してさへもらへば民衆はそれでよいのだ。その意味だけで、根據の無い特權内閣を排し、いくらか民衆の意思に近さうな、政黨内閣を支持しただけだ。けれども、近かるべき筈の政黨内閣が、事實は近くなかつたらその責任が誰れにあるか。實をいへば、内閣を自分の家の器物のやうに思ひ、政權の爭奪だけに一生を棒にふりつつある、政黨人の缺點ばかりを、われ等はあまり多く見せつけられ過ぎた。この上護憲なんて幼稚な護符で、いつまでも三黨内閣が持續されるものと思つて居たら、恐らくこの上の恥さらしはあるまい。

もちろん内閣は三黨のものである。誰れもお互ひに助け合へといふ。きまつてイギリスの勞働黨と敵黨の關係などがかつぎ

出されたが、イギリス政黨の歴史的訓練と、黨人個々の社會正義心の質量を比べて來ると、イギリスがたとへうまく行つて居るからとて、日本が同樣にうまく行くとは限るまい。少くともわが國の黨人といふものの特權心理には、われ等の思議し得られぬほど不可思議なものがある。本節であるべき民衆生活の理解には、恐ろしい低能ぶりを發揮しながら、内輪の離間中傷感覺には、すばらしい天才を持つ。黨士何々といふやうな下品な男共が、一黨の生命を支配する現狀がそれだ。一黨の消長を直に支配するものが、主義、政見に關する民衆の意志でない。こんな連中の寄り集まりが、どうして三派をうまく親和するか。いな、それよりも、どうして鋭敏に民衆と時代の機微を洞察し、その希求を申し分なく表現し、現實して呉れるか、それからが疑問だ。

第一、加藤子が内閣の首班といふのが、今のところ爭そわれぬものと見られて居る。が、心の髓まで貴族的な加藤子が、どれほど生れ變つたやうに、民衆の時代意志を實現して呉れるものか。それからが心細い。

けれども、いくらさうした既成政黨でも、けふ日民衆の意志に背いては、どう動きがつくものでない位ゐは解つて來た。その範圍では、この新内閣も、まあ民衆の多少の御機嫌をとるうな政策はやるだらう。せめて第一歩として、貴族院や、元老なんどといふ、御せつかいな機關の黑幕的權力を、思ひ切つて壓捺する位ゐが出來れば、まあそれでも、何ほどか民衆に、溜飮を下げさせる種にはなるだらう。

たゞ、媚びる爲の人氣取り政策と、始めから見識をもつて民衆へ入り込むのとは、政治心理が全く違ふ。まあ、その第二の將來への捨て石として、その第一のを我慢する程度が、われ等の現在の心持である。

政界策士多し

板倉卓造

內閣が議會を解散して、自分の信任の有無を國民に問うた總選擧の結果が、政府與黨の大敗に歸し、其國民的信任の殆ど皆無なることを實證せられたる以上、淸浦內閣は最早や一日たりとも其職に留まることを得ないのは、事理の最も明白なる所であつて、假令日本にはまだ英國流の政治主義が行はれてゐないとしても、政戰の勝敗今度の如く明確なる場合に、如何なる理由を以てするも、內閣の總辭職は、避く可からざる所である。こんなことは今は問題たる價値はない。問題と爲るのは、今後の政局は如何と云ふことである。

併し此問題も政治の純理論に於ては、亦價値あるものではない。如何となれば總選擧の結果の實證したる所に從ひ、所謂護憲三派が、當然政權を常握す可きものであることは、原則上自明の理であるからである。唯だ實際上の問題として、三派の聯立內閣が可能であるか。若し可能性に乏しいとしたら、何れかの一派に依る單獨內閣を想像する外はないのであるが、此事亦果して可能であるかと云ふに歸着するのである。

雜多の諸政派のブロックに依る聯立內閣は、多年佛蘭西の政界に見る所である。英國にも大戰中及び大戰後一時聯立內閣が存在した。日本にも曾て大隈と板垣の聯立內閣が出來たこともある。故に今度の總選擧を共同に戰うた護憲三派の間に、尙ほ其協調を維持して、新政局に當ることを得んには、聯立內閣の組織も亦一策であるに相違ない。併しそれは實際に出來ない相談と云はねばならぬ。元來三派の標榜する主義には、必ずしも根本的に相反するものがあるのではなく、每度大同小異の抽象的政綱を揭げて來たに過ぎないのであるから、若し從來の政治的關係が單純なものであつたなら、此際提携して政權を共にすること決して不可能ではないのであるけれども、憲政會對政友會、及び憲政會對革新俱樂部舊國民黨系の關係が、人も知

る通りの犬猿啻ならざる間柄であるのみならず、今度の選擧の實狀に於ても、多くの地方にて、三派同志間に激烈なる競爭を演じ、依然たる仇敵感情を緩和せざるは勿論、却て一層その感情を激成したる事實さへあるのであるから、三派の聯立內閣は、殆ど絶望であると見ねばならぬ。或は英國に於て戰時の聯立內閣に、ロイド・ジョージの首相の下に、保守黨の長老政治家バルフオーアやチエムバレーン等が、閣僚たることを甘んじた實例を引證して、三派の政治家が同樣の美風を示さんことを空想するものがないではないけれども、英國政治家の此實例も、當時國家の存亡に關する大戰爭を戰うてゐた際なればこそ、圓滿に行はれたのであつて、ロイド・ジョージ內閣が戰後の大問題が片付くと同時に、遂に保守黨內の陰謀に依つて瓦解したる事實に鑑みるも、聯立內閣は非常時の變態と云ふの外はない。況して聯立內閣の基礎は脆弱であつて、最も多く自滅性に富んだものであることは、佛蘭西の內閣が每度短命である實例に依つて明證されてゐる。或は前年の隈板內閣が僅に半年にして自滅したるが如き醜態を演じないにしても、到底永續の望なく、且つ政策上に斷行力を有する筈なければ、三派聯立內閣は寧ろ望ましからざる拙策である。

然らば單獨內閣に果して可能性があるかと問はゞ、當然の理に於て、第一黨たる憲政會こそ最有力なる候補者でなければならぬけれども、僅に百五六十名の所屬議員を有するに過ぎざる微力を以てしては、固より自立の望はない。矢張り政友會と革新俱樂部の支持を得ることが最重要の條件であると云はねばならぬのであるが、此事たる聯立內閣案以上の出來ない註文である。然れども憲政會をして新政局に起たしむるのが、憲政の常道であるとすれば、兎に角に憲政會內閣の出現を認め、其上の自立策は之を同黨の智慮に委すの外はない。若し再度の解散に依て、反對派を擊破し得べしと信ぜんには、此手段も亦已むを得ないと云はねばならぬ。

併し茲に一說がある。假に憲政會內閣が出來るとして、否な當然出來ねばならぬのであるが、若し反對諸派の絶對多數に依て、其存立を否認せられた場合に、憲政會內閣は議會を解散することが出來るか。議會は單に二大政黨が對立する場合には、一黨の內閣が他黨の反對に遭ひたるときは、辭職せざれば解散の外に手段はないけれども、尙ほ第三黨が存在し、且つ相當の勢力を有するものあるときは、此第三黨に政權を讓り、之をして政局に當らしむるのが、憲政の本義であると云ふの說である。先に英國で保守黨內閣が勞働黨及び自由黨の聯合攻擊に依て瓦解したる後を繼で、今の勞働黨內閣が成立したるとき、勞

働黨內閣亦保守自由兩派の挾擊に遭ひたる場合、國王は議會を解散することなく、尙ほ殘れる第三黨たる自由黨をして、之に代はらしめ、自由黨內閣亦在野二派の爲めに反對せられたるときに限り、解散を行ふ可きものであるとの說を、自由黨首領アスクイスは主張してゐる。多年の二大政黨對立の慣例が破れて、三派鼎立の狀を呈する新事態に於ては、最後の一黨まで順次に政權を展轉するのが、或は憲政の公理的通用であるかも知れない。若し此理論を日本の今の政局に適用すれば、憲政會內閣にして、在野諸派の反對に遭遇したるときは、其地位を第三黨たる政友會に讓らねばならぬことゝ爲る。併し斯樣な理論が實際に行はるや否やは、余の知らざる所である。

以上は事理の極めて平明なる觀測であるが、日本の政界には由來策士多く、然も陰險なる陰謀が、意外の邊に意外の突發を見ることなきを保證し難いのであるから、新政局の變化は固より尋常の理を以て之を律することを得ない。唯だ一事の斷言して誤まらざるを信ずるのは、憲政會の勢力增大に依て、分裂したる政友兩派の復歸が、著しく其機運を促進したことである。兩派は早晚必ず元に還るに相違ない。若しいよ〳〵憲政會內閣でも出來るやうな形勢明確とならば、兩派は適切現實に共存立に對する危險を感ずるに至る可く、從來の仇敵關係に於て、最早や立ても居てもたまらざる苦悶を生ずるであらう。事もし茲に至らば背に腹は代えられず、一切の犧牲に甘んじて忽ち合同し、再び二百何十名の大勢力を現出せざるまでも、或は此際政權に比較的有望の接近性を有する政友會の頭數を增し、之をして憲政會以上の實勢力を占めしめ、依て以て政友會內閣の再現を架想するが如き、竊策に出づることなきを保證しない。政界に策士多、輕々しく政局の變化を談ずることを得ない

政局の將來

內ケ崎作三郎

二月下旬、鄕黨の代表者數名がわざ〳〵上京して、私と膝談判をして立候補せよと居催促してから、もう三月近い時が流れた。あまりに督促が勵しいので、一寸模樣を見ようと出掛けてから、七十日ほどの日數を經た。三月五日鄕里の郡民大會が開かれて、候補者に擁立せられてから、五月十日夜まで、僅かに中九日を除いて、全部を宮城縣の第四區に費した。三月五日から十九日迄は準備に費し、同月二十日の旗上げの演說會を振り出しに、五月八日まで約七十回の演說會を重ねた。

開票の結果は五月十二日のゆふ方に知れた。十三日中は接客の混雜の中に過ぎた。かゝる多忙と取り込みの裡に於て政局の將來を見透すことは並大抵の事ではない。

とにかく、總選擧の結果は護憲三派の大勝利に歸した。政友本黨側では憲政會の勝利は最後の運動費が豐富であるからだと言ひ觸らしてゐるが、これは負け惜みに過ぎない。憲政會は公平に選擧を行へば、全國を通じて優に百七八十名は出し得る潜勢力を有してゐる。それが大正九年の總選擧に於て壓迫されたのである。國民の同情が此際憲政會に集つたのは當然である。

同時に新聞の勢力と言論の勢力が恐しく民衆を支配するやうになつた。此は大正九年に比して著しい相違である。年々歲々花相似、年々歲々人不同といふは眞理である。過去四年は民衆が著しく覺醒して來た。それに拘らず、各府縣の警察部長が民衆が依然として郡長や署長の干渉によつて左右せらるゝものと考へたのがそも〳〵の誤算である。現に盛岡市に於ける政戰の結果は確かに全國を通じて高橋是清氏に寄せられたる言論機關の同情に負ふ所が少くあるまい。

苦節十年の我慢を續けた憲政會が第一黨の位置をえたのは當然である。若し政府黨なるが故に朝飯前に第一黨たることが出來るといふ有樣ならば、全く暗黑の世界と申さねばならぬ。然るに絕對多數黨がないから後繼內閣に關する問題が興味の中心となる。

常識から考へても政友本黨は護憲三派の聯合力に刃向ふことが出來ぬから、清浦內閣は當然辭職すべきである。しかし折角握つた政權は放したくないから、色々の策略を廻らすに違ひない。最初政府及び政友本黨は政友會を當面の敵と見做したらしい。憲政會は却つて有利の位置に立つた。しかるに四月下旬から五月はじめに到りて、高橋是清氏は盛岡市で落選するもの、また乾度落選させ得るものと政府及び本黨側は確信した。そして全力を之に傾倒したのである。もしこの空想が實現せらるれ

ば、政友會が分裂して、本黨に降參するもの、歸順するものが多いと觀測した。若しさうなれば占めたものだと糠喜びをしたのであらふ。之に反して、憲政會は案外に優勢に見えたから、之を倒せよとばかり、有る事無い事を取り混ぜて宣傳したり干渉を試みたりした。然るに民衆は目覺めてゐたから、その効果はなかつた。また或選擧區に於ては大勢が決定してゐたから、そのきゝめがなかつた。而して萬事は豫想を裏切つて、あの通りの慘敗となつたのである。政友本黨人なきにあらざるも、時勢の進歩を洞察する人に乏しき譏りは免れまい。

政友會と政友本黨とを復緣せしめて、多數黨にして見たいとやきもきしてゐる人もあるとのことだが、これは出來ぬ相談である。よしんば集合離散は世の常なればとて、あのやうに懸命に爭つた、後に政權欲のために再び合併することは出來まい。夫婦喧嘩なら別物だが、苟くも天下の大政黨として出所進退を明かにする限り、必ず國民の輿論の公廷に於て審判せらるゝ日の近きを覺悟せねばならぬ。

清浦内閣はいよいよ壇の浦まで漕ぎ付けるか、さなくば、成るたけ早く城を明け渡すがよからふ。そして晩節を全ふするに限る。

殘る問題は後繼内閣は護憲三派の聯合か憲政會の單獨内閣かといふこと丈である。

護憲運動には不徹底の點もあつたらう。しかし國民に對する約束もある。聲明もある。私は個人として聯合内閣の成立を希望する。總理大臣には第一黨の黨首を戴くはいふ迄もない。然るに聯合内閣は過去に於て失敗の記錄を殘してゐる。黨派根性の強過ぎる我國の政黨を基礎として永續すべき聯合内閣の組織と維持とは容易ならざる骨折を要するのである。しかし此際であるから凡てを水に流して聯合するが得策である。しからざれば國民をあざむくことゝもなる。

茲に考察すべきは現下の政情が大に英國最近の政情に類似してゐることである。ボルトウイン氏を首領とする保守黨が保護貿易政策を提げて議會を解散し、當然再び第一黨たることが出來ると考へたのは、丁度、政友本黨が解散後の第一黨を夢想したと同樣である。しかるに案外にも勞働黨が擡頭した。これが憲政會が第一黨の位置に立つたと同樣である。自由黨の立場が誂向きに政友會の立場其儘である。勞働黨は自由黨と聯合内閣を組織することの困難は護憲三派の聯合内閣以上であるはいふ迄もない。されば自由黨は政策本位に立ちて、勞働黨内閣を應

援するとゝなつた。

されば護憲三派の聯合內閣があまりに面倒な時は憲政會內閣を組織して、政友會と革新俱樂部が之を援助するといふことにしなければなるまい。それが果して政局の安定を永續する所以かどうかは問題である。しかし小黨分立的時代に於ては長期安定を望むことが無理かもしれない。當分群雄割據の形勢を持續して、或る個人としては或る政黨の統一力を發揮する迄は、不安定の狀態が續くものと見なければなるまい。（五、一六）

總選擧の結果と將來の政局

三宅雪嶺

最近の總選擧は、內閣と研究會と政友本黨との失敗であつて、何れも先例を信じ過ぎ、いつでも柳の下に泥鰌がゐると思ひ込んだのによる。

政友會の分離者は、初め殘留者と何れがよいかゞ判明せず、黨弊改革を唱へるなど、寧ろ希望を囑せられたのに、清浦內閣と結托し穩健着實を觸れ廻るに至り、先づ方針を過つたとせねばならぬ。從來の例に徵し、左樣するのが有利であつて、二百八十名中より百五十を奪ひ、殘留者をして顏色なからしめたのに與つてをる。

政友會は幾年も政府黨として慣れ、泌々其有難味を知り、先づ政府黨といふを標榜するのが多數を糾合する所以となり、其通りに着手し其通りの結果を得、これならばと多寡を括つたのは、油斷大敵、後の失敗を招いてをる。

前に幾回も政府黨が勝利を得、政府黨になりさへすれば勝利を得るとしたのも、威力と金力との前に何者も抵抗し得ないとなつてをり、干涉と運動費とが、虎に翼を添へるの勢ひであるとせられてをつた。露骨な干涉を避けても、地方官の手加減が頗る有力であり、運動費はどうとでもなると思はれたのが、實際には色々當の外れるを免れなんだ。

內務省でも、以前ほど力瘤を入れなかつたらしく、入れても

効能がなかつたのか、地方官が反對黨を壓迫すること少く、表面なりとも好意を表したのさへある。地方官は內閣の長くなく、總選擧の結果でどうにかならうと考へたのが少くない。

憲政會では、十年來今回初めて、警察官に好意を表せられたと興がつた。其調子で、幾分か手加減を加へたとて、何程の効能があらうか。所によつて干涉がましい事があるにせよ、何かの行違ひから起つたのであつて、知事が進んで腕を揮つたのでないと思はれる。

何處の知事でも蠻骨を揮ふべき場合でないとしたらう。折角骨折つても、相當の報酬があるかゞ疑はれた。干涉せぬのが、立憲的といはゞ云へ、御用黨側で、聊か失望せずにをれぬ。

或は縣廳で贔負してくれる保護してをると信じつゝ特別に何事もなかつたのもある。

警察官も、政府黨を勝たさうとするよりも、非將棋でも見物するが如く、何ちらが勝つかと云ひ囃し面白がつてをる。幾らか政府黨の便利を計るものゝ、眞劍に注意せず、上の客に態よいことを云ふやうになつてをる。不利らしいことを云ひ、嫌な顏をするのを見るよりは、一時でも景氣のよいことを語り、笑ひ興じやうとする。以前にも警察の報告が當にならなかつたけれど、今回ほど當にならぬのがあつたかどうか。運動費は相應に潤澤であつても、反對黨と比較し、思ふやうに行かなんだでないか。政府黨で費す所は、割合に効能少く、反對黨より幾割も多く費すの用意するが、今回反對黨を抑え附けるに余程苦しんだ跡がある。

憲政會は、大資本家が後押しと察せられるほど出金せず、もつと出さうなものと苦情を云はれつゝ、何程かゞ出るに定つてをつた。出ても、政府黨に敵はぬとなつてをつたが、今度は、政府黨の方で金に敵はぬと憾むのが所々にある。

本黨と憲政會と何の割合で費したか、恐らく本黨の方が多からうが、思ふやうに金で切り崩し得ず、逆に切り崩されたのが色々ある。何處でも運動員が、運動費の猫婆をきめても、政府黨で當前のことに思ひ、取れるだけ取り得とするやうになつてをり、選擧掛に於て目を皿にして注意しても、費したほどに効果を擧げる譯にゆかぬ。下手ばかりをするでもなし、相應に監督し督勵するけれど、金があるので當ると思ふことが出來ぬ。

憲政會は、金でもヒケを取らぬ方であつた。慣れてもをり、無駄費ひせぬだらうが、本黨に恐れを抱かすだけのことがあつた。本黨で金を調達しても、水のやうに撒き散らす譯に行かず、今一層あつたならばと口惜しく思ふ所もあつたらう。

憲政會は天下の分け目、思ひ切つて奮發したのもさること乍

ら、殘留組なる政友會も、余り窮迫せず、屢々互角の力で戰ひ得たのに、當が外れた。

何んにしても、本黨に有力なる人物と目指されるのが幾人もありながら、新世帶で基礎が固まらず、ざわついて運動が浮滑りするを免れぬ。殘留組では、惡辣とか何とか云はれても、喧嘩となつて命掛けに飛出し、何が何でも勝たうとするのがある。何處となく引しまつてをるのに、見掛けほど金に窮せず、必要に應じて調達し得るとあつては、本黨側で尾羽打枯らした浪人と見くびることが出來ぬ。

反對黨として、憲政會は成功であり、政友會は不成功でも予想ほどでなく、八十以下に蹴落されると言はれ、百以上に維持し得たのを稱せねばならぬ。

之に對し政府黨なる本黨は、舊政友會の如く絕對多數を制すべしとの夢の破れたのは勿論、當初の百五十名をさへ維持するを得ず、色々と驅り集め辛うじて百卅人に近づかうとするのは、何處からみても大失敗に違ひない。政府黨として必ず勝つと思ひ込んだのが間違ひであつて、豫め新な勢ひの展開し來つたのを察したならば、それほど下手なことにならなんだらう。今後如何になるか、前に必勝を期した連中は、途方に暮れずにをれぬ。

もし目が利き腕が冴えた者があらば、內閣總辭職し、憲政會總裁又は政友會總裁又は其兩總裁に革新俱樂部代表者を加へ、內閣組織の大命の降るやうに斡旋するであらう。

兎も角も、政友本黨は特權階級の擁護者となり、憲政擁護を標榜する三派と戰ふのは、內實に何の理由あるにせよ、不利益の位置に立つものであり。新たに陣立を整ふるに如くはない。急轉直下で擁護派を政府黨とし、自ら反對黨になつたならば如何か。左樣しなくても左樣なるやうにされるかも知れぬが、先んずれば人を制し、後るれば人に制せられるとは其處にある。

護憲の旗印は淸浦內閣に對してゞあつて、該內閣が倒れば旗を何處に建てるか。

總選擧に實業同志會から八名選出され、揃ひも揃つて新議員といふのは、數こそ甚だ少けれ、新たな現象と稱するに足る。

護憲三派から聯合運動を申込まれ之を拒絕したのは、護憲を非としたのでなく、今日まで政弊を釀し來つたのは政府と同じく三派も責を分たねばならぬとする所がある。

國民に三十億圓を負擔せしめ、財政の行詰りを來したのは誰の罪かと云ふのである。

第一黨又は三派が內閣を組織するとし、果して政務の革新を斷行し得るか。三派が協調を維持するや否やを疑ふは抑々末の

末に屬し、よく協調して內治外交を如何にすべきやが主要の問題とする。

政友本黨に於て、本黨など好い加減の名稱を附けず、黨名と共に組織を改め、政務の革新を主張せば、足輕黨と云ふが如き何處へ行つたか分らなくなつてしまう。それには從來の惡い習慣を變改せねばならぬ。

政府黨としてコビリ着かうとするがため、穩健着實を口走るやうになるが、世界に於ける我國今日の狀態で、全速力を以つて內治外交の刷新を行はねばならぬ。

さういふことの分らぬ筈がなく、それが分らぬとあつては、今後、たゞ失敗の上塗りする外ない。

今日のところ、護憲三派に何の缺點あつても、清浦內閣の如きは依賴せずして衆議院に多數を制しやうとする所、確かに本黨の爲す所に優つてをり、其優つた點で勝利を得たと云へる。護憲といふ語は必ずしも看板倒れでない。けれど、憲政會が第一黨となつたのは、幾年か逆境に堪へたのを酬ひられた所がある。

今は特權階級を攻擊するに資本家の力を以つてする形がある。政府で特殊銀行會社を濫用すれば、多數の金を得るにしても、今日それほどの事をなすを許されず、若干富豪から寄せ集めた所では、到底大富豪關係者の出す所に及ばない。纏つた金となつては、殆んど大富豪に限る。

憲政會は相應に地盤があり、黨員の力のみで政界に位置を占め得るも、他の黨派が悉く縮少したのに反し、獨り擴張したのは運動資金の豐富なるがためと疑はれても仕方がない。今は非立憲內閣に對し、特權階級に對し、大富豪の力を借りて構はぬとするが、明に大富豪の力の現はれるに至り、之に對抗する運動の起るの避くべくもない。

今は其氣配の少しも見えず、急に見えるやうにならぬが、大富豪が政權を得るなど尋常普通のことでない。或は大富豪が何處迄も政權と關係なく、憲政會の盛衰を措いて問はぬかも知れぬけれど、勢の趣く所、如何になるべきかを察するのも無用でない。

實業同志會も、政府及び政黨の弊を矯めるに急であつて、政權と資本との關係は、今深く注意を拂はぬやうであり、現在の日本政界で資本の事を問題としてをらぬとしてよい。併し大富豪を後援とするらしい政黨が、政權を得れば、事實の眞否は暫くおき、新たに資本に關する問題を惹起さぬとせぬ。

既成政黨は、皆從來の資本制度を認め、寧ろ大富豪の力を借るも、特權階級の橫暴を制すべしとしやうが、それで問題が盡

きてをるのでなく、次から次へと問題の起るのを察せねばならぬ。

併し今は其處まで到つたのでなく、政府及び政府黨が總選擧に失敗し、此多事多端なる際に、政務を擧げることが出來ず、何とかせねばならぬといふのである。

差當つて、衆議院の多數を制する政黨政派に基礎をおく内閣を組織し振つて内治外交に盡力するのほかなけれど、それが出來るかどうかゞ疑はしい。

大隈内閣が今少し態がよかつたならば希望を囑し得るが何分にも左樣行かず、前に横つたる難關を切り拓き得るか、覺束なく感ぜずにはをれぬ。

護憲三派は實業同志會の主義、政綱、政策を何と見るか。

日本で資本が急に問題にならぬならば、同志會の唱へる所を重要問題とすべきでないか。

同志會は交渉團體でなく。運動するに難いが、多年政府に頭が擧がらぬと定つてをつた實業家側から革新運動の起つたのは、政府黨ならで多數を制し得ないとした習慣の變じ反對黨が優に多數を制するに至つたのと相俟ち、政界に於ける機運の一變を示すものとし、之に乘じ政治の建直しを斷行し得れば何よりの幸ひである。

隱健着實といふ類は、大抵にして封じ込めるがよい。

英米は何の狀態か、露獨は何の狀態か、亞細亞の一隅に閉ぢ込められ、手も足も出ぬ姿で、隱健着實もないでないか。總選擧に勝つたものも負けたものも、均しく現在及び將來を察し奮勵努力せねばならぬ。

鈴木文治氏の進退に關し福田博士の妄論を駁す

赤松克麿

一

日本勞働總同盟會長鈴木文治氏が、さきに中央職業紹介所委員を辭し、しかして國際勞働總會の勞働代表に就任した其の間の進退の經緯に關して、東京商科大學教授福田德三氏が鈴木氏に對し猛烈な非難の矢を放つた。福田氏の非難は、先づ四月十二日附の鈴木氏宛の書簡に現はれ、次いで都下二三の新聞紙上に現はれ、更に改造五月號の誌上に、福田氏一流の花々しい光彩を以て現はれた。しかして福田氏の鋒鋩は單に鈴木氏に對してのみならず、總同盟の幹部に對しても向けられ、從つて總同盟全體に對して向けられたものと見て差支ないのであつて、之れに對し、總同盟として解答すべきや否やに就き、多少議論もあつたのであるが、總同盟としては、正面から眞面目になつて福田氏の議論の相手になる必要なしといふ論者が多いし、また總同盟に同情ある二三の學者思想家の間にも同樣の意見があつたので、結局、總同盟としては、福田氏の議論を頭から默殺することに決定したのである。何が故に默殺したか。それは福田氏の本問題に對する態度が、最初から不當不法不遜を極め、以て總同盟幹部の感情を激化せしめ、福田氏を遇するに一公人の儀禮を以てするの餘地無からしめたからである。先づ四月十二日附の鈴木氏宛の私信なるものは、鈴木氏に對する好意

ら、殘留組なる政友會も、余り窮迫せず、屢々互角の力で戰ひ得たのに、當が外れた。

何んにしても、本黨に有力なる人物と目指されるのが幾人もありながら、新世帯で基礎が固まらず、ざわついて運動が浮滑りするを免れぬ。殘留組では、悪辣とか何とか云はれても、喧嘩となつて命掛けに飛出し、何が何でも勝たうとするのがある。何處となく引しまつてをるのに、見掛けほど金に窮せず、必要に應じて調達し得るとあつては、本黨側で尾羽打枯らした浪人と見くびることが出來ぬ。

反對黨として、憲政會は成功であり、政友會は不成功でも予想ほどでなく、八十以下に蹴落されると言はれ、百以上に維持し得たのを稱せねばならぬ。

之に對し政府黨なる本黨は、舊政友會の如く絶對多數を制すべしとの夢の破れたのは勿論、當初の百五十名をさへ維持するを得ず、色々と驅り集め辛うじて百卅人に近づかうとするのは、何處からみても大失敗に違ひない。政府黨として必ず勝つと思ひ込んだのが間違ひであつて、豫め新な勢ひの展開し來つたのを察したならば、それほど下手なことにならなんだらう。今後如何になるか、前に必勝を期した連中は、途方に暮れずにをれぬ。

もし目が利き腕が冴えた者があらば、內閣總辭職し、憲政會總裁又は政友會總裁又は其兩總裁に革新俱樂部代表者を加へ、內閣組織の大命の降るやうに斡旋するであらう。

兎も角も、政友本黨は特權階級の擁護者となり、憲政擁護を標榜する三派と戰ふのは、內實に何の理由あるにせよ、不利益の位置に立つものであり。新たに陣立を整ふるに如くはない。急轉直下で擁護派を政府黨とし、自ら反對黨になつたならば如何か。左樣しなくても左樣なるやうにされるかも知れぬが、先んずれば人を制し、後るれば人に制せらるるとは其處にある。

護憲の旗印は淸浦內閣に對してゞあつて、該內閣が倒れば旗を何處に建てるか。

總選擧に實業同志會から八名選出され、揃ひも揃つて新議員といふのは、數こそ甚だ少けれ、新たな現象と稱するに足る。

護憲三派から聯合運動を申込まれ之を拒絕したのは、護憲を非としたのでなく、今日まで政弊を醸し來つたのは政府と同じく三派も責を分たねばならぬとする所がある。

國民に三十億圓を負擔せしめ、財政の行詰りを來したのは誰の罪かと云ふのである。

第一黨又は三派が內閣を組織するとし、果して政務の革新を斷行し得るか。三派が協調を維持するや否やを疑ふは抑々未の

末に屬し、よく協調して內治外交を如何にすべきやが主要の問題とする。

政友本黨に於て、本黨など好い加減の名稱を附けず、黨名と共に組織を改め、政務の革新を主張せば、足輕黨と云ふが如き何處へ行つたか分らなくなつてしまう。それには從來の惡い習慣を變改せねばならぬ。

政府黨としてコビリ着かうとするがため、穩健着實を口走るやうになるが、世界に於ける我國今日の狀態で、全速力を以つて內治外交の刷新を行はねばならぬ。

さういふことの分らぬ筈がなく、それが分らぬとあつては、今後、たゞ失敗の上塗りする外ない。

今日のところ、護憲三派に何の欠點あつても、清浦內閣の如きは依賴せずして衆議院に多數を制しやうとする所、確かに本黨の爲す所に優つてをり、其優つた點で勝利を得たと云へる。護憲といふ語は必ずしも看板倒れでない。けれど、憲政會が第一黨となつたのは、幾年か逆境に堪へたのを酬ひられた所がある。

今は特權階級を攻擊するに資本家の力を以つてする形がある。政府で特殊銀行會社を濫用すれば、多數の金を得るにしても、今日それほどの事をなすを許されず、若干富豪から寄せ集めた所では、到底大富豪關係者の出す所に及ばない。纏つた金となつては、殆んど大富豪に限る。

憲政會は相應に地盤があり、黨員の力のみで政界に位置を占め得るも、他の黨派が悉く縮少したのに反し、獨り擴張したのは運動資金の豐富なるがためと疑はれても仕方がない。今は非立憲內閣に對し、特權階級に對し、大富豪の力を借りて構はぬとするが、明に大富豪の力の現はれるに至り、之に對抗する運動の起るの避くべくもない。

今は其氣配の少しも見えず、急に見えるやうにならぬが、大富豪が政權を得るなど尋常普通のことでない。或は大富豪が何處迄も政權と關係なく、憲政會の盛裝を措いて問はぬかも知れぬけれど、勢の趣く所、如何になるべきかを察するのも無用でない。

實業同志會も、政府及び政黨の弊を矯めるに急であつて、政權と資本との關係は、今深く注意を拂はぬやうであり、現在の日本政界で資本の事を問題としてをらぬとしてよい。併し大富豪を後援とするらしい政黨が、政權を得れば、事實の眞否は暫くおき、新たに資本に關する問題を惹起さぬとせぬ。

既成政黨は、皆從來の資本制度を認め、寧ろ大富豪の力を借るも、特權階級の橫暴を制すべしとしやうが、それで問題が盡

きてをるのでなく、次から次へと問題の起るのを察せねばならぬ。

併し今は其處まで到つたのでなく、政府及び政府黨が總選擧に失敗し、此多事多端なる際に、政務を擧げることが出來ず、何とかせねばならぬといふのである。

差當つて、衆議院の多數を制する政黨政派に基礎をおく內閣を組織し振つて內治外交に盡力するのほかなけれど、それが出來るかどうかゞ疑はしい。

大隈內閣が今少し態がよかつたならば希望を囑し得るが何分にも左様行かず、前に横つたる難關を切り拓き得るか、覺束なく感ぜずにはをれぬ。

護憲三派は實業同志會の主義、政綱、政策を何と見るか。

日本で資本が急に問題にならぬならば、同志會の唱へる所を重要問題とすべきでないか。

同志會は交渉團體でなく。運動するに難いが、多年政府に頭が擧がらぬと定つてをつた實業家側から革新運動の起つたのは、政府黨ならで多數を制し得ないとした習慣の變じ反對黨が優に多數を制するに至つたのと相俟ち、政界に於ける機運の一變を示すものとし、之に乘じ政治の建直しを斷行し得れば何よりの幸ひである。

穩健着實といふ類は、大抵にして封じ込めるがよい。

英米は何の狀態か、露獨は何の狀態か、亞細亞の一隅に閉ぢ込められ、手も足も出ぬ姿で、穩健着實もないでないか。總選擧に勝つたものも負けたものも、均しく現在及び將來を察し奮勵努力せねばならぬ。

鈴木文治氏の進退に關し福田博士の妄論を駁す

赤松克麿

一

日本勞働總同盟會長鈴木文治氏が、さきに中央職業紹介所委員を辭し、しかして國際勞働總會の勞働代表に就任した其の間の進退の經緯に關して、東京商科大學教授福田德三氏が鈴木氏に對し猛烈な非難の矢を放つた。福田氏の非難は、先づ四月十二日附の鈴木氏宛の書簡に現はれ、次いで都下二三の新聞紙上に現はれ、更に改造五月號の誌上に、福田氏一流の花々しい光彩を以て現はれた。しかして福田氏の鋒鋩は單に鈴木氏に對してのみならず、總同盟の幹部に對しても向けられ、從つて總同盟全體に對して向けられたものと見て差支ないのであつて、之れに對し、總同盟として解答すべきや否やに就き、多少議論もあつたのであるが、總同盟としては、正面から眞面目になつて福田氏の議論の相手になる必要なしといふ論者が多いし、また總同盟に同情ある二三の學者思想家の間にも同樣の意見があつたので、結局、總同盟としては、福田氏の議論を頭から默殺することに決定したのである。何が故に默殺したか。それは福田氏の本問題に對する態度が、最初から不當不法不遜を極め、以て總同盟幹部の感情を激化せしめ、福田氏を遇するに一公人の儀禮を以てするの餘地無からしめたからである。先づ四月十二日附の鈴木氏宛の私信なるものは、鈴木氏に對する好意

的忠告にあらずして、讀む人をして感情を惡化せしめねばやまない暴慢無禮な彈劾狀である。(私は玆に一私信を議論の參考として用ひるが、問題が可成重大である以上、そして問題の理非を明かにする必要のある以上、已むを得ない。鈴木氏は此の問題を議論する上の參考として其の私信を私の手に托して日本を去つた。)其の私信は、相手の人格を罵詈讒謗した文字を以て滿され、實に不遜非禮を極めたものである。鈴木氏が其の私信を我々に示した時、我々は其んな手紙に解答する必要は斷じてないと云つたのである。およそ物事には相當の禮儀がある。鈴木氏が總同盟と殆んど關係のない福田氏から、だしぬけに無法な書簡を突きつけられる義理合は無いからである。それでも溫厚なる鈴木氏は、餘暇があれば出發までに福田氏と會見して、諒解を得るつもりらしかつたが、それも果たさず旅程に就いたのであつた。福田氏は鈴木氏が總會準備のために東奔西走して、福田氏との會見の餘暇を得ざる間に、更に都下二三の新聞に意見を吐き、尙一步進んで、公開狀まで發表するに至つた。そして鈴木氏があくまで圓滿に福田氏と諒解を得たいと云つた態度に對して、「妥協政治家の言草を模倣する」とか「四疊半式猫撫辯明」とか罵倒して、益々亂調子にツケ上つて來たのである。

之れは後に述べることであるが、總同盟の幹部は、鈴木氏が中央職業紹介所委員を辭して、更に國際勞働總會の勞働代表に就くことに何等の矛盾なく、否、斯くすることが刻下の我國の勞働組合政策の上から最も至當なることに就き、十分の確信を持つて居るのである。福田氏は其れは矛盾だといふ。さうすれば此の問題に就き、總同盟の幹部と福田氏とは意見を異にして居るのである。そこで我々が言ひたいのは、若し福田氏にして眞に總同盟に對し好意があつて、總同盟の行動の慊らない點に就いて忠言を試みやうとするならば、あの暴慢無禮な糺彈狀を鈴木氏に突きつける前に、何が故に鈴木氏なり總同盟の幹部なりに直接會見をして、能く相手の意の存する處を尋ね、而して忠告すべき個處を發見した場合には、また好意的に條理と友誼とを兼ね備へた忠告を試みる段取をしなかつたのであるか。假りに我々が福田氏と會見して、此の問題に關する意見の交換をしたとしても、結局意見の相異で相讓らずに別れたと思ふが、併し我々は福田氏の好意を謝し、今後とも忠言を惜まれさらんことを希望したと思ふ。

我々勞働組合運動者は決して第三者の立場に居る學者及思想家の助力を忌避するものではない。現に總同盟は、安部磯雄、堀江歸一、吉野作造、末弘嚴太郎、北澤新次郎、片山哲等の諸學者の與へられる直接間接の助力に對し、常に感謝して居るのである。今回の問題に就いて、前記の諸氏の中で福田氏と同意見の人でも、我々に對して試みられる忠告の態度は、好意と友誼の籠つたものであつた。また我々と意見の交換の結果、我々の意見に贊同せられた人もあつた。然るに福田氏に至つては、近來全く總同盟と友誼的關係なく、折々遠くから鈴木氏などの惡口を吐く位の人であるのが、今回の鈴木氏の進退問題に關しては、何を感じたのか、世間一般は大した問題にして居ないのに拘らず、突然武者振ひをして立ち上り、天下の一大事とばかりに怒號し始めた。そして一度たりとも相手の言分も質して見ないで、いきなり不遜極まる私信や公開狀を敲きつけて、鈴木氏及び總同盟幹部に挑戰して來たのである。

我々が、斯うした福田氏の醉狂的挑戰に對し、我國勞働運動の中堅をなす勞働組合たる總同盟として、正面から眞面目になつて之れの相手をする必要を認めず、頭から之れを默殺することにしたのは、果して不當だと言へやうか。大學教授が一學生を叱り飛ばすのならまだしも、否な學生と雖も人格を有するからにはサウぞんざいに扱へるものではない。況んや我國勞働運動の戰鬪的前衛を以て任ずる勞働總同盟幹部が、今日何等友誼的關係もない一學者から、突如として人格を無視した、誇張的な、笛太鼓式な、挑戰狀を受け取つたところが、之れを默殺するのは當然と言はなければならぬ。

斯くの如くして總同盟としては福田氏の所論を默殺することになつたのであるが、併し實際問題として、福田氏の妄論が、事情の解らない世間に多少でも誤解を生ずるの虞ありとすれば、總同盟今後の運動の上に、進んでは日本勞働運動の發達の上に、それだけ不利な譯であるから、之れに對して何等かの形に於て一應の釋明をして置く必要があり、また福田氏自身に就いても、斯くの如き出放題な醉漢的放言をしつぱなしにさして置くことは、氏の將來のために取らざるところであるから、私は總同盟の一員として、且つ鈴木氏の進退問題の一關係者として、茲に敢て一言して置く次第である。

二、

福田氏は中央職業紹介所委員會と國際勞働會議とを同質視し、鈴木氏が前者を辭して、後者に就いたことを矛盾として痛撃して居る。公開狀に曰く「鈴木君にして、國際勞働會議が聯盟各國に必設を要求した右職業紹介委員なるものを無用とし、其樣な無益な決議をした國際勞働會議を無用の長物と認むるとすれば、其れも確かに一の見識である。私は其見識に對して敬意を拂ふに吝なるものではない。果して然りとするならば、鈴木君は其樣な無用の長物たる國際勞働會議に日本委員として參列することを拒絶すべきである。然るに右委員は之れを辭し、代表の任命は之を受けて近く出發せんとすと聞く。是れ啻に矛盾にあらずして何ぞや。」と。又曰く「更に又、鈴木君にして、日本政府の任命なるものを甘受するは、今日の現狀に於て勞働組合員として、爲すべからざる處なりとするならば、其れも確かに一の見識である。私は其の見識に對して敬意を拂ふに吝なるものではない。然らば、政府の任命による故を以て紹介委員を辭するならば、同じく政府の任命する勞働代表の任も亦峻拒すべきである。然るに一方は之を受け、他方は之を辭す。是れ大なる矛盾にあらずして何ぞや。」と。

我々は此の點に關し、不幸にして福田氏と全然所見を異にするものである。勞働者の地位の向上を圖るべき勞働政策の基礎が、勞働者團結權の保障に存することは、自由主義的な一般社會政策論者ですら、之を認め、また國際勞働會議に於ても、從來絶えず主張されて來たことである。我々は、政府の行はんとする社會政策例へば職業紹介、勞働保險、工場法改正等を結構なこととは思ふが、若し政府にして眞に社會政策を徹底しやうと思ふならば、先づ勞働組合を公認して、勞働者の自主的向上の道を開き、併せて社會政策施行の上に勞働組合の意見を參酌すべく、組合代表者を社會政策施行の諸問機關に加はらしむべきである。我々は一切の社會政策就中勞働政策の先決問題は、勞働者團結權の承認にあると信ずる。勞働組合を公認しないで置いて、否、現に壓迫しながら、社會政策を行はんとする態度は、官僚的、ビスマーク的社會政策であつて、多少の現實的効果はあつても、勞働組合側から之を見れば勞働者の自主的向上運動を沮

害し、勞働者の階級意識を鈍化し、結局に於て勞働者を體よく現狀肯定の心理に馴致するところの欺瞞的な似而非進步政策である。政府が最近に於て、勞働運動に對し多少の進步的態度を示しつゝあるは事實であるが、尙ほ舊來の頑迷なる態度を固執する處頗る多きは、蔽ふべからざる事實である。兎に角、我々は政府が尙ほ勞働者團結權を完全に保障せざる今日、社會政策施行上の官設機關に勞働組合の代表者が加はることは時期尙早であると考へる。我々は決して斯くの如き官設機關を無用とするのではない。また絕對に勞働組合代表者が之れに加はるを不可とするものでもない。唯だ今日のところ、未だ其の時期にあらずとするに過ぎない。

　鈴木氏が中央職業紹介委員を辭した理由は右に述べた如くであるが、然らば何が故に國際勞働會議の勞働代表に就任したかといふに、其の理由は極めて簡單である。我々は今日まで、政府に向つて絕えず、勞働者團結權の確認を要求し來り、また現に要求しつゝあるが、我々は今回、國際勞働會議の舞台を利用して、年來の主張の貫徹に資すべく、鈴木氏を其の勞働代表に就任せしめたのである。我々は國際勞働機關に對して多くを期待するものではない。我々は此の機關に依つて、勞働階級の根本的解放を圖らうなどとは夢にも思つて居ない。併し、未だ甚しく不利な立場に在る我國勞働組合の現狀よりすれば、尙ほ此の機關を利用する餘地があると考へる。我國勞働者の團結權の獲得を有利ならしむる如き、此の機關の利用價値の最なるものである。言ふまでもなく國際勞働機關は、平和條約第十三編に依つて生れたものであるが、其の四百二十七條には、締盟國が「特別且つ緊急の必要あるものと認む」として揭げた原則の中の第二項に、「使用者又は被用者が一切の適法なる目的の爲め結社するの權利」がある。一切の社會政策の基礎が、勞働者團結權の承認にあるとは、國際勞働機關の精神である。然るに何故に今日まで殆んど勞働者團結權の問題が同總會に議せられなかつたかといふに(但し第三回總會には農業勞働者の團結權が確認せられた)歐洲先進諸國では、既に此の問題を解結し、議論の要を見ないのである。故に勞働政策の基礎條件を解決して居るから、總會に於ては、其の次位の諸種の社會政策に觸れて居るのである。ところが日本の社會政策は、其の基礎條件から踏み直して掛らねばならぬ。日本の勞働階級に取つては、國際勞働機關をして國際勞働條約の大原則たる「勞働者結社權」を世界的に確立すべく努力せしむる

ことが、刻下第一の急務である。尤も、第一回國際勞働總會に於て、桝本勞働代表の資格問題と關聯して、治安警察法第十七條の如き日本勞働組合の發達を沮害する法規の存在することが各國代表の問題となり、此の件に就いて、日本政府に「斯くの如き法規を廢し勞働組合の發達を計るやう努力すべし」といふ勸告を送るべしといふ提議が出たが、此の提議の排られたことは實に遺憾千萬であつた。其後每度の總會に於て此の問題が殆んど論議されなかつたのは、日本の勞働代表が日本政府の勞働組合を無視した選定方法に依つて派遣された傀儡的代表であつて、眞の勞働代表ではなかつたからである。故に今回の如き始めて眞の日本勞働代表が選定された時には、彼は爾餘の社會政策は後廻しにして、何をさて措き、日本勞働者の結社權獲得のために戰ふべき義務を負ふて居るのである。今日まで總會を通過した條約及び勸告は、日本勞働者に取つては第二次的のものであつて、勞働政策の上からいへば、其の順序を誤つて居る。我々が日本政府の社會政策の順序を正すべく、日本政府の官僚的社會政策に反省を促して之を民主化すべく、國際勞働機關の第二次的な決議に基いて官設せられた中央職業紹介所委員に我等の代表を就任せしめずして、此の官設機關の母體たる國際勞働機關の勞働代表に之を就任せしめたことは、斷じて矛盾ではないのである。否、斯くすることが我國の勞働運動の上から、正當だと確信する。福田氏の如き、中央職業紹介委員會と國際勞働機關とを漫然同質視して、また我國現下の勞働運動の事情にも無知であつて、一方に就いて他方に就かぬのは矛盾だなどと人前も憚らず得々として公言することは、嗤ふべき淺見幼稚を暴露した學者的机上論に外ならぬ。

三、

勞働總同盟は第十三年大會に於て、方向轉換の宣言を發し、改良手段を積極的に利用してもよいといふ態度になつたのだから、勞働組合公認の問題は解決しないにしても、折角政府が中央職業紹介所委員に鈴木氏を招いたのであれば、これはこれとして、任を受けてもよいではないか、其れを受けないのは餘りに狹量ではないかといふ論者もあるが、我々はさう思はぬ。總同盟が如何に改良手段を利用するとはいへ、何んでも御座れと無造作に利用すべきものではない。

我々が從來の潔癖と生硬の態度を改めて、改良手段を利用するのは、勞働運動の大衆化の必要から來たのであるが、如何に大衆化の必要に迫られて居るとはいへ、改良手段の利用は、無產階級精神を失はない限度に於て爲さるべきは勿論である。茲に於て、我々は改良手段の利用に就いても、其の方法と時期に關して嚴密な注意と戒心とを必要とする。故に數ある改良手段の中に於ても、如何なるものは利用して差支ないか。其の利用の方法は如何。其の時期は如何といふ風に、石橋を敲いて渡るやうな用心深き態度を要する。總同盟の政策が現實化したからといつて、何んでもかんでも政府の設ける椅子に据る譯には行かぬ。無反省に政府の招きに應ずるやうな態度こそは、やがてはのつぴきならぬ腐れ緣を生じて妥協腐敗に陷る基である。我々は無產階級の道德と組織とを維持しつゝ、十分なる戒心を以て改良手段を利用し、以て一步一步陣營の擴大と充實に努力して行くべきである。かくの如き見地よりすれば、現時の日本の勞働組合は、政府の與ふる改良手段としては、團結權確認のために國際勞働機關を利用する位のところが、關の山であつて、其他の官設機關例へば職業紹介機關の如きものに入ることは時期尙早と言はざるを得ない。

尙ほ問題の要點ではないが、政府は中央職業紹介委員會を構成するに就いても、國際勞働規約の精神に違反し、勞働組合の權利を無視して居る。福田氏が委員に勞資同數を出さざるを難じて居る如き抑々末である。我々は其れよりも勞働組合の無視されて居ることを不當だと思ふ。福田氏は「鈴木君と賀川君とは、明かに勞働者の利益を代表し得る者として、右委員に任命せられたるものなることは、當局者が責任を以て言明せる處であつて、永田東京市長の如きは、當局の此の言明を甚だ大膽なるものなりとして、寧ろ驚畏する旨を明言したのである。（中略）。然るに何事ぞ。既に資本代表に對して其半數に過ぎざる勞働代表の數を、鈴木君は自己の辭任によつて更に四分の一に減ぜしめ、殘る所賀川豐彥君一名のみを以て、日本の中央職業紹介委員會に日本勞働者を代表せしむることとしたのである。是れ眞に勞働者の利益を造次顚沛にも念とす可き鈴木君の處爲たるべけんや。鈴木君の此擧はあらゆる機會に於て伸張せられざるべからざる勞働者の利益を、却つて害する處の甚だ不親切なる所爲である」又曰く「政府が鈴木君を紹介委員に任命せんとしたるは、勞働代表者としてである。他の委員の多くは、（末弘、永井、關諸君や私の如き）單に一個人として任命され

たのである。同じ委員でも其間大いに意味が異る。勞働代表者としての鈴木、賀川兩君、資本代表としての山崎龜吉、武藤山治兩君は、國際勞働會議の明かに要求せる特に重き責任を有する委員である。」と。

鈴木氏と賀川氏とが、明かに勞働者の利益を代表し得る者として、右委員に任命せられたるものなることは、福田氏の言ふ通り、當局者が責任を以て言明した處である。併し乍ら、兩氏は勞働代表則ち勞働組合を代表したものでなくて、あくまで個人として任命されたことも、河原田第一部長が明言して居る處である。勞働者の利益を代表し得る者と勞働代表とは決して同意義ではない。福田氏は「勞働者の利益を代表し得る者」を勝手に「勞働代表」と解釋して、鈴木氏に噛ついて居るが、其れは大きな見當違ひである。我々の見解よりすれば、また國際勞働條約の精神よりすれば、一國に勞働組合の存在する以上、勞働者の利益を代表し得る者は、當然勞働組合の代表者でなければならぬ。個人の資格で勞働者の利益を代表するといふことは意味をなさない。然るに當局は、鈴木氏を任命する際に、明かに勞働組合を離れた個人としての鈴木氏を任命し、鈴木氏によつて勞働者の利益が事實上代表し得るだらう位のところで御茶を濁して居るのである。政府が官制には勞資同數の委員を出すべきを規定して、尙ほ其の勞働者の代表を個人の資格として任命し、勞働組合代表者の官設機關參加を拒絶することは、政府の勞働政策に對する理解の程度未だ低きを示すものである。苟も政府が國際勞働條約の精神を遵奉するならば、事更に鈴木氏を個人の資格としてなどとケチ臭いことを言はずに、あつさりと勞働總同盟に交渉して、君の方から何名かの委員を推薦して呉れと出るべきである。總同盟が第一回國際勞働總會の勞働代表として選定された高野博士に何故反對したか。高野氏の人格識見共に、日本勞働者の利益を代表し得るものなることは百も承知であるが、高野氏が、勞働組合を無視した勞働代表選定方法に依つて任命された以上、涙を呑んで彼に反對したのである。我々は今日に於ても、勞働運動の上から、當時の總同盟の態度が正しかつたと思つて居る。福田氏は鈴木氏の攻撃に昂奮のあまり、此の邊の事實の認識を誤つて、頻りに鈴木氏に喰つて掛つて居るが、冷靜に學理を究める學者とも言はれる人は、も少し落ついて、事實を綿密に調べた上で、物を言つて貰ひたい。鈴木氏が如何なる資格で中央職業紹介委員に任命されたのか、モー一度社會局へ電話をかけて問合せて見られるがよからう。

序にモー一つ福田氏の認識の錯誤を訂正して置くが、福田氏は「鈴木君の右委員辭任は、一の實效なき形に於て爲されたもので、政府としては、同君は依然として委員たるものと認めるの外ないとの事である。即ち鈴木君は、勞働總同盟の人々の意見を是認した如く粧ひつつ、實は依然として委員たるのであつて、其爲に、一、世間を誤解せしめ、二、幹部の同人を錯覺に導き、三、而して、勞働者の利益代表者を資本代表の四分の一たらしめて、之を他人を以て代へて、少くとも二分の一代表の實を擧ぐる事さへ妨げてゐるのである。此れ豈に甚しき不應爲の所業ではないか、當局は、鈴木君の辭任云々は、單に某官僚に幹部の反對があつて困る云々と泣き言を並べたる程度のものにして、正式の辭表なるものは紙片一葉すら提出されてゐないと言明してゐるのである。」と言はれて居るが、鈴木氏が日本出發の數日前に、私に語つた處によれば、鈴木氏は社會局に出頭して正式に辭意を陳べて居る。其時鈴木氏は口頭を以てしても差支ないかと問ふたら、當局は差支なしと答へたさうである。鈴木氏の辭任が、「官僚に泣き言を並べる程度のもの」でなかつたことは確かである。

四、

次に鈴木氏が一旦政府に内諾を與へながら、後に總同盟幹部と意見交換の結果、中央職業紹介所の委員を辭したことに就き、福田氏は極度の罵言を浴びせてゐるが、我々は此の點に就いて鈴木氏に過失のあつたことを認むるものである、鈴木氏が幹部一般の意向をさぐつた上で態度を決定すればよかつたのを、一幹部と相談しただけで以て、政府に内諾を與へたのは確かに過失若くは輕卒の責を免れ得ないのであらう。鈴木氏の考では、總同盟代表者として官設機關に入つても差支なき期に達してゐるとし、また總同盟の一般幹部も自分と同意見だと信じ、あつさりと政府に内諾を與へたのである。其の時期の問題に關して、鈴木氏と幹部との間に意見の相異があり、それが鈴木氏の手續の不備のために、斯くの如き結果に陷つたのであつた。併し乍ら、鈴木氏に多少の過失があつたにしても、それが福田氏の云ふ如く仰々しいものでないと考へる。團體の首腦者と幹部との間に意見の相異を來たすこと、首腦者が一般幹部の完全なる意見を徵

するに至らざること等は、團體生活にはしば〱起ることであつて、今回の鈴木氏の行動を以て勞働運動者としての資格を全く滅却せしむるものとなすは、餘りに甚しい誇張である。否、我々は鈴木氏が潔く自己の意見を抛つて、幹部の意見に聽從し、世上の非難に甘んじて組合と進退を共にした態度を、甚だ德とするものである。かくてこそ鈴木氏が總同盟會長としての十三年を無事に務めた譯である。然るに鈴木氏に對する福田氏の攻擊たるや、「私は鈴木君の不見識、無思慮、輕卒なる、到底日本勞働代表たるの資格なく、殊に右委員會を必ず設くべしと決議したる其の國際勞働會議を輕侮するものであつて、其會議へ日本委員として參列するは、世界を欺く所業なりと思はざるを得ない」又曰く「鈴木君は高野博士の事に念一及すれば、此度の輕擧盲動、無定見、不見識の背負投げ行爲の責を負ふて、勞働指導者勞働代表たる地位を即時に辭退して、罪を天下に謝すべき筈である。然るに厚顏シア〱然として勞働指導者たり勞働代表として、渡外せんとす。私は實に日本の勞働運動の爲めに、之れを愧づるものである。」又曰く「私は敢ていふ。此一事を以て同君は勞働指導者たり勞働代表たる資格を全然有せざることを、自ら聲明した所以である」と。

第三者の立場に立つて、人の過失を洗ひ立て、人の弱點をほじくり上げて、公々然と思ひ存分の罵詈雜言を浴びせかけることは、快は則ち快なりと雖も、苟も其人に對して同情と誠意と友誼を有する者の爲すべき所業ではない。日頃勞働運動に對して同情を有するかの如き態度を示す福田氏にして、斯くの如き暴言を擅うするといふことは、我々の痛嘆に堪えざる所である。我々鈴木氏の同志は、たとへ鈴木氏に過失があり、缺點があつても、之れに忠言を試みるには十分友誼と誠意ある方法を以てし、同情と理解なき一般社會の耳目に對しては、むしろ其の過失と缺點とを庇はねばならぬと思つて居る。さうした人格的な友愛關係が相互の同志間に在るのでなければ、本統に根强い團體的發達は生れて來るものではない。我々は今回の鈴木氏の進退の遣口を以て、鈴木氏が勞働指導者たり勞働代表たるの資格を有せざることを天下に證明したものとは思はない。福田氏の糺彈の如きは、あまりに大袈裟であり、あまり芝居がかりである。しかも鈴木氏は、無禮なる私信を受けながらも、あくまで福田氏と懇談的諒解を遂げたいといつて、我々としては腑甲斐なく感ずる程、互讓的態度に出て居るに拘らず、其れは四疊半式猫撫辯明だと罵倒して、之れを斥け、遂に公開狀まで發

表し、言ひたい放題の無責任な與太を飛ばしてフン反り返つて居る福田氏の厚顔陋劣なる態度は、鈴木氏並びに總同盟に對し誠意を有するどころか、此の問題を以て自己の賣名と人氣取りに利用したと言はれても、一言の申譯は立つまい。

五、

福田氏は鈴木氏を詰責する一理由として、官僚に對する背信、官僚の惡化を擧げて居るが、之れ我々の噴飯に値する事である。曰く「政府が鈴木君とか賀川君とかを任命するに就いては、頑迷なる元老其他を頭に戴く官僚としては、實に尠からざる勇氣と決斷とを要したことと推測し得る。然るに其の政府の内交渉を受諾し、正式の任命も亦之れを甘受し乍ら、忽ちにして之を辭すること弊履の如し。之れ當局に背負投げを喰はし、殊に他の勞働代表者たる賀川君に對して、背信を敢てしたものである。折角漸次に目覺めつゝ來る日本の官僚の一英斷は、鈴木君の背信によつて、手もなく裏切られ、背負投げを喰はされたのである。向後官僚の頑迷化惡化を責むる權能は、永久に鈴木君自ら之を拋棄したものと云はざるを得ない」と。我々が目覺めつゝある官僚を故意に惡化せしむることの不得策なるは言ふまでもないが、我々は今回の鈴木氏の行動を以て、進歩的官僚を惡化せしめたものとは思はない。一方に鈴木氏の過失は過失として之れを陳謝し、他方に未だ勞働者結社權を認めざる政府、今日尚ほ無法極る治警十七條と警察犯處罰令第一號追加縣令とを勞働運動に適用し且つ騷擾罪と行政執行法と違警罪即決令とを勞働者に濫用しつゝある政府の諮問機關に、勞働者の利益を代表し得る個人の資格として鈴木氏の入ることの時期尚早なる所以を當局に說けば、一般官僚はいざ知らず、少くとも最も進歩的頭腦を有する社會局の部長以下の官僚諸君は、十分に諒解することと思ふ。目覺めつゝある日本の官僚は、鈴木氏の行動によつて、福田氏の憂慮する程惡化はしないと信ずる。否、福田氏よりも一歩拔に出て、むしろ總同盟の立場を是認すると思ふ。若し惡化する官僚があれば、それは惡化する方が惡いのである。今後鈴木氏が其の惡化を責むる權能を有するは勿論である。我々は政府の採れる勞働代表選定法が勞働組合を無視した理由により、第一回から第五回までの國際勞働會議をボイコットした。それでも官僚は惡化しないのみか、却つて反省し來り、遂に勞働組合を

基礎とする選定方法を採用するに至つた。我々が政府の國内の勞働政策が、勞働組合公認を前提とせざるの故を以て、其の官設機關に入らないとしても、進步的官僚は之れを以て反省の資とこそすれ、決して惡化する理由は無いのである。我々は鈴木氏の行動が官僚を惡化せしむるよりも、福田氏の言動が勞働組合幹部を惡化せしむる方が、モツト確かな事實であると思ふ。勞働組合幹部が福田氏の言動によつて、惡化する程大人氣ないこともないとするならば、福田氏の言動が、勞働組合幹部の福田氏なる人物に對する心象を、極度に惡化したことだけは、到底消し去り難い事實である。

六、

福田氏の暴言は昂じて「日本勞働總同盟は阿呆の集團なり」と斷言して居るが、私の一文を讀まれた一般人士諸君が、果して日本勞働總同盟を以て阿呆の集團なりと斷定せらるゝであらうか。私は公明なる輿論の批判を聞かんとするものである。若し福田氏の見解と行動が正しいければ、總同盟は阿呆の集團であらう。若し總同盟の見解と行動が正しければ、福田氏は阿呆であらう。總同盟としては、福田氏がドンナ公開狀を發表しやうが、之れにビクつくやうな阿呆は一人も居ないから、頭から之れを默殺するが、若し福田氏の過般の公開狀が多少たりとも世上の疑惑を惹き起すものありとせば、私は、日本勞働運動のために、此の問題に關する第三者の嚴正批判が下され、以てその曲直を明かにして貰ひたいと思ふものである。



氣分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ
増築落成
東洋キネマ
經營者 德川夢聲

改造社の重要新刊書

勝部謙造著

デイルタイの哲學（新刊）

定價壹 八拾錢
送料十五錢

目次

第一 傳記及び重ねる著作
第二 デイルタイの哲學的立場
(1) 形而上學
(2) 體驗と認識
(3) 全人的活動
(4) 自我と外界
(5) 科學と人生
第三 精神科學論
(1) 自然科學と精神科學
(2) 歷史哲學と社會學
(3) 精神科學の基礎としての心理學
(4) 精神生活の構造
(5) 個性の問題
(6) 精神科學の分化
(7) 文化體系の學及び社會の外的組織の學
第四 世界觀說
(1) 世界觀の成立
(2) 世界觀の種類
(3) 自然主義的世界觀
(4) 自由觀念論的世界觀
(5) 客觀觀念論的世界觀
第五 藝術論
(1) 希臘傳來の詩學と近代獨逸美學
(2) 詩學の性質
(3) 詩人的體驗の特徵
(4) 創作の心理
(5) 創作と了解
第六 結語
附錄
デイルタイ著作目錄
及びデイルタイ研究參考文獻

堺利彦著（新刊）

野外劇の一幕

定價壹圓五拾錢　送料十五錢（隨筆叢書第二卷）

（著者の序文）

大正十二年六月五日、警視廳の大山が鳴動して、大勢の社會主義者が一齊に引張られた。私も其の中の一人であつた。大山鳴動の結果は『日本共産黨秘密結社事件』といふ一疋の鼠となつて現はれた。私は約七箇月間、他の二十餘名の被告と共に市谷刑務所の未決監に拘留され、年末になつてヤット保釋出獄を許された。

公判はまだ開かれないが、いづれ近々の中、六月以上一年以下の範圍内で判決が下される筈になつてゐる。さうなると、私は又しばらく讀書界とお別れになる。そこで此の文集を當分の片見と云つたやうな心持で、讀者諸君の前に差出して置きます。

此の文集には、一昨年から只今まで、即ち今度の入獄前後に於ける雜文が收めてあります。雜文と云ふ中にも、卷頭には脚本めいた物があるかと思へば中には又論文めいた物もあるといふ調子で、如何にも蕪雜を極めて居るが、そこを此の筆者の一つの特色として見て戴くより外はありません。

目次

野外劇の一幕
獄中を顧みつゝ
出獄後の世の中
獄中からの手紙
懷かしい『自叙傳』
水平社大會の印象
男性支配と私有制度
大切な賣物
紳士、實は乞食
過去の夢、未來の夢、現在の夢
ロザよりソニチュカへ
共産主義の失敗
社會運動に投ぜんとする青年に與ふ
留置場の夢
蟻とお神輿
判檢事の『文化的』進步

改造社パンフレット

本社は政治、法律、經濟、思想に亘り世界的に權威あるも

のに限りパンフレットとして發行することとした。勿論假表裝で價格の至廉を眼目とし、約一ケ月に一冊づつ發行する。しかし良書を發見出來ぬときは良書のあるまで發行を見合せる。そのかはり一ケ月に二三冊出すことがあるかも知れない。定價は可成一冊八十錢から壹圓貳拾錢限度としたい。そして頁數は二百頁內外としたいが、その書籍の都合でこんなことは臨機應變だ。

改造パンフレット 第一　ジエノビエフ著　富士辰馬譯
勞働政黨と勞働組合
定價九拾錢　送料五錢　（五月上旬發行）

改造パンフレット 第二　レニン著　茂森唯士譯
レニニズム
（六月上旬發行）

改造社隨筆叢書

我社は今回隨筆叢書を發行することになつた。其內容は政治、社會、經濟、文藝、思想、美術に亙ろうとそれは著者の隨意です。其の何種の讀みものにあれ肩の凝らぬものであつて欲しい。四角四面でないことが望ましい。しかしふざけたものでないことは必要だ。だが、その定義もそれは著者自身の主觀によつて決定さるべきものだ。定價は一定しないが大抵壹圓五十錢乃至壹圓八十錢としたい。

長谷川如是閑著　**犬、猫、人間**　定價金壹圓八拾錢　送料拾五錢　（十版）

堺利彥著　**野外劇の一幕**　定價金壹圓五拾錢　送料拾五錢　（新刊）

中澤臨川著　**嵐の前**　定價壹圓參拾錢　送料拾五錢

森戸辰男著　**題未定**　（五月下旬發行）

成瀨無極著　**題未定**　（五月下旬發行）

佐藤春夫著　**風流論**　（六月下旬發行）

高濱虛子著　**題未定**　（六月下旬發行）

正宗白鳥著　**題未定**

岡本一平著　**題未定**　（六月下旬發行）

吉江喬松著　**題未定**

志賀直哉著　**題未定**

武者小路實篤著　**題未定**　（六月下旬發行）

河東碧梧桐著　**題未定**

廣津和郎著　**題未定**

京大教授 宮本英雄著

婚姻の基調

定價一圓五拾錢
送料十五錢

新刊發賣

「人生は性(セックス)と食(フード)に在る」と西洋の誰かが云つたが、凡ての人生萬般の事象は其の源由に遡れば此の二大本能に在る。而して此の二大本能を如何にして「社會的」に滿足するかと云ふ所に、所謂經濟問題も起り、道德問題も起り、更に其の實際解決の基調として法律問題が起る。本書は宮本教授が此の二大本能の一たる性方面の微妙なる問題を、法の立場に於て、各方面に亙り深く觀察し、廣く論及したもので、項目を婚姻法の將來、夫婦間の貞操、寡婦再婚、離婚の防止、家族制度と婚姻の五に別つてある。本書を讀まるゝ人は一面社會問題としての兩性問題を解決する鍵を獲ると共に他面人生と法律との深き關係に就き徹底的理解を得らるゝであらふ。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

吉江喬松著

近代文明と藝術

四六判 上製

定價貳圓 書留送料十五錢

第五版

當代文藝の存在價値は、一方に歴史的見地から、他方に社會的見地から見て、定めらるべきものである。卽ち時代觀と社會觀とよりして照合決定せらるべきものである。

現在我々は共通の世界苦の中にあつて、眞に新しき時代の表現たる文藝を求めてゐる。この新表現こそは、無數の暗默の生命が初めて、その全的本質の美と力とを發揮して、その當然の存在を主張する反映でなければならない。（著者）

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

山本有三著

定價貳圓
送料十七錢

山本有三戯曲集

第七版

天才戯曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシカと把握して離さないのは山本氏の戯曲である。氏の人生へ對する愛着、舞臺に對する細緻の觀察は篇中の何人をも躍らし泣かさずにはおかない、此書に收められたる五篇の總てが、均しく東都で歡迎せられそして舞臺の上では幾萬の人を泣かしめた傑作のみであることは呶々するまでもない、「嬰兒殺し」の含蓄多き殺人婦に對する熱情、「坂崎出羽」「津村敎授」「生命の冠」に用ゐられた忍從の辛さと困難にはいかなる男兒でも涙ならでは讀むことができまい。

内容

- 津村敎授
- 嬰兒殺し
- 生命の冠
- 女親
- 坂崎出羽守

發行所 東京市芝區愛宕下町一ノ一 振替東京八四〇二番 改造社

武者小路實篤著

第三の隱者の運命

（定價貳圓 送料十七錢）（五月二十七日出來）

自序

武者小路氏曰く「この作は自分の作としては尤も自信を有てるものだ。そして一面自分が讀みたいと思ふ本をつくろうと思ふてかいた、そして尤も面白くよめ 又最もいろ〳〵のものをふくみ、又尤も深い所に入つている。ここに書かれた世界は現世ではない、過去の世界でも未來の世界でもない、そして運命と童貞との問題は作品に色つやをつけ、又人間の切斷面を見せるため、事件を發展させる爲め、利用された傾があるが、その場、その場に於ける人間の心理、心のつくられ方は正視されてゐると思ふ」眞に本書は氏の現在までの作中の第一の傑作で、人間はどう生活すれば安心が出來るか、又どう云ふ心のもち方をするのが本當かと云ふ所に異常な力瘤を入れられたものだ。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

ジエノビエフ著
富士辰馬譯

勞働政黨と勞働組合

（改造パンフレット第一冊）——（定價九十錢 送料十錢）

新刊發賣

本書は改造社が計畫した尤も時機に適したパンフレットだ。本書が新時代を知る何人にも切要な書であることは勿論だ。本書の使命は勞働階級の復活のために各國の勞働運動——勞働階級——勞働政黨の現狀と過去を說いたもので、組合運動が政治運動と並行すべきものであることを力說す。本書と著者が斯界に於ける世界的權威であることは更めて絮說するまでもない。尙ほ本パンフンットは世界的權威ある名著のうちより本社が選擇して譯述するものにかかれば安心して讀める書籍です。そして識者の書架になくてはならぬ有益な資料です。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

創作

◇戯曲　熊谷蓮生坊　　山本有三

◇心の河　　中條百合子

◇戯曲　ある心の影　　正宗白鳥

◇馬鹿な夫婦　　津田青楓

◇戯曲　丸橋忠彌　　菊池寛



熊谷蓮生坊（三幕）

山本有三

人物

熊谷次郎直實　後に僧蓮生
同小次郎直家　直實の子息
成木大夫守直　直實の伯父
百姓
その女房
僧盛蓮
同靜空
外に熊谷の家來數人

時代

鎌倉初期

第一幕

武藏國熊谷郷、直實の邸内。
質素な建物。前は庭。下手に矢場の土手があるところ。
初秋。
直實は庭に下り立つて、弓の本弭を膝頭にあてたまゝちつと向ふの的を睨んでゐる。そのうしろに家來が一二人控へてゐる。
直實はやがて矢をつがへ、しづかに引きしぼつて、ひようと放つ。的は見えないけれど、命中した音が氣持よく響く。

直實。矢を取つてまゐれ。
家來一。はあ。(立上る)
直實。それから的を取り換え。
家來一。今度は四半的にいたしませうか。
直實。さうだな。――いや、九半的にいたせ。
家來一。畏りました。(的の方に走つて行く)
直實。あゝ、久々でやつたらいゝ氣持だ。
家來二。明日は騎射をおやりになつては如何でございます。

直實。　うム、それもいゝの。

家來三が這入つて來る。

家來三。　たゞ今戻りました。

直實。　おゝ、待ちかねた。どうだ。杭はことごとく打ち變へたか。

家來三、　はあ、地境には久下方のものが少々をりましたが、すぐに追ひ拂ひまして、もとの境界のところに改めて熊谷領の標を打ち立てました。

直實。　して、向ふでほしいまゝに立てくさつた棒杭はどういたした。

家來三。　殘らず引き拔いて燒き捨てましてございます。

直實。　久下の方から別に押し寄せては來なかつたか。

家來三。　何事もございませんでした。

直實。　標の杭を引き拔かれながら、手出しも出來ぬとは意氣地のない者どもだな。

家來三。　併し相手が相手ゆゑ、また如何なる奸策を施さうもはかられませんから、地境の要所〳〵は悉く人數を以て固めてをります。

直實。　うム、さうなくてはならぬところだ。萬一久下の手の者が不法を働いたら、用捨なくたゝつ斬てしまへ。

家來三。　承知いたしました。

直實。　大儀であつた。一先づ休息するがいゝ。

家來三。　有難う存じます。

家來三、一禮して去る。

家來一。(少し前に戻つて來てゐる)ご用意が出來ました。

直實。うム。

直實はまた矢をつがへて放つ。今度も美事に命中する。つゞいて矢をつがへようとすると、そこへ家來四がはいつて來る。

家來四。申上げます。成木大夫様がお越しでございます。

直實。なに、伯父上が見えた。

家來四。はい。

直實。あゝ、うるさいな。また參つたのか。――的はそのまゝにいたしておけ。

家來一。畏りました。

直實は氣がすゝまなさうに座敷に上つて表へ行く。やがて成木守直を導いてはいつて來る。

直實。伯父上には度々のお運び、恐縮に存じます。

守直。うるさいやうではあるが、今一度談合したいと思つて出てまゐつた。

直實。やはりこの間のお話についてゞございますか。

守直。うム、このまゝでは何れの側にも不爲めだから、是非とも和解を勸めたいのだ

直實。その儀ならば憚りながらお打捨ておき下さい。このやうなことに御老體を煩はしましては……

守直。いや〱、某の力で和談が成り立つものならば、足を運ぶ位は些細なことだ。その方とても訴訟なぞは好むと

直實。うム、それもいゝの。

家來三が這入つて來る。

家來三。たゞ今戻りました。

直實。おゝ、待ちかねた。どうだ。杭はことごとく打ち變へたか。

家來三、はあ、地境には久下方のものが少々をりましたが、すぐに追ひ拂ひまして、もとの境界のところに改めて熊谷領の標を打ち立てました。

直實。して、向ふでほしいまゝに立てくさつた棒杭はどういたした。

家來三。殘らず引き拔いて燒き捨てましてございます。

直實。久下の方から別に押し寄せては來なかつたか。

家來三。何事もございませんでした。

直實。標の杭を引き拔かれながら、手出しも出來ぬとは意氣地のない者どもだな。

家來三。併し相手が相手ゆゑ、また如何なる奸策を施さうもはかられませんから、地境の要所〱は悉く人數を以て固めてをります。

直實。うム、さうなくてはならぬところだ。萬一久下の手の者が不法を働いたら、用捨なくたゝつ斬てしまへ。

家來三。承知いたしました。

直實。大儀であつた。一先づ休息するがいゝ。

家來三。有難う存じます。

家來三、一禮して去る。

家來一。(少し前に戻つて來てゐる)ご用意が出來ました。

直實。うム。

直實はまた矢をつがへて放つ。今度も美事に命中する。つゞいて矢をつがへようとすると、そこへ家來四がはいつて來る。

家來四。申上げます。成木大夫様がお越しでございます。

直實。なに、伯父上が見えた。

家來四。はい。

直實。あゝ、うるさいな。また參つたのか。――的はそのまゝにいたしておけ。

家來一。畏りました。

直實は氣がすゝまなさうに座敷に上つて表へ行く。やがて成木守直を導いてはいつて來る。

直實。伯父上には度々のお運び、恐縮に存じます。

守直。うるさいやうではあるが、今一度談合したいと思つて出てまゐつた。

直實。やはりこの間のお話についてゞございますか。

守直。うム、このまゝでは何れの側にも不爲めだから、是非とも和解を勸めたいのだ

直實。その儀ならば憚りながらお打捨ておき下さい。このやうなことに御老體を煩はしましては……

守直。いや〳〵、某の力で和談が成り立つものならば、足を運ぶ位は些細なことだ。その方とても訴訟なぞは好むと

ころではないであらう。

直實。もとより某は武人ですから、さういふことは別して好みませんが、併し境界を犯され、あまつさへ、訴訟を持ちかけられた上は是非がございません。

守直。何れが訴へ出でたにもせよ、兎に角久下はその方にとつては義理ある叔父だ。さういふ間柄でありながら、互に確執をつゞけることは面白からぬことではないか。

直實。いや、あのやうなものは叔父などとは思ひませぬ。

守直。しかしその方は早く親御に離れたため、幼少の頃は何かと世話になつたではないか。

直實。それなればこそ某は長いこと忍んでをりました。しかしもうさう〳〵は默してはをられません。殊に彼は某を庇護したなぞと申してをりますが、まことは某の幼若に乘じて所領を騙し取つた人非人でございます。

守直。その方はすぐ激したものいひをするが、もう少し穩かに話してはどうだ。

直實。いゝや、某ならずとも憤るのは當然と存ぜられます。伯父上は實情を御承知ないので、さやうに仰せられますが……

守直。話を聞いたら、それはいろ〳〵あらうが、さういふことは一切水に流して、どうだ、久下と潔く和解をしては。

直實。某には毛頭さやうな心はございません。

守直。今の場合その方としては和談はしにくいかもしれぬが、しかし一族の間に事があるのはわれ等の好まぬところだ。何れが傷ついても困るから、こゝは何とか折合ふ道はないものであらうか。

直實。……

守直。どうであらう。例へば今爭ひになつてゐる土地のうち、佐谷田は熊谷領、葛岡は久下領といふやうなことにして、讓り合つては……

直實。いや、あれは何れも當方の所領でございます。

守直。それは久下方でもさう申してゐる。併しそれではいつになつても果しがないから、もうお互に我を折らぬか。久下方ではその方さへその心なら、話し合つてもいゝとまで打ち解けてゐるのだ。

直實。いや、それは本心とは存ぜられません。たとひ久下が如何やうなことを申しませうとも、彼の言葉なぞは微塵も信をおけませぬ。某はその手で何度裏切られたかしれません。若しそれが本意ならば不法の所爲は當然手控へなくてはなりませんが、昨夜も闇に乘じて境界の杭を打ち變へさせたやうな腹黒い奴でございますから。……

守直。しかし久下の方の話では、その方の手の者こそ猥りに地境の棒杭を引き拔き、狼藉を働くやうに申してをつたが……

直實。いゑ〳〵、そのやうなことはございません。なるほど、久下領と記した棒杭は今日も引き拔かせましたが、それには引き拔かすべきいはれがあるからでございます。御承知の如く、久下領とは大部分荒川が境をなしてをるところから、向ふはそれをよいことにして、洪水の度毎に堤を切つては流れを變へ、狡猾にも當方の領地を取り込まうとたくらんでをるのです。先日の洪水にもまた〳〵流域を變じて、境の杭を打ち變へましたから、某がそれを引き拔かせたに何の僻事がございませう。それよりも洪水を利用して地境を犯して來る久下方こそ理不盡ではございませぬか。

守直。ことごとにさういがみ合つてばかりをつては果しがないではないか。

直實。いや、某は事を好むのではございません。たゞ父祖の所領を守護するだけでございます。某は先年給はつた

「武藏國舊領等久下直光の押領を停止し直實領掌すべし」といふ安堵の下文に從つて、幼若の折欺き取られた所領をば取り戻したまでゞございます。然るに久下はそれを遺恨に思つて……

守直。事が入り組んでをるだけに相方言分があるやうであるが、併しそこを穩かに話し合つてはどうだ。

直實。言ひ分！久下に言ひ分などあらう道理がありませぬ。掠められ、たぶらかされてゐるのは某の方です。當方には更に落度はありませぬから、讓り合ふべき理由なぞはございません。殊に某が本領歸符の許しを得たのは、久下のやうに口の先でごまかしたのではありません。生を堵してやうやくあがなつたものでございます。佐竹の冠者の追討といひ、一の谷の先陣といひ、無官の大夫を討ち取つたことゝ申し、烏許がましくはございますが、何れもさうたやすいことではございません。若し强いてこの土地が所望なら、弓矢を執つて押し寄せて來るのがいつち近道と存ぜられます。事實某は腕で取つたところゆゑ、奪ふなら腕で來るのが本來です。もとより某も一戰は望むところでございますから……

守直。いや、そんな不穩なことを申しては相成らぬ。折角世の中がしづまつたばかりではないか。

直實。しかし訣もなくたゞ掠められるのは忍べません。某は負けることは大嫌ひでございます。

守直。いや、その方に負けよといつてをるのではない。穩かに折合つてはどうかと申してをるのだ。

直實。お言葉ではございますが、某は生來武人として育つたせいか、勝つか負けるか、殺すか殺される、その外のことは知りませぬ。當節は和解とか、話し合ひとか申すことが折々行はれるやうに聞き及びますが、それをする位なら、某ははじめから爭ひなぞはいたしませぬ。

守直。なるほど、それはさうであらうが、しかし……

直實。某は片意地で申してをるのではございません。己の所領を、己の所領だと言ひ張るのは當然のことではございませぬか。若し某が非分ならばことごとく奪ひ取らるゝとも、更に苦しくありませんが、當方の言ひ分が正しい上は、一尺、一寸の土地たりとも、故なく他に讓ることは出來ませぬ。

守直。では、その方はどこまでも爭ふこゝろか。

直實。外に思案はございません。

間。

守直。いま一應思ひ直して見る氣はないか。

直實。………

守直。次郎。

直實。はあ。

守直。某の顏を立てゝくれぬか。

直實。ご懇情にそむいて、心苦しう存じますが………

守直。では、どうあつても………

直實。（默然としてゐる。）

守直。いや、さまたげをいたした。（立ち上る。）

直實。何のおもてなしもいたさず、申訣がございません。

守直去る。直實送つて行く。

「武藏國舊領等久下直光の押領を停止し直實領掌すべし」といふ安堵の下文(くだしぶみ)に從つて、幼若の折奪き取られた所領をば取り戻したまでゞございます。然るに久下はそれを遺恨に思つて……

守直。 事が入り組んでをるだけに相方言分があるやうであるが、併しそこを穩かに話し合つてはどうだ。

直實。 言ひ分！久下に言ひ分などあらう道理がありませぬ。掠められ、たぶらかされてゐるのは某の方です。當方には更に落度はありませぬから、讓り合ふべき理由なぞはございません。殊に某が本領歸符の許しを得たのは、久下のやうに口の先でごまかしたのではありません。生を堵してやうやくあがなつたものでございます。佐竹の冠者の追討といひ、一の谷の先陣といひ、無官の大夫を討ち取つたことゝ申し、烏許がましくはございますが、何れもさうたやすいことではございません。若し强いてこの土地が所望なら、弓矢を執つて押し寄せて來るのがいつち近道と存ぜられます。事實某は腕で取つたところゆゑ、奪ふなら腕で來るのが本來です。もとより某も一戰は望むところでございますから……

守直。 いや、そんな不穩なことを申しては相成らぬ。折角世の中がしづまつたばかりではないか。

直實。 しかし訣もなくたゞ掠められるのは忍べません。某は負けることは大嫌ひでございます。

守直。 いや、その方に負けよといつてをるのではない。穩かに折合つてはどうかと申してをるのだ。

直實。 お言葉ではございますが、某は生來武人として育つたせいか、勝つか負けるか、殺すか殺される、その外のことは知りませぬ。當節は和解とか、話し合ひとか申すことが折々行はれるやうに聞き及びますが、それをする位なら、某ははじめから爭ひなぞはいたしませぬ。

守直。 なるほど、それはさうであらうが、しかし……

直實。某は片意地で申してをるのではございません。己の所領を、己の所領だと言ひ張るのは當然のことではございませぬか。若し某が非分ならばことごとく奪ひ取らるゝとも、更に苦しくありませんが、當方の言ひ分が正しい上は、一尺、一寸の土地たりとも、故なく他に讓ることは出來ませぬ。

守直。では、その方はどこまでも爭ふこゝろか。

直實。外に思案はございません。

間。

守直。いま一應思ひ直して見る氣はないか。

直實。………

守直。次郎。

直實。はあ。

守直。某の顔を立てゝくれぬか。

直實。ご懇情にそむいて、心苦しう存じますが………

守直。では、どうあつても………

直實。(默然としてゐる。)

守直。いや、さまたげをいたした。(立ち上る。)

直實。何のおもてなしもいたさず、申訣がございません。

守直去る。直實送つて行く。

やがて直實ひとり戻つて來る。

直實。 あゝ、氣がつまつた。

また弓を取り出して弦を張る。

そこへ直家が旅裝のまゝ這入つて來る。

直家。 父上、相變らず弓でございますな。

直實。 おゝ、小次郎か。

直家。 鎌倉殿からご沙汰がございましたので、急いで歸國いたしました。

直實。 さうか。それは大儀であつた。(弓をもとのところへおさめ)今朝立つたのか。

直家。 はい。未明に出立いたしました。

直實。 それにしては早く着いたな。大分馬を急がせたと見ゆるな。

直家。 はい。

直實。 鎌倉殿にはお變りがないか。

直家。 近頃は別してご機嫌うるはしいやうにございます。

直實。 それは重疊だ。して、仰せといふのは。

直家。 來月十五日鶴ヶ岡八幡宮で、戰歿した將士の冥福を祈るために、放生會を御奉仕になりますが、當日はその御法會のあとで、相撲、競馬、流鏑馬等の餘興をもお催しになります。つきまして父上にもその晴れの演武に御出場あるやうにとの御沙汰でございます。

直實。それは辱けない。直實、謹んでお受けいたす。――放生會といふと鎌倉でははじめての御法會だが、定めて盛大なことであらうな。

直家。某はよくは存じませぬが、百萬喉の魚鳥を買ひ集めまして、鳥は神前に於いて、魚は放生川へ當日一せいに放つてやる式ださうにございますから、このやうに功德になる法養はございますまい。

直實。源家のために身命を抛つた人々もこれで冥するといふものだ。――さてその演武だが、某は無論流鏑馬の方であらうな。

直家。はい。

直實。射手は幾番だ。

直家。五番と聞き及びました。

直實。十騎だな。して、某の順は。

直家。はい？

直實。某は何番目の射手だといふのだ。

直家。はい。――あの、父上は射手方ではございません。

直實。なに、射手方ではない。では何だ。

直家。あの、的立の役でございます。

直實。的立？

直家。はい。

直實。的立ー

直家。はい。

直實。たはけ者。某にそんな役が出來ると思ふか。

直家。お言葉ではございますが……

直實。いや、そんなご沙汰なら聞く要はない。

直家。父上。これは鎌倉殿から直々の仰せでございますぞ。

直實。たとひ誰の命であらうとも、そんな意氣地のない役が引き受けられるか。何故その方はこんなご沙汰を受けて來たのだ。匆々立ち歸つて斷つてまゐれ。

直家。…………

直實。また鎌倉殿も鎌倉殿だ。弓矢取つては東國に列びのない某を、的立に廻はすとは何事だ。直實怨みに存ずると、さう言上せえ。

直家。父上。それはお考へ違ひでございます。父上なればこそ此度の晴れの流鏑馬にお召し出しになつたのではございませんか。弓矢取る者は何百、何千あるか知りませぬが………

直實。それなれば何故某を的立のやうな賤役に廻はすのだ。

直家。仰せではございますが、的立の役は決して賤役ではございません。あれは射手方と同格のものださうにございます。

直實。何が同格のことがある。一方は馬に乘つて矢を射るのに、こちらは徒歩で的を立てゝ歩くのではないか。優劣

のあることははじめから明白だ。

直家。　某もはじめはさう思ひました。しかし承るところによりますと、新日吉祭の御幸の日に、的を立てるものは瀧口本所の衆だと申すことでございます。して見れば、的を立てるものは射手方よりも却て貴い位でございます。かういふ故實もあることでございますから……

直實。　默れ〳〵。故實なぞが武士に何のかゝはりがある。そんなやくたいもないことは無用にいたせ。

直家。　父上！

直實。　その方に屹度申しおく。武士が故實なぞをつべこべ列べるやうになつては最早終りだぞ。東國の武士は東國の武士らしく、たゞ武を練ればそれでよいのだ。

直家。　では父上はどうあつても……

直實。　きまつたことだ。某は嘗て敵にうしろを見せたことはたゞの一度でもないではないか。然るに今度に限つて、人に矢を射向けられながら、おめ〳〵的を立てゝ歩くやうなそんな不甲斐ない役が引き受けられるか。

直家。　父上のご氣性としてはこれはご尤ではございますが、併しこゝは考へどころではございますまいか。

直實。　何が考へどころだ。

直家。　父上は地境について、今久下と訴訟中ではございませぬか。

直實。　それがどうしたのだ。

直家。　この際上意に反くやうなことがあつては、その訴訟の上にも響くところが大きいかと考へられます。

直實。　……………

直家。父上の御不滿はご無理ではございませんが、たゞ今の場合何事も御辛抱になるのが肝要かと存ぜられます。殊に久下方は鎌倉殿に御信任の厚い梶原殿と相引いて、内々策をめぐらしてをる樣子でございますから………

直實。たとひ梶原が黨引するとも、理を非に曲げることはかなはぬことだ。當方の言ひ分に一點の非もない以上、負訴になる氣遣ひは毛頭ないわ。

直家。しかし鎌倉殿のみ氣色を損じましては………

直實。小次郎、その方は凡下になり下つたのか。訴訟は訴訟、的立は的立ではないか。某はたゞ損得づくで生きてをるのではないのだぞ。熊谷ほどの者が訴訟に勝つために的立の役を引き受けたとあつては、末代までの名折ではないか。たわけ奴。

直家。恐れ入りました。

直實。その方なぞの喙を入れるところではない。とく〳〵鎌倉に立ち返つて、きつぱりとお斷りを申してまゐれ。

直家。はあ。

直實。急いで行け。

直家。畏りました。

直家去らんとして

直家。父上。

直實。何だ。

直家。ご前へは病氣の體に披露いたしませうか。

直實。いや、こしらへごとを申しては相成らぬ。直實、不服だとあからさまにお答へいたせ。
直家。………
直實。かまはぬ。ありのまゝに言上せえ。
直家。承知いたしました。では、ご免。
　直家去る。
直實。待て。
直家。（戻つて來て）何かご用でございますか。
直實。馬は――栗の乘換に乘つて行くがいゝぞ。
直家。はあ、辱ふ存じます。

幕

第二幕

箱根の畔に近い、海邊のある百姓家。
その家の内部。土間にはところ狭いまでにいろ〳〵なものが積んである。
女房は豆を碾いてゐる。
第一幕より何年かの後、ある冬の日の午後。
あるじの百姓が薪を山のやうに脊負つて歸つて來る。

直家。　父上の御不滿はご無理ではございませんが、たゞ今の場合何事も御辛抱になるのが肝要かと存ぜられます。殊に久下方は鎌倉殿に御信任の厚い梶原殿と相引いて、内々策をめぐらしてをる樣子でございますから………

直實。　たとひ梶原が黨引するとも、理を非に曲げることはかなはぬことだ。當方の言ひ分に一點の非もない以上、負訴になる氣遣ひは毛頭ないわ。

直家。　しかし鎌倉殿のみ氣色を損じましては………

直實。　小次郎、その方は凡下になり下つたのか。訴訟は訴訟、的立は的立ではないか。某はたゞ損得づくで生きてをるのではないのだぞ。熊谷ほどの者が訴訟に勝つために的立の役を引き受けたとあつては、末代までの名折ではないか。たわけ奴。

直家。　恐れ入りました。

直實。　その方なぞの喙を入れるところではない。とく〳〵鎌倉に立ち返つて、きつぱりとお斷りを申してまゐれ。

直家。　はあ。

直實。　急いで行け。

直家。　畏りました。

直家去らんとして

直家。　父上。

直實。　何だ。

直家。　ご前へは病氣の體に披露いたしませうか。

直實。　いや、こしらへごとを申しては相成らぬ。直實、不殿だとあからさまにお答へいたせ。

直家。　………

直實。　かきはぬ。ありのまゝに言上せえ。

直家。　承知いたしました。では、ご免。

　　　直家去る。

直實。　待て。

直家。　(戻つて來て) 何かご用でございますか。

直實。　馬は──栗の乘換に乘つて行くがいゝぞ。

直家。　はあ、辱ふ存じます。

幕

第　二　幕

箱根の峠に近い、海邊のある百姓家。

その家の内部。土間にはところ狹いまでにいろいろなものが積んである。

女房は豆を碾いてゐる。

第一幕より何年かの後、ある冬の日の午後。

あるじの百姓が薪を山のやうに脊負つて歸つて來る。

百姓。（外から）おい、何をしてゐるんだ。みぞれが降つて來たぢやないか。鷄を內へ入れないか。
女房。またみぞれが降つて來たのかい。うるさいお天氣だ。

女房は粉を碾くのを止めて、表に出してある軍鷄を籠のまゝ「とうとう」と呼びながら家の中に追ひ込む。

軍鷄は二羽、別々の籠に入れられてゐる。

百姓は薪を下して爐のそばにかゞむ。

百姓。今日は馬鹿に寒いな。
女房。こんなに寒くつちや麥にさはりやしないかね。
百姓。なあに凍てやしない。あつたかいと却つて延び過ぎていけないよ。
女房。それもさうだけれど。
百姓。今年は戰さはなし、米もよくとれたし、これで麥がよく出來りや申分なしだな。
女房。今日はもう休みかい。
百姓。たまに山にはいると、くたびれていけない。
女房。今のうちにせい／＼骨休みをしておいた方がいゝよ。
百姓。もう間もなく正月だな。

栗毛の馬を牽いて直實が突然門口に現はれる。」

直實。頼まう。頼まう。
百姓。（後向きのまゝ）誰だい。」

直實。旅の者だが、宿を無心したい。

百姓。それならこれから一里ばかり行くと湯本の宿だから、そこへ行つてお頼みになつたがようございます。

直實。向ふへ行ける位なら頼みはせぬわ。馬が少し怪我をしてゐるのだ。宿はその方に申しつけるぞ。

百姓。(相手の劍幕に驚いて、あはてゝ門口に飛び出し、直實を見る)へえ、これはおいでなさいまし。——お馬が怪我をなすつてゐちやお困りでございませう。しかし御覽のとほりのあばらやでございますから……

直實。いや、苦しうない、今宵は厄介になるぞ。

百姓。へえ。むさ苦しうございますが、ではどうかこちらへ。

直實。これは廐へ牽いて行つて休ませてくれ。

百姓。廐でございますか。

直實。うム。

百姓。……

直實。何をためらつてゐるのだ。

百姓。わしんとこには廐はございません。

直實。なに、廐はない。

百姓。へえ、わし等は山家の百姓でございますから、とてもそんなものは持つてをりません。

直實。廐はなくとも、馬を入れるぐらいのところはあるだらう。

百姓。何しろこんな狹いうちでございますから……

直實。えゝ、そんなことを申してゐる暇に、馬を入れるところを早く工夫せえ。

百姓。さうですな。土間はこのとほりでございますし、……ちや、裏の松の木へでもちよつとつないでおきませうか。

直實。たはけめ。みぞれが降つてをるのに馬を外へつないでおけるか。

百姓。へえ、これはとんだ粗相を申上げました。――では、やはり湯本までお越しになつては如何でございます。まだ太陽はありますし、あすこまでおいでになれば厩を持つてゐるやうな大きなうちはいくらでもございますから。

……

直實。分らぬ奴だよ。そんなことが出來るか。馬は怪我をしてゐるのだと先程から申してゐるではないか。

百姓。へえ、しかし全く厩はないんでございますから……

直實。えゝ、面倒の奴だ。そこどけ。（馬を家の中に牽き入れやうとする）

百姓。お武家様。何をなさるのでございます。

直實。いゝから、そこどけ。

百姓。しかし、お武家さま。

直實。そこをのかぬか。邪魔だてすると承知せぬぞ。

直實は馬を牽いたまゝ家の中にはいつて來る。しかし馬は慣れない家なのでだちろいでゐる。

直實。えゝ、何をしてゐるのだ。上らぬか、（手綱を引張つたまゝ馬を座敷に引張り上げやうとする）

百姓。旦那様。それはご無體でございます。

直實。えゝ、うるさい。――それ、上るのだ。上るのだといふのに。

百姓。旦那様。

直實。いゝからどけ。どけ！

たうとう馬を座敷に引き上げて手綱を柱に結びつける。

直實。（百姓に）何をぼんやりしてゐるのだ。鞍をはづしてやらぬか。

百姓恐る〳〵馬の脊中から鞍をはづしてやる。

直實。それから脚に怪我をしてゐるのだ。手當をしてやれ。

百姓は手當をしてやらうとするが、馬は知らない人なのでなか〳〵近づけない。

直實。何をしてゐるのだ。早く手當をしてやらぬか。

百姓。へえ。たゞいま。

百姓は水を入れた桶を座敷の眞ん中に運んで馬に飲ませたり、藁をやつたりなぞして機嫌をとりながら、やつと脚の治療を終へる。それから恐ろしいので土間の隅にうづくまつてゐる女房のところに行つて、自分も亦うづくまる。

その間直實は放心したやうにたゞぢつと座つたまゝでゐたが、やがて力なく鞍に倚りかゝつて横になる。

しばらくして直實は何か急に思ひ出したやうにむつくりと起き上る。そして忙しげに懐から幾通かの書類を取り出して、それを一つ〳〵丁寧に披いて見る。讀む度に無念の形相が面にあらはれる。しかし彼はいきなりそれをずた〳〵に引き裂いて火にくべる。

間。

直實。おい水を持て。

　隅にうづくまつてゐた百姓はこは／＼器に水を入れて持つて行く。

直實。（咽喉をうるほしながら）馬にも水をやつたか。

百姓。へえ。

直實。飼糧(かいば)もやつたか。

百姓。（默つて飼糧を食べてゐる馬の方を指す）

直實。うム、よし。

　間。

直實。突はもう止んだのか。

百姓。へえ、止んだやうでございます。外は日が照つてをります。

直實。氣まぐれな天候だな。

百姓。へえ、降つたり、止んだり、山家の天氣は埒がございません。

直實。こゝは何處だ。

百姓。こゝでございますか。

直實。うム。

百姓。湯本の手前でございます。

直實。湯本。——すると、もう箱根だな。

百姓。さやうでございます。

直實。ふム、そんなところまで來てしまつたのか。

百姓。今日はどちらからお越しでございました。

直實。何處から來ようとその方なぞに何のかゝはりがある。

百姓。へえ、これはとんだことを申上げました。どうかお宥しを願ひます。

直實。これ、もつと薪をくべえ。

百姓。へえ。

百姓は薪をくべるとまた隅の方に引込んでしまう。そして心配さうに女房とこそ〲話をしてゐたが、やがて軍鷄を一羽籠の中から引張り出して裏口の方へ持つて行かうとする。軍鷄はけたゝましい聲を上げる。

直實。騒々しい！何をするのだ。

百姓。どうも申訣けがございません。

直實。そんなことをしてどうするのだ。鷄をくびるのか。

百姓。へえ。

直實。何故そんな殺生なことをするんだ。

百姓。何にも差上げるものがございませんから……。

直實。はゝゝ、その方は可哀いゝ奴だな。飼つておく鷄をつぶして某に振舞はうといふのか。

百姓。……。

直實。　しかし其は今そんなものは欲しくない。

百姓。　さやうでございますか。

直實。　放してやれ。放してやれ。

百姓また軍鶏を籠の中に入れる。

直實。　(鶏を見て)なか〳〵立派な鶏だな。

百姓。　へえ。

直實。　どうしたのだ。眼をつぶしてゐるではないか。

百姓。　へえ、この間蹴合ひをさせたものですから。

直實。　蹴合ひ？では之れは鬪鶏か。

百姓。　へえ。

直實。　强いのか。

百姓。　へえ、なか〳〵强うございます。この間片目にはされましたが、そのかはり相手の鶏をたうとう蹴殺してしまひました。

直實。　向ふにも一羽ゐるな。それも鬪鶏か。

百姓。　へえ、この方はもつと强うございます。わしの自慢の鶏でございます。

直實。　その方は鶏を飼込んでゐるのか。

百姓。　別に飼立てゝゐるわけぢやありませんが、このあたりは今蹴合ひがはやりだもんでございますから。――旦那

様もお好きのやうでございますな。

直實。うム。

百姓。何でしたらお氣晴しにやらせましてもよろしうございますが……

直實。いや、今日はそんなものは見たくない。

百姓。さやうでございますか。

間。

百姓。旦那様、どういたしませう。外に何にも差上げるものがないんでございますが……

直實。いや、食事なぞはいらぬ。——おい、その鶏を闘はせて見ろ。

百姓。へえ？蹴合ひをご覧になりますんですか。

直實。うム。

百姓。ぢや、ちよつとお待ちなすつていたゞきます。すぐ近所の鶏を連れてまゐりますから。

直實。そんなことは面倒だ。いゝからその二つを蹴合せて見ろ。

百姓。しかしどうも内に飼つておく奴は……

直實。つべこべいはずと、やれと申したら早くやれ。

百姓。へえ。

百姓は女房に筵を持たして土間を圍ふ。そして圍ひの中に軍鶏を一羽入れる。つゞいてもう一羽を入れる。

軍鶏は入れられるとすぐ蹴合をはじめる。（併し座敷の向ふの地上で戰つてゐるので、見物には見えない。僅

に烈しい羽ばたきの音が聞えるだけである)

直實は座敷に坐つたまゝちつとそれを見てゐる。

直實。どちらも强いな。

百姓。へえ、このあたりではこれに敵ふ鷄はあんまりございません。

間。

突然百姓は一羽の鷄を抱へ上げる。

直實。何故止めてしまうのだ。

百姓。もう勝負はつきました。

直實。なに、勝負はついた。いや、そんなことがあるものか。

百姓。この「めつか」の方が逃げ出しましたから、

直實。いや、ちよつと後へすさつただけだ。ほんさうに負けたのなら悲鳴を上げる筈ではないか。もつとやらせえ。途中で止めるといふことがあるか。

百姓。併しもう逃げるやうですと、とても駄目でございます。

直實。その方は自分の鷄なので惜しいのだな。そんな鷄なら何十羽でも償つてつかはす。さあ、早くやらせえ。やらさせる以上は何處までもやらせえ。

百姓。へえ。

百姓は抱へてゐる鷄を圍の中に入れる。

二羽はまた烈しく鬪ふ。

直實。　それ見ろ。あんなに鬪つてゐるではないか。

百姓。　畜生でございますな。向き合はせさへすりや、すぐにやるんですから……

直實。　片目の方もなか〱強いではないか。

百姓。　へえ、あゝ鷄冠を立てゝ向つて行くところは凄いくらゐでございます。

直實。　また途中で止めると承知せぬぞ。

百姓。　いゝえ、かうなつては、もう止めようつたつて止まりません。

直實。　それ、もつと上へ飛べ。頸のところを狙ふのだ。頸のところを。

百姓。　あつ、眼をやられた。

直實。　（鬪鷄の方には却て眼をそむけながら）いや、それしき。もつとやれ、もつと戰へ。死ぬまで戰へ。逃げるのは卑怯だぞ。（眼にいつぱい涙をたゝへてゐる）

百姓。　旦那樣、どうなすつたのでございます。

直實。　いや、何でもない。何でもない。――いゝからもつとやらせえ。もつと。

百姓。　こんなにやつてゐるぢやございませんか。

直實。　もつと、もつと突きかゝれ。何處までも、何處までも戰ふのだぞ。……何故やめてしまふのだ。

百姓。　旦那樣は見ておいでぢやないんでございますか。

直實。　倒れたのか。

百姓。へえ。

直實。(感に堪へぬやうに)さうか。

百姓は急いでもう一羽の方に笊をかぶせる。

百姓。(女房に)おい、唐辛の水を持つて來い。

女房唐辛の水を持つて來る。

百姓はそれを倒れてゐる鷄に飲ませる。

女房。どうしたい。

百姓。どうもいけないやうだ。

女房。まだ咽喉をぴく〱させてゐるぢやないか。

百姓。いや、もう駄目だ。

女房。でも、もう一度やつて見たら……。

百姓。そら、いくらやつたつてもう受け附けやしないのだ。

直實。何をぶつ〱喋つてをるのだ。鷄の一羽ぐらい何だ。

百姓。いゝえ、決して何も申したわけぢやございません。

直實。それなら默つて手當をしろ。

百姓。へえ、お耳ざはりで申訣がございません。

間。

直實はしばらくの間ぢつと沈思してゐたが、突然しづかに

直實。あるじ。

百姓。へえ。

直實。これへすゝめ。

百姓。へえ。

直實。おそれることはない。こちらへまゐれ。

直實。（太刀をはづして）これはその方につかはす。

百姓。へえ？

直實。あの馬もその方にやる。

百姓。へえ？

直實。それから厩がないといつたな。——それはこれで建てるがいゝ。（別に金を包んでやる）

百姓。へえ？

直實。いや、戯れではない。たしかにその方につかはすのだ。收めておけ。

百姓。へえ。

直實。心配することはない。某は不審のものではないぞ。

百姓。いゝえ、滅相な。

直實。はゝゝゝ。何にも知らぬその方が不審に思ふのはもつともだ。しかし某は亂心してゐるのではない。一時前ま

では一尺一寸の土地も失ふまいと、無下に爭つてゐたが、今はもう何もかも欲しくなくなつてしまつたのだ。この太刀にしろ、その馬にしろ、手離しがたいものではあるが、昔が思ひ出されて苦しいから、その方に遣はすのだ。遠慮することはない。取つておけ。

百姓。しかしこんなに頂戴いたしましては。

直實。いや、みんな不用になつたのだ。このまゝ收めておけ。

百姓。さやうでございますか。では、お言葉に從ひまして頂戴をいたします。

直實。先程は粗暴なことをして濟まなかつたな。むしやくしやしてをつたものだから、ついあのやうなことをしてしまつた。

百姓。いゝえ、とんでもない。そのやうに仰しやられますと、………

直實。眞一文字に駈けて來ると、この先の曲り道で、手綱をさばきそこねたので、急に馬の前足を折つたのだ。訴訟はうまくゆかず。みぞれは降つてゐる。何もかも癪にさはることばかりなので、腹立ちまぎれに、つい理不盡なことをいたしてしまつたのだ。宥してくれ。

百姓。勿體ない。勿體ない。そんなに仰しやられましては痛み入ります。

間。

百姓。旦那様

直實。何だ。

百姓。無躾でございますが旦那様は………

直實。某か。某は通りがゝりの氣まぐれな一武人だ。たゞさう思つてくれ。

百姓。何かお氣に入らぬことがおありのやうでございますが……

直實。うム、氣に入らぬことだらけだ。

百姓。これからどちらへお越しでございます。

直實。いや、何處へ行くといふあてどはない。たゞ鎌倉が氣にくはぬから飛び出して來たまでだ。

百姓。あゝ鎌倉からお越しでございましたか。

直實。某は今日鎌倉で對決をやつたのだ。數年來の爭ひを御前で一決したのだ。併し當方が正しいにも係はらず、某はみす〳〵……いや、こんなことをその方に申したところが何にもならぬ。——おい、そんなところにおいては目ざはりだ。馬を下(おろ)せ。

百姓。いゝえよろしうございます。あのまゝでかまひません。

直實。やい、見苦しいから取り下せ。

百姓。さやうでございますか。では何とかそこを片づけまして。

夫婦は土間を片づける。やがて百姓は手綱を解いて、そろ〳〵と馬を土間におろす。

直實は馬手差(めてさし)を拔いてしづかに髮を切る。

直實。あるじ。

百姓。へえ。

直實。これも不用の品だ。

百姓。何とも申しやうがございません。ご推察申上げます。

直實。いや、何にもいふな。何にもいふな。

間。

直實。おい、もつと薪をくべえ。

百姓。へえ。

百姓薪をくべる。

直實。大分風が出て來たやうだな。

百姓。へえ山は風が強くていけません。

外はもう日が落ちてゐる。

第三幕

京の吉水に方ける法然の禪房。その庫裡の内部。

上手は板の間。下手は廣い土間になつてゐる。そこに据ゑつけてある大きな竈には粥の鍋がかゝつてゐて、火が赤々と燃えてゐる。

板の間の方には天井から魚の形をした梆(はう)が下つてゐる。

第二幕から一年ぐらゐあとの、ある秋の明け方。外はいくらか白みそめたが、庫裡のなかはまだかなり薄暗い。

聞えない。

蓮生と盛蓮とが薪を割つてゐる。二人とも暗い中で默々として割つてゐる。しばらくの間は斧の響だけしか

やがて盛蓮はくたびれたらしく斧の手をちよつと休める。

蓮生。（割りながらそれを見て）少し休まうか。

盛蓮。いや、休むことはない。（またすぐに割りはじめる）

蓮生。しかし疲れたのではないか。

盛蓮。いや、少しも。ご坊疲れたのならわしにかまはず休むがいゝ。

蓮生。いや、わしは少しも疲れてはゐない。

蓮生は勢よくぽん〳〵割る。

盛蓮はそれに負けぬ氣になつてやるが蓮生には及ばない。

盛蓮。ご坊、力競べをするつもりか。

蓮生。いや、別にそんなことはない。

盛蓮。それならもつとゆつくりやつたらどうだ。

蓮生。はゝゝ。

盛蓮。そんなにやつたら疲れるではないか。

蓮生。わしはこんなことでは少しも疲れない。

盛蓮。依怙地な人だな。

百姓。何とも申しやうがございません。ご推察申上げます。

直實。いや、何にもいふな。何にもいふな。

間。

直實。おい、もつと薪をくべえ。

百姓。へえ。

百姓薪をくべる。

直實。大分風が出て來たやうだな。

百姓。へえ山は風が強くていけません。

外はもう日が落ちてゐる。

第三幕

京の吉水に方ける法然の禪房。その庵裡の内部。

上手は板の間。下手は廣い土間になつてゐる。そこに据ゑつけてある大きな竈には粥の鍋がかゝつてゐて、火が赤々と燃えてゐる。

板の間の方には天井から魚の形をした鮑(はう)が下つてゐる。

第二幕から一年ぐらゐあとの、ある秋の明け方。外はいくらか白みそめたが、庵裡のなかはまだかなり薄暗い。

蓮生と盛蓮とが薪を割つてゐる。二人とも暗い中で默々として割つてゐる。しばらくの間は斧の響だけしか聞えない。

やがて盛蓮はくたびれたらしく斧の手をちよつと休める。

蓮生。(割りながらそれを見て)少し休まうか。

盛蓮。いや、休むことはない。(またすぐに割りはじめる)

蓮生。しかし疲れたのではないか。

盛蓮。いや、少しも。ご坊疲れたのならわしにかまはず休むがいゝ。

蓮生。いや、わしは少しも疲れてはゐない。

蓮生は勢よくぽん／＼割る。

盛蓮はそれに負けぬ氣になつてやるが蓮生には及ばない。

盛蓮。ご坊、力競べをするつもりか。

蓮生。いや、別にそんなことはない。

盛蓮。それならもつとゆつくりやつたらどうだ。

蓮生。はゝゝ。

盛蓮。そんなにやつたら疲れるではないか。

蓮生。わしはこんなことでは少しも疲れない。

盛蓮。依怙地な人だな。

蓮生。休まうといつてゐるのに、ご坊こそ休まないのではないか。
盛蓮。わしは休まなくつてもいゝのだ。
蓮生。それなら勝手にするがいゝ。

間。

蓮生。さあ、片づいたぞ。――あゝ。（伸びをする）
盛蓮。人前で大ぎやうに伸びをしなくつてもいゝではないか。
蓮生。これは悪かつた。併しわざとやつたわけではないのだ。――少し手傳はうか。
盛蓮。いや、ご坊のと一しよにされるのは迷惑だ。
蓮生。どうして。
盛蓮。ご坊のとは割り方が違ふ。
蓮生。さうかな。
盛蓮。わしはいくらか遅いかもしれぬが、みんな揃つてゐる。太いのや、細いのは交つてゐない。
蓮生。わしのだつてそんな不揃なものは一本だつてありはしない。さうれ、どれにしたつてこのとほりだ。
盛蓮。何も薪を見せてくれとはいつてゐやしない。
蓮生。いや、別に見せびらかすわけではないが、たゞご坊が難癖をつけたからだ。
盛蓮。薪割なんかいくらうまくつたつて手柄にはなりはしない。
蓮生。何をつまらぬことをいつてゐるのだ。

蓮生は竈の前に行つて火を見る。

そこへ年老いた靜空が外から歸つて來る。柿を澤山籠に入れて持つてゐる。

蓮生。大變な柿ですな。

靜空。少し干柿をつくらうと思つてな。

蓮生。さうですか。串柿になさるのですか。

靜空。いや、串柿は面倒だから、繩でつるしておかうと思ふのだ。

蓮生。それなら繩はこゝにいくらもございます。

靜空。あ、有難う、有難う。

靜空は柿を繩にとほす。

蓮生は自分の割つた薪を束ねはじめる。

蓮生。こちらが濟んだらお手傳ひしませう。

靜空。いや、一人で十分だ。繩をとほすだけだから。

蓮生。隨分大きい柿ですな。裏山のですか。

靜空。あ。――（しづかに耳を傾けてゐる。）

蓮生。何です。

靜空。いや、ちよつと靜かに。

間。

蓮生。休まうといつてゐるのに、ご坊こそ休まないのではないか。

盛蓮。わしは休まなくつてもいゝのだ。

蓮生。それなら勝手にするがいゝ。

間。

蓮生。さあ、片づいたぞ。——あゝ。（伸びをする）

盛蓮。人前で大ぎやうに伸びをしなくつてもいゝではないか。

蓮生。これは悪かつた。併しわざとやつたわけではないのだ。——少し手傳はうか。

盛蓮。いや、ご坊のと一しよにされるのは迷惑だ。

蓮生。どうして。

盛蓮。ご坊のとは割り方が違ふ。

蓮生。さうかな。

盛蓮。わしはいくらか遅いかもしれぬが、みんな揃つてゐる。太いのや、細いのは交つてゐない。

蓮生。わしのだつてそんな不揃なものは一本だつてありはしない。さうれ、どれにしたつてこのとほりだ。

盛蓮。何も薪を見せてくれとはいつてゐやしない。

蓮生。いや、別に見せびらかすわけではないが、たゞご坊が難癖をつけたからだ。

盛蓮。薪割なんかいくらうまくつたつて手柄にはなりはしない。

蓮生。何をつまらぬことをいつてゐるのだ。

蓮生は竈の前に行つて火を見る。

そこへ年老いた靜空が外から歸つて來る。柿を澤山籠に入れて持つてゐる。

蓮生。大變な柿ですな。

靜空。少し干柿をつくらうと思つてな。

蓮生。さうですか。串柿になさるのですか。

靜空。いや、串柿は面倒だから、繩でつるしておかうと思ふのだ。

蓮生。それなら繩はこゝにいくらもございます。

靜空。あ、有難う、有難う。

靜空は柿を繩にとほす。

蓮生は自分の割つた薪を束ねはじめる。

蓮生。こちらが濟んだらお手傳ひしませう。

靜空。いや、一人で十分だ。繩をとほすだけだから。

蓮生。隨分大きい柿ですな。裏山のですか。

靜空。あ。——（しづかに耳を傾けてゐる。）

蓮生。何です。

靜空。いや、ちよつと靜かに。

間。

靜空。あ、やはりさうだ。

蓮生。どうしたのです。

靜空。なあに、鳩がまた子を孵へしたらしい。

蓮生。あ、さうですか。

靜空。そら、可哀らしい聲でクウ〳〵いつてゐるだらう。……親鳥の間に交つて……

蓮生。あ、聞えます。……聞えます。

靜空。はゝゝ。鳩の聲つて閑寂なものだな。

間。

靜空。ときにご坊はきのふは大出來だつたな。

蓮生。いゝえ、お恥しうございます。

靜空。さすがは東國一の弓取だけあつて、あゝいふ場所へ出ても膽はすはつたものだな。禪定殿下は却てお褒めになつたといふではないか。

蓮生。お叱りを被るかと思つてゐましたところ、却て奥へお召し出しになりましたので、われながら驚きました。あの折別段わめくほどのこともなかつたのですが、性來の短氣で、ついあのやうな非禮をいたしてしまひました。

靜空。いや、そこが外の人には出來ぬところだ。

盛蓮。（薪を割るのを止めて）蓮生殿、ご坊はきのふ何をやつたのだ。

蓮生。いや、お話するほどのことではないのだ。

盛蓮。わしに話しては困ることなのか。

蓮生。そんなことは毛頭ないが、大した話ではないのだ。――

盛蓮。そんなに謙遜することはないではないか。

蓮生。いや、實は、きのふは師のご坊が月輪殿(つきのわどの)に上(あが)られる日だから、わしはその御法談を聞きたいと思つて、推參にお供の列に加はつて行つたのだ。ところがお邸へ着くと師のご坊は奥へ招ぜられたが、供の者は沓ぬぎから先へは一歩も這入ることをゆるされないのだ。奥からはゆかしい香の匂がたゞよつて來るのに、尊い御談義は一ことも聞くことが出來ないので、わしは不平の餘り思はず聲高にくちばしつてしまつたのだ。「在家に差別(シヤベツ)のあることは知つてゐるが、出家がご法談を聞くのにもやつぱり差別はあるものだなあ。」からどなつてしまつたのだ。

盛蓮。それが禪定殿下のお耳にはいつてお召し出しになつたといふのか。それだけの話か。

蓮生。さうだ。

靜空。併しそれだけといふが、堅固な信念がなかつたら、高貴のお方のところで、どうしてそれだけのことがいへるものではない。――さあ、これで出來た。

蓮生。もうおとほしになつたのですか。

靜空。うむ。――あゝ爽かな朝だ。どれ、一つ干して來てやらう。

　　靜空はつるし柿を下げて外へ出て行く。

　間。

盛蓮。(なほ薪を割りながら)蓮生殿。

蓮生。（默つて振り向く）
盛蓮。ご坊は一代の面目を施したな。
蓮生。（顔を反ける）
盛蓮。いや、さうではないか。當代の關白殿と座を同じうして御法談を聞くなぞといふことは、われ〳〵には望めぬことだ。ご坊は實に果報者だ。
蓮生。………
盛蓮。だが、ご坊は何故月輪殿でわめかれたのだ。
蓮生。それは先刻いつたではないか。
盛蓮。しかし禪定殿下のお館に上つて殊更わめくといふのはをかしいではないか。
蓮生。何故そんな妙なことをいふのだ。
盛蓮。いや、何故といふことはない。たゞご坊の腹の底に何か求むるところがあつたやうに思はれるからだ。
蓮生。ご坊は、わしを疑つてゐるのか。
盛蓮。經文には名聞利養に執する者は惡魔の弟子だと書いてあるさうだ。
蓮生。默れ。そのやうなことをもう一ことといつて見ろ。その分には捨ておかないぞ。
盛蓮。なに。わしはさう思つたからさう思つたといつたまでだ。それがどうしたのだ。
蓮生。おのれ！　まだいふか。（盛蓮を取りおさへようとする）
盛蓮。何をするのだ。（持つてゐる斧を振り下ろす）

蓮生はすばやく身をかはすと共に、そばにあつた薪を取り上げる。

蓮生。貴様のやうな奴は。

盛蓮。なに。

二人長い間ぢつと相對峙してゐる。

突然蓮生は持つてゐた薪を投げ捨てゝ、盛蓮の足下にがばとひれ伏す。

蓮生。わしが惡い。わしが惡かつた。

盛蓮は斧を振りかざしたまゝ、それを見下ろしてゐたが、これも急に斧を投げ捨てゝ、蓮生のわきに倒れる。

そして「わあ。」と大聲に泣き出す。　間。

靜空が這入つて來る。

靜空。どうしたのだ。二人ともそんなところに。……おい、どうしたのだ。

盛蓮。申譯がありません。申譯がありません。

靜空。一體どうしたといふのだ。

盛蓮。わしが惡いのです。わしが惡いのです。蓮生殿のたゞ今の振舞でわしの邪な心は微塵に碎かれました。今といふ今わしは自分の惡いことを本當に知りました。一旦佛門に歸依した上は、源家もない。平家もない。平等一如の筈であるのに、わしは蓮生どのに怨みを持つてゐたのです。

靜空。なるほど、ご坊は……さうか。──

盛蓮。在家の折は蓮生どのとは敵方でしたから、その頃のことを思ふとどうしても打ち解けられないのです。それで

ことごとに反りが合はなかつたのですが、先ほど月輪殿の一條を聞くと、一きは嫉ましくなつたのです。自分よりも新參な蓮生どのが禪定殿下のお褒めに預つたとあつては、無念でたまらないものですから、どうにかして蓮生殿を貶しめてやらう、貶しめてやらうとはかつたたのです。それでついこんなことになつてしまつたのです。わしは實に淺ましい人間です。

靜空。………………

盛蓮。何事も包まずに申しませう。私がこゝに這入つたのは深い信仰があつてのことではありません。主家が亡びたのでどうしても姿を隱さなくつてはゐられなかつたからです。併し師のご坊のお話を聞いてゐると、自分のやうなかたくなゝ者でも、心がいつか和げられて、勝つたり負けたり、殺したり殺されたりする世の中がつく〴〵いやになつて行きます。そしてさういふ爭ひのない、しづかな世界にはいりたいと心から思ふやうになります。併しいくらさう思つても、根が根ですから、何か事に當るとすぐ昔の鬪爭の心が頭をもたげて來るのです。殊に今のやうに獲物などを持つてゐると、なほ〳〵心は荒立ちます。いや、それは今の場合ばかりではありません。隨分己を抑へよう〳〵と思つてゐながら、水を汲む時や、念佛を唱へる時にさへ、つい人よりも勝たう〳〵と爭つてしまふのです。他人が水を三桶荷ふと、わしは四桶荷はうと思ふのです。一日千遍唱名する者があると聞けば、自分は二千遍、二千遍やるといふ者があれば、自分は二千五百遍唱へなければ氣がすまないのです。私のやうなのが修羅地獄に落ちてゐるといふのでせうか。——蓮生殿、わしが惡いのです。濟みません。〳〵。

蓮生。いや、そんなことをいはれると却て苦しくなる。今ご坊がいつた言葉は一つ〳〵わしの聲だのだ。わしは家も捨て、妻子も捨て、武士も捨てたが我慢の心ばかりは、どうしても捨てられないのだ。

盛蓮。ではご坊も。

蓮生。あゝ、わしたちは生涯かういふことで煩はされるのか。

盛蓮。我を捨てよ。己れをおさへよ。そんなことはいはれなくつてもよく知つてゐます。併し知つてゐながらどうしてもおさへられないこの心をどうすればいゝのでせう。靜空殿、わしは負けよう、負けようとつとめてゐるのですが……

靜空。二人の苦しみはわしも長いこと苦しんで來たことだ。併し盛蓮殿、强ひて負けよう／＼とすることはまた一つの勝つことではないか。

盛蓮。さうでせうか。

靜空。靜に念佛をなさい。無理をせずとそのまゝにすゝみなさい。

盛蓮。そのまゝといひますと。

靜空。今の人はたゞ矯めることを修業と思つてゐるやうであるが、修業といふものは、ないものをあるやうに見せることではない。早い話が馬は牛のやうに强くない。それを强くしようとしてもそれは無理な話です。馬なら强いことよりも速いといふこと、道を踏みはずさずに步むといふこと、それに力を盡せばいゝ。持つて生れたものを誤らないやうに進めて行くこと、それが修業です。馬は馬でいゝ。牛になることはない。その代り牛には馬になることは出來ない。またその必要もない。萬物、人々、その柄、その氣禀のまゝに押し進んでいつたらそれでいゝのではないだらうか。それが自然法爾といふものではあるまいか。

盛蓮。そんな風にしたら一層我がつよくなりはしないでせうか。

靜空。深いことはわしにはよく分らないが、つきぬけたらいゝのだと思ふ。他力といふことは賴ることではない。本

然にあるものを、本然のまゝに育て上げることだと思ひます。手を加へないこと無理をせぬこと。そのまゝに任せることだと思ひます。

蓮生。（突然立ち上る）

靜空。どうしなすつた。

蓮生。いや、何でもありません（爺のところに行つて、釜を下ろす）

盛蓮。ご坊はこんな氣持でも働けるのか。

蓮生。たゞ愚痴を列べてゐたところが、何にもならないではないか。

盛蓮。それはさうだ。併しわしには………

蓮生。ご坊はさうしてゐるがいゝ。（蓮生は板の間に上つて食卓を列べる）。もうわしひとりで出來ることだ。

靜空。蓮生殿。濟まぬが、そこに豆があるのだがな。

蓮生。何處です。

靜空。うム、そこ、そこ。

蓮生。あ、ありました。

靜空は豆を受け取ると、入口のところへ出て豆を撒く。白い鳩が澤山ばた〳〵と庭に下りて來る。蓮生は食卓の用意を終ると、木の槌を取つて鮑を鳴らす。その音に庭に下りてゐた鳩は驚いて、ちよつと飛び立つたが、すぐまた靜かになる。

蓮生はなほ鮑を打ちつゞける。

外は朝日がまばゆいやうに輝いてゐる。

——（幕）——



心の河

中條百合子

一

庭には、檜葉だの、あすならう、青木、槇、常綠樹ばかり繁茂して居るので、初夏の烈しい日光がさすと、天井の低い八疊の部屋は、綠色の反射で何方を向いても青藻の底に沈んだやうになつた。

ぱつとした、其癖何となく陰氣なその部屋に獨りぽつねんと坐つて、さよは一つの事を考へて居た。考へと云ふのはオットミイルについてゞあつた。彼女は、竹製の小さい朝鮮の塗臺の上で、獨りぎりの晝飯を詰らなくすました時から、其事を頭に泛べて居るのであつた。女中が十日ばかり國へ歸つた。毎朝彼女は良人と自分との前に麵麭、紅茶、半熟玉子を並べた。同じ獻立ばかり續いたので、さよ自身變化を求め出した。その頃久しく缺けて居るやうに思はれる味を彼此詮議して行くうちに、彼女は急にオットミイルが食べたくて仕樣がなく成つて來たのである。

けれども、郊外の小店などで信用の出來るものは賣つて居ない。呟きにもならず彼女は考へた。

「一寸歸りに廻つて貰つて來て下さればいゝんだけれども。——銀座までぐらいすぐだのに……」

然し、さよは、自分の良人が年に合はせて如何那ものぐさかよく知つて居た。又、彼が自分程食物に注文のないのも解つて居た。彼は、近頃の恐ろしく混む電車をわざ〳〵乘り換へて迄下町に行き、一罐のオットミイルを買ふ位なら、手近かで間に合ふ麵麭ばかりで半月辛棒する方が遙にましだ、と云ふだらう。

さよの庭を眺めて居る眼の奧には、さぞ潑溂とした色彩と活動と、同時に砂塵に滿ちて居るだらう五月の銀座、日本橋邊の光景が、小さくはつきりパノラマのやうに映つた。いつか天氣のからりと晴れた日、日本橋の上に立つて眺めた川面の漣、兩岸に立てこんだ家の見通し、空の軟かな水色などが鮮やかに甦つて來た。印象の繪の裡で、村井銀行の横手を輕快な佛蘭西風の自働車が駛り去り、西川布團店の赤い幟が靜にはためき、一吹きすが〳〵しい微風が、東京の大路を貫いて吹き過る。——さよは、薄い着物に日傘を持つて、當もなく其中を步き廻つて見たかつた。平塚の奧から都會の眞中に出かける用事は、何處かで一つオットミイルを買ふと云ふ丈で彼女には充分であつた。其丈の用件さへあれば彼女は殆ど半日を活々と、樂しく、東京では目拔きと云ふべき街路の舖道を彷徨へた。——家が空だとあぶないと云ふので、彼女は、この遠征も思ひのまゝに出來ない。佗しい重苦しい心持が春の曇天のやうに罩めて來た。

さよは、立つて行つて編物袋を出した。

緣側の藤椅子にかけて、彼女は袋の中から銀鼠色の絹糸を出した。そして、先の尖つた金屬の針を淡く綠色に溶けた日光に燦めかせ、祖母の肩掛けを編み始めた。

良人は、其日いつもより少し晩く歸つて來た。

四邊がとつぷり暮れると、獨りで居るさよは、燈火の明るい自分の家ばかりたつた一つ、廣い田園の暗闇の中に、提燈のやうに目立つて居さうな氣がした。そして、ひどく不安を感じた。いくら戸をしめても窓を閉じても、すき透しに自分が眞暗な戸外から覗かれて居るやうに可恐いのである。彼女は、臺所で立てる自分の物音が、妙にはつきり四方に響くやうな氣がした。ちらちら硝子に映る自分の顏が、見なれない疑はしいものゝやうにさへ思はれる。彼女は神經をはりつめて簡單な炊事をするのである。

其故、良人の聲が玄關でするると、彼女はやつと危い綱渡りをすましたやうに吻つとした。彼女はいそいで格子の鍵をはづした。そして良人を歡迎した。

「おかへりなさい。―今日は少しおそかつたのね。」

朝から殆ど始めて人間と口を利くのであつたから、さよはいくら喋つても喋り切れない暖い潮が胸一杯に流れるのを感じた。

「どうなすつて？」

「今日はね、思ひがけない用事で伊東屋へ行つたんでおそくなつた。――ひどいよ今頃は。まるで喧嘩さ。」

「銀座の？」

彼女は、紐をぬいで居る良人の背中を見下しながら、それは惜しい事をしたと思つた。

「銀座へ被行るんだつたらお願ひする事があつたのよ。」

「ほう……何だね。又行けばいゝが……然し」

彼は、今までさよに見えなかつた一つの紙包みを黑皮のポートフォリオのかげから出した。

「こう云ふものがあるんだが……」

それは、明治屋の商標をもつて居る。さよは冗談の積りで云つた。

「私當てゝ見ませうか？何を買つて被來つたか」

保夫は、外套を掛け、居間に入り乍ら云つた。

「あやしいものだぞ。」

「大丈夫、きつと當てるわ。」

さよは、勿論間違ふものとして斷言した。

「オツトミイル！—二鑵？それとも一つは何か別なもの？」

保夫は振向いてさよを見た。

「ずるいぞ、觸つたな？」

「いゝえ。其那ことはしないわ」

彼女は、逆に訝しさうに良人に訊いた。

「でも——當つたの？」

「珍しく直覺の出來がよかつたね、オツトミイルだよ二つとも。」

「まあ……」

さよは、思ひがけず、驚いた。彼女は「違ふよ」と一言に否定されることを予期して居た。彼女はそれをきつかけに、

「本當はあれが欲しかつたのよ。」と云ふ積りで居たのであつた。彼女は自分がうまく當つたと思ふより、良人がどうし

てこれを、特に今日、買つて來る氣になつたかと意外であつた。

「私、今朝何とか云つて？　オットミイルのこと。」

「いゝや、云はないよ。」

保夫は、さよの眼を瞠つた顏から、自分の手柄を素ばしこく見てとつた。彼は、さも自信ある良人のやうに云つた。

「ちやあんと判るさ、此位のことは。顏に書いてあつたのさ。」

すつかり夕飯の後片づけがすむと、さよは明朝の準備に、碧色の二重鍋を火にかけた。中には、先刻のオウトミイルが入つて居る。踏台に腰をかけ、料理台に兩肱をもたせ、電燈の下で、煮える鍋の番をしながら、彼女は自分の氣持を考へた。

もう半年も前であつたら、此那事でも自分は如何那に興奮したらう。事柄はすつかり違つたが、矢張り小さな事で、良人と自分との氣持がぴつたり合つて居るのが判つた時、さよは、愛は此那に微妙なものかと、感歎しつくした自分を覺えて居た。

今、彼女は其那にじき上氣せはしなかつた。こう云ふ偶然の暗合が、自分達にだけ投げられた天惠だとも思はなかつた。家庭の瑣事の一つであらう。幾萬とある屋根屋根の下で、屢々起る日常茶飯のことではある。而も、彼女は、このありふれた出來事の裡に、何とも云へない一縷の優しさ、溫かさを感じずには居られなかつた。人間と人間とが、高い天の上から瞰下したら、さぞ〳〵小さく、然しながら一生懸命に生きてゆく間に、馴れた賢い本能が睦しく互に領き合ふ。その領き合ひを、さよは快く良人と自分との心の底に認めたのである。

煮え立つた鍋からは、陽氣に湯氣が吹出した。良人の書齋の方からは、歯切れのよいタイプライターの音が、彼の周

圓を髣髴させる一定の調子で響いて來る。——

台所に働き乍ら、さよはふと、日頃からすきな

箱根路をわがこえくれば伊豆の海や
沖の小島に波のよる見ゆ

と云ふ歌を思ひ出した。自分達の生活が、この沖の小島を見晴すやうに、一點造に情を湛え、廣々と明るい全景の裡に小さく浮んで居るやうで、さよは穩やかな悦びと懷しさとを覺えた。

二

それから間もない或日のことであつた。

さよは、良人と良人の友人と三人で晩餐の卓子について居た。彼女の隣りに良人が座つた。彼女の眞向には友人が。

そして、箸をとりあげて暫くすると、保夫は

「う？　う？　う？」

と口の裡で言葉にならない音を出し乍ら、何か訊くやうに彼女の方に顔を向けた。

さよは、良人の顔を見返したが、すぐ答へた。

「あゝもういゝの、すぐあがつて——」

彼女は、保夫の箸の先が小鉢の浸しものに觸れて居るので、何心なく猿の合圖のやうな「う？・う？・う？」を、「これに、したぢがかゝつて居るのか」と翻譯して聞いたのであつた。

友人は、ナスタアシウムの花越しに二人を見較べた。
「何だね、どうしたの？」
保夫の說明でいきさつが判ると、彼は
「ふうむ」
とやゝ大仰に感服した。
「さすが夫婦は違ふな。僕はいくら考へようとしても、まるで見當がつかなかつたよ。……ふうむ、うまい工合に行くもんだなあ」
さよは何とも云はずに微笑した。友人は獨身者であつた。ひやかしとも愛素とも羨しがりともとれる言葉に如何う返事してよいか解らなかつたし「うまい工合に行くもんだなあ」と云ふ感歎詞は、惡意のないことは明瞭であつたが、彼女に自分の心がまるで試驗された電熱器にでも成つたやうな淋しさを與へた。
月の明るい頃であつたので、彼女達はその友人を送つて、五六丁ある停車場まで行つた。歸りには、二人並んで來る正面に月があつた。水蒸氣がある故か、さやかな月のまはりには、大きな大きな金灰色の暈が眠げに悠たり懸つて居る。暈の端れに、よく光る星が一つ飾のやうについて居た。初夏の夜の精氣を溶し、凝したやうな月と星とは、彼等の行く先々、いゝ匂ひで繁つて居る栗の梢や、繊い梯の黒い枝のかげに先驅をする。さよは自分の足の運びが磁力に吸はれて月へ月へと向つて行くやうに感じた。帽子もかぶらず、輕い杖を手にしたぎりで保夫は、ゆつくり大股に彼女の傍を歩いて來る。彼が、平和な幸福を感じて居ること、心の何處かで、友人が喋りつゞけた事柄を味ひ、かみなほして居るのがさよによくわかつた。友人は、來てから歸る迄、殆ど結婚生活のことばかり話して行つた。自分自身の生活に對

する希望や豫想に就てゞなければ、知人の結婚生活の成功、失敗等について、そして、一々の文句の句點のやうに、彼は「君達はいゝさ。申し分なしだらう」とか、「何にしろ以心傳心だからな」とつけ足した。停車場で別れる時、彼は改札口を半分プラットフネームに出ながら體を捩つて彼等の方を振向き、呼びかけた。

「この次來る迄に頼むよ。見つけて置いてくれ給へ」

樫と要の生垣に沿つて曲ると、道は、兩端に雜草の茂つた田舍道になつた。左側にはとろ／＼月に輝いて流れる溝川があつた。右手には、畦の低い耕地が、處々に杉森で遮られ、一面の燦く透明な靄のやうな月の光に覆はれて居る。聖者の圓光のやうに遙かな暈をもつた月は、愈々彼等に近く見えた。一つの星は益々キラ／＼と美しく閃く。保夫は、此那に夜が生命に滿ち溢れて居るのに、あの友達が獨りで麥酒に醉つて歸るのが哀れだと云ふ風に呟いた。

「本當に誰かないものかな。─君の友達なんか大勢あるんだらうのに……戯談らしく云つては居るが本氣なんだよ、山岡のは─」

さよは、ぼんやり答へた。

「さうね」

保夫は、默り込んだ。口笛を鳴らす氣にもなれない程、四邊の景色は靜かで、夢のやうである。さよは、草履の足元にまるで氣をつけず、光の裡を泳ぐやうにして歩き乍ら、頻りに一つことを思つた。彼女の心は、山岡が面白さうに幾度も繰り返しで云つた以心傳心と云ふ言葉のまはりを、丹念に廻つて居るのであつた。

全くさう云はれて見ると、自分達の生活には共那ことが少くない。さよは、つい先日のオットミイルの事を思ひ出した。あの事のみならず、日常のこま／＼した用件は大抵のとき一言二言の受け渡しですぐ片づけられて居る。その一言

三言も、言葉としては決して完全なものでない。ほんの心持を仄めかすだけの役目しかつとめないのだが、何方かで其こそ「工合よく」補充し、直覺した事は大した行違ひもなく運ばれて來て居るのだ。——さよは、考へて行くと、今日と云ひ明日といふ太陽が、互に交錯し反撥し調和しつゝ流れて行く二つの心の河の上に、出たり沈んだりするやうに思はれた。自分達の生活の實體が、一緒に食事をしたり、散歩したり、眠つたりする形象のもう一重奥に在るらしい神秘的な心持にさへなる。彼女は、まるで言葉と云ふものが無くなつた時の自分達は如何うであらうかと思つた。自分の直覺はどの程度まで眞實なものだらう。又、良人は、彼の心の眼で、自分の心のどの邊までを見とほし、同じ感情や意慾を反射するだらうか。

さよは、これまで持たなかつた自覺を以て、深く深く自分と良人との心の風景を跋渉して見たく思ひ始めた。云ひかへると、今まで我知らず勢にのつて流されて來た二つの心の河の河底まで潜つて、滿干の有様、淀の在場所、渦の工合を目のあたり見たら、と思ひ出したのであつた。

月の光に馴れたさよの瞳に、戻りついた家の電燈の色がひどく赤黄く、暑く、澱んで見えた。

保夫は

「家へ入るといやに蒸すね。」

と、ひやした麥湯を所望した。さよは、盆にのせて其を良人にすゝめ、彼が仰向いてすつかりコップを空にする様子を見守つた。彼女はひとりでに微笑んだ。彼女は、良人の知らない心の望樓を、今夜のうちに拵へた。そこの覗き穴から見ると、麥湯を呑み乍ら彼の心が何と呟いて居るか、はつきり判るやうに思つたからであつた。然し、保夫が

「何？　何を笑つて居るの」

と尋ねる丈、彼女は子供が玩具をかくすやうに、新しい計畫を心の奥にたくしこんだ。そして、狡く、嬉しさうに、默つて頭を振り眼の裡で笑つた。

三

保夫の側から見ると、さよは近頃特に濃やかに氣の利く妻となつて來た。

彼女は、一つでも、未だ口に出して云はれない彼の希望や要求を察して、仕とげたのを發見すると、ひどく悦んだ。普通妻が、良人の滿足を見て自分も好い心持になると云ふ以上のものが、さよにはあつた。彼女にとつて、その事が出來たのは――保夫が

「ほう、あるね。實はもうそろ／＼買つて來なければいけないと思つて居たんだが」と、新しいオー・ド・コローンの瓶を手にとるのを見るのは――つまり自分の感じが間違つては居なかつた證據であつた。さよは其處から二重の嬉しさを得たのである。

時によると、又、彼女は何か云ひ出さうとする保夫の口先を

「あ、一寸待つて。云はないで、云はないで」と、あはてゝ遮ることがあつた。夕飯後、彼等は定つて八時頃まで雜談した。夕暮の氣持よい日には緣側に並んで腰をかけたり、庭をぶらついたりしながら。――さう云ふ時、話の續きを中絶させて、さよは熱心に

「あ！一寸持つて」

を叫ぶのであつた。保夫は、兵庫帶の後に兩手をさし込んだまゝ、訝しさうに彼女を顧る。

「何故？」

「――その先は私が云ふの」

さよは、良人の顔から眼を離さず說明した。

「私がね、貴方がきつと斯う仰云るだらうと思ふことを云ふの。當つたか當らないか、正直に敎へて頂戴。

其處で、さよは勿體ぶり、場合によつては

「――省――課書記官谷保夫は、今、彼の從弟の就職について云々」

と、冗談を混ぜて良人の考へや心持を話した。保夫は本氣にならず

「莫迦」

と苦笑しながらも、さよによつて讀みあげられる彼の考へと云ふものに耳を借した。さよは、妙に眞劍で、頭の奥から糸でも繰り出すやうな眼付で話し乍ら、少しあやふやな處に來ると、

「さうぢやあなくつて？違つて？まるで違ふこと？」

と念を押す。全然見當の脫れた時、保夫はさも面白さうに高笑ひした。そして、遠慮なく

「莫迦」

を連發して彼女を揶揄した。さよは、額の隅を搔いて敗亡を示した。當がはづれても、結局食後の座興として決して不適當なものではない。然し、十中七八まで保夫は彼女の言葉を正面から否定はしなかつた。その代り、はつきり承認もしない。彼は、にやにやしながら

「まあさう思ふならさうさせて置くさ」

と尋ねる共、彼女は子供が玩具をかくすやうに、新しい計畫を心の奥にたくしこんだ。そして、猾く、嬉しさうに、默つて頭を振り眼の裡で笑つた。

三

保夫の側から見ると、さよは近頃特に濃やかに氣の利く妻となつて來た。

彼女は、一つでも、未だ口に出して云はれない彼の希望や要求を察して、仕とげたのを發見すると、ひどく悦んだ。普通妻が、良人の滿足を見て自分も好い心持になると云ふ以上のものが、さよにはあつた。彼女にとつて、その事が出來たのは――保夫が

「ほう、あるね。實はもうそろそろ買つて來なければいけないと思つて居たんだが」と、新しいオー・ド・コローンの瓶を手にとるのを見るのは――つまり自分の感じが間違つては居なかつた證據であつた。さよは其處から二重の嬉しさを得たのである。

時によると、又、彼女は何か云ひ出さうとする保夫の口先を

「あ、一寸待つて。云はないで、云はないで」と、あはてゝ遮ることがあつた。夕飯後、彼等は定つて八時頃まで雜談した。夕暮の氣持よい日には緣側に並んで腰をかけたり、庭をぶらついたりしながら。――さう云ふ時、話の續きを中絕させて、さよは熱心に

「あ！一寸待つて」

を叫ぶのであつた。保夫は、兵庫帶の後に兩手をさし込んだまゝ、訝しさうに彼女を顧る。

「何故？」

「——その先は私が云ふの」

さよは、良人の顔から眼を離さず説明した。

「私がね、貴方がきつと斯う仰云るだらうと思ふことを云ふの。當つたか當らないか、正直に教へて頂戴。

其處で、さよは勿體ぶり、場合によつては

「——省——課書記官谷保夫は、今、彼の從弟の就職について云々」

と、冗談を混ぜて良人の考へや心持を話した。保夫は本氣にならず

「莫迦」

と苦笑しながらも、さよによつて讀みあげられる彼の考へと云ふものに耳を借した。さよは、妙に眞劍で、頭の奥から糸でも繰り出すやうな眼付で話し乍ら、少しあやふやな處に來ると、

「さうぢやあなくつて？違つて？まるで違ふこと？」

と念を押す。全然見當の脱れた時、保夫はさも面白さうに高笑ひした。そして、遠慮なく

「莫迦」

を連發して彼女を揶揄した。さよは、額の隅を掻いて敗亡を示した。當がはづれても、結局食後の座興として決して不適當なものではない。然し、十中七八まで保夫は彼女の言葉を正面から否定はしなかつた。その代り、はつきり承認もしない。彼は、にやにやしながら

「まあさう思ふならさうして置くさ」と [illegible]

と云ふのであつた。

この當て役が反對に保夫に振りつけられると、二人の會話は、さよが共役を持つた時程快活に、熱をもつては進まなかつた。

彼女は良人に注文するだらう。

「きのふ吉村さんが被來つた時ね、私、あの方について感じた事があるのです。何だとお思ひになつて？鈴木さんと比較して――當てゝ頂戴」

保夫は、氣も乘らなさうに煙草の烟を吹いた。

「何の稽古が始るのかい。――吉村について感じたつて……――漠然としすぎて問題になりやあしないよ。」

さよは、良人に興味を持たせたく、一生懸命に云つた。

「吉村さんと鈴木さんとは同じ實業家でせう。實業家と云つても二人は實業につく動機がまるで異ふと思つたの、その事――」

「厄介な事になつたな。」

保夫は間に合はせな答をした、

「第一、男の見た男と、女の見た男とは大分違ふよ。」

「いやな方！」

さよは、酸いやうな笑ひを笑つた。

「違ふからこそ當てゝ頂戴と申上るのよ。あの二人は性格が隨分異つて居るでせう、その違ひを私がどう感じたかと云

ふことなのよ。」

「さあ——大體何だらう、鈴木は神經質で、考へ出すと眠れないと云ふ方だが、吉村はずつと太つ腹だらうな。大損をしてハツハツハツと笑ふのは、吉村でなけりやあ出來ない藝當だらうな。」

さよは、詰らなさうに良人を見た。彼女は諦め切れない風でつけ足した。

「私の云つた要點とまるで違つてよ、それは」

「だつて彼奴の性格はさうだよ。事實だから仕樣がない。」

さよは默り込んだ。彼女は何とも云へない物足りなさと淋しさとを感じた。折角一心に矢を射いても、いざと云ふ處で的がくらり、斜かひになり、徒に流れ矢となつて落ちて仕舞ふ。さよは、せめてかつちり、要點だけは受けとめて欲しかつた。返事は間違つてもよいから「お前の事だから斯ろでも思つたゞらう」と云ふ處から發足しなければ、焦點が合はないと云ふこと位、鋭く感じて欲しかつた。

「この空虛な喰ひ違ひを、何とも感じないのだらうか!」さよは、心の裏に寒さを覺え乍ら、愕き惱つて良人の顏を見なほした。

最初は、相當愛嬌をもつて始められた當てつこ、さよの云ふ心の跋涉は、時が經つにつれ、次第に感情の複雜さを增した。同時に、幾分殘酷なものにもなつて來た。彼女は、此迄、好い人と云ふぼんやりした一つの型にはめて安心して居た良人の性格を、自然細かに調べる機會を與へられた。そして、親達が、配偶として第一の條件のやうに云つて聞かせて吳れた好い人と云ふものが、決して性格として賴れる面白いものでもなければ、まして自分が描いて居るやうに、潑剌と熱意ある生活の幸福などは、到底期待出來さうもなく思はれ出したのであつた。

さよは、當てつけの奥に暗い淒い何か悲哀が湧いて來るのを感じた。彼女は、何氣なく夕飯後、夕刊を見て居る良人に云ひかける。

「今日澤口の伯母樣が被來つてよ。」

「ほう。何だつて？」

「又幸雄さんの事をこぼして被居つたわ。あの人にも困るつて。先達つての話は、自分から行つて斷つたのですつて……

……」

さよは、注意深く保夫の返事を待つた。幸雄は從弟で、彼はその兄役をして居た。

「贅澤だな。この就職難のとき自分からいゝくちを斷るなんて……」

保夫が、自分の予期通りのことを、呑氣に云ふのを見ると、さよは焦立たしさと悲しさとを同時に感じた。彼女は、複雜に、意地惡く動く自分の心持を、慘めに自覺しながら云つた。

「伯母樣に申上て置いたわ。今度幸雄さんが被來つたら、きツと保夫がよくお話しするでせうつて。―さうでせう？貴方幸雄さんに、伯母さんを早く安心させるもんだよつて仰云るでせう？」

保夫は、機械的に答へた。

「云はなくちやあなるまい。――折角理財科まで出て遊んで居るのも勿體ないからな」

さよは、「何故其那上つ面で安心？　どうしてもう一度、幸雄さんの心持の下まで切り下げないで安心なのだらう！」

と云ふ、齒痒い齒痒い心持を、やつと

「幸雄さんはいゝ從兄を持つて仕合はせね」

と云ふ皮肉に洩した。

けれども、保夫は、彼の傍で、さよが、どんな感情に煮え立ち、それをどんな心持で制して居るかは、まるで感じないやうに見えた。彼は苦勞も不安もないらしく、艶の好い、型通り青年紳士の顔を、悠々居間の灯の下に浮上らせて居るのだ。――

彼女が指先に絡めて編んで居た絹糸のやうに、愼ましく輝き、滑らかであつた生活は、少くともさよの心の内で變化した。彼女は、良人と自分との調和ある沈默の頷き合ひは、散歩に出ようか出まいかと云ふこと、二人共が丁度同じ時番茶を飲みたいと思ふこと等以外に、果して何處まで深く連絡があるかひどく疑はしい心持に、結婚後始めて逢着したのであつた。

四

四邊はもう六月であつた。

さよは、獨りになると、愈々濃い青葉のちらちらする縁側に出、鮮やかな紫陽花の若葉の色だの、ガラス鉢の水を緋や白に照して泳ぎ廻る金魚だのを眺め乍ら、種々な考へに耽つた。

此程心を捕はれることから見ても、さよは、自分がどの位良人に執着して居るか、はつきり解つた。けれども、何故執着して居るのか。愛して居るから。それなら彼は何處を何を愛して居るのかと自問自答して行くと、彼女は、苦しい心持になつた。良人と切りはなせない絆を感じる心持と、彼の物足りなさ、詰らなさ、自分の求めるものが決して彼の裡にはないと云ふ事實とは、彼女の心の裡で儼然と對立した。さよにとつて悲しいことは、此等の氣持を、洗ひさらひ

良人に打ち明けられない事であつた。默つて、獨りで何か解釋を見出さなければならない。それも、二人でゞはなく、自分だけが何とか變化しなければならない——さよは、保夫が彼自身の平々凡々にはまるで氣がつかないのを知つて居た。又、彼女が何とか云つた處で、決して素直に十七八の青年のやうに自らを顧みて涙を落すやうな質でもないのを知つて居た。保夫は、さよから見ると、かんぢきを足につけて生れて來た人のやうに思へた。かんぢきは、どんな深い雪の上を歩いても、決して彼を溺らせたり立往生をさせたりはしない。彼女は、自分の足に其那重寶なものがついて居ないことを見出した。其故、彼の行く道を跟いて行かうとすると、足搔きがつかない程、ずぶりずぶりと潜り込む。最後の目當ては一つとしても、さよは、自分の道具がついて居ない足にかなふ路をさぐり出さなければならないのを感じた。これが無形な心の問題であるだけ、良人は、彼女がもう二進三進も行かなく成つて、泣きかけで佇んで居るのを知らなかつた。彼女がよし其を訴へたとしても、かんぢきのある彼は、彼女がそれを持たないことを思はず「其那ことがあるものか。來る氣さいあれば來られるのだ。」と云ふだらう。

「だつて駄目よ、私には駄目なのよ」と云つても、さよは、良人に出して示すべきものは、手近かな視覺に訴へることの出來ない、形象のない、自分の生れつきであるのを侘しく、途方にくれて感じたのであつた。

入梅前の故か、よく半透明な白い磨硝子を張りつめたやうに明るい空から、光つた細い雨が、微かな音を靑葉に灑いで降つた。さよが、椅子の腕木に頬杖をついて眺めると、古風に松の下に置かれた巨い庭石の周りに、濃茶をかけたやうな靑苔が蒸して居た。天から、輕く絶え間なく繰りおろす細い雨脚は、苔の面に觸れたかと思ふとすつと消える。後から來たのも、すつと消える。いくらでも、いくらでも、靑苔は凝つと動かず降る程の六月の雲の雨を吸ひ込んで行く。——見守つて居るうちに、さよの瞳が段々うるんで來た。涙が蓮の葉の露のやうに藤色のセルの胸をころがり落ちた。彼

女は、自分達が何の爲に、何を目當てに其日其日を一つ屋根の下で生きて行くのかと思つた。保夫は、外側からだけ見れば、疑ひもなく毎朝出掛けて行くべき役所と、判を押す書類と、ふかすべきウェスミンスタを持つて居た。けれども、しんのしんの生きる目的、意味と思ふものは何處に持つて居るのだらう。其等の一つ一つに小分けにこめられて居るのか。又は、巻しきか何かのやうに、さう云ふ外廓だけは如何にも確り、ちやんと出來て居るが、中心はすぽ抜けなのでは無からうか。自分は、彼との生活の何處に安心し倚りかゝる場所を見つけられるのだらう。…………

或考へに脅かされ、さよは殆ど椅子から立ち上りさうにした。彼女は、落付きのない眼を動して、救ひでも求めるやうに、濡れ切つた庭や、廊下や、仄暗い庭を見廻はした。外には、自然も人間も壓しくるむやうな雨が煙つて降つて居る。點滴の音が單調に聽へ出した。――さよは、立つて廊下の端まで歩いて行つた。何かに押し戻されるやうに柱の下まで來、彼女は其處に佇んだまゝ、燈火の光が庭の水たまりに寫つてチラ〳〵し始める頃まで動かなかつた。夜、彼女は出來るだけ平和に良人の抱擁を拒んだ。ひとりにされると、彼女は暗闇の裡で聲を殺し劇しく泣いた。さよは、自分がこう云ふ氣持で對して居る良人の子を孕むことを想ふと、恐怖と愧しさとで手足が氷のやうになつた。彼女は闇に瞠つた眼尻からぽた〳〵涙をこぼし乍ら、自分で何故ともわからない緊張を以て、良夫の穏やかな寢息に注意を凝した。

五

若し人間と云ふものが、布で作つた着物のやうに、人の手で解けるものであつたら、さよは良人を今こそ熱心に解體し始めたらう。

そして、一つ一つの部分を、自分に納得の行く迄眺め、觸り、引かへして見て、又元の形に綴めあげ、心から安はうと

したに違ひない。けれども、それは空想に於てさい不可能なことである。彼女の前や横には、其點からは手のつけようのない良人が、外見には親しく近く、さよの心から見ると距離が近いだけ一層増す寂寞さで引添ふて居る。

その寂しく苦しい心持は、一ケ月ばかり前、彼女が獨りぼつちで家に居た時のとは全然異つたものであつた。ある時は、良人さい歸れば彼女は忽ち救はれた。一日中の壓迫されるやうな陰氣さは、彼の顔を見た刹那に消散した。が、今度のは正反對と云へた。さよは、保夫が自分のすぐ傍に坐つて、天地の間に唯一つの疑問も不安もないと云ふ風に湯上りの濃い髪を艶々させて居るのを見ると、却つて絶望に近い程の寥しさ、野蠻な焦躁に煽り立てられるのであつた。

彼女は、あばれる獣をやつと押へつけて居るやうな幾日かを送つた。到頭、辛棒がし切れなくなつた。彼女は憐れに一心な顔付で良人につゝかゝつて行つた。

例によつて、其は夕食後のことであつた。さよがひとりで卓子に眼を落してばかり居た故か、保夫は早めに書齋に引取つた。彼女は暫く後に殘つて、女中に口を利いたが、軈て良人の後を追ふやうに書齋に行つた。六疊の部屋は、短い鍵の手の廊下で離れのやうに庭に突出て居る。保夫は、正面の濡れ縁に向つて机を据えて居た。夜の、何か濃い液體のやうな闇は、冴えた電燈が煌々と漲る敷居際でぴたりと押し返されて居る。彼の後姿は、光を浴びる肩の邊をしろ〳〵と、前方の闇に浮上つて見えた。

さよは、靜に机の傍に行つた。保夫は、右手に青鉛筆を持ち、薄い假綴ぢのものを讀んで居る。——細かな横文字を無意味に眺め、さよは聲をかけた。

「——おいそがしいの?」

保夫は、背を延し、バラ〳〵と頁を翻した。

「さう云ふわけでもないが…………何故？」

「…………」

さよは、夜氣が身に迫るとでも云ふやうに、單衣の袖を抱き合せた。保夫は、彼女の顔付を見、微かに表情を變へた。彼女は、藁半紙のやうにごく粗末なパムフレットに目を据えたまゝ、思ひ込んだ調子で云ひ出した。

「ね、貴方——安心？」

「何が？——君のやうな出しぬけでは、返事に困るよ。」

保夫の言葉つきの裡には、充分な用意と、それを包んだ平靜さ、子供扱ひの氣輕さを裝ふ響きがあつた。

「何だい？…………地震」(一九二三年東京、湘南地方に大震があり、翌年になつても屢々餘震があつた。)

「其那ことぢやないわ、地震なんか——私共のこと。——」

さよは、顔を擡げて良人を正視した。

「貴方ちつとも其那心持はなさらないの？　しんから安心？」

保夫は煙草の煙をよけるやうに瞼をせばめた。

「何か僕達の生活に不安があると云ふの？」

さよは、合點をした。

「私この頃堪らないの。」

「…………何も不安な處なんか無いぢやあないか。僕は此那に貞節のある良人だ！　君は君で一日ぢう眠らうが起きようが自由な身の上だし、——僕は不安どころか、大いに幸福だと思ふ。特に、君なんかユートピア以上の生活だな。」

さよは、不愉快に良人の軽口の先を折つた。

「冗談はあと。私は眞面目よ。――貴方本當に私共の生活が充實して居るとお思ひになること？大丈夫、完全なものだとお思ひなさる？　私は、この頃、さう呑氣で居られなくなつたわ。……ひどく不安なの」

「………我儘だらう？」

保夫は、さよの笑ひを釣り出さうとして、誇張した表情までつけ足した。さよは、眞劍で否定した。

「左樣ではなくてよ。決して左樣ではありません。二人で暮して行く以上、大事なことだから本氣で聞いて下さる方がいゝわ。

私はね、この頃貴方が判らないの。貴方の心持の中心が、生きて行く慾が、私とまるで別な、遠い處にあるやうで苦しいの。それは勿論」

彼女は、氣を入れて聞き始めた保夫に說明した。

「同じやうな處もあつてよ。同じに考へたり思つたりする事もあります。けれども、それは些細なことで、結局お互が何方でもいゝから、無意識に讓り合つて行くので左樣なので、大元の處へ行くと、二つがすうつと離れねばならないやうなの。お判りになる？私の云ふことが……。例へば、今、私が斯那ことを云ふ迄、貴方一寸もそう云ふ心持は感じて居らつしやらなかつたでせう？　自分が感じないばかりでなく、私が感じて居ることも、まるでお感じにならなかつたでせう？――それが離れて居ると私が云ふところです。」

「ふうむ。………然しそれは、君が僕の氣持をよく理解しないからだらう。まだ――」

「さうか知ら。――私は逆のやうに感じてよ。貴方は、私共が世間で認める通り夫婦で、外から見た條件がちやんと調

つて居るのだけ知つて安心して被居るのぢやあないこと？　自分達の心の問題を放ぼり出して、他人のやうに外側だけ見て好い氣になつて居るのは嫌よ。——私は根から安心したいのです。貴方と私とが、本當に此處こそと云ふところを確かり持ち合つて行きたいの。」

「——いやに懷疑的だね。」

保夫は、手入れの好い髭の邊に、不似合な曖昧な迷惑げな表情を泛べて、さよを見た。

「こうやつて生活して居ると云ふ事實以外に、僕等の生活のあるべき譯がないぢやないか。それに……君の言葉は捕へどこがまるでない。遠いとか寂しいとか云はずに、何處か惡いところがあるなら明瞭に指摘すべきだ。それが君に出來ないなら、僕は、君の云ふことに、はつきりした土臺がないとしか思へないよ。」

「惡いと云ふものではないのです。なほすと云ふより、もつと心の底に入るの。もつとむき出しで、鋭く感じる心が私は欲しいの。私に遠慮なく云はせれば、私のこの心持を論理の上で正しい形をとつて説明させようとなさる、それが淋しいのです。判つたでせう？心のことよ。心直接感じるべきことなのよ！」

「ぢやあ堂々廻りで結局、僕に云つても駄目だと云ふことぢやあないか！」

保夫は、さよの胸を一杯にした冷やかな事務家的態度を示した。彼女は、辛うじて自分の涙もろさに打ち勝つた。

「私は、駄目だと云つて澄して居られないのよ！　二人で生きて行くのなら、生きてゆくやうにして行きたいのです。——だから——」

「ね、さよ。」

保夫は、煙草を灰皿の上に揉み消し、熱くなつてつめよるさよを遮つた。

「生活の幸福と云ふやうなものは、愛と同じで、一種の信仰だよ。信仰次第でどうともなる。――君なんか、まだ〱生活がどんなものだか知らないのだ。………君だつて僕の愛だけは、信じられるだらう？　それがお互の生活の萬事ではないか。」

彼は、何か云はふとするさよの手を執つた。そして、

「さあ、理窟はやめて、可愛いさよにおなり」

と云ひ乍ら、彼女をひきよせて愛撫しようとした。彼女は、赧くなつて、遂に涙をこぼした。

「さう云ふ風に片づけては駄目。――貴方は、狡いわ！」

彼女は、手を引こめて、きちんと坐りなほした。

「私だつてお互が大切だと思ふから斯う云ふことも云ひ出すのです。愛して居る、愛して居るつて、百萬遍お互に誓ひ合つたつて、心の觀音開きがいつでも行き違つてプカプカして居て、貴方平氣？　平氣で被居れるの？」

さよは、せめて此處で「いや、其那ことでは堪らない。其那ことをしては置けるものか！」と云つて欲しかつた。彼女は、その一言で、心半分は助かつたゞらう。彼女は、何處かでぴつたり、卒直な、むき出しな保夫の心にぶつかりたかつた。それを願ふばかりに、多くの言葉も費すのに、彼は、驚くべき冷靜さで云つた。

「其は君の想像だよ。――君ばかりが、閑にあかして捏ねあげたもの、證據には、見給え」

彼は、凱旋者のやうな眼に微笑さへ湛へて云つた。

「現に斯うやつて一つ家に生活してゐる僕が一寸も感じて居ないことぢやあないか。」

さよは、我知らず

「獨斷家！」
と叫んだ。
「貴方、よく其那！自分の判る丈しか人生は、人間の心は無いと思つて被居るの？」
「允奮しない方がいゝ。――而も、僕は君にとつて、決してあかの他人だとは思つて居ない。少くとも良人だ。良人である自分に、君の――妻である者の大切な心持が判らない苦がないぢやあないか。それだのに、低能でもない僕に感じられないとすれば、氣の毒だが、君の方が根據が薄弱だ。」
さよは、心の幽を喰ひしばつた。彼女は、出來ることなら擲りつけて、良人を獨善的な、紳士的な、冷血な頑固さから突き出したかつた。彼は、さよの心が、どんなに苦しんで居るか思ひ遣らうともせず、卑俗な自分の頭の正確さに、寧ろ愉快を感じてさい居るではないか？　さよは、獸のやうに呻いた。ホツテントツトの女のやうに、良人に嚙みつき擲り合つて、しんまで事がさつぱりするのだつたら、如何那に晴ればれするだらう。腦髓の熱がほんの少し多いばかりで、さよは、自分の指一本動かせなかつた。彼女は、この苦しさが、擲り合ひで片づかないものであるのを知つて居た。又保夫は、打たれて打ち返す男ではなく、心に氷のやうな侮蔑を含んで眉毛も動かさないであらうことを知つて居た。彼女は、燃え顫へる激情を、たゞ熱い數滴の涙にだけ溶して、淑やかに教養ある日本女性の典型のやうに、二つの手を膝に重ねて居なければならないのだ。――彼女は、樣々に思ひ亂れた。「夫婦と云ふものは、何處でも此那味氣ないものなのだらうか。どうかして、體も心も安心して一つになつて仕舞ひたい、その判り切つた願さへ、默つて堪へて行かなければならないのか。」
さよは、すゝりあげながら、親子より親しい夫婦の中などと云ふ云ひならはしを、絕望を以て思ひ起した。

六

永い、張りつめた沈默が、森と明るい小部屋に充ちた。

さよが、時々微に短い身じろぎの音を立てる。──前後の寂寞は、戸外の闇とともに、愈々壓力ある深さを增すやうに思はれる。…………

軈て、保夫が身動きをした。そして、濡れて居るさよの顏を見なほした。

「──顏でも洗つておいで。」

さよは、保夫が、如何にももう峠は過ぎた、と云ふ風に云ひ出した調子に不快を覺えた。彼女は動かなかつた。

「……行つてちやんと顏でも洗つておいで。代なしぢやあないか。──」

それでも、彼女が返事もしなければ、立たうともしないのを見ると、保夫は、さよの急所を刺すやうに辛辣な調子で獨言した。

「餘程、今晩は調子が妙だな。…………」

彼は、煙草の烟を故意に長く、二ふきばかり電燈に向つてふきかけた。そして、曰くありげにじろじろとさよを視、質問した。

「あれは、いつかひ」

さよは、横を向いたまゝ、低い涙聲できゝ返した。

「なに？」

「君のあれさ——判るだらう」

さよは、首を廻して保夫を見た。彼の視線は心得顔に彼女に向つて注がれて居る。さよは、本能的に意味を覺つた。それと同時に、彼女は體中の血が、一時に逆流するやうな怖ろしい衝動を感じた。「何と云ふことだらう！彼は、自分の云ふ事を皆ヒステリックな發作だときめて居るのか。氣に入らないことは、皆病的とする男性の暴虐を、この良人まで持つて居るのか！」さよは、唇に鮮やかな血色を失つた。彼女は、努めて聲に力を入れ、眼球が強ばる程せき上げる激情をやつと切れ〲な言葉に表した。

「其那、生半可なフィジオロヂなんか……すて丶お仕舞ひなさい。其那下らない智識で、貴方、私の心全體、判斷出來るとお思ひなさる……何故眞心でいきなり、眞心でぶつかつて被來らない！卑怯です。——卑怯と云ふのは……さう云ふ」

さよは、言葉が喉に塞つて、熱病に患つたやうに體中を戰慄させた。

「貴方は……私が——自尊心を傷けられて默ると……思つて被居る。私の哀れな見榮や己惚れを——…利用しようと…思つて。」

彼女は、激しい悪寒と熱とが一緒くたに體や頭の中を貫いて奔流するやうに感じた。彼女は、兩手で確かり顔を押へた。そして、保夫の机の端に肱をついた。體は、疊から浮上つて氣味惡く高い庭へつり上つたかと思ふと、眩暈につれて、低い低い、底なしの暗闇に沈み込むようだ。——

彼女は、靜かに泣き出した。たま暖い涙は、掌を沌れ、手の甲を傳つて、ぽたり、ぽたりと机の上に大きな滲みを作る。彼女は、その涙の奥に、幾年か忘れて居た一つの光景を思ひ出した。

それは、彼女が生れて二十年育つた家の湯殿であつた。

四疊半ばかりの板敷きに疊表を置いた脱衣室の一方は、竹格子の窓になつて居る。下に、母の鏡台が置いてあつた。鏡には、鼠色の地に雨と落花と燕の古風な模様がついた被ひをかけてあつた。その前で、夜の二時頃、たゞならない氣勢でぴた／＼素足のまゝ起きて來たさよに、彼女の母が

「さよちやん、お父様と私と、何方が間違つて居るかよく聞いておくれ。私がどんな道理を云つても、お父様は、そら又歇私的里だと相手になさらない。……何故、女になんか生れて來たゞらう、どうせ一度しか生きもされない世の中だのに」

と泣いて訴へた有様であつた。

母はあの頃三十四五であつた。さよは、やつと十二三であつた。彼女は、途方にくれ、泣きむせぶ母の肩を自分の胸に抱きしめて

「泣かないのよ、お母様。泣かないのよ。ね、私お父様によく云つてあげるから…泣くのをやめて、よ！」

と、波打つ髮の毛に口をつけて囁いた自分の稚い姿をまざ／＼と覺えて居る。——

父に何を云はうと思つたのであらう？　今になつてさよは、母の切な涙を自分が流して居るのを知つた。そして、若し自分が少さい子供の母であつたら、その娘か息子かは、きつと、自分が感じたと全く同じ當惑、悲しさ、當のない義俠心に纖い指を震はせて、「云つてあげるから！ね、泣かないでよ。」と云ふだらう。然し彼等も、亦自分の通り、その涙を眼から流す時が來る迄父に向つて何を云ふべきかはちつとも理解しないのだ。……

彼女の精神は段々鎭つて、母と自分との間に過ぎた十數年が、女性の一生にどう云ふ意味を持つか、考へなほす丈の餘裕を持つて來た。

結婚する迄幾度か、さよは形こそ異へ、同樣の訴へを母からきかされた。その度毎に、彼女が母に與へた慰安の言葉も、考へて見れば、僅に語彙が年と共に幾分豐富になつたきりで、內容は、十二三の時と同じ「泣かないで、よ！」と云ふだけのものであつた。彼女は、自分が、實際母の苦痛を輕めるには、何の足しにもならなかつたのを回想した。ただ母にとつては、無意味に近い言葉を繰返す彼女が、自分の娘であると云ふところにだけ、確に、心からの當惑や氣の毒さを感じられて居ると云ふところに丈、彼女の言葉の價値はあつたのだ。

母は、殆ど一生、老ひて激しい情熱の失せる迄、解決されない苦勞を負ふて生きた。

彼女の滿されなかつた若々しい一心さ、理想的な生存を希ふ、哀切な人としての願望は、皆消極的な悲しみ、煩悶に精力を消耗されて鎭められた。それだのに——さよは、新たな駭きを以て考へた。——彼女の母は、彼程勇み立つて、女性の天國へは保夫が案內でもされるやうに、華やかに自分等二人を結婚させたではないか！

さよは、殆ど愚に近い矛盾を其處に認めた。が、猶考へて行くうちに、彼女は、母のいとしさに犇々と迫られた。母は、自身の一生で實現されなかつた更に澤山の夢、人の夢、女の夢を、自分にこそ味はせこの世に持たせようと、結婚もさせ、世に送り出しもしたのではなからうか。母の母が、明治の始め、長い紺房の垂れた挿頭花をかざした自分の娘に希ひ望んだ通りに。

宿題は、代々解かれ切れず、彼女に迄傳へられた。

さよは、自分が受けとつたまゝの白紙で、或は半端な數行で、力の足りなさを示したまゝで、次の娘の代に讓りたく

なかつた。何とか答を見つけ出し、祖母や母の感傷なしに

「私はこれを斯う解いた。――お前は何と思ふ？どう解きますか」

と云ひ得たかつた。

彼女は、自分の一生までが、祖先の女性達同樣、一つ涙、同じ苦情、生きたいだけ生き切れない思ひで過るかと思ふと、安心して良人と論判してさへ居られない心持になつた。

さよは、額を押へて居た手をどけた。そして、深い溜息をつき、額に亂れかゝつた後れ毛をかきあげた。

見ると、保夫は、机の一方の端に頬杖をつき、人さし指と中指との間にはさんだ煙草から、香もない煙を張り合ひなく立ち昇らせたまゝ、當もなく前方の庭の宵闇を凝視して居る。が、さよは、一目で、彼の注意は見かけによらず、怠りなく自分に向つて注がれて居るのを直覺した。彼は全態で「あゝ、すつかり不愉快にさせられた。仕事も何も出來はしない。お前の故だぞ。」と語つて居る。而も、その陰から、彼女が其を感じて氣の毒がり「わるかつたわ。―御免遊ばせ。」と媚さへすればすぐ許し更に優しい數言を添へて頬に一つの接吻を與へる心持のあることは、これもあり〳〵と示して居る。

さよは、一旦鎭つた感情が又擾れるのを感じた。彼女は、保夫が上手に見せびらかして居るものが、眞實欲しかつた。けれども、その欲しさに、うつかり負け、彼が暗に望んで居る通り、此迄云つた總てを「御免なさい」と云ふべきものと承認することは、彼女として堪らなかつた。彼女は、自分に當然との戰ひが起るのを知り乍ら、彼によつて目醒まされたばかりの新鮮な、感じ易い本能を先づ誘はうとする保夫の無慈悲さに、憎しみさへ感じた。

彼女の裡で、再び野蠻人があばれだした。さよは心の中で呻いた。「死んちまへ！死んちまへ！意地わる。貴方は何處迄私を苦しめるか。」…………

暗く瞳を燃して良人の横顔を見据えて居たさよは、不圖、彼が、何とも云へず陰鬱な陰を頬に浮べたのを見とがめた。彼女の神經に、きらりと或ものが閃いた。さよは、引つりとも薄笑ひともつかない歪みを口邊に漂はせ乍ら、のろく低聲で保夫に尋ねた。

「何を思つて被居るの。——同じこと？　私と同じこと？」

愕然としたやうに、保夫が眼を大きくして、さよの顔を視た。

「——馬鹿！」

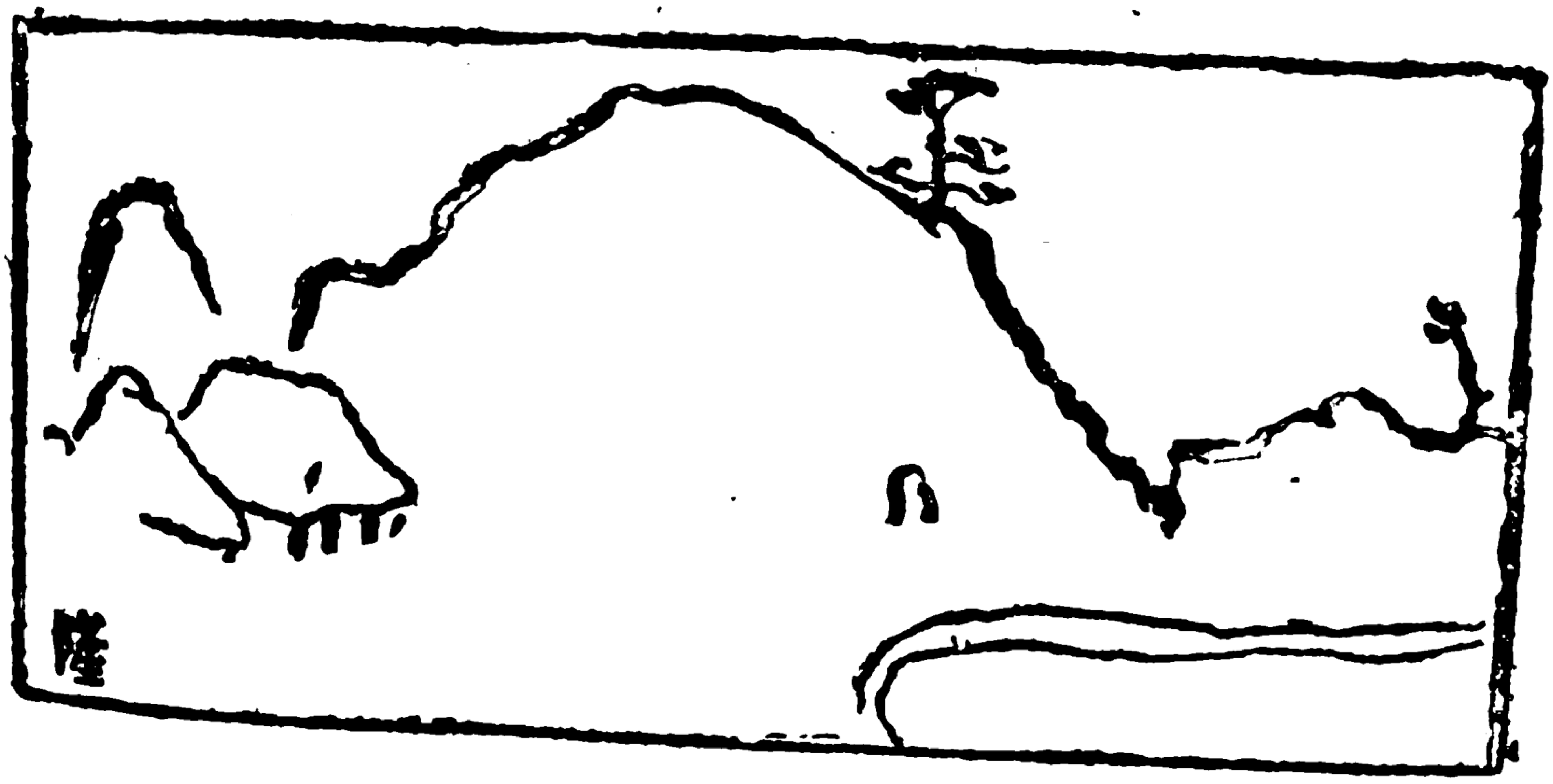
彼は四邊の靜寂な光を亂して、はげしく座布團の上に座りなほした。さよは、掌一杯冷汗を掻いた。彼女は、動悸が苦しく強く搏つて、口をつむんで居られないやうになつた。「彼も同じことを思つて居たのか。—さうでなくてどうしてあの意味深い馬鹿！が出よう。……自分達二人が一どきに、一緒に思へることは……互に—」

さよは、座に堪へなくなつた。彼女は立つて縁側に出た。外も暗い。心の中の通り暗い。彼女の前には、はびこつたねばりづよい薄闇に、こんもり幾重にも茂り合つた常盤木の樹立と、片よつて一本、細い電柱があつた。縁側に近い八つ手の滑らかな葉末が、部屋から溢れる赤みがゝつた光線で陰氣に一部分照されて居る。上に、電柱が、斜に空間を貫き、これも光の工合と見え、片側ばかり異樣に白つぽく氣味わるい生き物のやうに抽んでゝ居る。

さよは、ひやひやになつた指先で、幾度も無意識に自分の額を擦つた。「この夜の裡にばかりもう百年も棲んでゐるやうだ。」彼女は思つた。「この永い、重い、苦しい夜は本當に明日あけるのだらうか……」

さよは、清らかな明るい朝が、堪らず戀しくなつた。黎明の微風の爽やかさ、戰ぐ樹や草のあのよい薫り。段々明るくすき透り、森や家や道傍の石粒まで燦めかせて昇つて來る太陽の涼しいぱさぱさしたあつさ。—然し、さよは、それ等の晴やかな、歡びに滿ちた心の州あけを、何處か、もう二度と見出されない處へ、とり落して來たやうな、暗い暗い恐怖に捕へられた。

（終）



戯曲　# ある心の影

正宗白鳥

人物

神川大助

瀧村良一

妻かね子

辰江

駒子

一

小山の途中で稍々平坦なところ。切崩された空所に石地藏が安置されてゐる。端の方にベンチが設かれてゐる。若葉や若草に色取られて、初夏の爽かな氣持が漂つてゐる。

神川大助（三十歳くらゐ。麥藁帽子、サックコート、ネクタイ、靴、ステッキなど、すべて瀟洒たる扮裝。頭髮もキザに目立つほどに新しい好みで、顏らクリームでも塗つたやうに艶々してゐる）帽子を取つて額の汗を拭つて、山を見上げて、「オーイ」と、大聲で呼ぶ。大儀さうに山の方へ行きかける。が、いやになつたらしく躊躇して、やがてベンチに腰を卸す。うしろ向きである。

駒井辰江（二十五六歳。容色の冴えない女。身裝も質素である）足の疲れたるさまにて入場。

辰江　アゝ、苦しかつた（神川の側へ寄つて）かねちやんはゐませんの？（あたりを見廻す）
神川　僕が傍道をしてゐる間に、夫婦で上へ登つて行きましたよ。どうです？一しよに行つて見ませうか。頂上は眺めがいゝんですよ。
辰江　わたし幾度も登つたことがあつてよく知つてますわ。別段珍らしくはないし、足も疲れてゐるから、今日は止しませう。それに夫婦連れで行つてるところへ、わたしだちが行つちや邪魔になつていけないでせうから。
神川　へゝゝゝ。新婚の夫婦ぢやあるまいし、われ〳〵を邪魔にしちやゐないでせう。
辰江　でも、昨夕から二人で内所話をしたさうな風だつたのですよ。あなたには氣がつかないでせうけれど、わたしはちやんと察してゐました。
神川　だつて内所話なら、東京へ歸つてからいくらでも出來るぢやありませんか。
辰江　それが、急に起つたことで明日まで待つてゐられないかも知れませんわ。全體あなたが察しがなくつて、一しよに隨いていらしつたのがいけないんですよ。
神川　さうかなあ、しかし何を察しるんでせう。瀧村夫婦は平々凡々の夫婦で、別段にわれ〳〵の注意を惹くやうなことはないぢやありませんか。妻君は柔順で、御亭主は堅人だし。……辰江さんは瀧村のやうな平和な家庭を持ちたいとは思ひませんか。
辰江　人のことよりも、あなた御自身で、早くその平和な家庭とかをお持ちになつたらよろしいぢやありませんか（さういふ話をきらつてゐるやうな態度を現はす。そして、わざと石地藏の方を見て）お地藏樣はいゝものですね。あんな穩かな氣持になつてゐたらいゝでせうね

紳川　あなたは、石地藏見たいな氣持になつてるのかと思つてたら、さうぢやないんですか。
辰江　まあひどい。わたしがそんなに冷淡な人間に見えますの？（不平らしく云ふ）
紳川はベンチから離れて、石地藏の方へ寄つて行く。
紳川　あなたは冷淡どころぢやない、熱情があり過ぎるくらゐでさ（極めて輕く云ひながら、石地藏を見詰めて）木や石で造つた佛樣でも、よく見てゐると、有難味があるから不思議ですね。どうです？。二人で藤田さんの病氣平癒の願を掛けちや。
辰江　あなたでも佛樣を拜む氣におなんなすつて？不思議ねえ。……でも、藤田の伯父さんは、今度こそ、お醫者の力でもお金の力でも、佛樣の力でも、病氣がよくなりさうぢやありませんね。
紳川　此處へ來て病氣に罹つたのが、よく〳〵運が惡かつたんですね。東京にゐたら、もつと充分な手當てが出來たでせうのに。
辰江　伯父さんはまだ後の事なんぞちつとも考へてゐなかつたらしいから困るんですよ。自分ではまだ生命が危いとは思つてやしないでせうから、遺言もしてゐないらしいんです。わたしなぞ、名目だけの姪で緣は薄いんだし、年齡も若いんですから、差出た口は利けないんですけど、濃い身内の人があれだけ寄つてゝ、なぜ伯父さんに遺言をさせないんでせう。男の子はみんな小さいんだし、駒子さんがあとで家の處置に困りやしないでせうか。後見人になりさうな人には油斷が出來ない人があるんですからね。
紳川　だつて、死にかけた人に遺言をしろなんて云へないでせう。駒子さんは、お母さんに死なれてから、一人で家を治めて來たくらゐなんだから、若くつても傍の人に搔亂されやしないでせう。

辰江　あなたはさう思つて安心してゐらつしやるの？（皮肉な笑ひを洩らして）
神川（ドギマギして）何がです？
辰江　白ばくれてゐらしつても駄目よ。わたしにはちやんと分つてるんですから。
神川　何がです？
辰江　何が〳〵つて滑稽ね。あなたにも似はない。駒子さんはあたたよりもよつぽど正直ですよ。わたしにはよく打明けてゐるんですわ。……ですから、わたし伯父さんの大病のことを聞くと、伯父さんのことよりも、駒子さんがお父さんのお丈夫なうちに、きつぱり事を極めて置きなされぱよかつたと、第一番にさう思つたのです。
神川　辰江さんは獨り合點でいろ〳〵なことを云ふから溜らないな。駒子さんのお婿さんになつて、藤田家の遺産がうんと貰へるやうな男は果報者だが、僕なぞは夢にでもそんないゝ運には出くはせないんだから、憐れんで下さいよ。
（やゝキザな口調で云ふ）
辰江　なぜそんなに卑下なさるの？。わたしなぞが第三者として、平氣に考へても、駒子さんはあなたと縁組をなさるほど仕合せなことありませんわ。藤田家の緣續きで、駒子さんをねらつてる人のあることはあなたも御存じでせう。でもあんな人は趣味は低いし、考へ方が古くつて無理解な人なんですからね。あなたなら、本當に理解のある愛情を注いで、駒子さんを一生幸福にして上げることが出來るんですわ。それに駒子さんは利口だから、御自分の一生を任せる人の撰擇をあやまりやしませんよ。わたしあの人のお腹の中の考へは不斷よく聞いて知つてゐますわ。
神川（熱心になつて）駒子さんは腹の中でどんなことを考へてゐるんでせうね。
辰江　あなたはそれをよく御存じのくせに。……でもね、神川さん。（あたりを憚るやうな態度で）今が大事な場合な

紳川　あなたは、石地藏見たいな氣持になつてゐのかと思つてたら、さうぢやないんですか。

辰江　まあひどい。わたしがそんなに冷淡な人間に見えますの？（不平らしく云ふ）

紳川はベンチから離れて、石地藏の方へ寄つて行く。

紳川　あなたは冷淡どころぢやない、熱情があり過ぎるくらゐでさ（極めて輕く云ひながら、石地藏を見詰めて）木や石で造つた佛樣でも、よく見てゐると、有難味があるから不思議ですね。どうです？。二人で藤田さんの病氣平癒の願を掛けちや。

辰江　あなたでも佛樣を拜む氣におなんなすつて？不思議ねえ。……でも、藤田の伯父さんは、今度こそ、お醫者の力でもお金の力でも、佛樣の力でも、病氣がよくなりさうぢやありませんね。

紳川　此處へ來て病氣に罹つたのが、よく〳〵運が惡かつたんですね。東京にゐたら、もつと充分な手當てが出來たでせうのに。

辰江　伯父さんはまだ後の事なんぞちつとも考へてゐなかつたらしいから困るんですよ。自分ではまだ生命が危いとは思つてやしないでせうから、遺言もしてゐないらしいんです。わたしなぞ、名目だけの姪で緣は薄いんだし、年齡も若いんですから、差出た口は利けないんですけど、濃い身内の人があれだけ寄つてゝ、なぜ伯父さんに遺言をさせないんでせう。男の子はみんな小さいんだし、駒子さんがあとで家の處置に困りやしないでせうか。後見人になりさうな人には油斷が出來ない人があるんですからね。

紳川　だつて、死にかけた人に遺言をしろなんて云へないでせう。駒子さんは、お母さんに死なれてから、一人で家を治めて來たくらゐなんだから、若くつても傍の人に掻亂されやしないでせう。

辰江　あなたはさう思つて安心してゐらつしやるの？（皮肉な笑ひを洩らして）
神川（ドギマギして）何がです？
辰江　白ばくれてゐらしつても駄目よ。わたしにはちやんと分つてるんですから。
神川　何がです？
辰江　何が〳〵つて滑稽ね。あなたにも似はない。駒子さんはあなたよりもよつぽど正直ですよ。わたしにはよく打明けてゐるんですわ。……ですから、わたし伯父さんの大病のことを聞くと、伯父さんのことよりも、駒子さんがお父さんのお丈夫なうちに、きつぱり事を極めて置きなされぱよかつたと、第一番にさう思つたのです。
神川　辰江さんは獨り合點でいろ〳〵なことを云ふから溜らないな。駒子さんのお婿さんになつて、藤田家の遺産がうんと貰へるやうな男は果報者だが、僕なぞは夢にでもそんないゝ運には出くはせないんだから、憐れんで下さいよ。
（やゝキザな口調で云ふ）
辰江　なぜそんなに卑下なさるの？。わたしなぞが第三者として、平氣に考へても、駒子さんはあなたと縁組をなさるほど仕合せなことはありませんわ。藤田家の縁續きで、駒子さんをねらつてる人のあることはあなたも御存じでせう。でもあんな人は趣味は低いし、考へ方が古くつて無理解な人なんですからね。あなたなら、本當に理解のある愛情を注いで、駒子さんを一生幸福にして上げることが出來るんですわ。それに駒子さんは利口だから、御自分の一生を任せる人の撰擇をあやまりやしませんよ。わたしあの人のお腹の中の考へは不斷よく聞いて知つてゐますわ。
神川（熱心になつて）駒子さんは腹の中でどんなことを考へてゐるんでせうね。
辰江　あなたはそれをよく御存じのくせに。……でもね、神川さん。（あたりを憚るやうな態度で）今が大事な場合な

んですよ。伯父さんが亡くなつたら、傍の人が何を企むか分らないんですからね。わたし、昨夕もいろ〳〵勘付いたことがありますのよ。全體伯父さんが駒子さんを側から離したくなかつたゝめに、方々から云つて來る緣談も斷つたのですけれど、伯父さんが亡くなつたら、後見人が辰江さんを氣儘にさせて打やつときしませんわ。無理やりに、壓制的にでも、緣付かせるでせうから油斷がなりませんよ。それで駒子さんがいくら氣象がしつかりしてゐても、兩親に死別れたあとでは、心が迷つて、傍の者の口車に乘せられないとも限りませんからね。あなたのためにも駒子さんのためにも、今が大切な時なんですよ。

神川　僕がどうかうつてことは、戲談見たいなものだけれど、藤田さんの、病氣がもう一度回復するといゝんですがな。

辰江　今さらそんな奇蹟を望んだつて駄目ですよ。………あなたが駒子さんを何とも思つてゐらつしやらないのなら、わたしがこんなことをお話するのは無駄なことなんですけど、若しもあの人に愛情を持つてゐらつしやるのなら、藤田家の今の境遇に注意してゐて下さいね。あんなに大勢來てゐても、藤田家のためや駒子さんのためを本當に思つてる人は、身內のうちには一人もないんですから、わたし、他人のあなたにでも力になつて頂いて、藤田家と駒子さんの邪魔物を排斥したいと思つてゐるんです。わたしが男だつたら、駒子さんのために矢面に立つて、冒險をするのもいとはないんですけど………

神川　僕も冒險的のことはやつて見たいんですがね。藤田さんにはお世話にもなつたし、相當な信用はされてるらしいんですが、御親類の方の目にや僕なぞは靑二才で取合つて貰へないんですから駄目ですね。

辰江　みんな頭が古くつて、あなたのやうな新しい考へを持つてゐらつしやる方を充分に認めることが出來ませんのね。でも、そんなことを氣にしてゐちやいけないと思ひますわ。……駒子さんもさう云つてゐましたよ。神川さんは上

べは柔しくつても、いざとなつたら、どんな冒險的な事でもしさうな方だつて。……必要な場合には思切つた事の出來るやうなんでなくつちや、男としての本當の價値はないんですわね。

神川　そりやさうでせう。社會のためにでも人のためにでも、生命を棄てゝかゝるのは男子として愉快なのに違ひない。

辰江　わたし、冒險的な人大好き。亂暴で粗野な人はきらひですけれど。……駒子さんもさう云つてゐましたよ。

神川　ぢや、僕も一つ北極探險でもやつて、あなた方に喝采して貰ひませうかな（戯談らしく云ふ）

辰江　北極探險も星の世界の探險も面白いでせうけれど、それよりも、手近かに、あなたのためにもつと張合ひのある探險があるぢやありませんか。（思はせぶりの態度で云つて、山上の方を見上げて）かねちやん達は何を話してゐるんでせう。あなたはお察しがつかないの？。あなたは本當に、瀧村夫婦を平凡な穏かな家庭の人のやうに思つてゐらつしやるんですか。

神川　だつてさうぢやありませんか。

辰江　心からさう思つてゐらつしやるのなら、あなたは本當に善良な方ね。わたし敬服しますわ。……變な譬へですけれど、後から刃物を持つてねらつてる人があつても、氣がつかないやうな方ね、あなたは。

神川（目を欹（そばだ）てゝ）僕を傷つけようつて人が何處かにゐるんですか。脅かしちやいけませんよ。……まさか瀧村君が僕に敵意をもつてゐやしないでせう。

辰江　善良な人には、他人の心がみんな自分と同じやうに善良に見えますのね。わたしなぞ性質が惡人に生れついてるせいですか、他人のお腹の中の黑いところや白いところが目についていけませんのよ。……かねちやんも柔順で、わたしとは小さい時分からの仲よしなんですから、あの人の事、決して惡く思つてやしないんですけど、人間には慾が

あるから、いけませんのね。瀧村さんは學才はあつても、お金には不自由してゐるんでせう。それでかねちやんの緣で、伯父さんから多少の補助はして貰ひたがつたことは、あなたも御存知なのでせう。それだけなら、誰れしも考へさうなことなんだからいゝんですけれど、御自身の利益のために、駒子さんをある人に結びつけようと企んでるのが、わたしにはよく分つてるから、淺間しく思はれてなりませんの。一しよに汽車に乘つて同じ宿に泊つて打解けた話をしてゐながら、あの人達はお腹の中では何を考へてるか分らないんです。……でも、わたしがこんな餘計なお喋舌をして、あなたと御親友の仲に氣まづい思ひをさせては相濟みませんわね。

神川　いや、僕にも多少思當ることがあるんです（眞面目になつて）……しかし、銳吉君は立派な人物だから、瀧川君はじめ、藤田家の身內の方が、駒子さんのお婿さんに撰ぶのは當然なんでせう。

辰江　ぢや、あなたまでも、それを良緣だと思つてゐらつしやるの。あんな神經の鈍な無理解な男を、駒子さんのやうないゝ方におつゝけるつていふ法はないと、憤慨してるのは世の中にわたし一人なんでせうか知ら。玉のやうな駒子さんが間違つた結婚をして汚されるのを氣に病んでるのはわたし一人なんでせうか知ら。

神川　だつて爲方がないぢやありませんか。

辰江　あなたは成行に任せて默つて見てゐらつしやるおつもり？。

神川考へ込む。辰江、聞耳を立てゝ慌ただしく、

辰江　かねちやんが下りて來ますよ。……今わたしの云つたことはお氣に留めないやうにね。

神川　僕は瀧村君に惡意を持つてやしませんよ。

辰江　近いうちにゆつくりお話しますわ。（意味ありげに云ふ）、

辰江は山上の方へ行きかけて、舞臺から姿を消す。神川は不安な態度をしてあちらこちらを歩く。間もなく、瀧村良一（三十歳くらゐ、地味な服裝、兵子帶を締めて、麻裏を穿いてゐる）妻かね子（二十四五歳。辰江よりも容貌體格が派手で生々してゐる。服裝も目につくやうに派手である）辰江と一しよに入つて來る。夫婦ともだるさうな足取りをしてゐる。

辰江　わたし、此處で一休みして動氣を鎭めてから、上まで上らうと思つてゐたのよ。

かね子　此處をもう一息登つたら、伯父さんの別莊がよく見えたのよ。でも、山登りなんて詰らないわね、疲れるばかしだから。

瀧村　神川君が寫眞機でも持つて來てゐればよかつたのだね。此處で四人揃つたところを寫しとけば記念になつてよかつたのだが。

神川　しかし、今度は寫眞機なんぞ提げて來るやうな悠長な氣持にはなれないからね。

瀧村　さう云へばさうだが（神川の顏に注意して）君はどうしたのかい。何だか心配事でもありさうな顏してゐるぢやないか。

神川　藤田さんの病氣を心配してる外に、心配事と云つて別段ありやしないよ。

瀧村　さうかい（輕く云つて）伯父の急病にはお互に驚かされた譯だが、來て樣子を見ると、お互にもう諦めるより外爲方がないね。

かね子　病人の話は止しませうよ。氣がくさつていけないから。

かね子、瀧村、辰江の三人はベンチに腰を掛ける。神川だけは立つてゐる。

辰江　病人を見舞に來て、こんな所へ遊びに來てゐちやいけないわね。いつどういふ知らせが來るかも知れないから、わたし一人は宿にお留守居してゐやうと思つたのだけれど、みんなが遊びに出るものを、一人だけぢつとしてゐちや、自分が除け者にされたやうに思はれていやになつたの。

かね子　わたしは心配して急いで來たくらいだから、徹夜して看病して上げたいんですけど、大勢看護人が揃つてるところへ、わたしなんぞが入つて行つちや、却つて邪魔になるだらうと思つて遠慮してゐるんだわ。

瀧村　看護人が大勢ゐるからいゝが、お互ひに徹夜の看病なんかさせられちや溜らないからね。

かね子　あなたはさうでせうけど、わたしなぞは看病は自分の方から望んでもして上げたいと思つてますわ。辰江さんだつてさうでせう。

辰江　さうですとも。どうかして伯父さんの壽命をせめてもう半歳でも延して上げたいと、さつきも神川さんと話してゐたところなのよ。お醫者の力でどうにもならないのなら、みんなで神樣にでも佛樣にでも願を掛けたらどうだらうつて、さつき神川さんと相談してゐたのよ。

瀧村　神川君は本氣でそんなことを云つたかい（辰江を指差して）この人はね、迷信家で、ある人をのろひ殺さうと思つたことがあるんだつて。神樣の力で呪ひ殺さうとした人が、神樣の力で人の病氣を癒さうと云ふんだから妙だね。

神川　それははじめて聞いたが、辰江さんがのろつた人は誰れなんです？

辰江　馬鹿なことを云つてゐらしやるのね（かね子をぬすみ見しながら神川に向つて）瀧村さんは無神論者なんですよ。それで、人間の靈魂はこの世限りのものだから死んだ者のお墓へ參つたり追悼會をしたりするのは無意味のことだと思つてゐるんですよ。そんな現實主義のくせに、道德堅固で、人間の勤めは一分一厘も間違はないやうに勤めて

ゐらしつやるんだから、そこは感心なのね。

瀧村　神川君だつて、無信仰の點では僕に劣りやしないさ。辰江さんだつてあんまり神信心をする方でもなささうだし……さう云へば、藤田の伯父も隨分無信心なんだつたが、あゝいふ大病に罹つたら、どんな氣持になつてるか知ら。僕はあんなに一生金の事ばかり考へてゐた人の死際の氣持を、當人に訊ねたかつたのだが、枕許へ寄つて病人に訊ねる譯には行かなかつたのでね。

かね子　さあ、もう歸りませう。藤田から呼びに來た時に誰れも宿にゐないやうぢやいけないから。

瀧村　ぢや、お前と辰江さんとだけで先へ歸るといゝ。おれは神川君ともつと遊んで行くことにしよう。

かね子　ぢや、さうしませう。……辰江さん、二人でボツ〳〵歸りませうね。

かね子立上る。辰江躊躇する。

辰江　瀧村さんの無神論の御講釋でも久振りに聞いて、もう少し此處で休んで、みんなで一しよに歸ることにしちやどう？

かね子　六ケ敷い理窟なんか聞いたつて詰らないぢやないの？

瀧村　辰江さんは、いつまでも僕を理窟屋だと思つてるんだから可笑しい。無神論の理窟を捏ねてあなたなんかに傾聽させてたのは五年も七年も前のことぢやないかな。あなたが人を呪ひ殺さうとした時分のことなんだ。

辰江　神川さん。わたしが呪ひ殺さうとした人は本當は瀧村さんなんですよ（わざと冗談らしく云ふ）

瀧村　本當にさうなんだから驚くだらう（わざとらしい嚴肅な顏して）その時僕が無神論者で靈魂否定主義者だつたらこそ、平氣で神經をも病まなかつたのだが、さうでなかつたら、辰江さんの呪ひに罹つて、死なないまでも病氣くら

ゐしたに違ひないんだ。

神川（今まで沈んでゐたが、この話にふと興味を起して）辰江さんは何のために君を呪はうとしたんだね。君はどの點からも、人に呪はれさうな男ぢやないが。

かね子　何だか詰らないお話ね。辰江さんは先きへ歸るのはおいや？

辰江　歸るのはいゝけど、わたしのことが今問題になつてるんだから、ちよつと此處が離れられないわ。

かね子　ぢや、わたし一人で行つちやうわ。（かね子は行きかけたが、辰江が隨いて行かないので、道の一端に立留つて、他の人には關係しないやうな態度で、あたりの景色を眺めてゐる。）

瀧村　それは何でもない理由なのさ。ある年の花時に、市川か小金井かへ四五人連れて遊びに行く約束をして辰江さんもその仲間の一人で、朝早くからお扮飾をして辨當もこしらへて待つてゐたのに、その日になつて、僕がうつかりして辰江さんの家へだけ誘ひに寄らなかつたのだ。恨まれた原因は、たしかそれだけなのだが、女に恨まれるのは恐ろしいものだね。

辰江（緊張してゐた顏を稍々弛めて安心したやうに）だつて、何日も前から樂みにしてゐて、前の晩には夜中眠らないで待つてゐたものを、スッポカされたんですもの。呪ひ殺しても足りないほど憎くなるのはあたり前ぢやありませんか（甘へたやうに云ふ）

神川　しかし、男もそのくらゐなことで呪はれちやたまらないね。

辰江　神川さんにも隨分そんな經驗がありさうですわね。用心してゐらつしやいな。

神川　なに、僕なぞは氣が小さいから、約束したことは、ちやんと守りますよ。

辰江　ぢや、さつき此處でわたしに約束なすつたことも確かに實行なさるでせうね。
神川　（訝しさうに）あなたに何を約束したのでせう？
辰江　あら、もうお忘れになつたの？ひどいわねえ。男つてなぜさう忘れつぽいんでせう。
瀧村　ぢや、神川君が呪はれるんだね。お地藏樣のやうな顏してゐても、腹の中は夜叉なんだからね
辰江　（稍々氣色ばんで）それは誰れのことを云つてゐらつしやるの？
瀧村　一般的の事なんです。すべての女をさうだと云つたら、あなたもそのうちの一人になるでせうけれど。
辰江　ぢやかねちやんもそのうちの一人なのね。あなたの奧樣も夜叉組の一人なのね。
瀧村微笑してうなづく。神川何の氣なしに笑ふ。
辰江　かねちやん。あなたも夜叉ですつて？よくつて、
かね子（振返つて）いゝわ。……わたし一人でも歸つてよ。
辰江　ぢや、わたしも歸りますわ。
座を立つて、二人で出て行く。
瀧村　宿へ歸つたつて退屈だし、歩くと暑くなつていやだし。も少し此處で休んで行かうか。
神川　あゝ。
瀧村　君はさつきから馬鹿に元氣がないね。辰江さんに何の約束をしたのだい。
神川　何も約束なんかしないよ。
瀧村　さうか（少し默つてゐて、やがて眞面目に）これで、伯父が危篤のまゝで、どちらとも極りがつかないやうだと、

僕は歸るにも歸られず、困るんだよ。

神川　僕だつて、藤田さんの病氣をよく見屆けてからでなくちや歸らないつもりだ。

瀧村　君はさうまで、伯父の生死に身を入れる義務はないだらう。

神川　いや、義務はなくつても、僕の人情からさう思つてるんだ。僕は藤川さんには非常にお世話になつてるんだから。

瀧村　さうかなあ。僕はお見舞の義務だけ果したら、さつさと歸りたいんだが、……伯父と云つてもワイフの緣を引いてゐるだけだから人情が起らないのかも知れないが、業慾な老人が一人死ぬるのを、大變な事件のやうに、みんなが騷いでるのが、僕には馬鹿々々しくつてならないよ。何とかの注射だの何とかの藥だのと、醫者が鹿爪らしくやつてるのも無駄なことなんだからね。あしこへ見舞に行つてると、高い聲は出せないし、足音にも氣をつけなければならないから窮屈で爲様がない。しかし、そんなことを云はうものなら、ワイフはじめ親戚の奴に叱られるから默つてるんだが、君は僕に同感だらう。

神川　しかし、獨力であれだけの資産をつくつた人が、不斷は丈夫だつたのに、突然の病氣で死ぬるのは氣の毒だからね。遺族に對しても同情が起るのは當然ぢやないか。いくら資産があつても壽命を買ふことが出來ないのだから、人間は墓ないものだね。

瀧村　人間の墓ないことは、知人の死んだ時にはお互ひに感じてゐるが、あの病床に寄つて來てる者は、「墓なさ」と「おいたはしさ」を感じる外に、遺産のことを考へてゐますね。それから駒ちやんのことも考へてゐるね。

神川（心の動搖を相手に見せまいとしながら）それは無論さうだらう。後をうまく處理しなければならない義務もある

だらうからね。君だつて考へてるだらう。

瀧村　多少は考へてるが、僕は實業や金の處分については極めて不得手なんでね。僕の云ふことなぞは藤田家の連中には用ひられるはすまいよ。しかし、駒ちやんの身の上については、用ひられるか、用ひられないかに關はらないで、僕に多少の考へがあるんだ。

神川　それはどういふ考へなんだ（何氣ない風で訊く）

瀧村　君には隱す必要はあるまいがね。……駒ちやんを鋭吉君が非常に望んでゐて、伯父に承諾させようとしてゐたのを、伯父はなかなかうんと云はなかつたのだが、死んだあとでは、それが鋭吉君の幸ひで、案外望みが達せられるかも知れないんだ。あの娘には傍の者の勸めを斥けて自分で夫を撰ぶつてことは出來さうぢやないからね。……しかし、僕はどうも駒ちやんを鋭吉君に嫁はせるのがいやなんでね。ワイフはあの二人の結婚をいゝことにしてるんだから、僕も上べは同意してゐるんだが、腹の中ではたまらなくいやなんだ。

神川（胸の鼓動を壓鎭めて）なぜいやなのだ？。鋭吉さんは駒子さんのお婿さんになる價値がないと云ふのかね。

瀧村　そんなことはどうでもいゝんだがね。……あの娘は最初僕との間に緣談があつたのを、僕の家が貧乏なために、伯父に嫌はれて成立たなかつたのだ。この事は今はじめて君に打明けるんだが、辰江さんだけは知つてる筈なのだ。その當座はどうでもいゝと思つて、執念深く拘はる氣はなしに、今の妻と無雜作な結婚をしたのだが、自分ながら不思議なものだ。僕のあの時の緣談に邪魔をした伯父が急に死んで邪魔が無くなるのかと思ふと、未練くさい氣持が腹の中に湧いて來るのだから不思議だ。……もう二三年結婚を延しとけばよかつたと、昨夕伯父の病床を覗いた時から考へられてならないよ。……君は馬鹿だと思つて笑ふだらうが、人間にはさういふ氣持があるんだから爲方がないね。

神川　しかし、君は今平和な幸福な家庭を持つてゐるんだからいゝぢやないか。

瀧村　それは、今までは幸福でなくつても、不幸でもなかつた。自分の結婚を不幸だと思つたこともなかつたが、今日になつて、しまつたことをしたと思はれてならないんだ。こんなことを誰れに話したつて眞面目に聞いて吳れるものはないから、君にでも話していくらか鬱憤を晴らさうとする譯なのさ。

神川　馬鹿にしてらあ（苦笑して）

瀧村　馬鹿げたことさ。しかし、僕自身が腹の中でさう感じてるんだから爲方がないさ。この結果はどうなるかな。第三者として君にも豫想は出來まいね。

神川　さあ、神樣でなくつちや分らないつて云ふ譯だね。……僕も今日は、辰江さんと君とから變なことを聞かされたよ。僕はお地藏樣ぢやないから、變なことを聞かされて無感覺ぢやゐられないよ。

瀧村　辰江さんから變なことを聞かされたつて。さつき、僕が上へ上つてた間にか。

神川　あゝ……それは君には秘密だ。

瀧村　まさか、あの人が君を何とか思つてるのぢやあるまいしな。

神川　兎に角、山を下りよう。

　神川は相手に關はず歩きだして、「おい行かないのか」と、振返つて促してから姿を消す。

　瀧村はベンチの上へノビ〳〵と仰向けに寢ころぶ。ふと、下の方を見おろして、また寢ころぶ。

　辰江が入つて來る。忍び足で瀧村の側へ寄つて行く。ふと、それに目をつけた瀧村は愕然として起上る。我知らず警戒するやうな態度をする。

辰江　そんなに驚かなくつてもよ御座んすよ。化物があなたの前へ姿を現はしたのぢやないでせう。（皮肉に云ふ。顔付はさつきよりも險しい）

瀧村　いや、僕には辰江さんの姿を借りた化物がそこへ來たやうで氣味が惡いね。あなたはどうして一人で戻つて來たんです？。

辰江　ベンチの側へ忘れ物をしたと云つて一人で後戻りをしたのです。

瀧村（あたりを見廻して）そんなものはないぢやないか。

辰江　わたしの忘れ物は品物ぢやないのよ。……あなたに一言云ひ忘れたことがあるんです。

瀧村　あゝ呪ひの一件なのか（微笑して輕く云ふ）つい口が辷つて濟まないことをしましたね。しかし、神川なぞにや氣がつきやしませんよ。

辰江　あなたは已惚れが強いから、わたしが今でもあの時分のことを根に持つてゐると思つてゐらつしやるのね。わたし、今はあの頃の辰江ぢやありませんよ。自慢ぢやないけれど、今のわたしのお腹の中はそりや奇麗なものよ。第一、いやな思ひを心に持つてゐれば、あなた達と一しよに病人の見舞に來たり、同じ宿に泊つたりなんか出來ない譯ぢやありませんか。

瀧村（少ししをれて）已惚れが強いと云はれゝば一言もないね。實のところ、僕はあなたに對しては、いつも煙つたい思ひをしてゐるんで、つい照れ隱しに、あんな毒口を利いたりするんですよ。……此處で正直にあなたに云つちまつてもいゝが、僕はこの頃は結婚をつくづく後悔してゐる。理由もないのに離縁は出來ないから、悶々で日を暮してゐるんだが、本當なら獨身でゐられればよかつたのですね。

辰江（感傷的）今あなたがそんなことを仰有つても、わたしには何の足しにもなりやしないわ。かねちやんは可愛がつてお上げなさいね。昨夕からわたし勘づいてゐたんですよ。あなたがかねちやんに對して結婚當時のやうな情愛を持つてゐないことを。………それでわたしも恐ろしくなつたの？。

瀧村　あなたは、あの時の決心を續けて、いつまでも獨身を守つてるだけあつて恐ろしいね。探偵以上に、神のやうに僕の腹の中を覗いて見るから怖いよ。僕は神を信じないかはりに、辰江さんだけは生きてる神のやうに思はれて、あなたが生きてる間は、枕を高うして眠られないやうに思はれてならないんだ（面相が變つて、語調も人間離れがしたように）

辰江　世間の人はみんなお人よしのせいだか、片つぽの目が死んでるせいだか、あなたの本性を知らないんだから可笑くつてならない。あなたを世事に疎い生物學の研究者で、それも古い〳〵大昔の生物をコツ〳〵研究して新しい發見をしようとしてる人のやうに思つてるんだから、わたし可笑しくてならないの？。本當のあなたがこれまでにした罪惡や陰謀の片つはしでも知つてるのは、わたしばかりなんでせうから（惡魔的の笑ひを浮べて云ふ。面相も女性の柔しさをすべて失つたやうになる）二三年あなたの側にゐるかねちやんでさへ、本當のあなたをちつとも知らないんですもの。

瀧村　僕に陰謀があるんだつて？。うそを云つちやいけないよ。陰謀はあなたの方かも知れないね。あの時僕と駒ちやんとの緣談を伯父が承知しなかつた一つの原因は、あなたの忠告のせいだつたかも知れないんだからね。しかし、僕は毛頭それを恨んでやしないんですよ。駒ちやんをあの時それほどに思つてやしなかつたんだから。

辰江　それはあなたの邪推です。その證據にはかねちやんとの結婚にわたしは針の先ほどの妨害をもしなかつたぢやあ

りませんか。……あなたは、研究室に身體を置いてゐても、あなたの魂は、そこの窓から飛出して、他人の幸福の妨害をするために、方々を見て廻つてるんだわ。伯父さんの急病だつてあなたの所爲かも知れないの?。

瀧村　さういふ力が僕の身體に備はつてゐればね。………僕は何年もさういふ力を望んでゐたのだけれど、サツパリ駄目ですよ。昔の生物が有つてゐなかつた智慧や力は僕にもなさゝうだ。……しかし、女のあなたにはさういふ力があるのかも知れないな。だから僕は怖いよ。僕の運命の糸はあなたの手に握られてゐるのかも知れない。

辰江（醜い泣顔をして）だつて、あなたはわたしの一生を臺なしにしたのぢやありませんか。わたしが弱くつて、世間の女のやうに表立つた復讐の出來ないのをいゝことにして。

瀧村　あんなことくらゐで臺なしになるもならんもないぢやないかね。あなたにも似合はない。二人の事は世間に知れてゐやしないんだから、なぜ早く結婚をしないんです。神川にでも求婚したらどうです?。僕等が仲介人になつてもいゝね。

辰江　馬鹿仰有い。……わたしは、男といふ者を信じちやならないことをあなたに教はつてるんぢやありませんか。

瀧村　信じなければ結婚が出來ないつてことはあるまい。男と女と一しよになるのに信じる信じないが問題になるのは、僕には昔から分らない理窟だ。……それに、神川は詩人や小説家のやうに愛とか戀とかをしよつちう考へてる男らしいから、丁度あなたのお相手にはいゝでせう。

辰江　あなたには分らないの?。神川さんは駒子さんを熱心に慕つてるんぢやありませんか。わたし此間から勘付いてるの?。見舞に來たのもそうした心があるためぢやないの。

瀧村　神川が駒ちやんに惚れてるんだつて?。さうとは知らなかつた。アゝ、おれは馬鹿だく。

辰江　どうしたの?。駒子さんを鋭吉さんに押つけようと、あなたが企んでゐたのを後悔したんですか。

瀧村　なあに、さうでもない。

「オーイ」と、下から神川の呼ぶ聲が聞える。

瀧村　さつき嬶あを連れて山を歩いてた時に、神川の奴、あんな聲で頻りに僕を呼んでやがつたが、嬶あは、聞えない振りして、二人でもつと遊んで行きませうと云つてゐたよ。あなたはさう云はないかね。

辰江　かねちやんとはちがつて、わたしが此處にゐたつて柔しい話が聞かれるのぢやないし、下へ下りませう。……下界へ下りて、みんなの中へ行くまでに、たゞ一言云つて置きますわ。忘れないやうに覺えてゐらつしやい。わたしはあなたを呪ひしもしないし、あなたに祟らうとも思つてゐないから、それは安心してゐていゝのよ。だけど、あなたのすることだけは、わたしの目の光つてるうちは見のがさないつもりなの。あなたが、闇の中でゞも、鍵を掛けた部屋の中でゞも、何をしてゐても、わたしの目が何處からか、それを見てるつてことをよく覺えてゐらつしやい。……さあ行きませう。

辰江スタ／＼と山を下る。瀧村默々として隨いて行く。

(幕)

三

宿屋の一室。四人が一つ部屋に泊つてゐるのである。晩餐のすんだ後。神川は、ビール罎などのまだ置かれてある食卓に向つて手紙を書いてゐる。瀧村は煙草を吹かしながら夕刊を讀んでゐる。かね子は端近く出て外の夕暮れを見てゐる。辰江は古いアケビの手提行李から羽織を出して着ながら、湯上りのテカ／＼した顏を向けて、

辰江　ぢや、かねちやんはいらつしやらない？

かね子　えゝ。行きたくないわ。山登りで足が疲れてるから。

辰江　ぢや、わたし一人で行つて來てよ。買物だけして直ぐに歸つて來るわ。

みんなに目禮して出て行く。瀧村は横目でそちらを見てニヤリと薄笑ひを浮べる。

かね子　伯父さんの病氣が極りがつかないやうなら、わたし達は終列車ででも一先づ東京へ引上げちやどう？。別莊の方へ行つてゐても邪魔になるやうで居づらいし、此處にゐても何だか不愉快に思はれてならないわ（力のない聲で云ふ）

瀧村　伯父が極りがつかないと、東京へ歸つたつて不愉快だよ。まあ、も少し辛抱しといでよ。

神川　（筆を擱いて頭を持上げて）僕や辰江さんがあなたの家庭へ侵入してゐるやうでいけませんね。部屋が空いてると、外へ移るといゝんだが、僕とあの人とが一つ部屋に泊る譯には行きませんし、困りましたね。

かね子　あら、あなたが邪魔だなんて、さういふ意味にお取りになつちや困りますわ（極り惡さうに云ふ）

瀧村　かういふ旅行も變つてゝ面白いんだが、僕等よりも神川君が迷惑だらう。

神川　いや、僕は關はないがね。しかし、今夜は僕だけは別莊の方へ行つて、玄關にゐて夜番でもさせて貰はう。病人の樣子が變つた時に、こちらへ知らせる使くらゐにはなつてもいゝから。

かね子　どうしてです？あなたに行かれちや困りますわ。わたし、先つきから辰江さんが怖いやうなんですもの。辰江さんとわたし達と三人きりで此處に泊つてられやしませんよ。

神川　ぢや、わたしが安全瓣になるんですね。いゝ役ぢやありませんね。

辰江　どうしたの？。駒子さんを鋭吉さんに押つけようと、あなたが企んでゐたのを後悔したんですか。
瀧村　なあに、さうでもない。
「オーイ」と、下から紳川の呼ぶ聲が聞える。
瀧村　さつき嘩あを連れて山を歩いてた時に、紳川の奴、あんな聲で頻りに僕を呼んでやがつたが、嘩あは、聞えない振りして、二人でもつと遊んで行きませうと云つてゐたよ。あなたはさう云はないかね。
辰江　かねちやんとはちがつて、わたしが此處にゐたつて柔しい話が聞かれるのぢやないし、下へ下りませう。……下界へ下りて、みんなの中へ行くまでに、たゞ一言云つて置きますわ。忘れないやうに覺えてゐらつしやい。わたしはあなたを呪ひしもしないし、あなたに祟らうとも思つてゐないから、それは安心してゐていゝのよ。だけど、あなたのすることだけは、わたしの目の光つてるうちは見のがさないつもりなの。あなたが、闇の中でゞも、鍵を掛けた部屋の中でゞも、何をしてゐても、わたしの目が何處からか、それを見てるつてことをよく覺えてゐらつしやい。……さあ行きませう。
辰江スタ〳〵と山を下る。瀧村默々として隨いて行く。

（幕）

三

宿屋の一室。四人が一つ部屋に泊つてゐるのである。晩餐のすんだ後。紳川は、ビール壜などのまだ置かれてある食卓に向つて手紙を書いてゐる。瀧村は煙草を吹かしながら夕刊を讀んでゐる。かね子は端近く出て外の夕暮れを見てゐる。辰江は古いアケビの手提行李から羽織を出して着ながら、湯上りのテカ〳〵した顔を向けて、

辰江　ぢや、かねちやんはいらつしやらない？
かね子　えゝ。行きたくないわ。山登りで足が疲れてるから。
辰江　ぢや、わたし一人で行つて來てよ。買物だけして直ぐに歸つて來るわ。
　みんなに目禮して出て行く。瀧村は横目でそちらを見てニヤリと海笑ひを浮べる。
かね子　伯父さんの病氣が極りがつかないやうなら、わたし達は終列車ででも一先づ東京へ引上げちやどう？。別莊の方へ行つてゐても邪魔になるやうで居づらいし、此處にゐても何だか不愉快に思はれてならないわ（力のない聲で云ふ）
瀧村　伯父が極りがつかないと、東京へ歸つたつて不愉快だよ。まあ、も少し辛抱しといでよ。
神川　（鉾を掴いて頭を持上げて）僕や辰江さんがあなたの家庭へ侵入してゐるやうでいけませんね。部屋が空いてると、外へ移るといゝんだが、僕とあの人とが一つ部屋に泊る譯には行きませんし、困りましたね。
かね子　あら、あなたが邪魔だなんて、さういふ意味にお取りになつちや困りますわ（極り惡さうに云ふ）
瀧村　かういふ旅行も變つてゝ面白いんだが、僕等よりも神川君が迷惑だらう。
神川　いや、僕は關はないがね。しかし、今夜は僕だけは別莊の方へ行つて、玄關にゐて夜番でもさせて貰はう。病人の樣子が變つた時に、こちらへ知らせる使くらゐにはなつてもいゝから。
かね子　どうしてです？あなたに行かれちや困りますわ。わたし、先つきから辰江さんが怖いやうなんですもの。辰江さんとわたし達と三人きりで此處に泊つてられやしませんよ。
神川　ぢや、わたしが安全瓣になるんですね。いゝ役ぢやありませんね。

かね子　（よく考へる風で。）神川さんはさう思ひなさらなくつて？。辰江さんは山を下りた時分から、餘程樣子が變つたやうに、わたしには思はれてならないんですけど、さうぢやないんでせうか。

神川　さあ、僕は氣がつきませんが、どう變つたんでせう？

かね子　どうつて、言葉でハツキリは云はれませんけれど。……あの人のわたしを見る目付が違つて來たやうにも思はれますね。それで、わたし達の方を見ちや神川さんの方を見てるのが、何か相圖をしてゐるやうに思はれるんです。

神川　へえ。それはあなたの氣のせいですよ。

かね子　知らない人が見たら、あなたと辰江さんの間に何か深い譯がありさうに思ふかも知れませんわ。

神川　（不快らしい顏して苦笑して）これは驚いた。……だから、僕一人ぢやあの人と一しよに歩けませんね。僕はまだ結婚前だから、詰らない誤解をされちや迷惑しますからね。

かね子　外の方とはどうだか知りませんけど、辰江さんとあなたとは何でもないことは、わたし達がよく存じてますから安心してゐらつしやい。それに辰江さんは、あの年齡になるまで、男に對していやらしい考へは少しも持たないで生きて來たんですからね。だから、昨夕のやうに、みんなで枕を揃へて寢てもあの人は平氣なんです。

神川　二十五六にもなるまでに、色も戀も知らなかつた女があるんですかね。少し信ぜられませんね。

かね子　でも、あの人はさうらしいかつたのですよ。だから、辰江さんは心が奇麗でいゝと、わたし不斷から感心してゐたんですけど、今日はさう思へなくなりました。あの目が氣味が惡くなつたのです。不斷と異つた話をしてる譯ぢやないけれど、あの人の聲の調子が不斷とちがつて、わたしを脅かしてなりませんの（心から恐怖を感じてゐる風に云ふ）

瀧村　そんな下らない話は止せよ。

かね子　(氣色ばんで) 下らなかないわよ。……さつきお夕御飯を食べた時に、辰江さんは、伯父さんが死んだら、親類のうちでも遺産をいくらか頒けて貰へて得をする者があると云つたでせう。あれはわたし達に當てつけて云つたんです。あなたは神經が鈍いから當てつけられても感じないのね。

瀧村　遺產を頒けて貰へれば結構だが、生憎おれ達は、藤田家の身內のうちでは無勢力なんだから駄目だな。

かね子　わたしが不斷伯父さんに取入つてゐなかつたから、遺言狀に利益になることを書いといて貰へないと、わたしを責めるんですね。……神川さん、瀧村は見掛けによらない剛慾な男なんですね。

神川は呆れた態度で、目を外して煙草に火を點ける。瀧村も呆れてゐるやうに妻を見る。

瀧村　(强い笑ひを浮べて) おれの剛慾なことは神川君はよく御存じだが、お前は今夜はどうかしてゐるね。伯父の病氣をあんまり苦にし過ぎたゝめに、頭が疲れたのだれ。アダリンでも買つて來させて飮んで早く寢るといゝんだ。

神川　それよりもみんなで散步に出ようぢやないか。僕も少し喰過ぎたやうだから散步したくなつた (手紙を封に入れて宛名を書きかける)

かよ子　晝間あんなに苦しい思ひをして山登りをして疲れてゐるのに、散步なぞ出來るものですか。

瀧村　山へ登つた時はお前は面白がつてゐたぢやないか。……辰江さんとお前と一しよに歸りかけた時に、あの人から何か聞かされたのぢやないのか。

かね子　ないしよで聞かされて惡いことがあるの?。わたしあの時は何も異つたことを聞かされやしないわ。

瀧村　あの人も伯父の病氣を氣にしてるせいか、云ふことが變なのだよ。何を云つても眞に受けちやいけないよ。

かよ子　辰江さんが何で伯父さんの生死を氣遣つてゐるものですか。わたしだつて、伯父さんのことなぞ何とも思つてやしないわ。あなたゞつてさうでせう。駒ちやんくらゐなものですよ、病人のことを心から氣遣つてる人は。

瀧村　だつて、お互ひにわざ〱此處まで來たんだからね。知らせを聞いた時には、お前も顏の色を變へてゐたぢやないか。

かよ子　わたし、自分がどんな顏したか、見たことがないから覺えちやゐません。わたしの知つてるのは、辰江さんの顏だけなの。あの人の聲だけなの。それがわたしには怖くつてならないんです。

瀧村（持餘したやうに）お前は夢を見てるやうなことを云つてる。

神川は他の二人の話を耳に入れない風をして、超然とした態度で手紙を書終る。

神川　誰れも散歩に出ないのなら、僕だけ、手紙を入れに行つて來よう（獨言のやうにさう云つて、手紙を持つて出て行く）

かね子、夫の側へ近寄る。瀧村は思はず後退りする氣味。

瀧村　お前が是非歸りたいと思ふのなら、終列車で歸つてもいゝよ。

かね子　あなたも辰江さんが怖くなつたのね。……でも、男のくせにあの人を怖がつて逃げるなんて卑怯ぢやありませんか。わたしだつて、あの人を恐れて逃出したように思はれて、あとで二人に嗤れるのはいやです。辰江さんなぞに後指を差されるやうなことを、わたししした覺えはないんですから。

瀧村　だつて、今お前は終列車で歸りたいなんて、自分で云つてゐたぢやないか。……お前は今夜はどうかしてゐる

よ。

かね子　薄ボンヤリなわたしも、今日は目が醒めたのかも知れないの。あなたが本心から伯父さんの遺産を狙つてることも、今日はよく分つたんです。今までは戯談半分に云つてゐらつしやるのかと思つてゐたのだけど、あれは眞劍だつたのね。あなたがわざ〳〵見舞に來て先方の御機嫌を取つたのも、眞心は微塵もなくつて慾一方の考へだつたのね。

瀧村（當惑しながら）それはおれだつて、年中貧乏して、專門の研究にも不便を感じてるんだから、金が慾しくないことはないさ。しかし、お前だつて伯父の財產の事はよく話してゐたぢやないか。伯父が學問に理解があつて、おれの研究のために多少でも補助して呉れゝばいゝと、たび〳〵さう云つてゐたぢやないか。

かね子　わたし、馬鹿だつたから、あなたをえらい人にするためには、どんな事でもしようと思つてゐました。ある日伯父の部屋へ御機嫌伺ひに行つた時に、伯父に痲醉藥でも嗅がせて、金庫の鍵を盜んで、大金を浚つて來たいと、大それた惡事を夢のやうに考へてたこともあつたのです。……わたしの方でそれほどに思つてゐても、あなたはわたしを御自分の出世の道具に使はうと思つてゐたゞけで、はじめからわたしに對して眞心は少しも持つてゐなかつたのぢやありませんか。

瀧村　今日になつてそんなことを云つておれを苦しめるのは可笑しい。辰江さんがおれだち二人の間を氣まづくさせるために、お前に何か餘計な入智慧をしたのぢやないか。老孃（オールドミス）は嫉妬や邪推が深くつていけないよ。今度一しよに來て一しよに寢起きをするのがいけなかつたのだな。

かね子　あなたは、今日山を下りてからは辰江さんに氣兼ねをしてゐるのね。あの人はわたしに入智慧なんぞ明らさま

にしないのだけれど、あなたは胸の中に弱味があるから、それが氣になつてならないんでせう。わたし、心の目が開いてからは、言葉で云つて聞かされなくつたつて、顔付や、素振りだけで、あなたや辰江さんの本心が分るんです。

瀧村（苦笑しながら）顔付や素振りだけで人の本心が分るやうになつたら、世の中は恐ろしくなるね。女といふ女がみんなそんな風になつたら、男は往生だ。

かね子　そんなことを云つて誤魔化したつて駄目よ。……さあ白狀なさい。

かね子は夫の側へ躪り寄る。今にも胸倉を掴みかゝりさうな權幕。

瀧村（呆氣に取られて）白狀をするつて何を白狀するんだ。狐に抓まれてるやうで、何のことやらおれにはサツパリ分らないよ。

かね子　あなたは神川さんなぞの前で、わたしに耻を搔せようとするんです。

瀧村　伯父が危篤だつていふ電報で、いそいで飛んで來たのぢやないか。餘計なことを考へる暇があるものか（廊下の方を顧みて）オイ。辰江さんが歸つて來るやうだぜ。あの足音はさうらしい。

かね子は俄に態度を和らげて夫の側を離れる。

瀧村　あの女の前で泣つ面を見せちや、それこそおれ達の耻ぢやないか。

二人は何氣ない樣をして暫く默つてゐる。誰れも入つて來なかつたので、

瀧村　機嫌を直して濱の方へでも行つて見ちやどうだい。此方へ來た序手にうんと潮風を吸つて行かうぢやないか。

さう云つて瀧村が立上つて、襖を開けて出掛ると、かね子もおとなしく隨いて行く。二人の姿が見えなくなると、辰江は庭の方からソッと入つて來て、部屋へ上つて、あたりを見廻したが、ふと、かね子の手提袋を見つけると、

憎さげにそれを取つて投げつける。一度で飽足らないで、も一度取つて投げようとしてゐるところへ、神川が入つて來たので、極りの惡い樣子で、

辰江　あなたは何處へ行つていらしつたの？

神川　息抜きにちよつとそこまで出てゐたんです。何故だか二人の間の形勢が不穩なやうだつたから、僕は氣をきかせて座を外したんですが、もう仲直りが出來たのか、二人はお揃ひで何處かへ出て行きましたよ。僕は廊下でぶつゝかりさうだつたのを、わざと蔭へ隱れて見送つてゐたのですが、あの二人も言合ひをしたり啀み合ひをしたりすることがあるんですかね。あの夫婦は平々凡々に穩かな家庭を樂んでるのだとばかり思つてゐたのに、不思議ですね。

辰江　あなたは獨身だから、夫婦仲のことはお分りにならないのね。（いつの間にか行儀よく坐直して澄した顏をして）二人が何のために棘々してゐたのか、あなたには察しがつかなくつて？

神川　多少察しがついたればこそ不思議に思はれるんです（ニヤ／＼笑ひを浮べて）あなたも獨身だから、夫婦仲のことはよく分らないのぢやないかな。

辰江　仰有る通りよ。でも、さつきの二人の樣子は、わたし、あしこに立つてよく見てゐましたのよ（庭の片隅を指差して）話聲はハツキリ聞えなかつたけれど、樣子をよく見てると、大抵は察しがついたのです。

神川　あなたもなか／＼好奇心が強いんですね。人が惡いな。尤も妻君はあなたを煙つたがつてるやうですね。

辰江　さうでせうとも。わたし、かねちやんに魔法を掛けたんですもの（得意らしく云つて）今日山の上でお話したやうに、あの二人は伯父が亡くなつて駒ちやんが一人ぼつちになるのをいゝ幸ひにして、駒ちやんを抱込んで自分の都合のいゝやうにしようと企んでるんです。同じことを云ふやうだけど、あなたは、駒ちやんを大切に思つてゐらつし

やるのなら、よく警戒なさらなきやいけませんよ。山を下りたあとで藤田の別莊へ寄つた時にも、あの二人は駒ちやんを別室へ呼んで、何だかヒソ〳〵話をしてゐたでせう。駒ちやんも心細がつてる時なんだから、親切らしいうまい口には直ぐに動かされるんです。あなたは、藤田へ行つた時にはなぜいつも鹿爪らしく構へてばかりゐらしつて、駒ちやんと打解けた話をする機會をつくらうとはなさらない。傍で見てゐると齒痒いぢやありませんか。……あなたはなぜ早く駒ちやんを御自身の者にしておしまひなさらないの？女といふ者はいくら心の中で思つてゐても、男の方から胸の中を開けて近寄つて來ないかぎりは、自分から進んでどうすることも出來ないものなのよ。それに駒ちやんは今時の女とちがつたところがあるんですから。

神川　辰江さんはいやに僕を煽てるから氣味が惡いな。

辰江　あら、あなたを煽てたりなんぞしませんよ。わたし誠意をもつて云つてるんですわ。今夜でもあなたが駒ちやんにお會ひになる氣があるのなら、わたし駒ちやんを誘出して會せて上げますよ。あなたもお腹のなかでヤキモキしてばかりゐないで、男らしく實行なすつちやどう？瀧村のやうな平凡らしい、あなたの目には平凡な堅人に見えてる男でさへ、隨分思切つたことをしてゐるんですもの。あなたが因循にしてるつて法はないのよ。……今夜お見舞に行つた時に、わたし駒ちやんをお庭の四阿へ連出しますから、あなたはそこであの人にお會ひなさいな。

神川　だつて、今は駒ちやんも遊びに出る餘裕はないでせう。

辰江　遊ぶ餘裕はなくつても、かういふ時にこそ心底から人を手頼る氣になるものよ。……何事もない不斷の時よりも、明日の生命も分らない病人を後に脊負つてるやうな時に、却つて戀の焔が燃えるものぢやないでせうか。……經驗のないわたしには分らないけれど。

さう云つて辰江は、今まで見てゐた相手の顔から目を外らして、空想を描いてゐる。神川も辰江の言葉に次第に動かされて空想を描いてゐる。

辰江　わたし達が駒子さんを呼出さなければ、瀧村があの人を四阿(あづまや)へ連れて行きますよ。駒ちやんを瀧村の爪で引掻かさせて、あなたは平氣で見てゐらつしやるおつもり?……これはわたしだけが知つてることなんですけれど、瀧村ははじめ熱心に駒ちやんを戀してゐたのです。今も諦めてゐないかも知れませんよ。駒ちやんの方では何とも思つてやしないんですけれど。

神川　そのことは山の上で瀧村自身が僕に打明けましたよ。

辰江　だから、なほ更油斷が出來ませんわ。かねちやんはさつき愚圖々々云つてゐたのも瀧村が外の女を思つてることが分つたからなのです。

神川　僕は瀧村には長く交際してゐるのだが、あの男の本心が今まで分らなかつたのかな（暗然として考込む）

辰江（強いて無邪氣らしく笑つて）駒ちやんをあなたのものにして、瀧村に鼻を明せて御覧なさいな。面白いぢやありませんか。親類の人たちが苦情を云つたつても、あなたと駒さんとがしつかり結びついてゐれば大丈夫なのよ。それが男らしい冒險ぢやありませんか。戀のための冒險を一生に一度はして見たいとお思ひにならない?。……わたしは傍で見物して、そして喝采しますわ。……駒子さんは美しくつて氣立てがよくつて、その上、富豪のお父さんのたつた一人の後繼者(あととり)なんだから、生命に掛けても手に入れたいと、誰れしも思ふのは無理はありませんわね。

神川　しかし、僕に至醇な戀があると假定したら、僕はそれを慾得で濁さうとは思ひませんね。

辰江　假定なさらなくつてもよ御座んすわ。あなたの心の中の奇麗なことは、駒ちやんにもよく分つてゐますわ。

……ですから、あなたのお氣が進まなくつても、ためしに今夜四阿へ行つて御覽なさい。冒險がおいやなら直ぐにお逃げになつたらいゝぢやありませんか。

そこへ、かね子が入つて來て、訝かしげに二人の樣子を見る。

辰江　何處へ行つてゐらしやつたの？

かね子　海岸へ行きかけたのですけど、病人の事が氣になつて、瀧村は藤田の家へ行きましたよ。わたくしはどうしやうかと思つて……

かね子はさう云ひながら、鏡臺に向つて粉飾に取りかゝる。

辰江　ぢやわたしだちも行きませうよ。此處でぢつとしてゐても詰らないんですもの（神川へ目くばせする）

かね子　こんな所で病人の死ぬるのを待つてるのはいやなものね。

辰江　今に御通夜しなきやならないかも知れないけど、お通夜の晩にも、わたしだちは隅つこで小さくなつてゐるのね。

かね子　死んで行く人よりも、駒ちやんの淋しい氣持にわたし同情してよ。

辰江　でも生きてゐればまたいゝことがあるんでせう。わたしには分らないけれど。

辰江も神川も出仕度に取りかゝる。（幕）

三

藤田家別莊の廣い庭園の一部で四阿がある。星明りだけであたりは薄暗い。

神川は四阿のまはりを歩いてゐたが、何かを見つけて驚いたやうに、急ぎ足で木蔭の方へ行つて姿を隱す。

辰江は人を搜すやうな態度で奧から四阿の方へ出て來たが、あとから瀧村が隨いて來るのに目を留めて驚く。

瀧村　辰江さんは此處へ何しに來たの？（側へ寄つて冷眼を据えて云ふ）

辰江　人のなかにゐると氣が腐つていけないから、冷たい風にあたつて頭を休めようと思つてますの。あなたこそ何しにいらつしやつたの？

瀧村　僕もあなたと同じやうに、一人で冷たい風に吹かれようと思つて來たんです。みんなと同樣に悲しい顏をして譏しんでゐるのは、僕にはたまらなく苦しいんだから。

辰江　そればかりぢやないでせう。わたしに何か御用がおありなさるのぢやない？

瀧村　あるやうにも思はれるし、ないやうにも思はれるし。……まあ、そこへ腰を掛けませう。

瀧村がベンチへ腰をおろすと、辰江は落着かない風をしてその橫へ腰をおろして、あたりを見廻す。

瀧村　醫者の見立てでは、病人の壽命は明日の朝までだらうといふことだが、こんないゝ時候に、涼しい朝の空氣も吸ひきらないで、地獄の底へ落ちて行くのだと思ふと、剛慾な伯父でも不憫に思はれますね。

辰江　生きてゐれば、わたし達にも幸福な日が廻つて來ると思つてゐらつしやるの？

瀧村　伯父のやうに死んじまつちやそれつきりだが、生きてゐれば、憎い奴を苦しめやうと企むだけでも面白いぢやありませんか。可愛いゝ奴を可愛がるだけが人間の樂みぢやなくて、憎い奴を憎むのも人間は生きてゐるうちの樂みなのだと、この頃僕は氣がついてゐるんです。辰江さんはそんな樂しみを知らないと云ふんですかね。

辰江　どうですかね。わたしそんな意地の惡い樂みを知りたかありませんわ（再びあたりを見廻す）

瀧村　平生はどうだか知らないが、今日のあなたは、そんな意地の惡い樂みを樂んでゐたのに違ひない。おかげで僕は

不愉快な思ひをしつゞけてゐますよ。

辰江　まさか、おとなしいかねちやんに小突かれたくらひなことで、あなたがへたばつたのぢやないんでせうね。

瀧村　何とでもあなたの御自由に考へてゐて下さい。……僕は僕で自分の世のやり直しをしませうよ（彼れもあたりを見廻してやゝ懐つこい口調で）それは兎に角、辰江さんは何のためにあしこを抜出して、こんな淋しい所へやつて來たの？誰れかいゝ人と密會するためぢやないだらうな。

辰江　巫山戯たこと仰有い、（わざと嚴い顏して相手を見る）

瀧村　密會にはいゝ場所だしいゝ夜だと思つたから。空には星が光つてるし、沖には漁船の篝火がきらめいてゐる。合つた同士が夢のやうな囁きを取りかはすに丁度相應した所だ。……辰江さんにあの晩のことを思ひ出さない？初夏の若葉の風がそよいで、星がいゝ音樂でも演奏してゐるやうにキラ〱してゐた、丁度今夜のやうな夜だつたが……

辰江　あなたこそ意地惡くわたしを苦しめようと思つて、過去つたことを思出させるんですのね。（感傷的になる）

瀧村　云つて惡ければ、僕一人で思出してゐるばかりだ。あの時僕は何を話したか知ら。あなたはどんなことを云つたか知ら。

辰江　あなたはあの時のことなぞ、みんな忘れてゐらつしやるんでせう。（ます〱感傷的になつて涙を落す）わたし無理にも意地を張つて來たのですけれど、本心は、も一度あの時のやうな氣持になつて見たいの。人の心の薄情なことが分つたつもりで、痩我慢を出して、賢女氣取りでその人との縁を切つたのだけれど、それがどれほどわたしの仕合せになつたのでせう。薄情な人にでも離れないで、その人に突飛ばされても縋りついてゐたなら、女としてもつと生甲斐のある日が送れたといふことが、今日といふ今日ハツキリ分つたのです。……わたしよりもかねちやんが仕合せ

なのね。たとへどんな悪い事を企んだにしても、男のためなら、男と共謀になつてすることなら、張合ひもあるし、樂みにもなるぢやありませんか。女が一人ぽつちでは天下を引くりかへすやうなことしたつても、何處に樂みがある譯ぢやないんです。……わたしは馬鹿よ。馬鹿だつたの。

身もだえする。そして瀧村に寄縋つて泣伏しかけたが、ふと氣を取直して、

辰江　わたしは馬鹿ね。馬鹿だつたのね（感傷的だつたさつきの言葉とはちがつて、）あなたとこんなところで話をしてゐるのを、かねちやんにでも見つけられちや大變だ。わたしよりもあなたが迷惑なさるわね。

瀧村　僕の迷惑よりもあなたの方が迷惑するんぢやないかな――（あたりを顧み）此處へは誰れかゞやつて來さうな氣がしていけない。庭木戸から拔出して少し散歩しちやどうです？。

辰江　それは隨いて行つてもいゝわ　まさかあなたに時徑さりやしないでせうから

辰江は緊張した身體つきで、瀧村に隨いて行く。二人が庭から外へ出て行くと、やがて、神川は木陰から四阿の方へ出て來て、瀧村のゐた所へ腰をおろして、呆然として煙草を吸ひだす。ふと、後の方で人の來る氣色がしたので、ベンチから立上つて、見ぬふりして見てゐると、かね子が近寄つて來たので、意外に感じるとゝもに失望する。

かね子　あゝ、神川さん？（豫想の外れた顏して）あなたお一人？

神川　えゝ……大勢の人のなかにゐると氣が腐つていけないから、冷たい風にあたつて頭を休めようと思つて（と、辰江の口吻を眞似て云ふ）

かね子　さう?。…さつき瀧村がそつと庭へ下りたのを見たんですが、あなたは御存じないんでせうか。

神川　僕はよく知りません。

かね子　瀧村の樣子を變だと思つて、わたしも直ぐに庭へ下りかけたのですが、駒ちやんに掴まつて、いろ〳〵な心細い話を聞かされたものですからおそくなつたのです。駒ちやんは辰江さんに勸められて氣晴しに四阿へ來る筈だつたのですけれど、そんな氣になれないから止しにしたのですつて。それで辰江さんは駒ちやんよりも一足先きに此方へ來ることになつてたさうですの。あなたは此處で辰江さんにお會ひにならなくつて？

神川　僕はまだ會ひません。

かね子　變ですわね（不審に堪へない顏）

神川　僕も今度は變なことを見たり聞いたりしましたよ。僕も辰江さんに魔術をかけられたのかも知れませんね。

かね子（眞面目に）さう云へばあなたは大變しをれてゐらつしやるのね……あなたは身體はお丈夫だし、外に心配事のある方ぢやないから、戀患ひでもしてゐらつしやるのぢやなくつて？

神川（戯談らしく）さうかも知れませんね。一つあなた方の御盡力でその戀患ひといふものを癒して頂けないでせうか。

かね子（眞面目に）今度道連れになつたのを御縁に、辰江さんと握手なすつちやどう？あの人は利口なんだけど、いつまでも獨身でゐるからいけないんです。……あなたと辰江さんと、駒ちやんとある人と、いゝ縁が結べたら、藤田家の將來のために喜ばしいことなんですがね。藤田家の身内として團結して駒ちやんを守立てゝ行くやうだと、みんなのためにいゝことなんですよ

神川　それは藤田家のためにはいゝことなんでせうが、僕一人のためには決していゝことぢやありませんね。（灰でも舐めさゝれたやうな顏して）僕はこれから宿へ歸つて明日の朝の一番で歸りませう。藤田さんに對する義務は果してるんですから、こちらでマゴ〳〵してるには及ばないんですね。

かね子　辰江さんのことを云つたのがそんなにお氣に障つたのですか。わたしが悪かつたのね。あなたにはいゝ人が極つてゐるのかも知れないのに餘計なことを云つて。

神川　僕は庭木戸から廻つて宿へ歸りませう。あなたは此處でお一人で、星の光でも漁船の篝火でも見て休んでゐらつしやい。

神川は不愉快な口調で言放つて、足早く出て行く。かね子は呆氣に取られて後を見送つてゐたが、やがて自分も同じ方へ向つて出て行く。間もなく、「待つて下さいな。暗くつて歩けないわ」といふかね子の聲が聞えて來る。

「あなたはここの庭で篝火でも見てゐらつしやい。そして、宿へ歸るにしても、瀧村君と一しよに歸つていらつしやい。」といふ神川の聲が微かに聞えて來る。

「瀧村はわたしを打やらかしといて一人で宿へ歸つてるんですよ」といふかね子の聲が聞えて來る。

「誰れか來て下さい」と、物に驚いたかね子の聲が再び聞えて來る。

瀧村はその聲に耳を留めながら庭の方へ入つて來る。そして、聲のする方を氣にしながら、そちらへ行かうともせず、家の中へも行かうとはしないで迷つてゐるところへ、駒子（二十二三歳。豐麗な容色だが、看病に疲れてゐる有樣）が、星明りによつてあたりを搜しながら、四阿の方へ近づいて來て、ふと、瀧村と顏を見合はす。

駒子　あなたお一人？。辰江さんはゐらつしやらないの？

瀧村　僕は今來たんですが誰れもゐないやうですね。辰江さんに用事があるんですか。……まあ、そこへ腰を掛けませう。あなたも疲れたでせうね。（二人はベンチに腰をおろす）

駒子　父はもう望みはありませんわ。わたし側についてゐると怖くつて。（同情を求めるやうに云ふ）昨日まではそれ程

どに思ひませんでしたけれど、今夜はいよ〳〵臨終に近づいたせいか、見てゐると怖くつてなりませんの。わたしをも引張つて行きさうに思はれるんですもの。わたし父に手を握られるとぞつとしますわ。

瀧村　でも、あなたはよく看病しましたね。長い間お父さんのお世話をした上に、今度の病氣についてはあんなに熱心に看護したのだから、お父さんも滿足してゐなさるでせう。大勢の人が集つてゐても、眞心からお父さんの病氣を案じてる人は、あなた一人だつて、われ〳〵は噂をしてゐたんです。

駒子　いくらわたしが心配しても、父はもう駄目ですわ。……今に今危いかも知れないんですから、わたしは側を離れちやいけないんですけど、辰江さんに誘はれたことを思出して、外の風に吹かれたくなつたのです。辰江さんはどうしたんでせう。四阿でわたしを待つてると云つてゐたのに。

瀧村　あの人が何のためにあなたを此處へ誘つたんでせう。あなたの健康を氣遣つたゝめなんでせうか。……お父さんはかういふいゝ別莊を持つてゐらつしやつても、健康を失つちや、あの篝火も見られなければ、空の星も見られないんですね。あなたはお父さんがいくら大切でも、お父さんと殉死しなくつてもいゝでせう。……氣を落さないやうになさいよ。

駒子　有難う。わたし落膽しないやうに氣をつけてゐますわ。どうかすると氣が滅入つて暗闇のなかへ引摺込まれさうで怖いんですもの。誰れか強い力でわたしを摑まへてゐてくれゝばいゝと思はれますのよ。

瀧村　あなたの手を執つて明るい所へ出して呉れる者でさへあれば、誰れに摑まへられてもいゝと、あなたは思つてゐるんですかね。

駒子　あなたの仰有ることはどういふ意味なんでせう？

瀧村　あなたが病室を抜出して今庭へ下りて涼しい夜風にあたつた時に、偶然會つた人間は僕だつたが、もつと早いか晩いか、僅かな時刻の相違で、僕の外の人間が此處にゐたかも知れませんよ。

駒子　でも、みんな病人の事に氣を取られてゐて、こんな淋しい所へ遊びに出る人はありませんわ。

瀧村　さうでもないんですよ。お父さんが病氣に罹られてからは、この四阿には毎晩人の影が差してゐるらしいんです。

駒子（ふと足許を見て）さういへば此處に煙草の吸殼が澤山落ちてゐますのね。お父さんは庭に吸殼が一本落ちてゐても、掃除人に小言を云つてゐたんですよ。お父さんが亡くなつたらこのお庭も荒れてしまふでせうね。

瀧村　庭くらゐどうなつてもいゝでせうが、あなたの身の上はよく考へとかなきやいけませんよ。お父さんは遺言はなすつたんですか。

駒子　わたしその遺言が恐ろしいんです。親類の人の前で、お父さんの勝手な遺言をされて、そのためにわたしの一生が束縛されるやうなことがあつちや困りますわ。外の人が遺言をさせようとしても、瀧村さんは傍から遺言をさせないやうにして下さいな。あなたにお願ひしたいことはそのことですの。若しも遺言狀が書付けられてゐたら、人に知れないやうに破つて反古にして頂きたいんです。……さういふわたしの望みを叶へて下さる人は、瀧村さん、あなたの外にはないやうに、わたしには思はれますのよ。

瀧村　それは大役だな。僕には勤まりさうぢやありませんね。あなたからそんなことを賴まれようとは思はなかつた。

駒子　わたしが大それたことを考へると思つてゐらつしやるの？

瀧村　とに角意外ですね。今日は女といふ女がみんな意外なことを云つて僕を脅かす日だ。

駒子　わたし、生れてはじめてこんな事を口外してお願したんですから、どうしても聞いて頂かなきやなりませんの。(今までのおとなしさと違つて權威をもつて)あなたは以前、わたしのためにならどんな危險でも冒すと云つてゐらしつたぢやないの。わたしそのことをよく覺えてゐればこそ、お願ひするんです。

瀧村　あの時には獨身だつたから、そんなことも云つたのですよ。今でも獨身になつたら、あなたのためにどんな危險でも冒す氣になれるでせうが、今のやうぢや駄目ですね。僕の方では獨身になつた氣でゐても、あなたはさう信じて呉れないから駄目です。

瀧村がいらだゞしくさう云つてゐるところへ、辰江とかね子とが暗闇から此方へ入つて來る。駒子はそれを見つけると立上つて、

駒子　辰江さんはわたしを打やらかして何處へ行つてゐらしつたの? わたし今瀧村さんに虐められてゐたところなのよ。

辰江　さう?(氣のない返事をして、瀧村の方へ目をつけながら)さつきかねちやんが怖い者に脅かされて聲を立てたんですつて。わたし側へ寄つて見ると、生物は犬ころ一匹ゐないんですよ。

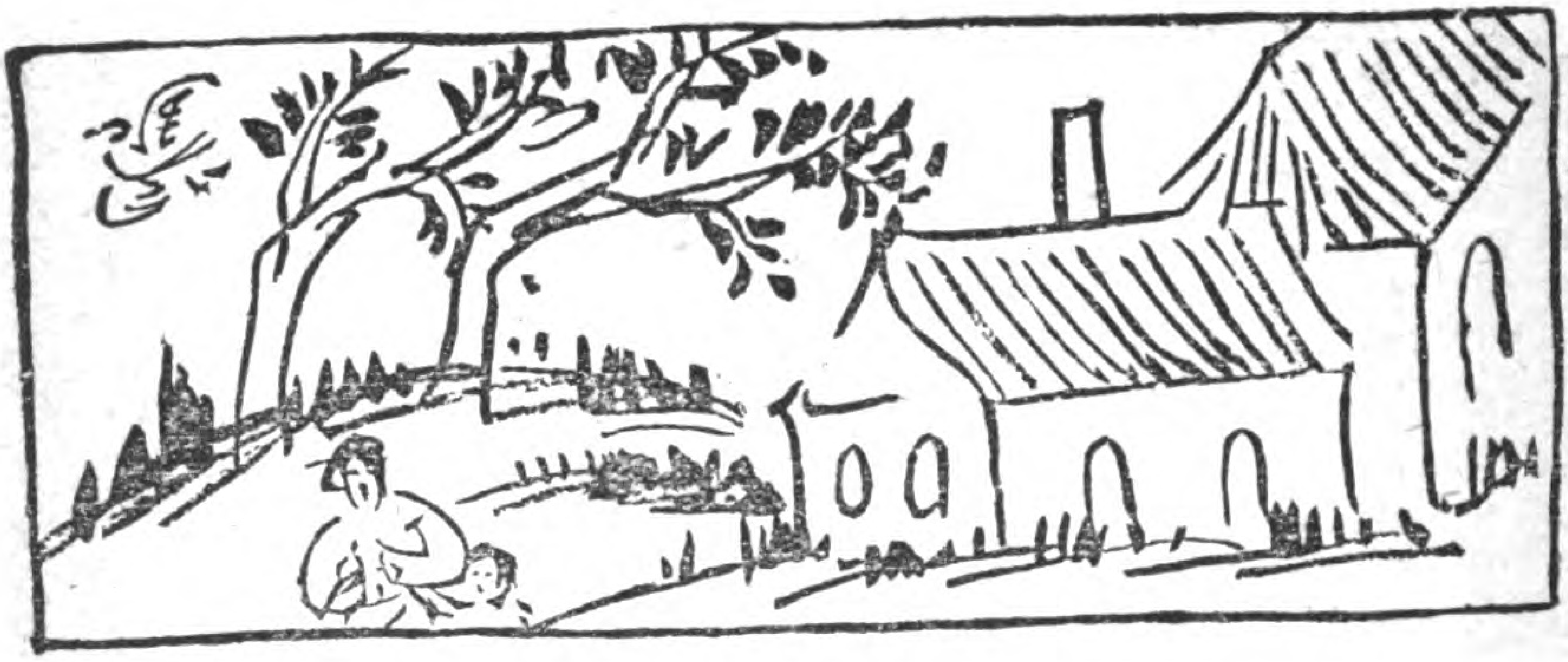
駒子　お二人とも眞靑な顏して(驚きながら二人を見詰めて)化物にでもお脅ひなすつたやうね。

かね子　えゝ、わたし化物に脅つちやつたの。駒ちやんもその化物に喉笛を嚙みつかれないやうになさいよ。

そこに三人の女を見た瀧村は、今までとちがつた生々した態度でベンチから立上つて

瀧村　僕には過去と現在と未來とが目の前に一度期に現れてゐるやうだ。……僕はこれから病人の枕許へうかゞふことにしよう。隨いて來たい人は後から隨いていらつしやい。

(幕)



馬鹿な夫婦

津田青楓

一

あの頃おれの心には矛盾した二つのこゝろが戰つてた。
お前の病氣の經過がよくつて一日でも早く退院してくれることを祈つてゐるこゝろと、
お前の病氣が段々おもくなつていつまでも歸らなかつたらさぞせいくするだろう、と云ふ反抗的なこゝろと。
あの頃は今年とちがつて隨分暑かつた。
大抵毎日のようにお前から電話がかゝつて來た。大抵おれに何かを持つて來てくれと云ふのだつた。おれはあの時、お前といがみ合つた事件を思ひ出すと反抗心がむらくとこみあげて來てとても不愉快で顔をみるのも小憎くらしくつていやだつた、がそんな事件なんか忘れて仕舞つてゐると無精に逢ひたかつた。毎日お前が電

話で何か要事を云つてくれることがちつとも不平でなく寧ろうれしかつた。そう云ふ時をれがよろこんでゐるこゝろを人にみられるのが厭だと云ふ妙な意地がをれにあつた。たみがお前からの電話をきいて來てをれに報告をしても、

「又來てくれか、うるさい奴だなあ、」

とたみに一寸きこへる樣に呟やいてこゝろのうちでは歡んでゐた。

をれのこゝろは妙なこゝろだつた。

憎と愛。

お前のような陰氣臭いことの厭ひな者がたつた一人で話相手もない陰氣な病室に寂しそうに悄然（しよんぼり）としてゐる姿を思ひ浮べるとどんなことを犧牲にしても毎日病院へゆきたかつた。

をれはお前を全部おれのこゝろの所有として考へてゐるときはお前はいつでも憎く憎くしい對象としてをれの心に映つた。お前ををれの所有慾から開放してをれと無縁な廣い世の中の女性の一人として考へると、お前がいつでも可愛かつた。同時にお前のこゝろが非常にうつくしく純眞に見へた。

おれはいつも病院に出掛けてゆくときはそのこゝろで家を出てゆくをれと無縁な純眞な性格の一女性を見舞ふつもりで出た。ところが病室に一歩足を踏みこむが最後、お前の顏をみると今までのをれの美くしいこゝろがすつかり姿を消して悪鬼の面のような怖ろしい心に塗り代へられて仕舞つてゐた。そしてすぐと心にお前を罵しつた。

なんだい、お前のその寂しそうな顏、そしていやに俺がなつかしいようなその眼、そして憫みを乞ふようなその悄然とした姿。

お前の今のその殊勝らしいこゝろは何だ。お前の我慢でやつた仕事が最後にぶつかつて、もう自分の力でどうにもな

らなくなつたときにおれにすがらうとする、ほんの――溺れんとする者が何にでもすがらうとする樣な單純なほんの――ひと時のこゝろだ。その我慢を捨てた柔順しい女性本來のこゝろがいつまでつゞくものか。おれはいつでもお前のそのこゝろにうつかりひつかゝつてあとで後悔するばかしだ。その枕元に置いた聖書はなんだ。そんなものを感心して讀むやうなお前でない。お前はいつでも宗教なんか馬鹿にしてゐるでないか。宗教なんてものは總ての執着から離脫なれることなんだ。そして諦めることなんだ、それが宗教なんだ。そんな馬鹿〳〵しいことがどうして妾に出來るでしよう。人間が生きてゐるのは何か自分のしたい事をやり遂げようと思ふ欲望があるからぢやありませんか、それでこそ生きてゐる意義があるんですわ。その欲望を捨てゝ仕舞ふことが宗教なら、妾なんか宗教を信じる氣にはとてもなれないわ。

よくそう云つたぢやないか。お前は宗教心がないから駄目だとをれがよく云ふと、お前はいつでも、そう云つておれに反對の意志を說明したぢやないか。

それにその枕元の聖書は何だ、秋傷らしい、をれの知りもしない、クリスチヤンの本なんか、そんなものはをれへの見せつけだらう、退屈しのぎに小說本でも讀むかわりにみてゐるんだらう。

おれはお前の顏をみると非常に興奮して、そんなことばかしが頭の中にくり返された。お前と顏を合はせてもをれの顏は無表情でまるでマスクのやうに筋肉はうごかなかつた。

始めておれが病院に行つたとき、おれはお前のベツトの傍に木像のやうにだまつてぢつと突立つてゐた。

お前はおれが家出をしたあとのことをときれときれにをれに報告をした。そのうちには

「ほんとうに此度と云ふ此度は神樣にたよるより外に仕方がないと、しみじみ思ひました、」

そう云つてお前はほろ〳〵涙をこぼした。

その時をれは始めて口を開いた、そして、

「お前は餘り自我が强すぎる、どうか今日のこゝろを忘れないようにをしよ、」

をれはお前の態度が餘りいた〳〵しかつたのでつい口を辷らしてそんな言葉をかわした。それもをれは餘り腹が立つてゐるので一と言も云ふ氣はなかつた。實際に恁ふした時にお前が云つた言葉に責任を持た事は一度だつてないんだ。それを又ほんとに受けてよろこんでゐる程のもう馬鹿でなかつた。だから口先だけで悔ひ更めと云ふようなことはきゝたくなかつた。先のことなんか云つたり聞いたりするのは馬鹿氣切つてゐた、お前が寢台の上にものあはれに、しよんぼりして哀しそうな顏をしてゐるのについひきつけられただけのことだ。

するとお前はたつた一言のおれの言葉に感激したのかぼと〳〵と涙を流して嗚咽た。

その時お前はハンカチで涙をふき乍ら恁ふ云つた。

ほんとうに陽子さんが頭髮を切つて仕舞つたときは、妾はもうどうしていゝやら、頭の中が變になつて仕舞つて、全く當惑しました。かんぢんのあなたは家出をして仕舞つて、どこにいらつしやるやらそれさへわからず、總ての責任は——何も彼も妾が馬鹿ですから餘計なことを云ひ出したのが原因だとは云ひ乍ら、ほんとうにこの始末をどうして付けようかと思ひました。陽子さんは全く氣が狂つてゐるんだから手のつけようがなく、そうかと云つて打ちやつてをくと何時どんなことを仕出かすかも知れないので一分間も眼をはなすことが出來ず、その上餘り妾が心配するのでお乳が出なくなつたものですからあかちやんは泣きますし、二人の子供等にはとりみだした變な姿をなるだけみせたくありませんし、妾の心は全でくるしい夢にでもをそわれてゐるような、掻藻いても藻がけないようななさけない思ひでした。妾

はほんとうにこれまであなたに度々お氣の毒な目をさせたと云ふことが始めてわかりました。陽子さんがあんな眞似をするのは人事でなかつたのです、妾もあんな狂人じみたまねをよくしました、妾の今まであなたにあてつけにしたことが此度は妾がそれをみせつけられるまわりになりました。それをみせられるものがどんなにいやなものかと云ふことをしみ〲と知りました、そして狂人じみた眞似のみにくいこともすつかりわかりました。妾はほんとうに今迄あなたに無理ばかりを云つてどんなにあなたを困らせたことでしよう。此度と云ふ此度はそれを本心から悔ひ改めなければならないように周圍から教へられたのも、全く神さまのおぼしめしだと思ひます。これからは毎日神さまに感謝いたします。どうか是迄の不心得を宥るしてください。

おれは相不變無表情で木像のように突つ立つてそれをきいてゐた。いくら何を云はれてもおれの顏は矢張りマスクのようにビクリとも動かなかつた。

をれはあのときこゝろの中で、

もうそんなお前の出鱈目はよしてくれ、そんなねごとのようなことは、をれはきゝたくない。沈默つてゝいゝんだから今のこゝろを出來るだけ長くつゞかしてくれゝばをれはうれしいんだ。をれは一生そのこゝろをつゞかせてくれと云ふんぢやない、感激しやすいお前のこゝろは余りに變り方が早い。どうか一と月位でそのこゝろをうつちやつて仕舞はないようにせめて半歳か一年位つゞかせてくれゝばをれはどんなにうれしいだらう。をれはなにも口先丈けで云ひたくない。これから先どれだけお前がそのこゝろをもちこたへてくれるかをれはそれをみてゐよう。

看護婦が這入つて來てもをれは殆んど笑顏をみせなかつた、定めしをれを變な男だと思つて居つたことだらう。

をれは病院を出て途々いやな氣持だつた。なぜをれはあんなに慘酷なこゝろなんだらう。なぜもう少しやさしい言葉

そう云つてお前はほろ〳〵涙をこぼした。

その時をれは始めて口を開いた、そして、

「お前は餘り自我が强すぎる、どうか今日のこゝろを忘れないようにをしよ、」

をれはお前の態度が餘りいた〳〵しかつたのでつい口を辷らしてそんな言葉をかわした。それもをれは餘り腹が立つてゐるので一と言も云ふ氣はなかつた。實際に恁ふした時にお前が云つた言葉に責任を持た事は一度だつてないんだ。それを又ほんとに受けてよろこんでゐる程のもう馬鹿でなかつた。だから口先だけで悔ひ更めと云ふようなことはきゝたくなかつた。先のことなんか云つたり聞いたりするのは馬鹿氣切つてゐた、お前が寢台の上にものあはれに、しよんぼりして哀しそうな顔をしてゐるのについひきつけられただけのことだ。

するとお前はたつた一言のおれの言葉に感激したのかぽと〳〵と涙を流して嗚咽た。

その時お前はハンカチで涙をふき乍ら恁ふ云つた。

ほんとうに陽子さんが頭髮を切つて仕舞つたときは、妾はもうどうしていゝやら、頭の中が變になつて仕舞つて、全く當惑しました。かんぢんのあなたは家出をして仕舞つて、どこにいらつしやるやらそれさへわからず、總ての責任は――何も彼も妾が馬鹿ですから餘計なことを云ひ出したのが原因だとは云ひ乍ら、ほんとうにこの始末をどうして付けようかと思ひました。陽子さんは全く氣が狂つてゐるんだから手のつけようがなく、そうかと云つて打ちやつてをくと何時どんなことを仕出かすかも知れないので一分間も眼をはなすことが出來ず、その上餘り妾が心配するのでお乳が出なくなつたものですからあかちやんは泣きますし、二人の子供等にはとりみだした變な姿をなるだけみせたくありませんし、妾の心は全でくるしい夢にでもをそわれてゐるような、擾藻いても涙がけないようななさけない思ひでした。妾

はほんとうにこれまであなたに度々お氣の毒な目をさせたと云ふことが始めてわかりました。陽子さんがあんな眞似をするのは人事でなかつたのです、妾もあんな狂人じみたまねをよくしました、妾の今まであなたにあてつけにしたことが此度は妾がそれをみせつけられるまわりになりました。それをみせられるものがどんなにいやなものかと云ふことをしみ〴〵と知りました、そして狂人じみた眞似のみにくいこともすつかりわかりました。妾はほんとうに今迄あなたに無理ばかりを云つてどんなにあなたを困らせたことでしよう。此度と云ふ此度はそれを本心から悔ひ改めなければならないように周圍から教へられたのも、全く神さまのおぼしめしだと思ひます。これからは毎日神さまに感謝いたします。どうか是迄の不心得を宥るしてください。

おれは相不變無表情で木像のように突つ立つてそれをきいてゐた。いくら何を云はれてもおれの顔は矢張りマスクのようにビクリとも動かなかつた。

をれはあのときこゝろの中で、

もうそんなお前の出鱈目はよしてくれ、そんなねごとのようなことは、をれはきゝたくない。沈默つてゝいゝんだから今のこゝろを出來るだけ長くつゞかしてくれゝばをれはうれしいんだ。をれは一生そのこゝろをつゞかせてくれと云ふんぢやない、感激しやすいお前のこゝろは余りに變り方が早い。どうか一と月位でそのこゝろをうつちやつて仕舞はないようにせめて半歳か一年位つゞかせてくれゝばをれはどんなにうれしいだらう。をれはなにも口先丈けで云ひたくない、これから先どれだけお前がそのこゝろをもちこたへてくれるかをれはそれをみてゐよう。

看護婦が這入つて來てもをれは殆んど笑顔をみせなかつた、定めしをれを變な男だと思つて居つたことだらう。

をれは病院を出て途々いやな氣持だつた。なぜをれはあんなに慘酷なこゝろなんだらう。なぜもう少しやさしい言葉

で病人をいたわつてやらなかつたのだろう、彼女と喧嘩をしたのは彼女が病氣でもなんでもないときのことだ。病氣になつてからも尙ほそれを根にもつて彼女にむごたらしくあたるのは何と云ふ執念深い、男らしくないをれなんだろう。をれが嘗て腸チブスを病んで入院して居つたとき彼女は殆んど一日も欠かさず花を持つてをれを病院に見舞つてくれた。彼女のその頃の生活はまるでをれを見舞にくるのが全部のようであつた。その心切な、をれに全部を捧げた彼女の純粋な心にくらべてをれは心のなんと云ういぢくねのわるいこゝろ、何と云ふ黒いこゝろだろう――深さの知れない魔の淵のように――

をれは電車にのつても晴れ〲しない顔をしながらそんなことを考へて家へ歸るんだつた。

二

陽子のことからお前と言ひ争つて、その翌日をれが、だまつて家を出て、途中から淋しい手紙をお前に送つて、其まゝ旅に出て仕舞つた。その時の細かいことは忘れて仕舞つたが何んでもお客があつておれが座敷でいつものように靜かに話してゐるとき突然キヤーと云ふ陽子の叫ぶ聲が座敷にきこゑた、をれは突然の陽子の悲痛な叫び聲にドキンとした。何事が起つたのかと思つた。「定めし二三日前から起つてゐる陽子の事件で陽子を呼びつけてお前の最も慘忍な言葉で陽子をいぢめてゐるんだと直感はしたが、それにしてもあの叫び聲は全く首でも〆められるときにでなければでない聲だ、いくら陽子が惡いにしても鷄の首を人間の掌でしめつけるような慘酷なふるまひをしてくれては困る。それは人道問題だ。

おれは客と對座中だつたから知らん顔をして、話を聞いてゐたが、心の中はお前に對する反抗心が燃へあがつてる

た。客は間もなく歸つて行つた。

客の歸つたあとですぐおれはお前をおれの部屋に呼び寄せて詰問した。

「一體陽子をどうしたんだ。」

と口をきつたが、お前の顔色はもうおれに反抗しようと云ふ險しい相を現はしてゐた。

「一體陽子をどうしたと云ふんだ。さつきのような大きな聲を出させて、お客があるのにみつともないぢやないか、」

「どうもしませんよ、」

「どうもしないものがあんな聲を出すものかい、」

「わざとあんな聲を出すんですよ、あなたに聞こへよがしに、」

「あんな聲を出して人を脅かすんですよ、だから憎くらしいぢやありませんか、」

「だけれどもなんにもしないのに聲を出す筈がないぢやないか、」

「だつてねこつちが先方へ行つて話を仕樣と思つて出掛けて行つたのに自分が勝手に先まわりをして先方へ行つて俥屋に先方の男をよび出させて、もうちやんと男に逢つて來てゐるんですよ隨分憎くらしい、仕うちぢやありませんか、そして妾のことを散々惡口を云つて、妾がまるで陽子を虐待でもしてゐるかなんぞのやうに云つたんですよ、だから彼方(むこう)の男は陽子にすつかりまゐつて仕舞つて、陽子に同情をしてゐるんですて、だから妾はくやしくつて馬鹿らしくつて仕方がないんですよ。それで妾は陽子に「あなたは出鱈目な甘いやうなことばかりを云つて男をだましたんだろう、そんなことをするやうなものはすれつからしだ。あなたなんか少女ぢやない、」て云つてやつたんです、そしたら少女でない證據がどこにありますつて云つてあんな大きな聲を出すんですよ、ほんとに人に散々世話になつておいてあんなに為

らしい奴でありやしない」

「そんなことに腹をたてなくつたつてい丶ぢやないか」

「だつてにくらしいんですもの、」

「當人同志が勝手に合つてそして氣に入つて結婚するつて云ふなら、それでもい丶ぢやないか、そのかわりお前は傍觀してりやい丶んだ。」

「だつて始めのうち人に話をさせてをいて随分勝手ぢやありませんか。」

「まあ若いものだから仕方がないよ、さう云ふ風になつて行くのももと／＼お前にほんとうの親切がないからさうなるんだ。ほんとうに陽子のことを考へてやつて、い丶ところに世話をしてやろうつて云ふお前に誠意があるならそんなことにならないよ。」

「あなたは又そんなことをお仰る、何かと云へば妾がわるいんですね。さう云ふ風にあなたがお仰るから陽子がつけあがるんですよ。」

そろ／＼險惡になつてきた。

「きのうだつてあの人はロクな帶ももつてゐないから見合をすると云ふのにまさかメリンスのあんなはげちよろけの帶もさ丶れないからわざ／＼末廣屋をよんで帶を一つ買つてやつたんですよ。そしたら妾のみたてた柄が氣に入らないつて、ゆうべひと晩中自分の部屋へ這入り込んでしく／＼泣いて、まるきりこつちへ出てこないんですよ、」

「…………………」

「随分我儘ぢやありませんか、少しあの女はヒステリーですよ」

「帶の柄ぐらいおなじ買つてやるなら當人の氣に入つたのを買つてやつたらいゝぢやないか、」

「…………………」

「どうせ妾が馬鹿なんですよ、」

をれは些し怖ろしくなつて來た。どうせ馬鹿ですよ、と云ふ文句が出來ると必ず大きな嵐がやつてくる、をれは大きな嵐に幾度遇つてゐるか知れないから、それがいかに總てのものをなきたをすか知つてゐるから怖ろしかつた。

「あなたがそう云ふ氣で入らつしやるから陽子が變なことを云ひふらすんですよ、」

「古田のおかつちやんに云つてたそうですよ。先生は妾に氣があるんだつて、だから奥様がわたしをあんなにいぢめるんだつて。あなたはそうなんでしよう、陽子に惚れてゐるんでしよう、そうならそうと男らしくお仰いよ、わたしはいつでもこゝを出ていきますから・・・・・・」

そしてお前はそこにつ伏してをーをーと泣いた、時々身をゆすつてくやしいくやしいと叫んでゐた。

三

をれがあの時家を出てからのことは、まだくわしくお前に話さなかつた。

をれはあの時だいぶ興奮してゐた、此度といふ此度はもう、どうあつても家に歸るまい。あんな女と家を持つて居たら、不愉快なことばかりだ、あゝした出來ごとが次から次へと年百年中起りつゞけて、をれの氣持のしづまるときはありやしない。をれの仕事もついぞ出來そうな心持になつたことはありやしない。いま迄はをれの生活が貧しかつたから彼女を苛らいらさせ彼女の不滿がつい何かの形で現はれ、そこで彼女とをれがいつも〳〵いがみ合つてくらして來たのだと

らしい奴でありやしない」

「そんなことに腹をたてなくつたつていゝぢやないか」

「だつてにくらしいんですもの、」

「當人同志が勝手に介つてそして氣に入つて結婚するつて云ふなら、それでもいゝぢやないか、そのかわりお前は傍觀してりやいゝんだ。」

「だつて始めのうち人に話をさせてをいて隨分勝手ぢやありませんか。」

「まあ若いものだから仕方がないよ、そう云ふ風になつて行くのももと〳〵お前にほんとうの親切がないからそうなるんだ。ほんとうに陽子のことを考へてやつて、いゝところに世話をしてやろうつて云ふお前に誠意があるならそんなことにならないよ。」

「あなたは又そんなことをお仰る、何かと云へば妾がわるいんですね。そう云ふ風にあなたがお仰るから陽子がつけあがるんですよ。」

そろ〳〵險惡になつてきた。

「きのうだつてあの人はロクな帶ももつてゐないから見合をすると云ふのにまさかメリンスのあんなはげちよろけの帶もさゝれないからわざ〳〵末廣屋をよんで帶を一つ買つてやつたんですよ。そしたら妾のみたてた柄が氣に入らないつて、ゆうべひと晩中自分の部屋へ這入り込んでしく〳〵泣いて、まるきりこつちへ出てこないんですよ、」

「…………」

「隨分我儘ぢやありませんか、少しあの女はヒステリーですよ」

「帯の柄ぐらいおなじ買つてやるなら當人の氣に入つたのを買つてやつたらいゝぢやないか、」

「…………………」

「どうせ妾が馬鹿なんですよ、」

をれは些し怖ろしくなつて來た。どうせ馬鹿ですよ、と云ふ文句が出來ると必ず大きな嵐がやつてくる、をれは大きな嵐に幾度遇つてゐるか知れないから、それがいかに總てのものをなきたをすか知つてゐるから怖ろしかつた。

「あなたがそう云ふ氣で入らつしやるから陽子が變なことを云ひふらすんですよ、」

「古田のおかつちやんに云つてたそうですよ。先生は妾に氣があるんだつて、だから奥様がわたしをあんなにいぢめるんだつて。あなたはそうなんでしよう、陽子に惚れてゐるんでしよう、そうならそうと男らしくお仰いよ、わたしはいつでもこゝを出ていきますから・・・・・・」

そしてお前はそこにつ伏してをーをーと泣いた、時々身をゆすつてくやしいくやしいと叫んでゐた。

三

をれがあの時家を出てからのことは、まだくわしくお前に話さなかつた。

をれはあの時だいぶ興奮してゐた、此度といふ此度はもう、どうあつも家に歸るまい。あんな女と家を持つて居たら、不愉快なことばかりだ、あゝした出來ごとが次から次へと年百年中起りつゞけて、をれの氣持のしづまるときはありやしない。をれの仕事もついぞ出來そうな心持になつたことはありやしない。いま迄はをれの生活が貧しかつたから彼女を苛らいらさせ彼女の不滿がつい何かの形で現はれ、そこで彼女とをれがいつも〳〵いがみ合つてくらして來たのだと

思つて居つた。あの頃啀み合つた最後が彼女から「ちやもつと人並な生活(くらし)をなさい」と云はれた、あの言葉がおれにはどんなに癪に障つたか、その言葉がまだ了らないうちにおれの手はもう彼女のよこつらに飛んでゐた。おれは人のよこつらをなぐることは要領を得て居つた、それは兵隊の時に随分なぐられて來たからだ。おれは心のうちで云つた、貧乏は元より分つたことだ、それを承知で貴様はきたのだ、贅澤がしたければ金持の馬鹿むすこのところへいきやがれ。そんなことをこゝろに叫びながら、一度手を出したが最後おれのこゝろは猛獸のやうになつて女だか男だか人間だか犬猫のみさかひがなく、ける——つきとばす——噫おれはあの時のことをもう考へたくない。

おれは彼女に又何を云はれるのが厭だから、仕事は第二にして彼女の注文通りの人並の生活にまでこぎつけた。けれども彼女のこゝろの不滿は矢張り滿たされないんだ。あゝしてもう十幾年來些細なことについていがみ合つてお互が暗い氣持になつていつたらおれ達はこの先一たいどうなるんだらう。併しこれが人間生活の當道なのだらうか。最後の日迄これを續けて行かなければならないものだらうか。それにしても余りにつまらない人生だ。あゝあすこに若い夫婦がむつまじさうに肩を並べて行く——あれを見ると涙が出るほどうらやましい。おれ達はどうしてあんなに仲よく睦まじく暮らせないのだらう。彼女と夢中になつてお互が甘い言葉を交はしたのは實にまたゝきをする程の早さで過ぎ去つて仕舞つた、實に儚ない夢だつた。

兎も角おれは正しい生活をしてゐるんだ。おれの正しいこゝろがどうして彼女に通らないのか、そんなことを女なんかに求めるのが間違つてゐるんだ、どうせ世の中の人間はつきつめて考へればみんな一人ぼつちだ、なんにも通らなくつてもかまわない、何にも彼も捨てゝ仕舞つて一人に還ればいゝんだ。

人間なんて云ふ奴は愚なものだ、自分自身でこさへておいた圏の中に自分で勝手に足をふみ入れ——これに縛られてく

るしんでもがいてゐるんだ。何も彼も捨てゝ仕舞へばいゝんだ、何かに執着してゐるから人間は苦るしむんだ。そうだおれは第一に製作慾を捨てればいゝんだ、第二に愛を捨てればいゝんだ、そしておれは一人ぽつちになつて旅から旅を流して歩るくジプシイのやうに田舍廻りの旅畫師になつて安料理屋やはたごやの壁にぶらさげる三文畫を書いて、それからそれへと渡り歩けばいゝんだ、あゝして爭ひばかりをして陰氣臭いまつ暗な日ばかりを送つてゐるより結句その方がどれ位生甲斐があるかも知れない。おれはもうこれにきめた、漂泊旅繪師だ。

おれはそんなことを考へ乍ら兎も角も電車に乘つた。誰か後から追つてでもくると面倒だと思つてわざと江戸川に出て引かへしの車に乘つて仕舞つた。

電車は御徒町だつた。おれはどこまで乘らうと云ふあてもなかつた。兎も角東京を離れようと云ふ氣[illegible]あつたが。電車に乘つてどこえ行こうと云ふあてもなかつた。本郷三丁目に電車が止まつた時、只何の氣なしに下りたくなつた。そして大學の方に向つて左側をとぼ／＼歩るいてゐるうちに、ふと散髮屋の前に來たので散髮する氣になつた。あそこの巴里院と云ふのはおれが旅行をする時には必ずあすこに行つて散髮をするのが習慣になつてゐた。おれは矢張りその習慣によつて散髮がしたくなつたのだ。

おれは散髮をしながら、どうしよう、どこへ行こうと考へた。おれがいつも、つかつてゐる使ひなれた繪筆と、いつも使つてゐる、何處に彫つてもらつた愛用竹のはんこを袖に入れて來たから最後に困つたら繪をかこう、併し出來るなら畫なんぞはかきたくない、なまじつかそんなことをやつてゐると矢張りおれの製作慾が頭をもたげて來て折角捨てゝ仕舞うと思つてゐる生活に未練が出て來るやうではなんにもならないから出來ることならなんでも外の事もやらう。戦爭に行つてムグラのやうな穴の中の生活を一年もやつて來たときの苦るしかつたときのことを考へりやどんなことだつ

て堪へ凌ぐことが出來るだらう。こゝろの苦しいことよりもどんなにいゝかも知れないと、そんなことを考へた。

散髪をすますと少し晴れやかな氣持になつた。大學の正門前で電車を待つてゐる、折角心持ちよくなつた首すじのあたりにじーと油汗がにぢんで來た。あの年は今年とちがつて七月も隨分暑つかつた。まして午後の三時頃と云ふ日ざかりだつた。三田御成門行きの電車が來たから、電車を待つてゐる外の人達と同じやうにわざ〱忙がしそうに先を爭ふような顔をして乘り込んだ。そう云ふ時にぼんやり佇んでゐるとなんとなく自分自身の行く先もわからないで、たつた今妻と云ひ爭つて家を飛出して、低うしてあてもなく町をうろついてゐる自分のこゝろを人がすぐにみとうして嘲笑つてゐるかのように思はれて恥かしくつてならなかつた。電車の滿員つゞきが幾台こようと故障車がやつてこようとそんなことはちつとも憤慨のたねにならなかつた。寧ろ停電や斷線やいろんなものがあつて、歩るいてゐるよりも電車がのろくつて——夜になつて——そこに自分はごろりと寢て仕まつて——そしていつの間にか電車が自分をどこかへ運んでいつてくれゝば、自分は行く先のことなぞ考へなくつたつていゝんだ、そんなことも思つてみたりして自分はふと金のことに思ひ及んだ。自分の懐にはなんでももう十圓あまりしきやなかつた。その金ではどこに行くにしても足りない、どうかしようと平常金に交渉のあるところを頭の中でぐる〱駈けまわつてゐるうちにふと××堂にぶつかつた。そこの店では少しばかりの本の装幀をした金やカットを描いた金がまだもらはずにあることを考へ出した。番頭の柴田に逢へばくれるからとも角金をこさへようと心の中に行先のことをきめた。

中橋廣小路で電車を下りて××堂の店先に立つた。古風な間口の狭い倉造りの家を改造して表に硝子戸をはめた、通りからチョバナの狭くるしい店に佛楷（ちうかい）をいくつも並べてその中に番頭達が下を向いて一生懸命に何か仕事をして小僧達が他方へ發送する本の荷造をしてた。

「柴田さんゐますか、」

番頭連がいつさいに頭を上げてこつちをみた。太つた若主人が奥の帳格からこつちの方を向いて愛嬌笑をした。店先に近い帳格の中の番頭が、

「あゝ柴田さん、さつき一寸——活版所の方迄行きましたが——何か御用で——」

「そうですか、」

と平氣な顏をして、

「いつごろ歸られます、」

「そうですもう——一時間半もしたら歸るでしよう、何か御用なら仰たまわつておきましようか、」

「ぢやまた、そのころに來てみましよう、」

そう云つて足早やに店を去つた。

それからをれはどこをうろついたか今はもう思ひ出せない。なんでもをれのすきな仲通や、銀座あたりをうろついて一時間半をすごすことを余儀なくさゝれたんだろう。自分はあてもなく七月の炎天下を會社を出てたのしい家庭に急ぐ人や、囁き合ふ若い夫婦や、兒供達をつれて買物にでも出てゐる人達と同じように何かのあてがあつて歩いてゐるような顏をしなければさみしかつた。自分はショウインドの前に並べてあるものをみるような顏をして立ち止まつてもこゝろの中ではどこへ行こうかと云ふことが決まらないのでそのことが氣になつてならなかつた。

嘗て自分が旅行した先々をひと通り記憶をたどつて土地と人を考へて見た。どこも自分の氣に入るところはなかつた。土地はどこでもいゝにしても人は皆こうした旅行にたよつて行くには不適當だつた。自分が家を出た事情を打明ければ

先方に迷惑をかけるし、打ち明けなければ何となくうしろ暗いような氣持がすると同時に、自分の思つてゐるように自分の處置が出來ないような氣がした。最後にふと思ひ付いたのは嘗てTと北の方の雪の深い國へ雪をみに出かけたことがある。乾度越後と信州の國境だ、ラツセル機關車がとまつたとか、除雪人夫が今日雪崩に埋れて幾人死んだとか、云ふような雪國の悲壯な電報が毎日のように自分等の雪についてなんにも知らないものゝ興味を惹いた、それでそのさわぎがすんだあとお前が「およしなさいよ、そんなあぶないところ。わざ〳〵そんなあぶないところへ行かなくてもいゝぢやありませんか。」と云ふのを「あぶないところだから行つてみたいんだよ、」と云つて二人で出て行つたことがある。あすこのことを思ひ出した。

その土地の料理屋の主人のことを思ひ出した。ふとしたことから滯在中心安くなつた。そうだ、あすこに行かう、あの男ならいゝ。と思つた。あの男ならうちの家庭のこともくわしく知らないから、をれが突然行つて何くわぬ顔をして泊つて居つてもそんなに變に思はれる心配はないだらう。そしてあの男は妙にのんびりして居つて氣持がいゝ。ちつともすれつからしでなく、そして何となくなつこい、料理屋の亭主にしては人柄がいゝ。中學を出てゐると云ふからをれたちの心持もまん更わからないことはない。行けばあすこだ、どうしてもあすこに行こう。お神さんもいゝ人だ。をれはどうしてもあすこに行こう。

四

むし暑い夜に寢ぐるしくつて寢られなかつた時のように、なんだか、からだがぐつたりして、背中の汗がワイシヤツにまで通つて氣持が惡い、汗ばんだ頸すじの中に自動車や電車や自轉車や荷馬車や魚河岸の車や、路普請のどす黑いど

ろどろしたものを煮てゐる煙筒から出る煤煙や砂塵埃やがぎち〳〵とこびりついて氣持が惡い。

　左右に開かれた二間幅の立派な門をくゞつて小砂利を踏んで玄關のわきの柱のベルを押した　取次に出て來た書生が、小倉袴の上に兩掌をきちんとそろへて丁寧にお辭儀をして、又ひつこんで行つた。軈て玄關へ年の若い奥さんがこられた。玄關の障子の枠にかるく手をかけて一寸中腰のまゝで愛嬌よく

「あら、どうしたの、お上りなさいよ、いゝでしよう。」

　親しみのある言葉で、そして厭味でなくなんとなく上品だ。

「風呂がありますか、」

　といきなり突拍子もない事を云つた。

「あつてよ、」

　奥さんは巷の雜音をまるでよそにして、まだお父さんやお母さんの膝元で何の氣苦勞もなしに無邪氣にたのしく暮らしてゐる人かのように氣輕にあかるい眼に微かな笑ひをたゝへて自分を迎へてくれた。

「妾の部屋でもよくて、隨分穢たなくしてゝよ。」

「その方が氣樂でいゝ」

　と勝手に饒舌つてゐるように口の中で自分はそう云つて奥さんのあとから上つて行つた。

「今日は暑いわね、何所へ入らしたの、こゝには煽風機がないから、あついのよ、うしろの障子を開けてお置きあそばせ。」

　自分は始から兩足を抛げ出すような無作法な座り方をしてやわらかい、さら〳〵した麻の布團の上にどかりと尻を下ろした。

椽側に向つた障子の前に余り大きくない唐木机がよくふき込んでこゝろもちよく光澤が出てゐる、机の上に中央公論が讀みかけのように誰れかの小說のところがひろげてある。まわりに近刊の小說らしい本が二三冊あつた。床の間の前には刺繍袋に琥珀のようなうつくしい木地が張つてくす玉の模様がぬいさして、まわりに竹筒に卷いたいろ／＼の色の糸がちらかつてゐた。奥さんは手まめにそこいらの散らかつてゐるものをかたづけ乍ら女中を呼んでお茶とお菓子のことを命じて居られる。

自分は汗を拭いて一寸落着いてから

「奥さん今日は風呂に入れてくださいね。」

「ゑゝ、でもまだわいてゐないことよ、もう少ししたらわくわ、」

「一體どこへ入らしたの。」

「ゑゝどこへも行かないんですが、とう／＼又喧嘩をして仕舞つて家を飛び出して來た、」

と相手に答へるでもなく獨言するでもない中途はんぱな物の言ひ方をして自分は浮かない顔をしてゐた。

奥さんはすつかり、舞台の上の喜劇でもみてお可笑いシインにでも出くわしたように――快濶に笑つて

「いや――ね、どうして喧嘩なんかなさるの、つまらないぢやありませんか、」

椽側の鳥籠にゐる九官鳥が變なアクセントで「コンニチワー」と云つた。奥様は些し低い聲で「コンーニーチーワ」と答へてやつて居られる。

「馬鹿／＼しいわ、喧嘩なんかして、」

と私に云はれる。

「實際馬鹿〳〵しいことなんですが――よく承知してゐるんですけれど、相手の出やうによつてどうしても腹が立つて喧嘩をせずにはいられなくなるんです。つまりわたしが融通がきかない馬鹿だからいけないんでしよう」
「あなたが余り奥さんを可愛がりなさるからよ。」
「いやそうでもないんですよ、何しろ憎くらしくつて仕様がないんですよ、私が心に思つてゐることをもつとたやすくどんどん饒舌れるたちだといゝんですけれど何しろ私が一言しきや言はずにくず〳〵してゐると相手が十言位どんどん言つて仕舞うんですから、そうして向の方がとつても理窟がうまゐんだから」
「そんなにあなたの奥さん理窟がお上手、」
「ゑゝ――」
「あなたはお話は下手ね、」
「どうも僕はお饒舌でないから損ばかしします、」
「だつてそれで恰度いゝのよ、あなたがぼかんとしてゝ奥さんが矢張り寂しいような人だつたらいけないわ、」
「そうですかね、」
「あなたの奥さんはゑらいわ、隨分なんでもおできになるし、美くしい方だし、ほんとにいゝぢやありませんか。お茶をめしあがれ、」

焙じたての番茶のいゝ匂がぷーんとした、いつもの常盤木の水羊羹が螺鈿の粗朴な模樣のある朝鮮ものらしい木皿に、銀のフオークがつけて自分の前におかれてあつた。自分は無雑作にそれをひときれ喰つて茶を呑んだ。

「つまらないお菓子よ、水羊羹なんてつまらないわね、」

「いや平凡でも常盤木んだからうまいですよ、」

「あんまりおいしくなくつてよ、」

おれは××堂で金を受取つてから何んだかぐつたりした、それにどうしても汗臭いからだが氣になつてお湯に入りたかつたから日野西さんを訪問して奥さんと暫くそんな話をしてから湯を貰つた、するとをれの氣持は段々落付いて來た。それと同時にをれは世の中が謎のような氣がした。

をれのやうに毎日ぢめぐ〵した氣で考へ込んで同じ家に居乍ら一寸のことにも腹を立てゝ言ひ爭ひ正義呼ばわりをして、不愉快に暮して居るものが喜劇を演つて居るのか、それともあの奥さんのように一年中家庭で相爭ふ容子もなくいつもあかるい無邪氣な氣持でたのしそうに毎日を送つて居られる人が喜劇役者と云ふものだらうか。神の眼から見ればどうせ愚かな人間のやつてゐることはどちらも――笑つて居るものも悲しんで居るものも所詮は喜劇として眼に映るだらうが我々愚かな人間その者から考へればこの二つの傾向はどちらが喜劇で一方が正劇であるような氣がする、をれは何となくをれのやつてゐることが喜劇であるやうな氣がしてならなかつた。

五

をれはそこの家には余り長くゐなかつた。湯をもらつて間もなくその家を出た。をれの亢奮した漂泊者の心が段々萎縮しそうになる危険を感じたから。

をれはその家の門をくゞるともうどつちに向つて歩るき出していゝかわからなかつた。兎も角脚の赴く儘に歩るき出した。巷の小家にはもう灯がついてゐた。夕方薄化粧をして團扇をいぢり乍ら歩るいてゐる女もあつた。どこからか知

らん夕飯の仕度をしてゐるような煮物の匂がして來た。その匂が家庭のたのしい生活を連想させた。こうして夕方になればどこの家だつて親子がそろつてたのしく飯を食ふのに、あてもなく野良犬のようにとぼ／＼と道を歩るいてゐる自分の姿がかなしかつた。

なんと云ふこともなしにだいぶ歩るいた。四つ辻を曲つて小路に這入ると下卑なレストランが二三軒並んでゐた。あくどい彩色をほどこした活動の繪看板のような女給の顔が衝立の陰から見へた。自分はそのカフエともレストランともつかないうちに、何んと云ふこともなしに這入つた。そこから四五軒行くと、自分達がこの道に出たときよく食事をする日本料理屋があるんだがそこには行かずに、ゆきつけない下等なレストランに自然と足が向いて仕舞つた。歸る可き家もなく行く可きところも定まらないような自分にとつては斯云ふところがふさはしいと思つた。女給はむかうの方から入らつしやいまし、と倦怠(けだる)そうにちらとこちらをみたきりエプロンの紐でもメめ直してゐるような風だつた。乾度めし時分だのにまるきり客の這入つてゐないことを不思議に思つた。一人外から女給が歸つて來た。ニツケル製の湯道具を一寸机の上に置くとすぐにかたわきのいやにあつぼい壁紙の上にぶらさがつた鏡を覗いてゐる。自分は面倒臭いから定食を注文しておいて、おろ／＼そこいらを見まわした。一體あゝ云ふ女はどう云ふことを考へてゐるんだろう、生きて居ることをどう思つてゐるんだろう、彼女等は何んの拘束もなく、何の責任もなく極めて自由なのだ、今日こゝの家を出たいと思へばすぐにでも出て行かれる。一人の戀人をいつまでもいつまでも守つてゐると云ふことはないだらう。次から次へと新らしい戀をしてそれからそれへと渡り鳥のような生活をしてゐるんだらう。人間の生活は畢竟そうした責任を持つ可きもののない自由な生活をしてゐるものが一番悧口なのだ。家を持つて小供に縛りつけられて戀も愛もなんにもない女と毎日燻ぶつた顔をつき合せて食ふための心配ばかりをしてお互にぶつ／＼言ひ乍ら、何のた

めに生きてゐるのか全くわからない。家庭はまるきり牢屋だ。何んのためにそれはあんなどす暗い、陰氣な自由のない牢屋に自ら求めてぢつとしてゐるのか、そこを出て行くだけの自由はあるんだ。そう思ふと彼女等のような生活が非常にうらやましい。いつまで牢屋に神妙にして居つたところがそれの藝術がちつとでも成長すると云ふ譯でもなし、只なにかなしに家族等の糧を得るために苦役に服してゐるのはつまらない、人間の仕事はなんにも藝術品を創造することが至上の仕事と云ふ譯でもないが、藝術を犧牲にしてもいゝ程のものは外になんにもない。何んの權利もないかわりに何等の義務もない身になりたい。小供等がよく唄つて居る「わたしや水草風ふくまゝに、」「どこのいづくではてるやら」と云ふのは何だか人生に倦怠し人生に絶望し、行くてが眞暗になつて道がふさがつて仕舞つた自分のこゝろはたつた一つの、のこされてゐる道を敎へてくれる暗示のような氣がして妙にそれの心をそゝる唄だつた。

自分はそんなことを考へながら、いやに安ぽいバタの匂の鼻につく定食を食ひ了つてからウイスキをなめづり乍ら自分の前の椅子に腰を下ろして淫蕩な眼付で話しかけてくる女給を相手に喋舌つてゐた。もうすかつり放浪者になりきつたような自由ないゝ氣持がして來た。女給は倦怠そうな姿態をして何か男から求めるものを持つてゐるように思はれた。それも何かを求めて恁云ふ浮草のような生活をしてゐる女のお友達になりたい氣がしてゐた。

「ちよいと、おしもさんうるさいわね、又あの野良犬がやつて來てよ、シーコラー――一本頂戴な、ゑ、まだ早いことよ。」

「まだ九時にならないの、」

六

安レストランでウイスキーを呑んだそれは電車で上野へ行つてそこから汽車にのつた。

翌朝信州と越後の國境を越えたT驛に着いた。車を雇つてすぐ山の上の小村屋に行つた。

酒樽が板の間に二つばかり、日出に桧をなぐりがきにした俗な衝立の陰から見へてゐる玄關に立つた。きたならしい下駄が亂雜にちらかつてゐた。それが玄關に立つた物音ですぐに誰れかくるかと思つたら誰れも來なかつた。一寸豫想がはづれたが聲をかけた。すると半玉のはん子がふだん着の儘で出て來た。微かな笑を見せて兩手をついてお辭儀をした。その態度が余りいんぎんだつたので

「はんこの野郎もうそれを忘れやがつたな」

と考へて、

「お神さんは。津谷だ、」

と云つたらすぐひつ込んだ。

お神がすぐやつて來た。よれ／＼のむさくるしい寢衣の儘で、だがそのことが自分に親しさを示してくれることのようで悪い氣持ではなかつた。

お神はまだねむくつて開かない眼を無理に開けて來たと云ふように妙に眼尻のあたりをゆがめたようにして眼をこぶしてこすり／＼それでも出來る丈けうれしさうな笑顏を作つて、

「まあ――はんちやんが津谷先生だと云ふからびつくりして飛び起きたんですよ。――まあ――よう入らしてくださいましたね――三ちやんも今びつくりして起きたんですよ、ゆうべ寢たのが三時でしたから。さあお上りください、」

「まあよう入らしてくださいましたわ、」

そう云つてお神は台所の爐傍に座布團を敷いてくれた。

主人が矢張り眼をこすり〳〵角帶をメめて爐傍に來て挨拶をした。

お神のお饒舌にくらべて主人は余り口かずをきかない、併し不絕にこ〳〵してゐる、こんな田舍の料理屋の主人のようでない、上品な男だ。

三公が挨拶に來てその儘お神の傍に座つて話し出した。

「濱岡さんどうして入らしやいます。あの人はほんとに剽輕な方ね、」

「お風呂の中でウイスキーを呑んでゐらして下から先生が破れ團扇で煽いて入らしやるかつこうてありやしないわ、おもしろかつたわ、」

お神が横から、

「戸田さんお達者ですか、」

「へ、」

「河窪さんは去年文展に通りましたようですね、わたしとこへ繪葉書をくださいましたわ、」

「河窪君去年は大あたりのようでしたね、入選はするし出品畫は賣れるし、」

「戸田さんは文展にお出しにならないんですか、」

「あれは二科ですよ、」

器量のいゝ久松とおでぶの力助とが一寸髮をときあげお辭儀に來た。それは湯に這入つて二階に上つて一と寢入りした。

七

三公が起しに來たので眼を醒ました。豈めしなのだ。開け放たれた二階の縁側に立ち上つて脊のびをした。三公は布團をたゝんでくれた。

「よくおやすみになれましたか」

「ゆうべ余り寢なかつたから」

何等の眼界をさへぎるものもなく黑姫や妙高や其外名の知らない山々が連綿と連つてゐる。山裾の白樺の木の綠が奇麗だ。巷の雜音はなんにもない、靜なものだ、只町ではきかれない小鳥の聲が一番眼立つてきこへる。

下に下りて又湯に入つて爐傍に座つた。

「先生ご飯はこゝでよろしいですか、何だか失禮なようでどうしようかと思つてゐるんですけれど三ちやんもみんなこゝで頂きますから反つてにぎやかでいゝかと思つて――まあ係ふ云ふ殺風景なところでたべて頂くのも却つて面白いかも知れませんわ、」

「僕はその方がいゝんだよ。」

そんなことを云ひ乍ら皆と一緒の膳に座つた。別の方の膳には久松や牛ちやんや力助やが座つてをとなしく何んにもお饒舌をしないで何だか煮しめたようなおかずで食つてゐる。

おれの方は三公が傍に座つておれの爲にお給仕をしてくれてゐる。

主人が、

「先生此度は寫生ですか、」

「いやそうでもないんです、」

「突然でしたね、」

「へ、只一寸雪のないときの景色がどんなかと思つて、」

「この頃はひまだから靜かでいゝんですよ、」

「どこかへ又お供しましようか、」

をれは家で妻と喧嘩をして飛び出して來たことなんかちつとも口に出さないでいつまでもしらばくれてゐようと思つた。

「野尻湖へ一ぺんゆこうか、」

とをれが云ふと

「行きましようか、妾も行きたいわ、」

「あねさん妾もゆくわ、久ちやんもつれてみんなでゆきましよう、」

「女連はゑらそうなことを云つて——あるける。」

主人がにや／＼笑つてそんなことを云つてゐる。

「あんちやん妾あるくことは平氣なんですよ、いつだつたか、そら××の旅團長が入らしたとき——あれはもう去年だつたか今年の春だつたでしようか——旅團長のお供をして××山へ登つたぢやないの、あの時宴會の席で、三公お前なんか旅團の上ではた／＼やる位のことはゑらいだらうが山登りなんかが出來るものか、とお仰つたからあんまりにくらし

かつたからぢやあるいたら伴れて行つてくださいますか云つたら、うん、てお仰つたから出發の時間を――あの側に居つた金モールみたいなものを胸にぶら〳〵下げてゐる參謀とか云ふ人に訊いて置いて朝宿屋へ行つてやつたの――それがあなた六時に宿を出發て云ふんでしよう、まさかくるとも思はなかつたんでしよう――隨分ねむかたんだけれども――宿へ行つたら加島屋の旦那が、三ちやんお前も行くのか、て吃驚したやうな顏をしてたから妾ゆうべお約束したんですもので、云つてどん〳〵部屋へ行つたら參謀さん困つたような顏をして、三ちやんほんとにゆくのか、なんて行つてるのよ。一寸痛快だつたわ。あの時ちつともへこたれなかつたから野尻位なんでもないわ、」

「久松ちやんどうだ。歩るける、」

とをれが云ふと、何も返事しないで只にいと笑つてゐる。

「野尻にも行くが僕は此度は良寬の遺跡を少し廻つてみたいと思つてゐるんだ、小村君行かない、」

「ゑゝお供しましよう、」

八

夕方二階から下りて來て、欄干に乾しておいた手拭をさげて湯殿に行つたら、久松がは入つてた。かまはず這入つた。

「久松ちやんもうからだはどうもない、」

「へゝ」

「よくからだがわるいね、一體どこがわるいの、」

「肋膜が少し」

「河邊さん手紙でもよこすか、」

と云へば

「いゝえ、」

と云つて笑つてゐる。そして立膝をして頻りに頸すじのところを洗つてゐる。すると力助が又やつて來た。馬鹿に太つてゐる、人と云ふ氣よりも肉の塊と云ふ感の方が強い。

いきなり、

「先生、流しましようか、」

と、何のはにかむ様子もなく、云ひ乍ら石段を下りて來た。

力助に背中を擦つて貰ひ乍ら硝子窓の方に眼をやると恰度キヤンバスの中に山の景色を入れたやうに窓枠に仕切られた妙高山が湯のもやの中に印象派の畫のやうに輪廓がぼんやりして色が奇麗だ。その畫の中を雲が動く。

手拭を背にひつかけた儘裸體で櫃の傍に胡座をかいて茫然としてゐると店の間で湯からあがつた久松や力助やがもろ肌ぬぎに鏡台の前に座つて懸命におしやれをしてゐる。後には簞笥が並んであつて、その上に種々の小道具が亂雜に置いてある。椽側の先に一尺程の庭があつてその先に黑い板塀がある。その下から外を通る人の脚が膝ぼし位まで見へる。上の方は人の顏が半分位 — 背の高い男だと額全體見へる事がある、夕方にはよくその板塀の上から顏を出してのぞいて行く奴がある。

自分はスケッチ帳を二階から取つて來て鏡臺の前に座つてお化粧をしてゐる久松や力助なぞを寫生した。

「あらいやだわ、」
と云つてみんな袖を前にはさんでそれで乳をかくさうとする。
そんなことをして遊んでゐるうちにみんなお化粧がすんでお座敷ゆきの着物と着換へお花の歸つてくるまでぶら／＼してゐる。自分は寫生にあきて一寸退屈する。

「久ちやん散歩にゆかない、」

「へゝ」

「妾もゆくわ」

とはん公が飛び出してくる。

「はんちやんはもう少ししたら石田屋さんからかゝつてますよ、」

「へゝぢき歸つて來ますわ」

一町程あるくともう町がきれて仕舞つて畑の中に白い路がうね／＼と彼方へ行つてゐる。町の裏の方へ出てだら／＼阪を下りてたんぼを一つ横ぎつてこんもりと茂つた森の中のお宮に行つて見た。その傍の村の消防ポンプをみたり、寄附金の名前の立札を讀んだりして歸つて來たら宿屋の二階にはもうぽち／＼灯がついてゐた。

半公は歸つてお座敷へ出て行つた。でぶの力助は玄關の向のうす暗い間――そこには屏風が立てまわしてある、廊下を便所へ行くお客が障子の硝子から覗ぞくとすぐ見へるかららしい。床の間に三味線箱だのバスケットの古いようなものだのごた／＼と無秩序に、未來派の畫の線のように直線が入り亂れて、その上ごみ／＼してゐる。穢ならしい夜具が積みかさねてすゝぐろくなつた敷布がゆがみちよろけてかけてある――その部屋ででぶの力助は顔と頭だけはちやんと

よそゆきにして着物だけはべろ〳〵の裕衣を着きて腹這ひに寝そべつて何だか講談倶樂部のような本を讀んでゐる、枕元にそら豆がひと握り程おいてある。そこには誰もいなかつた。をれはふら〳〵その部屋にくると、力助が一寸本から眼をあげてこつちを見たがすぐと下を向いてよみつゞけた。をれは彼女のお尻が余り立派なので腡のところへ馬乗りになつた、そして掌でお尻のところをペタンとたゝいた。

「せんせ――いやだ」

と彼女は倦怠るそうに、頸をねぢまげてをれの方をふり向いた、恰度獺が首をのばして空のものを見るような首つきで。をれはそのとき輕い性的な慾望がちらときざした。

「せんせ――お豆、たべない、」

おれは馬乗りになつた儘、彼女から豆を三粒ばかりもらつて一つ一つ皮をむき乍ら喰つた。五歳位になる男の兒がやつて來て、

「やあ――あんなことやつてる、」

そう云つてすぐと彼方の親達のゐる方へ報告に行つて又やつて來た。

「シンちやんも乗せてやろう、お出よ、」

と云つて自分の前の方へその兒をのせてやつた。

「おもいは、シンちやんかんにん、」

そう云つて彼女はせつ〳〵と豆を喰つてゐた。

九

すつかり夜になつた。

三公は石田屋から使が來て××さんが入らしたからと云ふので出て行つた。はんちやんは加島屋へ行つた、主人は組合の相談があるんだと云つて留守になつた。をれは叉爐傍でぽつ然と時々お神や婆さんに話しかけられるとそれに答へ乍ら新聞のひろい讀みをして時間を消した。

「半ちやんは何時に出ました、」

「さあ八時まがつてゐつたろー」

お神と婆さんがこんな會話をしてゐる。お神は段梯子の恰度下になる壙と向き合つた位置に机を据ゑて何だか帳面に書き込んでゐる。

「三ちやんは何時、」

「三ちやんは××さんかい、」

先生、とお神は一寸をれに聲をかけておれが振り向くと拇指を出してみて、

「三ちやん、これが來たんです、」

をれはにやりと笑つて、

「ふん」と答へた。

「先生の奥さんはハイカラですね、此間淑女畫報を見ましたら、」

と突然そんなことを云ひ出した。
「洋裝でしよう、——あれはお家に入らしてもそうですか、」
「なあに外出のときだけですよ、」
「ぢやお家ではおめしですか、」
「えゝ」
「洋裝の方が經濟的なんでしようか、」
お神は恁んな近代的な質問をする女だ。お神はT市の女學校を出てゐると云ふので都會風の言葉を雜誌から覺へて遣ふ。
「えゝまあ最初そんなことを云つて着出したけれども、要するにどつちだつて、同じだ、」
「奥さんも畫をなさるんですね、」
「えゝ」
「おたのしみですわね、お二人ともが同じ趣味のお仕事をなすつて入らしつたら、」
「さあ——そうみへますかね、——反つていけないですよ、」
「どうしてです」
「どうしてゝ同じ仕事でも考へ方が異へばおなじですよ、異つた仕事ならどちらからも分らないから仕事丈けの尊敬が持てますが——余りよく分り過ぎて——くだらないことが、駄目ですよ、」
「でもお悧口な奥さんぢやないんですか、いろんなことをなすつてゐらつしやるように雜誌でみますわ、」

「あんまり悧口過ぎて困りますよ、」
「お幸福ですわ」
「…………………」
玄關の方で二三人の足音がした。お神が馳けて行つた。お客らしいんで二階へ案內した。お神は戾つて來て、見習の小娘を女中代りにお座敷へ出した。暫くして小娘が下へ下りて來て可愛い聲で
「あねさん、わかいきれいな人を一人二人ですて、」
「ふん、久ちやんと力ちやんおゆきよ」
爺て婆さんが板場に下り立つて何だかごそ〳〵料理をこしらへ始める。爐の火のそばへ串に刺した肴が灰の中へ火に向つてなゝめにさゝれる。銅壺の中に酒德利がつかる。二階から力松と久松が代り〳〵に下りて來てお銚子を運んで行く。折に笑ひ聲がする、三味線の調子を合せる音がする。鴨綠江節が途中で安來節になつたり、おけさ節になつたりする。どゝ逸が始まるのかと思つてゐると、大津繪になつたりなんだかわけがわからない未來派の畵のやうに。
そのうち馬鹿にさえたいゝ聲で松前を唄つた者がある。
「お神さん、今のは馬鹿にいゝ聲ね、あれは誰、」
「あれは力助ですよ、」
「ふうん、柄にない聲を出すね、」
「あの人は聲がいゝんですよ、」
「聲に惚れて仕舞つた、」

そんなことを云つてゐるうちに十時近くになつた。主人が歸つて來て爐傍に座を占めた。

お神が

「安子さん、相談はなんでした、」

主人は鷹揚ににや／＼笑つて、

「うんくだらないことなんだよ」

「警察の方から注意があつたつて云ふだ、」

「なにを、」

「場合によつたら所罰するつて云ふんだ、」

「…………」

「此の頃藝者(こども)らを時間外に稼せがすつて云ふんだが、どうもおかしいんだよ、今更そんなことを云ふのは、

「そんなこと云つたらあなた、先達て警察の宴會のあつた時なんか、隨分をそくまで歸へさなかつたぢやないんですか、

警察なんかと云ふものは横暴ね、」

「ためにハ警察では云ひたくないんだけれどもね、誰れか、乾度密告をしたんだよ、」

「誰れでしやう、」

「さあ――、馬鹿な奴だ、自分の方の藝者はちつとも宿屋さんに入れられないものだから―

「所罰するなら所罰したつていゝさあ、」

時計が十時を、さつき打つた。

「先生もうおねむいでせう、御飯にいたしますよ、家なんかの商賣はまだよいの口なんですよ、」

それから爐傍にお膳立が出來て、主人とお神とをれとがビールを一本呑んで飯を食つた、二階はいつの間にか靜かになつた、お銚子をとりにこなくなつた、力助や久松の顏はちつとも臺所へ現はれなかつた。三公が歸つて來て三十分程話して又出て行つた。をれは十一時頃主人と一緒に湯に入つて二階へ上つて寢た。漸くしてから見習の顏だちのいゝ娘が水や煙草盆を枕元にはこんで來た。眼をとぢてぢーと家での事件を批判的に回想した。そしてをれは一體こん先どうしやう、と云ふことについていろ〳〵考へてみた。それで一向眠むられそうになかつた。その時段々をごと〳〵と誰か上つてくる足音がした。それがをれの枕元に來て座つた。眼をあいてみると顏だちのいゝ見習の小娘だ。

「せんせ――………」

「なんだい、」

「三ちやんは今夜こられませんが、おさみしかつたら…………」

と云つてあとを云はない。わかつてゐながらわさと、

「なんだい――」

とき〻返すと、

「あねさまがうかゞつてこいつて、」

一〇

翌日は村の青年會の運動會があると云ふので店の藝者らやお神と一緒にそれを町端れの空地に見に行つて一日は

んだ。その翌日主人と二番位の汽車で糸魚川に良寛ごりの文士Sを訪問に行つた。その朝恰度三公がお客を送つて行くと云ふのが同じ汽車になつた。停車場へ行く迄矢張り同じ路だから一二度後になつたり先になつたりした。主人はまるで知らん顔をして歩いてた。聲がきこへない程度に先方の二人とはなれた時をれは主人に訊いた。

「あのお客はなにをする人、」

「××石油會社の技師とか云ふ事ですよ、どこかへ出張するんでしよう」

汽車では恰度同じ列車になつた。わざとはなれたところにこつちは席を占めた。三公とその男は隣り合つてかけてゐた。男は白の麻の洋服を着て口髭をはやして、金ブチの眼鏡をかけてた。一寸した田舎臭い紳士だつた。三公は余りふざけた眞似もせず何とか云ふ乘換場の驛で下りて仕舞つた。

自分達は糸魚川へ晝前着いてSを訪問した。七八年も前にSの家族が東京を引揚げて郷里へ隱栖してからまるきり會はなかつた。Sはもう白髪が多くなつて何となく年寄りぢみて見へた

Sに案内されてその町の何とか云ふ大きな料理屋で晝飯を食つて夕方座敷から海の見へる宿へ案内して貰つた。良寛の遺跡はだいぶ遠いので、秋になつたら良寛堂の落成式に案内するからその時來てくれと云ふことを約束して翌日又朝の汽車でそこを立つた。T市に下りてその町の古い料理屋で晝飯を食つてゆつくり晝寢をして夕方歸つた。するとお神がいきなり、

「先生電報が來ましたわ、」

をれは、はつと思つた。執念深く斯んな處迄事件がそれを追つ駈けて來やがつたと云ふ氣がした。

「あなたお家へだまつて入らしたんですか」

それは少しきまりが惡るかつたが仕方がないから、
「ゑゝ家で喧嘩をして仕舞つて――」
「なんて云ふ電報が來た」
と主人が訊いた。
「先生行つて居られるや、返待つ、て戸田さんから來ました、」
「何んだか先生變だと思ひましたわ、おめしなんかあんまり持つて入らしやらないんですもの、」
「先生そりやいけませんなあ、奧さんが心配なすつて入らしやいますよ、」
と主人が眞顏になつて云つた。
「よくやるんだからたいして心配もしてゐないでしよう、」
そんな風に云つてそれは苦笑してゐた。
「すぐお歸になりますか、」
「いやまあ――そのうち戸田でもやつてくるでしよう、此度は一寸歸らんつもりで出たんですが、」
「そんな譯にゆきませんよ、お兄さん達がお淋みしいですわ、」
「一體どんなことで喧嘩をなさるんです、」
と主人が訊く。
「なあにくだらないことなんですがね、あいつは一體事件を起すことがすきなんだから僕のような事件ぎらいな因循な、いつまでもそんなじところにじつとしたい性分の者には困るんですよ、」

「奧さんの方が活潑なんですな、どうも活潑過ぎては困りますよ、」

主人は暗に細君に警告した。

「何しろ家のことだけやつて我慢がしてゐられないとみえて次から次へといろんなおせつかいをやるのでいやに成つてしまう、最もどんなことをやり出してくれたつて最後まで自分の手でやり通すならちつとも——そりやお互の自由だから——かまわないんだけれどやり出す時は非常な勢でやるんだが段々事が面倒になつて最後になると矢張り僕が始末をしなければならんような破目になるんだ、それが憎くらしいんだ、女と云ふものは偉らがつても最後まで自分の手でやり通すと云ふ責任觀念がないんだから——」

「そりや先生仕方がありませんわ、そこが旦那さまの價値ぢやありませんか。」

主人はにこ〳〵笑つて言葉は出さないが細君に向つてお前もその通りだからよく訊いておきなさい、と云つてゐるように讀める。

話を一寸句切つて二人で湯に這入つて例の通り爐傍に座つたらもう灯ともし近い頃になつた。店の藝者等はすつかりお化粧をしてお座敷の着物にきかへてゐた。主人は今夜又組合の寄合があると云ふ事をお神から聞いてゐた。

二

主人が組合の寄合から歸つてこんな報告をした。

「××ちやそんな面倒なことを云ふなら宿屋へ藝者を入れなくつてもいゝと云ふだが、宿屋の方ぢや、藝者屋の方が若しそう云ふ意向だつたから宿屋組合だけで番を作つて當地の藝者屋からの藝者は一切宿屋へ入れない相談をしてゐるん

だそうだ。そして××が乆縫なことをどこからか訊いて來たんだよ、此頃宿屋の鑑札を持たない料理屋がお客を泊めてゐるつて憤慨してゐるんだそうだ。そして警察がそれをだまつてゐるのは手ぬかりだと云つてゐるんだそうだ。大方家のことを云つてゐやがるんかも知れないと思ふんだ。何しろ不景氣なものだから何とか彼とか苦情を云ひ出すんだよ、そんなことを云つてお互にあばき合ひをやつたら結局どつちも損なんだが、どつちにしてもお客さんがこの土地に氣持よく滯留してくれなけりや駄目なんだ、土地の繁榮て云ふことをちつとも考へないで嫉み合ひばかりをしてをつちや土地が發展しない譯だ。」

「ぢや僕が泊つてゐることが問題になつてゐるんだな、」

「先生大丈夫ですよ、心配しなくつたて、お客ならいけないんですが家ぢやお客のつもりぢやないんですから、」

「でも僕の爲めにそんなごた〳〵が起つてはすまないですよ、」

「どこの家だつて親類や友達で泊めんならんようなお客のないようなところはありやしませんわ、」

「何しろをれも藝者家はしてゝもてんでそんな規則なんか知らないんだから呑氣な藝者屋だ、」

主人がそう云つて笑つてゐる。

暫らくすると玄關の方でごと〳〵と靴音がした、爐傍から一寸首をのばして見たお神は、あら××さんだと云つて笑顏を作つて、

「どうぞお上りください、」

と云つてゐる、それはかねて顏なじみのある駐在所の巡査だつたのだ。上りそうにないので主人が出て行つた。

「いや別に親類て云ふ譯でもないんですが——まあ親類程に親しくしてゐるものですから、——甥の先生です——一昨

昨日から――」

　そんな事を答へてゐる主人の聲が聞えた、はゝをれの事を調べに來やがつたんだなと腹の中で思つたが何しろゑらそうなことを云つてもお巡査さんに調べられるのは戸籍調べの時だけで自分の行爲の善惡に就いてお巡査さんと交渉のあつたことがないから内心些し不安だつた。軈て巡査は歸つて行つた。

「どうだつて云ふんです、」

　とお神が主人に云つた。

「どうつて云ふことはないんだが事實を訊きに來たのだ、金をとらないならいゝだらうて云ふんだが、家ぢや元からお金を貰ふつもりぢやないんだから、」

「お金なんかたれが頂くつもりですものか」

　そんなことを云つて爐傍での話題は組合のいさくさと、をれが泊つたことについての勝手な解釋で持ち切つてゐた。いつの間にか二階にはお客が來てゐるとみへて藥鑵の中にお銚子がつかつて例の串にさした肴が灰にさゝれてゐる。そのうちには下等なドンチヤンの囃が始まつておきまり鴨緑江節をどら聲で唄つてゐる。

　十一時頃みなと一緒に爐傍で、三公がお給仕をして飯を食つた。その前にビールを一本呑んだのですつかりまつかになつた。

「ぢやおやすみなさい、」

「まあごゆつくり、先生はお早いんですな家ぢやこれからですわ、」

そう云ふお神の言葉をきいてをれは二階へ上つて寢た。

二

朝可なり早く段梯子をふみならして馳け上つて來てをれの部屋をガラリと開けた、突然な物音に眼が醒めた。

「さんちやん、さんちやん、」

と低聲で強く響くように云ふのはお神だつた。

をれの傍に寝てゐた三公はバネ仕掛けの人形のように枕をかゝへて飛び起きた。

をれは臨検だ、と頭にひらめいた。

お神は

「戸田さんが入らした」

その聲のまだ了らぬ先に三公の姿はもう隣の部屋へ消へてゐた。

お神は更めてをれに

「先生戸田さんが入らつしやいましたよ、」

と稍々落付いた態度で云つた。

「なんだ戸田か、僕はびつくり仕て仕舞つた、」

お神はをれの云ふことをきこうともしないですぐ、とんとんとんと下へをりて行つた。

をれは徐ろに起きて廊下から一順眼前に展開してゐる綿々たる山と白樺の林とを見渡した後下へをりて行つた。

戸田が手ごろな旅鞄を傍に置いて爐傍でお神と話してゐた。

「やあ、お早よう、早く着いたね、昨夜何時に乘つたの、汽車はどうだつた、込んでたか」

そんななんでもない問と答を四五分間くり返して兎も角湯へ這入ろうと云ふので二人で湯殿へ行つた。湯槽につかり乍ら話は自然とそれが家を飛び出してからの家のことやお前のことになつた。

戸田は落付いた眞面目な顔で、眼の奥に稍々疲れたような色はみへるが、それでも折々この男の本性のユモアーが輕くその話すときの手つきの上に現はれるので、自分にふりかゝつてゐる不愉快な、稍もすれば反抗的に出たがる自分の氣持の上にある程度のゆとりを與へてくれた。

戸田は、お前がそれの別れの手紙を見て、どんなにそれの自殺を恐れて騒いだか、また陽子が髪を切つたり男に逢はせてくれと泣き出したりしてどんなにヒステリックに騒いだか、また結婚の話を持ち出した牧師夫人がどんな風に陽子を監視し說教したか、さうしてその說教を聞いてゐるうちにお前がどんな風に後悔し始めどんな風に懺悔の心持を起したか、を話した。それからお前が亂れた頭を休めるために近所のカトリックの會堂へはいつて行つて、つひうと〳〵として、ふと眼をさまして見ると、今まで自分のやつてゐることが凡てその反對をしてゐるような氣がして、そこですつかり自分を懺悔する心が起ると同時大變すが〳〵しい氣持になつてお家へ歸つたこと、などを話した。

「先生奥さんは此度こそは氣まぐれに云つてゐらつしやるんでありませんから、どうか奥さんの心持ちを察して此度丈けは信じてあげてくださいませ。」

「ふんそうかねえ。」

聞き了つたそれは、さう一と言簡單な返事をした、併しその簡單な返事の中には何となく冷笑的な意味が含まれてゐつた。それは心の中で

此度は少し藥が利いたな、と云ふ得意な微笑を洩した。そしてすぐ又あとに、

何を云やがるんだい、神に從ふとか、懺悔の心が起つたとかいやに愁傷らしいことを云ひやがつてちやんちやらお可笑しい。恁ふした時にお前の云ふ感傷的な言葉を眞劍にうけて十幾年來をれは何十度失望して來たか知れない。この上お前の言葉を信じ同じ失望をくり返す程をれはもう馬鹿になつてゐられないんだ。お前がどんな崇高な言葉でお前の氣持を表現しようと、どんな敬虔な態度でをれに懺悔をしようと、それは勝手だ、今後お前が口で云ふところの神に從はうと、ヤソの信者になろうとそれも勝手だ、をれはお前と未來のことを約束しようと思はなければこの世の中で未來のことなんかを約束して生きようとは思はないんだ、お前はどんなことを思ふとどんなことを仕様とそんなことは要するにお前の勝手にするがいゝ、をれなぞを對象におく必要は更にないよ。

そう心の中でお前を罵つた。

戸田は言葉をついで、

「だから先生、奥さんのおつもりぢや此は無理に先生をつれて歸らなくてもどこかにいゝ家でもみつけてなる丈け落ちついて畫でも描いて頂いてお飽きになつた時分に歸つて頂けばいゝと思つて居られました。」

をれは何故お前が一日でも早く歸つてくださいと云はないのかと云ふ不滿な氣がした。

それからなほお前のことについて長い間湯槽から出たり這入つたりし乍ら話したが話が容易につきそうになくとうとうお湯に飽きて出て仕舞つた。

一三

「やあ、お早よう、早く着いたね、昨夜何時に乘つたの、汽車はどうだつた、込んでたか」

そんななんでもない問と答を四五分間くり返して兎も角湯へ這入ろうと云ふので二人で湯殿へ行つた。湯槽につかり乍ら話は自然とをれが家を飛び出してからの家のことやお前のことになつた。

戸田は落付いた眞面目な顏で、眼の奥に稍々疲れたような色はみへるが、それでも折々この男の本性のユーモアーが輕くその話すときの手つきの上に現はれるので、自分にふりかゝつてゐる不愉快な、稍もすれば反抗的に出たがる自分の氣持の上にある程度のゆとりを與へてくれた。

戸田は、お前がをれの別れの手紙を見て、どんなにをれの自殺を恐れて騷いだか、また陽子が髮を切つたり男に逢はせてくれと泣き出したりしてどんなにヒステリックに騷いだか、また結婚の話を持ち出した牧師夫人がどんな風に陽子を監視し說教したか、さうしてその說教を聞いてゐるうちにお前がどんな風に後悔し始めどんな風に懺悔の心持を起したか、を話した。それからお前が亂れた頭を休めるために近所のカトリックの會堂へはいつて行つて、つひうと〳〵として、ふと眼をさまして見ると、今まで自分のやつてゐることが凡てその反對をしてゐるような氣がして、そこですつかり自分を懺悔する心が起ると同時大變すが〳〵しい氣持になつてお家へ歸つたこと、などを話した。

「先生奥さんは此度こそは氣まぐれに云つてゐらつしやるんでありませんから、どうか奥さんの心持ちを察して此度丈けは信じてあげてくださいませ。」

「ふんさうかねえ。」

聞き了つたをれは、さう一と言簡單な返事をした、併しその簡單な返事の中には何となく冷笑的な意味が含まれてあつた。をれは心の中で

此度は少し藥が利いたな、と云ふ得意な微笑を洩した。そしてすぐ又あとに、何を云やがるんだい、神に從ふとか、懺悔の心が起つたとかいやに愁傷らしいことを云ひやがつてちやんちやらお可笑しい。恁ふした時にお前の云ふ感傷的な言葉を眞劍にうけて十幾年來をれは何十度失望して來たか知れない。この上お前の言葉を信じ同じ失望をくり返す程をれはもう馬鹿になつてゐられないんだ。お前がどんな崇高な言葉でお前の氣持を表現しようと、どんな敬虔な態度でをれに懺悔をしようと、それは勝手だ、今後お前が口で云ふところの神に從はうと、ヤソの信者になろうとそれも勝手だ、をれはお前と未來のことを約束しようと思はなければこの世の中で未來のことなんかを約束して生きようとは思はないんだ、お前はどんなことを思ふとどんなことを仕様とそんなことは要するにお前の勝手にするがいゝ、をれなぞを對象におく必要は更にないよ。

そう心の中でお前を罵つた。

戸田は言葉をついで、

「だから先生、奥さんのおつもりぢや此は無理に先生をつれて歸らなくてもどこかにいゝ家でもみつけてなる丈け落ちついて畫でも描いて頂いてお飽きになつた時分に歸つて頂けばいゝと思つて居られました。」

をれは何故お前が一日でも早く歸つてください、と云はないのかと云ふ不滿な氣がした。

それからなほお前のことについて長い間湯槽から出たり這入つたりし乍ら話したが話が容易につきそうになくとうとうお湯に飽きて出て仕舞つた。

一三

午後二階に上つて戸田と寢轉んでゐるとお神が上つて來て、

「先生すみませんが一寸下りてくださいませんか、お巡査さんが今來たんですが、一寸逢ひたいと云ひますから。」

と云ふのですぐ下りた。

爐傍に白服の巡査があぐらをかいてゐた。

「私は津谷ですが、」

と云つて同じように爐傍に坐つた。

「こちらにお泊りですか、」

と云ふから

「へゝ」

と答へた。すると、

「すみませんが一寸駐在所迄來てください」

と云つた

お神と主人は一寸意外なような顔付で、

「行かなくつてすみませんか、」

と云つた

「いや一寸來て貰へばいゝんです、」

と云つた

それはべろ〳〵の浴衣を着た巡査について出た。前の通りを行かないで裏の畑路をズン〳〵歩いた、それも其あとについて歩いた。途中では誰にも逢はずに驛の附近の駐在所へ行つた。日本風の玄關の障子を開けて上ると疊をあげて板間にしてあつた、そこに粗末なテーブルと一脚の椅子があつた。もう一つそれの爲めに椅子を持つて來てくれて、テーブルの横にそれがかけた。彼方の障子の陰に長火鉢が据へてあつてお神らしい女が木綿着で何かこそ〳〵やつてた。お巡査は帽子を釘にかけたり、劍をとつたりごそ〳〵やつて來てテーブル前に腰をかけた。お神が澁茶色のした湯呑についだ茶を持つて來て机の上に置いて行つた。

巡査は罫紙をのべたり、硯の墨をすつたり、そんなことに暇を入れて筆の頭をしがんで罫紙に何か少し書いてからそれに問ひ出した。

「何日お出になりました、」

「さあ —— 三日前ですが日は忘れました」

指を折つてみて、

「ぢや××日ですな、」

「さうでしよう、」

「何の目的でお出になりました、」

「さあ——そう明瞭した目的はありませんが、强て云へば景色を見に來たとでも云へるでしよう、」

「小村屋はどうして知つてゐるんです、」

「去年來た時友達が紹介してくれて、」

「始めからあすこに泊るつもりで來たんですか、」

「そうです、」

「そうすると三晩泊つた譯ですね、」

「その間に一日糸魚川に行つて泊りました—

「糸魚川には何しに行つたんです、」

「友達がゐますから訪問に行つたんです、」

「小村屋で遊興はしましたか」

「しません、」

「金は拂はないんですか、」

「金は別に拂ひませんが、禮をする意志はあります、」

「何日迄居るんです、」

「何日迄だか分りません、」

「何故宿屋に泊らないんです、」

「此度來たら是非私の方で泊つてくれと云ふことでしたから、」

「あすこは旅館でないんですから泊めることは出來ないんです、」

「それはお客としてゞしよう、」

「いや親戚の人はいゝですが、それ以外の人はいけない規則になつてますから、」

問答が了つて暫くすると罫紙に二枚ばかり書いたものを出して署名してくれと云つた、見ると聞取書と云ふ表題で今云ふたことが言文一致體で下手な字で書かれてあつた。をれは二個所程字の違つてゐるところと意味の違つてゐるところを直させて署名した。そこへ主人が、

「ごめんください。」

と外から聲をかけて玄關障子を開けた。

「もうすんだからゆくよ。」

をれが云ふのに、主人は上つて來た。巡査は。

「まあ一服して入らつしやい、」

とと云つて主人を長火鉢のところへ招じた、

主人はをれを

「先生どうぞこちらへ、」

と、云つて主人はおれをも矢張り長火鉢の前へ招じた、巡査は二人に茶を入れて出した。

それから主人と巡査との間に何故泊めていけないかと云ふ議論があつた。

「親類でなくつたつて親類同樣にしてゐる友達ならかまわんぢやありませんか、」

と主人が云つても、

でもそいつはこつちで分からんから、と云ふので結局主人の方が折れて仕舞つた。

それから組合のごた〳〵に就いて主人からいろんな中傷者の不心得を訴へたりなんかしてゐたが、そんなことはみな

忘れて仕舞つた。主人と二人で近路をして家へ歸つて來たら、戸田と三公と年ちゃんが心配して駐在所へ迎に行つたと、お神が云つたの恰度行き違ひになつたのだ。

その晩は遠慮して寢る時だけ向の婆さんが一人でやつてゐる穢い宿へ行つて寢た。

一四

翌日朝早くから戸田と家をさがしに野尻へ行つた。船に乘つて向岸へ渡つて西洋人のやり出してゐる山の上の別莊村を見て湖畔の宿で飯を食つて野尻を出た。野尻がすんで隣村に來た時小村屋からの使に逢つた、それはをれへの電報だつた。差出人は戸田の妻君のお久さんからだつた。

「オクサンニユインサレタスグオカエリクダサイ」

と云ふ文句だつた。

使の者が心配そうに電報の内容を知りたそうな顔付だつたので

「妻が入院したんだ、」

使にもきこへる位の聲で云つた。

をれはこゝろの内で余りいろんなことでごた〳〵したから亢奮して自殺しようとして怪我でもしたんぢやないか、といふ氣がちらとした。

戸田は無言でおれから何とか切り出すのを待つてゐるようだつた。

「どうしたんだろう、」

と戸田の方へ云ふと、

「さあ――私の立つ前陽子さんが些し熱があるとか云ふことでしたが、それが奥さんにでも傳染つたんぢやないでしようか」

「そうだろうか、」

そう云ひ乍らもそれは心のうちで心配だつた。

路々戸田と今夜の汽車で歸ろうと云ふ相談をして、汽車の時間なぞを二人がうろ覺への記憶で云ひ合乍ら小村屋へ歸つた。

主人もお神も奥さんの御病氣がおなをりになつたら是非もう一度皆さんと難波旁々入らしてください、と云ふ別れの言葉を聞いてその夜の夜行で出發した。

お前は退院後、それに、

「要洗禮をうけてよ、あなた、よくつて」

と云つた、それはお前が今迄てんで馬鹿にしきつてゐた宗教にはいろうとする、秋傷な心持になつたことをよろこんだ。で、

「いゝだろう、」

と云つた。それは斯う云ふ場合決定的な返答をしない口癖がついてゐた。それともう一つにはお前が一たびあるものを信ずれば、殆んど盲目になつて進んでゆくその恐ろしさを感じてゐたから。それの心は如何信じなければならないものにも、不安と疑念の心が潜在的に動くのがそれとお前との異常にちがつてゐる點だつた。

然しお前が兎も角もそう云ふ心を起こしてくれたことによつて今後の二人の生活が一變するだろう。そして幸福な新生活が始まるだろう、そう思つてをればひそかに歡ろこんだ。それから又お前はある日の食後眞顔になつてをれに云つたことがある。

「ねえ、あなた、妾あなたにお願があるんですが、」

「なんだい、」

「これから妾――毎週一度宛教會へだけやらしてくださいませ、それだけがあなたに對する妾の最後の我儘なお願ひですから、」

と少し淋しい顔つきで云つた。をれはあの時、お前が今後今迄の生活を全くふり捨てゝ仕舞つていかにヤソごりになるかと思はれて些し心配でもあつたが、

「無論いゝぢやないか、」

と云つた。

其後日曜の朝になるとお座敷の掃除がすんだ後、鏡台の前に座つて髪をなでつけ乍ら、小供等に、

「今朝は阿母さんは教會へ行つてくるからお前達待つてゝおくれよ、」

と云つてゐるのをきいた。

髪がなでつかると赤ん坊に乳をやり乍ら、

「たみや妾は今朝教會へ行くからね、ひかるちやんにお乳をのましたら些しみてゝおくれよ、おんぶでもして、」

そう云つて、赤ちやんをたみやに渡して、お前は帯を締めなをした。

教會から歸つて來たお前からいかに、教會のおいのりの崇高な光景とクリストの愛のありがたいことの話を食卓の上にきかれるかをたのしみにしてゐた。

帯を締めなをしたお前は、今來た郵便物の中から流行るといふ外國雜誌の到着したのを見出して、其儘そこにぺつたり座り込んだ。そして小供等を左右に集めて雜誌の中にある洋服の品さだめをしてゐた。

「ステキねえ——外國人はどうしてこんなにいゝんだろう。」

「お母さま、そりや矢張り女優ぢやない、」

「そうでしようか、」

「だつてまるで表情がちがうんですもの、」

そんなことを云つて夢中になつて、雜誌をおしまいまで見て仕舞つて、

「ちよいと時計は何時、」

「お母さまもう十時よ、」

「もう教會はをそいはね、此の次の日曜からにしよう、」

そんなことで、その日は教會にお前は行かなかつた。其の次の日曜には行くのかと思つてゐたら、矢張り掃除をしてゐる頃は、さかんに教會々々と云ふ言葉をきいたが遂に行かなかつた。その次も、その次も、とう〳〵お前からいつの間にか教會と云ふ言葉を全くきかなくなつて仕舞つた。

その年の秋もすんで冬近くなつたころから、洋行と云ふ言葉が教會に代つて頻りにをれの耳に這入るように成つた。



丸橋忠彌（全三幕）

（新釋慶安太平記）

菊池寛

人物。丸橋忠彌。

その妻お貞。

由比正雪。

河原十郎兵衞。

同甚左衞門。　年若し。

芝原又左衞門。

加藤一郎右衞門。

櫻井三太夫。

弓師藤四郎。

おでんやの主人。
仲間　三人。
永山六郎右衛門。
菊池源右衛門。　町奉行所與力
その他。

時。慶安四年七月二十日の夕暮より翌日の宵まで。
所。江戸。

第一幕

牛込榎町由比正雪の家、大身の旗本の家位宏壯である。奥の書院。正雪を初とし、一味の河原十郎兵衛、同甚左衛門、芝原又左衛門、加藤一郎右衛門、櫻井三太夫など、正雪を取り捲いて、密議してゐる。正雪は頭を總髮にし、色白く、唇あつく、眼丸くひらきて、眼中光あり。

時。慶安四年七月二十日の夕。

正雪。(河原十郎兵衛に)さやうか、やつぱり首尾が惡かつたのか。貴殿のは可なり當にしてゐたのだが。
河原。いや、色々事をわけて賴み申した。正雪殿、今度愈々紀州侯へお抱へとなつたにつき、支度金思ひの外入用に

にて、手許不如意につき、一時拜借申したしと、餘議なく賴みましたが、何分七百兩といふ大金では、……。

正雪。七百兩は叶はぬとして、その中何程かは用立てようと云はなかつたか。

河原。その事は考へましたが、何分武士の金談、金額にはかけひきは、付けられませず相手が切り出せば格別、當方より、それでは參百兩、貳百兩とは申し兼ねました。

正雪。……なるほど。

（正雪腕をくむ。）

櫻井。拙者知音の土州屋太平衛にも、金談のことを申し入れて見ましたが、百兩と云ふ聲がかゝると、もう捗々しい返事は致しませなんだ。

正雪。我々が一期の企をいたし、一世一代の本懐を達する間際になりて、金子のために、心を苦しめ、各々方にまで、かやうな配慮にあづかること、いかにも心外でござる。正雪かやうに手許不如意になるについては、お疑ひもござらうが、御存じの通り拙者いさゝか貯へし金子、數年來數限りなき浪人衆に合力いたし、そのためいざ鎌倉と申す今日になりて、思はぬ不自由を致す次第お察し下されい。

加藤。いや、先生ばかりの罪ではござらぬ。拙者どもが不甲斐ないのでござる。御身さま一人を當にしすぎたのでござる。だが金井半兵衛殿は、浪々の御人に似ず內證よしと承つて居りましたが。

正雪。あはゝゝゝ、いやその金井氏などがあればこそ、今までは、やうやく切りぬけて參つたと云ふものぢや。金井氏と知音致してより、千四五百兩、いや、二千兩近くも融通を受けたであらうか。此月初、金井氏大阪表の大將として、先發さらるゝときも、參百兩ほども殘して行かれた。金井氏なくば、今ほどの手筈さへ、整ひがたき次第でござ

つた。

芝原。 備前侯からは、何とかなりませぬかな。

正雪。 いやとても、熊澤に妨ぎられてからは以前ほどの信用はござらぬ。この際、下手な無心など申さうなら、却つて大事露顯の基でござる。

加藤。 金のために、我々の企てが、十二分に參らぬとは、何とも無念でござるナ。

正雪。 甲斐の武田、越後の上杉、尾張の織田、昔とても金があるものは、強かつたのぢや。關ヶ原以後、豐臣右大臣家の勢ひが、ちゞまつたあとでも、大阪城に金のふんどうがある間は、さすがの狸おやぢどのも、手を出し申さなんだ。まして、太平の御代に、人を動かすのには、利を以て啖はするより、外に道はない。千兩あらば百人の人が動き、一萬兩あらば、千人の人が動くのぢやが。

櫻井。 丸橋殿には、知音の分限者も多いことゆゑ、何とか才覺の道がありさうに思はれるが。

正雪。 (苦笑して)なに、あるものか。丸橋は武勇一點張、金の苦勞などする人ではない。大方正雪などは、金のなる木でも持つてゐると、安心して居らるゝだらう。あはゝゝゝ。

加藤。 でもござるまいが。かの仁になるほど金の苦勞はなさゝうに見える。

櫻井。 十文字槍さへ、振り廻して居れば、天下の事は、立ちどころに成ると思つてゐるのだらう。あはゝゝゝ。

皆。 (さびしく笑ふ)

加藤。 でも、さし當つての用に事缺ぐ程ではござるまい。

正雪。 いや、駿府に立ちこえ、久能山の金藏を、安々と乘取れば、金子は思ひのまゝでござらうが、江戸よりの報ら

せを待ち、駿府城に取りかゝるまでの物入りは、……走せ集つた浪人に、五兩十兩と分たねばなるまいし、糧食の買入れ、人足どもへの手當。二千兩も用意したい所だが。

櫻井。なるほど、尤もでござる……。

（皆、考へ込む。）

加藤。いや、御心配あるな、萬一の場合には、駿府城下の町人の家へ押し入つても……。

正雪。いや、假にも楠流軍學の家をついだ正雪として、天下に弓を引くのは、本懐ぢやが、押込强盗にはなりたくござらぬ。あはゝゝゝ。其處まで身を落したうござらぬな。それも小事に、こだはると申さば申すやうなものだが。

櫻井。御尤も。

（彼方に人聲がきこえる。）

芝原。おゝ何人か、來客があつた樣子ぢやな。

（若き武士出て來る。）

若武士。丸橋殿でござります。

正雪。なに、丸橋殿。これへ、お通し申せ。

若武士。ははつ。

（若き武士去る、丸橋出て來る。長身にして逞しき武士。一座、やゝ白ける。）

丸橋。いやあ、各々方お揃ひでござるな。

加藤。あゝ、先程から。

丸橋。何か評議でもして居られたのか。
櫻井。いや、別に………。
丸橋。さやうか。でも、何となく物々しく見えるな。
正雪。いや、自然各々方が寛られたのぢや。
丸橋。駿府へお立ちの用意は整つたか。
正雪。整つたといふほどでもないが、先づあらましは………。
丸橋。それは祝着。………うゝむ、用談を先きへすまさう。拙者今夕參つた用事と云ふのは、ちと申し憎い儀だが、今二百兩だけ、融通していたゞきたいのぢやが。
正雪。（當惑して）なに、二百兩とな……。
丸橋。左樣、先頃江戸表手當として、千二百兩いたゞいたが、拙者配下の者へ、十兩づつ支度金を遣はし、もはや幾程も殘つて居らぬ………。
正雪。………だが、最初からその千二百兩で、萬事おまかなひあるやう、くれぐ\お願ひした筈ぢやが。
丸橋。でも、足らぬものは、仕方がござらぬ。
正雪。とは云へもはや本懐の日まで、アト幾日もござらぬ。その間は、何とか御身さまの才覺で。
丸橋。いや、この忠彌は、金の才覺は、一向不得手ぢや。
正雪。………二百兩と申せば大金、さし當つて、さほどまとまつた金が………。
丸橋。事情を申上げねば、お疑ひは尤も。實はその、弓師藤四郎に、まだ弓矢の代金を拂つて居らぬのぢや。

正雪。　えー（輕くをどろく）

丸橋。　面目次第もござらぬ。

正雪。　それは丸橋殿、話が違ふではござらぬか。弓師藤四郎には、利を以て喰はし、ひそかに弓矢を作らせた上は、代金などは第一にお拂ひ下されいと、千二百兩をお渡しするとき、くれ〳〵申したではござらぬか。

丸橋。　左樣仰せられると、一言もござらぬが、拙者の不念から、つい後廻しにいたしたところ、いろ〳〵入用の金が重んで、千二百兩皆になり申した。

河原。　それは、丸橋殿として、ちと不覺。

丸橋。　傍から嘴をお出しなさるな。アトにしても先きにしても、足らぬものはやつぱり足らぬのぢや。藤四郎へ、先に二百兩呉れておけば、何かで二百兩足りなくなつてゐるのぢや。

正雪。　もはや、明日にも明後日にも、江府を立ち退く今となつて、左樣の大金は、正雪にも、ちと融通がいたしにくうござる。

丸橋。　然らば、如何うすればよいと仰せらるゝのぢや。

正雪。　さらばぢや、いまゝで十日なり二十日なり、猶豫した貸金、今五日や十日の猶豫がならぬわけはござるまい。貴殿からよくお賴みなされば。

丸橋。　今日まで、猶豫して貰ふにさへ、下げたうもない頭を、町人風情に幾度下げたかも知れませぬ。もうこの上、頭を下げることは、嫌でござる。

（正雪、だまつてしまふ。）

丸橋。　一體、江戸表の手當、千二百兩と云ふ金が、これほどの大事を企てる支度金としては、雀の涙ほどの少額では
ござらぬか。

正雪。　さやう、それは此の方も、よく承知いたして居る。だが、貴殿も御存じの通り、去る七月五日一黨の在り金、三千七百兩を、江戸、駿府、大阪、京都と、人數に割つて分けたのぢや。正雪、百兩はおろか、一文半錢と云へども私してゐるわけではない。今に及んで、餘分の金は十兩も用意がござらぬ。お身様で、何とか才覺して、この急場を切りぬけていたゞきたい。

丸橋。　是非もござらぬ。ただ、かやうに本懐の日が近づいて、城ぜめ燒拂ひの手段を、考へてゐる代りに、金で苦勞をいたさうとは、心外でござる。

正雪。　それは、御同様に心外でござる。

（若い武士、登場する）

若き武士。　松平阿波守様より、お使ひでござります。

正雪。　お屋敷への御招待の打ち合せであらう。打ち合せしても、もはや詮もないことだが、お目にだけはかゝらう。然らば各々方、失禮ながら、暫時中座。

加藤。　どうぞお心置きなく。

正雪。　然らば、丸橋殿にも。

丸橋。　いづれ後刻お目にかゝる。

（正雪去る。丸橋快々として樂します。一座白ける。）

加藤。丸橋殿、御心中は察しる。ぢやが、一黨に不足してゐるものは金ぢや。お身さまだけに不自由をさせるのではない。駿府へ立ちこえる我々とて、一文たりとも餘裕はない。

丸橋。餘裕はなくとも、借金の云ひわけはしなくてもいゝだらう。

加藤。さう云へばさうぢや。

丸橋。此の弓師藤四郎と申すもの、聞ゆる因業ものにて、朝夕の督促、きかされるだけでも、いら／＼いたす。

芝原。もはや六日か七日の御辛抱ではござらぬか。我々が計略の一端さへ成就いたさば、金銀も思ひのまゝぢや。

丸橋。さう問屋でおろさうか。（忠彌はかすかに笑ふ）

加藤。何にいたせ、茲が辛抱ぢや、その弓師藤四郎とやらを、穩便に云ひくるめ、今五六日猶豫させるが肝心でござる。

丸橋。そのやうな事は、この氣短かな忠彌には、一向不得手なのぢや

（一座、また白ける。）

櫻井。（丸橋の氣持を轉ぜんとする如く）いかに丸橋どの、拙者と貴殿とは、數年來の碁敵ぢやが、拙者明日か明後日、駿府へ立ちこさば、これが一生の別れになるかも知れぬ。どうぢや、一生の思ひ出に、一石圍まうか。

丸橋。いや、よさう。

櫻井。なぜ。

丸橋。氣がむしやくしやしてゐる。碁など打ちたうない。

櫻井。それでは、貴殿一番負け越しのまゝにして置くか。

丸橋。なに、負け越し、左樣な筈はない。
櫻井。いやお忘れあるな、先夜貴殿のお宅でお手合したとき、拙者三番勝ちこしましたぞ。
丸橋。でも、その前、本因坊の碁會にて、拙者勝ちこした筈。
櫻井。いや、あの時は、貴殿から二番借り申した。だが、先夜の勝にて、その借を拂ふて一番丈拙者勝ちこしてゐる。
丸橋。そんな筈が。
櫻井。いや、お忘れあるな。
丸橋。よし、それなら一番手合して、拂ふて置かう。藤四郎からの借金を殘して置く上に、碁の借を殘して置いては、忠彌愈々顏が立たぬ。一番おいでなされ。
（櫻井、碁盤を持つて來る。）
櫻井。一世一代の碁ぢや、おろそかに打たれぬ。
丸橋。御同樣、拙者たしか白番。
櫻井。黑を持つても勝てばよい。
丸橋。何を。
芝原。これは、思ひかけぬ面白い勝負ぢや。
加藤。いかにも。この勝負に賭でもいたしたいところぢや。
丸橋。かけるならば、丸橋に。丸橋の勝利にきまつてゐるものを。

櫻井。さうとも限るまい。

丸橋。何を申す。

（二人打ち始める。しばらく丸橋、强く石をおろす。石はぢけて飛ぶ）

櫻井。石飛んで、その碁に勝たずか、もう少し、ゆつくりお打なされ。

丸橋。何を入らぬ、忠告！それより、この石がはや危くなつたぞ。

櫻井。何の、何の。かう桂馬に飛べば、天下太平ぢや。

丸橋。何、このあたりから遠く圍んで、大きくしてから殺す。

櫻井。あはゝゝゝ、おろかな、はや一目、目が出來たわ。

丸橋。かう打ちこめば、何うする。

櫻井。そんな打込み、かうする。

丸橋。うん、仕方がないか。

櫻井。それ御覧なされ。

（二人默々として打ちつゞける。）

丸橋。あはゝゝゝ、此の石は、取つてしまつた。

櫻井。仕方がない。それは捨石ぢや。

丸橋。何だと。

櫻井。そんな石は、最初から捨てるつもりで打つたのだ。云はゞ、犧牲の石だ。中原に、足場を打ち立てるまで、敵

おけん制する犠牲の石ぢや。たとへば、我々の企てゝ申せば……。
丸橋。何だと。
櫻井。あはゝゝゝ。かうして四方一度にかゝるのだ。
（他に轉じて打つ。）
丸橋。何をそんな所で、ジタバタしても。
（二人打ちつづける。櫻井、だん〳〵悲境に陷ちる。）
櫻井。困つたな。かうでもして見るか。
芝原。駄目〳〵。それは惡い考だ。
丸橋。芝原、助言は無用だ。
櫻井。困つたな。これは、何うするか。玆へ………。
加藤。もつと考へたらいゝな。大事な所だ。
丸橋。傍の者は、だまつて居れ。
櫻井。困つたな。下へさかつて置くか。それとも、かうのびるか。
芝原。（ふと謠曲の一句を思ひ出した如く、膝を叩いてうたふ。）わたらば錦、中やたえなむ。………わたらば、錦中やたえなむか。
櫻井。さうだ、かう渡つて置けば安全だ。
丸橋。ちえつ、到頭逃したか。此石さへ殺して置けば、拙者の勝利疑ひなかつたに、殘念ぢや。

（二人打ちつゞける。）

櫻井。それ御覧なされい。今度は此の石が危いではござらぬか。

丸橋。何を申す。かゝる大石が死んでたまるか。

櫻井。たとひ、大石たりとも、我黨の軍略にかゝつては、徳川の天下と同然ぢや。

丸橋。馬鹿を申せ。かう、開いて置けば。

櫻井。あゝ、いよ〳〵寂滅爲樂だな。大きいまゝで殺すか、二つに切るか。

加藤。なるほど、中央の白は、危險でござるな。

丸橋。何を傍から。

芝原。鞍の前輪に押しつけて……鞍の前輪に押しつけて。（と謡ふ）

櫻井。なるほど、切つてやれ。

丸橋。（憤然として）待て、待て、この石切ること無用。

櫻井。なに、無用とは。

丸橋。武士たるものが、助言を聽く奴があるか。芝原、貴殿、今何と云つた！

芝原。何も云はぬ。たゞ、實盛の一句が、口に浮ぶがまゝに。

丸橋。えゝ、人をうつけものになし居るか。先刻も、渡らば錦中やたえなんと謡つて、渡れと云ふ謎をかけ居つたが、拙者優勢の局面なれば辛抱いたしたに、鞍の前輪に押しつけてとは、明に切れとの謎ではないか。重ね〳〵の助言勘忍ならぬ。

（丸橋、刀を引き寄せる。）

芝原。な、な、何を云ふ。たとひ明らさまに助言いたさばとて、助言は我々の碁には、付き物ではないか。さう云ふ貴殿が、先年奧村八郎右衞門と、正雪どのとの對局を、傍から助言して、奧村を怒らせたではないか。

丸橋。それとこれとは、話が違ふ。奧村と正雪殿との碁に、正雪殿を勝たせたいは、人情の當然。拙者と櫻井との勝負に、何の意趣あつて助言するのだ。拙者に意趣でもあると云ふのか。

芝原。意趣と云へばないでもない。一黨の皆々、本懷の一事のために、身を愼しみ物を節し、一文半錢と云へども倹約いたし居るに、貴殿ばかりは大酒をあび、割當の大金をつかひ果し………………

丸橋。な、何と申す、此の丸橋が、大切の軍用金を私用にでも使つたと云ふのか、勘忍ならぬ、庭へ降りろ！

芝原。望みなら、降りやう。

（正雪出て來る。正雪をどろいて止める。）

正雪。御兩所とも、何事でござる。聲が高い、おしづまりなされい。

丸橋。でも、この芝原が、あまりと云へば過言な。

正雪。何を仰せらるゝ。一黨の長者として、江戸表の大將たる貴殿が、大事を前に控へて、圍碁の勝負などに。

（丸橋、しばらく默つてゐたが、）

丸橋。江戸表の大將と仰せられたな。

正雪。左樣！

丸橋。江戸表の大將たる拙者が、わづか二百兩の才覺が出來ぬのか。あは…………、わは……。

芝原。　おだまりなされ！丸橋氏。

丸橋。　だまれとは過言な。問答無益、芝原庭へ出ろ。

正雪。　丸橋どの、何の醉興。貴殿亂心めさつたか。

丸橋。　いや、亂心などとは以ての外だ。亂心せねばこそ、各々方の心持がよく分るのだ。

正雪。　拙者らの心持とは何ぢや。

丸橋。　いや、この丸橋を疎外してゐる各々方の心持だ。

正雪。　疎外とは、きゝ捨てならぬ。何が疎外だ。

丸橋。　忠彌は、槍一筋の業の外は、何も分らぬ武骨者ぢやが、各々方の心持位は分る。ハッキリ分るのだ。

正雪。　分れば云つて御覽なされ。

丸橋。　第一今日の會合ぢや。一黨の領袖どもが、あつまりながら、なぜ丸橋を呼ばれぬぞ。それからして心外だ。

正雪。　それは思ひの外なる邪推、先刻も申した通り、偶然集まられたのぢや。

丸橋。　嘘を仰せられな。各々方は此の忠彌を持てあましてゐるのだ。疎外してゐるのだ。いつも大事な評議には加へず、たゞ眞先に水火の中に飛び込ませやうとする各々方の心が、よく分る。江戸表の大將などと、拙者をおだて上げ、天下の鋭鋒を拙者にさしむけ、各々方は、拙者が江戸で肉を刻まれ、骨を碎かれてゐる内に、ゆつくり駿府で支度をしやうと云ふのだ。碁で云へば、拙者は捨石だ。敵の石が金城湯池と並んだ中へ、打ちこまれ、左をつき右をつき、やつきとなつてあばれた後、おしまひに取られてしまふのだ。大局が勝つても負けても、拙者丈は必ず取られるのだ。あは……、云つて見れば人柱だ。人柱だ、あは……。いやよく出來てゐる、江戸表の大將、さうおだて

られゝば、丸橋忠彌欣んで、貴殿らが天下を取る踏臺になり申す。

正雪。さて〳〵、念の入つた邪推。

丸橋。何が邪推。丸橋などは結局は、一黨の調和を破る。今の中働からして、出來るだけ使つた上で、殺させてしまはふ。それが貴殿の肚だ。

加藤。丸橋どの、過言だらう。

丸橋。過言ではない。江戸表の人數わづかに二百餘。その中に正雪どの腹心のものは、一人もゐない。皆この丸橋のやうな亂暴者ばかりだ。人の手先に使はれる馬鹿者ばかりだ。あは…………。

正雪。丸橋どの、それは本氣で仰せられるか。

丸橋。本氣でなくて何で云ふ！

正雪。名家の末たる貴殿のお考へとは思はれぬ。

丸橋。なに！

正雪。江戸で事を擧ぐる貴殿が、捨石ならば、駿府で事を起す拙者も捨石。江戸が敵の重圍の中なら、駿府も正しく重圍の中。この企て、何人が一身の安全を期し申さうや。德川の政道邪まにして、酒井讚岐、松平伊豆等の奸臣權を專らにし、萬民塗炭の苦しみを受け、殊に浪人の取締過酷にして、天下十萬の浪人は、その日の糧に苦しむ。正雪が事を擧ぐるは、一身を犧牲にして、一個所を堅め、能ふかぎり幕府に手向ひ、天下の人心を驚ろかし、奸臣の夢をさまし、幕府の秕政を質し、十萬の浪人を救はんためでござる。何ぞ一身の榮達を期し申さうや。まして多年血盟の御邊を、いけにへに致してまで、拙者安全の地を撰び申さうや。

丸橋。あは……、いつもの正雪どのの、口説き上手、忠彌もその辨舌に、一時は迷はされた。

加藤。この期に及んで、貴殿は血盟を捨てらるゝか。

丸橋。左樣、この忠彌は、意氣のためには一命も何のそのと存ずるが、利用はされたくない。お先きには使はれたくない。氣のそむいた人々と、生死を伴にする氣はござらぬ。

加藤。芝原。櫻井。何と。

(皆刀のつかに手をかける。)

丸橋。あはゝゝゝゝ、何うするのだやせても枯れても長曾我部秦の盛澄、貴殿らの腕で刃がたつと思ふのか。あはゝゝゝゝ、かゝる所に長居は無用。うかうか長座して、大事でも發覺せば正しく連累、磔ぢや。御免。

(丸橋、悠々と去る。芝原、追ひかけやうとする。)

正雪。無用になされ。

芝原。でも、返忠でもされゝば一大事。

正雪。まさか、それほど卑怯な丸橋でもござるまい。

加藤。とは申せ。

正雪。それよりも何とて貴殿らは、忠彌を怒らせたのだ。

櫻井。初めは坐興に碁を始めたのだが、芝原殿が………。

芝原。つい丸橋に對する反感から、ウカウカと助言いたした。拙者、重々のあやまり。

正雪。それは貴殿らが惡い。(正雪深く考へ込む)いかに致しても事は去り申した。最初から、いろいろつきづきは

ござつたが、これにて愈々大事は去り申した、

芝原。とは申せ、忠彌一人位、追ひかけて打ち果し、

正雪。打ち果すれば、江戸表の味方は、悉く意氣沮喪する。

櫻井。とは申せ、生けて置いては。

正雪。忠彌の生死は、もはや問題ではござるまい。只さへ手薄い一黨の和が破れた上は、凡てはこれまで。

加藤。拙者、これより忠彌めが後を追ひかけて、人知れず打つて捨て、江戸表の大將は新に河原十郎兵衞どのを立て…

正雪。（冷靜に）それもよからう、せめてもの腹いせに、貴殿存分になさるがよい。

加藤。然らば、御免。

櫻井。拙者も直ぐ後より、心利きたるもの二三名をつれて、後詰いたす。

加藤。御厚志忝けない。忠彌め、山吹町より江戸川端へ出るに相違ござらぬ。………拙者は一足先きへ。

（加藤、かけ込む。）

正雪。忠彌を切つたとて、覆つた水は歸らぬ。あはゝゝゝ、正雪は、ともかくも明朝江戸を立ち、志せる駿府へ落ち、事の成行をうかゞひ、ともかくもなるでござらう。

櫻井。何をお心弱い。忠彌さへ打つて捨てれば………

正雪。心の弱いのではない、先きが見えるのだ。あはゝゝゝ。

櫻井。とにかく我々の吉左右をお待ちなされい。

（櫻井、去る。）

丸橋。あは……、いつもの正雪どのの、口說き上手、忠彌もその辨舌に、一時は迷はされた。

加藤。この期に及んで、貴殿は血盟を捨てらるゝか。

丸橋。左樣、この忠彌は、意氣のためには一命も何のそのと存ずるが、利用はされたくない。お先きには使はれたくない。氣のそむいた人々と、生死を伴にする氣はござらぬ。

加藤。芝原。櫻井。何と。

（皆刀のつかに手をかける。）

丸橋。あはゝゝゝゝ、何うするのだやせても枯れても長曾我部秦の盛澄、貴殿らの腕で刃がたつと思ふのか。あはゝゝゝ、かゝる所に長居は無用。うか／＼長座して、大事でも發覺せば正しく連累、磔ぢや。御免。

（丸橋、悠々と去る。芝原、追ひかけやうとする。）

正雪。無用になされ。

芝原。でも、返忠でもされゝば一大事。

正雪。まさか、それほど卑怯な丸橋でもござるまい。

加藤。とは申せ。

正雪。それよりも何とて貴殿らは、忠彌を怒らせたのだ。

櫻井。初めは坐興に碁を始めたのだが、芝原殿が………。

芝原。つい丸橋に對する反感から、ウカ／＼と助言いたした。拙者、重々のあやまり。

正雪。それは貴殿らが惡い。（正雪深く考へ込む）いかに致しても事は去り申した。最初から、いろ／＼つまづきは

ござつたが、これにて愈々大事は去り申した、

芝原。とは申せ、忠彌一人位、追ひかけて打ち果し、

正雪。打ち果すれば、江戸表の味方は、悉く意氣沮喪する。

櫻井。とは申せ、生けて置いては。

正雪。忠彌の生死は、もはや問題ではござるまい。只さへ手薄い一黨の和が破れた上は、凡てはこれまで。

加藤。拙者、これより忠彌めが後を追ひかけて、人知れず打つて捨て、江戸表の大將は新に河原十郎兵衛どのを立て…

正雪。（冷靜に）それもよからう、せめてもの腹いせに、貴殿存分になさるがよい。

加藤。然らば、御免。

櫻井。拙者も直ぐ後より、心利きたるもの二三名をつれて、後詰いたす。

加藤。御厚志忝けない。忠彌め、山吹町より江戸川端へ出るに相違ござらぬ。………拙者は一足先きへ。

（加藤、かけ込む。）

正雪。忠彌を切つたとて、覆つた水は歸らぬ。あはゝゝゝ、正雪は、ともかくも明朝江戸を立ち、志せる駿府へ落ち、事の成行をうかゞひ、ともかくもなるでござらう。

櫻井。何をお心弱い。忠彌さへ打つて捨てれば………

正雪。心の弱いのではない、先きが見えるのだ。あはゝゝゝ。

櫻井。とにかく我々の吉左右をお待ちなされい。

（櫻井、去る。）

正雪。　事が未然に破れるのも、凡ては金が足らぬためぢや。はて正雪の武略も、……埒もない、あはゝゝゝ。

（寂しく笑ふ）

第二幕

情景。　江戸川端大曲り附近。　向ふに江戸川の土堤が見える。葉櫻になつて櫻が、數本立つてゐる堤をこえて遠く夜の邸町。

おでんやが、屋台をおろしてゐる。仲間三人。二人床几に、腰をかけ一人立つてゐる。

仲間一。　かう、おでん屋さん、この頃神樂阪の行元寺の門前に、白首が出ると云ふのをきいてきたのだが、いくら待つても出やしねえ、馬鹿々々しくつて、狐につまされたやうな氣がした。一體出るのかね。

おでん屋。　それよりか音羽六丁目のびく尼をお買ひになる方が、間違がなくて、ようござりませう。

仲間一。　型には入つたびく尼買より、何か堀出し物があるまいかと方々探してゐるのだが。

仲間二。　俺、これから市ケ谷八幡前へでも行つて、野郎でも買ふとしようか。

仲間三。　だが重役の旦那方が、柳橋や今戸へ行つて、藝者を上げて呑まつしやるのも、こちとらが、白首買の元氣をつけるために、かうして飲むのもうまい味は同じだ。

仲二間。　そりや川長や有明樓と一つにやならねえが、醉つてしまへば旦那方だつてこちとらだつて、替りはねえ。

仲間一。　喰ひつけねえ物を喰ふより、やつぱり煮込みのこんにやくか芋で、ぐい／＼呑む方が、氣がこらなくつてよつぽどうめえ。

仲間三。おい、もう半分ついでくんねえ

おでんや。はい／＼又、お替りでございますか。

仲間二。かう手前、半分づゝ幾度呑むのだ。

仲間一。これで丁度、三度目だ。

仲間三。はて半替りがよつぽど得だ。

仲間一、二。いや勘定高い奴だな。

（その時、忠彌登場。既に酩酊し蹌踉としてゐる。）

忠彌。あゝ少し酔つたかな。これで喧嘩のむしやくしやが、少しはとれた。（舞台へ來り三人の酒を呑んでゐるのを見て）いや、やつてゐやがるな、これを見ては見のがされぬ。どれもう少しやつて行かうか。

仲間一。（忠彌を見て床几より立つ）御武家さまこれにおかけなさりませ。

忠彌。うん、これは忝い。

おでんや。これは入らつしやりませ。芋であげますか、蒟蒻(こんにやく)で上げますか。

忠彌。何でもいゝから、熱かんで二三杯のましてくれ。

おでんや。へい／＼畏りました。

（徳利と朝顔茶碗を忠彌に出す）

忠彌。茶碗とは、ありがたい。（忠彌のんで）あゝ、これはすてきに好い酒だ。

おでんや。わたしが、好きで、ござりますから、かつぎ屋台ではござりますが、酒はよいのをさしあげます。

忠彌。なに、亭主、貴さまも好きか。
おでんや。へい大好きでござります。
忠彌。酒が好きとは賴もしい一寸一杯相手をしろ。
おでんや。有がたうムいますが、商買ものを飮みましては、
忠彌。代はおれが拂ふから遠慮せずに相手をしろ。
おでんや。左樣なら、酒の代は貴君が拂つて下さいますか。
忠彌。おゝさ、酒の代なら、いくらでも拂つてやるから、うんとのめ。
おでんや。それは有がたうございます。左樣ならお相手いたします。これははゞかりさま。
(忠彌ついでやる。三人の仲間思ひ入れあつて)
仲間一。もし旦那、御機嫌でござりますな。
忠彌。(三人を見て、)何が御機嫌なものか。これでも、先刻友達とけんかをなし、むしやくしやまぎれに、石切橋の鰻屋で、一升五合ばかりつゞけさまに、ひつかけて、やつときげんがなをつたのだ。
仲間二。何しろ、いゝ御機嫌のやうに見えまする。
忠彌。貴さま達も酒がすきか。
仲間。いえもう、すきのくわのと、私共は酒ときくと目がござりませぬ。
忠彌。好きなら、おれがおごつてやるから遠慮なく呑むがいゝ。
仲間二。それぢや、呑まして下さりますか。

三人。それはありがたうムります。

忠彌。亭主ついでやれ。

おでんや。へい〳〵畏りました。又半替りでござりますか。

仲間三。人のおごりなら、滿々くりやれ。

仲間二。いや。現金な奴だ。

おでんや。お前さん方にも上げませうか。

仲間一。御馳走ならいやとは云はねえ。

仲間二。おれにも滿々ついでくんねえ。

忠彌。いや、かう酒好きな者ばかり集つたとは面白い。これ亭主、肴は何がある。

おでんや。へい芋とこんにやくの煮込みでござります。

忠彌。煮込みとはありがたい。何でもいゝから出してくれ。

おでんや。へい〳〵畏りました。

忠彌。いや。これだ煮込のおでんでやつちよるねとは、こゝらのことを云ふのだな。さあ〳〵、もつとついでくりやれ。

（おでんやにつがせ、酒をのむ。仲間一、可なり醉が廻りたる容子にて）

仲間一。かう手前達は、何と思ふか知らねえが、かうして見ず知らずのおら達に、この高い酒を腹いつぱいたゞで飮ましてくれるとは、何と勿體ねえ話しぢやあねえか。こんな慈悲深い酒すきな旦那に、おら天下を取らしたい。

忠彌。なに、おれに天下をとらしたい(不快となる)

仲間二。あなたに天下を取らしたら、思ひ切呑まして下さりませう。

仲間三。どうぞ旦那に天下を取らして、思ひ切酒を呑みてえものだ

忠彌。(突然、飲んでゐた盃を仲間達に投げつける)よしやがれ。手前達までが、この俺を馬鹿にしておだてやがるんだな。いくら、友達に馬鹿にされたからと云つて、手前にまで馬鹿にされてたまるか　やいかたつぱしから、ぶつたぎつてやる。それへ直れ。

仲間達。えゝめつさうな……とんでもない……その馬鹿にするなんて……滅相な……

(後じさりして逃げてしまふ。)

忠彌。畜生め、あんな下司下郎まで、この俺を馬鹿にして、おだてゝ酒をのまうとしやがる。――それも道理か、命までも誓つた人々に、心の中ではうとんぜられ、口先ではおだてられた丸橋忠彌だ――(自分で頭をたゝく)手前はよつぽど、お調子ものだぞ……あは……。

おでんや。(やつと近づいて)旦那こまります。旦那が、おどしなさるもんだから、仲間達は手前達ののみくひした分まで、勘定を拂はないでゆきました。

忠彌。いま〱しい野郎どもだ　仕方がない　拙者拂つてつかはす(金を拂ふ。)その代り、こいつは皆呑んでゆくぞ。

(そこに在つた徳利の分、みなついでのむ。)

忠彌。いま〱しい野郎どもだな。到頭、俺に勘定をはらはせやがつた!あゝ酔つた。充分に酩酊した。

(おでん屋の荷をはなれる。下手より犬出て來る)

犬。　わんわん。

忠彌。　何がわんわんだ。時代化なことを云ふ奴だ。わんと啼くのは當り前だ。赤犬は、牛に味が似てゐると云ふから、もうと啼け。

犬。　わん〳〵。

忠彌。　やつぱりわんと啼くか。うぬ、もうと泣かぬと打つた切るぞ（これにて犬逃げては入いる）……と云つて脅したものだ。彼奴、おれが小間物見世の催促に來たらうが、まだ〳〵めつたに見世は出さねえ。

（忠彌上下へよろけながら）

と云ふもの〻した〻か酩酊！（忠彌よろけて堤の櫻の樹にぶつかる。）これは、飛んだそう、とんだ失禮。どなたか存ぜねども、拙者は丸橋……（櫻の樹に、氣がつき）何だ、ぼんやり立つてゐると思つたら、やい！何とか挨拶しねえからいけねえのだ。この唐變木め、あは〻〻唐變木とは、この櫻よりぞ始まりけるか……あ〻ねむくなつた、たまらなくねむい、行きくれてこの下かげを宿とせば……（忠彌の樹の下の青草の堤に倒れる）あ〻い〻布團だ氣持のい〻布團だ………

（おでんや、荷を動す準備をし）

おでんや。　もう人足も絶えたやうだ、家へ歸らうか。

（屋臺に床几もとりつけ一緒にかついで行かんとし、忠彌に氣づき、）

おでんや。　若し、お武家さま、そんな所に横になると、お召物がよごれます。お風を召します。もし〳〵

（忠彌ぐう〳〵いびきをかいてゐる）

あゝよくねておいでになる。人品骨格と云ひ、何一つ不足のないお武家だが、もつた病の酒のために、一生出世が出來ねえと云ふ氣の毒な方らしいな。

（おでんや去る。加藤などの刺客先刻より、隠見してゐる。皆覆面。遠くより互に、さゝやき、忠彌がねてゐる方に近よる。皆刀を拔き、忠彌に、一齊に切りつける。忠彌、身を轉じて刀をさけ、堤下の河の中へ自ら落ちる。皆堤上にかけ上つて下を見る。）

刺客一。見えぬ。

刺客二。逃したか。

刺客一。手答は。

刺客二。ない。

刺客三。取りにがしたか。

刺客四。さすがは、忠彌。あの大醉で、よく身をかはし居つた。

刺客三。まことに、稀代の早業。

刺客四。（頭布を取る加藤である）。それがしが、一刀流の太刀先をよもや、逃れまいと思つたに。

刺客二。かゝる屈强の武士が、大事の前に、變心するとは、われらの運のつきと云ふもの。

刺客四。仕方がない、引き上げよう。

刺客三。この上は、一日も早く駿府へ立ちこえ、最後をいさぎよくするまでだ。

（みんな悄然として去る。時が經つ。忠彌、堤の下から這ひ出して來る。）

忠彌。　げーぶ。あゝひどい目に、會はしやがつた。あの鋭い太刀先は、たしかに加藤だ。あはゝゝゝゝ手前逹に切られる身體があるものか。だが、いかにいさかひすればとて、直ちに刺客を向くるとは、あまりと云へば非道な仕方。人われにつらければ、われまた人につらしとか、覺えてゐろ。………とんだ奴が來て目をさましやがつた。だが、まだねむい。

(忠彌立ち上り、よろ〳〵してゐる。弓師藤四郎向ふから來る。忠彌よろめきながら、行き過ぎようとする。)

藤四郎。　其處へ行かれるのは、丸橋どのではムりませぬか。

(忠彌默つて行きすぎようとする。)

藤四郎。　もし〳〵丸橋忠彌殿ではござりませぬか。

忠彌。　と云ふ貴殿は、

藤四郎。　御醉顔でお見分けがつきませぬか。

(顔を傍へ持つてゆく。)

忠彌。　なるほどよく分り申した、これは弓師藤四郎どの。御きげんよう、しばらく。

藤四郎。　何がしばらくぢや、今朝お宅へ參りました時今夕七つまでに必ず、二百兩お渡し下さると仰せられたに依つて、先刻お宅へまかり出でましたに、思ひの外の御不在。お金を渡されない丈でなく、武士に似合はぬ嘘までおつきなされるのか。

(忠彌。よろ〳〵しながら、きいてゐる。)

藤四郎。　お宅で半刻ばかりお待ちしましても、とんとお歸りがなきゆえ、お出先は榎町の由比さまお邸と承り、老の夜道もいとはず、やつと茲まで來たところぢや。茲で會ふたは、何よりの仕合せ。さあさあ、早う。弓三百挺、矢五千本の代金、拂ふて下されい。

忠彌。　そのやうに云はれては、面目次第もござらぬ。なれど、今宵七つどきまでに、必ず出來ると思つた金策、それが向ふから、はづれたのぢや。

藤四郎。　いゝえそんな云ひ譯はきゝませぬ。品物と引かへに下さる筈の金。三日とのび、五日とのび、今日で幾日になると覺召す。

忠彌。　二月にもなるかな。

藤四郎。　二月どころか、今日でもう三月と十日。もし、何うあつても代金がいたゞけぬなら、これからおやしきへ上つて、品物をいたゞひて歸りませう。

忠彌。　さあ、それは……

藤四郎。　それとも、初から代金をお拂ひにならぬつもりなら、それはかたりと申すもの、あすにも御奉行さまへ。

忠彌。　え、うるさいな。

藤四郎。　何がうるさいのでございます。貴君さまさへ、嘘をつかねば、何もうるさいことはございませぬ。

忠彌。　まて、今しばらく、待つてくれ。來月になれば拙者紀州侯へ……。げーぷつ……。

藤四郎。　もう、貴方の紀州侯はきゝあきました。紀州侯と〳〵さうさうは、借金の云ひわけになりませぬ。

忠彌。　え、うるさい奴。今しばらく待てと申すに。

藤四郎。いゝえ、もう一刻も待てませぬ今日中に、お拂ひ下さらねば、最初からのかたりとして、明朝きつと御奉行さまに、

忠彌。かたり〳〵と無禮であらう。げしぶつ。

藤四郎。いゝえ。かたりぢや。たしかにかたりぢや、たしかに、かたりぢや。金を拂ふアテがなうて、品物を取るのはたしかにかたりぢや。

忠彌。（怒のために、ガタ〳〵顫えて來る）武士に向つて、かたりと云ふのか。よし、その代金拂ふてやる。

藤四郎。えゝ、お拂ひ下さりますか。

忠彌。いや、今のは失言。

藤四郎。何のことでござります。いくら、醉ふて居らるゝとは云ひながら、人を馬鹿にした。……えゝ、この上は少しの猶豫もなりませぬ、直ぐにお上へ……

忠彌。待て、待て、しばらく待て。

藤四郎。えゝ待てませぬ、今宵と云ふ今宵は待てませぬ、歸つて直ぐ五人組と相談し………！

忠彌。えゝうるさい奴、

藤四郎。何を仰しやいますの、御身さまこそ、正銘のかたりのくせ。

忠彌。かたり〳〵と武士に向つて、……（ふと何か氣づきたる如く）えゝ拂ふてやる。近う來い。

藤四郎。えゝ嘘ではござりませぬか。いつお拂ひ下さいますか。

（忠彌藤四郎の耳に口よせ、何かさゝやく。）

藤四郎。（駭いて逃げ出しながら）えゝつ。

忠彌。何と肝がつぶれたか。

藤四郎。えゝそれは、本當でござりまするか。

忠彌。冗談に云へると思ふか。

藤四郎。それで私への借金は何うなります。

忠彌。町奉行なり、老中なり勝手のところへ訴へ出ろ。

藤四郎。えゝつ。

忠彌。天下の謀反の訴人をすれば、恩賞は少くとも五百石。

藤四郎。えゝ。

忠彌。二百兩拂つて釣が出るわ。

藤四郎。えゝつ

（藤四郎、段々後じさりして逸走す。）

忠彌。藤四郎め、をどろいて肝をつぶしやがつた。今に、正雪も櫻井も芝原も加藤も、藤四郎同樣肝つ玉をつぶしやがるだらう。ざまあ、みやがれ……あはゝゝゝ。まだねむい……もう一度ねてやらう。あゝねむい（又堤の芝生の上に倒れ伏す）

……幕……

第三幕

本郷御茶の水丸橋忠彌の家。奥の一室、忠彌亂醉して、寢てゐる。敷蒲團を敷かず、掛蒲團だけを掛けてゐる。忠彌の妻、枕元を少し離れ、針仕事をしてゐる。二十一日の宵。門弟、出て來る。

門弟。奥樣、永山六郎右衛門樣がお見えになりました。

お貞。おゝ永山樣がお見えになつたか、それで何と申し上げた。主人は大醉して寢てゐると申し上げたか。

門弟。申し上げましたが、火急の用事あるによつて、是非お目にかゝりたいとのことでございます。

お貞。それでは、起さずばなるまい。（忠彌の傍へゐざり寄りながら）もし〳〵、忠彌どの、忠彌どの、（揺り動かす）もし、お客樣でございます。

忠彌。うーん、うーん。

（容易に起きやうとしない。）

お貞。もし、御客來でございまするぞ、お目をおさましなさいませ。

（忠彌、容易に起きない。）

お貞。おゝ〳〵、永山樣がお待ち兼であらう。あの、ちよつと行つておことはりしてお呉れ。今朝、夜が明けてから、何方よりか亂醉の態で歸つて參り、そのまゝ前後不覺に寢てゐると、申し上げてお呉れ。

門弟。はあ。（去る）

お貞。もし忠彌どの、ちよつとお起きなさいませ。永山樣がお見えになりましたぞ、永山樣が。

忠彌。（寢返りを打ちながら）後生だ、もつと寢さして呉れ。うーん、うーん。

（門弟出て來る）

門弟。左樣申し上げました處、たつてお目にかゝりたいとのことで、仕儀によつては永山樣自身起してもよいとのことでござります。

お貞。おゝそれでは、永山樣に失禮でも、これへ通つていたゞかう。案內してお呉れ。

（お貞、起すことに絕望してぼんやり夫を見てゐる。永山、門弟に案內され、入つて來る。）

お貞。これはこれは永山樣、ようお出でなさりました。こんな失禮の態をお目にかけ、お羞かしうござります。

永山。いや、何の何の、少しも苦しうはござらぬ。いつもの通りの大醉でござりまするな。（寢てゐる忠彌の方へ近づき、）丸橋氏、起きなされ、起きなされ。火急の大事が出來いたした。

忠彌。うーん、うーん。

（忠彌なか／＼起きない。永山腰のものを引きよせ、つばを高らかに鳴らせる。忠彌ガバと起き、床の上に坐る。）

忠彌。（醉眼もうろうとして）どなたのお出でぢや。

永山。丸橋どの、拙者でござる。

忠彌。これは、永山氏か。何御用ぢや。

永山。一大事が出來いたした。

忠彌。なに、一大事とは。

永山。正雪どの、今日早朝江戸を立たれたのを、貴殿御存じか。
忠彌。いや、知らぬ。
永山。今夜榎町の邸にて、ひそかに別離の宴を催す筈なるに、我々に何の云ひ置きもなく立たれるとは、まさしく逐電。さては一大事發覺と、宙を飛んで貴殿のところへ驅けつけて參つたのだ。
忠彌。それは可笑しい。さては大事發覺いたしたかな。
永山。留守居には、何事も存ぜぬ下人ばかりを留め置いたことと云ひ、大事發覺に相違ござらぬ。
忠彌。さては、何人か訴人いたしたな。
永山。左様、一味徒黨の中に、返忠したものが、あるに相違ない。
忠彌。（昨夜の醉中の出來事を、俄然思ひ出したる如く）あゝつ、しまつた。
永山。貴殿、思ひ當ることがござるかな。
忠彌。（苦悶する。）思ひ當ることはござらぬが、一旦の感情に委せ、訴人なすとは愚な奴。
永山。誰だ、そいつは。
忠彌。誰かは知らぬ、でも憎い奴。
永山。如何にもその返忠の男、誰々と分明せば、肝を喰つても足らぬところだ。
忠彌。あゝ、お貞酒を持つて來い。
お貞。でも、その態でまた御酒とは。
忠彌。酒でものまねば、この、この、思ひ、イヤいや、此の無念が晴れぬわ。

お貞。とは申せ。
永山。いや御内室、萬事休すぢや、生涯の思ひ出に、如何程の大酒を過させるもよからう。
お貞。では御酒の支度を。
忠彌。いや、支度に及ばぬ。冷酒のまゝ持つて參れ。
お貞。でも、それはお客樣に失禮。
永山。いや、拙者はいけぬ口、忠彌どのの存分に。
お貞。では、失禮ながら。
（お貞酒を取りに立つ。）
永山。かうなつてはもはや最後の用意ぢや、身共は急ぎ宿元え立ち歸つて、ともかくもなる身支度をいたす。
忠彌。拙者の覺悟も、御同樣。
（お貞、酒を徳利に入れて持つて來る。）
忠彌。永山氏、失禮。（徳利の口より飲む。）苦い、苦い。こんな苦い酒は、初めてだ。
永山。然しながら丸橋氏、まだ萬一の望みはないでもない。愈々最後と相分るまでは、こなたより騷ぐには及ぶまい、お互に愼重第一。
忠彌。なるほど愼重第一、それが忠彌には、末期の訓言、永山氏、有り難い。
永山。丸橋氏、さらば。御内室にもおさらば。
忠彌。さらば。

お貞。おさらばでございます。

忠彌。そちお送り申せ。

（永山去る、お貞送つて出る。）

忠彌。（苦悶しながら、）先方も先方だ、刺客に跡を追はすなどは、………さりながら、一旦の怒りによつて、多年の同志を裏切りしは、………亂醉に心亂れしとは云へ、………あゝ苦しい。

（お貞歸つて來る。）

お貞。愈々身の上の大事になりましたな。でも、なげいても詮なきこと。

忠彌。うん、許せ。おろか者の忠彌を夫に持つ、そちの不幸をあきらめてくれ。

お貞。何の、その會釋には及ばぬわいな。それよりも何時何時御用の聲を聞くかも知れぬ。家の中を取り片づけませう。

忠彌。うん、よくぞ申した。そちに萬事たのむ。預けた連判帳は燒いて呉れ。

お貞。はい、かしこまりました。

（お貞、甲斐々々しく奥へはいる。入れ違ひに門弟出て來る。）

門弟。先生、只今弓師藤四郎どの、南町奉行與力、菊池源右衞門どの同道にてお見えになり、たつてお目にかゝりたいとのことでございます。

忠彌。（苦悶する。）藤四郎め、さては愈々、ちえつ、何とせう………えゝ、通せ、通せ。

（忠彌、帶をしめ直し、身支度を整へ、帶刀を引寄せて待つ、藤四郎、蒼白な顏をしながら、與力と同道し

お貞。とは申せ。

永山。いや御內室、萬事休すぢや、生涯の思ひ出に、如何程の大酒を過させるもよからう。

お貞。では御酒の支度を。

忠彌。いや、支度に及ばぬ。冷酒のまゝ持つて參れ。

お貞。でも、それはお客樣に失禮。

永山。いや、拙者はいけぬ口、忠彌どのの存分に。

お貞。では、失禮ながら。

(お貞酒を取りに立つ。)

永山。かうなつてはもはや最後の用意ぢや、身共は急ぎ宿元え立ち歸つて、ともかくもなる身支度をいたす。

忠彌。拙者の覺悟も、御同樣。

(お貞、酒を德利に入れて持つて來る。)

忠彌。永山氏、失禮。(德利の口より飲む。)苦い、苦い。こんな苦い酒は、初めてだ。

永山。然しながら丸橋氏、まだ萬一の望みはないでもない。愈々最後と相分るまでは、こなたより騷ぐには及ぶまい、お互に愼重第一。

忠彌。なるほど愼重第一、それが忠彌には、末期の訓言、永山氏、有り難い。

永山。丸橋氏、さらば。御內室にもおさらば。

忠彌。さらば。

お貞。　おさらばでございます。

忠彌。　そちお送り申せ。

（氷山去る、お貞送つて出る。）

忠彌。（苦悶しながら、）先方も先方だ、刺客に跡を追はすなどは、………さりながら、一旦の怒りによつて、多年の同志を裏切りしは、………亂酔に心亂れしとは云へ、………あゝ苦しい。

（お貞歸つて來る。）

お貞。　愈々身の上の大事になりましたな。でも、なげいても詮なきこと。

忠彌。　うん、許せ。おろか者の忠彌を夫に持つ、そちの不幸をあきらめてくれ。

お貞。　何の、その會釋には及ばぬわいな。それよりも何時何時御用の聲を聞くかも知れぬ。家の中を取り片づけませう。

忠彌。　うん、よくぞ申した。そちに萬事たのむ。預けた連判帳は燒いて呉れ。

お貞。　はい、かしこまりました。

（お貞、甲斐々々しく奥へはいる。入れ違ひに門弟出て來る。）

門弟。　先生、只今弓師藤四郎どの、南町奉行與力、菊池源右衛門どの同道にてお見えになり、たつてお目にかゝりたいとのことでございます。

忠彌。（苦悶する。）藤四郎め、さては愈々、ちえつ、何とせう………えゝ、通せ、通せ。

（忠彌、帯をしめ直し、身支度を整へ、帯刀を引寄せて待つ、藤四郎、蒼白な顔をしながら、與力と同道し

てはいつて來る。)

藤四郎。　これは〳〵丸橋樣、とんだお邪魔をいたします。お上のお計ひで、與力菊池源右衛門樣、同道して參りました。

菊池。　拙者、南町奉行與力、菊池源右衛門。

忠彌。　拙者、丸橋忠彌。して御用向は何でござる。

藤四郎。　お身樣のお言葉により由比正雪どの謀反の趣き、訴人いたしました所、その丸橋忠彌とやらも、間接ながら返忠の功によつて、此の上一味徒黨の仔細申し上ぐるによつては、

忠彌。　な、な、何を申す。此の忠彌が訴人などとは、夢にも覺へぬ。さてはその方、正雪どの思ひ立ちを、それと悟つて訴人いたしたな。ひ、非道な奴め、

藤四郎。　そ、そ、それは忠彌どの、話が違ふ。

忠彌。　いや、違はぬ。

藤四郎。　いや、昨夜江戸川大曲の附近にて、現在貴君さまおの口から。

忠彌。　何を申す、その樣な覺へはない。

藤四郎。　これはしたり、たしかに仰せられたものを。

忠彌。　えゝ、くどい。かれこれ申すと手は見せぬぞ。

藤四郎。　え——つ。

(藤四郎逃げんとす。)

菊池。　たとひ御邊が訴人せずとも、今は大事の嫌疑人、召捕つて連れて行くが、承知か。

忠彌。　承知だとも。

(藤四郎、駈け去る、菊池つゞいて去る。間もなく邸外に喚聲起る。お貞駈けだして來る。)

お貞。　さては愈々。

忠彌。　連判は燒いたか。
お貞。　はい、とつくに。
忠彌。　そちと言葉を交すのも、これが最後だ今生の思ひ出に、戰ふだけは戰ふて見る。そちは靜かに生害いたせ。
お貞。　はい。(泣く。)
(邸外の人聲更に起る。太皷とどろく。忠彌たすきをかけ、長押より十文字の槍を取り下ろし、庭に降りてりう／＼としごく捕手數人侵入して來る。忠彌の勢ひに怖れて、敢てかゝらず。)

第二場

情景。忠彌の家の裏手、お茶の水の涯に面せる庭上、最初捕手頭配下の與力多數驅け違ひたる後、忠彌捕手に圍まれながら出て來る。亂闘四半時。(亂闘の形式その他は、新國劇に一任す。)忠彌、力盡きて捕はる。

捕手多數。　捕つた、捕つた。わアーーッ。
(與力菊池源右衛門、忠彌に近づく。)
菊池。　どうだ、お上に手數をかけ、あまたの怪我人を出し、其の方自身、今の思ひは何うだ。口惜しいか、何うだ
忠彌。　あはゝゝゝ、何か口惜しいものか。生涯の思ひ出に、思ふ存分働いた。これで胸の苦しみが、幾らか取れた。もう横腹へ槍が通るまでは、暫しの辛抱だ。あはゝゝゝ。
菊池。　何うだ、立てるか。
忠彌。　何を申す。これ、この通りぢや、あはゝゝゝ。(忠彌疲勞を見せながらも、しつかりと立つ。)

――幕――

(本稿は、澤田正二郎一座上演用として、執筆せしものにして、紙上にて發表の意志なかりしが改造社の懇請もだしがたく掲載を承諾せり。作者)

編輯を了へて

□本稿締切までには未だ清浦內閣は瓦解しなかつたが、何れ六月初旬前後は總崩れ請合だ。眞に槿花一朝の夢であつたが、しかしそれは當然過ぎる程當然のことだ。

□今回の選擧戰には精製品拂底とあつて何處を見ても一山幾文の代物だ。これでは護憲といふ大棟を支持して行ける柱にはなりかねる。精々、バラックの障子の骨位の所カナ。

□次の內閣は當然護憲三派に來べきものだ。しかし我國ではこの當然といふことが一向當てにならぬ國だから元老や政黨や、研究會あたりで又如何なる反間苦肉の策を廻らそうとも限らぬ。加藤君や、若槻君や、安達君、それに橫田君なぞは折角のお骨折だつたのだから取つた實を逃さないやうに隙間に元老を[illegible]ることが必要であらう。唯だお氣の毒さまといいたいのは政友會本黨の御連中だ。

□孫文危篤。革命に志して數十年、恬淡にして物慾なく、常に一貫したる行路「革命への道」を堂々と步いた彼は支那には珍しい人豪であつた。實際的手腕に於て、段に劣つたが、しかし理想を把持して一步も讓らなかつた所に彼の偉人が躍如たらしめる。彼の死によりて支那は一つの淋しさを增した。

「曾つて出獄せんとする大杉を描いて物議を招いた在巴里の畫家林倭衞君から佛國監獄に於ける大杉榮觀を送つて來た。蓋し本月號の特彩ある讀みものだ。そして山本有三氏の創作「熊谷蓮生坊」は氏が半歲苦心の結晶だ。其、菊池、津田、正宗、中條の四氏が長篇をもつて六月號[illegible]に百花繚亂の觀がある。

論文欄のロスタ通信員スリパック氏、レーデラー兩氏の對歐觀、對日米觀は我國人が他山の石として必讀の文字だ。

□「アインスタイン全集」は完結して二ケ月前に悉皆配本濟みになりました。大震災で行衞不明の方がある樣ですから若し未だ配本を受けない方は至急本社まで申出でて下さい

□本社發行の「大正大震火災誌」は、博文館印刷所爭議のため少々遲延しますが、本月末までには出來することになりました。私共は後世に稗補する價値の堂々たる本書の出來ることが喜びにたえませぬ。

本誌の姉妹誌『女性改造』は七月號から、思ひ切つて編輯方針を更改する。今までよりモット積極的に、藝術的に、そして創作欄の應募欄は島崎藤村氏が選を擔任して下さることになつた。そしてその選評まで一切に指示して戴くつもりだ。その詳細は七月號の本誌及「女性改造」で發表する筈です。そして每月三枚以內の短篇小說を募集するのですが、その應募者は[illegible]女性に限るそう[illegible]

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	六冊共 郵稅不用
壹ケ年	拾壹圓廿錢	十二冊共 郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切れの時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾參年五月廿日　印刷納本
大正拾參年六月壹日　發行
（定價九十錢）
東京市芝區愛宕下町一ノ一　編輯兼發行印刷人　平田貫一郎
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一　印刷所　秀英舍
發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三


香のなつかしい
味のすずやかな
ライオン煉齒磨
チューブ入！
御婦人方にも、
男子方にも、
お子様方にも、
歡ばれるものは
この煉齒磨ばか
りで御座います。
ライオン煉齒磨

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO

勝部謙造著

ディルタイの哲學

定價壹圓八拾錢
送料十七錢

最新刊

彼は極めて平凡なる日常茶飯事を通じて、極めて深遠なる哲學を解き、趣味ある文辭にて精神科學、自然主義的世界觀、自由觀念論的世界觀、客觀觀念論的世界觀を明にした。此點に於て他の追隨の出來ぬ世界の一大天才だ。彼は哲學的思索の形骸を捨てて所謂概念の核心を捉へ得た哲人だ。本書の第五篇藝術論に於て美學、詩學、創作の心理を說いた所など現代人の琴線に强く麗しく響く。世界に特立したる此人の哲理を說くに、我哲學界の少壯勝部氏は第一の適任者である。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二